

ノ短期タルト長期タルトヲ問ハス総テ競争入札ノ方法ニ依リ日本国臣民ト露西亜国臣民トノ間ニ何等ノ區別ヲ設クルコトナカルヘシ前記入札ノ時日及場所貸下ニ關スル必要事項並公売ニ付スル各種漁区ハ入札施行ヨリ少クトモ二箇月前ニ浦潮港駐在日本国領事ヘ公然通牒セラルヘシ

第三條

前條ノ規定ニ依リ漁区ノ貸下ヲ受ケタル日本国臣民ハ其ノ漁業ト關聯スル總テノ目的ヲ以テ附帯岸地ヲ自由ニ使用スルノ權利ヲ有スヘシ前記日本国臣民ハ該岸地ニ於テ漁船及漁網ニ必要ナル修繕ヲ加ヘ漁網ヲ曳キ魚類及水産物ヲ揚陸シ並捕獲物及採取物ヲ塩漬シ乾燥シ製造シ若ハ貯蔵スルコトヲ得且此等ノ目的ヲ以テ建物倉庫小屋及乾燥場ヲ自由ニ築造シ若ハ移転スルコトヲ得ヘシ又本協約第一條ニ記載シタル各方面ニシテ貸下ヲ了セサル總テノ部分ニ於テ日本国臣民ハ自由ニ且露西亜国臣民ト同一ノ條件ヲ以テ一切ノ魚類及水産物ヲ捕獲及採取スルノ權利ヲ有シ且個人ノ財産權ニ妨ナキ限り借区ノ附帯岸地ヲ使用スルト同一ノ方法及範圍内ニ於テ漁業ト關聯スル總テノ目的ヲ以テ前記貸下ヲ了セサル部分ノ附帯岸地ヲ使用スルコトヲ得ヘシ

第九條

前記船舶ハ一ノ漁場ヨリ他ノ漁場ヘ漁業上必要ナル人員物件並漁獲物及採取物ヲ運搬スルコトヲ得ヘシ

本協約第一條ニ記載シタル各方面ニ於ケル漁類ノ養殖保護漁業取締其他漁業ニ關スル現行若ハ將來ノ法令ハ日露兩國臣民ニ對シ均一ニ適用セラルヘシ

露西亜国政府ニ於テ新ニ前項ノ法令ヲ設クルトキハ之ヲ施行ヨリ少クトモ六ヶ月前ニ之ヲ日本国政府ニ通牒スヘシ

第十條

本協約ニ於テ「魚類及水産物」ト称スルハ一切ノ魚類及水産動物ヲ謂フ

第十一條

本協約第一條ニ記載シタル各方面ニ於ケル漁業ニ關シ特ニ本協約ニ掲ケサル事項ニ就テハ日本国臣民ト露西亜国臣民ト均一ノ待遇ヲ享クヘシ

第十二條

本協約ハ兩締約国相互ノ合意ニ依リ十五箇年毎ニ之ヲ更新スヘキモノトス

第十三條

本協約ハ批准セラルヘシ該批准ハ成ルヘク速ニ且如何ナル

第四條

本協約第一條ニ記載シタル各方面ニ於ケル漁業權並漁業及之ニ使用スル財産ニ對シ現ニ賦課シ又ハ將來賦課スルコトアルヘキ一切ノ税金若ハ取立金ニ關シテハ日本国臣民及露西亜国臣民ハ均等ノ取扱ヲ享クヘシ

第五條

本協約第一條ニ記載シタル露西亜国領水ニ於テ捕獲若ハ採取シタル魚類及水産物ニシテ日本国ニ輸出セラル、トキハ其製造セラレタルト否トヲ問ハス露西亜国政府ハ之ニ對シ何等ノ税ヲ課スルコトナカルヘシ

第六條

日本国臣民カ漁業若ハ魚類及水産物ノ製造ノタメ使用スル人員ノ国籍ニ關シテハ何等ノ制限ヲ設クルコトナカルヘシ

第七條

日本国臣民ハ魚類及水産物ノ製造方法ニ關シ何等ノ制限ヲ受クルコトナカルヘシ

第八條

漁業權ヲ取得シタル日本国臣民ハ建康證書ヲ有スル船舶ヲ以テ日本国ト漁場トノ間ニ直接往復スルコトヲ得ヘシ

場合ニ於テモ調印後四ヶ月以内ニ東京ニ於テ交換セラルヘシ

右證據トシテ兩國全權委員ハ本協約ニ記名調印スルモノナリ

明治 年 月 日即千九百 年 月 日 (月 日)

ニ於テ之ヲ作ル

附 録

(左記ノ條項ハ第一條ノ土民留保以外總ノ部分云々不成立ノ場合ニ於テ第八條トシテ挿入スヘキモノトス)

第八條

日本国臣民ハ露西亜国臣民ト同一ノ條件ヲ以テ借区以外ノ地ニ於テ魚類及水産物ノ製造ニ従事スルコトヲ得ベシ

(右決裁)

「請議之通 五月十七日」

(附 記)

日露漁業協約案說明書

日本国皇帝陛下及全露西亜国皇帝陛下ハ明治三十八年九月五日即千九百五年八月二十三日(九月五日)締結講和條約第十一條ニ依リ漁業協約ヲ締結セムカ為日本国皇帝陛下ハ……………ヲ全露西亜国皇帝陛下ハ……………ヲ各

其ノ全權委員ニ任命セリ因テ兩國全權委員ハ五ニ其ノ委任状ヲ示シ其ノ良好妥当ナルヲ認メ右ノ諸條ヲ協議決定セリ

△¹ (説明) 「ポーツマス」講和條約第十一條ニ於テ露國政府ハ日本海、「オコーツク」海及「ベーリング」海ニ瀕スル露國領地ノ沿岸ニ於ケル漁業權ヲ日本臣民ニ許セムカ為日本國ト協定ヲナスヘキコトヲ約シタルハ從來日露兩國間ニ久シク解決ヲ得サリシ亜細亞露領沿岸漁業問題ニ對シ一進歩ヲ見タルモノニシテ帝國政府ハ此ノ機ヲ逸セス露國政府ヲシテ誠意ヲ以テ前記協定ヲ為スコトヲ承諾セシメ以テ我利權ヲ確保スルニ足ルヘキ漁業協約ヲ訂結セサルヘカラス本協約案ニ列記セル各條ハ即前記ノ趣意ニ依リ起案シタルモノニシテ皆片務の規定ヨリ成ルモノナリ

第一條

露西亜帝國政府ハ本協約ノ規定ニ依リ日本海、「オコーツク」海及「ベーリング」海ニ屬スル露西亜國領水ニシテ土民ノ為留保シアル河川及入江ヲ除クノ外總テ露西亜國臣民ニ漁業ヲ営ムコトヲ許ス場所ニ於テ一切ノ魚類及水産物ヲ捕獲及採取スルノ權利ヲ日本國臣民ニ許ス

(説明) 講和條約第十一條ニ於テ露國政府ハ露國領土

本條ノ成否ハ我漁業者ノ利害ニ関スルトコロ頗ル大ナルカ故ニ是非其ノ成立ヲ期セサルヘカラス但沿海洲沿岸ニ棲息スル土民ハ多クハ魚類ヲ以テ重ナル食物トナシ之レナレバ棲息シ能ハサルカ故ニ此等土民ニ對シテハ露國政府ニ於テモ特別ノ保護ヲ与ヘ河川内ト雖トモ單純ナル漁具ヲ以テ漁撈スルヲ許可セルカ故ニ是等ノ河川ニ對シテハ本邦人ノ漁業權ヲ擴張スルヲ欲セス之ヲ排除クコトトナセリ

第二條

本協約第一條ニ記載シタル各方面ニ於ケル漁区ノ貸下ハ其ノ短期タルト長期タルトヲ間ハス總テ競争入札ノ方法ニ依リ日本國臣民ト露西亜國臣民トノ間ニ何等ノ區別ヲ設ケルコトナカルヘシ前記入札ノ時日及場所貸下ニ関スル必要事項並公売ニ付スル各種漁区ハ入札施行前ヨリ少クトモ二箇月前ニ浦潮港駐在日本國領事ヘ公然通牒セラルヘシ

(説明) 漁業ヲ営ムニ當リ長期借区ノ有利ナルハ論ヲ俟タサルモ露國沿海洲漁業ノ現状ニ照ラシ又從來露國政府カ採リ来リシ漁政ノ方針ニ鑑ミ長期ヲ以テ總テノ漁区ヲ貸与セムコトヲ要求スルハ到底彼ノ背セサル所ナルヘキヲ處リ本條ニ於テハ長期短期ノ別ナク總テ漁区ハ競争ノ

ル日本海、「オコーツク」海及「ベーリング」海ノ沿岸ニ於テ漁業權ヲ日本臣民ニ許セムカ為日本國ト協定ヲナスヘキコトヲ約シタルカ故ニ本條ハ露國政府ヲシテ該讓与ヲ確認セシムルモノナリ

然レトモ講和條約第十一條ニ掲レハ前項日本臣民ニ對スル漁業上ノ讓与ハ前記三海ノ沿岸ニ限りテ河川及入江ニ及ハス若河川及入江ハ全然之ヲ排除クトセハ沿海州ニ於テ我國人カ獲得スヘキ漁業上ノ利權ハ比較的少シ露國ハ從來沿海州河川ニ於テ漁業ヲ許可セス(參考書第一号千九百一十一年十一月發布漁業仮規則第二十四條參照) 其ノ意蓋シ魚族ノ滅絶ヲ虞リ之カ繁殖保護ヲ謀ルニ在リ故ニ黒龍江ノ如キ大河ニシテ魚類繁殖上障害ナシト認ムルトキハ之ヲ許与セリ(參考書第一号業仮規則第一條參照) 露國講和全權委員カ我全權委員ノ提案中「沿岸、灣、港、入江及河川」ノ文字ヲ修正シテ単ニ「沿岸」ト改メタルハ全ク前項ノ如ク魚族繁殖上妨害アルヲ認メタルニ因ルナルヘシト然トモ從來露國政府カ魚族ノ繁殖上障碍ナシト認メ既ニ自國人ニ漁業ヲ許可セル河川ニ於テハ之ヲ本邦人ニ許可スルモ條約ノ精神ニ違背スル所ナカルヘシ

方法ニ依リ帝國臣民ト露國臣民ト均等ニ之ヲ貸下クヘキヲ約シ而シテ借区年限ハ一ニ露國法規ノ定ムル所ニ任セ本協約ニ於テ規定セス蓋シ從來露國地方庁ノ方針ヲ觀ルニ露國人ニハ長期ヲ以テ借区セシメ外國人ニハ會テ之ヲ許与シタルコトナク又千九百一十一年發布ノ規則ニ掲レハ沿海洲沿岸ノ漁業ハ總テ外國人ニ許可セサルヲ主議トシ(參考書第一号千九百一十一年發布漁業仮規則第四項參照) 独リ南部樺太ニ於テハ一年毎ノ期限ヲ以テ本邦漁業者ニ許可シタル除外例アルノミ本條ニ於テハ年來露國官憲カ採用シタル競争ノ方法ニ依リ帝國臣民ト露國臣民トノ間ニ何等ノ區別ヲナスコトナクシテ漁業ヲ許可スヘキコトヲ定メ從來露國政府カ漁業政策ノ主眼タリシ排外的傾向ヲ一掃シタルモノナリ本條ノ約定ニ因リ本邦漁業者カ獲得スヘキ利益ハ尠少ナラス

又入札ノ時日及場所、公売ニ付スヘキ漁区及貸下ニ関スル必要事項等ハ當業者ニ於テ成ルヘク速ニ知悉セサレハ遠隔ノ地特ニ「ニコラエフスク」、「ペトロパウロフスク」ノ如キ交通不便ノ地ニ於テ入札ヲ施行スル場合アリトセハ本邦漁業者ハ入札ニ加ハルヲ得サルカ如キ虞アルカ故ニ入札公布二ヶ月前ニハ是非浦潮港帝國代表者ヘ通

牒ヲ要スルコトトセリ是従来ノ事実ニ鑑ミ特ニ必要ヲ感スル所ナリ

第三條

前條ノ規定ニ依リ漁区ノ貸下ヲ受ケタル日本国臣民ハ其ノ漁業ト関連スル総テノ目的ヲ以テ附帯岸地ヲ自由ニ使用スルノ權利ヲ有スヘシ前記日本国臣民ハ該岸地ニ於テ漁船及漁網ニ必要ナル修繕ヲ加ヘ漁網ヲ曳キ魚類及水産物ヲ陸揚シ並捕獲物及採取物ヲ塩漬シ乾燥シ製造シ若ハ貯蔵スルコトヲ得且此等ノ目的ヲ以テ建物倉庫小屋及乾燥場ヲ自由ニ築造シ若ハ移転スルコトヲ得ヘシ又本協約第一條ニ記載シタル各方面ニシテ貸下ヲ了セサル總テノ部分ニ於テ日本国臣民ハ自由ニ且露西亜国臣民ト同一ノ條件ヲ以テ一切ノ魚類及水産物ヲ捕獲及採取スルノ權利ヲ有シ且個人ノ財産權ニ妨ナキ限り借区ノ附帯岸地ヲ使用スルト同一ノ方法及範圍内ニ於テ漁業ト関連スル總テノ目的ヲ以テ前記貸下ヲ了セサル部分ノ附帯岸地ヲ使用スルコトヲ得ヘシ

(説明) 海上ニ於テ漁業ヲ許可スルモ若附帯海岸ノ地域ヲ使用スヘキ權利ナキトキハ漁業ヲ営ム能ハス且該岸地ニ於テ漁船漁網ノ修理、捕獲物ノ製造、漁舎、倉庫、乾燥場ノ建築等漁業上必要ナル事項ハ必ス許可セラレザル

異ニシ (参考書第一号千八百九十九年發) 三十四年ニ至リ初メテ内外人ニ對シ均一ノ税金ヲ納ムルコトニ改メタリシカ是レ恐ク三十三年中本件ニ関シ帝國政府カ露国政府ニ向テ抗議シタル結果ニ出テタルモノナラン漁業ヲ許可スルモ若内外人ニ對シ納税額ニ差別ヲ設クル時ハ漁權ハ有名無実ニ歸シ了ラムトス故ニ特ニ本條ヲ設ケテ兩國臣民ニ對シ漁業ニ関スル納税上必ス均等ノ取扱ヲ為スヘキヲ約セシムルコトヲ要ス

第五條

本協約第一條ニ記載シタル露西亜国領水ニ於テ捕獲若ハ採取シタル魚類及水産物ニシテ日本国ニ輸出セララルトキハ其ノ製造セラレタルト否トヲ問ハス露西亜国政府ハ之ニ對シ何等ノ税ヲ課スルコトナカルヘシ

(説明) 露国政府ハ從來輸出スヘキ魚類等「ブード」ニ付税金五哥^{カペリダ}ヲ課シ後チ之ヲ輸出税ト称セス国库ノ歳入タルヘキ一種ノ税金ト改メタリシカ三十四年改正漁業規則ニハ漁区ハ総テ競争入札若ハ口頭競争ヲ以テ貸与スルコトトナン前記税金ハ全廢セリ然トモ將來露国政府ニ於テ再ヒ談税若ハ類似ノ税ヲ賦課シ以テ我カ漁業者ノ不利ヲ

ヘカラス是従来露国政府カ沿海洲ニ於テ漁業者ニ許可シタル條件ナルモ本條ニ於テ更ニ明記シテ此ノ權利ヲ確定シ置クヲ要ス又漁区ヲ定ムルハ露国政府ノ權能ニ屬スルカ故ニ本協約第一條ニ記載シタル各方面ニ於テ漁区トシテ貸下ケサル水域ヲ存スルコト多キトキハ日本漁業者カ出漁スヘキ範圍ヲ縮少シ其ノ利害ノ係ル所頗ル大ナルカ故ニ漁区外ノ水面ニ於テモ日本国臣民ハ漁業ノ權利ヲ留保シ而シテ個人ノ財産權ヲ侵害セサル限り此等漁区外ニ於ケル漁業者ハ借区シタルモノト同一ノ方法範圍ニ於テ漁業上必要ナル附帯岸地ヲ使用スヘキ權利ヲ獲得シ以テ製造、建物ノ築造等ノ便宜ヲ得サルヘカラス

第四條

本協約第一條ニ記載シタル各方面ニ於ケル漁業權並漁業及之ニ使用スル財産ニ對シ現ニ賦課シ又ハ將來賦課スルコトアルヘキ一切ノ税金若ハ取立金ニ関シテハ日本国臣民及露西亜国臣民ハ均等ノ取扱ヲ享クヘシ

(説明) 露国政府ハ明治十八年同二十七年同三十二年發布ノ漁業規則ニ於テ漁業ヲ許可スルニ當リ内外人ノ區別ニ因リ其捕獲物ニ對シ国库收入トシテ徴收スヘキ税額ヲ

釐スヘキ處ナキニアラス故ニ特ニ本條ヲ設クルノ必要アリ

第六條

日本国臣民カ漁業若ハ魚類及水産物ノ製造ノタメ使用スル人員ノ国籍ニ関シテハ何等ノ制限ヲ設クルコトナカルヘシ

(説明) 露国政府ハ千九百一年發布黑龍江沿道總督府管内漁業規則ニ於テ原則トシテ一切外國漁夫ノ使用ヲ禁止シ唯々樺太南部鯨漁場ニ於テノミ之カ使用ヲ許シ又千九百

年發布ノ黑龍江下流漁業仮規則ニ於テ均シク外國漁夫ノ使用ヲ禁シ單ニ製魚ノ為メ外國人夫ノ使用ヲ許セルノ

ミ (参考書第一号千九百一年發布黑龍江沿道總督府管内漁業規則第四條及第五條、千九百一年發布黑龍江下流

漁業規則第一條) 是レ日露漁業者ノ為絶対的漁業ヲ禁止スルニ均シ蓋シ前記兩規則實施前沿海洲及樺太沿岸ニ於ケル

漁業者ハ漁夫トシテ一ニ本邦人ヲ使用シ其數、萬ヲ以テ算スヘク若黑龍江下流ノ漁場及樺太西海岸昆布採取場ニ

於ケル少數ノ露人及清韓國人ヲ除ケハ亞細亞露領沿海漁場ノ労働者ハ尺ク本邦人ナラサルハナカリシ沿海洲沿海

到ル処住民稀薄ニシテ且漁業ニ習熟シタルモノナク現下

ノ実況ヲ以テセハ將來十數年間若ハ數十年間ハ該地方ニ

於テ恐ク漁業上適當ナル労働者ヲ得ルコト難カラン露国政府ニ於テ虚心坦懐其ノ利害ヲ講究シ苟モ漁業ヲ許サムトセハ之ニ使用スヘキ労働者ハ露国人タルト日本人タルト又其ノ他ノ外国人タルトヲ問ハス均シク之レカ使用ヲ許可シ漁業者ノ利便ヲ図ラサルヘカラス本條ハ其ノ實質ニ於テ本協約中最モ重要ナル條項ノ一ナリトス
本年(千九百六年)三月發布ノ沿海洲漁区々域表附則第三條第五項但書ヲ以テ特別ノ場合ニハ捕魚及製魚ノ為メ各特殊ノ場合及客年ニ於テ定メラレタル人数ヲ限り外国労働者ノ使用ヲ許スコトアルヘシト定メタルカ是レ明ニ露国地方当局者カ外国漁夫使用ノ必要ヲ認メタルニ原由セシモノナラン故ニ更ニ此主義ヲ擴張シ本條ノ如ク定ムルハ恐ク露国政府ニ於テ異議ナカルヘシ

第七條

日本国臣民ハ魚類及水産物ノ製造方法ニ関シ何等ノ制限ヲ受クルコトナカルヘシ

(説明) 露国政府ハ從來漁獲物製造ニ関シ制限ヲ定メタルカ(参考書第一号千九百一年漁業仮規則第二十五條参照)是レ当業者ニ取り不便且不利ナル一事項ニシテ同政府ニ於テ一旦捕魚及製造ヲ許可シタル以上ハ之ヲ塩魚トナシ乾魚トナシ若ハメ鮨

区ニ進航セサルヘカラス之レカタメ漁業者カ失フヘキ時間ト實用ハ頗ル大ナリ故ニ本條ニ於テ漁業者ハ直接其ノ漁区ヘ往復スヘキ権利ヲ留保シ而シテ其ノ船舶ニハ必ス健康證書ヲ携帯スヘキ義務ヲ負ハンメ以テ露国ヘ渡航ノ上露国官庁ノ檢疫ヲ受クヘキ煩勞ヲ避ケシメタリ
從來沿海州沿岸ニ於ケル漁業者カ漁業上必要ナル人員、食料、漁具及漁獲物等ヲ漁場間ニ運搬スヘキ場合ニ當リ或ハ沿岸貿易ヲ營ミ又ハ地方土人ニ対シ禁制品ヲ密売スヘシトノ嫌疑ヲ蒙ルコト少カラス特ニ本條第一項ニ於テ漁業者カ本邦漁場間交通ノ自由ヲ得タル場合ニ於テ最モ然リトス故ニ本條第二項ニ於テ本邦漁業者カ漁場間ニ自由ニ漁業上必要ナル人員、物件及漁獲物等ヲ運搬スルノ権利ヲ留保シ置クヘ必要トス

△2

(注意) 漁業用船舶ヲ漁区ニ直航セシムルハ從來露国

政府カ許可セサル所ニシテ明治三十五年薩哈哩島沿岸漁区ヘ本邦漁業者ノ船舶ヲ直航セシムルコトニ付哥爾薩駐在本邦領事ノ露国黒龍沿道總督ヘ交渉ノ後日本漁業者ニ於テ露国医師ヲ雇聘スルニ於テハ漁船ヲ漁区ヘ直航セシムヘシトノ承諾ヲ得タルコトアリタルカ本邦漁業者カ露国医師ヲ雇聘スルハ費用ト言語トノ二点ニ於テ不利不便

トナス等ハ全ク当業者ノ自由ニ任スルコトトスルノ要アリ況ンヤ有価ノ魚類ヲ以テメ鮨ヲ製造スルハ漁業者自身ノ損失ニ帰スルカ故ニ將來漁獲物製造ノ設備整頓シタル時ハ從來露国当局者カ憂慮セルカ如ク練以外ノ魚類ヲ以テメ鮨ヲ製造スルコトナキニ至ラン

千九百六年三月發布ノ「ニコラエフスク」区漁区々域表附則第四條ヲ以テ現行黒龍江下流漁業規則第三十一條ヲ改正シ魚類製造ニ関シ従前ニ比スレハ其制限ヲ寛ニセリ故ニ本條約前條ニ均シク露国政府ノ同意ヲ得ルコト困難ナラサルヘシ

第八條

漁業權ヲ取得シタル日本国臣民ハ健康證書ヲ有スル船舶ヲ以テ日本国ト漁場トノ間ニ直接往復スルコトヲ得ヘシ

前記船舶ハ一ノ漁場ヨリ他ノ漁場ヘ漁業上必要ナル人員物件並漁獲物及採取物ヲ運搬スルコトヲ得ヘシ

(説明) 露国沿海州沿岸ハ延長数千里ニ亘リ其ノ間地方庁ノ設置セル地ハ稀ニシテ從來漁業ノ為本邦ヨリ渡航スル船舶ハ南ハ浦潮港北ハ「ニコラエフスク」又ハ「ベトロパウロフスク」ノ内一港ヘ必ス寄港シテ檢疫ヲ受ケ且漁業ニ関スル諸般ノ手續ヲ履行シアリタル後其ノ指定漁

少カラサルカ故ニ何人モ此ノ権利ヲ利用シタルコトナシ(参考書第二号)故ニ本條第一項漁区ヘ直航ノ件ニ関シ檢疫上又ハ衛生上ノ理由ニ基キ露国政府ニ於テ承認ヲ与ヘサルトキハ漁業者カ其ノ船舶若ハ漁区ニ本邦開業医ヲ雇聘シ置クヘキ條件ヲ承諾スルモ漁区直航ノ権利ヲ得ルハ当業者ノ利便尙ホ大ナルヘシ

第九條

本協約第一條ニ記載シタル各方面ニ於ケル魚類ノ養殖、保護、漁業取締其ノ他漁業ニ関スル現行若ハ將來ノ法令ハ日露両国臣民ニ対シ均一ニ適用セラルヘシ

露西亜国政府ニ於テ新ニ前項ノ法令ヲ設クルトキハ之カ施行ヨリ少クトモ六ヶ月前ニ之ヲ日本国政府ニ通牒スヘシ

(説明) 魚類ノ養殖、保護及漁業取締ニ関シ法令ヲ發布スルニ當リ内外人タルニ因リ其ノ規定ヲ異ニスルトキハ我漁業者ニ対シ重大ナル不利不便ヲ蒙ラシムヘキ場合ナキニアラス故ニ本條第一項ヲ設ク

又露国政府ニ於テ新ニ法令ヲ發布シ又ハ之ヲ改正シテ直ニ施行スル時ハ当業者ノ不便少シトセス故ニ本條第二項ニ於テ斯ノ如キ場合ニハ少クトモ六ヶ月前ニ日本政府ニ之ヲ通牒スヘキコトト定ム

(朱書) 本條ハ昨年七月英仏間協定中ニユーファンランドニ關スル一節ヲ探レルナリ (參考書第二号)

第十條

本協約ニ於テ「魚類及水産物」ト称スルハ一切ノ魚類及水産動物ヲ謂フ

(説明) 千八百九十九年發布ノ露国海産業規則ハ第一漁業第二鯨獵其他海中哺乳動物獵第三昆布、海參、蟹、蝦其ノ他無脊椎動物捕獲業ノ三章ニ別チ而シテ臘虎及臘肭獸獵ハ第二章ニ包含セス又千九百一年發布ノ規則ハ漁業規則ト改メ海獸獵及昆布、海參、蟹、蝦等ニ関シテハ規定スル所ナル千九百二年發布ノ漁業区域表附則第十三項ヲ以テ鯨其ノ他哺乳海獸獵並昆布、海參、蟹、蝦其ノ他無脊椎動物捕獲業ハ千八百九十九年ノ海産業規則ニ抛ルヘント定メ漁業規則中ニ包含セサルコトトナセリ故ニ本條ニ於テ特ニ漁業ノ範圍ヲ定メ海獸獵ヲモ包含シ以テ各種ノ獵業權ヲ獲得スヘキコトトナセリ (參考書第一号千九百一年漁業規則及千九百)

第十一條

本協約第一條ニ記載シタル各方面ニ於ケル漁業ニ関シ特ニ場合ニ於テモ調印後四箇月以内ニ東京ニ於テ交換セララルルシ 右證據トシテ両国全權委員ハ本協約ニ記名調印スルモノナリ

明治 年 月 日即チ千九百 年 月 日(月日)ニ於テ之ヲ作ル

附 録

左記ノ條項ハ第一條ノ土民留保以外總テノ部分云々不成立ノ場合ニ於テ第八條トシテ挿入スヘキモノトス

第八條

日本国臣民ハ露西亜国臣民ト同一ノ條件ヲ以テ借区以外ノ地ニ於テ魚類及水産物ノ製造ニ従事スルコトヲ得ヘシ

(説明) 従来露国ニ於テハ漁業ヲ許ササル沿海若ハ河岸ニ於テ単ニ製魚ノミヲ許スコトアリテ本那人ニシテ其ノ許可ヲ得タルモノ少カラス本邦人ニ対シ漁業ヲ許可セラレサル場合ニ於テモ若製魚ト之ニ要スヘキ地区ノ貸付トヲ許可セララルトキハ近隣漁場ヨリ魚類ヲ買収シ製造シテ輸出スルノ利益ヲ得ヘシ而シテ是レ露国政府力従来漁業ヲ許可セサル場合ニ於テ外國人ニ与ヘタル權利ナレハ露国政府ニ於テ之ヲ本協約ニ明記シ置クコトニ異議ナカ

本協約ニ掲ケサル事項ニ就テハ日本国臣民ト露西亜国臣民ト均一ノ待遇ヲ享クヘシ

(説明) 本那人カ露国沿海州沿岸ニ於テ漁業ヲ営ムニ付必要ナル條件ハ前掲各條ニ於テ幾ント網羅シタルモ尙ホ本條ニ於テハ本條約ニ掲ケサル事項ニ就テモ日本国臣民ハ露西亜国臣民ト均一ノ待遇ヲ享クヘキヲ規定シ以テ本邦漁業者ノ利益ヲ確保セリ

第十二條

本協約ハ兩締約国相互ノ合意ニ依リ十五箇年毎ニ之ヲ更新スヘキモノトス

(説明) 本協約ハ大体本邦漁業者ニ取り有利ナルモノニシテ其ノ所ルヘク長ク有効ナラムコトヲ欲スルノミナラス露国政府カ日本臣民ニ漁業權ヲ許与スルノ義務ハ永久ノ性質ノモノナリ但世態ノ進転ト共ニ條件ニ多少ノ変更ヲ要スヘキカ故ニ本條ノ如ク十五年毎ニ本協約ヲ更新スヘキ權利ヲ留保シ將來長ク沿海州沿岸ニ於ケル我國ノ漁業權ヲ確保シ且以テ日露兩國間ニ於ケル漁業上ノ紛擾ヲ根本的ニ防止セムト欲ス

第十三條

本協約ハ批准セララルヘシ該批准ハ成ルヘク速ニ且如何ナルルヘシ (參考書第一号黑龍江下流漁業(飯規則第二條第二項及第三條參照))

△1 (欄外附記一) 此說明刪除
△2 (欄外附記二) 刪除

七四 明治三十九年八月廿日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)

漁業協約ニ關スル第一回会见報告ノ件
八月十四日 後六、三五 露都發
八月十五日 後八、一〇 本省着

林外務大臣

本野 公使

第一一〇号

十四日午後三時外務省ニ於テ漁業條約談判ノ第一回会见ヲ行ヒタリ一応挨拶ノ後本官ヨリ豫テ御送附ノ公文協約案ヲ提出セリ先方ハ之ヲ査閱シタル上ニテ今ヨリ三週間位ノ内ニ回答書ヲ送り來ル筈次回ノ会见ハ右回答書ニ接シタル後

七五 明治三十九年九月七日 本野駐露公使ヨリ 西園寺外務大臣宛 (電報)

露国政府漁業協約対案報告ノ件

九月七日 露都發
九月八日 本省着

西園寺外務大臣 本野特命全權公使

第一二七号及第一二八号

九月五日露国全權委員ヨリ左ノ漁業協約対案ニ接手セリ
協約前文 変更ナシ

第一條 露西亞帝國政府ハ本協約ノ規定ニ依リ日本海「コック」海及「ベリリング」海ニ屬スル露西亞国沿岸ニ於テ魚類、海産無脊椎動物及海藻ヲ捕獲及製造スルノ權利ヲ日本国臣民ニ許ス但河川及入江ニ付テハ本協約ノ規定スル限ニ在ラス

第二條 日本国臣民ハ本協約第一條ニ記載シタル領水ニ於テ魚類、無脊椎動物及海藻ノ捕獲及製造ニ従事スルコトヲ得ルモ其ノ捕獲及製造ハ特ニ之カ為海面及岸地ニ互リテ設定セラルル漁区内ニ於テスルコトヲ要ス漁区ハ競争入札ノ方法ニ依リ貸下クヘシ日本国臣民ハ前記領水ニ於テ漁区ヲ得タル露西亞国当業者ト同一ノ權利ヲ享有スヘシ

コトヲ約ス

第六條 (我案ト同シ唯「水産物」ノ語ニ代フルニ「海産無脊椎動物及海藻」ヲ以テス)

第七條 露西亞帝國政府ハ魚類、海産無脊椎動物及海藻ノ製造方法ニ関シ漁区ヲ得タル露西亞国当業者ノ免除セララルヘキ何等特別制限ヲ日本国臣民ニ対シテ設ケサルコトヲ約ス

第八條 漁業權ヲ得タル日本国臣民ハ健康證書並日本国ニ於テ露西亞国領事館ノ發給スル證明書ヲ有スル船舶ヲ以テ日本国ヨリ漁場ヘ、又漁場ヨリ日本国ヘ直接ニ渡航スルコトヲ得ヘシ

前記船舶ハ一ノ漁場ヨリ他ノ漁場ヘ漁業ニ必要ナル人員、物件並捕獲物及採取物ヲ運搬スルコトヲ得ヘシ

前記船舶ハ現ニ施行セラレ若ハ将来制定セララルヘキ露西亞国沿岸航海法ニ一切服従スヘシ

第九條 本協約ノ規定ニ依ル場所ニ於テ漁区ヲ得タル日本国及露西亞国臣民ハ本協約第一條ニ記載シタル方面ニ於ケル魚類海産無脊椎動物及海藻ノ養殖、保護、漁業取締其他漁業上ノ事項ニ付現ニ施行セラレ若ハ将来制定セララルコトアルヘキ法令ニ関シ均等ノ地位ニ置カルヘシ

林外務大臣時代 日露漁業協約 七六

第三條 本協約第二條ノ規定ニ依リ漁区ノ貸下ヲ受ケタル日本国臣民ハ漁区ノ区域内ニ於テ其ノ業務施行ノ為貸下ヲ受ケタル附帯岸地ヲ自由ニ使用スルノ權利ヲ有スヘシ前記日本国臣民ハ該岸地ニ於テ漁船及漁網ニ必要ナル修繕ヲ加ヘ漁網ヲ曳キ魚類及水産物ヲ陸揚シ並捕獲物及採取物ヲ塩漬シ乾燥シ製造シ若ハ貯蔵スルコトヲ得且之カ為該岸地ニ於テ一漁期間ニ必要ナル倉庫小屋及乾燥場ヲ自由ニ築造スルコトヲ得ヘシ

第四條 本協約ノ規定ニ依ル場所ニ於テ漁区ヲ得タル日本国臣民及露西亞国臣民ハ本協約第一條ニ記載シタル場所ニ於ケル漁業權、水産物ノ製造並漁業ニ必要ナル動産又ハ不動産ニ対シテ現ニ賦課セラレ又ハ将来賦課セラルルコトアルヘキ一切ノ取立金若ハ税金ニ関シ均等ノ取扱ヲ享クヘシ

第五條 本協約第一條ニ記載シタル露西亞国領水ニ於テ捕獲又ハ採取セラレタル魚類、海産無脊椎動物及海藻ニシテ日本国ニ向テ輸出セラルルトキハ其製造セラレタルト否トヲ問ハス露西亞帝國政府ハ之ニ対シ何等ノ税ヲ賦課スルコトナカルヘシ

日本帝國政府ハ亦前記産物ニ対シ何等ノ税ヲ賦課セサル
露西亞帝國政府ニ於テ新ニ前項ノ法令ヲ制定スルトキハ之カ施行ヨリ少クトモ六箇月前ニ之ヲ日本國政府ニ通牒スヘシ

第十條 (削除)

第十條 (我十一條ニ当ル但左ノ通同條ノ後半部ヲ修正)

本協約ノ第一條ニ記載シタル場所ニ在リテハ日本国臣民ハ本協約ノ規定ニ依ル場所ニ於テ漁区ヲ得タル露西亞国臣民ト均等ノ待遇ヲ享クヘシ

第十一條 (我案第十二條ニ当ル但十五箇年ヲ十箇年ト修正シ「相互ノ合意ニ依リ」トアルヲ「相互ノ合意ニ基キ」ト改ム)

第十二條 (我案第十三條ニ当ル但「東京」ノ代リニ空白ノ儘ニ存セリ)

七六 明治三十九年九月八日 本野駐露公使ヨリ 西園寺外務大臣宛 (電報)

露国政府対案ニ関スル説明書報告ノ件

九月八日 露都發
九月九日 東京着

西園寺外務大臣

本野全權公使

第一二九号

露国全権委員ヨリ漁業協約ノ露国対案ニ関スル説明書ニ接
手セリ其ノ要点左ノ如シ

第一條中「一切ノ魚類及水産物ヲ捕獲及採取スルノ権利」
トアル我提案及同第十條ノ規定ニ関シ露国全権委員ハ講和
條約第十一條ニ所謂「漁業権」ノ意義ニ付縷々論弁シテ
「漁業」ナル語ハ単ニ漁獲ノ漁獲ノミヲ指スモノナリト主
張シ但露国政府ハ日本政府ノ希望ニ応セムカ為此意義ヲ擴
充シテ無脊椎動物及海草ヲ捕獲スルノ権利ヲセ許セムト
スルノ意ナル旨ヲ附言セリ鯨、海驢、鰓膈、臘虎其ノ他
ノ哺乳動物ニ関シテハ露国政府ハ露国領水ニ於テ此等動物
ヲ捕獲スルノ権利ヲ断シテ何等他国ニ許セサルヘキコト
ヲ声明セリ次ニ我提案第一條ノ末段ニ関シ露国全権委員ハ
曩ニ講和會議ノ際原案ニ「完全ナル漁業権」トアリシヲ
「漁業権」ト修正セラレ「及港湾、入江及河水ニ於テ」ナ
ル一旬ノ削除セラレタル歴史ニ付頗ル長文ノ弁明ヲ加ヘタ
ル上日本カ露国領水ノ全部ニ亙リテ権利ヲ得ムコトヲ請求
スルハ露国政府ノ同意シ難キ処ニシテ単ニ海岸ニ於テノミ
此權利ヲ有スヘキモノナリト論断シ又我提案第一條中「土
民ノ為留保シアル河水及入江ヲ除クノ外」トノ制限アルモ

ノ待遇ヲ与フルハ全然正当ナルヲ信スト第七條ニ関シテハ
露国政府ハ漁獲物製造ノ方法ヲ一切無制限ニ許可スルコト
ヲ得ス此点ニ付或法規ヲ遵守セシムルノ必要ヲ認ムト述ヘ
追テ制定セラルヘキ漁業法ニ依リ鮭族ノ魚類ヲ以テ肥料ヲ
製造スルヲ禁セムトスルノ考案アル旨ヲ附言シ何ニスルモ
此等ノ制限ハ日露兩國当業者ニ対シテ同様ニ施行セラルヘ
ント云ヘリ
第九條及第十一條ニ関シテハ第五條ニ於ケルト同一ノ説明
アリ協約ノ期限ニ至リテハ唯確定セル慣例ニ從ヒ之ヲ十箇
年ニ限ルヲ可トスル旨述ヘタリ

七七 明治三十九年九月八日 本野駐露公使ヨリ
西園寺外務大臣宛 (電報)

露国政府対案ニ関スル修正意見請訓ノ件 (一)(二)

(一)

九月 八日 后四、二八 露都發
九日 同三、三五 本省着

西園寺外務大臣 本野公使

第一三〇号

林外務大臣時代 日露漁業協約 七七

土人ノ漁業ハ極メテ微々タルモノニシテ恐クハ遠カラス消
滅スルニ至ルヘク從テ此ノ制限ハ實際ニ殆ント何等ノ価値
ナキヲ見ルヘシト説述セリ露国修正案第三條ニ関シ露国全
権委員ハ説明ヲ加ヘ權利許与ノ最モ普通ナル方式ハ海面及
岸地ニ於ケル漁区ヲ貸下クルニアリ自由漁業ノ權利ハ単ニ
無人隙僻ノ地方ニ於テ例外トシテ許与セラルルモノナリト
述ヘ尙露国政府ハ漁業ノ経営及取締ヲ改善セムコトヲ期シ
漁区貸下ノ方法ヲ厳正ニ施行セントスルモノニシテ此点ニ
於テハ露国人タルト日本人タルトヲ問ハス一切ノ当業者ヲ
均等ニ待遇スヘシト附言シ又「サゼーン」ノ陸地ヲ使用
スルノ權利ヲ維持スヘシト言明セリ

次ニ第五條ニ関シテハ露国全権委員ハ講和條約ニ於ケル規
定ノ正確ナル意義ヲ論拠トシテ弁明スルニ露国臣民ト日本
国臣民トノ間ニ全然均等ノ待遇ヲ与フルハ其ノ當ヲ得サル
旨ヲ以テシ露国政府カ農民、土蕃及移住民其ノ他ノ土人ニ
殊遇ヲ加ヘ之ニ与フルニ漁業ニ関スル特別ノ保護ト權利ト
ヲ以テシ或場所ニ於テ漁区ノ貸下ヲ受ケル所謂当業者ト取
扱ヲ異ニスルヲ指示シタル上宣言シテ曰ク露国政府ハ日本
国臣民ヲ土地ノ住民ト同一ノ地位ニ置クコトヲ得ス而シテ
日本国臣民ニ對シ漁区ノ貸下ヲ受ケタル当業者ト一切均等

往電第一二七号、第一二八号、第一二九号ニ関シ本官ハ露
国政府ノ対案ニ就キ講究シタル上次回会見日時ヲ協定スヘ
キ順序ナルカ今対案各條ニ関スル本官ノ意見及御説明ヲ仰
キ度廉左ノ通りナルニ付之ニ對シテ至急何分ノ電訓アリタ
シ

第一條 採取物ノ種類ニ付漁業 Fishing ナル文字ヲ狭ク解
シ哺乳動物ヲ除外シタルニ對シテハ先例ヲ調ヘテ我案ノ
維持ニ尽力スヘキモ鰓膈等總テ海獸ノ採取權ヲ得ルコト
ハ殆ント望ミナカルヘキヲ以テ場合ニ依リテハ少トモ鯨
ヲ加ハヘシメンコトニ尽力スヘシ夫レニテ可ナリヤ又對
案中ニ加ヘタル無脊椎動物及「アルガマリナ」ハ我ニ取り
テ如何程ノ価値アルモノナリヤ漁業区域ニ関シテハ河川
ト入江トハ講和條約ノ明文モアルコトトテ到底承認セン
ムル望ミナカル然ルニ入江ナル文字ノ解釈如何ハ全体
ノ価値ニ大關係アリ又既ニ「リマン」ノ問題起リタルカ
如ク此文字ノ意義ハ將來紛議ノ種ナルヘキニ付此際充分
ニ明確ニナシ置クノ必要アルヘシト認ム我方ニテハ可成
狭ク解釈センコトヲ主張スヘキハ勿論ナレトモ實際露領
沿岸ノ漁場ニシテ港湾又ハ入江ニアルモノト外海ニ在ル
モノトノ比較ハ如何ニナリ居ルヤ入江ナル文字ヲ如何ニ

解釈セハ相当ニ日本人ノ漁業権得ラルヘキヤ御取調ヘノ
上可成詳カニ電報ヲ乞フ

(一)

九月 八日 后四、一〇 露都發
九月 九日 同六、五五 本省着

西園寺外務大臣

本野 公 使

第一三〇号(続キ)

第二條 漁業権ヲ漁区内ニ限リタルコトハ原案第三條後段
ノ成行如何ニ依ルヘシ其他ハ大体承諾シテ差支ナキ見込
ミナルモ我原案ノ末段日本領事ニ通知ノ件ハ是非共復活
ヲ主張セントス

第三條 対案ニ於テ删除シタル家屋建設ノ件ハ復活ヲ主張
スヘキモ此制限ハ日露両国人ニ均シク適用スヘシトノ理
由ヲ唱フヘキニ付我方ニテ之ニ満足スルコト能ハサル有
力ノ論拠アラハ電報アリタシ
末段「一漁業期間ニ必要ナル」トノ制限ハ「免許期間必
要ナル」ト改良(改正)提議セントス対案ニ於テ删除シ
タル原案ノ後半部ハ關係大ナリト認ムルニ付實際ノ情況
及有力ノ論拠アラハ電報ヲ乞フ然レトモ之カ復活ヲ主張
スルモ承知セシムルコト困難ナルヘキニ付已ムナクンハ

ル協約更新期限ハ可成長キコト得策ナルヘタルハ原案維
持ニ努ムヘキモ已ムナクハ十二年ニ主張セントス

七八 明治三十九年九月九日 本野駐露公使ヨリ
西園寺外務大臣宛

漁業協約対案及理由説明書進達ノ件

附屬書一 漁業協約露国対案

二 右理由説明書

機密第二〇号

十月十八日接受

往電第二二七号第一二八号及第一二九号ヲ以テ大要上申致
置候九月五日附ヲ以テ露国全権委員ヨリ送附シ来リタル漁
業協約対案並ニ其理由説明書全文ノ写不取敢別添甲乙丙号
ヲ以テ差進候敬具

明治三十九年九月九日

在露

特命全權公使 本野 一郎(印)

外務大臣侯爵 西園寺公望殿

別 添

甲号 漁業協約露国対案

乙号 理由説明書

林外務大臣時代 日露漁業協約 七八

今后露国人ニ漁区以外ニ漁業ヲ許スコトアラハ日本人ニ
モ許スヘシトノ保證ヲ取り置クコトニ尽力スヘシ

第四條 大体承知シテ差支ナカラシ

第五條 対案ニ於テ第二項トシテ提議ニ来リタル件ハ一応
拒絶シ置キ先方ニ於テ強テ主張セハ後廻シトナスコトヲ
提議セントス

第六條 承知シテ可ナラン

第七條 第三條ニ關聯シテ決スヘシ対案理由書ニ於テ鮭類
ヲ以テ肥料ヲ製スルコトヲ禁スヘシト云ヘルニ對シ實際
ノ利害如何電報アリタシ

第八條 在日本露国領事ノ發給スル證明書携帯ノ件ハ删除
ヲ主張スヘキモ或ハ承諾セサルヤモ知レス之ニ付實際利
害關係ノ程度ハ如何原案ノ健康證明書ハ日本官吏限リニ
テ發給スルコトト必得エ果シテ然ルヤ 対案末段ノ「カ
ボタアジ」ノコトハ删除セシムルコト難カルヘク又日露
両国船ニ均シク適用セシムルコトヲ主張スヘキモノニ非
ラスト考フルニ付故ラニ我漁船ニ對シテ制限ヲ設クル主
意ノ規則ヲ發スルコトナカラシムル様保證ヲ取り置カシ
トス

第九條 原案第十條及第十一條ハ一條二條三條ノ決定ニ依

(附屬書一)

甲号 漁業協約露国対案

CONVENTION DE PECHE

ENTRE

LA RUSSIE ET LE JAPON.

(PROJET RUSSE)

SA MAJESTÉ L'EMPEREUR DES TOUTES LES

RUSSIES et Sa Majesté l'Empereur du Japon ayant

pour but de conclure un traité de pêche, conformé-
ment à la disposition de l'Article XI du Traité de Paix,
conclu le vingt trois Août (5 Septembre) 1905, corres-
pondant au cinquième jour du neuvième mois de la
trente-huitième année de Meiji, ont nommé pour
Leurs Plénipotentiaires, savoir:

SA MAJESTÉ L'EMPEREUR DES TOUTES LES

RUSSIES

Sa Majesté l'Empereur du Japon.....

Lesquels, après s'être communiqué leurs pleins pou-
voirs respectifs trouvés en bonne et due forme, ont
conclu les Articles suivants.

Art. I.

Le Gouvernement IMPERIAL de Russie concède aux sujets japonais, conformément aux dispositions de la présente Convention, le droit de pêcher et préparer les poissons, animaux invertébrés de mer et algues marines le long des côtes russes des mers du Japon, d'Okhotsk et de Behring à l'exception des rivières et des anses celles-ci devant être exemptes des dispositions de la présente Convention.—

Art. II.

Les sujets japonais sont autorisés à se livrer à la pêche et à la préparation des poissons, animaux invertébrés de mer et algues marines dans les eaux territoriales désignées par l'Article I de la présente Convention, mais seulement dans les lots de pêche spécialement destinés à ce but s'étendant tant en mer que sur côtes, qui seront vendus à bail aux enchères publiques; les sujets japonais jouiront les mêmes droits que les entrepreneurs russes ayant acquis des lots de pêche dans les eaux susindiquées.

produits de la pêche et du matériel meuble ou immeuble nécessaire à cette industrie, dans les endroits désignés par l'Article I de la présente Convention.

Art. V.

Le Gouvernement IMPERIAL de Russie ne percevra aucuns dorits sur les poissons, animaux invertébrés de mer et algues marines, pêches ou pris dans les eaux territoriales russes désignées par l'Article I de la présente Convention soit que ces poissons et produits aquatiques fussent manufacturés, soit qu'ils ne le fussent pas, lorsqu'ils seront destinés à être exportés au Japon.

Le Gouvernement Impérial du Japon s'engage, de son côté, à ne lever aucun droit sur les produits susmentionnés.

Art. VI.

Aucune restriction ne sera établie à l'égard de la nationalité des personnes employées par les sujets japonais dans la pêche ou dans la préparation des poissons, animaux invertébrés de mer et algues marines.

Art. III.

Les sujets japonais, qui auront acquis à bail des lots de pêche conformément aux dispositions de l'Article II de la présente Convention, auront dans les limites des lots de pêche le droit de faire librement usage des côtes adjacentes, qui leur ont été concédées pour l'exercice de leur industrie. Ils pourront y faire des réparations nécessaires à leurs barques et filets, tirer ces derniers à terre et débarquer leurs poissons et produits aquatiques, y saler, sécher, préparer et emmagasiner leurs pêches et cueillettes. Dans ce but ils auront la liberté d'y ériger des magasins, cabanes, sécheries, qui sont nécessaires pour la durée d'une saison de pêche.

Art. IV.

Les sujets japonais et les sujets russes, qui ont acquis des lots de pêche dans les endroits soumis aux dispositions de cette Convention devront être traités sur le pied d'égalité, en tout ce qui concerne les impôts ou taxes qui sont levés ou qui seront à l'avenir levés pour le droit de pêche, de préparation des

Art. VII.

Le Gouvernement IMPERIAL de Russie d'engage à ne pas imposer aux sujets japonais de restrictions spéciales dont les entrepreneurs russes ayant acquis des lots de pêche seraient exempts, quant au mode de préparation des poissons, animaux invertébrés de mer et algues marines.

Art. VIII.

Les sujets japonais qui auront acquis le droit de pêche pourront se rendre directement soit du Japon aux lieux de pêche, soit des dits lieux au Japon, sur les bâtiments munis d'un certificat, délivré au Japon par le Consulat Russe respectif, ainsi que d'un certificat de santé.

Les dits bâtiments seront autorisés à transporter d'un lieu de pêche à un autre les personnes et les objets nécessaires à l'industrie de la pêche, ainsi que les produits de pêche et cueillettes; les bâtiments susmentionnés devront, sous tous less rapports, se soumettre aux lois russes de cabotage, actuellement en vigueur, ou qui seront édictées par la suite.

Art. IX.

Les sujets japonais et russes qui auront acquis des lots de pêche dans les endroits soumis aux dispositions de la présente Convention, seront placés sur le pied d'égalité par rapport aux lois et règlements actuellement en vigueur ou qui seraient édictés à l'avenir, concernant la pisciculture et la protection des poissons, animaux invertébrés de mer et algues marines, le contrôle de l'industrie y relatif et toute autre matière se rapportant à la pêche dans les régions désignées dans l'Article I de la présente Convention.

Il sera donné connaissance au Gouvernement japonais des lois et règlements nouvellement édictés au moins six mois avant leur mise en application.

Art. X.

En ce qui concerne les matières, qui ne sont pas spécialement mentionnées dans la présente Convention, mais se rapportant à l'industrie de la pêche dans les régions désignées par l'Article I de la présente Convention, les sujets japonais seront traités sur le pied d'égalité avec les sujets russes, qui auront acquis des

lots de pêche dans les endroits soumis aux dispositions de cette Convention.

Art. XI.

La présente Convention sera renouvelée tous les dix ans, en vertu d'un accord mutuel des deux Hautes Parties Contractantes.

Art. XII.

La présente Convention sera ratifiée et les ratifications seront échangées à.....le plus tôt possible, et en tout cas pas plus tard, que quatre mois après la signature.

En foi de quoi les Plénipotentiaires respectifs ont signé et scellé de leurs sceaux la présente Convention.

Fait à St. Pétersbourg le.....
(.....) 1906, correspondant au.....

.....de l'année Meiji.
(空欄))
] 中 日 露 漁 業 協 約

NOTICE EXPLICATIVE.

Ayant pris connaissance du Projet de la Convention de la pêche entre la Russie et le Japon, présent par

le Plénipotentiaire du Japon le 1/14 Août courant, les Négociateurs Russes croient devoir signaler plusieurs points du dit projet, nécessitant des explications.

L'Article I du Projet comporte, entre autres, "le droit de pêcher et de prendre toutes espèces de poissons et de produits aquatiques."—Ainsi, l'expression "droit de pêche" (rights of fishery) employée dans l'Article XI du Traité de Paix, devant servir de base à la Convention de Pêche est interprétée dans un sens excessivement large non seulement dans le sens de la pêche de poissons, mais aussi dans le sens de la pêche des mammifères (cétacés), invertébrés et plantes aquatiques.¹⁾ Or, le mot pêche dans le sens vrai de sa

signification ne peut pas se prêter à une interprétation aussi étendue. Selon notre définition, fondée sur des données historiques, philologiques, et autres, le terme pêche (fishery) signifie exclusivement la pêche des poissons.

Néanmoins, allant au devant des désirs du Japon, le Gouvernement IMPERIAL de Russie serait prêt, de son côté, à donner au terme pêche une signification plus étendue de façon à ce que ce terme, outre la prise des poissons, comprenne celle des animaux inver-

tebrés et algues marines.—Quant aux mammifères (baleines, otaries, phoques, loures marines), les Négociateurs Russes ont l'honneur de déclarer, que dans les eaux territoriales russes il ne serait être question d'en accorder la capture à aucune Puissance étrangère.

Dans la deuxième partie de l'Article I du Projet le Gouvernement du Japon demande pour les sujets japonais le droit d'exercer leur industrie de pêche "dans toutes les parties des eaux territoriales russes de Mers du Japon, d'Okhotsk et de Behring, où les sujets russes sont autorisés à s'engager dans la pêche, à l'exception des rivières et des anses, qui sont réservées aux races indigènes."

Se basant sur le sens précis de l'Article XI du Traité de Portsmouth, le Gouvernement IMPERIAL ne peut d'aucune manière consentir à accorder aux sujets japonais le droit de se livrer librement à la pêche dans toutes les régions de ses eaux territoriales des côtes du Pacifique et croit les anses et fleuves comme devant être exclus de l'effet de la présente Convention.

Il est connu, que les Plénipotentiaires Japonais à la séance du 18/31 Août de la Convention de Portsmouth,

ont présenté la demande d'accorder aux sujets japonais le droit de pêche dans les domaines russes du Pacifique, laquelle demande a été formulée dans ces termes: "La Russie concédera aux sujets japonais les pleins droits de pêche le long des côtes, ainsi que dans les baies, havres, anses et rivières en ses possessions dans les Mers du Japon, d'Okhotsk et de Behring"

A quoi les Plénipotentiaires Russes ont répondu, "que la Russie était prête à s'entendre avec le Japon pour cette question, mais que les droits de pêche ne pourraient s'étendre que sur les côtes des Mers elles-mêmes, sans toucher aux anses et fleuves, et que les droits déjà existants devraient restés en vigueur."

Comme il résulte du Protocole, les Plénipotentiaires Japonais ont accédé à cette réserve, après quoi l'Article XI fut incli, en sa rédaction définitive, dans le Traité de Paix.—La question de l'étendue et de la nature des droits de pêche à accorder au Japon, trouve sa solution dans les deux thèses suivantes, découlant du sens de l'Article XI du Traité de Paix et des pourlars préliminaires:—

1/.—La Russie s'est engagée à concéder au Japon

Les Négociateurs se croient en devoir de déclarer, que l'Article I, concernant le droit pour les sujets japonais d'exercer leur industrie de pêche dans toutes les régions des eaux territoriales russes, est en contradiction avec le principe de la seconde thèse susmentionnée et ne pourrait, par conséquent, figurer dans le texte de la Convention.

Quant à l'exemption de l'effet de la Convention sur les "anses et fleuves réservés aux races indigènes", exemption qu'implique les derniers mots de l'Article I, on ne saurait lui reconnaître de valeur pratique.

On ne compte, en effet, sur nos côtes du Pacifique que quelques milliers d'indigènes dont l'industrie de pêche ne joue, à l'heure qu'il est, presque aucun rôle dans la vie économique du pays; on peut tenir pour certain qu'elle est malheureusement vouée, sous peu, à disparaître entièrement.—

La modification proposée à la rédaction de l'Article III est fondée sur les raisons suivantes:

Suivant les procédés de l'Administration de pêcherie sur nos côtes du Pacifique, la forme la plus usitée d'exploitation était celle de vente à bail des lots de pêche, soit maritimes, soit fonciers; le droit de libre

certaines droits de pêche, à déterminer par un accord spécial mais en aucune manière, "les pleins droits c.à.d. des droits pareils à ceux des sujets russes. En effet, l'expression "pleins droits" de la proposition japonaise a été remplacée, après la réponse des Plénipotentiaires Russes en sa rédaction définitive, par les mots "des droits" c.à.d. "des droits à déterminer."—

2/.—La Russie s'est engagée à concéder au Japon certains "droits de pêche" le long des côtes des mers "elles-mêmes", en mettant par là les "anses et fleuves" hors de cause; ceux-ci sont eo ipso exempts des dispositions de la présente Convention.—De fait, l'expression de la proposition japonaise "le long des côtes, ainsi que dans les baies, havres, anses et rivières" ne fut pas acceptée par les Plénipotentiaires Russes, qui ont déclaré, que les droits du Japon peuvent s'étendre seulement "sur les côtes des mers elles-mêmes, sans toucher aux anses et fleuves",—à laquelle réserve les Plénipotentiaires Japonais ont donné leur consentement.—Dans le texte, définitivement rédigé, les mots "ainsi que dans les baies, havres, anses et rivières" ont été omis.

exercice de l'industrie n'était admis que dans les cas exceptionnelles dans les régions côtières désertes et peu accessibles.

Ayant pour but l'amélioration de l'exploitation et du contrôle des pêcheries le Gouvernement IMPERIAL a l'intention de suivre rigoureusement le premier mode d'exploitation, celui de vente à bail des lots de pêche, spécialement destinés à cette usage, et de traiter tous les entrepreneurs, qu'ils soient de nationalité russe ou japonaise, sur le pied d'égalité.

Il va sans dire, que le droit de faire usage de 10 saïènes des côtes,—Droit de Betchevnik,²⁾—n'est pas abrogé par ce qui précède.

Conformément à la loi de pêche à édicter, il est proposé de vendre à bail aux entrepreneurs particuliers des lots de pêche, qui consisteront en étendues d'eaux, pour la pêche, ainsi qu'en terrains nécessaires à tous les buts relatifs à cette industrie.

Au sujet de l'Article IV du Projet, il est à remarquer que les Négociateurs Russes, se basant sur le sens précis du Traité de Paix, comme il est indiqué plus haut à l'explication de l'Article I du Projet japonais, trouvent injuste d'admettre, quant au droit de pêche,

une complète égalité entre les sujets japonais et les sujets russes.

Le Gouvernement IMPERIAL a toujours observé une rigoureuse distinction entre les habitants du pays, notamment aborigènes, paysans, colons,—et les entrepreneurs et les pêcheurs particuliers, montrant une préférence pour les premiers, en raison des intérêts d'Etat que comporte la colonisation des côtes.

Attendu que la seule forme d'exploitation des richesses de pêche qui soit accessible aux entrepreneurs est le bail de certains lots, les Négociateurs Russes croient raisonnable d'égaliser, sous tous les rapports, les droits des sujets japonais avec ceux des entrepreneurs russes, qui auront acquis le bail de pêche aux endroits soumis à l'effet de la présente Convention.

Il est parfaitement évident que le Gouvernement IMPERIAL ne peut pas traiter sur le pied d'égalité les sujets japonais avec les habitants du pays et des colons, qui ont joui et qui jouiront à la suite, de la protection et de privilèges spéciaux du droit d'exercice gratuit de leur industrie.

La modification de l'Article VII du Projet est causée par l'impossibilité de mettre à la disposition illimitée

Quant à la durée de la Convention, il serait préférable, d'après la coutume établie, de se borner à un terme de 10 ans.

- 1) Voir l'Article X du Projet Japonais.
- 2) Code des Lois t. XII, partie I, art. 358 et suiv., — Droit de Betchevnik.

七九 明治三十九年九月二十九日 林外務大臣ヨリ 本野駐露公使宛 (電報)

九月廿九日後二時二十五分發

露国対案ニ対シ回訓ノ件

在露 本野公使 林外務大臣

第八八号

貴電漁業協約ノ件ニ関シ露国対案及之ニ関スル貴官ノ御意見ヲ斟酌シ左ノ通り訓令ス

第一條 露国案ニ於テ「一切ノ魚類及水産物」ヲ「魚類、海産無脊椎動物及海藻」ト改メ哺乳動物ヲ除キタルハ我

不利益尠カラサルニ付貴見ノ如ク原案維持ニ尽力セラル

ヘシ万止ムヲ得サルトキハ捕鯨ノ権利ノミヲ收メ第一、

第二、第五、第六、第七、第九及附録第八ノ各條ニ鯨ナ

林外務大臣時代 日露漁業協約 七九

des entrepreneurs les moyens de la préparation des produits de pêche et aussi par la nécessité d'observer, sous ce rapport, certains règlements.—Ainsi dans la loi de pêche, devant être édictée, il est proposé d'interdire la préparation d'engrais, fait de poisson de l'espèce des saumon.

En tout cas les restrictions, pouvant en résulter, seront étendues également aux entrepreneurs japonais et russes.

Au sujet de l'Article IX, il est à indiquer que, conformément au principe établi ci-dessus, les sujets japonais, qui s'engagent dans leur industrie en vertu de cette Convention, ne peuvent être traités sur le pied d'égalité qu'avec les entrepreneurs-pêcheurs russes, qui ont acquis le bail de lot dans les régions désignées par l'Article I de la présente Convention.

L'Article X du Projet Japonais paraît superflu, le sens du terme pêche (fishery) étant amplement et suffisamment défini dans l'Article I du Projet Russe de la Convention de la pêche.

Au sujet de l'Article XI on peut exposer les mêmes considérations qu'au sujet de l'Article IX.

ル文字ヲ挿入セラルヘシ

露国案ニ於テ「河川及入江」ナル文字ヲ除キタルハ講和會議録ノ結果止ムヲ得サルコトナレトモ露領沿岸ノ漁区ハ實際幾ント尽ク湾内ニ在リテ外海ニアルモノ至テ稀ナルカ故ニ入江ノ意義ヲ成ルヘク狭ク解釈スルヲ要スルニ因リ議定書案第三項ノ如ク協定セラレタシ本件ハ我漁業者ニ取り利害ノ關係最モ大ナルニ依リ是非協定ノ成立ヲ望ム

無脊椎動物及「アルガ、マリナ」ノ価値ニ付テハ六月廿七日機密送第一六号ニテ承知アリタシ但シ将来尙ホ多大ノ收獲アルヘキ見込ナリ

原案ニ「領水」トアリシヲ露国案ニ於テ「沿岸」ト改メタルハ察スルニ領水ノ意義広クシテ河水及入江ヲモ包含スルノ虞アリト考ヘタルニ因ルヘシト雖モ本條末段ニ於テ河川及入江ヲ除外スル明文アル以上ハ特ニ沿岸ト改ムヘキ必要ナシ現ニ露国案第二條第五條ニ於テモ領水ナル文字ヲ存シ又千八百九十九年發布規則ハ黑龍江沿道領水内海産業仮規則ト題シ領水ノ文字ヲ用キ之ヲ外国人ニモ適用シタリ

第二條 貴見ノ通大体承認シテ可ナリ但シ末段日本領事ニ

通知ノ件ハ貴見ノ如ク是非復活セシメラレタシ
又原案ノ「短期タルト長期タルトヲ問ハス」ヲ復活シ
「競争入札云々」ノ上ニ加ヘラレタシ其理由ハ原案ニ「短
期タルト長期タルトヲ問ハス」トアリシヲ除キシハ恐ラ
クハ露国政府ハ總テノ漁区ヲ短期即チ一漁期間貸下クル
ノ方針ナラン現ニ第三條末文ヲ修正シ「一漁期間ニ必要
ナル」ノ文字ヲ挿入シタルヲ覬ルモ粗々其意向ヲ知ルニ
足ルヘシ斯クシテ漁区ハ凡テ短期ニ限ラレルトキハ大ニ
我ノ不利益ナルノミナラス露国政府ハ從來常ニ長期ノ漁
区ヲ其臣民ニ貸下ケ居ルニ拘ハラス今更總テ之ヲ短期ニ
限ルハ我漁權ヲ特ニ制限セムトスルモノニシテ甚タ不穩
當ノ所為ナリ加之現行黒龍江沿岸漁業規則ニモ漁区ハ長
期ヲ以テ貸下クヘキモノト短期ヲ以テ貸下クヘキモノト
ノ二種アルカ故ニ本條帝國政府ノ提議ハ露国政府ニ必ス
之ヲ容ルヘキヲ信ス

露国案「Entrepreneurs」ヲ「Sujets」ト改ムルニ「Entrepre-
neurs」ナル文字ハ意義狹ク又誤解ヲ生スル虞アリ而シテ
對案ニハ特ニ「漁区ヲ得タル」ト制限シアルヲ以テ該語
ヲ「Sujets」ト改ムルモ露国政府力特ニ保護セムトスル農
民等ハ当然除外セラルル訳ナレハ同政府ノ異議ナカラム

リ置カレタシ且ツ原案ニ添付セル附録第八條製魚ノ權利
ハ本條ニ關聯シテ獲得スルコトニ尽力アリタシ

第四條 貴見ノ通

第五條 露国對案末文「日本帝國政府ハ亦前記産物ニ對
シ」云々ハ貴見ノ如ク一応拒絕シ置キ先方ニ於テ強テ之
ヲ主張セハ本協約中最モ露国ノ同意ヲ得難キ條項ト交換
的ニ協商セラレムコトヲ望ム

第六條 貴見ノ通

第七條 原案魚類ノ製造ニ付制限ヲ設クヘカラスト定メタ
ルハ從來露国ニ於テ製魚上種々繁雜ナル手續ヲ定メタル
ニ因ルモノナリト雖モ帝國政府力最モ恐ルル所ハ從來露
国官憲カ嫌忌スル製造方法即チ鱈鱈ヲ塩引ニスルコト及
鱈ヲメ粕ニ製造スルコトヲ禁止スルニアルコトナレハ此
点ニ付議定書案第四項ノ如ク露政府ノ保證ヲ取り置キ對
案ヲ承諾シテモ差支ナシ又鮭鱈種類ノ劣等ナルモノヲ肥
料ニ製造スルハ漁業者ノ便利トスル所ナレトモ其利害ノ
程度左マテ大ナラサルカ故ニ前項保證ヲ取り置ク以上ハ
別段差支ナカルヘシ

「Entrepreneurs」ヲ「Sujets」ト改ムルハ第二條説明ノ
通リ

第三條 貴見ノ如ク建物倉庫等築造ノ件ハ復活セシメラレ
且ツ「一漁期間ニ必要ナル」ノ文字ヲ刪除セラレタシ露
国政府ハ多分此制限ハ日露兩國人ニ拘シテ適用スルモノ
ナリト弁解スルナラムト雖モ第二條ニ述ヘタル如ク帝國
政府ハ漁区ノ貸下ハ必ス短期長期ノ二種アルヘキヲ信シ
既ニ長期ニテ借区スル以上ハ永久的建物ヲ築造スルノ必
要アリ之レナケレハ当業者ノ不便利莫大ナリ況ンヤ從來
露国漁業規則ニ於テモ建物ニ關シ何等ノ制限ナク一ヶ年
間借区ノ者タリトモ永久的建物ヲ築造所有シタルモノ數
多アリ故ニ是非原案ノ復活ニ務メラレ又同一趣旨ニ基キ
露国案「一漁期ニ必要ナル」ノ文字ヲ刪除セシメラレタ
シ然レトモ万不得止場合ニハ貴見ノ如ク「免許期間必要
ナル」ト改ムルモ差支ナシ

原案後半部ハ將來露国政府カ新ニ漁区ヲ開設スルコトナ
ク我漁權ヲシテ空權ニ帰セシメムコトアラムヲ恐レテ提
議シタルモノニシテ若シ同政府ニ於テ誠實ニ本協約ノ実
行ニ勉メ今後各方面ニ於テ數多ノ漁区ヲ開設スルヲ怠ラ
サレハ漁区以外ニ於ケル漁業ノ權利ハ要求セサルモ差支
ナシ故ニ原案ノ復活ニ尽力セラレ止ムナクハ貴見ノ主意
ニ因リ議定書案第二項ノ如ク協定シ露国政府ノ保證ヲ取

第八條 露国領事ノ發給スヘキ證明書携帯ノ件ハ當業者ノ
不便タルヲ免レサルカ故ニ刪除シタシ然レトモ露国ニ於
テ固執セハ同意セラルルモ差支ナシ尤モ右ノ場合ニ於テ
ハ該證明書カ船籍及船舶ノ漁業ノ目的ヲ有スルコトヲ證
スルニ止マルモノナルコトヲ明カニセラルヘシ又原案ノ
健康證書ハ御尋ノ如ク日本官憲ノ發給スルモノナレトモ
尙ホ其ノ意義ヲ明確ニセムカ為メ原案ヲ修正シ「健康證
書」ノ上ニ「日本官憲ノ發給スル」ノ文字ヲ加ヘラレタ
シ

對案末段「Cabotage」ノ件ハ貴見ノ如ク刪除スルコト
難カルヘシ依テ「運搬」ノ上ニ「無税」ノ二字ヲ加ヘ且
ツ貴見ノ如ク故ラニ我漁船ニ對シ制限ヲ設クル趣意ノ規
則ヲ發スルコトナカラシムル為保證ヲ取り置ク様尽力ア
リタシ

第九條 露国對案ヲ承諾シテ差支ナシ

第十條 前條同断

第十一條 協約更新期限ハ貴見ノ如ク先ツ原案維持ニ努メ
ラレバムナクハ十二年ニ協定アリタシ

右ノ外議定書ヲ以テ約定スヘキ四項左ノ如シ

第一項 黒龍「リマン」ハ韃靼海峡ノ一部ニシテ河川若

入江 入江ト称スヘキモノニアラサルカ故ニ右「リマ」ハ本協約ニ所謂河川若ハ入江ニナル文字中ニ包含セラレサルモノナルコト

第二項 本協約第一條ニ記載シタル各方面ニ於ケル現在ノ漁区ハ漫ニ之ヲ閉鎖セサルノミナラス今後漁区ノ數ハ漸次之ヲ増加スヘク又多數ノ日本国臣民露西亞国臣民若ハ該兩國臣民共同シテ新クニ漁区ノ開設ヲ願出ツルトキハ露国政府ハ重大ナル故障ナキ限り之ヲ許可スルコト

第三項 本協約第一條ニ載セタル 入江 ナル語ハ無論 Baie ヲ包含セス即チ船舶ヲ容ルルニ足ルヘキ広サト深サト有セサル小灣ニシテ其口狭ク其水底淺キモノヲ指スコト

第四項 露国政府ハ日本臣民カ紅魚(鮭鱒ノ種屬)ヲ塩引ニシ並ニ鱈ヲメ鮟ヲ製造スルコトニ関シ何等故障ヲ有セサルヘキコト

(追テ右議定書案ハ御參考イテ別電英文ヲ以テ電報ス)

enclosed, shallow bays not large nor deep enough to receive ships or vessels.

4. Regarding Article 7 of this Convention, Russian Government shall make no objection to Japanese subjects manufacturing herring fertilizers or salting and preparing salmonoid fish (Ruiba lososovoi Porodui) in the Japanese manner.

尙ホ第二項ニ関シ帝國政府ハ“without good and sufficient reasons” “a great number” 及“ unless they have good and sufficient reasons for refusing to do so.” 等ノ如キ意義ニ定限ナキ文字ハ紛争ノ種子ヲ將來ニ貽シ我ニ不利益ナルニ付之ヲ削除シテ左案ノ如ク改メシコトヲ望ム依テ貴官ハ其ノ意ヲ体シ左案ニ依リテ開談シ其ノ成立ニ尽力セラレタシ

11. The Russian Government engage not to close in future any of the fishery lots already opened in the regions specified in Article of this Convention, but on the contrary they agree to gradually increase them. They also engage to establish new fishery lots

八〇 明治三十九年十月二日 林外務大臣ヨリ 本野駐露公使宛 (電報)

漢業協約附屬議定書案英訳文送附ノ件

十月二日後三時二十分發

本野公使 林大臣

第九一号

漢業協約附屬議定書案英訳文左ノ通り

1. It is to be understood that the “Liman” of Amur forming a part of the Straits of Tartary is not included in the denomination of “rivers and inlets” as used in this Convention.
2. The Russian Government engage not only that they will not close in future without good and sufficient reasons any of the fishery lots already opened in the regions specified in Article 1 of this Convention, but that they will gradually increase them. They also engage that in case a great number of Japanese or Russian subjects or both Japanese and Russian subjects jointly request the opening of new fishery lots, they will grant such request, unless they have good and sufficient reasons for refusing to do so.
3. It is to be understood that the word “inlets” mentioned in Article 1 of this Convention means small

upon application to that effect being made by Japanese or Russian subjects.

八一 明治三十九年十月十四日 本野駐露公使ヨリ 林外務大臣宛 (電報)

第一回會議ノ結果報告ノ件

十月十四日 前三、 露都發 後九、三〇 本省着

林外務大臣 本野公使

第一五八号

十月十三日漁業協約ニ関スル第二回會見ヲ行ヒ逐條討議ニ入レリ第一條ニ付テ本官ハ採取物ノ種類及漁業權讓与区域ノ二要点ニ関シ詳細ノ説明ヲ為シ第一点ニ関シテハ英仏外交文書ヲ引證シテ原案ヲ維持シ第二点ニ関シテハ入江ナル文字ハ意義明晰ヲ欠キ紛議ノ種子トナルノミナラス其解釈如何ニ依リテハ日本人ハ殆ント一モ漁区ヲ得サルコトナリ條約ハ空文ニ終ルノ虞アルヲ以テ之ヲ原案ノ如ク制限スルカ然ラサレハ河川ノミヲ除キテ入江ハ全然除カサルコトニ致スヘシト論シタリ之ニ對シ先方ハ篤ト考慮ノ上何分ノ

回答ヲ為スヘキモ専門委員ヲシテ二三ノ注意ヲ為サシメタ
ントテ peche ナル語ニ関シテ其仏語辞書ニ依リ魚類ニ限ル
ト主張シ入江ノ事ハ講和條約及會議録ニ依リ明カニ除キタ
ルコトナレハ今更之ヲ取消スノ理ナキコトヲ論シタルニ付
本官ハ更ニ之ヲ存スルノ不必要ナルコト且將來紛議ノ種子
ナルコトヲ述ヘ飽クマテ削除説ヲ主張セルニ先方ハ仏語ノ
saiepe ナル語ハ意義多様ニシテ解釈如何ニ依リ漁区ハ殆ン
ト譲与セラレサルコトトナルヘキヲ以テ此語ヲ英語ノ Fish
erys ノ翻譯ト見做シ Fisherys ナル字義ハ深く陸中ニ入り込
ミタル入江ヲ指スモノト解釈スヘシ依リテ先ツ第一條ヲ協
定ノ上入江ナル文字ノ解釈如何ヲ協定スヘシト申出タリ本
官ハ peche ナル語ニ付テハ先方ノ議論ヲ反駁シ次ニ入江
ナル文字ノ解釈ニ関シ満足ノ協定ヲ得ルニ非サレハ第一條
ノ原則ヲ規定スルモ無益ニ付入江ナル文字ノ解釈ハ露国委
員ニ於テ先ツ充分ニ本官ヨリ本日提出ノ新案ヲ審議シタル
上ノコトニ譲リクシト述ヘ置タリ本日ノ談判並ニ數日前落
合ト「ブラジニコフ」トノ談判ノ模様ヨリ之ヲ察スルニ露
国委員ハ anse ヲ英語ノ inlets ト解釈シテ本條ヲ協定セン
トノ意アルコト明ナリ次回ノ会见ヲ俟ツテ更ニ請訓スヘシ

八三 明治三十九年十月六日

林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛(電報)

漁業区域ノ解釈ニ関シ回訓ノ件

十月十八日後四時三十分迄

在露 本野公使

林 大 臣

第一〇六号

貴電第一五八号及第一六〇号ニ関シ河川ノミヲ除キテ入江
ハ全然除カサルコトニスヘシト閣下ノ提議ノ成立ハ固ヨ
リ本大臣ノ希望スル所ナリト雖モ若シ右ニ対シ露国政府ノ
同意ヲ得難キヲ認めラルトキハ入江ノ意義ニ付テハ我議
定書案第三項ノ如ク是非共明確ナル規定ヲ設クル様致シタ
シ入江ノ意義ハ「インレット」ト解スルトキハ「アンス」
ト解スルヨリモ一層不明瞭タルノ虞レアルカ故ニ別ニ兩國
間ニ右ノ解釈ヲ定メ第三項ノ如ク規定スルコト絶対的ニ必
要ナリト認ム又同項記載ノ船舶ハ帆船ト汽船ヲ問ハス約二
十噸以上ノモノト御含置相成リタシ

八四 明治三十九年十月三日

本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)

第三回會議ノ結果報告並請訓ノ件(一)(二)

林外務大臣時代 日露漁業協約 八三 八四

八二 明治三十九年十月七日

本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)

漁業区域ノ解釈ニ関シ請訓ノ件

十月十七日 后七、〇〇 露都發
十月十八日 前八、一〇 本省着

林外務大臣

本野公使

第一六〇号

漁業讓与区域ニ関シ本官ハ飽迄入江ヲ除カサルコトヲ主張
スヘキ覚悟ナレトモ露国委員ハ手強ク之カ除外ヲ主張シ唯
之ヲ英語ノ「インレット」トシテ往電第一五八号ニ述ヘタ
ル如キ意味ニ解シテ本問題ヲ落着セシメントスルノ勢ナル
ニ付次(四?)會見ノ成行如何ニヨリ結局貴電第八号及第九
一號議定書案ノ趣意ニ依リ妥協ヲ試ムルノ必要ヲ生スルニ
至ルヤモ難計就テハ該案第三項ノ船舶ナル語ハ如何ナル種
類如何ナル大サノ船マテヲ含マシムル御主意ナルヤ此語ノ
意義如何ハ直チニ問題トナルヘキコトニシテ又之ヲ正確ニ
為シ置クコトハ此場合尤モ必要ト考フルニ付本官ノ心得マ
テ至急御電訓アリタシ次(四?)會見ハ二十日頃ナルヘシ

(一)

十月三十日 前一、一五 露都發
十月三十一日 后六、四〇 本省着

林外務大臣

本野公使

第一七二号

十月二十五日漁業協約ニ関スル第三回ノ会见ヲ行ヒタリ冒
頭露国委員ハ此以上談判ヲ進ムルニ先チ明白ニ本官ニ告ケ
置キ度キコトアリトテ要領別電第一七三号ノ如キ書面ヲ朗
誦セシメ之ニ引続キ前回ノ會議ニ於テ本官ノ提出シタル意
見ニ対シ弁駁書ヲ朗誦シタリ弁駁書ノ要點ハ前回ノ會議ニ
於テ本官ヨリ提出シタル修正案ニ対シ弁駁ヲ加ヘタル末
採收物ニ付テハ露国ノ修正案ヲ維持シ又入江ニ付テハ英語
ノ inlets 論ヲ主張シ之ヲ土台トシテ地図ニ就キ入江ノ所
在ヲ指定センコトヲ發議セリ依リテ本官ハ本問題ハ重大ノ
關係アレハ尙充分ニ講究ノ上答弁スヘケレトモ今日ヨリ豫
メ述べ置キ度事ハ英語ノ所謂 inlets ナル語ハ其意義極メ
テ漠然タルヲ以テ之ヲ土台トシテ沿岸各地方ニ於テ所謂
「アンス」ナル語ニ相当スル地点ヲ指定シタル表ヲ作ルヘ
シトノ先方ノ提議ニハ到底同意スルコト能ハス然レトモ若
シ「アンス」ナル語ノ定義如何ヲ定メンクメ双方ヨリ委員

ヲ出シテ協議セシメントナレハ本官ニ於テモ別ニ異存ナシト述ヘタルニ先方ニ於テモ之ニ同意シタルヲ以テ本問題ノ討議ヲ進行セシムルニ先テ先方ヨリハ「コンマンドル島」ノ島司「グリブニツキイ」及沿海洲漁業監督官「ブラジニコフ」ヲ委員トシ我方ヨリハ落合及丸毛ヲ委員トシテ「アンス」ノ定義定メ方ヲ協議セシムル事ニ取極メタリ右ニテ御承知ノ如ク露國委員ハ右漁業問題ニ関シテハ十月六日提出ノ對案ヲ固執シ今后ト雖トモ決シテ譲ルノ意志ナキコトヲ言明シ第一條ノ漁場ノ範圍及採收物ノ種類ニ付テモ前回ノ會議ニ於テ述ヘタル処ヲ更ニ長々シク繰リ返シ入江ヲ英語ノ「インレット」ト解シテ拳ケタル例ニ「ボンエツト」灣「オルカ」灣ノ如キモノ迄ヲ含メ居ル程ニシテ極メテ我儘ノ解釈ヲ執リ居レリ先方ノ意見書ニ對シテハ之ヲ弁駁スルコト極メテ容易ナルニ付一方ニ於テハ書面ヲ以テ之ヲ弁駁シ又一方ニ於テ次回ノ會見ノ節口頭ヲ以テ之ヲ駁撃スヘキ積リナレトモ本官ノ見ル処ニ依レハ到底正式ノ議論ニテハ何程弁論ヲ戰ハシムルモ好結果ヲ得ル見込ミ立サルヲ以テ本官ハ先方ヲ反省セシムルノ方法ヲ百方講究シ前頭「グウバサガフ」ニ對シ正式談判ノ外個人的會見ヲ行ヒ互ニ腹藏ナク意見ヲ交換センコトヲ提議シタレトモ同人ハ本問題

サンコトヲ努ムル覚悟ナレトモ此手段モ亦果シテ効能アリヤ否ヤ疑ハシ就テハ右ノ次第帝國政府ニ於テ御考量ノ上左記諸点ニ関シテ帝國政府ノ御方針速ニ御決定ノ上何分ノ御訓令ヲ俟ツ

一、入江ナル文字ニ付先方ノ解釈ノ広漠ニ失スルコトハ申迄モナケレトモ閣下ヨリ御下訓ノ解釈モ専ラ我方ノミニ利益ナル解釈ナルヲ以テ又先方ノ同意ヲ得ルコト甚々難カルヘシト信セラル就テハ我委員ヲシテ充分ニ協議セシメタル上若シ双方ノ意見一致セサルトキハ之ヲ如何ニ決定スヘキヤ

二、「リマン」ノ問題ニ付テハ未タ談判ヲ試ミサレトモ先方ニ於テハ極力之ヲ除外スルコトヲ主張スヘク又本官ニ於テモ充分ニ之ヲ弁駁スルノ理由アルハ申迄モナケレトモ議論ノ如何ニ係ハラス先方ハ利害ノ点ヨリ之ヲ拒絶スヘキヲ豫期セサルヘカラス

就テハ右二点ニ関シ談判纏マラサルトキハ一応談判ヲ中止シ本邦ニ於テハ露國人ノ実益上ノ問題ニ関シ復讐的ノ行為ニ出ヘシトノ意志ヲ表示シテ可然ヤ豫メ至急御下訓ヲ乞フ本官ノ見ル処ニ依レハ一応此点ニ途達セサル以上ハ本談判ノ落着覚束ナシト信ス本官ハ帝國政府ノ御決心如何ニ依リ

ニ関シテハ全ク素人ニシテ一々専門家ノ意見ヲ聞クニアラサレハ何等ノ答ヲモ為スコト能ハサレハ個人的會見ヨリモ察ロ公開ノ席ニ於テ論議シタシト答ヘタルヲ以テ同委員トハ別ニ意見ノ交接ヲ行ハスト雖トモ其ノ后今日マテノ経過ヲ徵スルニ全權トハ名義ノミニシテ全ク専門家ノ議論ヲ受ケ繼キ本官ニ依フルノ外何等自動的ノ処置ヲ為スコト能ハサルモノノ如クナルヲ以テ同委員ト私ニ意見ヲ交換スルモ敢テ利益ナカルヘク又専門家ハ漁業行政ノ当局者ニシテ自己ノ建テタル方針ヲ確守シテ一步モ譲ラサル態度ヲ執リ居レルヲ以テ此儘ニ談判ヲ継続スルトキハ大体ニ於テ先方ノ對案通り纏マルカ若クハ談判ヲ中止スルノ外ナキ位地ニ至ルヘキヤハ明ラカナリ(續ク)

(一)
十月三十日 前一〇、一五 露都発
後一〇、四〇 本省着

林外務大臣 本野公使
第一七二号(統キ)

依リテ此上一応來ル木曜日ニ歸リ來ルヘキ外務大臣ニ面會シテ兩國政事の關係ノ大問題ヨリ利害ヲ説キテ露國委員ヲシテ一屬調和的ノ態度ヲ取ラシムル様同大臣ノ斡旋ヲ促露國政府ニ對シ本官ノ態度ヲ定メタキニ付右可成至急御下訓アリタシ

八五 明治三十九年十月三日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)

第三回會議ニ對スル露國政府ノ意向報告ノ件
Petersburg, October 30th 1906 1. 15 pm
Rid. Tokio, " " 7. 30 pm

Hayashi,
Tokio.
No. 173.

Before proceeding to further negotiation Russian Plenipotentiaries find it indispensable to indicate to Japanese Plenipotentiary point of view of Russian Government relating to general character of the negotiation and actual value of the concessions made by Russian counter draft. While the question of fishery right in the littoral is now for Japan a sort of exclusively technical interest, it is for Russia vital problem whose solution will bear consequences upon all her possessions in Far East where colonization is

the sole basis of policy. Therefore it is evident that State interest does not permit Russia to accept such arrangements as will obstruct colonization of her littoral in the Pacific. In pursuing this fundamental end, Russian Government fully recognize their obligations towards Japan provided in Article XI of Treaty of Peace, and consequently did not fail to take into consideration in their counter draft entirety of concessions actually necessary for Japanese fishermen to enjoy their conventional rights, but it was impossible for them to waive anything whatever of the restriction made by Russian Plenipotentiaries at Portsmouth for safeguarding vital interests of the Empire. In conformity with actual needs of fishing rather than formal interpretation of Article I of Treaty of Peace, Russian Government have already offered on their own accord the following concessions:—

1. right of leasing lot on land along the coast,
2. right of preparing fishes on lot and of erecting stores there,
3. right to catch invertebrate sea animals and algæ marina,
4. assimilation, in point of rights, of Japanese fishermen.

tual interests of both parties and desire to arrive at a stable understanding as early as possible. This is why, at the very beginning of the negotiation, Russian Government believe it necessary to state as clearly as possible and without any (datsu) by purpose, all admissible concessions as well as all points on which no concession can be accorded. After having indicated without reserve maximum of their concessions, Russian Government believe it necessary to observe that their counter-draft has been the object of profound study, putting aside the idea of bringing modification on fundamental questions in consequence of considerations ad hoc in the course of negotiation. Russian negotiators can therefore only confirm once more that the Russian Government have the firm intention not to depart from principles established by Article XI of Treaty of Peace on which Russian counter-draft was based.

Motono.

men to Russian undertaker having obtained fishery lots,

5. assurance to Japanese subjects of maintenance of right of communications between fishery lots belonging to same undertaker under less restrictive conditions, not to speak of numerous concessions of the second importance.

6. Russian Government further intend to enact regulations according Japanese subjects right to purchase fishes and to lease land lots for preparation of fishery products, even in zone kept outside the present Convention;

7. To avoid any possible misunderstanding in future, it is decided that hereafter all questions of principle relating to fisheries should be submitted to the Central Government and not to local administration. On the other hand, Russian Government cannot admit exercise by Japanese subjects of their industry without restriction, as to its extent and object. Neither can they consent to extend to Japanese subjects all rights enjoyed by Russian fishermen and colonists, nor right of cabotage along Russian littoral. Russian Government have been actuated by large conception of nu-

八六 明治三十九年十月三十日

本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛

漁業協約談判弁論写進達ノ件

- 附屬書一 第一回会議ニ於ケル本野公使演説
二 第三回会議ニ於ケル露国側説明書写
三 露国委員ノ演説セル答弁要領書写

機密第二五号

十一月三十日接受

漁業協約談判第二回及第三回会見ニ於テ双方ヨリ提出セル
左記ノ弁論説明写三通別添甲乙丙号ヲ以テ差進候

敬具

甲、露国対案及其理由説明書ニ対シ十月十三日第二回会見ニ於テ本官カ演説セル要領説明書写

但右ハ十月十五日露国委員ニ送達セリ

乙、右本官ノ説明ニ対シ十月廿五日第三回会見ニ於テ露国委員カ書記官ヲシテ朗読セシメタル説明写

丙、同日露国委員ノ演説セル答弁要領書写

但右乙丙写二通ハ十月廿七日夜ニ至リ送り来レリ

明治三十九年十月三十一日

在露

特命全權公使 本野 一郎 (印)

外務大臣子爵 林 董 殿

(註釋書 1)

第二回會議ニ於テ本野公使演說

OBSERVATIONS PRESENTÉES PAR S.E.M. MONTONO, PLENIPOTENTIAIRE DU JAPON, EN RÉPONSE A LA NOTICE EXPLICATIVE DU PROJET RUSSE SUR LA CONVENTION DE PÊCHE DANS LA SEANCE DU SAMEDI 30 SEPTEMBRE 1906
13 OCTOBRE

Ayant examiné soigneusement le contre-projet du Gouvernement Impérial de Russie, ainsi que la notice explicative qui l'accompagne, le Plénipotentiaire du Japon se croit en droit de relever certaines allégations qui ne lui paraissent pas fondées et de soumettre à un nouvel examen du Plénipotentiaire Russe le projet primitif présenté par le Gouvernement Impérial du Japon.

Article I-er.

La notice explicative russe sur l'Article I-er examine en particulier les deux points suivants :

Sénateur belge et Professeur de Droit international, intitulé : "Pascristie internationale" (Bruxelles, 1902). A la page 520 cet ouvrage traite de la Convention d'arbitrage ayant eu pour but de fixer les indemnités dues à des citoyens britanniques du chef des arrestations de navires armés pour la pêche des phoques à fourrures. (Voir également page 422 id.)

L'expression anglaise fishing est aussi communément employée dans le langage diplomatique dans le sens donné à ce mot par le projet japonais. C'est ainsi qu'on dit seal fishing de la pêche des phoques (Foreign Relations of the United States, part I, page 426, 1873). Le Plénipotentiaire du Japon se permettra de faire remarquer que le fait seul d'avoir compris les Mers de Behring dans les régions où les droits de pêche seraient accordés aux Japonais, dénote clairement de la part des Négociateurs de Portsmouth l'intention de ne pas exclure les mammifères, puis que la pêche principale dans ces régions consiste à la capture des phoques et autres animaux de mer.

Quant à l'argument tiré du remplacement des mots pleins droits de pêche par les mots des droits de pêche le Plénipotentiaire du Japon fera remarquer qu'il suffit

- 1) Le sens de l'expression droit de pêche,
- 2) l'étendue des eaux territoriales russes dans lesquelles le Japon demande le droit de pêche.

Sur le premier point, la notice explicative russe conteste, en se fondant sur des données historiques, philologiques et autres, le sens donné par le Gouvernement Japonais à l'expression droit de pêche employée dans l'Article XI du Traité de Paix.

Le Plénipotentiaire du Japon croit devoir protester énergiquement contre l'allégation que le Gouvernement Japonais a donné à la dite expression un sens plus large qu'elle n'en comporte en réalité d'après les données historiques, philologiques et autres. Le Gouvernement Impérial n'y a attaché que le sens généralement attribué à cette expression dans le langage diplomatique.

Le terme pêche (fishing) dans le langage diplomatique n'a en effet nullement le sens restreint de pêche de poissons que voudrait lui attribuer la note russe.

Pour ne citer que quelques exemples, le Plénipotentiaire du Japon prierait le Plénipotentiaire Russe de se reporter à un ouvrage très connu en matière d'arbitrages internationaux de M. H. La Fontaine,

de lire attentivement le Protocole N° 7 pour se convaincre que cette modification n'a pas la portée que la notice russe paraît vouloir lui donner. Elle n'a eu pour objet que de préciser que les droits de pêche seront accordés aux sujets japonais dans certaines régions. C'est ce qui résulte clairement du passage suivant dudit Protocole : " Dans la note responsive les Plénipotentiaires de Russie ont expliqué que la Russie était prête à s'entendre avec le Japon pour cette question, mais que les droits de pêche ne pourraient s'étendre que sur les côtes des mers elles mêmes, sans toucher aux anses et fleuves, et que les droits déjà existants devraient rester en vigueur."

Il ne résulte nullement de ce qui précède que la Russie ne s'est engagée qu'à accorder certains droits de pêche. La réserve des Plénipotentiaires Russes à Portsmouth s'est portée exclusivement sur la question des anses et fleuves. C'est ce qui résulte péremptoirement dudit Protocole où on lit : Les Plénipotentiaires du Japon ayant accédé à cette réserve, le texte de l'Article XII (XI) a été définitivement arrêté.

Pour se résumer sur le premier point le Plénipotentiaire du Japon tient à déclarer ce qui suit :

Les Négociateurs du Traité de Portsmouth, en insérant dans l'Article XI dudit Traité l'expression des droits de pêche, n'ont nullement eu l'intention de restreindre le sens de ces mots et que par conséquent cette expression s'applique aussi bien à la pêche des poissons proprement dits, qu'à celle des mammifères, invertébrés et plantes aquatiques.

En conséquence le Plénipotentiaire du Japon a l'honneur de proposer au Plénipotentiaire de Russie le maintien intégral de la première partie de l'Article I-er du projet japonais.

2-me point. En ce qui concerne l'étendue des eaux territoriales russes dans lesquelles le Gouvernement Impérial demande le droit de pêche pour ses nationaux, le Plénipotentiaire de Russie, dans sa notice explicative, déclare que les anses et fleuves doivent être ipso facto exempts des dispositions de la présente Convention et que le droit de pêche des sujets japonais doit être limité dans les eaux territoriales russes longeant les côtes des Mers du Japon, d'Okhotsk et de Behring.

Le Plénipotentiaire du Japon, tout en ne contestant pas la force des arguments présentés par le Plénipotentiaire de Russie sur l'exclusion des fleuves et anses,

du moins une diminution considérable de leur droit de pêche.

L'objet principal de la pêche dans les régions de l'Anour est la pêche aux poissons à chair rouge tels que les saumons, etc.

Aussi si on exclut complètement les fleuves, il est évident que le droit de pêche des Japonais sera singulièrement restreint.

Il en est de même de l'exclusion des anses. En effet, les anses dans le sens naturel du mot signifient petites baies de peu de profondeur. Ne possédant pas de cartes détaillées des côtes russes des mers susmentionnées le Plénipotentiaire du Japon n'est pas à même de préciser la configuration exacte des dites côtes. Mais il est à supposer que sur ces côtes doivent se trouver de nombreuses anses. Lorsque les lots de pêche sont d'une petite étendue, ces lots pourraient se trouver dans les anses. Si, au contraire, ces lots sont d'une grande étendue, des anses pourraient se trouver dans ces lots. Dans un cas comme dans l'autre, quel sera le sort des adjudicataires japonais ? Si on décide que les anses ne peuvent pas être comprises dans les lieux où pourraient s'exercer le droit de pêche des

croit devoir néanmoins soumettre à sa considération les observations suivantes :

Les Plénipotentiaires Japonais et Russes en insérant dans le Traité de Portsmouth les dispositions de l'Article XI ont eu évidemment l'intention d'accorder loyalement les droits de pêche réels et effectifs aux sujets japonais dans les eaux territoriales russes dans les mers susmentionnées.

Le Plénipotentiaire du Japon est heureux de constater que rien ne lui permet de croire que telle ne soit également l'intention du Gouvernement Impérial de Russie à l'heure actuelle.

Or en excluant entièrement les fleuves et anses, se trouvant sur les côtes russes des Mers du Japon, d'Okhotsk et de Behring des dispositions de la présente Convention de pêche, le Plénipotentiaire du Japon se trouve obligé de se demander si les droits de pêche pouvant être accordés aux sujets japonais par la présente Convention ne deviendraient pas illusoire.

L'exclusion des anses et des fleuves, à moins de leur donner le sens attribué par le projet japonais, semble au Plénipotentiaire du Japon être, sinon l'anéantissement complet du droit de pêche des sujets japonais,

Japonais leur droit pourrait devenir tout à fait illusoire, car toutes les fois qu'un lot de pêche se trouverait dans une anse ou qu'une anse se trouverait dans un lot de pêche, les Japonais ne pourraient pas en devenir concessionnaires. En outre, si tel était le sens de l'exclusion des anses des dispositions de l'Article XI du Traité de Portsmouth, il suffirait d'une mesure administrative des autorités locales pour que les lots de pêche ne puissent pas être adjugés aux Japonais. Les droits de pêche qui seraient accordés par la présente Convention deviendraient tout à fait aléatoires.

Il est de tout évidence que telle ne devait pas être la pensée des Négociateurs de Portsmouth quand ils ont décidé que les droits de pêche seront accordés aux sujets japonais par une convention spéciale. Ils ont voulu sincèrement et loyalement accorder aux sujets japonais les droits de pêche réels et effectifs. Et ce qui prouve cette intention évidente de leur part, c'est le soin qu'ils ont pris à sauvegarder les droits déjà existants et appartenant soit aux sujets russes soit aux étrangers. Dans leur pensée, les sujets japonais devraient obtenir exactement les mêmes droits que ceux que possédaient soit les Russes soit les étrangers dans

les autres parties des eaux territoriales russes des mers susmentionnées. Ainsi donc, si on veut donner un sens à l'exclusion des fleuves et anses insérée dans l'Article XI du Traité de Portsmouth, on ne peut l'interpréter que dans le sens indiqué par le projet japonais.

Le Plénipotentiaire du Japon, soucieux de vouloir arriver à une entente complète et désireux de témoigner son esprit de conciliation, n'insistera pas sur l'exclusion des fleuves comme lieux de pêche mais par contre demanderait instamment à ce que les lots de pêche mis aux enchères publiques, même s'ils contenaient des anses ou s'ils se trouvaient dans des anses, puissent être acquis par les sujets japonais.

En conséquence, le Plénipotentiaire a l'honneur de soumettre à la considération du Plénipotentiaire Russe le texte ci-joint.

Projet de la nouvelle rédaction du texte de l'Article I-er, présenté par S. E. M. Motozo, Plénipotentiaire Japonais dans la séance du Samedi 30 septembre/13 Octobre 1906.

le sort se serait compris par l'insuffisance du littoral. Or, étant données les conditions locales, l'élément colonisateur dans les possessions russes en Extrême Orient doit puiser ses ressources dans les richesses naturelles de l'Océan.

Après la cession de la partie méridionale de Sakhaline la question du droit de pêche sur le reste du littoral est rentrée pour le Japon dans une sphère d'intérêt exclusivement technique se bornant à la nécessité d'établir d'une manière toute à fait précise la mesure des droits spéciaux réservés à ses sujets.

Il n'en est pas de même pour la Russie, pour laquelle cette question représente un problème vital, dont la solution aura des conséquences pour toutes les possessions russes en Extrême Orient.

Il est donc évident que l'intérêt d'Etat ne permet pas à la Russie d'accepter des dispositions qui feraient obstacle à la colonisation de son littoral dans la Pacifique.

En poursuivant ce but fondamental, le Gouvernement Impérial reconnaît pleinement ses obligations vis-à-vis du Japon, stipulées à l'Article XI du Traité de Portsmouth, attribuant à ce dernier le droit de participer,

Le Gouvernement Impérial de Russie concède aux sujets japonais, conformément aux dispositions de la présente Convention, le droit de pêcher, de prendre et de préparer toutes espèces de poissons, d'animaux et de plantes aquatiques dans toutes les parties des eaux territoriales russes des Mers du Japon, d'Okhotsk et de Behring.

(附屬註(1))

第三回會議ニ於テハ露國無議國語等

Exposé des considérations principales, présenté par S. E. Mr. Goubastoff, Plénipotentiaire Russe dans la séance du Jeudi, 12/25 Octobre 1906.

Le Plénipotentiaire Russe, avant de procéder aux négociations ultérieures, trouve indispensable pour atteindre un résultat effectif d'exposer au Plénipotentiaire Japonais le point de vue du Gouvernement Impérial relativement au caractère général des dites négociations, ainsi que la valeur réelle des concessions admises par le Contre-Projet Russe.

La seule base de toute politique rationnelle à l'égard des possessions éloignées de la Métropole et se trouvant dans un état peu civilisé, est leur colonisation étendue et systématique par l'élément national dont

sous certaines conditions, à la pêche dans les eaux territoriales russes.

En conséquence, le Gouvernement Impérial dans son Contre-Projet n'a pas manqué de prendre en considérations la plénitude de concessions réellement indispensables aux pêcheurs japonais pour jouir de leurs droits conventionnels, mais il lui a été impossible de mettre quoi que ce soit dans les restrictions faites par les Plénipotentiaires Russes à la Conférence de Portsmouth pour la sauvegarde des intérêts vitaux de l'Empire.

En se conformant aux besoins réels de la pêche, plutôt qu'avec l'interprétation formelle du texte de l'Article XI du Traité de Portsmouth, le Gouvernement Impérial a déjà offert spontanément les concessions suivantes :

1°.—Vu les conditions spéciales de la pêche sur les côtes du Pacifique, la Russie est prête à accorder aux ressortissants japonais le droit de prendre à bail des lots fonciers le long du littoral, droit non prévu par l'Article XI du Traité de Paix et qui n'est admis dans aucune convention de pêche existante.—Ainsi dans l'entente coloniale Anglo-Française de 1904 il n'est

accordé aux sujets français que le droit de "s'abriter" dans les baies et havres.

2°.—Il est concédé aux sujets japonais un droit de préparer les poissons sur les lots susmentionnés et d'y ériger des magasins. Ce fait est déjà en soi même une atteinte directe aux intérêts politiques de la Russie.

3°.—Le Gouvernement Impérial concède aux pêcheurs japonais non seulement les droits de pêche des poissons, mais aussi la capture d'animaux invertébrés de mer, d'algues marines et ceci malgré le sens propre du mot "pêche".

4°.—Les pêcheurs japonais seront assimilés en droit aux entrepreneurs russes tenanciers à bail des lots de pêche dans les eaux territoriales, quoique cette faveur n'est nullement prévue ni par l'Article XI du Traité de Portsmouth, ni dans le protocole N° 7 de la Conférence.

5°.—Pour le cas où les conditions actuelles de cabotage sur le littoral russes du Pacifique, seraient modifiées avant l'échéance du terme de la Convention, le Gouvernement Russe assure aux sujets japonais le maintien, pour eux, du droit de communications entre les lots de pêche appartenant au même entrepreneur.

Il ne peut également consentir à étendre sur les sujets japonais tous droits dont jouissent nos pêcheurs et nos colons de même qu'à leur accorder le droits de cabotage sur notre littoral, pour les raisons générales ci-dessus énoncées.

Le Gouvernement Impérial s'est sincèrement laissé guider par une large conception des intérêts mutuels de la Russie et du Japon et par le désir d'arriver le plutôt possible à un arrangement stable.

D'après tout ce qui précède, le Plénipotentiaire Japonais peut facilement se faire une idée précise sur le caractère général du projet russe, ainsi que sur les principes que le Gouvernement Impérial croit devoir appliquer aux négociations actuelles dont il ne se cache point la grande importance.

Voilà pourquoi au début même des négociations le Gouvernement Impérial a cru nécessaire de formuler aussi clairement que possible et sans aucune arrière pensée toutes les concessions admissibles, aussi bien tous les points, sur lesquels nulle concession ne saurait être accordée.

dans les buts en rapport avec leur industrie, sous les conditions les moins restrictives.

Sans parler de nombreuses concessions d'importance secondaire, tel que la non-perception des droits d'exportation, l'abrogation des lois sur la nationalisation de la mains d'oeuvre, la communication à l'Agent Commercial du Japon, de toute disposition nouvelle concernant la pêche, le Gouvernement Impérial se propose.

6°.—d'édicter un règlement accordant aux sujets japonais le droit d'achat des poissons et le droit de louer à bail des lots fonciers pour la préparation des produits de pêche même dans la zone laissée en dehors de la présente Convention.

7°.—En dernier lieu, afin d'éviter à l'avenir toute possibilité de malentendu il est arrêté que dorénavant toutes les questions de principe, relatives à la pêche, devront être soumises à l'appréciation du Gouvernement Central et non de l'Administration locale.

D'autre part, le Gouvernement Impérial ne saurait admettre, ainsi qu'il est prévu dans le Projet Japonais l'exercice par les sujets japonais de leur industrie sans aucune restriction quant à son étendue et à son objet.

Après avoir indiqué, sans réserve, maximum de ses concessions, le Gouvernement Impérial croit devoir observer que son Contre-Projet a fait l'objet d'une étude approfondie, excluant l'idée de changement sur les questions de fond par suite de considérations ad hoc surgissant au cours des négociations.

Nous ne pouvons donc que confirmer encore une fois que le Gouvernement Impérial a la ferme intention de ne pas se départir des principes établis par l'Article XI du Traité de Portsmouth, sur lequel est basé le Projet Russe, transmis le 23 Septembre au Plénipotentiaire Japonais, ainsi que la "Notice Explicative" et formulés comme suit dans la dite notice :

1/—"La Russie s'engage à concéder au Japon certains droits de pêche à déterminer par un accord spécial, mais en aucune manière, les pleins droits, c'est à dire des droits pareils à ceux des sujets russes".—

2/—"La Russie s'est engagée à concéder au Japon certains droits de pêche le long des côtes des mers, elles-même, en mettant par là les anses et fleuves hors de cause."—

(註釋讀川)

露國務實ノ演說ヤル答弁演說書也

Réponse de S. E. M. Goubastoff, Plénipotentiaire Russe à propos des "Observations du Plénipotentiaire Japonais du 30 Septembre/13 Octobre 1906", faite dans la séance du jeudi 12/25 Octobre 1906.

Il résulte de la nouvelle rédaction de l'Article I de la Convention de pêche et des observations annexées à la note du 2/15 Octobre a. c., proposées par le Plénipotentiaire Japonais, que la divergence de ces nouvelles conditions avec les propositions russes consiste dans les deux points suivants :

1°, les régions soumises à l'effet de la présente Convention.

2°, l'interprétation du terme de pêche.

Pour ce qui concerne le I point, le Plénipotentiaire Russe se permet d'attirer à nouveau l'attention sur ce que le rayon d'action de la Convention a déjà été fixé par le Traité de Portsmouth, nommément, selon l'Article XI nous nous sommes engagés à concéder aux sujets japonais le droit de pêche dans les eaux territoriales russes des mers du Japon, d'Olkhoisk et de Behring, à l'exception des anses et fleuves.

ment,—ce qui d'après la réponse japonaise—n'aurait certes pas été l'intention de nos Négociateurs à Portsmouth.

Nous croyons de notre devoir d'attirer l'attention sur ce qui suit.—Premièrement, l'exclusion des anses de l'effet de la Convention n'empêche à rien les sujets japonais d'exercer leurs droits conventionnels : ainsi dans la partie méridionale de Sakhaline, malgré l'absence complète d'anses et le rectitude parfaite de la ligne du littoral, l'industrie de la pêche y est en pleine prospérité.

Quant aux intentions de nos Plénipotentiaires à Portsmouth, elles ne sont qu'absolument identiques aux vues actuelles de notre Gouvernement; celui-ci ne saurait reconnaître les droits de pêche aux sujets japonais que dans des limites garantissant notre propre industrie de pêche et notre colonisation. Il est évident que ce sont les considérations susmentionnées qui ont inspiré les Plénipotentiaires Russes à Portsmouth d'exclure de l'effet de la Convention les anses et fleuves et de remplacer l'expression de "plein droit de pêche", énoncée par les Plénipotentiaires Japonais, par l'expression "des droits de pêche", adoptée en-

林外務大臣時代 日露漁業協約 八六

Nous sommes heureux de pouvoir constater à cette occasion que le Gouvernement Japonais d'après sa note du 19 Mai (1 Juin) a. c. partageait entièrement notre point de vue, il y a peu de temps; sans entrer dans la substance de ce document nous nous bornons à la citation suivante: "les pêcheries du Liman doivent être comprises dans celles devant faire l'objet de l'arrangement prévu par le Traité de Paix, les dites pêcheries se trouvant le long des côtes des mers et non les anses et fleuves exclus par le Traité susmentionné".

En plus, les "observations japonaises" ne paraissent pas juridiquement assez fondées pour altérer la seule interprétation possible de l'Article XI du Traité de Portsmouth, c. à dire l'exclusion des anses et des fleuves.

Tout en reconnaissant dans ses "Observation" (annexées à la note du 2/15 Octobre année courante) le bien fondée de l'argumentation de la "Notice Explicative Russe", le Plénipotentiaire Japonais indique seulement que l'exclusion des anses et fleuves de l'effet de la Convention rendrait illusoirs les droits des sujets japonais, ou du moins les diminuerait considérable-

ment dans la rédaction définitive du Protocole. Il semblerait que ce fait indique l'intention bien déterminée du Gouvernement Russe à Portsmouth de ne pas concéder au Japon les droits qu'il demandait.

La crainte exprimée dans les "Observations japonaises" que sous prétexte de coïncidence des anses avec les lots et vice versa, les autorités locales russes n'éli minent les adjudicataires japonais,—n'est aucunement fondée; en réalité l'étendue normale de chaque lot maritime, selon la règle établie—qui entrera dans la loi—n'est pas assez considérable pour contenir une anse; il en résulte que les lots étant plus petits que les anses, ces dernières ne peuvent pas être comprises dans des lots. Les lots se trouvant en dehors des anses sont en tout cas adjudiquables aux Japonais, les lots entrant dans les anses sont réservés aux sujets russes.

L'exclusion des anses et fleuves établit en notre faveur un droit en vertu du Traité de Portsmouth et nous pouvons d'autant moins y renoncer que du point de vue de l'intérêt d'Etat, les anses et les fleuves servant de point d'appui à la colonisation russe du littoral et au développement de la navigation et de

l'industrie de pêche nationales. La concession des anses et fleuves à d'autres qu'à des colons russes serait par conséquent contraire aux intérêts économiques considérables que nous ne pouvons sacrifier.

En vue de ce qui précède nous considérons que le principe de l'exclusion des anses et des fleuves de l'effet de la Convention établi par le Traité de Portsmouth doit rester intact et qu'il ne devrait pas faire l'objet de discussion dans les négociations en cours.— Notre but ne peut pas être la revision du Traité de Portsmouth car une pareille revision dépasserait notre mandat.

Néanmoins, désirant atténuer en faveur du Japon les conséquences pouvant découler de l'interprétation du terme "anse", comme "petite baie de peu de profondeur", nous proposons, même au détriment de nos droits formels, d'attribuer au terme "anse" le sens du terme "inlet", employé dans la version anglaise du texte du Protocole de Portsmouth.

Ceci garantit nos intérêts dans une mesure équitable et donne en même temps aux sujets japonais la possibilité de réaliser leurs droits conventionnels à des conditions plus favorables; ce sera,—nous l'espérons

Cependant il ne faut pas perdre de vue que les matériaux cartographiques ne comprennent pas le littoral en entier. C'est ainsi que la côte de la mer d'Okhotsk à partir du Port d'Aayanne jusqu'à l'embouchure de la rivière Tigoule, et la côte de la mer Behring à partir de Cap Kamrchatka vers le Nord, ne sont pas suffisamment explorées et les cartes existantes de ces lieux ne pourraient servir à l'établissement de ces listes.

Par rapport à ces régions il faudrait donc se borner à établir en principe l'interprétation du tern "anses" ("inlets"); avec le temps et au fur et à mesure d'exploration de la côte il sera possible de dresser les listes des "anses" ("inlets") dans l'ordre précite.

Tel est notre avis définitif concernant les régions soumisees à l'effet de la Convention.

Passant au second point qui a également provoqué des contestations, c'est à dire à l'interprétation du mot "pêche" nous nous bornerons à la remarque suivante.

Nous regrettons de ne pouvoir accéder à l'opinion énoncée dans les "Observation japonaises", annexées à la note du 2/15 Octobre a. c., comme quoi l'interprétation du mot "pêche" dans le sens non seulement

fermement—la meilleure voie pour arriver sans retard à un accord complet.

Nous comprenons le terme "inlet" dans le sens de baie plus ou moins fermée, entrant plus avant dans le continent, par exemple,—Possète Baie, la baie de St. Olga, la rade Impériale, le havre de de-Castrie, Avatchinsky-inlet,—ainsi que des détroits d'une certaine étendue se prolongeant entre des terres fermes.

Pour éviter à l'avenir des malentendus possibles dans l'application du terme "anses" (comme le terme anglais "inlet") nous considérons de notre devoir de proposer au Plénipotentiaire Japonais d'élaborer actuellement en commun une liste des régions des côtes qui répondent à la signification du terme "anses" ("inlets") et qui, par conséquent, sont exclues de l'effet de la Convention.

A notre avis, il serait opportun de confier ce travail à une sous-commission composée de délégués russes et japonais. La sanction définitive des projets élaborés par cette sous-commission appartiendrait aux Plénipotentiaires de deux Pays.

Les cartes de navigation du littoral tant anglaises que russes pourraient servir de matériaux à ce travail.

de la "pêche des poissons", mais aussi de la capture de tous les animaux et plantes aquatiques en général soit régué dans le langage diplomatique et international. Pour se convaincre du contraire il est suffisant d'examiner attentivement l'ouvrage qui a servi de base à l'argumentation du Plénipotentiaire Japonais contre la "Notice Explicative Russe": La Fontaine—"Pascrisie internationale"—Berne, 1902.—C'est ainsi qu'à la page 618, rubrique CLXVI (du 8 Septembre 1900), il est question d'un arbitrage ayant pour but de justifier l'arrestation de schooners et d'un baleinier américains se livrant à la capture des étaries. Pour exprimer ceci on s'est servi des mots: "chasse aux phoques à fourrure",

Par conséquent le terme de "pêche" n'est pas usité dans le langage diplomatique pour la capture des espèces différentes de la faune maritime.—le langage diplomatique n'exclue pas la classification.

Le Gouvernement Russe a fréquemment négocié des affaires de "pêche" maritime; il a toujours cru devoir distinguer soigneusement la pêche des poissons de la capture des céphalopodes.

Selon toute apparence le Gouvernement Japonais

jusqu'à présent faisait la même distinction ; du moins dans les éditions officielles du Ministère de l'Agriculture et du Commerce-Tokio-1900—nous trouvons, par exemple, un chapitre spécial intitulé "la chasse à la loutre et aux phoques" (page 87).

Le droit international (Pradier-Fodéré: "Traité de droit international public européen et américain"—Paris-1891—section, Relations maritimes, v. V, § 244) établit la distinction de la "petite pêche" (pêche côtière) et la "grande pêche". L'objet de la pêche côtière se pratiquant le long des côtes, sont les poissons,—l'objet de la grande pêche—les baleines et autres cétacés. Il résulte de cette distinction que notre industrie de pêche à laquelle, conformément à l'article XI du Traité de Portsmouth, les sujets japonais seront admis, ne se rapporte qu'à la pêche côtière; donc la capture des mammifères en est exclue.

Quant à l'allégation des "Observations Japonaises", que le fait même de la concession du droit de pêche dans la mer de Behring implique également la capture des mammifères, qui formeraient—d'après les "Observations"—les richesses principales de ces parages, nous ne saurions lui accorder de portée pratique—la chasse

des phoques à fourrure et des castors étant également défendue aux sujets russes.

En vertu de ce qui précède, le Gouvernement Russe se croit en droit d'insister sur le fait que le Gouvernement Japonais tend attribuer au terme de "pêche" un sens trop étendu et qui ne lui correspond pas; l'interprétation la plus correcte est l'interprétation scientifique, fondée sur des données philologique historiques, et autres,—adoptée dans la "Notice Explicative Russe".

Ayant admis plus haut, dans l'intérêt des sujets japonais, une interprétation restreinte du mot "anses", le Plénipotentiaire Russe croit logique, par rapport au terme "pêche", de s'en tenir à l'interprétation précitée. Il considère qu'à cette condition seulement notre concession concernant le mot "anses" serait suffisamment compensée. Il propose donc au Plénipotentiaire Japonais de renoncer à leur interprétation du mot pêche. En échange il consent à donner au terme "anses" la signification du mot "inlets".

八七 明治三十九年十月三日 林外務大臣ヨリ 本野駐露公使宛 (電報)

第三回會議ノ結果ニ関シ回答ノ件

十一月二日發電 本電信案ハ南部樺太漁場ノ件ト同時ニ發電シタルモノニシテ本書ハ写トス

在露 本野公使 林 大臣

第一一三号

貴電第一七二号ニ関シテハ露国外務大臣ト御面談ノ結果御電報ニ接シタル後回訓スヘシ

八八 明治三十九年十一月九日 本野駐露公使ヨリ 林外務大臣宛 (電報)

入江ノ解釈ニ関シ請訓ノ件

十一月九日 后一二、四五 露都發
十一月十日 后一〇、二〇 本省着

林外務大臣 本野公使

第一七七号

「アンス」ニ関スル下調委員ハ未ク会合ノ運ヒニ至ラスト雖モ内々聞ク処ニ依レハ露国委員側ニ於テ最精密ナル海図ニ就キテ世界中ノ「インレット」及ヒ「アンス」ナルモノ

林外務大臣時代 日露漁業協約 八七 八八

ノ口幅、奥行、水ノ深淺等ヲ普ク調査シタル結果ニ基キテノ意見ニ依レハ「インレット」「アンス」ハ別物ナリ英語ニテ仏語ノ「アンス」ニ相当スヘキ言葉ハ「コウブ」ニシテ「インレット」ニアラス「ポーツマス」條約談判者ガ「インレット」ト「アンス」ノ二字ヲ同一ノ意味ヲ有スルモノノ如クニ解釈シタルハ一ノ誤謬ナリ「インレット」ハ北米及「アドリアテック」海最モ多ク太平洋中ニモ之アリ概シテ其特質ト見ルヘキモノハ入口カ狭ク大抵一二哩ヲ越ヘス奥行ハ深クシテ四五哩以上三十哩ニ達シ北米ニ在ルモノノ如キハ六十哩乃至九十五哩ニ達モ達スルモノアリ而シテ其内部ハ概シテサイテウケイヲ為セルモノナリ「アンス」ハ之ニ反シ入口広ク其幅奥行ノ深サニ超エ「インレット」ヨリハ広ク又「インレット」内ニ含マルル場合最モ多シ「アンス」ノ口幅ハ一哩以上五哩迄ニシテ其水ノ深ハ一定セス「アンス」内ニ於テ僅カニ数デシメートルノ所モアレハ又二十メートル乃至三十メートルノ所モアリ極東洋ノ海ハ一休ニ水深ケレハ從テ「アンス」内モ水深シ「アンス」ハ極東洋ニ最モ多ク又大抵「インレット」内ニハ無数ノ「アンス」ヲ含メリ露国委員側ニ於テハ此解釈ヲ基礎トシテ下調委員会カ一々「インレット」ト「アンス」トヲ海図

ノ上ニ於テ區別スルコトニ着手スルヲ適當ト考ヘ居レリ露
國委員側ニ於テ條約上ニ用ヒタル「アンス」ノ語ヲ「イン
レット」ノ語ノ翻訳ト認ムルヲ一ノ讓歩ト見做ス所以ハ若
シ「アンス」ノ文字ヲ殘置クトキハ假令之ヲ如何ナル少サ
キモノトスルモ前述ノ如ク大抵「インレット」内ニハ無數
ノ「アンス」アルカ故ニ此「インレット」モ又「インレッ
ト」外ニ在ル「アンス」モ皆讓与区域ヨリ除外セラルヘシ
之ニ反シ若シ「インレット」ノ意義ニ解スルトキハ「イン
レット」内ニ在ル「アンス」ハ除外セラルヘキモ其「イン
レット」外ニ在ル外ハ漁業ヲ許可セラレ得ヘキ区域ニ入ル
ヘントノコトナリ当方ニ於テハ貴電第一〇六号ニ依リ二十
噸説ヲ主張センカ為メ百方材料ヲ集メテ調査シ居レトモ有
力ノ根拠未タ見附カラス
就テハ露國委員ノ説ヲ反駁シテ我ニ都合好キ解釈ヲ取ラン
ムル論拠ノ有無本省ニ於テ御取調アリタク又二十噸説ヲ容
レシムル見込ナキニ係ハラス尙「アンス」論ノミ固守スル
コトハ却テ不利益ナラサルヤ否ノ点モ篤ト御詮議ノ上何分
ノ義至急御電訓ヲ乞フ
委員会ハ來週開會ノ筈ナリ

得ル限り調和的ノ方法ヲ取り諸般ノ未決問題ヲ終了シタキ
考ニ付日本政府ニ於テモ同様ノ精神ヲ以テ諸問題ヲ決定セ
ラレンコトヲ希望スト云ヘリ

既ニ往電第一一七号ヲ以テ申進置タル如ク「アンス」ノ件
ニ付テハ到底御下訓通ノ解釈ヲ承諾セシムルコト能ハサル
ヘシ且伝語ノ「アンス」ナル文字ヲ淺キ入江ト解スルハ誤
ニシテ稗書ニ「peu de profondeur」ト在ルハ奥行淺キト
ノ意味ニシテ水ノ深淺ヲ云フニアラス而シテ若シ「アン
ス」ヲ斯ノ如ク解スルトキハ沿岸到ル処「アンス」アラサ
ル所ナカルヘキニ付却テ我ニ不利益トナルノ虞アリ此点ハ
尙深ク御研究ノ上可成速ニ御下訓ヲ乞フ下調會ハ本週末又
ハ來週早々開會ノ筈ニ付其間ニ合フ様御訓令アリタシ又
「リマン」ノ問題ニ付テモ今ヤ露國側ノ論鋒ハ略ホ分リタ
ル次第ニ付之ヲ弁駁スル為メ必要ノ材料御電訓アリタシ閣
下ヨリ訓令達スル迄ハ本會議事延期スヘシ

九〇 明治三十九年十二月七日

林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛 (電報)

入江ノ解釈ニ関シ回訓ノ件

林外務大臣時代 日露漁業協約 九〇

八九 明治三十九年十二月十四日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛 (電報)

露國外務大臣ト会谈ノ結果報告ノ件

十一月十四日 后一〇、三九 露都發
十一月十五日 同五、五五 本省着

林外務大臣 本野公使

第一八四号

貴電第一一三号ニ関シ外務大臣ト会见ノ結果左ノ通り

一、採取物ノ点ニ付テハ絶対的ニ我要求ヲ拒絶セス未タ確
答ハセサレトモ多分鯨ハ承諾スヘシト思ハル

二、「アンス」ニ付テハ全然之ヲ我ニ与フルコトハ承諾セ
ス但兩國下調會ニ於テ充分研究ノ結果精々日本ノ不利益
ニナラサル様調和的ニ規定センメタシト云リ

三、「リマン」問題ハ「アンス」ノ解釈ニ依リテ之ヲ決ス
ルノ主意ニアラス之ハ川ノ解釈ニ依リ専門的ニ決定シタ
キ積ナレトモ未タ意見確定セスト答ヘタリ

外務大臣ト会见ノ際新條約談判萬一破談ニ終ルトキハ兩國
將來ノ關係上甚タ好マシカラサル結果ヲ生スルノ虞アルニ
付充分ニ同大臣ノ斡旋ノ勞ヲ取ラレンコトヲ希望スル旨懇
々及相談タルニ「イズウワルスキー」氏モ日本ト將來ノ交
際ニ付テハ是非共充分ニ懇親ノ關係ヲ維持シタキニ付出來

十一月十七日後七時四十五分發

在露 本野公使 林 大 臣

第一二五号

貴電第一七七号及第一八四号入江ニ関シ露國委員ハ「イン
レット」ハ入口狭ク一二哩ニシテ奥行四五哩乃至三十哩ニ
達シ北米ニ在ルモノノ如キハ六十哩乃至九十五哩ニ迄モ達
スルモノニシテ其内部ハ概シテ細長形ヲ為スモノナリトノ
説ヲ有スル趣ナルカ若シ右ノ説ヲ取ルトセハ本大臣ハ露領
沿岸ノ地形ニ鑑ミ「アンス」ノ語ヲ「インレット」ノ語ノ
翻訳ト認ムルヲ以テ我ノ利益ナリト認ム但シ該語ニ明確ナ
ル定義ヲ下シ置カサレハ後來數多ノ紛議ヲ惹起スヘキニ由
リ右露國委員ノ陳述ヲ基礎トシ別電ノ如キ定義ヲ下シ之ヲ
協約第一條入江ノ解釈トシテ協定セムコトヲ希望ス但シ此
際海図ニ就キ「インレット」ト「アンス」トヲ區別シ置ク
コトハ我ニ不利ナル事情アリト認ムルニ付之ニ関スル提議
ハ拒絶セラルヘシ

「リマン」ニ関シ黑龍江沿道總督ハ千九百年發布ノ黑龍江
下流漁業仮規則第一條ニ於テ漁業ノ区域ヲ定メ(イ)黑龍江河
口ヨリ同江「ウスリ」江合流点ニ至ル河域(ロ)「アムールス
キーリマン」ト称スル水域ノ二区ニ別テ明ニ黑龍江ト「リ

マン」トヲ區別シ且ツ「リマン」ハ韃靼海峽ノ北部ナル旨ヲ明記シアリ故ニ夫ノ露国地方官カ「リマン」ヲ沿海州漁業区域中ニ加ヘスシテ黒龍江下流ノ漁区中ニ加ヘタルカ如キハ単ニ行政上ノ都合ニ出テタルモノニシテ決シテ「リマン」ノ性質上河川ニ屬スルカ為ニアラサルナリ

九一 明治三十九年十二月九日 在浦潮川上貿易事務官ヨリ 林外務大臣宛

漁業協約ニ関スル新聞論調報告ノ件

附屬書一 十一月十五日刊行「ノオウオエ・ウレミヤ」社説訳

二 同右十一月十六日刊社説訳

公第三〇四号 十二月廿五日接受

本日接到シタル客月二十九日及三十日発売「ノオウオエ・ウレミヤ」新聞ハ其社説ニ「日本トノ談判」ト題シ二日ニ亘リ漁業談判ニ関スル論評ヲ試ミタリ初号ニ於テ漁業條約問題ト南樺太漁業権問題ハ全ク別個ノ事項ニ屬シ前者ハ國家的重要問題ナレトモ後者ハ単ニ個人ノ損害賠償事件ニ過キスシテ兩者ノ輕重大小ハ霄壤ノ差違モ當ナラストテ例

テ漁業ヲ當ミタル露国臣民カ被リタル損害ヲ清算スルコト是レナリ

此ノ二個ノ問題ハ外面上同シク漁業ニ関シ一ハ從來存在シタル露国人ノ漁業権ヲ終決シ一ハ日本人ノ為メ新ニ漁業ヲ創成スルモノニシテ一見同一性質ノ如クナルモ此外面上ノ類似ハ事件ノ実体ヲ混同スルヲ許サス若シ二個ノ問題カ単ニ類似ノ目的物ニ関スト謂フノ故ヲ以テ此問題カ關聯セルモノト見做スハ大ナル誤謬ヲラサルヲ得ズ

我カ極東沿岸ニ於テ日本人ニ漁撈権ヲ許スルノ問題ハ重要ナル國家的意義ヲ有セリ元始的露国領土内ニ無数ノ日本移民ノ根拠ヲ定ムルハ重大ナル紛糾ヲ惹起セサルヲ得ス此等日本人ハ自ら処スルコト正実ニシテ其殖民村落ヲ見ルコト侵略政策上ノ基点ノ如クナラストスルモ尙ホ無数ノ外国人ニ占有権ヲ与フルハ勢、警察上行政上ノ見地ヨリシテ幾多ノ困難ヲ發生スヘキモノト認メサルヲ得ス故ニ我輩ハ再ビ宣言セン日本人ノ漁業問題ハ最モ慎重ニシテ精密ナル審議ヲ要スト該問題ニ就テハ如何ニ微細ナル事柄ト雖トモ十年ノ後ハ爭議ノ危険分子トナラサルヲ保シ難シ

薩哈噠ニ於テ露国臣民カ會テ享有シ而シテ今日利用シ得サル權利ノ賠償問題ニ至リテハ全ク其趣ヲ異ニセリ此等私権

ニ依リ在本邦露国公使ヲ非難シ当局者カ之ヲ混同シ失敗ニ陥キラサランコトヲ注意シ而シテ次号ニ於テ本件ニ関シ過般來同新聞カ掲載シタル論説ニ對スル外務省弁明書ヲ全載シ更ニ在本邦露国公使カ南樺太漁業権問題ニ関シ執リタル処置上七項ノ疑問ヲ臚列シ之ニ對スル外務省ノ答弁ヲ求メ候

右ハ夙ニ御承悉ニ可有之ト存候得共不取敢為念別紙ノ通り全文切抜御参考迄差出候

右申進候敬具

明治三十九年十二月十九日

在浦潮

貿易事務官 川上俊彦(印)

外務大臣子爵 林 董 殿

註 1及2 二十五日及十六日ノ誤リナルガ如シ

(附屬書一)

十一月十五日刊行「ノオウオエ・ウレミヤ」社説訳

對日本交渉

吾輩ハ既ニ前日来ノ論説ニ於テ兩度迄外務省ニ於テ目下日本政府トノ交渉事件ニシテ重要ナル二個ノ問題アルヲ示セルカ即チ「ボーツマス」條約第十一條ヲ以テ日本人ニ許セラレタル漁業権ヲ規定スルコト及薩哈噠島南部沿岸ニ於

上ノ利益ノ範圍ハ最モ明晰ニシテ争フ可ラサルモノアリ日本人ハ此等ノ權利ヲ保護スヘキ義務アリ

而シテ此事タル何人カ亡失セシ所幾何ナリヤ何人カ何人ニ仕払ハサルヘカラスト云フカ如キ簡單ナル算術上ノ計算ニ過キス此等ノ爭議ハ何人ニ對シテモ死活問題ト称スヘキモノニアラズシテ今日之ヲ終結セバ爾後決シテ隣好国タル露日ノ關係ヲ混乱スヘキモノニアラズ

此兩問題ハ同一価値ノモノニアラズ是レ我輩ガ人為的ニ此兩問題ヲ綜合スルヲ以テ有害ナリト称スル原因ナリ我外交官ノ輕忽ナル総テ漁業ニ関スル爭議ヲ外交上ノ一事件トシテ之ヲ綜合セリ其結果タル双方ハ相互ニ交讓ニ重ヌルニ交讓ヲ以テ掛引スルニ至リ露国人ハ日本漁業者ノ權利ヲ増進シ日本人ハ掠奪セラレタル浦潮斯德商人ニ報酬ヲ授与スルカ如ク双方妥協的同意ニ歸着スヘシ此ノ如キハ露国ノ為メ全ク不利益ナルモノトス日本人ハ一回吾人ニ讓リ吾人ハ永久日本人ニ讓ラサル可ラズ何人カ毎年百留ノ收入ニ換フルニ現金百留ヲ以テセムコトヲ希望スルモノアランヤ斯ノ如キモノハ銳敏ナル經濟家ト称スルヲ得ヘキヤ

若シ我輩ノ知ル所ニシテ過タスンハ我カ外務省ハ即チ前記ノ誤謬ヲ為シツツアルナリ外務省ハ交渉ヲ容易ナランメン

カ為メニヤ二個ノ問題ヲ綜合シテ一個トナシ相互交譲ノ主義ニ依リ一般漁業上ノ談判ヲ為シツツアリ故ニ有識者カ結果ノ如何ヲ氣遣ヒ一時百萬留ヲ受領シ毎年百萬留宛ノ収入ヲ日本人ニ与フルナキヤヲ恐ルルモ亦故ナキニアラズ他日吾輩ハ如何ニシテ外務省カ關係官民ノ希望及強力ナル指導ニ反シ狡猾ニモ前記ノ兩問題ヲ綜合シタルカヲ評述スルコトアルヘシ是レ固ヨリ常ニ商人ナドノ利益ヨリハ自個ノ安寧ニ関シテノミ多ク配慮スル所ノ「バフメエテフ」氏ノ慣行手段ニ原由スルニ外ナラズ今ヤ吾輩ニ一ノ希望アリ即チ日本崇拜者ニシテ文書ノ往復ニノミ忙殺セラルル「バフメエテフ」氏ノ失敗ヲ速ニ恢復シ日本人ヲシテ総テノ露国人ヲ遇スルハ我有名ナル東京駐劄公使ノ如ク容易ナルモノニアラサルヲ知ラシメムト欲ス

(附屬書)

十一月十六日刊行「ノオウオエ・ウレーミヤ」社説
對日本交渉

夜ニ入り遅ク吾輩ハ外務省ヨリ左ノ通知ニ接セリ

近日漁業協約締結ニ関シ日本ト交渉ノ件ニ付「ノオウオエ・ウレーミヤ」ニ掲載セラレタル論説ニ関シ事實ノ説明ヲナスヘキ必要ヲ認ム

題ヲ分離スヘキ必要ト該兩問題ノ明カニ不権衡ナルヲ指摘セリ

外務省ハ吾輩ニ答フルニ左ノ三点ヲ以テス

- (一) 漁業協約談判ハ伯得堡ニ於テ外務次官之ヲ担当ス
- (二) 薩哈噠商人ノ事件ハ東京ニ於テ解決スヘシ且我公使館ハ最モ有力ナル助言ヲ當該露国臣民ニ与ヘツツアリ

(三) 兩問題ノ間ニハ外務省ハ何等ノ連絡ヲ設定セスト
「グバストフ」ト云ヒ「バフメエテフ」ト云ヒ均シク外務大臣ノ機關ナリ如何ナル時代ニ於テカ外務省ノ各別ナル機關カ各自其ノ外交政略ヲ施行スルモノアラムヤ且「グバストフ」氏ハ外務大臣ノ右手ニシテ「バクメエテフ」氏ハ「グバストフ」氏ノ直轄ニ屬スルモノナラズヤ若シ在東京公使ハ外務省ノ腕白小僧ニシテ實際左手タルノ職分ヲ務ムルトセハ右手タルモノハ何ヲナシツツアルカ外務省公報ノ所報最モ曖昧ヲ極ムト称スヘシ

吾輩ハ該問題カ如何ナル僥屬ニ委托セラレツツアルヤ又該事件ニ関スル書類ハ別個ノ事件トシテ各別ニ綴リ込マレアルヤ將又一事件トシテ同一ノ書類ニ綴リ込マレアルヤ又該フニハアラズシテ同一ノ外務大臣ガ同時ニ於テ兩問題ヲ処

該交渉ハ聖伯得堡ニ於テ開カレ専ラ全權委員ニ於テ担任セリ即チ外務次官及日本公使ニシテ露国側ニ於テハ我各省政府代表者參列ス且兩國ノ同意ヲ以テ談判ノ實質ハ今日ニ於テハ公表セサルコトト定メラレタリ

南部薩哈噠露国漁業者ノ權利ニ関スル問題ハ日本ニ於テ解決スヘキ管ニテ在東京我公使館ハ關係露国臣民ニ對シ最モ強盛ナル助力ヲ与ヘツツアリ

該兩問題ノ交渉ハ全ク独立ニ開カレ外務省ハ其間ニ何等相互ノ連絡ヲ設定セス

吾輩カ討究セントスル問題ハ如何ナルモノナルヤ茲ニ陳弁セントス聖伯得堡ニ於テハ露国極東領水ニ於テ日本人ノ漁業權ヲ確定スヘキ協約ノ締結ニ関スル交渉ヲ開キ同時ニ東京ニ於テハ從來南部薩哈噠ニ於テ特許ヲ得而シテ日本人ノ為メ掠奪セラレタル露国漁業者ノ賠償談判開カル我外交官ノ不謹慎ナル該兩問題ノ解決ヲ同時ニ為サムトス露国ハ之レカ為メ左ノ危険アリ即チ日本人ハ浦潮斯德商人ニ百万留若クハ百五十万留ノ金領ヲ附与スヘキ問題ニ関シ最モ少ニシテ著大ナラサル讓与ヲナシ其代償トシテ全沿岸ヲ永久羈束スルコトアルヘキ協約ニ関スル国家的問題ニ對シ広大ナル讓与ヲ要求セムトス是故ニ吾輩ハ昨日ノ社説ニ於テ兩問

理スルコトノ可否ヲ論セントスルニ在リ然ルニ外務省ノ答弁書ハ之ニ對シ何等弁明スル所ナシ

然ラバ何人ノ過失ニヨリ兩問題ノ討議ガ綜合シタルヤ外務省ノ通報ハ此点ニ関シ外交的沈黙ヲ守ルガ故ニ吾輩ハ更ニ同省ニ向テ事實上ニ関シ左ノ諸点ノ弁明ヲ求メムト欲ス

- (一) 薩哈噠營業者ハ「ポーツマス」會議ノ時ニ於テ既ニ其要求ニ関シ外交官ノ注意ヲ喚起シタリトハ真ナルカ
- (二) 該要求ハ在東京「バフメエテフ」氏ニモ提出セラレタリトハ真ナルカ

(三) 「バフメエテフ」氏ハ國際法ノ最モ初学ノ規定ニ反シ漁業者ヲ拒絶シ其出願書類ハ彼等ト共ニ薩哈噠ニ於ケル日本民政署ニ差シ向ケタリトハ真ナルカ

外務省ノ所謂「公使館ノ最モ強盛ナル助言」トハ此等ノ事ヲ謂フニアラサルカ

(四) 日本人ハ「バフメエテフ」氏カ差遣シタル漁業者ニ薩哈噠ハ入ルヲ許ササルノミナラス該漁業者カ代表者トシテ備入レタル日本人ヲモ追放シタリトハ真ナルカ

(五) 東京駐劄公使ハ如何ニ無学ナリトモ彼レガ駐劄スル国ノ法律ヲ知悉シ最モ嘲笑スヘキ要求ヲ露国臣民ニ提

出セサル様務ムヘキニアラサヤ

(丙) 日本外務大臣ハ公然日本ハ露國商人ニ對シ金錢ヲ報償スルニハ同意スヘキモ日本ハ彼等ノ權利ヲ認ムルニアラスシテ恩恵トシテ下付スルモノナリト宣言シタルトハ真ナルカ「バフメエテフ」氏ハ此現然タル「ボ！ツマス」條約違反ニ對シ抗議スル所ナクシテ放棄セシカ

(乙) 以上所説ヲ總合スル時ハ「バフメエテフ」氏ヲ以テ代表者トナセル外務省ハ薩哈噠島商人ニ關スル問題ヲシテ漁業協約問題ト連結セシメント欲スル最モ狡猾ナル日本人ニ一着ヲ輪シタル点ニ於テ過レルニハアラサルカ

是レ吾輩カ答弁ヲ求ムル所ノ問題ナリトス此等問題ハ秘密ノ事柄ニアラズ若シ外務省カ秘密談判ニ關セスシテ「バフメエテフ」氏ノ顯著タル失敗ニ關シテ通報スル所アルモ日本人ハ之ニ對シ決シテ不満ヲ抱カサルヘシ

第一三四号

貴電第一九四号ニ關シ

body of waters ノ次ニ penetrating into land ノ文字ヲ加ヘテ差支ナシ又 seagoing vessels ハ仏文リテ bâtiments de mer ト認メラルヘシ次ニ not being landlocked ハ仏文ニテ n'étant pas enserré dans les terres ト認メ然ルヘシ右ニ付テハ Bonfils 國際法第一卷第四四二頁第四四四頁参照アリタシ

九四 明治三十九年十一月二十六日

本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)

入江ノ説明字句ニ關シ請訓ノ件

十一月二十八日 後一〇、一 露都發
十一月二十九日 前一、〇 本省着

林外務大臣 本野 公使

第一九八号

貴電第一三四号ニ關シ御説明ノ意味ニテ not being land-locked ナル字句ヲ入江ノ定義中ニ入ルコトハ本官ハ不
必要ナラント思考スルガソレトモ別ニ之ヲ必要トセラルル
深キ理由アラハ御示シアリタシ「ボンヒス」國際法(當館

林外務大臣時代 日露漁業協約 九四 九五 九六

九二 明治三十九年十一月二十六日

本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)

入江ノ説明文ニ關シ請訓ノ件

十一月廿六日 後七、三〇 露都發
十一月廿七日 前九、二五 本省着

林外務大臣 本野 公使

第一九四号

貴電第一二四号ノ提議ヲ下調ヘ委員會ニ提出セシメントスルニ付 body of waters ノ次ニ penetrating into continent ノ文字ヲ加ヘ又 seagoing vessels ヲ vessels of high sea ナル意味ニテ仏文ニ翻訳シタシ差支ナキヤ又貴電中 not being land-locked トハ如何ナルコトヲ意味スルヤ仏文ニハ如何ニ翻訳スヘキヤ折返シ御電訓アリタシ下調ヘ委員會ハ二、三日中ニ開ク答ナリ

九三 明治三十九年十一月二十六日

林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛(電報)

入江ノ説明文ニ關シ回訓ノ件

十一月二十八日後二時五十五分發

在露 本野 公使 林 大 臣

ニアルハ千九百〇五年版)御示シノ「ページ」ニハ本件ニ關シ何等参照スヘキ事柄ナシ

九五 明治三十九年十一月二十九日

林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛(電報)

電文正誤通報ノ件

十一月廿九日前十一時五十分發

在露 本野 公使 林 大 臣

第一三六号

往電第一三四号末段「ボンフェイス」ハ「ナイス」ノ誤

九六 明治三十九年十二月二日

本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)

入江ノ定義調査委員ノ會議報告ノ件(一)(二)

(一)

十二月二日 前二、四五 露都發
十二月二日 後九、〇〇 本省着

林外務大臣 本野 公使

第一九九号

「アンス」ノ定義ニ関スル下調委員会ハ十一月十七日及三十日開会セリ第一回ニハ露国委員ヨリ意見ヲ述ヘ地理学上ノ根拠及多數ノ実例ニ依リ「アンス」ハ奥行淺ク半円形ヲ為スニ至ル迄ノ海岸ニ於ケル凹ミニシテ大小種々アルコトヲ示シ精細ナル地図ニ就テ見レハ殆ント総テノ海岸線ハ灣内ト外海トヲ間ハス「アンス」ト岬ヨリ成リテ直線ヲ為スモノハ甚ク少シ其結果東西比利亞沿岸ニ於テ日本人ニ漁業ヲ許ルスヘキ場所ハ殆ント無キニ至ルヘシ去レトモ「ポーツマス」ニ於テ兩國全權ハ英文ニテ「インレット」ナル語ヲ用ヒタルニヨリ明カナルカ如ク前述ノ意義ニテ入江ナル語ヲ用ヒタルニ非サルヘキヲ以テ一步ヲ譲リ主トシテ「インレット」ナル語ニ依リ決セント欲シタリトテ北米、英吉利、「アドリアチック」海、朝鮮沿岸等ノ地図ニ依リ數個ノ実例ヲ挙ケ「インレット」ハ多クハ細長ク深ク陸中ニ入込ミタルモノナレトモ又開口ト奥行ト略ホ同様ノモノモアリ内海ノ入口ヲ指スコトアリ漏斗ノ形ヲ為セルモノアルコトヲ示シタル(後左?)ノ定義ヲ下セリ

a bay more or less closed, penetrating deeply into continent, corresponding to German scientific word bucht.

林 大 臣 本 野 公 使

第一九九号(続)

之ニ對シテ露国委員ハ定義漠然タルヲ以テ正確ニ哩數ヲ定メ置クコトニハ異議ナキモ日本ノ委員ノ定義セル哩數ノ定メ方ハ何等根拠ナキヲ以テ承諾シ難シ又此定義ニ依レハ實際一モ除外セラルベキ入江ナキ結果トナルベキガ日本ノ意見ニテハ如何ナル入江カ除外セラルルカ例ヲ挙ゲラレタシト述ベタルニ付我委員ハ定義ノ意義ニ付テハ充分説明シ且議論ニ応ズベキモ地図ニ就キ摘要ヲ示スコトハ為スコトヲ得ズト答ヘタリ尙ホ露国委員ハ右定義ノ末段「江灣ノ特性ヲ有セズ通例船舶ノ碇泊ニ用ヒラレズ」トアル文句ハ何等理由ナキ人爲的制限ヲ以テ有リト有ユル入江「インレット」ヨリ除カムトスルモノニシテ此ノ如キハ實際上「ポウツマス」會議録ノ効力ヲ無視セントスルモノナリトテ頗ル不平ヲ稱ヘ此末文ノ制限ハ提案ヨリ撤回セラレタシ然ラザレバ該提案ニ答フルコトスラ甚ダ困難ナリト云ヒテ暗ニ談判ヲ中止セントスルノ気色ヲ示シタリ我委員ハ提案ニ對スル議論若クハ對案ヲ提出セバ充分ニ研究スルコトハ辭セザルモ提出シタル案ヲ撤回スル如キハ断然為スコト能ハズトテ種々議論ノ末露国委員ハ哩數ノ定メ方ニ付テハ次回ノ会

右ノ定義ニ依リ「インレット」及「インレット」ノ形ニ近キ「アンス」ヲ除外シ其他土着ノ人種及移住民保護等特別ノ理由ニ依リ除外スヘキモノアリ其結果ハ該方面ノ海岸延長約三分二丈ク日本人ノ漁業權ヲ設ケ得ル処トナルナリト説明セリ我委員ハ之ニ答フルニ先チ委員等一己ノ参考トシテ此定義ニ依リ除外セラルル場所ノ実例ヲ示サンコトヲ求メタルニ露国委員ハ日本海沿岸露領地図ヲ出シテ右ノ諸理由ニ依リ除外セントスル地点ヲ一々示シタリ第二回ノ会見ニ於テ我委員ハ先ツ本委員会ノ任務ハ「アンス」ナル語ノ定義ヲ定ムルコトノミニアルコトヲ注意シ次ニ「アンス」ナル語ニ広漠ナル意義ヲ付シ漁業權讓与ヲ殆ント有名無実タラシメントスルコトハ「ポーツマス」全權ノ主意ニ非サリシトノ露国委員ノ説ニ同意スル旨ヲ述ヘ扱テ露国委員ノ述ヘタル「インレット」ナル語ノ定義ハ無味漠然トシテ實際ノ適用ニ當リ争論ノ原因トナルヲ以テ一層之ヲ明瞭ニナスノ必要アル理由ヲ説明シテ貴電第一二六号ノ定義ヲ提出セリ(續ク)

(11)

十二月二日 前 三、五〇 露都築 後 一、四〇 本省着

見ニテ對案ヲ出スベキ旨ヲ述ヘ江灣云々ノ点ニ付テハ一応全權ニ伺ヒ出タル後何分ノ回答ヲナスベシト答ヘテ本会見ヲ終了セリ尙ホ会見終了後ニ露国委員「ブラジニコフ」ガ内々落合ニ語リタル所ニ依レバ露国側ニ於テハ此問題ノ始ル以前ヨリ條約及會議録ノ解釈実地ノ情形等ニ付充分ニ研究ヲ尽シ本年五月既ニ日本ニ讓ルベキ部分ト露国ノ留保スベキ部分トヲ判然定メ置キタルコトナレバ今後仮令ヘ日本側ヨリ定義ノ定メ方又ハ其他ノ手段ヲ更ヘテ談判スルトモ露国ハ右ノ決定ヲ充分ニ守ルベキ決心ニシテ又其理由モ充分ニ備ハリ居ルコトナレバ次回提出スル定義モ第一回ノ会見ニ於テ露国ノ提出シタル定義ヲ詳細ニスル迄ニシテ哩數等ハ學術上及實際上ノ根拠ニ依リ右ノ決定ヲ害セザル様立ツルコト聊モ困難ナン依リテ可成ハ速ニ地図上ニ就キテ一除外地圖ヲ定ムルコトニ日本政府ノ同意ヲ得タシトノコトナリ尙ホ第一会見ノ節露国委員ヨリ落合ニ話シタル所ニ依レバ露領全沿岸ノ約三分ノ二ニ於テ日本臣民ニ漁業ヲ許シ又其範圍内ナレバ漁業者ニ於テ適當ト認ムル場所ニハ特別ノ故障ナキ限り出願次第新漁区ヲ開クコトヲ許可スル積リナル由。」

九七 明治三十九年十二月三日 本野駐露公使ヨリ 林外務大臣宛(電報)

入江ノ定義ニ関スル露国政府ノ意向ニ関シ

請訓ノ件(一)(二)

(一)

十二月二日 后七、二〇 露都発
三日 后五、五〇 本省着

林外務大臣 本野公使

第二〇〇号

往電第一九九号ニテ御承知ノ通り最早下調会前途ノ模様モ略ホ豫想シ得ルノ時機ニ達シタルニ依リ漁業條約談判全体ノ成行ニ関シ左ニ本官ノ意見ヲ具シ閣下ノ御訓令ヲ乞フ本問題ノ決定ニ関シテハ露国当局者ハ最早其意見ヲ確定シ居リ或ル程度迄ハ日本ニ漁業權ヲ讓ル覺悟ナレトモ其程度以外ニハ到底讓歩スルノ意思ナキモノト判断セサルヲ得ス一、第一回下調会ニ於テ露国委員ノ下シタル入江ノ定義ノ説明トシテ我委員ニ示シタル地図ニ抛リ其意向ヲ窺フニ從前ヨリ既ニ存在セシ漁区ニシテ入江ノ内ニアル漁区、土民及移住農民保護ノ用ニ供スル漁場、並ニ軍事上必要ノ処ハ之ヲ日本ニ讓ラサル部類ト定メ居リ即チ全沿岸ノ

(二)

十二月二日 后六、三〇 露都発
三日 前九、三〇 本省着

林外務大臣 本野公使

第二〇〇号(続キ)

二、「リマン」問題ニ付テハ未タ公然ノ會議ニ於テ論弁シタルコトナケレトモ今日迄当局者ト交渉其他ノ消息ニ依リ推測スルニ「アムウル」河口兩岸ノ漁区ハ絶対的ニ拒絶スル考ナルカ如シト雖其対岸「サガレン」区ノ方ハ或ハ日本ニ讓ルヤモ測リ難シ

三、採取物ニ付テハ鯨ハ讓ルヘキ内意ナリト云フ尙此外新漁区並ニ製魚場ノ設定等ニ関スル便益ハ相応ニ之ヲ(ヨドグ?)スル考ナルカ如シ

前陳ノ通り本條約ニ関スル露国ノ態度ハ稍ヤ明白ニ相成リタルニ付テハ最早此上多ク弁論ヲ重サヌルモ実益上ニ関シテハ大差ナカルヘシト信セラレ右ノ次第ニ付最早帝國政府ニ於テモ向後ノ態度ヲ確定シ或ハ一応談判ヲ中止スルカ又ハ大体露国ノ対案ヲ承諾シ其範圍内ニ於テ可成其利益ニナル様談判ヲ進行セシムルカ何レカニ決スルノ外他ニ策ナカルヘシ露国ノ真意未タ判然セザリシニ依リ往電第一七二号

約三分ノ一丈ハ専ラ露国臣民ノ為メニ之ヲ留保シ置ク積リナルカ如シ但シ若シ地図又ハ他ノ方法ニ依リ實際其面積ヲ定ムル場合ニハ多少我ニ讓歩スルヤモ測リ難ケレトモ大体ニ於テハ先ツ其意見ヲ變更セサル可シト思ハル此次ノ下調会ニ於テ露国委員ハ「アンス」ノ定義ニ付修正案ヲ提出スル管ナレトモ同委員カ既ニ漏シタル意見ニ依リ之ヲ察スルニ地図ニ於テ除外シアル場所ニ略ホ適合スル丈ノ定義ヲ提出スルニ過サルヘシ就テハ定義ノ如何ニ拘ラス詰ル処露国カ譲与スヘシト定メタル区域以上ニ漁場ヲ得ルコトハ先ツ困難ナリト覺悟セサルヘカラス然ルニ假令露国ノ案ヲ大体承諾スルト仮定スルモ露領漁場ノ情況ニ通セサル本官等ニ於テ露国カ譲与セントスル漁場ノ善悪ヲ地図ニ就テ判断スルコトハ到底難事ナルニ依リ本官ノ意見ニテハ露国ノ提案ニ対シ最后ノ決定ヲ下ス前ニ兎ニ角露国委員カ地図ニ於テ除外シタル部分ヲ示シタルモノヲ写取り之ヲ閣下ニ送り閣下ノ御判断ニ仰クコト必要ナリト信ス

貴電第一二五号ニテ御訓令ノ次第モアルニ付更ラニ何分ノ御訓令ヲ俟ツ

ヲ以テ具申シ置キタル次第モアリタレトモ露国政府ニ於テ不充分ナカラモ或ル程度マテハ相応譲与ヲ為スノ意思ヲ示シタル以上ハ此際談判ヲ中止スルハ不利益ナリト信スルニ付若シ御異存ナクハ露国委員カ専ラ露国人民ノ為メニ留保セントスル場所ヲ示シタル地図御一覽ノ上閣下ニ於テ最后ノ決定アルマテ漁業條約第一條ハ未定ト致シ他ノ條項ヲ議定シタシ

右全体ニ関シ至急何分ノ御電訓ヲ乞フ

九八 明治三十九年十二月七日 本野駐露公使ヨリ 林外務大臣宛(電報)

入江問題ニ関シ請訓ノ件

十二月七日 后四、四〇 露都発
八日 前七、二七 本省着

林外務大臣 本野公使

第二〇四号

往電第一九九号ニ関シ

下調会次回ノ会见ハ本月十日開キ度旨露国委員ヨリ申込来レリ該会见ニ於ル我委員ノ方針ヲ決セシムル為メ往電第二〇〇号ニ対スル電訓ハ可成右期日前ニ達スル様御發送アリ

タシ尙ホ次回会见ノ節露國委員ハ我議ノ末段(港灣ノ特性ヲ有セサル)云々ノ理由ヲ再ヒ質問スヘク又其調査シタル所ニ依レハ我提議ノ哩數ニ當嵌マルヘキ入江ハ西比利亞ノ東岸ニ於テハ唯一箇所アルノミニシテ而モ(港灣)云々ノ制限ニ随フトキハ此入江モ除外セラレサルコトトナル由ニテ我提議ニ依リ果シテ除外セラルヘキ実例アリヤ否ヤヲモ質問スヘキ模様ナリ右ニ対スル答弁ノ材料アラハ折返シ御電訓アリタシ

九九 明治三十九年十二月八日 林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛 (電報)

入江問題ニ関シ回訓ノ件

十二月八日午后四時發

第一四一号

在露 本野公使 林外務大臣

貴電第一九九号第二〇〇号及第二〇四号ニ関シ貴見ノ如シ「インレット」ノ件ハ露國委員ヨリ提出ノ地圖到着ノ後ニ識ハコトトシ此際貴官ハ協約中他ノ條項ヲ議定スルコトニ尽力アリタシ

take advantage of these conditions in order to exercise pressure on Russia and it is impossible to foresee how far the Japanese intend to go in their demand. It then proceeds to discuss Article 11 and 12 of the Portsmouth Treaty in a tone more or less favorable to Russia. Russia is thus confronted with difficulties and any assistance, she could look for, would depend on the attitude of other great powers. When Japan drew sword against Russia, she enjoyed sympathy of the whole world, but since then things have undergone great change and some great powers view, with uneasiness, Japanese tree grow up to heaven. In case of a new conflict Japan would no longer be so free and unrestrained as she had been in the last war. Even in England and America, public opinion has changed and as the Japanese are undoubtedly aware of it, it is to be hoped that they would not strain the bow to much.

Local Anzeiger states that while Russia finds extensive economic demands of Japan as unacceptable, Japan will not cease to demand them which are

一〇〇 明治三十九年十二月九日 井上駐独公使ヨリ
林外務大臣宛 (電報)

日露條約ニ関スル独逸新聞論調報告ノ件

Copy.

Berlin, Dec. 9, 1906, 2:15 p.m.
Rec'd Dec. 10, 1906, 4:20 p.m.

Hayashi,

Tokio.

No. 124.

Novoye Vremiya having published statement to the effect that negotiations with Japan not only in regard to fishery question in which Japan is raising large demands but also in regards to treaty of commerce proceed slowly and not without difficulties and only more conciliatory attitude on the part of Japan could bring about close of the negotiation; above has been telegraphed here and has led Berlin papers to publish comments. In a reading article headed "Russia and Japan", Vossische Zeitung states that, while Japan continues to make formidable preparations on land and sea and peace and patriotism reign in the country, Russia is defenceless in the Far East and complete disorder prevails within her Empire. The Japanese

necessary for her future development, judging from her policy hitherto. It can not be however accepted that Japan would consider the present difficult situation of Russia as a sufficient ground to indulge in policy of forbearance. If one takes the continued increasing military preparations of Japan into account one can not help having impression that the nation has not given up hopes for new military success. With regard also to the school question in United States, Japanese Government would have to bear in mind that they have to do not only with the President and his friends but with the whole American people so that it might turn out that his pro-Japanese proposals in this message might simply remain as such. On the other hand as the Japanese emigration to America could not be easily restrained, conflict would be sure to increase in future.

Inouye.

一〇一 明治四十二年二月三日 本野駐露公使ヨリ 林外務大臣宛

入江下調委員会経過ノ要領報告ノ件

- 附屬書一 「アンス」及「インレット」ノ文字ニ関スル我意見書
- 二 「アンス」及「インレット」ニ関スル我方ノ定義
- 三 「アンス」及「インレット」ニ関スル露国側ノ回答
- 四 入江所在表

機密第一号漁業條約談判下調委員設定ノ件及同委員会経過ノ要領ハ豫テ電報ニ及ヒ置キタル義ニ有之即チ露国委員カ去ル十一月十七日ノ第一回会合ニ於テ別紙附屬書第一号ノ通り「アンス」及「インレット」ノ文字ニ関スル我意見書ヲ提出致シ之ニ説明ヲ加ヘタリ之ニ對シテ我委員ハ第二回ノ会見ニ於テ別紙附屬書第二号ノ通り此方ノ定義ヲ提出シタル処第三回会見ニ於テ露国委員ハ更ニ別紙附屬書第三号ノ通り回答シ来レリ即チ露国委員ノ新ニ提案シタル「インレット」ノ定義ハ其ノ入口ノ幅カ横幅ノ最モ広キ部分ニ及ハサルカ若クハ然ラサル場合ニハ奥行ノ最モ深キ部分ニ越ヘサル所ノ入江ヲ云フト云フニ在リテ哩數ノ極度ハ入口四十五哩奥行百五十哩迄ト為シ居レリ此ノ如キハ「インレット」

以上ノ讓歩ハ定義論ニ於テ之ヲ為スコト困難ナルヲ以テ先ツ其留保セントスル場所ヲ内々当方ニ開示スヘキニ付之ヲ査閲シタル上更ニ討議ヲ重ネラレタシ其場所表ニハ所謂「インレット」ノ部類ニ屬スルモノノ外入口ノ閉シタル入江タル理由ニ依リ及軍事上ノ必要又ハ移住民及土著人種保護ノ為メ露国ニ保有ヲ必要トスル所ノ場所若干條約ヨリ取除キ度キト云フヲ以テ各種別ヲ立テ表ニ認メ送付スヘシト答ヘタルニ付我方ニ於テハ単ニ我委員等一箇人ノ參考トシテ右場所表ヲ一覽ノ上改メテ私談ヲ継続スヘキ旨ヲ答ヘ置キタル処一兩日前々記ノ表ヲ送り来リ其節「インレット」ノコエフヒシエント即チ入口ノ幅又ハ奥行トノ比例ヲ更ニ一ト二以上迄讓歩シテ計算ヲ立テタル旨申添ヘ候尤モ此表ハ単ニ「ブラジニコフ」ナル箇人ヨリ友誼上落合ナル箇人ニ送り来リタルモノニシテ何等公然ノ性質ヲ有セス又是ニ對シテ私談会ニテ落合ノ吐露スル意見モ全ク箇人ノ資格ナルコトヲ明ラカニ為シ置キテ上ノコトナレハ帝國政府及全權ハ勿論下調委員会ニ於ケル我委員ヲモ拘束スルモノニ無之候得共此表ハ本件ニ関シ重要ノ關係ヲ有スルモノニシテ且貴電第一五七号御申越ノ次第モ有之ニ付不取敢此

ナル語カ通常有スル意義ニ合セサルノミナラス露国委員カ是迄説明シタル所ノ所謂「インレット」ノ形状ナルモノニモ符合セザル義ニ付到底同意ヲ表シ難キ旨ヲ明言シタリ而シテ相方討議ノ上相方ノ意見甚タシク隔絶シテ妥協ノ望ミ甚タ覺東ナシト雖モ尙ホ論議ノ余地ナキニ非ルコトヲ認メ下調委員会ハ追テ継続スルコトアルベキ旨ヲ約シテ一旦延会シ更ラニ我委員ヨリ相方公然ノ資格ヲ離レテ腹藏ナク懇話ヲ尽シナハ多少妥協ニ近クノ方法ヲ發見スルヤモ計リ難キニ付全然一箇人トシテ会合談話ヲ致サンコトヲ申出シタル処露国委員ニ於テモ至極同意ナリシニ依リ更ニ日ヲ改メテ私談会ヲ開キ我委員ハ露国委員ノ定義ニ関シ其不穩當ト認ムル理由數多ヲ挙ケ長時間ノ談論ヲ以テ縷々再考ヲ促シタルニ終ニ露国委員ハ一步ヲ譲リ最初「インレット」ノ定義トシテ口巾ト其奥行ノ割合ヲ一ト一以上ト提出シタルヲ改メテ一ト一半ト為スコト及哩數ノ制限ヲ低下スルコトヲ承諾シタリ然レトモ之僅ニ一步ノ讓歩ニシテ尙ホ「インレット」ナル語ノ通常有スル意義ニ異ナルコト甚タシキヲ以テ我方ニ於テハ承諾スルコト能ハサル旨ヲ答ヘ置キ其後再度ノ私談会ニ於テ再度懇談シタル結果露国委員ハ其「インレット」ノ定義條文穩當ナラサルコトヲ認メタルモ前記

場所表及当方ニ於テ之ヲ記入シタル地図別添進候此表ニ對シテハ尙ホ当方ニ於テ詳ニ審査ヲ加ヘタル上次会ノ私談会ニ於テ其不穩當ト認ムル廉々ニ付協議ヲ尽シ公然ノ定義トシテ顯ルル以前及フ限り其數ヲ減セシムルコトヲ努ムルト同時ニ之等ノ場所ニ関スル先方ノ申條ヲ明ニ為シ置キ以テ他日ノ談判懸引ヲ便利ナラシメムコトヲ目的トシテ尽力スル筈ニ有之候右不取敢申進候敬具

明治四十年一月二日

在露

特命全權公使 本野 一郎 (印)

外務大臣子爵 林 董 殿

追テ別添場所表及地図ニハ各場所ニ就キ一々番号ヲ符シ置キタルヲ以テ今後電報ニ於テ各場所ヲ挙クル必要アル場合ニハ番号ヲ以テ之ヲ示スコト致シ度ニ付右了承相成度又本信御接手ノ上ハ其旨電報ニテ御一報相成度シ此段申添候

欄外付記

本信ハ本野公使ヨリ電信符号ヲ以テ送致シ来リタル文書ヲ解訳シタルモノナリ一月二十八日安達

(附屬書1)

「トハント」及「トハノハント」ハ文字ヲ關スルニ其ガ意見請

S. PERSONNEL.

ANNEXE N° 1.

SOUS-COMMISSION

chargée de déterminer le sens du mot Anse

Séance du samedi 4/17 novembre 1906.

La séance est ouverte 4 h. p. m.

La séance est levée 6 h. p. m.

Définition du terme „anse“, présentée
par des délégués russes.

„Anse“ dans sa signification primaire veut dire
manche d'un vase antique d'une forme :

En conséquence le terme „anse“, devenu géographique
et pris dans son acception figurée, signifie „petite
baie de peu de profondeur“ (c'est-à-dire—pas pro-
fondément avancée dans le continent).

La signification plus exacte et plus juste découle
d'un examen détaillé de la littérature géographique-
scientifique.

Il résulte de cet examen que le mot „anse“, pris

petites courbes (baies) de forme d'arc du cercle, mais
avec cette différence qu'elles sont comparativement
plus étendues (au point de vue de leurs cordes) et
moins profondes (au point de vue de leurs flèches).
En somme, leur coefficient est considérablement moins
grand. Ce sont des rivages plats. Des caps les séparant
sont beaucoup moins aigus.

Pour les détails nous renvoyons Messieurs les Délé-
gués aux ouvrages très connus dans la matière :
Lapparent—, Leçons de géographie“ 1891, Penck—
„Morphologie der Erdoberfläche“ 1894, Weule—, Bei-
trage zur Morphologie der Flachküsten“ v. VI—VIII
1891 (Zeitschrift für Wissenschaftlichen Geographie),
von Richthofen—, Führer für Forschungsreisende“
1886, Philippson—, Ueber die Typen der Küstenform“
(Sonderdruck aus der von Richthofen Festschrift)
1892, etc.

Donc,—comme un fait général,—on constate que
tous les rivages, soit ouverts soit fermés, ou inclus
dans les golfes isolés, sont engendrés par lesdites cour-
bes (baies) de peu de profondeur ayant forme d'arc de
cercle.

A mesure qu'on augmente l'échelle d'une carte géo-

comme terme géographique, a le sens tout à fait net,
à savoir „petite baie ayant une côte haute ou basse
dont la configuration s'approche de la forme d'arc de
cercle, mais ne dépasse jamais la moitié du cercle“.
La forme pareille des anses est donnée—comme règle
générale—par son origine.

En effet, tous les rivages maritimes,—même les rectili-
gnes, après leur origine, une fois creusés par l'action
érosive de la mer, subissent, selon les lois élémentaires
mécaniques, un changement sensible; la ligne des
rivages devient une série de petites courbes (baies) de
la forme d'arc, séparées les unes des autres par des
promontoires plus ou moins aigus. Les courbes (baies)
composant les rivages ne s'avancent pas considéra-
blement dans le continent: la proportion entre leur flèche
et leur corde ne dépasse généralement pas un coeffi-
cient 0,30.

Dans certains cas les rivages subissent une autre
évolution; les vagues de mer détruisant une partie du
littoral (falaises) construisent, de débris arrachés, un
dépôt (remblai) dans une autre partie.

Par conséquent, dans ce cas, ainsi que dans le cas
précité, des rivages sont formés par une série de

graphique employée, ces particularités se manifestent
le plus clairement possible. Ainsi, il arrive souvent
que sur les cartes géographiques à petite échelle les
rivages, ayant l'air presque rectiligne, se représentent
composés d'un nombre de courbes mentionnées (baies)
sur les cartes correspondantes, mais à grande échelle.
Là les parties composant le littoral peuvent être exa-
minées facilement.

Les rivages rectilignes ne s'y trouvent que par ex-
ception.

Les courbes (baies) engendrant les rivages—pour ainsi
dire „des éléments initiaux du littoral“—sont appelées,
chez les géographes français, par le terme „anses“
(voir Lapparent, op. cit. p. 264) les géographes alle-
mands les désignent par le terme „Bai“ (voir Penck,
op. cit. v. II, p. 550). Dans certains cas le terme
anglais, correspondant au terme français anse, est
„cove“, quoique dans d'autres cas on désigne par ce
terme des baies plus avancées dans le continent.

En examinant les matériaux cartographiques—objet
direct de notre tâche—nous ne manquerons pas de
constater que, sur les cartes géographiques françaises,
le terme „anse“, très usité, correspond assez bien à

la définition scientifique précitée, quoique il soit à remarquer que dans la pratique on applique le terme susmentionné dans le sens plus étendu, c'est-à-dire on appelle souvent „anse“ les petites baies d'autre origine et plus avancées dans le continent. De nombreux exemples sont à la disposition de Messieurs les Délégués (les cartes géographiques de France, de l'Adriatique, de Corée, d'Australie etc.).

Il résulte de l'examen des exemples démontrés que les anses, mises sur les cartes, sont en général des baies de peu de profondeur d'une différente étendue : ainsi, l'é tendue de la corde l'Anse de Yoville est de 8,7 milles marins, tandis que celle de l'Anse du Roze n'est que de 0,7 milles marins. Il arrive que le terme „anse“ soit attribué aux baies assez considérables, très avancées dans le continent et fermées, comme l'Anse d'Aiguillon, l'Anse d'Auberlach. (Voir sur les cartes).

Les cartes géographiques mentionnées peuvent nous donner une meilleure illustration pour la thèse établie plus haut—que chaque rivage est composé d'une série d'anses ; de plus, ce n'est pas seulement le littoral ouvert qui est entrecoupé par des anses séparées,

Sans aucun doute ni S. E. M. Komoura, ni S. E. M. Witte, celui-ci plaidant notre cause par tous les moyens, n'ont eu l'intention d'accorder au mot „anse“ sa signification propre. La traduction de ce terme par le mot anglais „inlet“, ayant une signification bien différente de celle du mot anse, nous l'indique clairement.

En effet, le Plénipotentiaire Russe en proposant dans sa note responsive d'accorder aux sujets japonais des droits de pêche le long des côtes de mer elles-mêmes, par ce fait a réservé pour nous toutes les régions se trouvant hors de la ligne des côtes de mer elles-mêmes, à savoir toutes les régions plus ou moins fermées et avancées dans le continent, ainsi que les fleuves.

Le mot comme les autres ne se trouvant point le long des côtes de mer elles-mêmes, mais en dedans du continent sont ipsofacto absolument exempts de l'effet de la Convention. Ce sont, en même temps, des réserves les plus importantes pour développement de notre propre industrie.

Voilà pourquoï, dans les négociations en cours, nous avons porté plus d'attention au terme inlet, comme au terme qui correspond le plus—selon nous—à la

mais il en est de même quant à l'intérieur des golfes et baies, bien que les anses s'y trouvant n'y sont quelquefois pas marquées par des noms propres.

Il va sans dire que plus l'échelle des cartes employées serait grande, plus nous trouverions d'anses. (Des exemples ont été démontrés sur les cartes géographiques).

De tout ce qui précède, il n'est pas difficile de saisir la juste signification du terme „anse“, employé dans la note responsive du Plénipotentiaire Russe à la Conférence de Portsmouth et inséré dans le Protocole N° 7.

On pourra se rendre compte des conséquences qui en découlent : si on s'attache strictement à cette signification, il est évident que les régions soumises à l'effet de la Convention n'auront pas une grande étendue et seront limitées par des rivages plus ou moins rectilignes. Mais nous nous croyons en devoir d'avouer que ces rivages ne sont pas nombreux, à quelques exceptions près. (Des exemples).

Donc, les droits, que la Russie est prête à accorder aux japonais, devraient être restreints, même dans une mesure plus considérable que les intérêts propres de la Russie ne le demandent.

substance de l'Article XI du Traité et du Protocole N° 7, et aux intérêts réciproques des deux pays.

Désirant arriver à une entente complète, nous sommes prêts, même au détriment de notre droit formel, à ne pas insister sur l'interprétation à la lettre du texte des documents officiels de la Conférence de Portsmouth et à renoncer en faveur du Japon à la plupart des anses. Cependant, nous désirons nous réserver une certaine partie des anses nettement spécifiée : celle des anses qui composent en somme des baies plus ou moins isolées, s'approchant, en général, du type d'inlet.—Ceci est notre principe fondamental exposé en grands traits. Certes, il est possible, dans quelques cas exclusifs, que nous procédions à quelques exceptions qui s'en sont motivées pour chaque cas particulier.

Vu que la partie des anses concédée en faveur du Japon représente la plus grande partie du littoral (plus de 2/3 de la côte, comme l'indiquent les cartes transmises aux délégués japonais), nous ne pouvons y voir qu'une simple compensation, d'autant plus que dans certains cas nous concédons au Japon des baies devant être exclues par leurs particularités géographiques.

La partie ainsi spécifiée plus haut doit en tout cas rester complètement en dehors de la pêche japonaise pour des raisons que nous trouvons superflu de répéter (voir «L'exposé des considérations principales») et notre «Réponse» du $\frac{12}{25}$ octobre a. c.).

Selon nous, il serait impossible de trouver une autre solution de cette question ; celle proposée par S. E. M. Motono ne peut, à notre avis, être acceptable pour nous, parce que, au lieu de résoudre la question, elle la supprime simplement, et, au lieu de concilier des intérêts réciproques, elle crée une situation non prévue par le Traité de Portsmouth.

Nous sommes maintenant devant un nouveau terme géographique—inlet—dont nous allons définir le sens.

La juste définition du mot «inlet» peut être élucidée sans difficulté par l'analyse des matériaux cartographiques.

Le terme inlet est assez répandu dans toutes les parties du monde. On comprend le plus souvent sous ce terme des baies fermées, plus ou moins avancées dans le continent, par exemple : Nasparr-inlet, Pedder-inlet, Sook-inlet, Muir-inlet, Cook's-inlet et plusieurs autres se trouvant sur le littoral du Pacifique de

aux golfes d'une forme d'entonnoir qui sont la prolongation naturelle des vallées de fleuves—estuaires, comme : Barry-inlet (Angleterre), Ping-yang-inlet (Corée), Ashby-inlet (Corée).

D'après nos matériaux cartographiques la définition la plus usitée est celle-ci : baie plus ou moins fermée, entrant profondément dans le continent,—ce qui correspond au terme scientifique allemand «Bucht».

(海軍部刊)

「インレット」及「ペンシメント」ヲ國ハニ密ニテノ長編

S. CONFIDENTIEL.

ANNEXE N° 2.

SOUS-COMMISSION

chargée de déterminer le sens du mot Anse.

Séance du vendredi 17/30 novembre 1906.

La séance est ouverte 3 h. 20 p. m.

La séance est levée 6 h. 35 p. m.

Réponse des Délégués Japonais, lue par

Mr Ochiai.

Les Délégués Japonais ont examiné avec toute l'attention qu'elle mérite la définition donnée par M. M. les Délégués Russes au mot anse à la séance du 4/17

l'Amérique du Nord ; Kerka-inlet sur le littoral de l'Adriatique (Dalmatie) et enfin Douglas-inlet (Corée).

La largeur d'entrée d'un inlet a une dimension 0,5 mil. (Kerka-inlet) à 48 mil. (Cook's-inlet). La dimension habituelle d'entrée est de 1 à 5 milles.—Leur profondeur dans le continent est de 2 m. (Nasparr-inlet) à 200 m. (Cook's inlet).

Quant à sa configuration, il a plutôt la forme d'un fiord, c'est à-dire la profondeur d'un inlet dépasse toujours sa largeur d'entrée de plusieurs fois.

Quelquefois un inlet a la forme d'entonnoir («trichterförmig» allem.), comme Muir-inlet, où la largeur et la profondeur sont égales (5 milles).

D'autrefois un inlet a la forme d'un golfe de dimension assez considérable, comme Cook's inlet.

Les inlets situés sur le littoral de l'Océan Atlantique de l'Amérique du Nord sont d'un type un peu différent.—Là on applique ce terme aux entrées étroites dans un grand golfe avec des côtes basses, par exemple—Little-inlet, East-rockway-inlet, New-inlet, Johns-inlet, se dirigeant vers la très large Great South Bay.

Il n'est pas rare que le terme inlet soit appliqué novembre, ainsi que la note confidentielle qu'ils ont bien voulu leur communiquer ultérieurement sur ce sujet.

Avant d'aborder le fond de la question, la Délégation Japonaise croit nécessaire, pour éviter tout malentendu entre les deux Délégations, de déterminer nettement l'étendue de la mission qui est actuellement confiée à notre Sous-Commission.

A la séance du 12/25 octobre, M. le Plénipotentiaire de Russie ayant proposé de nommer Sous-Commission chargée de déterminer en commun une liste des régions des côtes qui correspondent à la signification du terme anse, M. le Plénipotentiaire Japonais lui a répondu qu'il ne pouvait pas adhérer à cette proposition et qu'à son point de vue, il était absolument nécessaire de déterminer tout d'abord le sens du mot anse avant de procéder à un pareil travail et que, par conséquent, il accepterait la nomination d'une Sous-Commission, si cette Sous-Commission était uniquement chargée de déterminer le sens du mot anse. M. le Plénipotentiaire de Russie ayant accepté cette proposition, M. Marumo et moi-même avons été désignés à faire partie de cette Sous-Commission.

Les pouvoirs de notre Sous-Commission pourraient, si M. M. les Plénipotentiaires le jugent nécessaire, être étendus ultérieurement; mais pour le moment nous devons nous borner à la définition aussi exacte que possible du sens du mot anse employé dans le Protocole de Portsmouth,

Nous sommes convaincus que c'est ainsi que M. M. les Délégués Russes ont compris la nature de leur mission, puisque à la séance de la Sous-Commission du 4/17 novembre, ils nous ont exposé leur opinion sur le sens du mot anse, comme l'atteste d'ailleurs la note confidentielle qu'ils ont bien voulu nous communiquer.

L'étendue de nos attributions étant ainsi nettement définie, nous croyons à peine utile d'ajouter qu'il ne nous appartient pas de juger, à plus forte raison de nous prononcer sur les propositions qui ont pu être présentées par M. M. les Plénipotentiaires Japonais et Russes à la Conférence elle-même.

M. M. les Délégués Russes, après une étude approfondie et consciencieuse sur le sens des mots anse et inlet, à laquelle la Délégation Japonaise se plait à rendre un sincère hommage, sont arrivés à cette con-

En effet la définition russe nous dit: baie plus ou moins fermée,—mais alors quel genre de baies devratt-on comprendre parmi les anses (nous emploierons désormais ce mot comme correspondant au mot inlet de l'anglais, parce qu'il n'est plus de confusion possible entre ces deux mots) qui doivent être exclues des régions de pêche des sujets japonais. Il peut y avoir des baies dont l'entrée est extrêmement large et d'autres moins larges. Il en est de même quant à l'en-

foncement de l'anse. La définition russe nous dit: entrant profondément dans le continent. Que veut dire profondément? D'après les exemples cités dans la note russe, il y a des anses qui ont plusieurs dizaines de milles marins de profondeur, d'autres sont de profondeur beaucoup moins grande. Lesquelles de ces anses, les plus profondes ou les moins profondes, seront exclues des régions de la pêche réservées aux Japonais? Avec une telle définition on arriverait nécessairement à une détermination arbitraire des régions de pêche. Sans préjuger de la solution de la question de savoir si, en dernier lieu, on dresserait d'après des matériaux cartographiques les régions de pêche susmentionnées, question qui ne peut être décidée

clusion que les Plénipotentiaires Japonais et Russes à Portsmouth ont eu en vue une et même chose en employant le mot anse, mais que sans aucun doute «ni S. E. M. Komura ni S. E. M. Witte n'ont eu l'intention d'accorder au mot anse sa signification propre. La traduction de ce terme par le mot anglais inlet, ayant une signification bien différente de celle du mot anse, nous l'indique clairement».

Selon M. M. les Délégués russes, le sens que les Plénipotentiaires Japonais et Russes ont dû vouloir accorder au mot anse est plutôt celui du mot anglais inlet, c'est-à-dire: une baie plus ou moins fermée entrant profondément dans le continent.

D'une manière générale, en l'absence d'une donnée précise sur l'intention des Parties Contractantes à Portsmouth, nous pouvons admettre en principe que les Plénipotentiaires Japonais et Russes ont pu attacher au mot anse le sens précité.

Néanmoins, nous ne pensons pas que cette définition soit suffisamment claire et nette pour pouvoir servir de critérium à déterminer quelles sont les régions qui seront, ou ne seront pas réservées à la pêche pour les sujets japonais.

que dans la Conférence des Plénipotentiaires, on peut se demander comment on pourrait le cas échéant procéder à la détermination des dites régions avec une définition aussi vague et incertaine, comment procéder notamment pour les régions dont les cartes détaillées n'existent même pas actuellement?

Ce que, selon nous, la Sous-Commission doit rechercher, c'est un critérium qui puisse servir de base à la détermination future des régions qui seront exclues ou réservées à la pêche des sujets japonais, critérium ne laissant aucune place à des malentendus futurs. Pour ce faire, la Délégation Japonaise estime qu'il n'y a d'autre moyen que de déterminer dès à présent la distance en milles marins de l'ouverture de l'anse, ainsi que sa profondeur. En procédant ainsi, on pourra avoir un critérium qui servira de base à la détermination des régions de pêche.

S'inspirant de l'intention probable des Plénipotentiaires Japonais et Russes à Portsmouth, qui, de l'aven même de M. M. les Délégués Russes, ont voulu accorder aux sujets japonais des droits de pêche réels et effectifs, les Délégués Japonais ont l'honneur de soumettre la définition ci-dessous du mot anse.

Une masse d'eau longue et étroite s'enfonçant dans le continent et dont l'entrée ne dépasse pas deux milles marins, et ayant une profondeur de plus de quinze milles, n'étant enfermée dans les terres, ne possédant pas les caractères essentiels d'un port ou d'un havre et n'étant pas habituellement utilisée au mouillage des bâtiments de mer.

(註譯釋川)

「トランス」及「ヤンナム」ヲ關スル範圍圖回條

S. CONFIDENTIEL.

ANNEXE N° 3.

SOUS-COMMISSION

chargée de déterminer le sens du mot Anse.

Séance du lundi 27 novembre/10 décembre 1906.

La séance est ouverte 2 h. m.

La séance est levée 5 1/2 h.

Nouvelles propositions russes.

Le Plénipotentiaire Russe, prenant en considération le fait que le Protocole N° 7 de la Conférence de

ment du degré de son précision, en établissant, d'un commun accord, une liste spéciale des parties de notre littoral qui correspondent au sens du terme inlet. Nous disposons de données suffisantes pour établir une pareille liste du moins pour les régions du littoral les plus grandes et les plus importantes du point de vue de la pêche.—La définition du mot inlet donnée par nous, quoique conçue dans les termes généraux, est illustrée d'une quantité d'exemples pris dans toutes les parties du monde; elle est, en outre, fixée par la liste dont une partie (Vladivostok—Amour) a été communiquée, à titre d'information, à la Délégation japonaise et nous paraît, par conséquent, avoir toute la précision nécessaire et suffisante pour être appliquée dans la pratique. Néanmoins et cédant, en cela, au désir des Délégués japonais, nous consentons à amplifier, autant que faire se peut, cette définition, quoique nous considérons ce travail comme superflu, étant donné que la définition, que nous allons proposer, est basée sur la même liste que notre première définition.

Nous comptons donc au nombre des baies fermées (inlets) les baies dont la largeur d'entrée est inférieure à leur plus grande largeur, ou, dans le cas contraire,

Portsmouth limitait le rayon d'action de la Convention de Pêche aux eaux territoriales le long des côtes ouvertes.—«Le long des côtes elles-mêmes»—proposa dans la Note du 12/25 octobre de donner au terme d'«anse» le sens du terme «inlet».

Dans ses Observations,—la Délégation japonaise acquiesce en principe à une pareille interprétation, mais ne se contente pas de la définition du terme inlet donné par la Délégation russe à la séance du 4/7 novembre, ne la trouvant pas suffisamment précise et considérant qu'elle pourrait amener des malentendus dans l'avenir.

Nous devons remarquer à ce sujet, que quelle que soit la précision de la définition du terme géographique susdit en théorie,—son application dans la pratique peut toujours provoquer une série des malentendus, lesquels, en fin de compte, ne sauraient être dissipés que par une levée instrumentale de presque tout le littoral. Inutile d'expliquer que cette manière de résoudre la question mettrait pour longtemps obstacle à toute industrie de pêche autant japonaise que russe.

Il n'y aurait, selon nous, qu'une issue possible,—ce serait de fixer la définition du terme inlet indépendam-

ne dépasse pas leur profondeur maximale. Quant à la dimension des inlets de notre littoral, elle ne dépasse pas les limites ordinaires de l'«inlet» en général, limites établies par nous au cours de la première séance; ainsi, leur largeur d'entrée ne dépasse pas 45 milles mar. et leur profondeur ne dépasse pas 150 m. m.—

En outre, nous croyons devoir ajouter que le terme d'inlet est ordinairement appliqué aux estuaires des fleuves; cependant, ceux-ci peuvent, du reste, être simplement considérés comme des fleuves eux-mêmes.

En analysant la définition proposée par les Délégués japonais du terme en question, nous voyons qu'elle se compose de deux parties; nous ne pouvons délibérer que sur la première partie de cette définition, parceque la réserve conçue dans la seconde partie—«n'étant enfermée dans les terres, ne possédant pas les caractères essentiels d'un port ou d'un havre et n'étant pas habituellement utilisée au mouillage des bâtiments de mer»—touche à un domaine qui nous est étranger et n'a de rapport ni avec l'Article XI du Traité de Portsmouth, ni avec le terme géographique d'inlet dont la définition est notre seul but au moment donnée.

Pour ce qui concerne la première partie de la for-

mule proposée par la Délégation japonaise, à savoir «une masse d'eau longue et étroite s'enfonçant dans le continent et dont l'entrée ne dépasse pas deux milles marins et ayant une profondeur de plus de quinze milles»—nous devons faire remarquer qu'elle nous paraît établie sur une base plutôt arbitraire.

En vertu de quelles considérations la Délégation japonaise a-t-elle fixé, à l'encontre des règles ordinaires, la largeur d'entrée de l'inlet au maximum de 2 milles marins et sa profondeur au minimum de 15 milles?—Pour quelles raisons un inlet, ayant une largeur d'entrée de 2 m. et une longueur de 15 m. serait-il un inlet, selon la définition de la Délégation japonaise? Par contre, un inlet n'ayant qu'une largeur d'entrée d'une (1) mille marin et une longueur de 7,5 milles marins, ne serait pas considéré comme tel?—Le caractère spécifique de l'inlet est établi principalement par sa forme, par le rapport de ses parties entre elles, et non par les dimensions absolues; il peut y avoir des inlets de grande et de petite dimension.—Les Observations ne contiennent, nous le regrettons, aucune explication et celles-ci ne nous ont point été données verbalement au cours de la séance du 17/30 novembre.

que que pareil procédé ne peut amener qu'à des résultats négatifs.

Quant à la définition, donnée par la Délégation japonaise, elle ne peut être acceptée ni dans son entier, ni dans ses parties, car elle ne saurait résister à la critique, au point de vue géographique, et porte une grave atteinte à nos intérêts et nos droits.

(附屬書四)

入江ノ所在表

機密第一号附屬

訳文

(i) 「インレット」ト解釈ヲ下シ得ヘキ入江北方ヨリ始ムレン

- 一、聖ラウレンチヤ入江
- 二、メチグメンスカヤ入江
- 三、コニアム(ペンケグネイ)
- 四、アボレーシエン(コロガン)
- 五、ルメレート
- 六、ブタコーワ(ツカアチエン)
- 七、ラトマーノフ港(キグアン)

Le sens fondamental de la formule examinée et ses principes ressortent d'eux-mêmes et sans difficulté, si l'on applique cette formule à la qualification des différentes baies de notre littoral. Ainsi, nous voyons que sur toute notre côte, dans toute sa longueur de plusieurs milliers de marins, il ne se trouve qu'une seule baie.—La baie de Merchigné (près de l'Océan du Nord),—laquelle, aux termes de la définition japonaise, entrerait dans la catégorie des inlets et par là serait exclue de l'effet de la Convention.

Du reste, en appliquant la définition japonaise dans son entier, sans exclure sa seconde partie, cet «inlet», unique dans son genre, n'en serait plus un, car les navires américains le visitent souvent pour faire le commerce avec les tribus Tchukches!

Il nous paraît donc que la Délégation Japonaise dans un seul et même document commence par nous reconnaître le droit d'exclure les inlets de l'effet de la Convention, conformément au Traité de Portsmouth, puis qu'elle termine en donnant une définition de ce mot qui implique une négation complète de ce droit d'exclusion, accordé par le Traité.

Nous considérons de notre devoir de faire la remar-

八、プロウイデーニエ入江

九、聖クレスト

例外 十、アナドイルスキーヤ入江^{グバ}

十一、アナスターシヤ

例外 十二、(a) 聖ビヨートル

(b) 聖パーウエル

(c) ナターリヤ

例外 十三、グルボーカヤ

十四、ラウロフ

十五、カラীগ

十六、モンジョーワヤ

十七、ベチエウインスカヤ

十八、アワチンスカヤ

例外 十九、(a) ウイリユーチンスカヤ

(b) 「ジローワヤ」ヲ含ム

例外 二十、(a) アホムテン

(b) 「チヒルカヤ」ヲ含ム

「ボドカゲルナヤ」河口ヨリ「アヤン」港ニ至ル沿岸ハ未測但シ「ペンジンスカヤ」入江ノ部分
 「マメート」岬平行線ヨリ)二十一ハ「インレ

ツト」ト解釈ヲ下シ得ヘキモノトス

二十二、聖ニコライ湾

二十三、バイカル湾

二十四、ヌイスキー湾

二十五、ナビリスキー湾

二十六、モソローフ入江

二十七、クレストーワヤ入江

二十八、スタルク入江

二十九、ワニン入江

三十、インペラートルスカヤ、ガーワニ

三十一、フアリシーワヤ

三十二、テルネイ

三十三、聖ウラヂーミル

(g) 閉塞湾

北方ヨリ始ム

三十四、シリユーボチナヤ、ガーワニ

三十五、オーゼロ、チュレーニエ

三十六、シエスチフートーオエ、オーゼロ

三十七、パロンコルフ湾ノ北部

十五、カラーガ(インレット)

キー岬以北)

四十六、ツグレエキー湾ノ一部(「クライニー」岬

以南)

四十七、ウリバンズスキー湾ノ一部

四十八、ギリヤク岬乃至スフレン岬沿岸

四十九、スウエートラヤ河ノ入江

五十、クズネツオーワヤ河ノ入江

五十一、アムグ河ノ入江

五十二、タワイザ入江

五十四、ルインダ湾

五十五、ヤヂイ、ヘ湾

五十六、オプリーチニク湾

五十七、アゴベ湾

五十八、チュチュ、ヘ湾

五十九、リヤフレ湾

六十、タポイザ

六十一、エフスターフィヤ

六十二、プフスン

六十三、ワンチン

六十四、タウヘ

十七、ベチエウインスカヤ(インレット)

十八、アナドイルスキーヤ入江(インレット)

九、聖クレスト(インレット)

十八、アワチンスカヤ(インレット)

三十八、ウエリーキー、クニヤージ、コンスタンチ

ン(インレット)

二十三、バイカル湾(インレット)

三十九、デ、カストル

二十八、スタルク(インレット)

二十四、ヌイスキー(インレット)

二十五、ナビリスキー(インレット)

四十、ステアステエ湾

(h) 国防上必要トシテ除ク湾

三十九、デ、カストル

四十一、「フレデリクス」入江ヲ含ム(閉塞湾)

四十二、聖オリガ湾

四十三、ピョートル、ウエリイキー湾

四十四、ポシエツト湾

(i) 移住民及異種人ノ為メ留保スル湾

四十五、ギンギンスカヤ入江ノ一部(ワルハラムス

六十五、ワレンチン

六十六、キート岬及クラリスヌイ岬間ノ入江

六十七、プレオブラジエーニエ入江

六十八、スドコフスキー岬乃至オストロウヌイ岬ノ

湾

六十九、メルコウオードナヤ入江

七十、ウスペーニエ入江

七十一、トハドゴウ入江

一〇二 明治卅年三月三日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)

漁業協約談判ニ関スル非正式会議ノ結果報告ノ件

二月 二日 後五、一〇〇 露都発
三日 後一、〇〇〇 本省着

林外務大臣 本野公使
第一二号

機密第一号ニ関シ其後兩國委員ノ私談会ニ於テ「インレツト」ニ関スル談判ヲ継続セシムルト同時ニ便宜上双方全權ノ同意ヲ以テ「リマン」問題及ヒ採取物ノ種類ニ関スル間

題ヲモ討議セシメタリシカ數回ノ会見ニヨリ是等諸問題ニ對スル露國ノ意向及ヒ讓歩セシメ得ヘキ程度モ明瞭トナリタルヲ以テ互ニ私談會ノ結果ヲ報告セシメタル上一月二十九日本官露國全權ト非正式會見ヲ行ヒ右ノ結果ニ付更ニ討議ノ上一応別電第一三號ノ如ク取纏メタリ第一「アンス」ニ付先方ノ意向ハ機密第一號ニテ申進置タル通りナリシカ種々議論ノ結果殖民ノ為メ留保ノ場所ハ全然之ヲ表中ヨリ削除スルコトヲ承諾セシメ又入口ノ幅ト與行ノ比例ハ一ト二ノ比例ヲ強硬ニ主張シ到底是以上讓与セシムルノ見込殆ント無カリシニ漸クノコトニテ別電ニ記入ノ例外的入江七個所ヲ表中ニ記入スルコトヲ條件トシ右ノ比例ヲ一ト三マデニ引上クルコトヲ承諾セシメタルヲ以テ是以上讓歩セシムルコトハ殆ント見込ナシ右ノ讓歩ニ依リ留保入江ノ數ヲ減スルコト三十四ナリ

第二「リマン」ニ関シテハ露國側ニ於テ「リマン」ハ河川ノ一部ナルコト且「入江」トモ見做スコトヲ得ルトノ理由及露國ノ殖民政策ニ至大ノ影響ヲナスノ理由ニヨリ頗ル強硬ニ除外ヲ主張シ我方ニ於テ數回討議ノ結果樺太沿岸ダケ日本人ニモ漁区ヲ与フルコトヲ承諾シタルシカ其後尙懸議ノ結果滿々別電ノ如クナスコトヲ承諾セシメタリ尤同地方

Hayashi.

Tokio.

no. 13.

(1) Regarding the question of anse; term anse or inlet shall be understood in the sense of bays whose profoundness (length of penetration) exceeds width of entrance more than three times and a list of such bays where fishery will not be granted to Japanese subjects will be drawn up in conformity with this notion. Nevertheless seven other bays not corresponding with the above notion shall be included in the list as exceptional and be indicated at the end (exception ?) of that list. Apart from this category, there shall be some bays which are closed and not situated on the coasts of seas themselves and some others reserved for strategic reasons where fishery shall not be allowed to Japanese subjects.

(here follows a list of 38 bays which according to numbering of my 機密第一号 are as follows:)

Inlets; 1, 2, 3, 4, 5, 8, 9, 12b, 15, 17, 18, 21, 22, 23, 24, 25, 27, 28, 30, 32 and small inlet on northern coast of Preobrajenie Bay (67).

Bays exceptional: 10, 12a, 13, 19, 20, 29 and 33.

ハ露國漁民養成地ナルヲ以テ同地方ニ限り雇漁夫ハ露國人ニ限ルトノコトヲ絶對的條件トシテ別電ノ通り承諾シタルモノナルヲ以テ此上讓歩セシムルコトハ先ツ見込ナシト云ハサルヘカラス尙此提議ハ三個ノ問題ニ関スル露國全權最終ノ讓歩トシテ提議セシモノニシテ且各事項互ニ關聯シテ交渉ノ結果纏メタルモノナレハ此内ノ一二事項ヲ捉ヘテ更ニ修正ヲ求ムルトモ之ニ応スルノ途ナキ旨ヲ断言シタルコトナレハ右提議中甲所ニ讓歩シテ乙所ニ要求スルノ態度ニ出ナハ或ハ變更ヲ交渉スルノ余地アルヘキモ左モナクハ大体ニ付諸否ヲ定ムルノ外途ナシトセサルヘカラス就テハ已ムヲ得サル理由アルノ外ハ大体右ノ通り御承認相成タシ尤本件愈々決定ノ後形式ヲ如何ニスヘキヤハ更ニ請訓スル積ナリ

一〇三 明治三十年二月三日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)

「アンス」問題ニ関シ報告ノ件

Petersburg, Feb. 2nd. 1907. 5.20 a.m.
Rd. Tokio, Feb. 3rd. 1907. 4.20 a.m.

Closed Bays: 34, 35, 36, 37, 38, 40.

Bays reserved for strategic reasons: 39, and 41, 42, 43, 44.

Outside localities above indicated Japanese subjects can acquire on their demand fishery lots anywhere whatever along the coasts of Japan, Okhotsk and Behring Seas, subject to the laws and regulations in force or which may in future be passed concerning breeding and protecting and the control of fishing industry and for other matters relative to fishing industry in the regions where fishery shall be granted to them in virtue of the fishery convention. It is a matter of course that the Japanese subjects shall be subjected to such laws and regulations only as far as these same laws and regulations will be applicable to Russian subjects themselves having acquired fishery lots in such regions.

It is further understood that Russian Government reserve to themselves, besides the application of the second paragraph of Article XI of the Treaty of Peace, right of granting fishery rights to colonists who may happen to establish themselves in localities where fishery lots in favour of Japanese or Russian

fishery entrepreneurs do not exist. It will be same for native races, but Russian Government engage not to grant such rights to colonists or native races during the whole term of the present convention in localities where fishery lots will once have been created. To avoid any future misunderstanding about the meanings of the term colonists, the laws or regulations relating thereto shall be communicated confidentially to the Japanese Plenipotentiary. But generally speaking, character of colonists is afforded according to Russian law, only to the individuals and their family personally engaging in fishery and not having recourse to fishing laborers.

Concerning northern coasts of the sea of Okhotsk from the mouth of River Podkaguempher to Port Ayan of which there exist no detailed charts, proportion of one to three above described shall be observed for the determination of inlets in which fishery shall not be granted to Japanese subjects.

(2) Word "fishery right" shall comprise that of capturing all sorts of fishes, plants and animals of sea except fur seals and sea otters.

(3) Fishery lots of Liman of Amour can be acquired

ト五ノ比例ナレハ之ヲ「インレット」中ニ入レ得ヘキニ却テ之ヲ例外ノ部ニ入レタル理由如何次ニ閉塞入江表中ニ掲ケタル水面ハ第三七号ノ外何レモ入口一ニ対スル奥行三ノ比例ヲ超ユルニ因リ「インレット」表中ニ掲クルモ差支ナキニ拘ハラス此等ノ為ニ特別ノ表ヲ設クル理由如何又第一号第九号第二一号第一〇号及第四四号ノ水面ハ其入口何レモ一〇マイル以上ナルカ故ニ其ノ水面ノ全部ヲ露国領海ト見做スヘカラス又第四三号ハ其入口六〇マイル以上アリテ我土佐湾ニ匹敵ス然ルニ其全部ヲ露国領海ト見做シ之ヲ協約外ニ置カムトスルノ理由如何右諸点ニ対スル説明至急電報アレ

右電報接到ノ上本件ニ関スル訓電ヲ発スヘシ

一〇五 明治四年三月九日 本野駐露公使ヨリ 林外務大臣宛(電報)

同上入江ニ関シ説明ノ件(一)(二)

(1)

二月 九日 后二、一〇 露都發
十日 后六、〇五 本省着

by Japanese subjects on the same footing as Russian entrepreneurs, provided that they shall be subjected to the same laws and regulations of fluvial fishery and in particular to the dispositions prohibiting entrepreneurs from employing foreign fishing laborers.

Motono.

一〇四 明治四年二月七日 林外務大臣ヨリ 本野駐露公使宛(電報)

入江ノ表ニ関シ説明方訓令ノ件

二月七日午後四時二十五分發

在露 本野公使 林 大臣

第二二号

貴電第二二号第一三号ニ関シ

「インレット」表中第一号第一二号及第一七号第二八号ノ水面ハ何レモ入口一ニ対スル奥行二ノ比例ニモ達セサルモノナルニ之ヲ該表ニ掲クル理由如何又第六七号中「インレット」ノ入口ト奥行トノ比例ハ到着地図ニ於テ不明ニ付電報アレ又第一〇号以下七箇ノ例外の入江ノ中第一〇号ハ一

林外務大臣

本野公使

第二五号

貴電第二二号ニ関シ「インレット」表中「一」Laurent灣)ハ入口凡三哩半奥行二十一哩ニシテ比例ハ六ナリ「二」ハ初メ abcヲ総括シ全体ノ入江ヲ除ク主意ナリシモ談判ノ結果三箇ノ入江ヲ各別ニ調査シ。(ナタリー灣)ハ表中ヨリ省キb(Paul 灣)ハ奥行入口ノ三倍ニ及ブラ以テ「インレット」ニ入レ a(Rainunds 灣)ハ比例ニ倍半ニ及ブモ三倍ニ及ハサルヲ以テ例外ノ部ニ入レタルナリ「十七」(ベデービンスキー)ハ比例五倍以上ナリ「二八」(スタルカ)ハ入口極メテ狭ク(地図ヲ精密ニ見レハ入口ハ海ニ向ヘル側ノ左端ニ少サク開ケルノミ)無論比例ハ三倍以上ナリ「六七」(プレラブラジエニヤ)中ノ入江ハ曩キニ進達シタル地図中該灣ヲ示セル分ノ上ノ方ニ別ニ該灣ノミヲ示セル精密ナル地図アリテ該灣ノ右側ニ細ク深く入込ミタル入江アルヲ示ス即チ此入江ヲ指セルモノニシテ其奥行ノ比例ハ他日精密ニ定ムルコトトナシ置タレトモ兎ニ角少クトモ三倍以上アルコトヲ認メ我方ニ於テ「インレット」トナスコトニ同意セルナリ「一〇」(アナジイル)ハ先方ハ「ラプゼルバチー」岬ヨリ奥ノ方ハ「アナジイル」河ノ一

部分ナリト主張シテ「インレット」ニヨリ議論スルコトヲ拒ミ該岬ヨリ外トノ広マリタル部分ニ付與行ノ比例論ヲナシタルヲ以テ右比例ハ二倍半ト取り三倍ニ及ハサルモノトナレルナリ（進達シタル地図ノ外場所ニ依リテハ頗ル精密ナル地図ノ備ハレルモノアリ）閉塞入江中「三七」ハ先方ノ計リ方ニ依レハ比例一ト三以上トナル又其他モ貴見ノ如ク孰レモ「インレット」中ニ掲ケテ差支ナキヲ以テ先方モ今日トナリテハ「インレット」中併記スルモ可ナリトノ意見ヲ洩ラシ居レルカ之ヲ特別ニ掲ケタル理由ハ地図ニ依リ是等ノ入江ノ入口ノ広サヲ計ルコト困難ナル為メ與行トノ比例数字的ニ立チ難キヲ以テ比例論ヨリ省カンタメ別記シ置タル迄ノ事ナリ（続ク）

(一)

二月 九日 后二、一一 彼得堡發
二月 十日 后二、二〇 本省着

林外務大臣宛

本野 公使

第二十五号 続キ

入口一〇哩以上云々ノ御質問ニ関シテハ左ノ事由御考量アリタシ

一、進達シタル地図ニ於テハ区域ヲ判然ナラシムル為メ入

ト共ニ正確ニ決シ置クコト我レニ取リ不利益ノコトナシトモ計リガタキニヨリ可成本論ヲ避クル様ニ致シ来リタリ場合ニヨリテハ本論ハ特ニ留保シ置クノ必要アルヤモ知レサルニヨリ其御含ニテ總テ御研究アリタシ又飽マデ領海論ヲ以テ貫徹セント欲セハ帝國政府ニ於テハ何哩論ニ御確定相成リ居ルヤ豫メ御電報ヲ乞フ
三、表中四三（四十三）四四（四十四）ノ如キハ軍事上ノ理由ニヨリ其範圍内ノ沿岸ハ外国人ノ漁業ヲ許サスト云フノ主意ナリ

一〇六 明治四年二月六日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛（電報）

非公式會議ノ結果報告ノ件（一）（二）

(一)

二月 十六日 後一、一五八 露都發
二月 十七日 後九、一五 東京着

林外務大臣

本野 公使

第三四号

貴電第一四一号協約案一條以外ノ諸條ニ関シ兩國全權ノ同意ヲ以テ委員ノ私談会ニ於テ意見ヲ交換セシメタルニ昨日

林外務大臣時代 日露漁業協約 一〇六

江全体ヲ着色シ置キタルモ原来ノ主意ハ沿岸ニ漁区ヲ設クル事ヲ許サザル範圍ヲ示サントスルニアルヲ以テ領海論トハ直接ノ關係ナキコト

二、「インレット」論ニ関スル手段ニ於テ領海論ヲ根拠トシテ入口一〇（十）哩以上ノ入江ヲ除外スルコトノ不穩当ナル議論ハ一兩度我委員ヨリ持チ出シタル処ナレトモ先方ハ之レニ同意セス領海論ト「インレット」ナル語ニ関スル學術上ノ議論トハ關係ナキコト仮リニ領海論ニ立入ルノ理由アリトスルモ入江ノ入口何哩マテヲ限リトスルカハ學者ノ間ニ於テモ或ハ一〇哩ト云ヒ或ハ一二哩ト云ヒ未タ一定セス又露國政府ニ於テハ右ノ一〇哩若クハ一二哩ヲ以テ限リトスルノ議論ヲ認メ居ラサルコト且ツ入口一〇哩若クハ一二哩以内ノ入江ハ既ニ領海ニアラス當然ナル主權ノ行ハルル「テリトリ」ナリトノ議論モアレハ斯ル入江内ニハ領海ニ於ケル漁業權ヲ目的トスル協約ノ効力ヲ及ボササラシムヘント主張スルノ理由アリト唱ヘテ容易ニ同意セサリキ尤モ數回ノ談判ノ結果表中ニ「インレット」トシテ掲ケタルモノハ實際大抵入口一二哩内外迄ト為シ置キタリ要スルニ領海論ハ其決定如何ニヨリ大ナル影響ヲ他ノ方面ニ及ボスヲ以テ漁業權問題

迄ノ結果左ノ如シ

(一) 追加案第八條水産物購買及製造權ノ事ニ関シテ露國委

員ハ理論上ヨリ見レハ露國力自己ノ裁量ヲ以テ日本人ニモ或ル條件ノ下ニ於テ是等ノ權利ヲ与ヘムトスルモノニシテ講和條約第一一條ト何等ノ關係ヲ有スルモノニ非レハ此事ニ付嘗テ聲明シタル（往電一七三号中露國ノ讓歩條件トシテ挙ケタルモノノ内第六）以上ニ何等ノ約束ヲモ為スコト能ハス又實際上露國ハ日本臣民ニ全ク露國臣民ト同様ノ條件ヲ以テ此權利ヲ与フルコト能ハス實地ノ狀況ヲ考ヘテ如何ナル場所ニ如何ナル條件ヲ以テ許スヘキカハ全ク露國单独ノ所置ニ委任セラレ何等ノ束縛ヲ受クルコトナキヲ必要トスト述ヘ且右ハ露國全權ニ於テ確定セル意見ナリト云ヘリ右ニ對シ我委員ハ本條ト第一條ノ關係及是迄私談会ニ於テ本件ニ関シ露國委員ノ述ヘタル所ヲ根拠トシテ強ク原案ヲ主張シ同時ニ露國委員力實際上本案ヲ承諾スルヲ困難トスル事情如何ヲ審ニ尋ネタルニ露國委員ハ外国人力漁業ヲ許ササル地方ニ於テ製魚場ヲ讓リ受ケ取締ノ行届カサルヲ利用シ其附近ノ水面ニ於テ尙ニ漁業ヲ營ム等ノコト行ハレサル様充分取締ノ行届ク地方ニ非レハ外国人ニ此權利ヲ許シ難ク又取締ノ

行届クト認ムル地方ニ於テモ現今黒龍江下流及ヒ「リマン」ニ於テ行ヒ居レルカ如ク許可ノ條件期限及許可ノ権等一切露国官吏ノ職權ヲ以テ決スルコトトナシ置クニ非サレハ甚ク差支アリトテ容易ニ談判ニ応ゼズ結局兩國全權ノ談判ニ讓ルコトトナシ置キタリ尤モ本件ニ関スル談判中露国委員ノ洩シタル語氣ニ依レハ我方ニ於テ前記實際ノ困難ヲ斟酌シタル新案ヲ提出セハ再考ノ余地ナキニアラサルカ如シ就テハ本件ニ関シ更ニ談判ヲ試ムル場合ニ多少先方ノ事情ヲ斟酌シタル新案ヲ提出スルノ必要アルヘキニ付篤ト御詮議ノ上何分ノ電訓アリタシ尙露国委員ハ我委員ニ於テ前記ノ問題ヲ撤回スルニ非サレハ第二條以下ノ討議ニ於テモ交譲ノ精神ヲ示スコト能ハサルニ付以下記載ノ諸條ニ関シ露国委員ノ為サムトスル讓歩モ前記ノ問題カ露国ノ要求通り撤回セラルルコトヲ條件トシテ述フルモノナレハ前記問題ノ成行如何ニ依リテハ是等讓歩ヲ撤回スルコトアルヘキ旨断リタリ(続ク)

(一)

二月 十六日 后一一、五五 露都発
十七日 前一一、三〇 本省着

林外務大臣 本野 公使

限ルコトトスルノ方法ヲ設ケ置キ度旨附言セリ

五、露對案五條末文ハ我委員ニ於テ拒絕セシカ先方ハ此條項ニ非常ニ重キヲ置ク所以ヲ述ヘ熱心ニ再考ヲ促シタルニ付我委員ハ第一條及追加第八條製魚權ノ問題ニシテ日本ノ満足スル様解決セラルルニ非ラサレハ本提案モ満足ノ解決ヲ得ルコト困難ナラント述ヘ置キタリ

六、原案第七條魚類製造法ヲ不制限問題ニ関シテハ露国委員ハ貴電第九一号第四項ノ保障ヲ与フルニ異議ナシ

七、原案第八條露国領事ノ發給スル證明書ノコトハ露国委員ニ於テ削除ニ同意セス又船籍及船舶ノ漁業ノ目的ヲ有スルコトヲ證スルニ止マルコトモ同意セス尤モ此点ニ就テハ右證明書ハ主トシテ船舶ノ持主又ハ借主及其持主又ハ借主カ何レノ場所ニ於テ漁区ヲ有スルカヲ證明スルコトヲ必要トスルモノト考フルモ其果シテ如何ナル性質ノモノナルヘキカハ更ニ調査ノ上我委員ニ説明スヘキニ付其上ニテ更ニ談判スルコトトナシタシト言ヘリ「カボタアジ」ノ件ニ付(運搬)ノ上ニ(無税)ノ文字ヲ加フルコトハ異議ナシ又故ラニ我漁船ニ對シ制限ヲ設クル主意ノ規則ヲ發スルコトナカラムルノ保障ニ関シテハ露国委員ハ本條ノ約束既ニ「カボタアジ」規則ノ除外例ニシ

第三四号(続キ)

二、漁区貸下期限ハ左ノ通

(イ) 新漁区ノ貸下ハ一漁期間ニ限ルコト貸下方法ハ競売ト為ストモ行政処分ト為ストモ可ナリ執ノ場合ニ決スルトモ無論日本人ト露人ト同様ニ扱フヘシ(競売ヲ書面上ノミトナスコトハ承諾セス從來ノ如ク口頭ト書面ト二重ノ手續ヲ以テ為ス必要アリト主張セリ)

(ロ) 開設后二年目ノ貸下ハ三年間ト為スコト

(ハ) 三年間ノ貸下ヲ經タル后ノ漁区貸下ハ六年間トナスコト而シテ(ロ)及(ハ)ノ場合ハ必ス競売ト為スヘシ右ハ日

露兩國人トモ同様ナリトス尙露国委員ハ漁区ノ利用權ヲ漁業季節ノミニ限ルコトトナシタシト述ヘタルニ付我委員ハ如斯ハ当業者ノ不便極マリナシトテ縷々其不穩当ナル理由ヲ述ヘタルニ露国委員ハ右ハ漁区ヲ単ニ漁業ノ目的ニノミ用ヒ永住ノ用ニ供スルコトナキ様致度トノ主意ナレハ漁業ニ差支ナキ範圍ニ於テ此目的ヲ達スル方法ヲ講究シ追テ提案スヘシト云ヘリ

三、原案二條末段日本領事ニ通知ノ件ハ承諾

四、原案三條建物倉庫等築造ノ件及(一)漁期間ニ必要ナル)ノ文字削除ノ件承諾尙本件ニ付テモ單ニ漁業ニノミ

テ且往電第七三号中露国讓歩條件ノ第五ニ述ヘタル如キ声明モアレハ斯ル保障ハ不必要ナラント云ヘリ

八、協約更新期限ニ関シ露国委員ハ renewed / 次ニ or modified / ト加ヘンコトヲ提議シ且期限ハ十ヶ年ト為サントコトヲ熱心ニ主張セリ我委員ハ之ニ對シ十五ヶ年説ヲ強ク主張シタル末露国委員ニ折衷ノ余地ヲ發見スルノ意向ナキヤ否ヤヲ質クシタルニ露国委員ハ再考シ來タル可シト述ヘタリ

一〇七 明治卅二年二月三日 本野駐露公使ヨリ

漁業及通商條約ニ関スル訓令發送ノ日取

問合セノ件

二月 廿二日 後五、三五 露都發
廿三日 前四、五〇 東京着

林外務大臣 本野 公使

第四四号

漁業及通商條約ニ関スル諸般ノ御訓令ハ何時頃御發送ノ御

手筈ナルヲ露国全權ヨリ催促ノ次第モアルニ付至急御返電ヲ乞フ

一〇八 明治卅二年三月二十五日 林外務大臣ヨリ 本野駐露公使宛 (電報)

日露間商條約ニ付訓令ノ件

二月廿五日後二時四十分發

本野 公使

林 大 臣

第二六号

貴電第二十五号ニ関シ講和條約第十一條ニ於テハ国防ノ為メ露国沿岸ノ或部分ヲ留保スル旨ノ記載ナキニ由リ三九、四一、四二、四三、四四、ハ何レモ漁業協約ノ範圍外ニ置クヘキ理由ナキモノナレトモ帝國政府ハ交譲ノ精神ヲ表スル為メ前記五カ所ノ沿岸領海ヲ漁業協約範圍外ニ置クコトヲ承諾ス但シ例外的入江ト称スル七個 (其中「アナジール」ニ関シテハ「オプゼルバチー」岬ヨリ外海ニ向ヘル部分) ハ何レモ「インレット」ノ定義ニ当ラサルモノニシテ之ヲ協約外ニ置クヘキ理由毫モ之ナキヲ以テ皆之ヲ表中ヨリ取除クコトニ尙一層尺力アリクシ蔽塞入江トシテ列挙セ

五條ニ用キアルモノニシテ露国カ是迄實際許シ来レル所ナルニ由リ之ヲ右第四項中ニ挿入スルコトニ何等異存ナカルヘシ

(七)ニ関シ百七十三号中第五條件 under less restrictive conditions ノ意味不明ナルニ付詳報アリクシ

(八)ニ関シ renewed ノ次ニ modified ヲ加ヘテ差支ナシ又期限ハ已ムナクハ十二年トシテ差支ナシ

貴電第十三号(三)リマン問題ニ関シ帝國政府ハ我カ使用スヘキ漁夫ノ半数ヲ日本人ト為スモ差支ナシト定メンコトヲ希望ス已ムナクハ三分ノ一ニテモ可ナリ又之モ行ハレスンハ樺太沿岸丈ニ完全ナル漁業權ヲ得ムコトヲ望ム而シテ此對岸説ハ嘗テ一度露国委員ノ同意ヲ得タル所ナルヲ以テ之ヲ成立セシムルコト容易ナルヘシト信ス又往電第九一号第二項ハ將來利害ノ關係大ナルニ由リ是非成立セシムル様尺力アリクシ

一〇九 明治卅二年三月二日

本野駐露公使ヨリ 林外務大臣宛 (電報)

漁業協約談判ニ関シ請訓ノ件

林外務大臣時代 日露漁業協約 一〇九

ル個所ハ熟レモ之ヲ「インレット」中ニ記入スルヲ可トス 貴電第三四号ニ関シ

(一) 追加案第八條水産物購買及製造ノ權ニ関シ露国委員ハ同意ヲ表セサル趣ナルカ露国ハ独仏諸国トノ現行條約ニ於テ商業及工業ニ関シ右等諸国民ニ國民待遇ヲ与ヘ居リ又日露通商條約案ニ於テモ同様ノ規定アリテ既ニ露国委員ノ承諾ヲ經タルニ付追加第八條ノ權利ハ其明文ヲ待クスシテ存在スヘキ筈ナレトモ(千八百九十八年發布ノ營業税法第三條附録第三工業ノ部ニ於テモ現ニ各種製造業ヲ包含シアリ)尙ホ念ノ為メ特ニ一條ヲ設ケントスルノ趣意ナレハ貴官ハ善ク此旨ヲ説明シ該案ノ成立ニ尺力アリクシ

(二)及(四)ハ大体露国委員ノ意見ノ通ニテ可ナリ

(五) 露對案第五條末文ハ可成削除スルコトニ尺力アリクシ

(六) 往電第九一條第四項中練ヲメ粕ニスル云々ハ語句少ク不備ナルカ改ニ練ノ後ニ「及練群来ノ時練ト共ニ偶然網中ニ投入スル各種魚類」and "different species of fish falling down accidentally into nets together with herrings when they come shoaling" ノ文字ヲ挿入スル様取計ハレクシ該字ハ沿黑龍總督府漁業規則第二十

三月一日 后六、一五 (露都發)

三月二日 后二、二五 (本省着)

林外務大臣

本野 公使

第五〇号

貴電第二六号ニ関シ御訓令ノ廉ハ二月二十八日露国全權ニ面会説明シタル所同全權ハ篤ト熟考ノ上回答スヘシト答ヘタリ尙同全權ノ話ニ依レハ本年ノ漁季追々接近シ来ルヲ以テ如何取計フヘキヤト關係地方官庁ヨリ伺出タルカニ對シテ昨年通り一年間限リノ漁区貸下ヲ行ナハシムルコトニ取計ヲ積ナリト就テハ協約談判ハ未タ完了セサルモ大体前途ノ見込モ附キタリト想像セラルルニ付今日迄ノ談判ニ依リ露国ニ於テ異議無キコトヲ声明シタル地方丈ニハ本年ノ漁区貸下ニ日本人モ加ハルコトヲ得ル様臨時ノ措置ヲ露国政府ニ求メテハ如何御電訓アリクシ尙往電第三四号第二(イ)ニ陳ヘタル如ク露国委員ハ協約実施後新規ノ漁区ヲ貸下クル場合ニハ競売トスルトモ又ハ行政処分ニテ願出入ニ貸下クルコト (此場合ニ貸下代価ハ最寄ノ既開漁区ノ代価ニ準シテ定ムルモノナル由)トスルカハ執レニシテモ可ナリト言ヒ居ルコトナレハ我方ノ便宜ハ執レニ在リヤ是又電訓アリクシ露国委員ハ若シ願出人ニ貸下クルコトトスルトキハ

露国人ニ対シテモ同様トナス故日本人ノ競売ニ加ハリ得ル
範圍モ減少セラルル結果トナルヘキカ故ニ競売法ニ依ルコ
ト日本ノ為メニモ利益ナラント言ヘリ

一一〇 明治四年三月六日 林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛

漁業協約談判ニ関シ回訓ノ件

三月六日後五時四十分発

本野公使

林大臣

第三五号

貴電第五〇号ニ関シ御意見ノ如ク今日迄ノ談判ニ依リ露国
ニ於テ異議ナキコトヲ声明シタル地方丈ニハ臨機ノ措置ヲ
以テ本年ノ漁区貸下ニ日本人モ是非加ハルコトヲ得ル様十
分力アリケン

又協約実施後新規ノ漁区ヲ貸下クル場合ハ初年ヨリ競売ニ
附スルトセハ自然次年ヨリ漁区貸下価格ヲ昂騰セシメ我出
漁者ノ不利ヲ招致スルコトアルヘクモ行政処分ニテ之ヲ出
願者ニ貸下クルコトハ統令ヒ露国政府カ日露両国人ニ同様

ニ依リ寧ロ定義其モノヲ改ムルノ外ナント唱ヘ強硬ニ我
要求ヲ拒ミタリシカ談判ノ終局ニ至リ漸ク最終ノ譲歩ト
シテペートル(一一)ノA)グルボフカイヤ(一一三)アホム
テン及チヒルカ(一一〇)及ビリュチンスキイ及ジロウネ
イヤ(一九)ノ四個ヲ除クコトヲ承諾シ其他ノ三個ハ絶
体的ニ拒絶セリ而シテ此三個及閉塞入江ハ皆「インレッ
ト」中ニ入レ除外地点ヲ「インレット」及軍事上ノ理由
ニヨルモノトノ二種ニ止ムルコトセリ

二、水産物購買製造ノ件ニ付テハ露国全権ハ到底自国民ト
全然同一ノ權利ヲ与フルコトハ承諾セス露国当初ノ考ヘ
ニテハ自国法ヲ以テ相当ノ權利ヲ日本人ニ与フルニ止ム
ル積リナリシガ我ニ対スル調和的精神ヲ表スル為メ此權
利ヲ條約中ニ規定シ置クコトハ承諾スヘシトテ右ノ案ヲ
提出セリ

Japanese subjects may engage in the preparation of
fishes and aquatic products in places other than the
fisheries leased to them with the permission of Rus-
sian authorities and conforming title of rules, laws and
ordinances that are or may be in force and applicable
to foreigners in Russia.

ノ取扱ヲ為スト言明スレト地方官憲ノ取扱方ハ果シテ公平
ナルヤ否ヤ不明ニ付畢竟競売法ニ依ルヲ便宜ト認ム

一一一 明治四年三月七日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)

非公式會議結果報告ノ件(一)(二)(三)

(一)

三月 十七日 后八、四〇 露都發
十八日 后四、五〇 本省着

林外務大臣

本野公使

第七三号

貴電第二六号ニ関シ

露国全権ハ本官ノ主張(往電第五〇号)ニ答フルニ先チ非
正式会見ニ於テ一応意見ヲ交換シタシトテ三月十三日当館
ニ来レリ其結果左ノ通り

一、例外的入江削除ノ件ハ露国全権ニ於テ往電第一二号ニ
テ申進シタル事情ヲ理由トシ容易ニ承諾セス定義ニ合ハ
サルノ理由ヲ以テ同意スルニ困難ナリトコトナラハ元
々定義ハ一ト二ノ比例ヲ最終ノ意見ト為シタルモノナル

(二)

三月 十七日 后八、四〇 露都發
十八日 后一、一五 東京着

林外務大臣

本野公使

第七三号(其二)

本官ハ右規定丈ニテハ我國民ノ權利ハ甚ク不確實ナリトテ
百方争ヒタレトモ何分承諾セサリシヲ以テ條文中「露国官
吏ノ許可ヲ得テ」ナル文句ハ既ニ「法令ニ遵ヒテ」トアル
ヲ以テ不必要ナリトノ理由ヲ以テ削除ヲ要求シタルニ露国
全権ハ之ヲ承諾シタリ但シ日本人ニ対シテモ他ノ外国人ニ
対スルト同様ノ一般ノ規則ヲ適要シ露国官憲ニ於テ適當ト
認ムル場所ニ限り右ノ權利ヲ与ヘラルルモノナルコトヲ明
ニ為シ置キ度シト述べ監督ノ良ク行届クヘキ黒龍江下流ノ
如キ場所ニハ無論許スヘキ精神ナリト述べタルニ付本官ハ
之ニ対シテ露国官憲カ日本臣民ノ製魚權ニ加フル制限ハ決
シテ「アルビトラリイ」ニ非ス相当己ムヲ得サルノ理由ア
ルモノタルコト及此制限ハ可成丈尠ナカラシムル様致シタ
シト述べタルニ先方ニテモ異議ナシトノコトナリシヲ以テ
此趣意ヲ會議録ニ載セ置クコトト為シ纏メタリ貴電第二六
号ニ依レハ此權利ハ通商條約ノ規定ニ依リ別ニ明文ヲ俟タ

スシテ存在ストノ御議論ナレドモ此議論ハ露国全権ノ同意セサル所ナル而已ナラス果シテ正當ノ見解ナルヤ否ヤ甚タ疑問ニシテ本官ノ所見ニ依レハ日本ニ於テ外国人一般ニ与ヘサル鉱業権ハ通商條約第二條ノ規定アルニ拘ラス露国人ニモ之ヲ与ヘサルヲ得ヘント確信ス就テハ露国ニ於ケル日本人ノ製魚権ニ関シテモ同條ノミヲ根拠トシテノ主張ハ到底貫徹シ得サルヘント信スルヲ以テ一応ハ主張シタレトモ敢テ深ク立入ラサリシニ付右御舍ミ置キアリタシ

(三)

三月十七日 後八、四〇 露都發
三月十八日 後七、一五 東京着

林外務大臣

本野公使

第七三号(其三)

(三) 新開ノ漁区貸下ケノ場合ニハ貴電第三五号後段ノ次第モアルニ付競売法ニ依ルコトニ決定セリ
(四) 輸入税免除ニ関スル露国案第五條末文ノ削除ヲ主張シ置ケリ但シ露国全権ハ其重要ナルコトヲ縷述シテ熱心ニ再考ヲ求メタリ就テハ我方ニテ之ヲ承諾セサレハ五條全体撤回ノ覚悟ナカルヘカラス就テハ若シ同五條ヲ是非生カシ置キタシトノ御意見ナラハ当初ヨリノ貴電訓ノ如ク

リ「貴電第九一号第二項ハ河川「インレット」及軍事上ノ理由ニ依リ除外セル場所以外ニ於テ且 except in those places where colonists or native race actually exist トノ制限ヲ附シテ露国全権承諾セリ尤モ往電第一三三三「インレット」表ノ次ニ在ル文句 outside the localities 云々ニテ日本臣民ハ右「インレット」表以外ノ沿岸ニテハ何レノ場所ヲ問ハス要求次第漁区ヲ獲得スルコトヲ得ルノ保障アルヲ以テ将来漁区ノ數ヲ増加セシムルコトハ心配ニ及バズト考フ」漁業條約ニ就テハ大体此上露国政府ヲシテ讓歩セシムルノ見込ナキヲ以テ今日迄纏メ来リタル処ニテ調印スルカ全然談判ヲ中止スルノ外最早他ニ策ナキニ付御熟考ノ上最終ノ御訓令ヲ乞フ若シ近日中ニ條約調印ニ至ラハ批准前ト雖モ本年ノ漁期ヨリ日本人ニモ入札ヲ許スヘント露国全権ハ明言セリ

一一二 明治卅四年三月二十七日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)

漁区貸下ニ関スル露国当局ノ態度報告ノ件

三月 廿七日 后八、〇〇 露都發
三月 廿八日 前七、〇〇 本省着

林外務大臣時代 日露漁業協約 一一二

承諾スルコトトシテ大体ヲ纏メ度シ
(四) 鯨ノ外偶然網ニ入り来リタル魚類ヲ肥料ニ製スル件ハ露国全権承諾セリ

(六) 「カボタージ」ノ件ニ付往電第一七三号第五 *mode* *less restrictive manner* トノ從來ノ規定ニ依レハ漁場ニ赴ク前一応浦塩「ニコライウスク」等ニ寄港シテ検査ヲ受ケ又日本へ歸ル時モ同様ノ手續ヲ為スノ必要アリシカ新規則ニ依レハ斯ノ如キ制限ヲ設ケストノコトヲ意味スルモノナリ

(七) 協約有効期限ハ十二年ト協定セリ「レニウド」ノ次ニ「モディファード」ノ語ヲモ加ヘタリ

(八) 「リマン」問題ハ露国全権ニ於テ同地方ハ露国絶東洋ノ漁民養成上死活的關係アル地方ナリトノ理由ノ下ニ絶体的ニ我要求ヲ拒絶セリ貴電第二六号末段ニ樺太対岸丈ケ完全ノ漁業権ヲ得ルコトハ一応露国委員ノ同意ヲ得タリトアレドモ雇漁夫ノ制限ヲ解クコトハ露国委員ニ於テ一回モ承諾シタルコトナク往電第一二二号ノ第二項中「樺太沿岸丈ケ承諾シ」ト云ヘル漁区ヲ与フルコト丈ケヲ承諾シタルモノニシテ雇人ヲ露国人ニ限ルトスルノ條件ハ其以前ヨリ常ニ絶体的條件トシテ主張シ来リタルモノナ

林外務大臣

本野公使

第八一四号

貴電第三五号前段ニ関シ露国外務省ニ掛合置タル処外務省ニテハ可成我希望ニ応スル様其筋ト交渉シ尽力シタレドモ農商務省ニ於テ協約締結前日本人ニ漁業権ヲ与フルノ理由ナシトノ議論ヨリ絶對的ニ反対シタルタメ乍遺憾承諾スルコト能ハサル旨回答セリ尙往電第七三号末段ニ関シ昨日外務省員ノ内話ニ依レハ豫テ本年ノ漁区貸下方ニ関シ沿海州地方官ヨリノ伺出ニ対シ中央政府ヨリハ露曆三月十五日迄処分ヲ延期スヘキ旨訓令シ置タリ之ハ其頃ニ至ラバ協約調印ノ運ヒニ至ルヘントノ豫想ナリシニ依ル然ルニ近頃地方官ヨリハ切りニ何トカ方針ヲ定メラレタキ旨迫リ来リ一方ニ於テハ近日ノ内協約調印ニ至ルヘキ見込モナキニ至リタルニ付前記期日ニ至レハ願出タル漁区ニ付テハ本年一ヶ年限リノ貸下ヲ行フモ差支ナシトノ訓令ヲ下シタリ尙本年以後ニ亘ル長期貸下ニ対スル競売ハ本年五月(露曆)行フ管ノ由ニシテ其時ニ至ラハ無論協約モ締結済ナルヘキヲ以テ日本人ニモ競売ニ加ハルコトヲ許ス積ナリト

一一三 明治四年三月三日 本野駐露公使ヨリ 林外務大臣宛(電報)

漁区貸下ニ関シ露国当局ニ質疑ノ件

三月三十日 后一、一五 露都發
三十一日 前三、二〇 本省着

林外務大臣 本野公使

第八四号

昨夜外務次官ニ面会セシニ付往電第八一号ノ件ニ付質問ニ及ヒタル処今日迄ノ処ニテハ河並ニ日本人ニ余リ關係ノ無キ場所ニ限り漁区ノ貸下ニ着手シタルニ過キス若シ速ニ條約締結ニ至ルヲ得ハ或ハ日本人ニ對シテモ本年ヨリ漁区ノ競売ニ与ラシムルヲ得ルヤモ計リ難シトノ意味ヲ話セリ就テハ漁業條約ニ關スル訓令ハ何時頃發送ノ御積ナルヤ至急御電報ヲ乞フ其時機如何ニ依リテハ或ハ相當ノ処置ヲ取ルノ余地アルヤモ計リ難シ

一一四 明治四年四月二日 在浦潮野村貿易事務官ヨリ 林外務大臣宛

日露漁業協約ノ交渉経過照会ノ件

一一五 明治四年四月六日

林外務大臣ヨリ 本野駐露公使宛(電報)

漁業協約ノ字句修正ニ関シ照会ノ件

四月六日後五時發

本野公使 林大臣

第六二号

漁業協約案第一條中「沿岸」ヲ「領水」ト改ムルコト並ニ第二條及第七條中「entrepreneurs」ヲ「sujets」ト改ムルコトハ勿論露国ノ同意ヲ得タルコトト信スルカ如何
第三條末段ニ「前記臣民ハ又其漁区ノ水中ニ建網ヲ設クルトトriger les filetsヲ得ヘシ」ナル文字ヲ追加セントコトヲ望ム元來建網ハ日本人漁業ニ特有ナル有効方法ナルカ從來露国官憲ハ之ヲ嫌フノ傾アルニ付是非此事ヲ協約中ニ明記致置キタシ仍テ貴官ハ本協約確定ノ際前記文字ヲ追加スルコトニ尽力アリタシ

私案第八條中 foreignersノ前リ all theノ二字ヲ加ヘラレタシ

私案第九條中「カボタージ」ノ件ニ付貴電第七三三号ノ内ニ説明シタル趣意ヲ會議録ニ明記スル様取計アリタシ又同條仏文末段中 les bâteaux susmentionnésノ三文ノ代リニ

機密 第一九号

四月八日接受

日露漁業協約未タ成立ニ至ラス露領沿海ニ於ケル本邦人ノ漁業權ノ前途不明ナルニ拘ハラズ本邦漁業家ニシテ既ニ当地ニ渡航シ本年度漁季ニ応スル萬端ノ準備ヲ整エツツ鶴首本協約ノ成立及漁業規則並ニ漁区表ノ發表ヲ期待シツツアル者已ニ數十名ノ多数ニ上リ或ハ団体ヲ作り露国漁業者ニ對抗セントシ或ハ露人ト契約ヲ結ヒ奇利ヲ博セントスル等種々ノ計画ヲ企ツル者有之候処本年度漁季モ漸ク切迫シ来リ本件ニ關スル將來ノ見込確實ニナルト否トハ彼等ノ利益ニ關スルコト不少候ニ付小官東京出發後ニ於ケル本協約ノ経過ニシテ御差支ナキ限りハ小官心得迄ニ御内示相成候様致度此段申進候敬具

明治四十年四月二日

在浦潮

貿易事務官 野村基信(印)

外務大臣子爵 林 董 殿

dans ce cas, ilsノ四字ヲ用フルコトト致シタシ然ラサレハ本邦ヨリ漁場ニ直接ニ往復スル場合ニモ沿岸航海法ニ一切服從スヘキモノト解セラルル惧アリ

貴電第三四号ノ二、新漁区貸下ニ關スル取極ハ如何ニナリタルヤ貴電第十二号末段形式問題ニ付露国全權ト協議ノ結果併セテ電報アレ

往電第九一号第二項ニ關シ貴電第七三三号ニ於テ「且 except in those places where colonists or native race actually exist」トノ制限ヲ附シタレトモ貴電第十三号「インレン」ト「表ノ次ニ outside the localities」云々ノ保証アルコトハ將來漁区ノ數ヲ増加スルコトハ心配ナシトノ貴見ナレトモ右第十三号ノ文意ヲ察スルニ outside the localities above indicated Japanese subjects can acquire 云々ノ原則ハ其

ノ次ニ在ル It is further understood that 云々ノ一項ニ依リテ制限セラルルニ付日本臣民ノ漁区ヲ將來増加スルコトニ關シ心配小カラス又 colonists or native raceノ現存スル場所ニ將來漁区ヲ開カストノ制限モ亦講和條約第十一條ノ一般の規定ノ精神ニ反シ且ツ大ニ我漁權ヲ減殺スルモノナレハ是非之ヲ取去ル様尽力アリタシ第五條及リマン問題ニ關シテハ別電ニテ訓令スヘシ

以上各項至急御交渉アリタシ其結果ヲ俟テ最終ノ訓令ヲ送ル筈

一一六 明治四年四月六日 本野駐露公使宛(電報)

水産物輸入税免除ノ條項修正ノ件

四月六日後四時四十五分發

本野公使宛

林 大 臣

第六三號

漁業協約第五條ニ関シ露政府ノ要求ニ係ル輸入税免除ノ件ハ帝國政府ハ主義トシテ之ヲ承諾スヘキモ本條ニ之ヲ記載スルトキハ米國等ヨリ輸入スル魚類モ均霑スルノ虞アリ斯クテハ國庫ノ損失ノ金額六十萬圓以上トナルヘキニ依リ本件ヲ全ク第五條ヨリ分離シ露國提案中削除ニ係ル我原案第十條ノ跡ニ之ヲ載セテ獨立ノ一條トナシ其文言ヲ The Japanese govt. in consideration of the fishery rights granted by the Russian govt. to Japanese subjects under the present convention engage not so levy any import duty on fish or aquatic products caught or taken in

the Russian territorial waters specified in Art. 1. of the present convention whether such fish or aquatic products be manufactured or not. ナナスコトヲ提議ス

一一七 明治四年四月八日 本野駐露公使宛(電報)

「リマン」漁区租借ニ関スル件

四月八日後五時發

在露 本野公使

林 大 臣

第六四號

前略……………目下兩國間ニ進捗シツツアル善良關係ニ鑑ミ面白カラサル南樺太漁業問題ノ完全ナル根本的解決トシテ其ニ倍即金老百萬圓ヲ給付スルコトニ同意スヘシト云フニ在リ

此ト同時ニ口頭ヲ以テ露公使ニ「リマン」問題ニ関シ希望ヲ述ヘ置タリ其要旨ハ「リマン」漁区租借ヲ承諾スルモ熟練ナル日本漁夫ヲ使用スルヲ許ササルトキハ漁業權ハ畢竟有名無実ニ歸スヘシ故ニポーツマス條約上「リマン」ハ当然日本人ニ完全ナル漁業權ヲ許与スヘキ部分ニ非サルヤノ

ラルル順序トナラハ本年度ヨリ新規ノ漁区モ日本人ニ与フルコトヲ得ヘキコトトナセリ此時機ヲ経過セハ沿海洲全体ニ亘リ露國人ニ短期ノ漁区貸下ヲ行フ筈ニ付日本政府ニ於テ左様承知セラレンコトヲ乞フト語レリ

一一九 明治四年四月七日 本野駐露公使ヨリ 林外務大臣宛(電報)

漁区貸下問題ノ件

四月 十七日 后七、二〇 露都發

本省着

林外務大臣

本野公使

第一〇一號

往電第九八號ニ関シ

外務次官ヨリ四月十七日付ニテ最早期限モ切迫シ来リタルニ付今二三日ナラハ農商務省へ申送り延期セシムルコトヲ得ヘキモ其上ハ致シ方ナシト申シ来リタリ然ルニ一兩日中ニ協約談判了ノ見込モナク又際限ナク延期セシムルコトモ能ハサルヘキニ付先方ノ処分ニ任スノ外ナキ旨回答スル積リナリ

問題ハ且ラク措キ日本漁夫ノ使用ヲ許可シ已ムナクンハ漁夫ノ半数ヲ日本人ト為スコトヲ露政府ニ於テ承諾シ以テ南樺太漁業問題ニ於テ表シタル帝國政府ノ讓歩ト相俟テ妥協ニ至ランコトヲ熱望スト云フニ在リ就テハ貴官ニ於テモ「リマン」問題ニ付猶露政府ノ熱慮ヲ求メ亦希望ヲ達スル様十分尽力アリタシ

一一八 明治四年四月八日 本野駐露公使ヨリ 林外務大臣宛(電報)

漁区貸下ニ関シ露國外務次官ト内談ノ件

四月 八日 后七、〇〇 露都發

本省着

林外務大臣

本野公使

第九八號

往電第九八號ニ関シ四月八日外務次官本官ヲ訪ヒ来リ往電第八一號ノ件ハ全ク河川インレット等即チ協約ニ關係ナキ場所ニ限りタル処分ニシテ其他ノ場所ニ関シテハ農務省ヨリ頻リニ決定ヲ迫レルモ近々ノ内協約調印ニ至ルヘシトノ理由ヲ以テ見合シメ居レリ然レトモ時機愈々迫リ来レルニ付今ヨリ十日以内ニ仮令實際協約調印ニ至ラストモ調印セ

一一〇 明治四年四月六日 林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛

漁区貸下問題回訓ノ件

明治四十年四月十八日午後五時十五分發

露

本野公使宛

林 大 臣

第六九号

貴電第一〇一号ニ関シ

往電第六二及六四号ニ関スル未決問題ハ一部ニ過キス大
体ノ協約ハ既ニ解決セル今日ナレハ未解決ノ地方ヲ除キ他
ノ総テノ地方ニテハ短期ノ漁区貸下ニモ日本人ヲ加ヘラ
ル様交渉試ミラレタシ

一一一 明治四年四月九日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛 (電報)

漁区貸下問題協議ノ件

四月 十九日 后三、四九 露都發
二十日 前七、二〇 東京着

林外務大臣

在露 本野公使

第一〇五号

第一〇六号

往電第一〇五号

外務次官ヨリ協約案中未決定ノ諸点如何ニ決着スルニ拘ハ
ラス日本政府ハ之ヲ承諾シテ協約ヲ締結スル覚悟ナル旨ノ
「プロトコラル」ヲ作り兩國全権記名シタル上ニテ本年ヨリ
漁区ノ貸下ヲ日本人ニモ許スコトトナシキ旨申出タリ右
ハ御差聞ナキコトト考フルモ至急何分ノ御電訓ヲ請フ

(一一)

四月 二十日 后七、三五 露都發
二十一日 前七、三〇 東京着

林外務大臣

本野公使

第一〇七号

貴電第六二号乃至第六四号御訓令ノ諸点中重要ナルモノハ
特ニ覺書ニ認メテ外務大臣ニ提出シ兩國ノ好誼ニ訴ヘテ露
国政府ノ承諾ヲ得ンコトヲ求メ其他ノ事項ニ付テハ屢々全
權ト会谈シ且文字ノ修正ニ関スルモノノ類ハ双方協議ノ上
之ヲ委員会ニ移シ討議セシメ百方目的ヲ達スル様手段ヲ尽
シタリ其結果左ノ通り

一、「リマン」漁区ニ於テ日本漁夫使用ノ件ハ露国ニ取り

林外務大臣時代 日露漁業協約 一一二

貴電第六九号ニ関シ

早速露国全權ト会见協議ニ及ヒタル所日本政府ニ於テ大体
今日迄兩國全權ノ間ニ纏マリタル所ニテ調印スル決心ナレ
ハ日本政府ノ要求通り取計ラヒ差支ナシト信スレトモ尙ホ
当局者ト相談ノ上確答スヘント申シタルニ付本官ハ之レニ
對シ目下懸案ノ諸問題如何ニ決スルモ日本政府ニ於テハ條
約其モノハ調印スル事ニ決心シ居ルヲ以テ速ニ然ルヘク訓
令ヲ地方官ニ發セラレタシト申シ置キタリ

一一二 明治四年四月二十日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛 (電報)

漁区貸下ニ関スル露国政府ノ提案ニ付キ請訓ノ件

竝ニ漁業協約ニ関スル協定事項報告ノ件 (一)(二)
(三)(四)(五)(六)

(一一)

四月 二十日 后四、一〇 彼得堡發
二十一日 前六、三〇 本省着

林外務大臣

本野公使

テハ死活の問題ナルヲ以テ之ヲ許ルス能ハスト断言シ且
露国政府ハ此問題ニ對シ満足ノ解決ヲ得ンカ為他ノ諸点
ニ関シ既ニ多大ノ讓歩ヲ為シタルハ日本政府ニ於テ切ニ
此点ヲ讓歩セラレンコトヲ望ミ若シ飽迄其要求ヲ維持ス
ルコトナラハ露国ハ更ニ今日迄纏マリ来リタル他ノ諸点
ヲ撤回シテ冒頭ヨリ新クニ再議センコトヲ提議スルノ外
ナキ旨答ヘ来レリ右ノ次第ニテ本件ニ付テハ最早到底露
国ノ同意ヲ得ルコト不可能ナルヲ以テ右御舍ノ上萬事御
決定相成タシ但漁夫監督ノ任ニ当ル者又ハ長期漁区以外
ニ於テ漁獲物製造ニ従事スルモノハ無論日本人ニテ差支
ナシ

二、貴電第六三号ニ関シ露国全權ハ右ノ書キ方ニテハ露国
ニ取りテ一向ニ価値ナク到底満足スルコト能ハサルヲ以
テ右ノ内 caught or taken in Russian territorial wate-
rs specified in Article 1 of the present convention ヲ
改メテ coming (provenant) from Amur Region トナ
サンコトヲ提議セリ之ニ對シ我方ノ委員ハ右新案ノ書キ
方ハ原案第一項ト同様ナレハ双方對等ナルコト及是丈ニ
テモ日本ニ取りテハ多大ノ讓歩ナル旨ヲ論シタルニ露国
委員ハ第一項中 specified by Article 1 of the present

Convention ナル文句ヲ修正シ第二項ト同様ニ為スコトハ異議ナキモ第二項ヲ協約第一條記載ノ範圍ニ制限スルナラハ寧ろ第五條全体ヲ撤回シテ双方共課税ノ自由ヲ留保スルノ外ナキ旨述ヘタリ右ノ次第ニ付露國委員ノ所謂撤回説ヲ採用セサル以上ハ彼ノ意見ヲ容レ双方共沿海洲全体トナスノ外ナカルヘシ

(三)

四月二十一日 後一一、三〇 彼得堡發
四月二十一日 後八、二五 本省着

林外務大臣 本野公使

第二〇七号(其二)

三、第一條中沿岸ヲ領水ト改タムルコトハ條約文確定ノ際ニ讓ル積リナリシカ今回御訓令ニツキ露國委員ニ提議シタル処同委員ハ講和條約ニ沿岸ノ文字アルコト及ヒ漁區ハ領水ノミナラス陸上ニモ及フモノナレハ原案ノ儘トナス方正當ナリト主張シタルカ種々討議シタル結果格別ノ差ナキヲ以テ領水ト改ムルモ異議ナキ旨ヲ答ヘ之レト同時ニ若シ今後露領沿岸ニ於テ所謂閉塞入江ノ如キモノ發見セラレハ沿岸ニモ非ス領水ニモ非ス當然協約ノ範圍外クルヘシトノ意見ヲ漏ラシタリ我委員ハ右ハ往電第一

(四)

四月二十一日 后一一、四〇 露都發
四月二十一日 后六、二〇 本省着

林外務大臣 在露 本野公使

第二〇七号(第三)

六、シタ 案第八條 Foreigners ノ上ニ All the ヲ加フルコトハ露國委員承諾セリ然レトモ本條ノ書方ニ就テハ追テ請訓スルコトアルヘシ

七、カボタアジノ件ハ段々討論ノ結果先方ハ其最初提出シタル對案末文ノ書方ニ誤リアリシ旨ヲ述ヘ元來ノ趣意^意ハカボタアジノ規則ニハ不開港場ニ直接往復スルコトヲ禁シアルニ拘ハラズ漁船ニ限り漁區ト本國間及ヒ漁區ノ間ニ直接往復スルコトヲ許サントスルモノナレハ末文 The vessels above mentioned in all ノ次ニ Other ナル語ヲ加フヘキモノナリ即チ過日ノ説明ニ往電第七三号ノ六項ハ此書方ニヨリ尽セルモノナリト言ヘリ右ノ次第ニ付別ニプロトコラルニ説明ヲ載スル必要無カルヘシト認ム

八、新漁區貸下ケニ関スル取極メハ往電第七三号ノ三ニテ報告シタル通り競売法ニ依ルコトトナシタリ

九号ノ趣意ニヨリ既ニ明カナル問題ナリトテ討論ヲ拒絕セリ右様ノ次第ニツキ文字ノ修正ハ格別困難ナキモ領水ト改メテ果シテ我方ニ利益ナリヤ寧ろ露案ノ方得策ナラサルヤ否ヤ御一考ノ上至急御訓令ヲ請フ若シ Territorial Waters トスレハ河川ノ除外ハ無意味ニツキ全然削除スルヲ可トス同時ニ又 prepare ナル文字モ不適當且ツ第三條ノ規定アルニツキ同シク削除シタシ

四、「アントロプロノラル」ヲ臣民ト改ムルコトハ先方承諾セリ

五、建網ノ事ニ関シ露國委員ハ之レニ in each waters where fishing by means of moving nets is impossible ナル條件ヲ附シテ承諾スヘキモ之レヲ協約ニ載セス「プロトコラル」ニ入レタシト答ヘタリ我委員ニ於テ無條件ノ承諾ヲ主張シタレドモ露國委員ハ建網使用ノ事ハ所ニヨリ魚族ノ繁殖ニ害アルヲ以テ法令ニヨリ之レヲ禁止スル必要アリト述ヘテ承諾セス本問題ハ建網ノ使用ハ法令ニ明文アル場合ノ外禁スルコト能ハス且ツ引網ヲ用ウル事能ハサル場所ニテハ建網ヲ禁スルノ法令ヲ設クルコトナキ様保証ヲ取り置キ之レヲ「プロトコラル」中ニ掲ゲ置ク事トシテ纏ムルノ外ナシト認ム

九、往電第一二二号末段形式問題ハ目下協議中ナリ

(五)

四月二十一日 后一一、三五 露都發
四月二十一日 后五、四〇 本省着

林外務大臣 本野公使

第二〇七号(第四)

一〇、貴電第九一号第二項ニ関シ貴電第六二号末段御訓令ノ件ニ付 except in those places where colonists or native race actually exist ナル制限ノ文句ハ先方ニ於テ except lots already occupied by colonists ト改メ全然之ヲ删除スルコトハ承諾セス貴電ニ依レハ右ノ文句ヲ全然撤回セシムヘク且往電第一三三号インレット表ノ次ニ在ル保證モ制限付ナルヲ以テ心配少ナカラストノ御趣意ナレトモ最初露國全權ハ移住者及土人種ノ存在スル場所ハ協約ノ範圍外トナサンコトヲ強ク主張シ機密第一号信附屬表中Dニ挙ケタル如キ入江ヲ除外セント努メタルモ我方ニ於テ講和條約ノ規定ニ依リ議論ヲ押詰タル結果是等ノ入江ヲ全然除外入江トナスコトノ不穩当ナルコトヲ認メテ其入江中只現ニ移住民等ノ占有スル漁業区域丈ニハ新漁區ヲ開カサルコトトナン其区域ヨリ規定ノ距離

即チ二露里ヲ隔テタル処ニハ総テ日本臣民ノ請求次第新
漁区ヲ開クヘシトノ主意ニ協定シ此外又露国委員ハ新夕
ニ移住民等カ将来何人モ未夕占有セサル場所ニ来リ其所
ニ住居ヲ占ムルトキハ其者ニ其所ノ漁業権ヲ与フルコ
トハ絶対的必要ニシテ右一二九及一七三ニ述ヘタル如キ
理由ニ依リ此權利ヲ放棄スル能ハストノコトヲ堅ク主張
セルヲ以テ結局往電第一三三号ノ如ク纏メタルモノナレハ
今更前記ノ制限ヲ撤回セシムルコトハ断シテ不可能ナリ

(一六)

四月二十一日 午後一、三〇 露都発
四月二十一日 午後三、五〇 本省着

林外務大臣 本野公使

第一〇七号(第五)

貴電ニ講和條約第十一條一般的精神云々トアルハ往電第
十三号ノ結果ヲ得ル迄ニ數回我委員ヨリ主張セシ所ナルモ
露国ハ講和條約原案ノ full fishery rights ヲ des droits de
pêche ト改メタルコトヲ理由トシテ露国臣民ト日本臣民ト
ニ全然同一ノ權利ヲ与フルコトハ到底承諾セサル所ナリ尤
モ移住漁民トハ如何ナルモノナルヤハ往電第十三号ニテ申
上置タル保證アルニ付露国政府ニ於テ此例外ヲ濫用スルノ

end of each twelve years on common accord between
the two High Contracting Parties.

一一三 明治卅四年四月二十三日 林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛(電報)

漁区貸下ニ関スル議定書作成ノ提案ニ対シ訓令ノ件

四月二十三日前一、五〇分發

在露 本野公使 林 大臣

第七七号

貴電第一〇六号

漁業協約案中未決ノ諸点ハ此上商議ヲ重ネテ妥協ニ至ルヲ
期シ協約ヲ締結スルノ覚悟ハ今ヨリ已ニ之ヲ有スルニ付此
旨覺書ヲ作り差支ナシ

一一四 明治卅四年四月二十七日 林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛(電報)

協定事項ニ関シ回訓ノ件

四月廿七日后二時二十分發

本野公使 林 大臣

林外務大臣時代 日露漁業協約 一一三 一一四

恐ナシト信ス要スルニ右等ノ制限ハ将来我新漁区ノ開設ニ
就テハ多少妨ケアルコトハ勿論ナルヘケレドモ現在土民又
ハ移住漁民(コロニスト)カ有シ居ル漁区ヲ将来我漁区ト
ナサントスルハ到底出来能ハサル所ナリ又移住漁民新ニ住
居ヲ作りタルトキ之ニ其部分ノ漁業権ヲ露国政府カ与ヘン
トスルコトヲ拒絶スルコトモ講和條約第十一條ノ文面丈ニ
テハ為シ能ハサル所ナリ右ノ理由アルニ依リ本問題ハ本官
カ百方苦慮尽力ノ結果纏メ得タル所ニテ御満足アラシコト
ヲ希望ス

右ノ外露国委員ハ協約期限ニ関スル條文ヲ改メテ

The present convention is concluded for twelve years.

It may be renewed or modified on common accord

between the two High Contracting Parties. トナサンコ

トヲ提議セリ是レ原文ノ書キ方ニテハ協約ハ無期限ナルカ
如ク見エ十二年ノ終リニ至リテモ更新又ハ修正ノ外ニ途ナ
キニ至ランコトヲ恐レ居リテ非常ニ熱心ニ固執セリ右ハ左
ノ意味ニ纏ムル様力セントス

The present convention shall remain in force for
twelve years. It will be renewed or modified at the

第八三号

貴電第一〇七号

(一) リマンノ漁業ニ日本人ヲ使用スルノ權ハ帝國政府ノ最
モ重要視スル所ナレトモ協約ノ締結ヲ無限ニ延引スルハ
相互ニ取リ不利益ナルヲ以テ且ラク我要求ヲ撤回ス
貴電ノ本項末段ニ長期漁区以外ニ於テ漁獲物製造云々ト
アル理由電信ニテ説明アレ

(二) 往電六三三号ノ提議ヲ撤回シ露国案ヲ諾ス

(三) 第一條沿岸ヲ領水ト更ムル案モ撤回ス prepare ナル

文字削除ニ及ハス

(四) 建網ニ関シテ左ノ理由ヲ述ヘ露全權ノ再考ヲ求ムヘシ
露国政府カ魚類ノ養殖保護上必要ノ規定ヲ設ルハ固ヨリ
当然ナルモ元來引網ハ河川及入江ニ用フヘキモ沿岸ニ向
テハ殆ント用フルクハス然ルニ若シ日本人ニ対シ河川入
江及河川入口ヨリ若干露里ヲ除ケル沿岸ニ於テノミ漁業
権ヲ与ヘ而モ之レニ建網ヲ禁スルコトアラハ漁業禁止ト
扱フナキ結果トナルヘシ最モリマンニ於テハ引網ヲ用ヒ
得ヘキ所モアル由ニ付蕃殖上必要ナル程度ニ建網ヲ制限
スルハ異議ナシ就テハ建網ヲ設ケ得ルコトヲ原則トシテ
協約ニ掲ケリマンニ於ケル例外ニ付テハ意見ノ通り保證

ヲ取り之ヲ「プロトコル」ニ載セ置クコトニ協定方尺力アレ

(七) カボクージノ件貴見ノ通り

(六) 先方修正 Except lots already occupied by colonists
ヲ諾ス但協約締結ノ当時既ニ占有セラレタル部分ニ限り
之ヲ将来ニ及ホササル事ト定メタシ即チ貴電第一三號協
定事項中露國移民等カ將來何人モ占有セサル場所ニ来
リ其処ニ住居ヲ占ムルトキハ其者ニ其場所ノ漁業權ヲ与
フル旨ノ留保ハ露政府ニ於テ移民奨励ノ結果遂ニ新漁区
増加ノ全然不能ヲ来スノ虞アルニ付之ヲ削除スル様尽力
アリタシ

協約期限ニ関シ露國案ハ平和條約ノ精神ヲ没却スルノ虞
アリ是非貴案ノ通り修正方尺力アレ

一二五 明治卅四年四月廿六日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)

河川及入江ノ定義ニ関シ請訓ノ件(一)(二)

(一)

四月廿八日 午後七、五 露都發
四月廿九日 午前一一、〇 本省着

林外務大臣 在露 本野公使

(安心シ?)
アンシンベン得ル様解決セララルニアラサレハ協約ノ締結
モ甚ク困難ナリト主張セリ所謂エスチュアリアインレツ
ト論ト區別シ河川ニ關聯シテ除外区域ニ入レントスルノ
意向ハイインレツトニ關スル談判中露國委員ノ洩ラシタル
コ罗纳リシ(アナジイル灣ノラブセルバチイ以内ノ部分及
ビカムチャツカ西岸ニ注ク河川)ノ出口ニアル入江ニ關シ
テ)モ當時未タ黒龍江リマン問題解決セス又露國委員モ右
ニ關シ当方ノ同意ヲ求メタルニ(ハ)アラサリシニ付我委
員ニ於テハ之ヲ聞キ置ク專ニ止メタルナリ

(二)

四月廿八日 后七、四〇 露都發
四月廿九日 后一、五五 本省着

林外務大臣 本野全權公使

第一一一号(続キ)

今日露國委員ノ恐ルル所ハ「エスチュアリア」ハ「インレ
ツト」ノ表ヨリ省キ置キタルヲ以テ此儘ニ協約ヲ締結セハ
一切ノ「エスチュアリア」ニモ日本人ニ漁区貸下ヲ行ハサ
ルヘカラストノ解釈ヲ生セントニアリテ露國全權ハ此問
題ヲ解決シタル後ニアラサレハ本年ヨリ漁区貸下ケヲ行フ
コトニ關スル「プロトコル」モ締結スルコト能ハスト述ヘ

第一一一号

往電第一〇七号ノ九ニ關スル協議中露國全權ハ協約第一條
附屬ノ議定書ニ於テ河川及入江ノ範圍ヲ明記シ置カンコト
ヲ提議シ其内河川ニ關シテハ左ノ如キ案ヲ提出セリ

River formations (mouth of river including widening
[evasement]) of mouth in a form of bay, namely;
constitute part of inland waters are ipso facto excluded
from the effect of convention. It has moreover been
recognized, as superfluous to fix geographical limits of
such formations for each case as they are sufficiently
determined by nature

本官ハ今更新ル問題ヲ提出スルノ時機ニアラサルコト及若
シ今ヨリ之ヲ討議スルトセハ再ヒ長時日ヲ費ヤシ協約締結
ノ期限益々遅延スルトノ理由ヲ以テ問題トナランコトヲ拒
ミクリシカ先方ハ他日ノ誤解ヲ防ク為メ此事ヲ明記シ置ク
事ハ絶対的必要ナルコト及河口ノ入江ハ領海ニアラサルヲ
以テ之カ除外ハ勿論ノ事ナレハ直ニ本官ノ同意ヲ得ル
コトト信シ居リ從テ此種ノ入江ハイインレツト論ノ際ニモ
(?)
特更 日 問題ト為ササリシナリ故ニ此事ニシテ露國ノ

タリ本官ハ此問題ヲ以テ「プロトコル」締結ニ対スル必要
條件ト為スノ不当ヲ責メテ「プロトコル」之ニ關係ナク締
結スヘキコトヲ主張シタルニ先方ハ更ニ熟考ノ上確答スヘ
シトテ別レタリ本官熟々考フルニ先方カ右ノ問題ヲ持チ出
シタル以上ハ相當ノ解決ヲ与ヘスシテ協約ヲ締結スルコト
困難ナルノミナラス元來「エスチュアリア」ハ露國ノ漁業規
則ニ於テ概ネ河川ノ区域ニ入レ置ケルモノナルヲ以テ此問
題ヲ未決ノ儘ニ協約ヲ結ビ得ルトモ其結果タルヤ日本人ニ
「エスチュアリア」内ノ漁区ヲ与フルコトヲ承諾セサルヘ
ク結局我利益トナルコト覺東ナカルヘシ就テハ之ヲ解決ス
ルノ途ハ講和條約ノ會議録ニ所謂河川トハ何レノ区域迄ヲ
指スヤ各場合毎ニ双方ノ協議ヲ以テ一時協定スルカ若ク
ハ河川ナル語ハ何レノ区域迄ヲ意味スルヤハ國際法ノ議論
ニヨリテ決スヘキ旨協定シ置ノ外ナシト信ス然ルニ今ヨリ
一々実地ニ就キ河川ノ区域ヲ協定スルコトハ殆ント不可能
ノコトナレハ右第二ノ方法ニヨリ一先此問題ヲ片附ケ置キ
タシ尤モ國際法ノ議論ニ讓ルトスルモ果シテ我ニ利益アル
結果ヲ得ヘキヤ否ヤ明カナラサレトモ此以上ニ良法ヲ發見
スルコト能ハス又此案ナラハ露國全權モ反對スルノ口実ナ
カルヘク斯クシテ他日研究ノ結果多少利益アル論拠ヲ得テ

更ニ交渉シ得ルノ余地ヲ存スルコト然ルヘント認ムルニヨリ右様提議シテ可然ヤ電訓アリタシ又「インレット」ニ関シテハ先方ハ既ニ協定ヲ經タル三十ヶ処ノ表ヲ作ルニ際シ一々何岬ヨリ何岬ニ至ル線迄ト範圍ヲ明記シ置カントトヲ提議セリ之ニ関スル先方ノ意見ハ多クハ「インレット」論ノ時既ニ漏ラシ居リタルモノニシテ且ツ一二ヲ除外ノ不穩當ノ廉モナシト認メラルルニ付キ当方ニ於テ右ノフリンントウハ既ニ見込ヲ以テ可成我利益トナル様協定スルコトニ尽力スル様御承認アリタシ

右二件大至急返電ヲ待ツ
貴電第七七号ニ就テハ前記ノ次第ニテ今尙談判中ニテ河川論ニ關係ナク落着セシムル様尽力シ居レリ兩三日中ニハ多分片付クヘシ

一二六 明治四年四月三十日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)

漁区貸下議定書調印ニ関シ請訓ノ件
四月 三十日 午后四、五〇 露都着
五月 一日 午前七、〇〇 本省着

録ニ留メ漁区貸下ノプロトコルニ調印スル様計ハレタシ
(一) インレットノ範圍ヲ明記スルノ件モ貴官ノ見込ニ一任ス

一二八 明治四年五月四日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)

漁区貸下議定書調印報告ノ件
五月 四日 后 六、一〇 彼得堡着
五日 前一、四〇 本省着

林外務大臣 本野公使
第一三〇号
往電第一一三号

議定書五月四日調印セリ右ニツキ露国政府ハ本季ヨリ我臣民ニ対シ漁区貸渡シノ競売ニ参与スルコトヲ許可シ而シテ本漁期間ニ得タル漁区ハ條約期限以外トシテ特ニ之ヲ与フル旨宣言セリ又露国官憲ハ本期間ハ露国臣民ニ対シテモ長期ノ漁区貸渡ハ行ハサル旨明言セリ

林外務大臣 在露 本野公使

第一一三号
本年ヨリ漁区貸下ゲノ「プロトコル」調印ノ件河川問題ノ為メ協議何分纏マラス就テハ本官ノ所見ニ依レハ河川問題ハ既ニ往電第一一一号ニテ申上ケ置キタル通り此際之ヲ確定スルコトハ事実不可能ニ付或ハ本問題ヲ全ク不問ニ措クカ又ハ単ニ國際公法ノ原則ニヨリ之レヲ決定スヘントノ事ヲ會議録ニ止メ置ク丈ノ事トシテ可成速ニ漁区貸下ケノプロトコルニ調印スル方得策ナルヘント信ス右様取計ラヒ可然哉至急御返電アリ度シ

一二七 明治四年五月三日 林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛(電報)

河川及入江ノ定義ニ関シ回訓ノ件
五月二日午前十一時十分着

本野公使 林大臣
第八六号
貴電第一一一号ニ関シ
(一) 河川問題ハ國際法ノ原則ニ依リ決定スヘキコトヲ會議

一二九 明治四年五月六日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)

協定事項ニ関シ請訓ノ件(一)(二)
(一)
五月六日 前一、一〇 彼得堡着
后 八、〇〇 本省着

林外務大臣 本野公使
第一二二号
貴電第八三号

(一) 末段長期漁区云々トハ「リマン」ノ漁業規則ニヨレハ長期漁区内ニ於テハ一切外国人ノ労働者ヲ用フルコトヲ許サス尤モ監督員ノ如キハ外国人ニテモ可ナリ短期漁区内ニハ漁獲ニ従事スルモノハ露国人タルコトヲ要スルモノニハ漁獲ニ従事スルモノニハ之ノ制限ナシ而シテ長期漁区ニハ陸上ニテモ外国労働者ヲ許ササルハ地方官ノ監督行キ届カサルニ乗シ之レ等労働者力筋力ニ漁獲ニ従事スル恐レアルヲ以テナリ而シテ長期漁区ニ於テ採集シタル魚類ヲ製造センカ為メニハ同漁区ヨリ数露里ヲ隔テタル地ニ別ニ短期ノ製魚区ヲ貸下ゲ之ノ製魚区ニ於テハ労働者ノ国籍ニ制限ナシトノ事ナリ

(二) 露国移住民ニ漁業權ヲ与ヘ得ル云々ノ留保ハ往電第一

○七号ニ陳ヘタル如ク往電第一三号ノ結果ヲ得ル迄ニ我委員ヨリ媾和條約ノ精神「インレット」除外ノ理由等ニヨリ極力争ヒタル問題ニシテ其後全權ノ会合ニ於テ本官ヨリ之レカ撤回ニ尽力シタレトモ露国全權等ハ本協約ノ為メ自國ノ殖民政策ニ妨ガラズコトハ断シテ承諾スルコト能ハス媾和條約ニヨルモ斯ル犠牲ヲ為スノ義務アルコトヲ認メス右ノ留保ヲ條件トスルニ非レハ日本臣民ノ請求次第新漁区ヲ開クトノ規定ヲ承諾スルコト能ハス又是非共之ノ留保ヲ撤回セヨトノ事ナラハ「インレット」論ヲ更ニ当初ヨリ交渉スルノ外ナシト述ベタルヲ以テ本官ハ「一旦競売ノ為メ開設シタル漁区ハ協約期限内中移住民ニ与フルコトナシ」トノ條件ヲ附シテ右ノ留保ヲ容レ往電第一三号ノ如ク繼メタルモノナレハ今更第一條ヲ再議スル覚悟アルニアラサレハ右ノ留保撤回ヲ申シ込ム余地ナシ而シテ本件ハ昨年實電第九一号ノ御主意ニヨリ纏メタルモノナリ就テハ本件ハ最早奈何トモ致シ難キニツキ左様御承相成度シ(續ク)

(一一)

五月五日 前一二、一〇 彼得堡宛
五月六日 后四、二五 本省着

ヲ得ル時期甚ク遅レ且ツ手数數モ煩シカルヘシトテ再考ヲ求メタルモ露国委員承諾セス就テハ右ノ露国案ヲ承諾シテ差支ナキヤ或ハ最初ノ案ヲ固持スヘキヤ此ノ場合ニハ四期以後ニ於テ二年以内ノ貸下ヲ承諾スル覚悟アルニ非レハ交渉モ行ヒ難シ右至急電訓ヲ乞フ

一一三〇 明治卅年五月六日 林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛(電報)

協定事項承諾ノ旨通報ノ件

五月六日後四時〇分發

本野公使

林大臣

第九〇号

貴電第一一七号ニ関シ貴官ノ纏メタル事項ヲ承認ス但通商漁業兩條約共決定次第公文ヲ最近便ニテ郵送セラレタシ右一読ノ上記名ノ訓令ヲ与フヘシ

林外務大臣

本野公使

第一二一号(統キ)

(四) 建網ノ件ハ段々交渉ノ結果露国委員ハ河川ノ入口ニ最モ近キ漁区ヲ除キ其他ノ漁区ニハ建網ヲ禁スルコトナシ又河口近クノ漁区ニテモ引網ヲ用フルコト能ハサル場合ニハ建網ヲ禁セサルコトヲ議定書ニ認メ置クコトヲ承諾セリ露国委員ハ右ノ保証ハ通常ノ建網ヲ意味スルモノナルコトヲ断リ且ツリマンニ関シテハ同地ノ漁業規則ニヨリ定マリ日本人ハ之ノ規則ニ遵フコトヲ諾スルモノ故特ニ保証ヲ与フル事能ハス又其必要ナカラント云ヘリ右ノ外左ノ点ニツキ折返シ訓令アリタシ

往電第三四号ノ二ニ報シタル漁区貸下期限ノ事ニツキ起草委員会ニ於テ我委員ハ第三期以後ハ總テ數年貸下トナスヘキ案ヲ提出シタルトコ先方ハ第四期ニモ六年貸下クルコトトナスハ協約期限以後ニ涉ルヲ以テ承諾スルコト能ハスト答ヘテ左ノ案ヲ提出セリ
初期一年第二期二年第三期三年第四期六年而シテ右ハ協約更新期限ニ鑑ミ且ツ露国ノ都合上当初ハ可成短期ニ貸下ケ漸次長期トナスコトヲ希望スルヨリ立テタル案ナリト切ニ我同意ヲ求メ来レリ我委員ハ右ニテハ長期ノ漁区

一一三一 明治卅年五月十日 林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛(電報)

協定除外漁区ニ於ケル漁業許可ニ関シ
交渉方訓令ノ件

五月十日午後三時十五分發

本野公使

林大臣

第九三号

ハバロフスク固有財産庁カ本月四日官報ヲ以テ本年露国臣民ニ漁業ヲ許可スヘキ港灣二十九ヶ処ヲ指定セル内二十四ヶ所ハ何レモ入江ト協定セラレタルモノ(但シブレオブラジエニエハ殖民ノ為メ留保セラレタル部ニ属スルヲ以テ撤回セラレタルモノト思ヒ居リシニ茲ニ入江中ニ數ララルハ如何ナル行違ニヤ)ナレトモ残り五ヶ処ハ軍事上必要トシテ漁業協約ノ範圍外ニ置キタル場所ナリ平和條約第十一條ハ国防ノ為メ露国沿岸ノ或部分ヲ留保セルコトナキニ由リ之ヲ漁業協約ノ範圍外ニ置クヘキ理由ナキモノナレトモ帝國政府ハ實際余儀ナキモノト認メ交讓ノ精神ヲ以テ之ヲ範圍外ニ置クコトニ同意シタリシニ今ヤ露国政府ハ軍事上ノ理由ニ因リ除外シタル五ヶノ入江ヲ悉ク露国人ニ貸下ントスルハ帝國政府ノ意外トスル所ナリ既ニ露国人ニ漁業ヲ

許シ得ル以上ハ本邦人ニモ之ヲ許与セサル理由ナキニ付右五ヶ所ハ本邦漁業者ヲ除外スヘキ漁場ノ表中ヨリ取り除ケ之カ漁業権ハ本邦人ニモ均ク之ヲ許与スル様露国政府ト御交渉アリクシ

一三二 明治四年五月十日 林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛 (電報)

漁区貸下期限ニ関シ交渉方訓令ノ件

五月十日午後四時十分發

本野 公使 林 大 臣

第九四号

貴電第一二二号

漁区貸下期限ニ関シテハ業已ニ貴電第三四号ノ二ノ通り彼我全権ノ間ニ協定アリタルモノナレハ今更之ヲ変更セサル様主張セラレタシ

露政府ハ開設后二年目又ハ三年目ノ漁区ヲ漁業協約締結後即チ明年ニ至リ貸下クル場合ニ之ヲ初年ト見做シテ一漁季ニ限ル意向ナルヤニ察セラレル果シテ然レハ右ハ我ニ取リ不利益且理由ナキコトニ付古キ漁区ハ開始后年月ノ長短ニ

セシメラレンコトヲ希望ス
ト云フニ在リ

一三四 明治四年五月十日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛 (電報)

協定除外漁区ニ於ケル漁業許可ニ関シ

協定ノ件

五月十一日 午後二、五二 露京發
午後二、四〇 本省着

林外務大臣 本野 公使

第一二五号

貴電第九三号ニ関シ

軍事上ノ理由ニ依リ除外セル五ヶ所ノ港湾ハ其区域ニ外国
人ノ漁業ヲ許サズトノ趣旨ニテ協定シタルモノナレバ之ニ
露国人ニ漁業ヲ許シタレバトテ今更之ガ変更ヲ申出スベキ
余地ナシ (往電第二五号ノ三御再読アリクシ) 又ブレヲラ
ラジエニエハ当初其全体ヲ殖民ノ為メ留保シタルモノナレ
トモ交渉ノ結果之ヲ変更シテ其東北部ニ在ル深ク陸中ニ入
リ込ミタル入江ノミ (マトベイエフ崎ヨリ東) ヲ「インレ
ット」ト定メタルモノナリ (貴電第一二二号往電第二五号御

林外務大臣時代 日露漁業協約 一三四 一三五

因リテ直チニ三年又ハ六年ノ長期貸下ヲ為スコトニ定メラ
レタシ

又漁業協約ハ十二年ヲ經ハ変更セラルルコトアルヘキモ日
本臣民ノ漁業権ハ消滅セシムル理由ナキニ付長期貸下ノ中
間ニ於テ協約ノ年限ニ達シクル場合ニハ其漁業権ヲ継続セ
シメ貸下ノ條件タケテ新協約ニ拠ラシムルコトニ協定ヲ望
ム

一三三 明治四年五月十日 露国公使ヨリ
林外務大臣宛

露国政府ノ好誼伝達日本政府ノ交譲商議

希望ノ件

覚 (口達)

四十年五月十日露公使來省大臣ニ面会ノ節本国外務大臣電
訓ノ一節ヲ読ミ聞セタリ

其要旨ハ

露国政府ハ好誼ヲ表彰シテ日露漁業協約未ク締結ニ到ラ
サルニ拘ラス本年ヨリ日本人ノ漁業ヲ許可スルヲ承諾シ
タリ就テハ日本政府ニ於テモ均シク交譲ノ精神ニ出テテ
懸案ノ漁業協約及通商條約ノ商議ヲ成ルヘク速カニ結了

参照アリクシ) ハバロフスク国有財産省發布ノ港湾表ニ就
キ野村事務官ヨリ当館ヘ達シタル電報ニ依レバ右ハ北部ブ
レヲキラゼニエトアルニ付当地ニ於テ協定シタル通りナリ
ト推察ス

一三五 明治四年五月十日 林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛 (電報)

漁業ニ関スル協定事項公電ノ件

附記 右告示案

五月十一日午後四時四十分發

本野 公使 大 臣

第九六号

本年漁業ニ関スル協定事項ヲ十三日官報ニテ外務省告示ト
シテ發表ス其事項ハ野村ヨリ転電スル管

(附記)

告示案

外協省告示第十号

日露漁業協約締結前臨機ノ措置トシテ日本海オホック海及
ベーリング海ノ露国沿岸ニ於テ本年ヨリ帝國臣民ノ漁業ヲ

許可スルカタメ露西亜国政府ト左ノ事項ヲ協定セリ

一、漁業区 日本海オホツク海及ベーリング海

ノ露国沿岸但河川及入江ヲ除ク

二、漁業許可方法 鮭、鱒、練等ニ在ツテハ一定ノ漁

区ヲ競売ニ付シ競落者ニ漁業権ヲ

付与ス

三、使用漁夫 国籍ノ如何ヲ問ハス但黒龍江海灣

内ニ於ケル漁区ニ就テハ漁業監督

者ノ外ハ露国臣民タル漁夫ヲ使用

スルヲ要ス

四、漁獲物 一切ノ魚類並海産動植物但臘虎及

臘肭獸ヲ除ク

五、魚類製法 殊別的制限ナシ練及練網ニ上リタ

ル雜魚ヲメ粕ニ鮭鱒類ヲ塩漬ニ製

造スルハ孰レモ差支ナシ又場所ニ

依リテハ漁区以外ニ於テ魚類ヲ購

買シテ製魚スルコトモ許サルベシ

六、漁航ノ特許 本邦ヨリ出漁スル船舶ハ露国領事

館ノ裏書アル健康証書ヲ携帯スル

時ハ直接漁区ニ往復スルコトヲ得

区ハ協約実施後直ニ長期貸下ヲ行フコトハ露国委員ニ於テ

異議ナシ尤モ河川入江以外ニ於テ斯ル種類ノ漁区ハ僅ニ數

ヶ所ニ止マル由ニテ是迄ノ談判ハ斯ル漁区ニ關係ナク為シ

来リタルナリ又従来一年限り貸下タル漁区ハ露国当初ノ方

針ニテハ引続キ一年限りノ貸下ヲ行フ趣旨ナリシカ交渉ノ

結果總テ漸次ニ長期漁区ト為サンコトニ打合タルナリ而シ

テ今回此等ノ漁区ニ関シテハ協約実施後直ニ三年若クハ六

年ノ貸下ヲ行フ様交渉シタル処露国委員ハ此等漁区ハ漁区

表ニハ數多掲ケアレドモ其殆ト大部分ハ戰役以來實際借受

ケタルモノナク本年トテモ貸下ノ時期後レ充分講究ノ暇ナ

キヲ以テ本年迄ノ經驗ニテハ此等ノ漁区ニ関スル長期貸付

條件ヲ定ムルコト能ハス又今回ノ協約締結ノ上ハ是迄ノ漁

業仮規則ヲ廢止シ新ニ漁業法ヲ制定シ万事新法ニ拠リ行フ

積リナレハ従来存在セシ短期漁区ト新ニ開クヘキ漁区ト区

別ナク一切協約ノ規定通りニ行フ積リナリト唱ヘテ我請求

ニ応セス又貴電後段ニ関シ協約ノ成行如何ニ拘ハラス一旦

与ヘタル漁区ハ其貸下年限間完全ニ有効ナリトノ趣意ハ露

国委員ノ承認スル所ニシテ之ヲ承認スレハコソ彼等ハ益々

貸下期限ト協約更新期限トヲ一致セシメント尽力シ居ルナ

リ

且一ノ漁区ヨリ他ノ漁区ヘ回航差

支ナシ

七、漁区開始 露国政府ノ發布スル区域表ニ依ル

但同区域表ハ未タ發布ニ至ラス

八、課税免除 漁獲物ヲ本邦ニ向ケ輸出スルニ方

リ輸出税ヲ課セラルルコトナシ

九、漁業取締 露国漁業規則ヲ遵行スヘキ事

右告示ス

明治四十年五月 日 外務大臣子爵 林 董

一三六 明治四年五月三日 本野駐露公使ヨリ

漁区貸下期限ニ関スル露国政府ノ意向

通報ノ件(一)(二)

(一)

五月十二日 後一、五九

五月十三日 后二、四五

林外務大臣 本野公使

第一二八号

貴電第九四号前段ニ関シ従来長期ノ貸下ヲ為シ来リタル漁

(二)

五月十二日 後一、五八 露都發

五月十三日 後一〇、〇〇 本省着

林外務大臣 本野公使

第一二八号(統キ)

第九四号

協約期限ノコトニ付貴電第八三号末段及今回ノ 貴電ニ

拠レハ協約ノ大体ハ永久的ノ性質ヲ有スルモノトノ御趣意

ナルカ如シ然ルニ当初政府送付ノ原案一二條書キ方ニテハ

斯ル解釈ヲ行フコト穩当ナラス又本條ノ書キ方ニ付露国委

員カ往電第三四号ノ八及一〇七末段ニ述ヘタル如キ案ヲ提

出シタルトキハ我委員ハ原案ト同様ノ文句ヲ露国対案ニ於

テ用ヒ居ルコトヲ理由トシテ之ヲ拒絶シタルニ露国委員ハ

本協約ノ右條項ハ何レモ十二年限り実行セラルルコトヲ

予期シテ承諾シタルモノニテ十二年後協約ヲ如何ニスヘ

キヤハ更ニ兩國政府ノ協定スヘキモノニシテ協定成ラズン

バ或ハ排斥セララル、コトモアルヘシ若シ本協約ノ大体ヲ永

久ノ約束トナスノ趣意ナラハ露国ハ其全体ニ亙リテ承諾ヲ

取消サ、ルヘカラスト唱ヘ稍々不安ノ気味ヲ以テ種々ノ議

論ヲ持掛ケ頗ル面倒トナルヘキ模様アリシニ付キ我委員ハ

一応講究ノ上多少先方ノ趣意ヲ斟酌シ新案ヲ立ツヘント約

シ置キ往電第一〇七号末尾ノ案ヲ作り目下之レニテ穩カニ
纏メンコトニ尽力中ナリ故ニ十二年以上ニ亘リ尙露國ヲ拘
束スルノ案ヲ提出セバ當ニ成立ノ望ミナキノミニアラズ協
約更新期限ノ案モ再ヒ面倒トナルヘキ勢ヒアリ尙五月十一
日ノ委員会ニ於テ我委員ハ原案ニ多少ノ修正ヲ加ヘ(四期
以後ニアリテハ露國ニ於テ相当ノ理由ニ依リ必要ト認ムル
場合ニ限り協約更新期限ニ鑑ミ六年以内ノ貸下ヲ行フコト
アルヘシトノ條件ヲ附シ)テコレナラハ承諾スル能ハサル
ノ理由ナカルヘシト質問シタル処露國委員ハ前回ノ期限ニ
関スル協商ハ協約期限十年ナリシトキノコトナレバ之ヲ十
二年ニ延シタル後ハ更ニ改メテ協議スルヲ当然トスト述ヘ
再ヒ前回同様ノ案ヲ出シ頗リニ之ガ承諾ヲ迫リ若シ右ノ案
ニ同意スルコト能ハザレバ初期一年第二期三年第三期三年
第四期五年トスルノ外ナシ就テハ右ノ二案ノ内何レカラ是
非共日本政府ニ於テ御承諾アル様請求セリ閣下ヨリノ御訓
令ニ拠レハ日本臣民ノ漁業権ハ平和條約ニヨリ永久的ニ獲
得シタルモノトノ御見解ナルガ如シト雖モ同條約第十一條
ノ規定ハ此ノ如ク明瞭ナラザルノミナラズ之ヲ同條ニ関ス
ル會議録ノ文面ニ対照スルトキハ寧^{貴見?}コ期限ニ反対ノ解釈
ヲ為サノルベカラサル理由アリ就テハ前陳ノ通り條約更新

期限ニ関スル規定ハ此際余リ明確ニセズ右更新ノ時期ニ至
リ其時ノ情況ニヨリ臨機ノ処置ヲ取ルコト我カガメ利益ナ
ルヘシト認ム就テハ漁区貸下ノ期限ニ付テハ我永久の漁業
権云々ノ議論ハ之ヲ提出セサルヲ可トス若シ強テ之ヲ提出
スル場合ニ於テハ必ス不利益ノ結果ヲ来スハ必然ニ付右御
舍ノ上本件ニ関スル最終ノ御訓令至急御電訓アリタシ

一三七 明治卅年五月三日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)

漁区貸下協定内容報告ノ件(一)(二)

(一)

五月十三日 露都發
五月十四日 本省着

林外務大臣

本野全權公使

第一二九号

往電一三〇号ニ関シ

形式ハ左ノ如ク為スコトニ纏メタリ

第一條往電第二二七号對案中 Catch and prepare 係
alga marina 迄 Catch, take and prepare all kinds of

fish and aquatic products except fur-seals and sea otters
ト改メ末段 which should be 以下ヲ削リ the inlets
forming object of the above exceptions are enumerated
in Paragraph's.....of the Protocol hereto annexed
ヲ加ヘ議定書ニ於テ「インレット」三箇ノ表「モロツク」
海北岸ニ関スル「インレット」ノ定義及ビ国防上ノ理由ニ
依リ除外セラルル四箇ノ入江ヲ添テ又「モロツク」海北岸
ニ於テハ露國政府ハ速ニ調査ニ着手スベキモ其結果ヲ待タ
ズ「インレット」ノ定義ニ合スルコト疑ヒナキ場所ニハ日
本臣民ニ漁区ヲ与フベキ旨會議録ニ記入セシム河川ニ就テ
ハ左ノ規定ヲ議定書ニ入ル Concerning limits of rivers
with respect (to) sea the two high contracting parties
shall conform to the principles and usages of inter-
national law 次「リッペン」ニ関シテハ左ノ規程ヲ議定書
ニ載ク fishery's right granted to Japanese subjects in
the Liman of Amur by virtue of the present convention
is subjected to the following special conditions:(1)

Japanese subjects may acquire in this region fishery
lots by public auction on the same footing as Russian
subjects.(2) Japanese subjects having acquired fishery

lots are subjected in all respects regarding fishing in-
dustry to the same laws, regulations and ordinances,
that are or may be promulgated for fludal fishing
in the basin (of) Amur as the Russian subjects " Ad-
judicataries of fishing lots " themselves and in particular
to the provisions which forbid to the grantees of fishery
lots in this rigion employment of foreign labourers.

(一)

五月十三日 後六、三二
五月十四日 後三、四七

林外務大臣

在露 本野公使

第一二九号(続キ)

而シテ往電第一二二号第一段ノ説明ヲ會議録ニ載ス尙ホ河
川入江以外ニハ日本人民ノ要求次第新漁区ヲ開クコト及露
國政府ガ移住民及土民ノ為メ留保シタル漁業権授与ノコト
〔往電第一三(〇七)号「フマスト」ノ Outside of the
localities 以下ニ文字ノ修正ヲ加ヘタルモノ〕ヲ議定書ニ入
レ又次ノ規定ヲモ議定書ニ入ル Imperial Russian Govt.
assure for Future that the fishing lots already existing
in the Regions specified by Article I. shall remain open

during the whole term of the present convention, except lots actually occupied by colonists for their (fisheries?) 次ニ協約第二條ニ左ノ一項ヲ加フ

Fishing of whales cods and all other fishes and aquatic products whose fishing can not be carried on within special fisheries lots is granted to Japanese subjects on sea-going vessels provided with a special permission 往電第三四号ノ七ニ関シ露国委員ハ別電第一三〇号ノ如キ書面ヲ出シ之ヲ議定書内ニ掲ケ置カント述ベタリ右ハ往電第三四号ニ述ヘタル理由ノ外漁業ノ目的以外ニ露領内ニ人又ハ貨物ヲ運漕スルコトヲ取締ラントスル趣意ニシテ絶對的必要ナリト云ヘリ尚ホ右ノ外露国委員ハ漁業ニ従事スル日本ノ船舶ハ総テ英文若シクハ露文ニ翻訳シタル航海日誌ヲ備付テ置ク事ト致シ度ニ付其旨會議録ニ掲ケ置キ度シト云ハルニ付斯ノ如キハ漁船ニ取リテ非常ノ困難ナルハキ旨諷明シタル処然ラバ汽船丈ケハ翻訳ヲ要スルコトトシ帆船ハ成ルヘク翻訳ヲ備ヘ置カシムルコトノ致シ度キ旨ヲ述ヘタリ其他多少文字ノ修正等アレドモ大体ニ於テ是迄電報シクル趣意ヲ以テ談判纏マリタルニ付テハ貴電第九〇号ノ御

1. Name of vessel and port. at which she is registered;
 2. Name of fishery entre preneur-owner of lot or lots;
 3. Exact indications of fishery lot or lots where the vessel is to proceed;
 4. Nature and weight of cargoes;
 5. Number of persons on board.
- Vessel provided. with above Certificate and Certificate of Health is authorized to enter and call only on the points of Russian littoral indicated in the Certificate.
- It is a matter of course that the ports where customs exist are always accessible to such ships.
- Japanese vessels proceeding in Russian waters to engage in fishery of whale, cod etc. by virtue of paragraph 3 of Article 11 of the present Convention should previously call at one of the Russian ports specially designated where competent Russian authorities will deliver them for such fishing a Special Permission which will serve at the same time as Certificate of Navigation.

Motono.

訓令モブルコトナレバ確定ノ上郵送スベキヤ將確定前各條文ヲ一応閣下ニ電報スベキ至急電訓ヲ之ニ

一三八 明治四十年五月十日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)

航海免状ニ関シ協定報告ノ件

Petersburg, 6.30 p.m., 13/5/07.
Received 11.10 a.m., 14/5/07.

Hayashi,
Tokio.

No. 130.

Certificate of Navigation for the passage from Japan to fisheries in Russian waters and return is delivered by competent Russian Consul to Japanese fisherman upon presentation of documents attesting:

1. Right of lease of lot or lots toward which the vessel is to proceed;
 2. Number of persons on board;
 3. Nature of cargoes as solely destined to fishing industry and its weight.
- The Certificate of Navigation mention:

一三九 明治四十年五月十六日 在浦塩野村貿易事務官ヨリ
林外務大臣宛

日露協定事項ニ関シ上申ノ件

機密第三五号

五月廿一日接受

日露漁業協約ニ関スル件

本年五月二日付機密送第五号及同十一日發貴電第一三三号ニ依リ日露漁業協約ニ関シ其後ノ經過御申越相成尙ホ本年度漁期迄ニハ本協約調印ノ運ニ至ラサルカ故ニ当業者カ營業上最モ必要トナスヘキ重ナル條項丈ケ發表ノ事ニ御協定相成候ニ付貴電第一三三号ニテ御申越之協定事項ニ限り当地在留民ニ承知セシムヘキ旨御訓令之趣拜承致候依テ直ニ漁業ニ關係アル者ヲ招集シ御訓電ノ趣相達シ候処一同ハ本協約ニ依リ本邦臣民カ露国沿岸ニ於テ獲得スヘキ漁業上ノ權利ノ大ナルニ驚キ浅カラス感謝ノ意ヲ表彰致候本協定第七漁区開始ニ関シテハ露国政府ノ發布スヘキ区域表ニヨリ而シテ同区域表ハ未タ發布ニ至ラスト有之候然ルニ漁期ハ追々切迫シ出漁者ハ夫々準備ニ着手スヘキ管ナルモ小官カ聞込ミタル所ニ拠レハ露政府ハ露曆六月初メニ至ラサレハ恐ク漁区表ヲ發布セサルヘントノコトニテ右期日ヲ以テ漁区表ヲ發表シ夫レヨリ競売ヲ施行セハ本年度漁權ノ確定スルハ

本邦曆ニテ早クモ六月廿日前後タラサルヘカラス然ルニ六月中旬ニ相成候テハ最早漁期後レ折角権利ヲ得ルモ何等美効ナキコト、相成而政府カ当業者ノ便利ヲ謀リ本協約締結前態々臨機ノ措置トシテ御協定相成候便益モ当業者ニ於テ享受スル能ハサル次第ニシテ如何ニモ不本意千萬ナルニ付彼等漁業者ノ願書ヲ斟酌シ本月十五日第三〇号電信ヲ以テ漁区表発表ノ期日ヲ繰上ケ候様露政府へ御交渉相成度旨稟請致候次第ニ有之候

右申進候敬具

明治四十年五月十六日

在浦潮 貿易事務官 野村基信(印)

外務大臣子爵 林 董殿 追而貴電第一三三号御協定ノ事項ハ「ニコラエフスク」其他漁業ニ關係アル各地在留民へ相達置候

一四〇 明治四年五月廿日 林外務大臣ヨリ 本野駐露公使宛(電報)

漁区内ニ於ケル外国人ノ労働許可ニ関シ訓令ノ件

第一條ニ関スル議定書案中……except lots actually occupied by colonists for their fisheries ノ文言ヲ附加シタルハ「一旦競売ノ為メ開設シタル漁区ハ協約期限内移住民ニ与フルコトナシ」トアリテ是迄一旦開設シタル漁区ハ協約期限内総テ之ヲ開キ置キ移住民ニ之ヲ与フルコトナシトスルノ趣意ニ反シ且ツ前記露案ノ如ク移住民ノ占領シ居ル漁区ハ露国政府ニ於テ日本臣民ニ対シ随意ニ之ヲ鎖スコトヲ得ルト為スニ於テハ前記漁区開設継続ノ保證ハ其ノ実効ヲ失フヘキヲ以テ貴官ハ是迄一旦開設シタル漁区ハ協約期限内中常ニ之ヲ開キ置キ移住民ニ之ヲ与フルコトナキ様改メテ協定セラルヘシ

鯨等ニ関シ協約第二條ニ加ヘタル一項ハ差支ナシ 貴電第一三〇号ノ文言ヲ議定書内ニ掲ケ置クコト差支ナシ 又我漁船ニシテ必要ナル書類ヲ携帯シ一旦漁場ニ赴キタル以上ハ其時ノ都合ニ依リ何等ノ手續ヲ要セス自由ニ他ノ漁場ニ赴クコトヲ得ヘキハ協約第八條第二項ノ明文上疑ナシ

本野公使 林 大臣

第一〇二号

貴電第一二二一号ニ関シ長期漁区内ニハ一切外国人ノ労働者ヲ禁スルニ反シ短期漁区内ニハ製造其他陸上ノ労働ニ外国人ヲ許スノ理由詳細説明アレ

貴電第一二八号ニ関シ

漁区貸下期限ハ初期一年第二期五年第三期六年トナスコトニ協定シタシ但シ貴官ノ尽力ニ拘ハラス右ノ協定成立セサルトキハ露案ノ如ク一年三年三年及ヒ五年ト為スモ差支ナシ

協約期限ノ事ニ関シテ平和條約第十一條ノ正文ト會議録トヲ対照スルトキハ漁業権ノ性質永久的ニ非スト解釈スヘキ理由アリトハ了解ニ苦ム所ナレトモ貴電第一〇七号末尾ノ貴案ノ通り纏ルニ於テハ御意見ノ通り此際漁業権永久論ヲ提出セスシテ可ナリ

貴電第一二九号ニ関シ

第一條ノ文言差支ナシ議定書ニ掲クヘキ「インレット」表三個トアルハ何々ナリヤ又国防上ノ理由ニ依リ除外セラルル入江ハ五個ト思ヒシニ四個トアリ其ノ名称承知シタシ 河川並ニ「リマン」ニ關スル規定共ニ差支ナシ

ト信スレトモ若シ貴官ニ於テ疑アラハ確カメ置カルヘシ 貴官ノ是迄纏メタル協約、議定書等ノ文言ノ写一切至急郵送アリタシ

一四一 明治四年五月廿日 本野駐露公使ヨリ 林外務大臣宛(電報)

漁区内ニ於ケル外国人ノ労働許可ニ関シ

回答ノ件(一)(二)

(一)

五月十八日 後四、〇五 露京發
五月十九日 前一、二五 本省着

林外務大臣 本野公使

第一三五号

貴電第一〇二号ニ関シ

「リマヌ」ノ短期漁区内陸上ニ外國労働者ヲ許ス理由ハ短期漁区ハ試ミノ時期ニ屬シ長期漁区ノ如ク前以テ準備ヲ整ヘ多数ノ労働者ヲ雇入レテ大仕掛ニ漁業ヲ営ムモノト趣ヲ異ニシ之ニ長期漁区ノ如ク別ニ製魚区ヲ借受ケザレバ外國労働者ヲ用ルコト能ハザルコト、スルハ借受人ノ困難非常

ナルベキヲ以テ此事情ヲ酌量シテ特別ニ右ノ如クナシ得ル
モノナリトノコトナリ

漁区貸下期限ヲ一年(不明)年六年ト改ムル案ハ往電第一

二一號末段ニ闕スル交渉ニ際シ我委員ヨリ委員限りノ

私談トシテ試ニ先方ノ対案ヲ右ノ如ク改メ之ナラバ妥協ノ

道アラムカトテ露國委員ノ意見ヲ糺シタル所ナリシモ露國

委員ハ一年限りノ經驗ヲ以テ直チニ五年ノ貸下條件ヲ定ム

ルコトハ困難ナリトノ理由ニ依リ承諾セザリシナリ尙ホ今

回ノ貴電ニ依リ我委員ヲシテ更ニ最終ノ讓歩トシテ右ノ案

ニ同意センコトヲ露國委員ニ掛合シメ百方目的ヲ達センコ

トニ尽力セシメタレドモ露國委員ハ前回同様ノ理由ヲ固執

シテ動カザルニ依リ已ムヲ得ズ一年三年三年及ビ五年ト纏

メシメタリ

議定書ニ掲グベキ「インレット」表ハ三十個所ナリ其場所

ハ往電第一一三號ニ掲ゲタル「インレット」閉塞入江及ビ例

外入江(此内往電第七三號ノ一ニ掲ゲタル四個ヲ除ク)ナ

リ国防上ノ理由ニ依リ除外セラルルモノハ往電第一一三號ノ

通り但シ右ノ内三十九ト四十一ヲ一箇所數ヘ居レル為メ四

個トナリタル迄ナリ(続ク)

場へ自由ニ赴クコトヲ得ル趣意ヲ明カニセン為メ往電第一
三〇號ニ特ニ Lot of Lots ト認メ又(證明書ニ認メタル露
國沿岸ノ諸点ニ入り又ハ立寄ルコトヲ得)トノ文句ヲ掲ゲ
タルナリ

一四二 明治四十年五月六日 林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛(電報)

漁区貸下及漁夫ノ旅券ニ關シ交渉方訓令ノ件

五月十八日午後六時三十四分発

在露 本野公使 林 大 臣

第一〇四号

(一) 漁区競売ノ期日ヲ六月廿日頃トスルトキハ縦シ日本人

ニシテ競落スルモ本邦ニ立帰リ在函館露國領事館ニ就キ

貴電第一一三〇号ノ手続ヲ完了シ東部加方面ノ漁区ニ到ル

ニハ約三十日ヲ要シ斯クテハ到底本年ノ漁期ニ間ニ合ハ

サルニツキ是非之ヲ六月五日頃ニ繰上ケラレタシト本邦

漁業家一同切望ス右ハ露國漁業家ニ取リテモ同様ノ利益

問題ニシテ願意至極尤ト認ムルニ付露政府ト至急交渉ア

リタシ

(一)

五月十八日 午後 四、一〇 露都發
五月十九日 午前 一、一五 本省着

林外務大臣 本野公使

第一三五号(続キ)

Except lots actually occupied by colonists for their

fisheriesノ文句ハ貴電第八三號ノ十二依リ承諾シタルモ

ノ右以後特ニ改メ協約締結ノ際移住民ガ現ニ漁業權ヲ有

シ居ル場所ヲ除外スルノ趣意ニナシタルモノ(actuallyハ

仏語ノ *actuellement* ノコト)ナリ此事ニ關シ委員會ニ於

テ露國委員ノ述ベタル所ニ依レバ是迄発布シタル漁区表ニ

掲ゲタルモノ直チニ以テキ四イ漁区ト見做スベカラズ特

ニ最近四年間ニ掲ゲタル漁区中ニハ開設ニ至ラザルモノ

極メテ夥シ又會テ貸下表ニ掲ゲタル漁区モ今日ハ既ニ移住

民ガ其沿岸ニ住居ヲ占メタル為メ之ニ其前面ノ漁業權ヲ附

与シ將來競売ニ附セザルコトトナシタルモノモアリ日本海

沿岸ニハ此種ノモノ多シ此等ハ移住民ノ漁業權ヲ奪ヒテ以

テ競売漁区トナスコトヲ得ザルハ勿論ナリト

右ノ次第ニ付最早之ヲ修正セシムルノ余地ナシ

一人ニシテ數個ノ漁場ヲ有スルトキ其一ノ漁場ヨリ他ノ漁

(二) 漁区ノ貸下ヲ受ケタル本邦漁業者ノ船舶ニシテ暴風其

他海難ヲ避ルタメ附近ノ港湾河川ニ逃ゲ込ム場合ニ避難

船舶ノ取ルヘキ手続ニツキ一定ノ規則アリヤ問合セ電報

アレ

(三) 本邦ヨリ漁区ニ向フ漁夫ニ對シテハ一切旅行券携帯ノ

義務ヲ免除セシメタシ彼等ハ殆ント無人ノ地ニシテ而モ

多クノ場合ハ旅券ヲ示スヘキ官府モナキ所ニ進ムモノナ

ルノミナラス漁業季節切迫ニ際シテ出発スル多數ノ漁夫

ニ向テ一々旅行券ノ携帯ヲ命スルハ漁業主ニ取リ莫大ノ

手數ヲ懸ケ又往々不可能ノ場合起ルベシ依リテ已ムナク

ムバ漁区主、船長漁業監督者ダケハ普通旅券ヲ携帯セシ

メ漁夫ニハ全然之ヲ免除スル様交渉アレ又漁業者一同ハ

主トシテ一定ノ季節間一定ノ業務ニ従事シ本邦ト漁区間

ヲ往復スルモノナレバ居住券又ハ出發許可券等ノ制限ヲ

受ケシムヘキニ非ルハ勿論ナルベシ

一四三 明治四年五月二十日 本野駐露公使ヨリ 林外務大臣宛(電報)

前件ニ関シ回報ノ件

附記 五月二十六日日本野公使追電

五月廿一日 後七、三〇 露都發
後一日 後一、二〇〇 東京着

林外務大臣 本野公使

第一三七号

貴電第一〇四号(一)競売ハ協約談判ノ主任者タリシ「ブラジニコフ」赴任ノ上行フ手筈ニナリ居ルヲ以テ六月十四日以前ニ行フコトハ不可能ナリ強テ其以前ニ行ハントスレバ協約ノ詳細ヲ知ラサル地方官ヲシテ扱ハシメサルヘカラサルヲ以テ却テ日本人ニ不利益ノコトナキヲ保シ難シ然レトモ本年ノ漁季節切迫セルコトヲ考量シテ左ノ二件ヲ承諾スヘキ旨露国全權回答セリ(イ)競売ハ六月十四日浦潮ニ於テ行フコト(ロ)日本ノ競売者確定セハ其姓名ヲ露国地方官ヨリ在函館露国領事ヘ電報シ同領事館ニ於テハ漁区貸下證書提出ヲ要セスレテ往電第一三〇号ノ手続ニ依リ願出ツルモノニ航海證明書ヲ下付スルコト而シテ漁区貸下證書ハ爾後ニ至リ願出人ヨリ露国領事館ヘ差出スコト右ハ「ブラジニコフ」出發以前出来得ル限り時期ヲ早メ手続ヲ迅速ナラシメントシ

林外務大臣 在露 本野公使

第一四三号

往電第一三七号(二)ニ関シ

外務省ニ就キ取調ベタル処露国法令全書第一一卷 商法中セリホウカイクツ? 海 商ニ関スル規程ノ外避難船舶ニ関スル法規ナシ併シテ同規程中ニハ船舶ガ風波ヲ避クル為メ港灣ニ入ルコトヲ得ル旨規定セルモ単ニ入泊シタルノミノ船舶ニ何等ノ手続ヲ探ルベキコトヲ規定セス併シ船舶ガ海難ニ罹リ積荷又ハ船舶ヲ売却質入為サントスル場合ニ守ルベキ手続キハ同法第二編四九九條乃至五五七條ニ規定セリ

一四四 明治四年五月二十日 林外務大臣ヨリ 本野駐露公使宛(電報)

漁区貸下及漁夫ノ旅券ニ関スル交渉ニ付キ

回訓ノ件

五月二十一日午後八時十五分發

本野公使 林大臣

第一〇七号

貴電第一三七号競売ニ関スル便法ハ余儀ナキモノトシテ滿

林外務大臣時代 日露漁業協約 一四四 一四五

テ案出シタル方法ニシテ同人ハ二十日出發赴任シタリ右ノ次第ニシテ我方ニ取りテモ同人到着後競売ヲ行フコトト為ス方利益ナルヘキニ付キ此便法ヲ以テ満足スルノ外ナシ(二)漁船ニ限ル特別ノ法規ナシ一般ノ規則ニ抛ル而シテ其規則如何ハ目下取調中追テ電報スヘシ(外)務次官ノ説明ニ旅券免除ハ露国法律ノ規定モアルコトナレバ到底承諾スルコト能ハス尤モ本年ニ限り手続ヲ省カン為メ漁夫姓名毎ニ各別ノ旅券ヲ下付スル代リニ船長ノ旅券ニ其名前ヲ並記スルコトトナス又ケナラバ内務省トモ交渉スル道アルヘントノコトナリ尤モ斯ノ如クスルトキハ同旅券ニ姓名ヲ記載セラレタルモノガ分レテ別ノ漁区ニ赴カント欲スルモ能ハザルカ如キ不便アルヘシ又居住券出帆許可券ノ制限ハ事情ヲ酌量シテ多少寛大ニスルコトハ為シ得ルナラン是亦内務省ト交渉ヲ要スルニ付書面ヲ以テ要求セラレタリトノコトナリ就テハ右ニ記載セル便法ニテモ要求スベキヤ書面提出以前心得置キタキニ付至急電訓ヲ請フ

(附記)

五月二十六日 日本野公使追電

露国領水内汽船碇泊規定ニ関シ報告ノ件

五月二十六日 后七、〇〇 露都發
五月二十七日 后三、四〇〇 本省着

足スベシ但シ只今野村ヨリ來電ニ依レバ露曆六月一日ハバロフスタニ於テ漁区競売ヲ舉行スル旨總督府ヨリ公示セリトアリ競売ノ場所ヲハバロフスタセルハ貴電ト反ス右ハ浦塩ト訂正方請求セラルベシ 旅券手続省略ニ関スル便法ハ帆船ナレバ貴見ノ通り汽船ニテ沿岸漁区ニ漁夫ヲ植付ル場合ニハ各漁区ニ充ツヘキ漁夫ヲ率ユル漁業主若ハ監督者アルニ付キ各漁業主又ハ監督者ノ旅券面ニ各其率ユル漁夫ノ姓名ヲ併記スルコトニ要求セラレタシ 居住券及出發許可券ハ約三千海里ニ亘ル沿海ニ四五個所ノ官衙アルノミナル事実ト又露領時代ニ於ケル薩哈噠ノ日本漁夫ニ對シ露国カ嘗テ斯種ノ規則ヲ適用シタルコトナカリシ前例等ニ鑑ミ全然自由トスルコト是非必要ニ付其含ニテ交渉アリタシ

一四五 明治四年五月二十四日 林外務大臣ヨリ 本野駐露公使宛(電報)

漁区内ニ於ケル外国人ノ労働許可ニ関シ照会ノ件

五月二十四日午後發

本野公使 林大臣

第一〇九号 貴電第一三五号ニ関シ

昨年貴電第一三号及本年第一二二一号等ニ依リ(一)從來一旦開設シタル漁区則チ曾テ貸下表ニ掲ケ一度競売ニ付シタル場所ハ何レモ將來決シテ之ヲ閉鎖スルコトナカルヘク又(二)前記諸場所以外ニ於テ將來日本人ヨリ新クニ漁区ノ開設ヲ願出ルトキハ露國政府之ヲ許スヘシ(三)但シ露國移住民力將來未ク何人モ占有セサル場所ニ到リ其所ニ住居ヲ占ムルトキハ其者ニ其場所ノ漁業權ヲ与フルコトヲ留保スルモノト解シタリシニ貴電一二九号及一三五号ノ趣意ハ右(一)ニ関シ全ク之ニ反ス是レ明カニ意思ノ疏通ヲ缺キタルナリ本大臣ハ本件ノ重要ナルニ顧ミ更ニ貴官ノ尽力ニ依リ第一〇二号訓令ノ通り協定ヲ望ム貴電第一三五号ニ於テ露國委員ガ是迄發布シタル漁区表ニ掲ケタルモノハ直チニ既開漁区ト見做スヘカラス(中略)極メテ夥シ云々ト云ハレシ如キハ單リ既開ノ漁区ヲ閉サザルノミナラス或ル留保ヲ以テ新漁区ヲ開クコトヲ約セル精神ヲ根本ヨリ没却セルモノニシテ其結果實際日本人ニ貸下ケ得ヘキ漁区ヲ極メテ少数ニ減却シ遂ニ本邦人ノ漁業權ヲ有名無実ニ帰セシムルモ測ラレズ斯

第一四一号

貴電第一〇九号既開漁区ノ事ニ関シテハ協約實施以前ニ

既ニ有リシ漁区ト實施後開キタル漁区トヲ區別シテ講究セラレ度シ往電第一三三号ニ(一旦開始シタル漁区)トハ協約實施後開設シタルモノヲ指ス即チ(一旦開始シタル漁区)ハ協約施行中之ヲ閉鎖スルコトナシ)トノ規定ハ協約實施後ニ開キタルモノニ關スル規程ニシテ露國委員ハ從來ヨリ其移民政策上一旦貸下シタル漁区ト雖モ其貸下期限満了ノ際其場所ニ移住民力住居ヲ占ムルトキニ貸下ルコトヲ止メテ移住民ニ其場所ノ漁業權ヲ与フルコト、ナシ居レルヲ以テ協約實施後モ如斯為サント主張セルニ對シ我委員ヨリ如此ハ日本人ノ一旦得タル漁業權ヲ不安ナラシムルモノナリトノ理由ニ依リ段々交渉ヲ重ネ結局往電第一三三ノ如ク纏メタルモノナリ即チ前記ノ規定ニ露國移住民ニ將來漁区ヲ与フルコトヲ得ルト云フ露國政府ノ留保ヲ設ケ置カントセルニ基ヲ(發?)シ此留保ニ對シ制限ヲ加ヘタルモノナリ又往電第一三五号ハ協約實施以前ヨリ存在スル漁区ニ關スルモノニシテ之ハ昨年貴電第八八号議定書案第二項ニ基ヲ發シ往電七三号末段往電一〇七号ノ一〇及ビ貴電八三号ノ一〇ニ依リ纏リ來リタルモノナリ即チ右兩種ノ規定ノ結果

ノ如キハ到底承諾シ得サル所ナリ

又第一條ニ關スル議定書中新漁区開設ノコト及移住民ノ為メ漁業權留保ノコト(Outside of localities 以下ニ文字ニ修正ヲ加ヘタルモノ)ニ關スル全文言電報アレ

貴電第一二二一号及第一三五号ニ關シ「リマン」長期漁区ニ於テ製魚ヲ許サス同漁区ヨリ數露里ヲ隔テタル地ニ別ニ短期ノ製魚区ヲ設ケ製魚ヲ許スハ生魚ノ運搬上漁業家ニ取リ非常ニ不便ナルヲ以テ長期漁区ニ於テモ相當監督ノ下ニ製魚ヲ許ス様交渉アリタシ

漁区外ニ於テ魚類購買製造出願ノ手續電報アレ 通商漁業兩條約ニ關スル書類ノ原文寫郵送ノ日付電報アレ

一四六 明治卅年五月二十六日

本野駐露公使ヨリ 林外務大臣宛(電報)

漁区内ニ於テ外国人労働許可ニ關スル照會ニ

對シ回答ノ件(一)(二)(三)

五月二十六日 午後七、三 露都發
五月二十七日 午後三、一〇 本省着

林外務大臣 在露 本野公使

(一) 協約實施後一旦競売漁区トシテ貸下ゲタルモノハ協約期限中露國ノ移民政策ノ為メニ閉鎖セラルルコトナク競売ニ依リ必ズ借受クルコトヲ得(二) 協約實施以前競売漁区トシテ貸下ゲタルモノハ協約實施迄ニ既ニ移住民ニ与ヘタルモノヲ除キ協約期限中必ズ借り受クルコトヲ得(此外日本人ノ要求次第新漁区ヲ開クコトハ前電ノ通り(統ク)

(二)

五月二十六日 午後七、〇二 露都發
五月二十七日 午後二、三〇 本省着

林外務大臣 本野公使

第一四号(統キ)

貴電第一〇二号及ビ第一〇九号ハ本官ノ了解ニ苦シム所ニシテ往電第一二九号中協約以前ノ漁区ニ關スル取極ハ往電第八三号ノ十二外ナラザルノミナラズ前記ノ如キ成行ニ依リテ纏メタルモノヲ今更變更セントスルガ如キハ到底行ハレザル所ナリ

往電第一三五号ニ露國委員ノ述ヘタル所云々ハ協約以前既ニ開キタル漁区ハ從來ノ貸下表ニ掲ゲタルコトアル漁区ト同一ナラズ表ニ載セタルモノト實際貸下ケ得テ開設トナリタルモノトノ間ニハ著シキ差アリ今日既開漁区ナルモノハ

其數多カラズシテ日本ニ於テ之ニ関スル保證ヲ取り置クトモ左程大ナル価値アルモノニアラズ夫レヨリモ（日本人ノ要求次第何レノ場所ニテモ新漁区ヲ開設ス）トノ規定ヲ重ク見ルベキナリトノ旨述ベタルコトヲ云フナリ此事ガ本邦人ノ漁業權ヲ有名無実ニ帰セシムルトハ如何ニシテモ了解スルコト能ハズ本官ハ断ジテ斯ル結果ヲ来スコトナキヲ確信ス、協約以前貸下表ニ載セタルモノニシテ開設ニ至ラザリシ漁区モ現ニ移住民ニ与ヘラレザルモノハ日本人ノ要求次第開設セラレハ無論ノコトナリ

「リマン」長期漁区内ニ外国ノ労働者ヲ用キテ製魚ヲ許スコトハ到底交渉ノ道ナシ尤モ製魚ノ為メ斯ク受クル短期ノ製魚区ハ長期漁区ヨリ半露里乃至一露里位迄ノ距離ニ於テ貸下グル事ハ先方既ニ承諾セリ

○ 兩條約ノ書類ハ漁業協約及附属書類ノ各條文確定次第郵送スベシ尙ホ申上置度事ハ露国政府ニ於テ本年ヨリ日本人ニ漁区貸下ケ行ノコトヲ承諾セルトキ本官ト露国全權トノ間ニ於テ本條約主要ノ点ニ付テハ其時迄ニ纏メタルモノヲ變更セザルニシテ協約及附属文書ノ整理ノミニ掛リ居リ且シ協約談判ノ主任者ヲヨシヒロフハ懸ニ沿滬州ハ港任シタルコトナレハ今日ヨリヨリ貴電第一〇九号ノ

other matter relative to fishery in the regions above mentioned. It is a matter of course that the Japanese subjects shall be subjected to such laws, regulations and ordinances only as far as these same laws, regulations and ordinances shall be applicable to Russian subjects themselves having acquired fishery lots in such region.

Article V. Denomination of "Russian Subjects having acquired fishery lots" (see Article.....) is applied neither to colonists nor to native race enjoying special privilege.

Article VI. It is a matter of course that the Imperial Russian Government reserve to themselves right of granting fishery rights to colonists who may happen to settle in places where fishery lots in favour of adjudicataires do no exist. It will be the same for native race. The Russian Government engage not to grant, during the whole term of the Fishery Convention, the said rights to colonists or native race in places where fishery lots will once have been created. It is agreed that the quality of colonists will be attributed only to individuals and their families engag-

如キ修正ヲ訂出スルコトハ最早行フベカラザル事ナルニ依リ此上ハ今日迄纏リタル條約議定書案等御覽ノ上條約全部ヲ拒絶スルカ又ハ此ヲ承認スルノ外他ニ（交渉^{ホツレク}）ノ道無キニ依リ右箇ト御諒承ランコトヲ乞フ

(三)

同上協定議定書案ニ付報告ノ件

Petersburg, May 26th, 1907. 7:1 p.m.

Received, May 27th, 1907. 5:45 p.m.

Hayashi,

Tokio.

No. 142.

Translation of the text of the arrangements asked by your telegram No. 109 is as follows:—

(Protocol)

Article IV. Japanese subjects can, on their demand, acquire by means of competitive bids fishery lots anywhere in the region specified in Article I of the Fishery Convention, subject to the laws, regulations and Ordinances actually in force, or which may in future be passed, concerning breeding, and for protection and control of fishing industry, and for any

ing personally in fishing without having recourse to labourers.

Motono.

一四七 明治四十年五月二十六日

林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛（電報）

露国許可漁区数及其所在地名通報方ノ件

五月二十八日午后四時二十分發

在露 本野公使 林 大 臣

第一一二号

貴電第一四一号ニ関シ露国政府力は迄既ニ移住民ニ与ヘタル漁区ノ数及其ノ所在地名取調ノ上電報アレ然ル後最終ノ訓令ヲ發スベシ兩條約ニ関スル文書ハ其ノ確定ノ分ヨリ順次ニ至急郵送アリタシ

一四八 明治四十年 五月三日 本野駐露公使ヨリ
及六月三日 林外務大臣宛（電報）

漁区貸下及漁夫ノ旅券ニ関シ報告ノ件 (一) (一)

(一)

五月三十日 午後五、一四 露都發
三十一日 午前七、〇五 本省着

林外務大臣 本野公使

第一四四号

貴電第一〇七号ニ関シ

漁区競売ノ場所ヲ地方官ノ「ハバロフカ」ト公布シタルハ
当地ニ於ケル取極ヲ承知セザリシ以前ノ処分ニ基キタルモ
ノナリ右ハ取極ノ通り浦塩ニ於テ行フコト、ナサシムベシ
ト外務次官答ヘタリ

旅券ノコトハ尙ホ内務省ト交渉中ナリ

貴電第一〇九号末段製魚区貸下ノ出願手續ニ関シ外務次官
ノ答ニ右出願ハ「ハッロフカ」ニ在ル漁業事務局 Administration
General of Fishery (其長官ハブラジニコフ)ニ
於テ ad referendum ニ受理スベシ此(數語不明但 C.T.F.)
漁区ハ必ズシモ競売ニ附スルモノニアラズ前記事務局ノ決
スル所ニ依ルベシト

尙本官ハ本件ノ決裁ハ「ハッロフカ」ニ於テ行ハル、コ
ト、スルモ其願書ノ提出ハ(二字不明)ヲ「ニコラエフス
ク」等ニ於テ行フコトヲ得ザルヤハ質問シタルニ夫ハ即答

々ニ旅券ノ査證ヲ受ケサルベカラズト、

漁業條約ニ関シ六月五日最終ノ會議ヲ開クベキ豫定ノ所同
條約第五條中ニアル「No duties whatever」ナル文字ハ露
國政府ニ於テハ之レヲ「no export duties」ト解シ居ルガ
右ノ意味ニ解シ差支ヘナキヤ若シ差支ナクバ同條ニ「ex-

port」ノ文字ヲ加ヘ度シト露國全權ヨリ申出テタルニ付本
官ハ之ニ對シ最早今日迄數回ノ熟議ヲ遂ゲ全体纏マリタル
事故其儘ニ致シ置キ度シト百方拒絕シタレトモ此点明カニ
成ラザレバ後日ニ至リ紛議ヲ生ズベキ恐レアルニ付是非共
各條確定前ニ之ヲ明カニ成シ置キ度旨主張シテ止マズ特ニ
本條ニ對スル我提案ニハ no import duties ト記載シア
ルヲ以テ右第五條ニモ no export duties ト記載シ度ト申

込ミタリ本官ノ所見ニ依レバ露國全權ノ申立ハ至極尤ノ事
ニ思ハル、ニ付右ノ提議ニ同意セント欲ス差支無キヤ至急
御電訓ヲ乞フ露國政府ノ恐ル、処ハ本條仏文ノ書方ニテハ
人エヲ加ヘタル魚ニ對シ從來一般ニ一プートニ付ニコベ
ツク宛ノ内地税ヲ賦加シ居ル処右ノ通り no duties what-
ever トノミアリテハ右ノ税ニ付異議ノ出ズルヲ恐レ居ル
モノ、如シ

(二)

六月三日 後七、三三
四日 後三、四〇

林外務大臣 本野公使

第一四九号

往電一四四号ニ関シ

旅券ノコトニ関シテハ外務省ニ於テ未ダ農務省ヲ經テ内務
省ト交渉中ナレトモ取急ギ一応ノ模様ヲ知ラシムベシトテ
露國全權ノ告グル所ニ依レバ本件ニ付内務省ニテ取調タル
所ニヨレバ今日ノ場合乍遺憾露國政府限リノ処分トシテ日
本ノ要求ニ応ズルコトハ不可能ナリ旅券ニ關スル制規ハ立
法上ノ形式ニヨルノ外交更又ハ除外スルコトヲ得ズ往時權
太ニ赴ク日本労働者ニ對シ与ヘタル便宜ノ規定ハ一九〇二
年廃止サレタリ故ニ其以後ハ日本漁民モ凡テ露國領事ノ査
證ヲ經タル旅券ヲ携帯セザルベカラス又往電一三七号ノ三三
ニ掲ゲタル便法モ右様ノ次第故詮議ノ結果果シテ行ハル、
ヤ否ヤ豫定シ難シ尤モ現ニ在函館露國領事館ニ於テハ帆マ
エ船乗組員ニ關シ其噸數十噸毎ニ七名ノ割合迄ハ船員トシ
テ取扱フコトヲ諾シ居レリ此數ヲ超ユルモノハ總テ各自別

一四九 明治四年六月六日 林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛(電報)

漁夫ノ旅券ニ関シ内訓ノ件

六月六日後〇時十分發

本野公使 林大臣

第一一六号

貴電一四九号旅券ニ関シ本年露領沿海ニ出漁スル者ハ漁業
季最モ切迫セルニ付本月十四日浦潮ニ於テ漁区競売施行后
ハ直ニ各自競落漁場ニ向ケ出帆ノ準備中ナリ就テハ漁夫携
帶旅券手續省略ニ關スル便法ハ前記競売期日前ニ解決ヲ見
サレハ其効力無キカ故ニ其舍ヲ以テ至急交渉ノ上結果電報
アリタシ

一五〇 明治四年六月六日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)

漁夫旅券ニ関シ交渉ノ結果報告ノ件

六月六日 后一〇、四〇 露都發
七月七日 后一二、八 本省着

林外務大臣 在露 本野公使

第一五一号

貴電一六号旅券ニ関シテハ往電一四九号ニテ申上ゲタル如ク一応ノ答アリタルニモ拘ハラス尙ホ色々ト實際ノ不便ヲ述ベ本年ニ限り手続キヲ省略スルノ道ヲ講フジ與ル、様再三交渉ニ及ビタレトモ何分法律ノ結果当局者ニ於テモ如何トモ致シ方ナシトテ我要求ニ応ズルノ模様ナシ尤モ今一応交渉ヲ試ムベキモ到底我要求ヲ容レシムルコト先ヅ出来難カルベシ就テハ遺憾ナガラ其御含ミヲ以テ万專御処置相成ル様致度シ

一五一 明治四年六月七日

林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛

水産物輸出税賦課ニ関シ照会ノ件

明治四十年六月七日午後一時四十五分發

在露 本野公使 大 臣

第一一七号

貴電第一四九号

漁業條約第五條ニ No duties whatever..... whether such fish and aquatic products be manufactured or not トアリテ本條ハ人工ヲ加ヘタル魚^{サカナ}ニブード税ヲ課スル

成候様致度候而シテ念ノ為メ申上置カサルベカラザルコトハ本件ノ署名ハ郵便ヲ以テ一切ノ文書ヲ進達ノ後ト為スコトニ露国全權ト協議シタル時同全權ヨリ本協約ノ署名ヲ延期スルコトハ異議無キモ一旦談判結了シタル上ハ後ニ至リ修正ノ提議ヲ為サル、トモ之ニ応ズル道無キヲ以テ此点ヲ含ミ置カレタシト申出デ本官モ勿論其通りナリト確答致置候ニ付キ其御含ヲ以テ御電訓相成候様致度候

本談判経過ノ詳細ハ往復電信ニヨリ既ニ充分御承知ノコト、信ジ候ニ付キ改メテ續述不致候得共進達書類中重要ナルモノ、説明旁々此点ノ報告ニ詳述セザリシ事項ニ関シ其要領ヲ述ベンニ本談判ノ要点ハ御承知ノ通り本條約ノ基礎タル第一條ニ在リテ就中日本臣民ニ漁業權ヲ附与スベキ地域ノ範圍、換言スレバ「ポーツマス」講和會議録ニ所謂「河川及入江」ノ意義如何ノ問題ニ存シ居候ニ付キ此点ニ就テハ約五ヶ月間百方手段ヲ講ジテ我ニ利益アル解決ヲ得ンコトヲカメタルハ數回ノ電報ニ依リ充分御承知ノコトニ有之結局本年一月二日附機密第一号信ヲ以テ申進タル如ク双方委員ノ私議會ニ於テ妥協ノ方法ヲ講ゼシムルコト、相成候処其当時具報シタル如ク先方ハ「アンス」及「インレット」ナル語ニ関スル諸学者ノ定義及英米仏沿岸ノ地図ニヨ

カ如キコトナカランメカ為ニ設ケタル簡條ナリ今更之ヲ輸出税ニ限ラントスルハ断シテ不同意ナリ況ンヤ我方ニ於テモ単リ輸入税ニ限ラス一切ノ税ヲ課セサルヤ原來プー下税ハ外国ニ輸出サル、魚類ニノミ課セラレ内地ニ消費スルモノニハ課セサリシヲ以テ一種ノ輸出税ト見做サレタルモノナリ御含迄

一五二 明治四年六月十日

本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛

漁業協約及附屬議定書類進達ノ件

機密第九号

漁業協約及附屬書類進達ノ件

客年六月六日附機密送第一二号ヲ以テ御訓令ノ日露漁業協約談判ハ本日迄ノ會議ニ於テ第五條ニ関スル文句ノ問題トナレル外協約及附屬議定書ノ條文協定致候ニ付キ御電訓ニヨリ右書類ノ写及會議録其他本談判ニ関シ露国全權等ト往復シタル書類写一併別添目錄ノ通り今回帰朝ノ静間工兵大尉ニ托シ及進達候條御査閱置相成度尙ホ第五條モ本信御接収迄ニハ落着可致候ニ付キ可成至急本協約署名方御電訓相

リ數百ノ実例ヲ捉へ来リ入江ノ奥行其入口ノ幅ヲ超過スルモノヲ以テ「インレット」ト定メ以テ妥協ヲ遂ゲンコトヲ熱心ニ主張シタルニ付キ我方ニ於テハ貴電訓ノ主旨ニヨリ奥行十五哩以上入口二哩以下ノ定義ヲ提出スルト同時ニ英仏ノ諸著述及英、米、仏、諸威、印度、濠州及絶東洋各沿岸ノ地図ヲ蒐集シ、「アンス」及「インレット」ナル名称ヲ附シタル各入江ヲ精細ニ測定シ又一方ニ於テハ当館附海軍武官黒井大佐ヲシテ在英大使館附武官經由英国海軍省ノ当局者ニ就キ「インレット」ナル語ノ精確ナル定義ヲ質サシメ百方手段ヲ尽シタルモ實訓ノ如キ定義ヲ主張スル理由甚ダ乏シク到底先方ヲシテ屈服セシムル方法無之ニ付キ此等材料ニヨリ得タル定義即チ「細長ク陸中ニ入込ミタル入江」ナル定義ヲ更ニ精密ナラシメンガ為メニ双方ノ同意ヲ以テ「奥行入口ノ六倍以上ヲ有スル入江」ト定メンコトヲ提議シタルニ先方ハ之ニ反対スル許多ノ実例ヲ挙ゲテ之ヲ拒絕シタルドモ先方モ亦其提議ノ多少緩和ナラザルコトヲ認メ一歩ヲ譲リ奥行、入口ノ二倍以上ヲ超過スルモノヲ以テ「インレット」トシ之ヲ標準トシテ露領沿岸ノ地図ニ就キ各入江ヲ査定シ「インレット」ノ定義ニ当ルモノヲ調出シテ附屬表ト為シ又地図ノ存在セザル「オコツク」海北

岸ニ関シテハ右ノ定義ヨリモ更ニ一步ヲ譲リテ「興行入口ノ三倍ヲ超ユルモノヲ以テ(インレット)ト為ス」トノ一般定義ヲ掲ゲ置カントヲ提議シテ頑固ニ之ヲ主張セリ此間ニ於テ本官ハ露国全権ニ対シ第一條ニ関連スル自余ノ問題即チ採集物ノ範圍及「リマン」問題等ヲ協定セシコトヲ提議シタル処露国全権ハ此等ノ問題ニ対シテハ全ク素人ニシテ一々専門家タル「ブラジニコフ」ノ意見ヲ徵スルニアラザレバ何等意見ヲ表白スルコト能ハザルニ付キ寧ロ此等ノ問題モ委員會ニ於テ討議セシムルコトト致度キ旨申述タルニ付キ本官モ全権ト直接談判スルノ迂遠ナルコトヲ認メ之ニ同意シ落合書記官ヲシテ「ブラジニコフ」トノ間ニ此問題ノ解決ヲ試シシムルコトニ決シ即チ「インレット」問題ト一併私談会ノ問題トナサンメ候其後委員ノ私談会ニ於テ數回談判ノ結果別添に第四号(係第三号甲同文)ノ如キ結局ニ立至リ候即チ

一、「インレット」ニ就テハ双方妥協ニ至ラザリシニ付キ先方ノ提議ノミヲ掲ゲ当方ノ議論ヲ留保セルコト

二、採集物ノ種類ニ関シテハ先方ノ最モ承諾ヲ難ズル高価動物即チ獵虎ト臘腑獸ヲ除外スルコト、シテ委員限リノ妥協ヲ遂ゲタルコト

ニ対シ明カニ異議ヲ唱ヘザリシトノ理由ニヨリ先方ノ主張ヲ駁シ本案ノ維持ヲ力メタレトモ露国委員ハ全権及主務省(農務省)ノ訓令ニヨリ是非共之ガ訂正ヲ要求セザルヲ得ズ然ラザレバ私談会結局ノ報告ヲ確認スルコト能ハズト断言シ到底動ク模様無カリシニツキ我委員ハ不得已「一旦競売ニヨリ開設シタル漁区ハ協約期限中常ニ開設セララルベシ」トノ條件ヲ附シテ前記露国委員ノ留保ヲ本官ニ上申スルコトヲ承諾シテ本件ノ報告ヲ纏メタルニ付キ本官ハ同月二十九日露国全権ニ面会シ本報告ヲ材料トシ我方ノ意見ヲ述ベ百方討議ノ末別添に第四号写ノ如ク協定致候右ハ往電第十三号ヲ以テ具報致置候処之ニ対シ貴電第二十六号ノ御訓令アリタルニ付キ二月二十八日別添に第七号ノ如ク露国全権ニ申込ミ且ツ口頭ヲ以テ其主意ヲ説明致候露国全権ハ三月十三日当館ニ來リ談判ヲ遂ゲ其結果三月十七日別添に第八号記載ノ如ク書面ヲ以テ回答致候

協約案第二條以下ノ諸事項ニ関シテモ露国全権ハ主トシテ専門家ノ意見ニヨリ決スルノ外ナキヲ以テ第一條同様先ヅ委員會ニ於テ討議セシメタシトノ希望ヲ述ベタルニ付キ本官モ之ニ同意シテ落合ト「ブラジニコフ」ノ間ニ私談会ヲ開キ意見ヲ交換セシメタル結果往電第三十四号ノ如キ結果

三、「リマン」ニ関シテハ労働者ノ国籍問題ニ付キ双方ノ意見一致セザル為メ露国委員ノ主張ヲ掲ゲ我議論ノ余地ヲ留保セルコト

右私談会結局ノ報告書ヲ我委員ヨリ先方ニ送リテ確認ヲ要求シタル処先方ノ委員ハ同報告書ノ末段

Il est de plus entendu que, sauf les cas prévus dans le 2me alinéa de l'article XI.....

ナル文句ニ関シ誤解アリタリトテ訂正ヲ要求シ來リ即チ露国政府ハ其殖民奨励政策ニ妨ゲヲ來ス虞アル約束ニハ毫モ同意スルコト能ハザルコトハ当初ヨリ言明シ來リタル通ナルヲ以テ日本臣民ノ一旦得タル漁区以外及此等漁区ノ租借期限滿了ノ後漸次住居ヲ占メ來ル移住民ニ漁業權ヲ与フルコト、為スベキハ勿論ノコトナレバ此主旨ヲ掲載シ置クコト必要ナリト主張シ熱心ニ固執セルヲ以テ我方ニ於テハ一方ハポーツマス條約十一條第二項大体ノ主旨ニヨリ又他方ニ於テ河川及「インレット」ノ除外ハ即チ殖民政策ノ為メナルコト露国委員ノ言明シタルコトナレバ此除外ニヨリ殖民政策ノ利益ハ相当ニ留保セラレタルコトノ理由ニヨリ且ツ委員會ニ於テ露国委員ガ本規定ニ関スル我委員ノ主張

ト相成之ニ対シ貴電第二十六号ノ御訓令ニ接シタルニ付キ第一條ノ事項ト一併二月二十八日別添に第七号写ノ如ク露国全権ニ申込ミ、且口頭ヲ以テ説明シタル結果三月十三日ノ談判トナリ統テ露国全権ヨリ三月十七日別添に第八号写ノ如ク回答致來候(往電第七十三号)

其後貴電第六十二号乃至第六十四号ノ御訓令アリタルニ付キ本官ハ御訓令中主要ノ点即チ「リマン」問題ハ四月九日附別添に第九号写ノ如ク覺書ニ認メ外務大臣ニ面会詳細ニ其主旨ヲ説明シテ百方妥協ノ為メ尽力アラントヲ求メ且ツ一方ニ於テハ同月十日露国全権ニ対シテ別添に第十号写ノ如キ覺書ヲ送り且ツ口頭ヲ以テ其主意ヲ説明シ又委員會ニ於テモ落合ヲシテ「ブラジニコフ」ニ対シ我主張ヲ説明セシメ手段ノ存スル限り我主張ヲ貫徹セシコトヲ力メタル結果露国側ヨリハ四月十三日附別添に第十一号同十五日附別添に第十二号ノ如ク回答シ來リ且ツ委員會ノ回答モ略ボ同様ニシテ結局往電第七号ノ如キ結果ト相成申候之ニ対シ貴電第八十三号ノ御訓令アリタルニ付キ往電第二百一十一号ノ如ク回答致置候

其後ノ経過ハ電報ニヨリ詳細ヲ尽セルヲ以テ之ヲ省略シ今回纏マリタル諸條項中是迄ノ電報ニ於テ説明ノ充分ナラザ

リシ点ニ付キ要領ヲ述ベシニ
第一、河川ノ範圍問題

河川ノ出口ニ於ケル入江即チ Estuary ハ当然河川ノ一部ヲ爲シ從テポーツマス會議録ニヨリ日本人ノ漁業權享受ノ範圍外タリトノ議論ハ当初ヨリ露國委員ノ主張セル処ニシテ所謂「リマン」問題ニ於テモ之ヲ持出シ候ニ付キ当方ニ於テハ一方ニ於テ此問題ニ関スル學說ノ調査ヲ爲サシムルト同時ニ他方ニ於テハ「リマン」問題ヲ河川ノ範圍問題ト區別シテ議論スルノ方針ヲ執ラシメ來候処「リマン」問題ハ漸クニシテ双方ノ交譲ニヨリ妥協ヲ見ルニ至リタレドモ(エスチュアリー)ヲ河川ノ一部ト見做スヤ否ヤニ就テハ到底先方ノ議論ヲ反駁スベキ有力ノ學說モ充分ニ無之候ニ依リ此問題ハ其後先方モ強テ主張スル模様モナカリシニ付キ其儘ト爲シ置キ以テ他ノ諸事項ニ関スル談判ヲ進メ來候処談判ノ終局ニ至リ先方ハ再ビ此議論ヲ提出シテ飽迄之ヲ議定書中ニ掲ゲ置カントト主張致候右ハ往電第百十一号具報ノ如クニシテ之ニ對シ本官ヨリハ露國全權ニ對シ今更此問題ヲ討論スルノ時機ニアラザルヲ以テ不取敢本年ヨリ日本臣民ニ漁區貸下ヲ実行スル主意ノ議定書ヲ締結スベシ而シテ此問題ハ

國際法ノ原則ニヨリ決定スルコト、爲シ置カントヲ提議致候処露國全權ハ一旦之ニ応ジナガラ同日書面ヲ以テ回答スルニ方リ別添係第十三号写ノ如ク自己ニ都合ヨキ解釈ガ採用サレタルモノ、如ク述候ニ付キ本官ハ直チニ別添係第十四号写ノ如ク誤解訂正方申送置候処更ニ四月三十日別添係第十五号写ノ如ク申來候ニ付キ同日附別添係第十六号写ノ如ク回答致置候

然ルニ露國全權ハ本年ヨリ日本人ニ漁業權ヲ附与スルコトニ関スル議定書締結以前是非其本問題ヲ解決センコトヲ主張シテ已マザルヲ以テ本官ハ五月一日当館ニ於テ露國全權ト会見ノ上此問題ニ関シ別添係第十八号写ノ如ク協定シ再ビ誤解ヲ避クルタメ右覺書ヲ送り且ツ之ト前後シテ往電第百十一号及第百十三号ノ如ク伺出置候処貴電第八十六号ノ御訓令アリタルニ付キ其旨ヲ先方ニ通ジ五月四日別添と号写ノ如ク前記議定書ノ署名ヲ了レ而シテ河川問題ニ就テハ別添協約附屬議定書第二條ノ如ク協定致シタル次第ニ有之候

第二、入江ノ範圍

所謂「インレット」中地形ニヨリ其範圍ニ関シ他日誤解ヲ生ズルノ虞アルモノニツキ露國委員ハ之ヲ明細ニ協定レバ之ヲ法律規則ノ如ク必ズ六ヶ月以前ニ日本政府ニ豫告スル義務ヲ負フコトハ不可能ナリト述ベタルニ付キ本官ハ此種ノ命令ハ恰モ第二條末段ノ漁區表及其競売手續ノ如ク二ヶ月以前在浦塩日本領事ニ通知スルコト、爲スベシト提議シ先方ノ承諾ヲ得候ニ付キ之ヲ本條第三項トシテ添加致候本項ハ我方ニ利益アルコト、認め別ニ伺出シテ經ズ協定致候義ニ付キ御承認相成度候

第五、協約第十一條

貴電第六十二号第三段ニヨリ纏メタルモノナルガ元來本條ノ主意ハ製魚ノ爲メ陸上ニ製魚區ヲ借受クルノ權利ヲ設定スルコトヲ以テ眼目トナスヲ以テ書方ヲ其主意ニ改候水産物購売ノコトハ別ニ本協約ノ規定ヲ俟タズ通商條約ノ規定等ニヨリ当然日本臣民ノ有スル權利ナルコトハ露國委員ニ於テモ無論異議無キ旨言明シタル次第ニシテ其不必要且ツ冗文ナルヲ認め本條ニ於テハ之ヲ掲ゲザリシ次第ニ有之候

第六、附屬議定書第九條ノ規定

往電第百二十八号中「協約ノ成行如何ニ係ハラズ一旦与ヘタル漁區ハ其貸下年限間完全ニ有効ナリトノ主意ハ露國委員ノ承認スル所」云々具報シタル廉ニ對スルモノニ

シ置カントヲ提議セルニヨリ本官ハ往電第百十一号ヲ以テ伺出デ貴電第八十六号ノ御回電ニ接シタルヲ以テ委員會ニ於テ之ヲ討究セシメ別添協約附屬り号議定書第一條及ぬ号最終會議録第七項ノ如ク協定セシメ候此諸「インレット」ノ範圍中我委員ニ於テ不当ト認メタルハ(一)三)パロソコルフ灣ノ北部及(二)六)ヴァニーン入江ニ関スルモノニシテ双方共互ニ其主張ヲ固持シタル結果妥協ニヨリテ別添議定書及會議録記載ノ如ク決定シタル次第ニ有之候

第三、協約第二條末項ノ規定

採取物ノ種類ヲ獵虎、臘肭獸ヲ除クノ外一切ノ水産物ト定メタル結果本項ノ必要ナルヲ認め委員會ニ於テ我委員ヲシテ先方ニ交渉セシメタル上本官ト全權ノ間ニ於テ本項ノ如ク協定致候

第四、協約第九條中ノ修正

本條ノ草案ニハ Lois et réglemens トノミアリシガ委員會ニ於テ露國委員ハ法律及規則ノ外漁業ニ関シテ地方官ヨリ隨時發布スル命令アリ之ニ関シテモ日露兩國臣民同等ニ取扱フコト、ナスベキニヨリ其主意ヲ本條ニ入ル、モ可ナリ尤モ此種ノ命令ハ時々必要ニ応ジテ發スルモノナ

シテ他日ノ誤解ヲ防グ為メ且ツ議定書第八條ノ期限ハ本協約ノ有効期限ニ係ハラズ推進行セシムベキ様他年当方ヨリ主張スルノ余地ヲ開キ置カンガ為メ特ニ本規定ヲ議定書ノ一項ト為サシメタルモノニ有之候

第七、附屬議定書第十三條

右ハ昨年貴電第八十八條第一條ニ関スル冒頭御訓令ノ主意ト第一條ニ於テ採集物ノ種類獵虎臘覬以外ノ一切ノ水産物ニ及ブコト、為シタル結果條約中第一條以外ノ諸條ニ関連シ誤解ヲ生ズルヲ防ガン為メ特ニ協定シタルモノニ有之候

第八、最終會議録中

第一「オコツク」海北部ノ漁業權ハ委員會ニ於テ露國委員ヨリ近々露國政府ヨリ視察員ヲ派遣シテ沿岸ヲ調査シ所謂「インレット」ノ定義ニ合スル地区ヲ調べテタル後其以外ノ地方ニ於テ日本臣民ニ右漁業權ヲ附与スルコト、為サンコトヲ提議シタルモ談判ノ結果更ニ同沿岸ニ於テ疑無キコト明カナル地方ニハ直チニ之ヲ貸下ルコト、定メ此主意ヲ掲載セシメタルモノナリ
第二 ハ往電第二百一十一号ノ第一段ニ於ケル説明ヲ會議録ニ掲載セシメタルモノナリ元來本件ハ露國委員ニ於テ

關係ヲ有候ニ付キ多少不満足ノ慮アルニモ拘ラズ締結ニ至ラシメ候方結局我利益ナリト認メ右ノ通り取纏メタル次第ニ有之候間閣下ニ於テモ右ノ事情御舎ノ上御承認アラシコト希望ノ至ニ不堪候
右及具申候
敬具

明治四十年六月十一日

在露

特命全權公使 本野 一郎(印)

外務大臣子爵 林 董殿

機密第九号信附屬

漁業協約談判關係書類目錄

- イ号 第一回會議録附屬書類共取揃 二部
- ろ号 第二回 同 二部
- は号 第三回 同 二部
- に号 下調委員會關係書類 一部
- ほ号 両全權及外務大臣往復書類 一部
- へ号 同上 目錄 一部
- と号 五月四日調印議定書 一部
- ち号 協約 一部
- り号 議定書 一部

我委員ノ質問ニ對シテ現在ノ黒龍江下流及リマンノ漁業規則ニ於テハ斯ノ如ク行ハル、モノナルコトヲ説明シタルモノニ止リタルヲ以テ之ヲ一ノ協定事項ノ如ク為スコトハ先方ニ於テ頗ル強硬ニ拒絶シ且ツ他日必要ノ場合ニハ此規則以上ニ制限ヲ加フルコトヲ得ル余地ヲ留メ置キタシトノ主意ヲ述ベタルモノナレドモ我方ヨリ交渉ノ結果本文ノ如ク會議録ニ掲載スルコトヲ諾シタルモノナリ
第三 ハ前掲第二中短期漁区トアル語ノ注釈ナリ
第四 ハ往電第二百二十八号冒頭ノ主意ヲ記錄ニ留メシメタルモノニ外ナラズ
第五 ハ往電第二百二十九号末段ノ主意ニヨリ協議ノ上纏メタルモノナリ
第六 ハ往電第七十三号ノ二ニ於テ會議録掲載事項トシテ拳ゲタル所ノモノナリ

漁業協約締結ニ関スル談判ノ進行及其結果ハ前陳ノ通りニ有之候処抑モ本問題ニ付テハ講和條約第十一條ノ規定稍々明確ナラザル廉有之候為メ談判ノ際本官ニ於テモ大ニ困難ヲ極メ随テ種々御訓令ノ点ニ對シ或ハ充分ノ結果ヲ得ルコト能ハザリシハ本官ノ最モ遺憾トスル所ニハ有之候得共本協約ノ成否ハ今更申上候迄モナク帝國臣民ノ利害ニ重大ノ

ぬ号 最終會議録案 一部

(欄外附記)
「ちり号本省ニ到着セサリシモノノ如シ」

一五三 明治四十年六月十四日 林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛(電報)

沿海洲出漁帆船ノ露領河川港灣内碇泊許可ニ
関シ交渉方訓令ノ件

六月十四日午後二時三十分發

本野 公使 大 臣

第二一〇号

沿海洲ニ出漁スル者ハ殆ント総テ帆船前船ニテ渡航ス該帆船前船ハ號落漁区ニ漁夫ト漁具ヲ陸上シタル時ヨリ漁業締結マテ一二ヶ月ノ間全ク不用ナリ此不用ナル船ヲ永ク海洋中ニ繫キ置クコトハ頗ル危険ニシテ突然暴風起ルトキハ帆船ノ事ナレバ避難ノ途ナク不測ノ海難ニ罹ルヘキハ必然ナリ露領時代ニ於ケル薩哈噠島ノ日本漁夫ニ對シ露國カ河川中入泊シ得ル処ハ孰レヲ問ハス碇泊ヲ許セルハ此絶体ノ必要アリシカ為ナリ依テ沿海洲出漁ノ帆船ヲシテ右不用期間河

川港灣ニ碇泊スルヲ得セシムルタメ至急露政府ニ交渉シ其結果電報アリタシ

一五四 明治四年六月八日 本野駐露公使ヨリ 林外務大臣宛(電報)

漁業協約最終正式會議ノ結果報告ノ件

六月 十八日 后六、九 露都發
十九日 后二、三五 本省着

林外務大臣 在露 本野公使

第一六九号

六月十八日漁業協約ニ関スル最終ノ正式會見ヲ行ヒ協約議定書及び最終會議録ノ各條文ヲ協定シタリ(静間大尉ニ托シ進達シタルモノ、内最終會議録第六項ノ次ニ往電第一六号ノ宣言書ヲ第七項トシテ加ヘタリ)貴電第一一二号露國政府ガ是迄移住民ニ与ヘタル漁区ノ數ハ早速外務省ヘ間合セ置キタル処正確ノ事ハ容易ニ分ラズトテ其(一九〇七年絶東洋ニ於ケル移住民)ト題スル書籍ヲ送り來レリ右書籍ハ早速郵送スベキモ是ノミテハ到底所要ノ事實ヲ知ルコト能ハザルヲ以テ猶ホ漁業協約談判ニ先ダチ露國委員ニ於テ其當時既ニ移住民存在セリトノ理由ニ依リ公約ヨリ除外

リ恰モ回答アリケルカ其趣意ハ遺憾ナカラ日本政府ノ要求ニ応スルコトヲ得ズト云フニアリ

一五六 明治四年七月四日 本野駐露公使ヨリ 林外務大臣宛(電報)

沿海州出漁ノ我帆船露領河川港灣内碇泊許可ニ関スル交渉ノ結果報告ノ件

七月 四日 后一、三〇 露都發
四日 后八、三〇 東京着

林外務大臣 本野公使

第一八三号

貴電第一二〇号露國政府ヘ交渉シ其後度々催促シ置タル処七月二日回答アリ其要領ハ

此ノ要求ハ協約以外ノ事ナルニ依リ其筋ヘ伝ヘ置タル処如斯協約以外ノ便宜ヲ与フルハ不可能ナリ然レトモ露國政府ハ再ヒ交譲ノ精神ヲ表スル為メ本年ノ漁期間ニ限り特別ノ取扱トシテ日本ノ帆船カ「ウラジミイル」灣(本年機密第一号附屬表ノ三三)「インペラトル灣(同上三〇)」ポルト、ブロツク(port okhotsk)及ヒ「ペトロバウロウスク

林外務大臣時代 日露漁業協約 一五六 一五七

セントノ目的ヲ以テ調査シ置キタル地点ヲ問合ハサシメタルトコロ右(ハ約四〇(シジウ)箇所本年機密第一号附屬入江表ノ(例?)ニ挙ゲタルモノ、大部分ヲ含ム(アレドモ之レハ除外入江ノ表ヲ作ラ造ラントノ目的ニテ調査シタルモノナレバ移住民専有地点ハ之レニテ尽セリト断言スルコト能ハズ又是レハ単ニ除外セントスル区域ヲ挙ゲタルモノニシテ其何レノ部分ニ移住民アリヤハ分明ナラザレバ一応地方官ニ問ヒ合セノ上何分ノ回答ヲ為スベシ之レニハ多少時日ヲ要シ且正確ノ事ヲ知ルコトハ困難ナラント

一五五 明治四年六月三日 本野駐露公使ヨリ 林外務大臣宛(電報)

漁夫旅券ニ関スル便法露國政府拒否ノ件

六月 二十二日 午后 八、二五 露京發
二十三日 午前 一、一五 本省着

林外務大臣 本野公使

第一七三号

尚ホ往電第一三七号ノ三ニ述ベタル便法ノ件ニ付主務省ヨ

(Petropavlovsk) 并ニ東察加半島西岸ノ「チキル」「リウコウイナ」(Oboukomena) 及ビ「ボルシヤ」「ボシナ」三個ノ河口ニ碇泊スルコトヲ許スベシ」尤モ前記ノ地方ニテ外國船力擅ニ漁業ニ従事スル事アラバ嚴罰ニ処スベシト」尙往電第一六九号末段地方官ノ回答ニ依レハ移住民ノ異動頻繁ナル為メ精確ニ彼等カ漁業權ヲ有スル場所ヲ調査スル事ハ不可能ノコトニシテ一応ノ調査文ニテモ約二ヶ月ヲ要スヘシトノ事ナル由外務省員ノ内話アリ不日其趣意ニテ当方へ回答スルナラン

右様ノ次第ニシテ移住民カ漁業權ヲ有スル場所ノ事ニ関シテハ是迄電報シタル以上ノ報告ヲ得ルコト困難ナリト認ムルニ付其御積ニテ協約ニ関スル最終ノ御訓令ヲ發セラレタシ 静間大尉ニ託送シタル文書ハ御受取アリタルヤ電報ヲ請フ

一五七 明治四年七月六日 本野駐露公使ヨリ 林外務大臣宛(電報)

漁夫ノ旅券査証ニ関スル便法交渉ノ結果報告ノ件

七月六日 后八、三四 露都露 后一〇、三八 本省着

林外務大臣

本野 公 使

第一八七号

往電第一七三号末段ニ関シ外務次官ヨリ書面ヲ以テ回答シ
来リタル所ニ依レハ往電第一三七号ノ三及貴電第一〇七号
末段ニ依リ為シタル要求共ニ内務農務両省ニ於テ詮議ノ結
果旅券査証ニ関スル現行法ニ如何ナル変更ヲモ加フルコト
能ハストノ意見ナルヲ以テ遺憾ナカラ本官ノ要求ニ応スル
コト能ハスト云フニ在リシヲ以テ本官ハ此ノ回答ハ協約第
八條ニ依リ日本漁船ニ与ヘラレタル權利ヲ本年ヨリ行使ス
ルコトニ何等影響ヲ及ホスモノニ非ルハ勿論ノコトニ付誤
解ナキ様然ルヘク地方官ニ訓令アリタキ旨申送り置キタル
処外務次官ノ回答ニ其ノ通ナルヲ以テ協約第八條及議定書
第一一條ノ規定ヲ遵守スヘキ様地方官ヘ訓令ヲ發シ置キタ
リト申来レリ此ノ往復ノ趣意ハ漁業カ他ノ一般外国人ノ如
ク露國領土ニ屬スレハ直ニ其ノ旅券ヲ当該警察署ニ提出シ
テ査証ヲ受ケ又出發ノ際モ同様出發許可ノ査証ヲ受ケサル
ヘカラサルコトトナストキハ沿海州ノ如キ此等査証ヲ取扱
フ官衙極テ稀ナルヲ以テ日本漁業家ノ不便極テ夥シク協約

本野 公 使

大 臣

第一三五号

貴電第一六九号ニ関シ移住民ノ為メ除外スヘキ漁場ノ委細
ハ是非共承知シ度ニ付地方官ラシテ成ルヘク早ク報告セシ
メ遅クモ協約發表前之ヲ貴官ニ通知スル様交渉セラルベシ
又移住民カ港灣ノ一部ニ存在スルモ其左右ニ露里ヲ距ル沿
岸ニハ本邦漁業者ノ為ニ漁場ヲ開キ得ヘキ筈ニシテ之カ為
メ港灣ノ全部ヲ閉鎖スルノ理由ナキニ付此点ハ先方ニ念ヲ
押シテ置カルベシ但シ本件ハ議定書第七項ノ施行方法ニ関
スルモノユヘ之カ為メ協約ノ締結ヲ延ハスヘキニ非ス只協
約締結前修正ヲ必要トスルハ左ノ一点ニ在リ最終議定書第
五項ニ汽船ハ航海日誌ノ英文又ハ露訳文ヲ備フヘキ旨議定
アリ此点ニ関シ管船局ノ言ニ依レハ本邦ヨリ沿海洲ニ渡航
スル汽船ハ四百噸ヲ超ヘスシテ船長ハ乙種ナリ乙種船長
ニテ露文ハ勿論英文ヲ捺ルモノ殆ント皆無ノ由ナリ依テ國
籍証書ハ英訳ヲ付セシムヘキモ航海日誌ノ外国語訳文ハ是
非共省略ヲ要ス此一点協定セハ漁業協約中間然スヘキ所ナ
キニ付折返シ調印ノ訓令ヲ送ル積リ

第八條ノ規定モ空文トナル虞アル旨「ブラジニコフ」出發
以前我方ヨリ説明シタルコトアルニ對シ同人ノ答ニ旅券査
証ノコトハ法規ニ明文モアルコトナレハ之ヲ變更スルコト
困難ナランモ協約第八條ノ便宜ニ影響セシムルコトナクシ
テ該法規ニ服從セシムルコト即チ日本漁業家ハ日本ニテ露
國領事ノ査証ヲ受ケタル旅券ヲ携帯シ居リテ巡邏船又ハ監
督官カ漁場又ハ碇泊場ニ来リ旅券ノ提出ヲ求メタル節ハ直
ニ之ヲ差出スト云フコトニセハ可ナラントノ意見ヲ述ベタ
ルコトアリシヲ以テ其ノ趣意ヲ確メ置カンカ為メ為シタル
ナリ旅券ニ関スル便法ハ内務農務両省ノ詮議ニ於テ到底現
行法ヲ變更スル余地ナシト決シ居レルヲ以テ此ノ上要求ス
ルコト困難ナラント認ムルニ依リ右ノ結果ヲ以テ満足スル
ノ外ナシト考フ

一五八 明治學年七月九日

林外務大臣ヨリ 本野駐露公使宛 (電報)

露國領水内汽船航海日誌訳文省略ニ関シ
交渉方訓令ノ件

七月九日後二時三十分發

一五九 明治學年七月十五日

本野駐露公使ヨリ 林外務大臣宛 (電報)

露國領水内航行汽船ノ航海日誌訳文省略ニ
関シ交渉ノ結果報告ノ件

七月 十五日 後七、三五發
十六日 後八、〇五着

林外務大臣

本野 公 使

第一九七号

貴電第一三五号ニ関シ早速外務省ニ掛合辭ニ説明シ置キタ
ル処其回答ニ移住民ノ漁業権ヲ有スル地点ノコトハ現ニ調
査シタルモノナリ又今ヨリ調査スルコトモ殆ト不可能ナル
旨地方官ヨリ申出アリ (前電報ノ如ク) 如何トモ致方ナシ
トノコトニテ此際之ヲ調査セシメテ協約發表頃迄ニ当方ヘ
通知セシムルコトハ到底出来得ヘカラサルコトナルニ付左
様御承知アリタシ港灣ノ一部ニ移住民存在スルトモ其左右
ニ露里ヲ隔ツル沿岸ニハ日本人ノ為メ漁区ヲ開キ得ルコト
ハ往電第一〇七号一〇ニテ明ナルコトナルモ貴電ニ依リ一
応露國政府ニ念ヲ押シ置キタル処先方モ無論其通りナリト
回答セリ尙最終議定書第五項ノコトハ往電第一二九号末段
ニ報告セル如ク元々露委員ハ取締ノ必要上汽船帆船共ニ露
國領水内ニ来ルモノハ露文若クハ英文ノ航海日誌ヲ備ヘ付

ケシムルコトト、致シタシト述べ我委員ヨリ漁業家ノ困難
スヘキ事情ヲ述べテ之カ削除ヲ要求シタル結果先方モ一歩
ヲ譲リ汽船ダケニ止ムヘシト述べタルモノニシテ其後右往
電ニ対シ何等御電訓モナカリシニ付右ノ通り纏メタルモノ
ナルガ今回ノ貴電ニ依リ更ニ之カ撤回ヲ要求シタルニ対シ
テモ先方ハ前同様取締ノ必要上可成ハ汽船帆船共ニ翻訳文
ヲ備フルコト、致シタキモ事情ヲ斟酌シテ此義務ヲ汽船ダ
ケニ止メタルモノナレハ此以上ハ譲歩スルコト能ハスト答
へ来レリ右ノ通りノ次第ニテ此二点ニ関シテハ此際如何共
致方ナキニヨリ実験ノ結果後日更ニ談判ヲ試ムルコト致
シ兎ニ角調印ヲ為ス方可然ト信ス

一六〇 明治卅年七月二十日

在浦塩野村貿易事務官ヨリ
林外務大臣宛

日露漁業協約ニ関シ「ノウォエ・ウレーミヤ」
紙論調報告ノ件

公第三〇一号

七月廿四日接受

日露漁業協約ニ関スル近刊「ノウォエ・ウレーミヤ」ノ評
論御参考ノ為メ左ニ訳出致候其論評或ハ適切ナラサルモノ
有之哉ニモ見受ケラレ候得共協約ノ公表ナキカ故ニ之ニ対

日本漁業者ハ自国漁夫ヲ使用スルコトヲ得但シ黒龍江口ノ
漁場ニ対シテハ重要ナル例外アリ同方面ニ於テハ日本人ハ
露国漁夫ヲ使用シテ漁撈製魚スルノ義務アリ唯短期間(一
年間)ノ許可ヲ得タル漁場ニ限り製魚ノ為メ日本漁夫ヲ使
用スルコトヲ得又日本漁業者ハ露国領事ノ証明書ト日本官
憲ノ健康証書トヲ携ヘ自国船舶ニテ来航スルノ権ヲ有シ該
船舶ハ沿岸貿易法ニヨラズ一漁場ヨリ他漁場ニ回航スルコ
トヲ得其他日本人ハ是迄露国政府力既ニ発布シ又今後発布
スヘキ漁業規則ヲ遵守スルノ義務アリ新漁業規則ハ施行期
日ヨリ六ヶ月前ニ之ヲ日本政府ニ通知スルヲ要ス

該協約ノ期限ハ向フ十二ヶ年ニシテ期限満了后兩國政府ハ
更ニ其條款ヲ審議変更スルノ権ヲ有ス

吾人ハ茲ニ漁業協約ノ細項ニ亘リ評論スルヲ欲セス同協約
タル我極東ノ將來ニ大關係ヲ有スルニヨリ其内容ニ就キ詳
論センコトハ本編ノ能クスルトコロニアラサルナリ

故ニ吾人ハ暫ク其大体ノ觀察ニ止メン此程浦潮港ニ於テ拳
行シタル漁場競売ノ際全漁場數ノ九割以上ハ日本人ノ手裡
ニ歸シ露国人カ競売ノ効果ヲ奏スルノ望ミアルハ僅ニ日本
漁夫ノ使用ヲ禁止セル黒龍江口ニ於テノミニナリ之ニヨリ日
本漁業者ハ何等特殊ノ熟練アルニアラス又何等特殊ノ企業

シ確實ナル意見ハ具申致シ兼候然レトモ日本漁夫ニ対シ制
裁ヲ設ケムト謂ヒ移民ヲ奨励シテ日本漁業者ニ対抗セシメ
ムト謂フカ如キ露国新聞紙トシテハ相当ナル意見ト存セラ
レ候

六月二十日紙上所載

昨冬大ニ論弁シタル日露漁業協約ハ此程調印ヲ了ヘタリ其
正文ハ未タ公表セラレサレトモ新聞紙上ニ現ハレタル個々
ノ通信ニヨリ略其内容ヲ窺フニ足ル

露国ハ臘虎、臘臍臍ヲ除クノ外各種ノ魚類其他海産物ノ漁
撈製造ノ権ヲ日本臣民ニ賦与スルノ義務ヲ負ヒ其權利ハ日
本海、オホツク海白令海ノ全沿岸ニ拡張セラレ河川及「イ
ンレット」三十四ヶ所之レカ例外ヲナス日本人ハ此漁業權
ノ効果ヲ得シカ為メ特定ノ漁場ヲ獲得スルヲ要シ該漁場ハ
競売法ニヨリ貸付セラレヘク競売期日ハ少クトモ二ヶ月前
ニ浦潮斯德駐在日本領事ニ通牒スルヲ要シ各漁場ニハ漁撈
製魚ノ権ヲ賦与セラレ漁場主ハ船舶ヲ海岸ニ曳キ上ケ船舶
船具ヲ修理シ乾燥場燻製場其他必要ナル建築物ヲ設クルノ
権ヲ有ス又漁場主ハ漁獲物及不動産ニ対シ露国臣民ト同一
ノ税ヲ課セラレ露国政府ハ日本ニ輸出スル魚類ニ対シ何等
ノ輸出税ヲ課セサルノ義務アリ

法ニヨルニアラス全ク同胞ノ低廉ナル労働ヲ利用シ自家計
算ノ基礎ヲ立ツルモノナリトノ推斷ヲ下スコトヲ得ヘシ
漁場ノ競売價格ハ多クトモ五六萬留ニ止ルヘシト豫想シタ
ルニ實際ニ於テハ之ニ三倍シ十六萬留マテ競売上ケタリ日本
人ハ此競売金ヲ自家使用ノ漁夫ヨリ絞リ取ルコト勿論ナ
リ

露国政府ハ日本人カ自国漁夫ヲ使用スルコトヲ禁スル能ハ
スト雖トモ露国領海ヲシテ日本苦力酷使ノ修羅場ヲササ
シメンコトヲ要求スルコトヲ得ルノミニナラス又其義務アリ
露国政府ハ日本漁夫ノ酷使ヲ禁止シ彼等ヲシテ衛生的經濟
的條件ノ下ニ労働セシムヘキ法律ヲ発布スルコトヲ得ルノ
ミニナラス又其義務アリ日本人ハ宜シク露国人ト競争スヘシ
而カモ文明的方法ヲ以テスヘキハ論ヲ待タサルトコロナリ
云々

六月二十五日紙上所載

日露漁業協約ハ極東移民事業ニ大關係ヲ有スルモノナリ彼
ノ戦前漁業ニ從事シ今亦其事業ノ再興ヲ企ツル資本家ヲ誘
掖奨励スルノ価ナキニアラス而カモ如何ニ資本家ノ有益ナ
ル活動ヲ重ントスト雖トモ其活動タル主トシテ個人ノ利益
ヲ追フモノナリト言ハサルヲ得ス露国企業ノ發達ハ国家ノ

富強ニ資スルモノナレハ此等漁業ノ基礎ヲ鞏固ナラシムルコトハ幾分中間接ニ國家の關係ヲ有スルモノナルコト自明ノ理ナリト雖トモ此等ノ徒ハ主トシテ個人的利益ヲ計リ國家ノ為メ特別ノ価値ヲ有スルモノニアラス然ルニ我極東移民事業ノ見地ヨリ漁業ヲ觀察センカ全ク其趣ヲ異ニシ移民ハ直接國家の問題ヲ現実ナラシメ移民ノ漁業ハ直接重大ナル目的即チ極東地方ニ於ケル我勢力ヲ強盛ナラシムルモノナリ

漁業ハ極東ノ移民ニ最モ重要ナル補助ヲナスモノナリ極東至ル所ノ沿岸就中彼得大帝灣、黒龍江灣ノ如キ鮭、鱒、鱒、海參、混布ニ富ミ黒龍江鱒ハ風味「ウオルガ」産ニ讓ラス其卵ノ好販路ヲ有セサル所以ハ製法ニ熟セサルニヨルノミ實ニ漁業ハ移民經濟ヲ支持スルニ主要ナル關係ヲ有シ自家用トシ將夕販売用トシ我移民ニ豊富ナル漁獲物ヲ与フルモノナリト言フコトヲ得ヘシ

是故ニ移民力至便ノ地位ニ置カレ日本人ノ享有スルコト能ハサル特典ヲ享ケンコト希望ニ堪エス小規模ノ家族の漁業ヲシテ大資本家ノ大漁業ト同一ノ條件ノ下ニ競争セシメンカ其衰頹シテ再ヒ起ツ能ハサルコト期シテ待ツヘシ協約ノ正文未タ公表セラレサルハ移民力協約ニヨリ如何ナル保障ヲ得タルヤ正確ニ報導スルコト能ハサレトモ既ニ新

一六一 明治四年七月二十四日 在浦潮野村貿易事務官ヨリ 林外務大臣宛(電報)

露国領水内航行本邦汽船ニ関スル規定ノ協定通知ノ件

七月二十四日午後五時十分発

在浦潮 野村貿易事務官

第二四号

日露漁業協約ニ関シ本野公使ト露国全權トノ間ニ左ノ協定アリ「漁業ノ目的ヲ以テ露国領水内ニ航行スル一切ノ日本汽船ハ露文若ハ英文ヨリ成レル反訳ヲ添ヘタル航海日誌ヲ備ルコトヲ要シ帆船ハ可成前記ノ規定ニ遵フヘキモノトス」ト然ルニ本邦ヨリ沿海洲ニ渡航スル汽船ハ四百噸ヲ超ヘスシテ其船長モ多クハ乙種ナルニ依リ航海日誌ニ外国語訳文ヲ添ユルハ大ニ困難ナルニ付是非省略スル様露国政府ヘ交渉ヲ重ネタル処同政府ハ本年ニ限り寛大ニ取扱フコトヲ承諾シ国有財産庁長官ニ夫々訓令ヲ發シタル旨電報アリ就テハ右ノ趣貫管下在任漁業家ヘ周知セシムルノ方法ヲ取ルヘシ

註 右件ハ七月二十五日送第二九三号ヲ以テ中村通商局長心得ヨリ神山水産局長ヘ参考マデ通知アリ

聞紙上ニ現ハレタル通信ニヨレハ移民ノ利益ハ等閑ニ付セラレサリシナリ土人及移民ハ協約ノ拘束ヲ受ケス日本人ハ此等特典ヲ有スル住民ト同一ノ權利ヲ有スルニアラスシテ露国資本家ト伍フスルニ過キス露国政府ハ未タ競売ニ附セサル漁場ヲ移民ノ為メ各地ニ設備スルノ權利ヲ留保セリ斯クテ吾人ハ唯協約調印ノ際競売ニ附シタル漁場ヲ日本人ニ許可スルノ義務ヲ有スルモノニシテ其他ノ沿岸ハ之ヲ移民ニ分配シ以テ日本人ヲシテ要求ノ余地ナカラシムルヲ得ヘシ

是ニ於テ我政策ノ方針定マルヘシ若シ移民事業遅々タランカ日本人ハ近キ將來ニ於テ新漁場ノ開放ヲ要求スヘク吾人ハ之ヲ拒ムニ必要ナル論拠ヲ有セス若シ我移民速ニ各地ニ移住センカ吾人ハ以テ沿岸ノ大部ノ專用權ヲ確保スヘシ若シ急劇ナル移民ノ必要ト中央露西亜ノ土地不足問題トヲ對比センカ我政策ノ方針自ラ判明セン云々

明治四十年七月二十日 在浦潮 貿易事務官 野村基信(印) 外務大臣子爵 林 董 殿

一六二 明治四年七月三日 本野駐露公使ヨリ 林外務大臣宛

日露漁業協約正本進達ノ件

機第一九号

一昨二十八日午後三時外務省ニ於テ本使ト露国全權委員トノ間ニ記名調印ヲ了シタル左記日露漁業協約及附屬議定書正本此度帰朝ノ重野文学博士ニ托シ及進達候ニ付キ御査収相成候様致度候

一 漁業協約 本使ト外務大臣及外務次官 附屬議定書 トニ於テ調印

右ハ六月十九日附機密往第一二号附屬シ号ニ基キ其後往復電信ニテ修正ヲ加ヘ其都度御承認ヲ經タルモノニ有之候即チ露国側ニ於テハ從來全權委員タル外務次官ノ外ニ外務大臣モ全權トシテ本協約及ビ議定書ニ調印スルコト、ナリ隨テ前文ニ之ニ応スル變更ヲ見其他議定書第一條第二十九号ニ threeノ一字ヲ加ヘ同第十一條第二項第三号中 auquel Vers lequelニ改メタル外凡テ機密往第十二号ヲ以テ差進候通ニ御座候 右申進候敬具

在露

特命全權公使 本野一郎印
外務大臣子爵 林 董殿

一六三 明治四年八月十四日 林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛 (電報)

漁業協約適用ノ範圍ニ関シ照会ノ件

八月十四日午後一時五分發

本野 公使 大 臣

第一八〇号

「プロバンス」
漁業協約第五條並ニ第十二條ニ「Province du Littoral」トアルハ露領サガレンヲ包含スルコト無論ニシテ貴電第一〇七号第二項御上申ノ趣意ニ依ルモ明ナレトモ念ノタメ貴見承知シタシ又通商條約附屬議定書第二條ニ「Les Provinces russes a) de l'Amour et b) maritime」トアルハ談判ノ經過全体殊ニ貴電第六五号ニ依リ「ザバイカル」州ヲ包含スルコト明ナレトモ是亦念ノタメ貴見承知シタシ右二点ハ邦訳文確定上必要ニ付至急電報アリタシ

一六四 明治四年八月十五日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛 (電報)

漁業協約適用範圍回答ノ件

八月十五日 后五、一六 露都發
八月十六日 后二、一〇 本省着

林外務大臣 在露 本野公使

第二六〇号

貴電第一八〇号ニ関シ

一 (プロバンス ジュ リットラル) ニハ露領サガレンヲ含ム

二 (プロバンス ルツス アド ラムウルエ ベ マリ

チーム) ニハ (ザバイカル) 州ヲ含マス

一六五 明治四年八月十六日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛 (電報)

日露通商及漁業兩條約關係文書公表

提議ニ関スル件

八月十六日 午后七、一〇 露京發
八月十七日 同 四、五〇 本省着

林外務大臣 本野公使

第二六二号

一六六 明治四年八月二十日 林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛 (電報)

關係文書公表ニ関シ回訓ノ件

明治四十年八月二十日後一時四十分發

本野公使 大 臣

第一八一号

貴電第二六二号記載ノ諸文書ヲ發表スルコトハ大体ニ於テ異存ナケレトモ本邦ニ於テハ右文書ヲ邦訳文ニテ發表スルヲ要シ且露国政府ニ於テ昨年七月十三日付貴官ノ往翰以下六箇ノ文書ヲ發表スルニ於テハ帝國政府モ亦同シク之ヲ發表スルノ必要アルニ付右文書ノ写至急御送附アリタシ政府ハ一方ニ於テハ既ニ所持スル諸文書ノ翻訳ヲ急キ他方ニ於テハ右六箇文書ノ御送附ヲ受ケ之ヲ翻訳シタル上此等諸文書ヲ兩國ニ於テ發表スル時日及方法ニ関シ改メテ露国政府ニ交渉スルコトト致シタシ政府ハ兩條約公布ノ際通商條約附屬別約、議定書、領事館ニ関スル議定書、別約ニ関スル外交文書、漁業協約附屬議定書及同協約談判會議録第四号中記載ノ宣言八箇條ノミヲ發表スヘキニ因リ露国政府ニ於テモ同様兩條約公布ノ際ニハ是等ノ文書ノミヲ發表スル様御交渉アリタシ

露国政府ハ通商漁業兩條約ノ公布ト同時ニ通商談判ニ関スル會議録(プロセ、ヴェルバル)全部及ビ漁業談判ニ関スル左記書類ヲ公ケニシタシト申出デタリ右ハ本官ニ於テハ差支ナシト認ム同意ヲ与ヘテ可ナリヤ至急御電訓ヲ請フ

一、會議録全部一ヨリ五マテ及ヒ附屬書類

一、下調委員会ニ双方ヨリ提出シタル覚書三通

一、機密第九号附屬(ホ)号中第一号ヨリ第十二号迄及ビ(ト)号

一、昨年七月十三日付本官ノ往翰(談判開始ノ要求)

一、同年八月九日付外務大臣來翰(露国全權任命ノ通知)

一、外務大臣ヨリ在日本露国公使宛電報(双方全權任命ノ通知)

一、昨年十二月三十日付新聞通知文

(昨年往電第二二二号)

一、本年三月二十八日付露国全權ノ「ノート、ヴェルバル」(本年ヨリ漁区貸下ノコトハ條約締結ノ後ニシタシトノコト)

一、四月十七日付露国全權來翰及ヒ同月十九日付本官ノ回答(往電第一〇一及一〇五号末段ノ趣意)

以上

該交渉纏リ次第兼テ御稟請ノ旅行ニ出発セラレ差支ナシ
兩條約正文去十七日領収セリ

一六七 明治四十年八月二十日 林外務大臣ヨリ
西園寺総理大臣宛

日露漁業協約批准奏請ノ件

附屬書一 上奏案

二 御批准案

三 日露漁業協約議定書

四 日露漁業協約説明書

五 日露漁業協約ニ関スル宣言書

明治四十年八月二十一日發達

西園寺内閣総理大臣

林外務大臣

日露漁業協約御批准奉請ノ件

帝國全權委員法学博士本野一郎カ露國全權委員「イズヴォ
ルスキー」ト露國聖彼得堡ニ於テ会同シ記名調印シタル日
露漁業協約御批准ノ義ニ付別紙ノ通上奏仕候間可然御取計
相成候様致度此段申進候也

(附屬書一)

上奏案

調印シタル漁業協約ヨリ生スル或種ノ問題ヲ決定スルノ必
要アルヲ認メタルニ因リ兩國全權委員ハ左ノ諸條ヲ協議決
定セリ

第一條

本日調印シタル漁業協約第一條ニ記載シタル例外トナルヘ
キ入江(インレット)ハ左ノ如シ

一 「ラウレンチイヤ」灣(「プナウグシ」岬ト「カルギ
ラク」岬トヲ連結スル直線ニ至ル迄)

二 「メチグメンスカヤ」灣

三 「コニアム」灣一名「ベンケグネイ」灣(「ネチホノ
ン」岬ト「カラブ、ピーク」トヲ連結スル直線ニ至ル
迄)

四 「アボレエシエフ」灣一名「コロガン灣」

五 「ルメレード」灣

六 「プロヴァデューニエ」灣(「レソフスキー」岬ト

「ルイサヤ、ガラワ」トヲ連結スル直線ニ至ル迄)

七 「クレスト」灣(「メエエチケン」岬ト同緯線ニ至ル
迄)

八 「アナドイル灣」(「ワシイリヤ」岬ト「ゲエック」岬
トヲ連結スル直線ニ至ル迄)

林外務大臣時代 日露漁業協約 一六七

日本國ト露西亞國トノ間ニ締結シタル日露漁業協約御批准
相成候様仕度因テ別紙御批准案相添此段謹テ奏ス

明治四十年八月廿一日

外務大臣子爵 林 董

(附屬書二)

御批准案

天佑ヲ保有シ万世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本國皇帝(御
名)此ノ書ヲ見ル有衆ニ宣示ス

朕明治四十年七月廿八日露西亞國聖彼得堡ニ於テ帝國全權
委員カ露西亞國全權委員ト共ニ記名調印シタル日露漁業協
約ヲ閱覽点檢シ之ヲ嘉納批准ス

神武天皇即位紀元二千五百六十七年明治四十年九月九日東
京宮城ニ於テ親ヲ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名 國 璽

外務大臣子爵 林 董

(附屬書三)

日露漁業協約議定書

(註) 御批准ニナリシモノヲ採録ス

議定書

日本國皇帝陛下ノ政府及全露西亞國皇帝陛下ノ政府ハ本日

九 「バアウエル」灣

十 「シリューボチナヤ、ガールニ」湖

十一 「チュレニエ」湖

十二 「シエステフウトトオエ」湖

十三 「パロン、コルフ」灣ノ北部

十四 「カラীগ」灣

十五 「ベチエヴァンスカヤ」灣

十六 「アヴァチンスカヤ」灣(「ベヰイミヤンヌイ」岬
ト「グルニー」岬トヲ連結スル直線ニ至ル迄)

十七 「ベンチンスカヤ」灣(「マメート」岬ト同緯線ニ
至ル迄)

十八 「コンスタンチン」太公灣

十九 「ニコライ」灣(「ラムスドルフ」岬ト「グロテ」
岬トヲ連結スル直線ニ至ル迄)

二十 「スチヤスチャ」灣

二十一 「バイカル」灣(「チャウノ」岬ト「ヴャトウト
フ」岬トヲ連結スル直線ニ至ル迄)

二十二 「ヌイスキー」灣

二十三 「ナビリスキー」灣

二十四 「クレストーワヤ」灣

- 二十五 「スタルク」灣
 - 二十六 「ワニン」灣（「ヴェッセリー」岬ト「ブルーニ」岬トヲ連結スル直線ニ至ル迄）
 - 二十七 「イムペラートルスカヤ、ガーワニ」（「ミリウチン」岬ト「ブチャーチン」岬トヲ連結スル直線ニ至ル迄）
 - 二十八 「テルネイ」灣（「ストラーシヌイ」岬ト同子午線ニ至ル迄）
 - 二十九 「ウラヂーミル」灣（「バリユーゼク」岬ト「パトフスキー」岬トヲ連結スル直線ニ至ル迄）
 - 三十 「ブレオブラジエーニエ」灣ノ北東部ニ在ル小ナル入江（「マトヴェエフ」岬ト同子午線ニ至ル迄）
- 前記例外ハ露西亜国領水ノ範圍内ニ於テノミ其ノ効力ヲ及ホスヘキモノタルハ別ニ言フ俟タサルモノトス
- 「ボドカゲルナヤ」河口ヨリ「アヤン」港ニ至ル「オコーツク」海ノ北岸ニ於テハ「ペンヂンスカヤ」灣（第十七号参照）ヲ除キ前記例外トナルヘキ入江（インレット）ハ下ノ定義ニ從ヒ之ヲ決定スヘシ即陸地ニ灣入セル部分ノ長（「タルウエッグ」ノ長江口ノ幅ノ三倍以上ニ及フ灣ハ之ヲ例外トナルヘキ入江トス）

右ノ外左記ノ港湾ノ領水範圍内ニ於テハ軍略上ノ理由ニ依リ日本国臣民及他ノ諸外国人ニ對シテ漁業ヲ禁止スヘシ

- 一、「デ、カストリー」灣及「フレデリックス灣」（「カストリー」岬ト「クロステル、カンブ」岬トヲ連結スル直線及「クロステル、カンブ」岬ト「オストルイ」岬トヲ連結スル直線ニ至ル迄）
- 二、「オリガ」灣（「マネフスキー」岬ト「シユコート」岬トヲ連結スル直線ニ至ル迄）
- 三、彼得大帝灣（「パワロートヌイ」岬ヨリ「ガモウ」岬ニ至ル迄但シ灣内ノ群島ヲ包含ス）
- 四、「ボシエット」灣（「ガモウ」岬ヨリ「ブタコウ」岬ニ至ル迄）

第二條

河ト海トノ境界ニ関シテハ兩條約国ハ國際法ノ原則及慣例ニ從テ之ヲ決定スヘシ

第三條

漁業協約ニ依リ黒龍江海灣（リマン）ニ於テ日本国臣民ニ許与セラレタル漁業權ハ左ノ特別條件ニ從フヘキモノトス

- 一、日本国臣民ハ該方面ニ於テ露西亜国臣民ト均シク競

用セサルモノトス

第六條

露西亜帝国政府ハ競落人ニ貸下ケタル漁区ノ存在セサル場所ニ定住ノ為來着スル移住民ニ對シテハ漁業權ヲ許与スルノ權利ヲ留保スルハ言フ俟タサルモノトス土民ニ對シテモ亦同シ

露西亜国政府ハ一度漁区ヲ開設シタル場所ニ於テ漁業協約

存続期間内移住民又ハ土民ニ前項ノ權利ヲ許与セサルヘキコトヲ約ス

移住民タル資格ハ労働者ヲ使用スルコトナク自ラ漁業ニ從事スル者及其ノ家族ニノミ之ヲ認ムルモノトス

第七條

露西亜国政府ハ漁業協約第一條ニ特定シタル各方面ニ於テ既ニ存在スル漁区ハ移住民カ自己ノ漁業ノ為現今占有スルモノヲ除クノ外該協約存続期間内之ヲ開キ置クヘキコトヲ將來ノ為保證ス

第八條

競売ニ依リ貸下ケラル、期間ハ左ノ如ク之ヲ定ム

- (一) 漁業協約施行後ニ於テ始メテ開カルル漁区ニ付テハ一箇年

売ノ方法ニ依リ漁区ノ貸下ヲ受クルコトヲ得ヘシ

二、漁区ノ貸下ヲ受ケタル日本国臣民ハ漁業上一切ノ關係ニ於テ漁区ノ競落人タル露西亜国臣民ト均シク黒龍江沿岸河川漁業ニ関シ制定セラレ又ハ制定セラルヘキ法律、命令及規則ニ從フヘク特ニ該方面ニ於ケル漁区借受人ニ付シテ外国労働者ノ使用ヲ禁止スル規則ニ從フヘキモノトス

第四條

日本国臣民ハ漁業協約第一條ニ特定シタル各方面何レノ所ニ於テモ漁区ノ貸下ヲ請願スルトキハ競売ノ方法ヲ以テ其ノ貸下ヲ受クルコトヲ得ヘシ但シ前記各方面ニ於ケル魚類ノ養殖及保護、此等産業ノ取締其ノ他漁業ニ關スル現行又ハ將來ノ法律、命令及規則ヲ遵守スルヲ要ス尤日本国臣民ハ前記法律、命令及規則カ前記各方面ニ於テ漁区ノ貸下ヲ受ケタル露西亜国臣民ニ適用アルニアラサレハ之ニ服從スルコトヲ要セサルハ言フ俟タサルモノトス

第五條

「漁区ノ貸下ヲ受ケタル露西亜国臣民」ナル名称ハ（漁業協約第二條、第四條、第七條、第九條及第十條並本議定書第四條参照）特別ノ取扱ヲ受クル移住民及土民ニハ之ヲ適

(一) 三箇年間に經營シタル漁区ニ付テハ三箇年

(二) 三箇年ノ第一期間既ニ經營シタル漁区ニ付テハ三箇

年

(三) 三箇年ツツ二期間既ニ經營シタル漁区ニ付テハ五箇

年

第九條

漁業協約第十三條ニ記載シタル十二箇年ノ期間終了ノ際ニ於テ未タ貸下ノ期限到来セサル漁区ハ漁業協約ニ関シ兩締約國ノ為スヘキ決定如何ニ拘ハラズ其ノ貸下ニ付定メタル期間内引続キ有効ナルモノトス

第十條

露西亜帝國政府ハ日本國臣民カ鯨及鯨群来ノトキ鯨ト共ニ偶然網中ニ入りタル他ノ各種魚類ヲ以テ肥料ヲ製造スルコトニ異議ナシ又日本國臣民カ日本風ノ製法ニ依リ紅魚(鮭鱒ノ種屬)ヲ製シ且塩漬又ハ塩引ニスルコトニ関シテモ亦同シ

第十一條

日本國ト露西亜國領水内ノ漁場トノ間ヲ往復スルコトニ関スル航海證書ハ左記ノ事項ヲ證明スヘキ書類ヲ提出シタル日本國漁業者ニ対シ当該露西亜國領事館ヨリ之ヲ交付

第十二條

日本國臣民ノ占有スル一切ノ漁区ニ於テハ其ノ河口ニ最モ接近セルモノノ外通常ノ建網ヲ使用スルコトヲ得ヘシ河口ニ最モ接近セル漁区ニ於テモ曳網ニ依リ漁獲ヲ行フコトヲ得サル場合ニ於テハ建網ノ使用ヲ禁止セサルヘキコトヲ約ス

第十三條

漁業協約及附屬議定書中ニ使用セル「魚類及水産物」ナル文字ハ鰻鮒及鰻虎ヲ除クノ外一切ノ魚類、水産動物物其ノ他一切ノ水産物ヲ指示スルモノト解スヘキモノトス

第十四條

本議定書ハ本日調印シタル漁業協約ノ批准ニ依リ批准セラレタルモノト看做サルヘシ
本議定書ノ存続期間ハ前記協約ノ存続期間ト同一ナルモノトス
右證據トシテ兩國全權委員ハ本議定書ニ記名調印スルモノナリ

明治四十年七月二十八日即西曆千九百七年七月十五日(一十八日)聖彼得堡ニ於テ本書一通ヲ作ル

本野 一郎 印

スヘシ

一 船舶カ回航セムトスル一箇又ハ數箇ノ漁区ノ貸下ヲ受ケタル権利

二 乗組人ノ員數

三 単ニ漁業ニノミ使用セラルヘキ載貨ノ性質及積量

四 航海證書ニハ左記ノ事項ヲ記載スヘシ

一 船舶及船籍港ノ名

二 漁業者即一箇又ハ數箇漁区ノ借受権利者ノ名

三 船舶ノ回航先ナル一箇又ハ數箇ノ漁区ノ所在地

四 積貨ノ性質及積量

五 乗組人ノ員數

前記航海證書及健康證書ヲ有スル船舶ハ航海證書ニ記載シタル露國沿岸ノ地点ニノミ到リ且該地点ニノミ碇泊スルコトヲ得ヘシ該船舶カ常ニ開港港ニ出入スルコトヲ得ヘキハ言フ俟タサルモノトス

漁業協約第二條第三項ニ依リ鯨、鯨等ノ漁獲ヲ為スカ為露西亜國領水内ニ到ル日本船舶ハ豫メ露西亜國ノ特定港ニ碇泊シ當該露國官憲ヨリ該漁獲ニ関シ特別ナル免許狀ノ給付ヲ受クヘシ該免許狀ハ同時ニ航海證書タル性質ヲ有スルモノトス

イズヴォルスキー 印

(附屬書四)

日露漁業協約説明書

ポーツマス講和條約第十一條ニ於テ露國ハ日本海、「オコック」海及「ベリリング」海ニ瀕スル露國沿岸ニ於ケル漁業權ヲ日本國臣民ニ許セムカ為日本國ト協定ヲ為スヘキコトヲ約シタルトモ其ノ權利ノ性質及範圍等ニ至リテハ一切規定スル所ナク且講和會議録ニ於テ右漁業權ハ単ニ海洋ニ瀕スル沿岸ニノミ行ハレ河川及入江(仏語ノ「アンズ」、英語ノ「インレット」)ニハ及ハサル旨ヲ明言シタルニ依リ当局者ハ慎重ナル研究ヲ遂ケタル上昨年四月十四日附ヲ以テ帝國臣民漁業上ノ利權ヲ充分ニ確保スルニ足ルト認ムヘキ日露漁業協約案ヲ閣議ニ提出シ其決定ヲ經テ上奏裁可ヲ得同年六月六日附ヲ以テ在露本野公使ニ對シ本協約談判ノ全權御委任狀ヲ送附スルト同時ニ詳細ナル訓令ト説明トヲ添附シタル本協約案ヲ送附セリ該案ハ漁業ニ関スル日露臣民均等待遇ヲ基礎トシ尙ホ特ニ我漁業ニ必要ナル事項ハ協約中明文ヲ以テ之ヲ規定シ露國立法作用ノ影響ヲ受クサランムルヲ以テ其ノ精神トナシタリ

本野全權委員ハ該案ヲ受領シ直ニ昨年七月十三日ヲ以テ露國政府ニ對シ談判開始ヲ要求シ露國政府ハ同八月十日ヲ以テ外務次官「グバストフ」氏ヲ本協約談判全權委員ニ任命シタル旨ヲ通知シタルニ依リ本野全權委員ハ同月十四日ノ第一回會見ニ於テ我協約案ヲ提出シタルニ九月四日ノ第二回會見ニ於テ露國全權委員ハ其ノ對案ヲ提出シ茲ニ始メテ双方ノ主張略々明白トナリタルカ入江即「インレット」ナル一語ノ意義ニ関シ非常ノ困難ヲ感シ到底全權委員ノ會見ニ於テ此問題ヲ解決スル能ハサルヲ察シタルニ依リ昨年十月三十日ヲ以テ特別委員會ヲ組織シテ本問題ノ研究ニ從事セシムルコトニ決シ爾來特別委員會ハ十數回ノ討議ヲ重ネ前記一語ニ関シ双方ニ満足ナル理論的定義ヲ下スコトハ到底不可能ナルコトヲ發見シタルニ由リ本協約ノ目的ノ為ニノミ適用スヘキ或仮定的ノ定義ヲ下スコトニ決シ露國委員ハ海灣ノ入口ニ對スル與行二ノ比例ヲ有スルモノハ入江即「インレット」ナリトシ地圖ニ就テ之ヲ点檢シタルニ「オコーツク」海北岸（測量未済ノ場所）以外ノ方面ニ於テ大約八十個アルコトヲ發見シタルニ付我委員ハ百方論争ノ末露國委員ヲシテ右ノ比例ヲ一ト三マテニ引上クルコトニ承諾セシメ之ニ依テ地圖ヲ点檢シタルニ此比例ニ該當ス

ル海灣大約三十個ナルヲ發見シタルニ付帝國政府ハ大体ニ於テ同意ヲ表シ本協約締結ノ難關本年三月中旬ヲ以テ漸ク踰越スルコトヲ得タリ

我全權委員ハ特別委員會討議ノ進行ト共ニ協約中他ノ諸事項ノ商議ニ從事シタルトモ其ノ交渉甚タ遅々タリシカ前記難關ノ踰越セララルヤ協約全体ニ關スル交渉著シク迅速トナリタレトモ時日漸ク移リ到底本年ノ漁季ニ適用スルヲ得ヘキ協約ヲ締結スル能ハサルコト明白ナルニ至リタルヲ以テ本年五月四日ヲ以テ日露兩國全權委員ハ本年漁季ニ關スル仮議定書ニ調印シ本邦人ヲシテ協約ノ精神ニ依リ本年ノ漁季ニ際シ露國領水内ニ出漁スルヲ得ルコトヲ為シタリ其ノ後二三ノ問題ニ關スル露國政府トノ最後ノ交渉モ纏マリタレハ本協約ニ記名スルモ別段ノ差支ナント察シタルトモ長日月間錯綜困難ヲ極メタル本協約及附屬書ノ確定草案ヲ檢閱スルヲ要スト認メ外務大臣ハ本野全權委員ニ訓令シテ一切ノ關係書類ヲ發送セシメ之ヲ閱覽シタル上記名調印ノ訓令ヲ發シタルハ兩國全權委員ハ七月二十八日露國外務省ニ會同シ露國外務大臣モ新ニ本協約締結全權委員ニ任命セラレタルヲ以テ共ニ本協約ニ記名調印ヲ了セリ

本協約ハ協約本文、議定書及宣言書ヨリ成リ其ノ規定スル

所概ネ之ヲ左ノ十三項ニ分ツテ得ヘシ要スルニ我發案ノ趣意ニ依リ日露兩國國民均等待遇ヲ基礎トシ最モ漁業ニ必要ナル事項ニ関シテハ特ニ條約上ノ保障ヲ設ケ以テ露國法制ノ上ニ超然トランメタルモノナリ

一 漁業權行使ノ場所

我漁業權行使ノ場所ハ日本海「オコーツク」海及「ベーリング」海ニ瀕スル露國領水並ニ之ニ沿ヘル岸地即チ漁区ニシテ（協約第二條及第三條）河川及入江（インレット）ハ此範圍外ナリ入江ニ關シテハ協約第一條ニ於テ其ノ除外例タルヲ示シ附屬議定書第一條ニ於テ其名稱ヲ明記シ宣言書第八ニ地圖ヲ添付シ以テ明ニ其ノ所在ヲ示セリ又議定書第一條ニ軍略上ノ理由ニ依リ本協約ノ目的ノ範圍外タル海灣四個ヲ記載セリ此等ハ所謂入江（インレット）ノ定義ニ合スルモノニ非サレトモ露國ノ要塞地帯タルヲ以テ帝國政府ハ交譲ノ精神ヲ表セムカ為其ノ内ニ帝國臣民ノ漁業ヲ禁止スルコトニ承諾ヲ表シタルナリ

「オコーツク」海北岸ハ未タ測量ヲ經サル所多ク入江即「インレット」ノ所在ヲ定ムルコト能ハサルヲ以テ主義トシテ其ノ陸地ニ灣入セル部分ノ長江口ノ三倍以上ニ及フ灣ヲ以テ本協約ノ除外例タル入江ト為スヘキコトニ協定シ

（議定書第一條第二項）露國政府ハ同地方ニ於ケル海灣中此定義ニ合セサルコト明ナル所ニ於テハ測量ヲ俟タスシテ直ニ漁区ヲ貸下クルコトヲ承諾シ（宣言第一）且至急同方面ノ測量ヲ為スヘキコトヲ約セリ

露國ノ法制ニ依レハ河川ノ入口ニシテ灣形ヲ為スモノハ之ヲ河川ノ一部ト看做シ之ニ河川漁業ノ規則ヲ適用スルカ故ニ本協約ノ談判中露國全權委員ハ此趣意ノ規定ヲ設ケムコトヲ提議シタルトモ河ト海トノ境界ヲ定ムルコトハ帝國臣民ノ漁業權ニ重大ノ關係アリ決シテ露國ノ行政法規ヲ其ノ儘採用スヘキニ非サルカ故ニ本問題ハ追テ國際法ノ原則及慣例ニ從テ之ヲ決定スルコトト為セリ（議定書第二條）河川ハ全ク協約ノ範圍外タルハ明白ナレトモ本邦漁船全ク河川ニ入ルコト能ハサルニ於テハ出漁者ノ不便尠カラサルヲ以テ露國政府ト交渉シテ本年ノ漁季ニ際シテハ七個ノ特定河川ノ入口ニ碇泊スルヲ得ルコトト為セリ

黑龍江ノ海灣即「リマン」ト稱スル水域ハ地圖ニ就テ之ヲ看レハ韃靼海峽ノ一部ヲ成スコト明白ナリト雖モ實地ニ就テ之ヲ檢スルニ其ノ広袤僅ニ七ヴェルストニ過キス水色常ニ黑龍江ニ同シク退潮ノ時ハ海底皆水面ニ表ハレ黑龍江ノ河流該水域ニ入りタル後ハ三條ニ分レテ南北ニ走り大海ニ

注キ行クヲ見ルヘシ露国ハ從來該水域ヲ黒龍江下流ノ一部ト見做シ河川漁業規則ヲ之ニ適用セリ依テ本協約談判中露国委員ハ該水域ヲ以テ河川ノ一部ナルカ故ニ本協約ノ適用ヨリ除外視スヘキモノナリト主張シタルトモ數回討議ノ末遂ニ帝国全權委員ノ主張ヲ容レ該水域ニ於テモ帝国臣民ハ原則トシテ漁業權ヲ有スルコトト為シ唯タ露国臣民以外ノ者ハ労働者トシテ之ヲ使用スルコトヲ得ストノ制限ヲ附セリ（議定書第三條及宣言第二）露国政府ノ説明ニ依レハ該水域ハ露国ニ於ケル唯一ノ漁業練習場タルカ故ニ帝国臣民タル漁業家ト雖モ該水域ニ於テ漁業ヲ営ム場合ニ於テハ必ス露国漁夫ヲ使用スルコトト定ムルヲ要ストノコトナリ帝国臣民ハ協約第一條ニ特定セラレタル各方面何レノ所ニ於テモ漁区ノ貸下ヲ請願スルコトヲ得ヘク（議定書第四條）又一度開設シタル漁区ハ將來之ヲ鎖シ又ハ之ヲ移住民又ハ土民ニ貸渡ササルヘシ（議定書第七條及第六條）ト雖モ本協約調印ノ際現ニ移住民（議定書第六條第三項）カ自己ノ漁業ノ為占有スル場所ハ之ヲ競売漁区ト為シ帝国臣民ニ貸下クルコトナカルヘシ右移住民占有ノ場所ノ所在地及名稱ハ今日詳細ニ知ル能ハサル所ナリト雖モ約四十箇所ナリト云フ

コトト定メタリ露国ニ於テハ從來行政上ノ特許ヲ以テ漁区ヲ貸下クルコト多ク弊害尠カラサリシニ依リ本協約ニ於テハ自由競売ノ方法ノミヲ用フルコトト為シタリ鯨、鱈等ノ漁業ハ一定ノ漁区ヲ有スルヲ要セス同一方面ニ於テ數多ノ漁業家アルモ差支ナキカ故ニ競売ノ方法ニ依ルノ必要ヲ見ス出願者アレハ露国官憲ハ之ニ免許狀ヲ給付スヘキコトト定メタリ

四 諸公課ノ国民待遇

漁業ニ關聯スル一切ノ行為及物件ニ對スル公課ニ付テハ日露兩國臣民間ニ何等ノ區別ヲ設ケサルコトト為セリ（協約第四條）

五 輸出水産物免稅

從來帝国臣民カ露国領水内ニ於テ捕獲若ハ採取スル魚類及水産物ニ對シ露国政府ハ輸出税ノ外尙「ブード」税ナルモノヲ徴收シタリ而シテ右魚類及水産物ハ事實上露国ニ於テ消費セラルルモノ少ク殆ント皆露国ヨリ輸出スルモノナルヲ以テ右輸出税及「ブード」税ナルモノハ我漁業家ニ取リテ非常ノ打撃タリキ依テ協約ニ於テハ總テ此等ノ税ヲ課セサルコトト定メタリ（協約第五條）

欄外註（旁点ノ部）事実ト相違リセ布度税ハ即チ輸出税ナリ

二 漁業權ノ目的物

「ポーツマス」條約第十二條ニ所謂漁業權トハ其ノ文字ノ示スカ如ク単ニ魚類ノミヲ捕獲スルノ権利ナルカ故ニ其ノ他ノ水産動物並ニ水産物ヲ捕獲、採取スルノ權利ハ本協約ニ於テ規定スヘキモノニ非ストハ露国委員ノ当初固ク主張シタル所ナリシカ遂ニ讓歩シテ臘肭獸及臘虎ヲ除クノ外一切ノ魚類、水産動物其ノ他一切ノ水産物ヲ捕獲採取スルノ權ヲ漁業權ト称スルコトヲ承諾シタリ（協約第一條及議定書第十三條）依テ鯨ハ固ヨリ珊瑚、真珠等ノ水産動物ノ捕獲採取ノ權利ハ本協約ニ依リ許与セラルルニ至リタルモノナリ

臘肭獸及臘虎ニ關シテハ露国ニ特別ノ法制アリテ競売ノ方法ヲ以テ其ノ狩獵ヲ許可セス全ク行政上ノ特許ニ依リ一定ノ露国臣民ニ之ヲ許可スルコトニ為シ居レリ

三 漁業權取得ノ方法

帝国臣民カ露国領水ニ於テ漁業權ヲ取得スルノ方法ニ二種アリ一ハ競売ニシテ一ハ免許ナリ免許ナル方法ハ単ニ一定ノ漁区内ニ於テ捕獲スルコト能ハサル鯨、鱈等ノ魚類ノミニ關スルモノニシテ（協約第二條末項及議定書第十一條末項）其ノ他一切ノ漁業ニ關シテハ常ニ競売ノ方法ヲ用フル

六 漁業使用人国籍ニ關スル制限撤去

從來帝国臣民ハ南樺太ニ於テ露国政府ノ思慮トシテ漁業權ヲ附与セラレタルコトアリタレトモ使用労働者ハ露国人ニ限ルノ條件ヲ附セラレタルヲ以テ漁業經營上非常ノ不利ヲ蒙リタリ依テ協約ニ於テハ全ク此制限ヲ撤去シテ如何ナル国籍ノ者ヲ用フルモ總テ漁業家ノ自由ニ任スコトト為セリ（協約第六條）

欄外註（旁点ノ部）原則トシテ露国人ニ限ル然レトモ除外アリ

七 漁獵ノ方法

漁獵方法ハ原則トシテ日露兩國国民同一ノ法令ニ服従スルコトト規定シタルトモ我國漁業家得意ノ方法タル建網ハ露国漁業家ノ用キサル所ニシテ從來屢次露国官憲ヨリ禁止セラレタルコトアルニ依リ特ニ一條（議定書第十二條）ヲ設ケ建網ヲ用フルノ權利ヲ確保シタリ

八 魚類及水産物製造方法

製魚等ノ方法ハ原則トシテ日露兩國国民同一ノ法令ニ服従スル旨ヲ規定シタルトモ（協約第七條）鱈類ヲ以テ肥料ヲ製造スルコト及日本風ノ製法ニ依リ鮭鱈類ヲ塩引又ハ塩漬ニスルコトニ關シテハ從來露国官憲ニ於テ種々ノ理由ノ下ニ之ヲ禁止シタルコトアリ我漁業家ハ之カ為ニ尠カラサル損

害ヲ被リタルヲ以テ協約ニ於テハ如何ナル場合ニ於テモ帝國臣民ニ對シテ右等ノ禁止ヲ為ササル旨ヲ規定シ置キタリ
(議定書第十條)

欄外註 (旁点ノ部) 鮭鱒ヲ以テ肥料製造ニ關シテハ禁止セラレタルコトアレド塩漬ヲ禁止セラレタルコトナシ

九 漁業ニ必要ナル人員物件等ヲ以テ本邦ト

漁区トノ間及一漁区ト他ノ漁区トノ間ヲ自由ニ往來スルノ權利

戰前ノ取扱ニ依レハ露國政府ノ恩恵ニ依リ露領ニ漁区ヲ得タル帝國臣民ハ先ツ特定ノ露國港ニ到リ證明書ヲ受ケ然ル後始メテ其ノ漁区ニ到ルヲ得ルコトト為リ居リ且一漁区ヨリ他ノ漁区ニ到ルコトモ種々ノ手續ヲ要シ不便尠カラザリシニ依リ協約ニ於テハ此等ノ場合ニ於テ總テ自由ニ直接ニ往來スルコトヲ得ル旨ヲ規定シ且漁業ニ必要ナル人員物件及收穫物等ハ總テ無税ニテ前記場所ノ間ヲ運搬スルコトヲ得ルコトト為セリ(協約第八條及議定書第十一條)但シ此等ノ船舶ニシテ汽船ナルトキハ英訳又ハ露訳ノ航海日誌ヲ備フルコトヲ要シ帆船ナルトキハ成ルヘク之ヲ備フルコトヲ要ス(宣言第五)ト規定セルハ密漁防止ノ一方法ナリ

十 漁区外ニ於ケル製魚事業

漁業ニ關スル法令不明ニシテ本邦漁業家ヲ困惑セシメタリシハ旧時ノ状態ナリ依テ本協約ニ於テハ法律命令ハ其ノ施行ヨリ少クトモ六箇月前日本國政府ニ、規則ハ其ノ施行ヨリ少クトモ二箇月前、競売ニ關スル細目ハ競売施行ヨリ少クトモ二箇月前在浦塩帝國領事ニ通牒スヘキコトト定メタリ(協約第二條及九條)

十三 協約存続期間

今般締結セラレタル漁業協約ノ期限ハ十二箇年ナリト雖モ兩締約國ハ每十二箇年ノ終ニ於テ本協約ヲ其儘更新スルカ又ハ多少ノ改正ヲ加ヘテ新協約ヲ締結スルノ義務ヲ負担スルモノナルカ故ニ帝國臣民カ日本海「オコーツク」海及「ベーリング」海ニ於テ獲得シタル漁業權其ノ物ノ永久不滅タルヤ疑フ容レサル所ナリ

(附屬書五)

日露漁業協約ニ關スル宣言書

日露漁業協約締結談判會議録第四号

千九百七年六月十八日(五日)開會

(前略)

日本國全權委員及露西亞國全權委員ハ本日ノ會議ヲ閉ツルニ先チ五ニ左記ノ宣言ヲ為セリ

漁業ノ權利ハ海岸ニ限ルモノニシテ河川ニ於テ之ヲ有スル能ハサルハ本協約ノ原則ナリ依テ帝國政府ハ河川及内地ニ於テハ少クトモ帝國臣民ノ為ニ製魚ノ權利ヲ得ムコトヲ努メ最惠國民待遇ノ條件ヲ以テ河川及内地ニ於ケル特別ノ借区内ニ於テ魚類及水産物ヲ製造スルヲ得ル旨ヲ規定シタリ
(協約第十一條及宣言第二)

十一 沿海洲(露領樺太ヲ含ム)及黒龍江洲

ヨリ輸入スル魚類及水産物ニ對スル免税

露國政府ハ本協約、議定書及宣言書ヲ以テ重大ニシテ貴重ナル數多ノ讓与ヲ為シ其ノ對価トシテ沿海洲及黒龍江洲ヨリ本邦ニ輸入スル魚類及水産物ニ對シ免税ノ特典ヲ与ヘムコトヲ請求シ來リタリ案スルニ帝國現行關稅定率法第七條十七ニハ本邦ヨリ出漁セル船舶ヲ以テ捕獲採取シタル水産動物及其製品ニシテ工程ノ簡單ナルモノハ輸入税ヲ免除スト規定シアル以上ハ露國政府ノ請求ニ応シ沿海洲及黒龍江洲ニ於テ捕獲採取シタル一切ノ魚類等ニ對シ輸入税ヲ免除スルモ差支ナシト認メ之ヲ承認シ(協約第十二條)且ツ魚類等ニ關シテハ内地ニ於テ何等ノ税ヲ課セサルノ實際ナルヲ以テ宣言第七ノ趣旨ニモ同意ヲ与ヘタリ

十二 法令實施ノ豫告並其ノ適用

一、「オコーツク」海北岸ニ關シ露西亞帝國政府ハ同沿岸ニ於テ至急ニ着手スヘキ測量調査ノ結果ヲ俟タスシテ日本國臣民ニ對シ「入江」即仏語「アンズ」英語「インレット」ノ定義中ニ明ニ包含セラレサル場所ニ於テハ漁区ヲ貸下クルコトヲ約諾ス

二、黒龍江海灣(リマン)ノ漁区ニ於ケル外國労働者ノ使用禁止ニ關シ露國全權委員ハ日本全權委員ニ對シテ左記ノ説明ヲ為セリ

長期漁区ニ於テハ漁業並魚類ノ製造ニ付外國労働者ノ使用ヲ禁止ス但シ右漁区ノ所有者ハ自己ノ漁区ヲ距ルコト約半「ヴェルスト」又ハ一「ヴェルスト」ノ場所ニ於テ土地ノ短期貸下ヲ請願スルトキハ其ノ貸下ヲ受クルコトヲ得ヘシ此ノ貸下地区ハ魚類ノ製造用ニ供スヘキモノニシテ其ノ範圍内ニ於テハ使用労働者ノ国籍ニ付何等ノ制限ヲ設ケサルヘシ

短期漁区ニ於テハ単ニ魚類ノ捕獲ニ關シテノミ外國労働者ノ使用ヲ禁止ス魚類ヲ製造スルカ為ニハ陸上ニ於テ如何ナル国籍ノ労働者ヲモ使用スルコトヲ得ヘシ
長期漁区並短期漁区ニ於ケル前記国籍ノ制限ハ監督者、派出員又ハ手代等ノ如キ労働者ノ階級ニ屬セサル

者ニ対シ其ノ適用ナキハ言フ俟タサルモノトス
三、「短期漁区」ナル文字ハ貸下期間一箇年ヲ超エサル
漁区ニノミ之ヲ適用スルモノトス

四、漁業協約第一條ニ特定シタル各方面ニ於ケル漁区ニ
シテ同協約実施前長期ノ貸下ヲ為シタルモノハ其ノ実
施後ニ於テモ亦同シク直ニ長期ノ貸下ヲ為スヘキコト
ヲ協定ス

五、漁業ノ為露国領水内ヲ航行スル一切ノ日本国汽船ハ
露訳又ハ英訳ノ航海日誌ヲ備フヘシ漁業ノ為露国領水
内ヲ航行スル日本国帆船モ亦成ルヘク前記ノ規定ニ從
フヘシ

六、漁業協約第十一條ノ原則既ニ確定シタルニ付日本国
全権委員ハ露西亜帝国政府ガ同條ノ適用ヨリ生スルコ
トアルヘキ諸制限ヲ日本国臣民ニ加フルニ当リテハ單
ニ公ノ秩序ノミヲ考量スルノ方針ヲ採リ事情ノ許ス限
リ該制限ヲ減少セラレムコトヲ希望スル旨ヲ述ベタリ
之ニ對シ露西亜国全権委員ハ右ノ見解ニ同意ノ旨及露
西亜国政府ノ意思ハ同條記載ノ工業ヲ為ス一切ノ外国
民ニ對シテ「ニコラーエウスク」方面（黒龍江ノ河口
及同海灣即チ「リマン」）ニ於ケル既存ノ法制ヲ施行

一六八 明治四十年八月二十六日

本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛

漁業協約談判ニ関シ露国政府ニ於テ公ニ
スヘキ書類ニ関スル件

機密第二七号

九月廿三日接受

日露漁業協約談判ニ関シ此度露国政府ニ於テ別添甲号写ノ
書類ヲ公ニシテキ旨本官ニ申出候ニ付キ先般電信ヲ以テ伺
出タル次第有之候処前記目録中別添乙号目録ノ書類ハ大要
電信ヲ以テ具報シタルモノ又ハ重要ノ關係ナキヲ以テ是迄
進達ノ運ニ至ラサリシモノニ付其写差進候 敬具

明治四十年八月二十六日

在露

特命全権公使 本野 一郎印

外務大臣子爵 林 董殿

追テ別添甲号目録中第十五巴里ニ於テ日本政府ヨリ
為シタル新聞通知文トアルハ露国外務省ニ於テ本使
ガ其節巴里ニ於テ「ル、タン」新聞記者ニ語リタル
ヲ指セルモノニシテ別ニ文書トシテ存在セルモノア
ルニアラス且ツ同目録中第十四露国側ヨリ為シタル
新聞通知文ナルモノモ其性質外交文書トシテ公ニス

林外務大臣時代 日露漁業協約 一六八 一六九

スルニ在リ最モ監督困難ナル地方ニハ該法制ヲ適用セ
サルコトアルヘキ旨ヲ答ヘタリ

七、日本国全権委員ハ露西亜国全権委員カ漁業協約第五
條ノ文言ヲ確定的ニ承諾シ之ニ依リ露西亜国政府ガ沿
海洲及黒龍江洲ノ露西亜国領水内ニ於テ漁獲又ハ採取
セラレ日本ニ輸出セラルヘキ魚類及水産物ハ其ノ製造
セラレタルト否トヲ問ハス之ニ對シテ何等ノ名称ヲ以
テスルモ税金ヲ取立テサルヲ約シタルコトヲ認メタル
ニ依リ日本国政府ハ沿海洲及黒龍江洲ノ露西亜国領水
内ニ於テ魚獲又ハ採取セラレ日本国ニ輸入セラルル魚
類及水産物ハ其ノ製造セラレタルト否トヲ問ハス之ニ
對シテ同協約第十二條ニ記載シタル輸入税ハ固ヨリ何
等ノ名称ヲ以テスルモ税金ノ取立ヲ為ササルヘキコト
ヲ宣言セリ

八、漁業協約第一條ニ記載シタル例外タルヘキ或入江
（インレット）ニ関シ将来紛議ノ原因ヲ全然除去セム
カ為前記諸入江ノ精細ナル境界ヲ示セル地圖ヲ本會議
録ニ添附ス

（後略）

ヘキモノニ無之候ニ付露国政府ト交渉ノ末右第十四
及ヒ第十五トモ公ニスヘキ書類中ヨリ省クコトニ纏
メ表中ヨリ取除キタル儀ニ有之候為念右申添候ト同
時ニ閣下御参考迄ニ右露国政府ノ通知文トシテ昨年
十二月三十一日附「ジュールナル、ド、サント、
ペテルスブルグ」新聞ニ掲載セルモノ別添丙号ヲ以
テ差進候

一六九 明治四十年九月十日

林外務大臣ヨリ
西園寺総理大臣宛

日露漁業協約公布ニ関スル件

明治四十年九月十日

西園寺総理大臣宛

林外務大臣

日露漁業協約公布ニ関スル件

機密送八二号

日露漁業協約ノ儀ハ本月九日午後三時半東京外務省ニ於テ
日露兩國全権委員ノ間ニ御批准書交換ヲ了シ候処右協約ハ
日露兩國ニ於テ右交換後四十八時間ヲ経テ同時ニ公布可相
成様兩國政府間ニ協定致候ニ就キ帝國政府ニ於テハ本月十

二八五

一日午後三時半ヲ以テ右公布相成候様致度別紙條約公布案
相添へ此段申進候也
(別紙添付ノコト)

一七〇 明治四十年十月十日 林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛 (電報)

漁業協約關係文書公表ニ関シ照会ノ件

別 電 日本政府公表目録

十月十日午後一時発

在露 本野公使宛 林 大 臣

第二一七号

日露漁業協約關係文書公表ノ件ニ関シ帝國政府ハ別電第一
一八号目録ノ通來二十日以後ハ何時ニテモ公表スルコトヲ
得ハシ就テハ露国政府ハ何日頃發表シ得ルヤ御確マノ上双
方同日ニ發表スル様致シタシ尙為念公表書類ハ別電目録ノ
通ニテ日附其他一切相違ナキヤ一応露国政府ト御打合ハ上
公表ノ期日ト共ニ至急回電マシ
別電目録中第三回會議ノプロトコルニ十月十五日 (二日)
トブルン誤キシテ実ハ十月二十五日 (十二日) ナルカ如シ

(15) Promemoria of Japanese Plenipotentiary (28
February 1907)

(16) Verbal Note of Motono (8 March 1907)

(17) Promemoria of Russian Plenipotentiary (17
March 1907)

(18) Verbal Note of Goubastoff (28 March 1907)

(19) Promemoria of Japanese Minister (9 April 1907)

(20) Promemoria of reply of Minister for Foreign
Affairs of Russian (13 April 1907)

(21) Promemoria of Japanese Plenipotentiary (10
April 1907)

(22) Promemoria of reply of Russian Plenipotentiary
(15 April 1907)

(23) Letter of Goubastoff (17 April 1907)

(24) Reply of Motono (19 April 1907)

(25) Preliminary Protocol (4 May 1907)

(26) Protocol of Conference No. IV.

(27) " " No. V.

一七一 明治四十年十月十二日

落合駐露代理公使ヨリ
林外務大臣宛 (電報)

露国側發表期日ニ関スル件

林外務大臣時代 日露漁業協約 一七一 一七二

如何又「ブンス」下調委員會第三回ノ開会期日不明ニ付御
取調ノ上併セテ回電アル
(別 電)

(1) Note of Japanese Minister (13 July 1906)

(2) Note of Iswolsky (9 August 1906)

(3) Minister for Foreign Affairs of Russia to Russian
Minister in Tokio (Telegram)

(4) Protocol of Conference No. I. (Annex 1.)

(5) " " No. II. (Annex 1, 2, 3, 4)

(6) " " No. III. (Annex 1, 2.)

(7) Promemoria Japanese Plenipotentiary (8 Novem-
ber 1906)

(8) Promemoria of reply of Russian Plenipotentiary
(15 November 1906)

(9) Résumé of 1st meeting of Sub-Commission (17
November 1906)

(10) " 2nd meeting (30 November 1906)

(11) " 3rd meeting

(12) Promemoria of Japanese Plenipotentiary (23
January 1907) and Annex (Promemoria)

(13) Note of Motono (1 February 1907) and Annex
(Promemoria, 22 January)

(14) Note of reply of Goubastoff (2 February 1907)

十月十一日 后四、四五 露都發
十月十二日 前八、四〇 本省着

林外務大臣 在露 落合代理公使

第三一二号

貴電第二一七号ニ関シ露国側ニ於テハ漁業協約關係書類ノ
發表ハ今ヨリ十日以後十五日以内ニ定メタシトノ希望ニテ
確タル期日ハ三日程以前ニ本官ニ通知スハシ又露国ニ於テ
ハ兩國必スモ同日ニ發表スルヲ必要ト認メサントモ出来
得ハクハ同日カ一二日ノ前後ヲ以テ發表スルコト宜シカ
ラント言ハリ書類ノ日付等ハ明日ヨリ双方再ヒ比ハ合ハス
コト及ヒ第三回ノプロトコルノ日付ハ先方ノ分ト照合シ
テ訂正方取 (計フ?) コトニ話シ置キタレハ共ニ追テ電報
スハシブンス下調ハ委員會第三回ノ開会期日ハ十二月十日
(十一月廿七日) ナリ

一七二 明治四十年十月十四日

落合駐露代理公使ヨリ
林外務大臣宛 (電報)

露国側公表順序報告ノ件

十月十四日 后七、九 露都發
十月十五日 后五、〇 東京着

林外務大臣 在露 落合代理公使

第三一四号

貴電第二一七号及第二一八号ニ関シ

發表スヘキ書類彼我照合シタルトコロ露国側ニテハ大体本年八月廿六日附機密第廿七号附屬甲号目錄ノ順序ヲ以テ發表スル筈ナリ貴電第二一八号ノ日附其他順序ニ於テ露国側ノ印刷ハ左ノ通ナリ居レリ

貴電第二一八号第三電文ノ日附八月十日(七月廿八日)各會議録ノ附屬書類ハ必シモ會議録ニ添付セス其提出セラレタル日附ノ順序ニヨリテ發表スル由ニテ右機密信附屬露国側目錄第五ニハ別電第三一五号ノ如キ露国全權ノ書翰ヲ挿入シ其附屬トシテ第二會議録ノ附屬書第一第二ヲ添付ス

露国目錄第六(貴電第二一八号第五)第二會議録ニハ附屬書全部ヲ附セス

第七ニハ別電第三一六号本野公使書翰挿入シ之ニ第二會議録附屬書第三第四ヲ添付ス

第八第三會議録ニハ露国側ニテハ附屬書トシテ同會議録附屬書第二ノミヲ添付シ附屬書第一ハ同會議録中第二項第一「パラグラフ」ノ末段(Voir annex No. 1)ヲ削リテ其次

フ及同會議録第二項第一「パラグラフ」中ニ引用シアル第三回會議ノ日附モ右ト同様訂正スヘキモノナリ尙本件書類ノ發表ハ本月廿五日頃以後トナル模様ナリ

一七三 明治四年十月六日 林外務大臣ヨリ 落合駐露代理公使宛(電報)

公表文書ノ順序ニ関シ訓令ノ件

十月十八日午後二時二十分發

在露 落合代理公使 林 大 臣

第二二四号

官報活字組合セ濟ニ付当方ニ於テハ往電第二一八号順序ニテ發表スヘキニ付其旨露国政府ニ通知アリタシ

但シ第三露国外務大臣ノ電信ニハ日付ヲ記入第五附屬書第一号ノ前ニ貴電第三一五号同附屬書第四号ノ次ニ貴電第三一六号ヲ挿入第七覺書日附ハ十一月七日ニ修正第十三覺書日附ハ二月一日ニ修正

貴電第三一二号第三回「プロトコール」日附ノ件電報アレ

ニ挿入セリ

第九日本全權「プロメモリア」ノ日附ハ三十九年十一月七日(十月廿五日)ナリ

第十四(貴電第二一八号第十二)附屬「プロメモリア」ニハ日附ヲ附セス

第十五本野公使書翰ノ附屬「プロメモリア」ノ日附ハ書翰ノ日附ト全シク二月一日ナリ

第二十二第二十三ハ順序ヲ顛倒シ四月十日附本野公使「プロメモリア」ヲ第二十二トシ四月十三日附外務大臣「プロメモリア」ヲ第二十三トス

第二十八(貴電第二一八号第二十六)第四會議録ニハ附屬書第一トシテ協約及「プロトコール」ノ(テキスト)附屬書第二トシテ地圖ヲ附ス但シ「テキスト」ハ第三十ト重複スルニヨリ第二十参照ト認ムルノミニテ實際ハ之ヲ記載セサル筈ナリ

第三十協約及「プロトコール」並ニ批准書 第三十一通商漁業兩條約ヲ在外露国使臣ニ通告シタル際發シタル露国政府ノ Circular note 尙第三會議録ノ日附ハ十月廿五日(十二日)ノ誤ニシテ露国側ニテモ訂正シテ發表スヘント云ヘリ右ノ結果第四回會議録第一「パラグラフ

一七四 明治四年十月九日 落合駐露代理公使ヨリ 林外務大臣宛(電報)

公表順序打合濟ノ件

十月十九日 午後五時十分 露都發
十月二十日 午前九時十分 東京發

林外務大臣 落合代理公使

第三一九号

貴電第二二四号ニ関シ露国政府ニ於テハ日本政府カ自己ノ適當ト認ムル順序ニテ文書ヲ發表スルコトニ異議ナン往電第三一二号第三會議録日付ノ件ハ往電第三一四号ノ末ノ方ニ詳シク報告シ置キタリ同電報御再読ヲ請フ

貴電第二一八号第七日本公使(全權ニアラス)第八ハ露国外務大臣ノ「プロメモリア」ナリ念ノ為

一七五 明治四年十月五日 林外務大臣ヨリ 本野駐露公使宛(電報)

公表期日ニ関シ露国政府へ交渉方訓令ノ件

十一月五日午後一時三十分發

在露 本野公使宛 林 大 臣

第二三八号

漁業協約會議録等發表ニ関シ当方ニテ八十数日前ヨリ官報号外印刷済ナリ發表期日露国政府ト交渉ノ上電報アリタシ

一七六 明治卅年十二月六日 本野駐露公使ヨリ 林外務大臣宛(電報)

公表期日ニ関シ露国政府回答ノ件

十一月六日 后五、三六 露都發
十一月七日 前一〇、四五 本省發

林外務大臣 本野公使

第三二九号

貴電第二三八号ニ関シ露国政府ニテハ來週木曜日前ニ發表スルコトハ六ヶ敷故若シ日本政府ニテ其以前ニ御發表ノ必要アラハ露国ニ先チ御發表ニナルモ毫モ異存ナキ旨 確答アリタリ

一七七 明治卅年十二月廿日 林外務大臣ヨリ 寺内陸軍大臣宛

回覽書類返送ノ件

附屬書 本邦駐割壤洪国代理公使ヨリ

本国外務大臣宛報告書

日露通商並漁業條約ニ関スル件

寺内陸相宛 林外相

明治四十年十一月十四日

機密第七四号

客年十四日附ヲ以テ御送附相成候別紙回覽濟ニ付及御返送候條御查收相成度此段申進候也

(附屬書)

本邦駐割壤洪国代理公使ヨリ日露通商並漁業

條約ニ関シ本国外務大臣宛報告ノ件

(四〇、一〇、一四附陸軍大臣ヨリ回覽ノ為送附)

東京駐割壤洪国代理公使ヨリ日露通商航海並ニ日露漁

業條約ニ関シ詳細ナル意見ヲ附シ本国外務大臣宛左ノ

報告ヲ為ス

十月三日

九月十一日ノ官報ニテ公布セラレタル日露通商航海條約及

ナレバ其受クル所ノ利ハ殆ント云フニ足ラス

第一條ノ五項ニ於テハ兩國人民ノ為ニ最惠國ノ臣民又ハ人民ノ有スル農業不動産ノ所有其他何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス土地ノ保有ニ関シ均霑スル事ヲ定メタリ

第二條ニ於テハ旧條約ニ存スル兩國ノ臣民力相互ニ通商航海ノ自由ヲ有シ一切ノ生産興業商業ニ従事スルコトヲ得ルヲ規定ス

此一切ノ商工業ニ従事スル事ヲ得ルノ意味ハ旧條約ノ意味ト同シ而シテ第四項ニ於テ他ノ特別法律命令規則ニシテ「外國人一般ニ適用スヘキモノ」ニハ何等ノ影響ヲ及ボサル事ヲ掲ケタリ

日米條約ニハ此項ニ該当スル所ニ於テ日本移民ニ對スル特種ノ規定アレドモ日露條約ニハ之レナシ之レ日本條約ト日露條約ニ於テ其殖民政略ノ特異ナルヲ證スルモノナリトス故ニ次期ノ條約改正ノ際ニハ日本国民カ北米合衆國又ハ他ノ諸國ト交渉スルニ此日露條約ノ如ク日本殖民ニ對シ此日露條約ニ載スルカ如キ一般ノ規定即チ「外國人一般ニ適用スル」法律諸規則ト云フ下ニ於テシ日本移民ニノミ別種ノ規定ヲ設ケサルヲ以テ改正ノ要点トナスヘシ

第十條ニ於テ戰前條約ニ規定セラレタル露國ノ航海上ノ特

同條約附屬別約等ハ既ニ前報告書ト共ニ閣下ニ呈シタリキ爾來日本各新聞紙ノ此條約ニ對スル批評又ハ姿勢如何ヲ視ルニ日露大戰爭ノ最大結果タル此條約ニ向テ細密ノ注意ヲ払ヒテ闕読シタルモノハ誠ニ少数ナリ今細カニ本條約ヲ讀ムニ日本國力條約ニ於テ得タル利益ハ少々ナラサルナリ日露條約ハ一見兩國對等タリト雖其實質ヲ視ルニ日本ハ其經濟上ノ点ヨリ國外ニ向テ發展セサルヘカラサルノ必要ニ迫レリ言フ迄モナク人口ノ繁殖ハ其食物ヲ他ニ求メサルヘカラサルナリ然ルニ露國ハ之ニ反シテ全ク國外ニ求ムルコトナキナリ故ニ日露條約ノ交渉ハ日本ハ常ニ要求側ニ立テ露國ハ受身ニアリテ日本ノ欲望ヲ防クノ位置ニ在リ隨テ露國側ヨリハ自國ノ利益トシテ求ムルコトハ最モ少シ故ニ實質上日露條約ハ日本ノ為メニミ都合善キモノタルトモ謂フヲ得ベシ條約ニ於テ對等ナリ之レ其形ノミ而カモ露國ニハ何等ノ益ヲ生セズ

今日露戰前ノ通商條約ト今回締結セラレタル條約トヲ比較シテ之ヲ論セン

同條約第一條ヨリ第六條ニ於テ規定スル所ハ重ニ露領内ニ生活シ益々繁殖スル日本國人ノ生活問題ヲ定ムルモノナリ而シテ之ニ反シテ日本領内ニ住居スル露人ハ極メテ少数

権ヲ除去シタリ

第十四條ニ於テハ旧條約ノ如ク兩國共ニ最惠國條件ヲ容認スル事ヲ定メタリ

第十六條ニ於テハ西締盟國ノ工業及商業所有權ノ保護ニ関シテ規定シタリ

以上本條約ニ関シテ列挙シタレドモ本條約ヨリモ更ニ重大ナル意味ヲ有スルハ「別約」之ナリ而シテ所謂此別約ハ独リ兩國ノミナラズ第三國ニ向テ必要ナリ

別約第四條ニ於テ露西兩國ト其重細並ニ於ケル接壤諸國トノ商業ニ関スル規定即チ特權ヲ明記セリ

日本國ハ別約第三條ニ於テ旧條約ニ定メタル各種物品ニ関スル專売權ヲ保留シ其他第一、第二條ニ於テ日本國ガ韓國トノ間ニ於ケル特別關係規定及日本國ト「マラツカ」以東ニ於テ日本國ニ隣接セル東亞細亞諸國トノ通商貿易ニ関スル規定ヲ保留セリ

而シテ千九百十一年ニ改正セラルヘキ日本國ト各國トノ通商條約ニ於テハ先以テ日韓關稅同盟ヲ日本政府ヨリ提出スヘキ第一ノ準備ハ之ノ規定ヨリ生スルモノナルベシ以上日本國カ「マラツカ」海峽以東ノ亞細亞諸國トノ特權條約ヲ結ブヘキ「第二條」ノ規定ノ保留ハ全然最惠國條件

然レバ日露別約ハ今ヨリ第三國ガ研究ヲ怠ルヘカラザル重大問題タルハ智者ヲ俟テ始メテ知ルヘキニ非ルナリ

十月三日

日露漁業協約及附屬議定書及同協約締結談判會議録第四号ノ抜萃ヲ闡説スルニ左ノ注目ヲ要スヘキ事アリ

ポーツマス平和條約漁業協商ニ関スル第十一條ハ日本國民ニ向テ更ニ新利益ト多大ノ宝库トヲ与ヘタリ

漁業協商ハ日本漁業者ニ露國漁業者ニ与フル者ト全然同一ノ權利ヲ附与セリ而シテ第四條ニ於テ漁区ノ貸下ヲ受ケタル日露兩國國民ハ漁業ヲ為シ且捕獲物ヲ製造スルノ權利並ニ必要ナル動産及不動産ニ對シ賦課シ又ハ賦課セラルルコトアルヘキ一切ノ公課ニ関シテ均等ノ取扱ヲ受クベシ

更ニ同條約ハ黑龍江州又ハ沿海州ニ於テ捕獲シタル一切ノ魚類又ハ水産物ガ日本國ハ輸出セラル、トキハ何等ノ輸出稅ヲ課スルコトナキヲ定メ又凡ソ漁業上ヨリ生スル生産物ニ對シ露國ハ輸入稅ヲ免ス

本協約ニ於テ露國ハ其自國主權ノ一部サヘ日本ニ讓与シタリ即チ漁業ニ関スル法律命令ガ新ニ制定セラレタルトキハ其施行ヨリ少クトモ六ヶ月以前ニ日本國政府ニ通知スベキコト之レナリ

ノ基礎ヲ破壊シタルモノナリ之ト同一ナル條約ハ日本ガ前半既ニ亞爾然丁國及智利國ト締結シ以テ特種ノ權利ヲ確保シタリキ

此特種規定ナルモノハ別約ノ主義ヨリ論スルニ將來日露兩國ガ清國ヨリ商業上特權ヲ取得セン事ヲ努メ而シテ兩國ガ得タル特權ハ他ノ歐洲列國及ヒ北米合衆國ニ許サル、コトヲ意味スルナリ文章上又ハ規定ノ表面ハ門戸開放ノ主義ヲ定メ事實上ニ於テハ全ク之ニ反シタル結果ヲ生ズ

故ニ日本國ガ亞爾然丁國智利國及露國ト締結シタルカ如キ條約ハ來ルヘキ改正通商條約ニ於テ其目的通り列國ト改正シ得タルノ際ニ於テハ所謂「最惠國主義」ハ何等ノ價值ヲ有セサルモノトナルヘシ此場合ニ備フル為メニ日本國ト露國政府ト外交文書ノ交換ヲ為セリ之等ノ用意ハ看過スヘカラサル重大事ニ屬ス

次期ノ日本對列國トノ條約改正ニ際シ歐洲列國及ヒ北米合衆國ガ日本ニ對スル交渉ノ姿勢ハ先ツ英國ノ執ル所ノ態度ニ依リテ定マルヘシ而シテ東亞ノ貿易ニ精通スルノ士ハ之ノ場合ニ英國ハ必ズ日本ニ向テ清國ニ於ケル特種ノ優先權ヲ認メ若干ノ物品又ハ清國各省ノ若干ニ向テハ日本ノ提言ニ贊同スル事ヲ疑ハズ

第三者タル他ノ諸國ニ向テ興味アル問題ハ協約第十三條ナリ

「本協約ハ十二ヶ年間効力ヲ有スルナリ毎十二ヶ年ノ終リニ於テ兩國締約國相互ノ合商ニ依リ之ヲ更新又ハ改正スヘキモノトス」

該條文ヨリ觀レバ本協約ハ今後十二ヶ年間ヲ經過スル間有効ナリヤ(他ニ之ニ對スル更改的ノ條約ヲ結バレストセバ)又ハ此間ニ於テ通告期間ヲ定ムベキヤポーツマス平和條約第十一條ハ只露國ガ日本國國民ニ漁業權ヲ与フルコトヲ定メタルノミ単ニ一般ノ特種ノ利益ヲ約定シタルニ止マル而シテ日露兩國カ其主張ノ一致セサル場合ニ於テ何等記スル所ナシ

茲ニ到テ漁業協約第八條ノ規定ハ益其意味ノ明瞭ヲ缺キ現下適用セラルル日本人ノ有スル漁業ノ特權ハ幾何ノ時間ニ適用スベキヤヲ知ルニ苦シム

明治四十年十月十一日

一七八 明治四年十二月三十五日 本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛(電報)

露国側漁業協約談判關係文書發表期日ノ件

十一月 廿五日 後六、三九 露都發
廿六日 前八、一〇 本省着

林外務大臣 本野全權公使

第三四二号

露国政府ニ於テハ漁業談判關係書類ヲ本月二十八日若クハ二十九日發表スル由ナリ

一七九 明治四年十二月三十一日 林外務大臣ヨリ
本野駐露公使宛(電報)

同上日本政府ノ發表期日通知ノ件

十一月二十八日午後〇時二十分發

在露 本野公使宛 林 大臣

第二四五号

貴電第三四二号ニ関シ

帝國政府ハ本月廿九日正午官報号外ヲ以テ發表ノ事ニ決定セリ

會セシカ同條約ニ対スル氏ノ意見ハ大約下ノ如シ

「ラツベ」氏ハ此條約ヲ以テ露国ノ外交ニ對シ重大ナル打撃ヲ与ヘ殊ニ漁業協約ノ如キハ樺太島ノ半部ヲ失ヒシヨリモ露国ニ取リテハ大ナル不幸ト謂フヘキモノナリトナセリ勿論樺太南部ヲ亡失シタリシハ其魚族ノ富源ノ一部ヲ失ヒタルモノナルモ露国ニハ猶ホ該島ノ半部及東察加沿岸ノ在ルアルヲ以テ深ク憂トスルニ足ラサルナリ

今ヤ露国ハ更ニ日本人ニ与フルニ西伯利全沿岸ニ於ケル漁業ノ權利ヲ附与シ(十三ノ灣ヲ除キ)其代償トシテ露国沿岸及黒龍江ニ於テ漁獲シタル魚類及魚類ノ製造物ニ對スル輸入税ヲ附加セサルヘキ義務ヲ日本ニ負ハシメタリ然レトモ此ノ生産物タルヤ日本ニ取リテハ最モ必要ナルモノニシテ而カモ漁獲スルモノハニ日本臣民ニアラスヤ漁業協約ハ主義トシテ日露兩國臣民ノ漁業上ニ於ケル權利ノ均等ヲ認メタリ然レトモ此ノ均等タルヤ日露兩國臣民タル労働者ノ現状ニ照シ日本人カ独リ優勝ノ利益ヲ占ムヘキコトトナレリ

露国ニ於テハ何人モ西伯利沿岸ヲ占有セス何人モ漁業上ノ計画ヲ為シタル者アラス是レニ反シ日本ニ於テハ数千ノ漁夫ハ直チニ之ヲ聚集シ得ヘク且ツ日本労働者カ露国労働者

一八〇 明治四年十二月三十一日 在浦塩野村領事ヨリ
林外務大臣宛

日露漁業協約批評ノ件

附屬書 「ポール・ラツベ」ノ日露漁業

協約批評

公第九三号 十二月三日接受

最近刊行当地新聞ニ掲載シタル「ラツベ」(仏国人ナラシ)ノ日露漁業協約ニ関スル批評御参考ノ為メ別紙訳出供貴覽候敬具

明治四十年十一月二十八日

在浦潮

領事 野村基 信印

外務大臣伯爵 林 董 殿

(附屬書)

「ポール・ラツベ」ノ日露漁業協約ニ関スル批評

別紙

日露漁業協約ノ批評

有名ナル旅行者ニシテ東洋通ノ名ヲ得タル「ポリー・ラツベ」氏ハ目下巴里ニ滞在中ナルカ故ニ氏ノ最近ニ締結セラレタル日露通商條約ニ関スル意見ヲ知ラント欲シテ氏ニ面

ニ比シテ勤勉敏捷ナルハ謂フヲ俟タス故ニ此ノ沿岸ニ於テ露国人カ最モ少数ヲ占メ之レニ反シ日本人カ此ノ沿岸ニ於ケル主人公タルヘキハ明カナリ
兩國カ調印シタル議定書ハ此ノ地方ニ露国移住者ノ來ルヘキヲ豫見シ彼等ノ為メニ漁業上ノ特典ヲ附与スヘキ權利ヲ露国ノ為メニ保留セリ然レトモ移住民ノ到着前最モ有利ナル漁場カ日本人ノ獲得スル所トナラハ如何且ツ果シテ多數ノ露国移住民カ「アホツク」海沿岸ニ來ルヲ期待シ得ヘキヤ否ヤ疑ナキ能ハス
如斯協定ハ「ポーツマス」談判ニ於テ日本カ露国ニ迫リ其咽喉ニ小刀ヲ擬スルノ際ニ方リテハ或ハ締結シ得ラルラン然レトモ平和ノ時ニ於テ如何ニシテ露国カ此ノ協定ニ同意センヤ漁業協約ハ露国ヲシテ其天然ノ富源ヲ自由ニ開放スルヲ得サランメ其国境ヲ外国密獵者ニ向テ開放セシノミナラス日本ニ向テ戰鬪上ノ危険ナル手段ヲ許シタルモノナリ

今ヤ日本ハ西伯利到ル所其權力ヲ擴張シ其圧力ヲ示シ而シテ争鬪ヲ誘起シ得ヘシ予ハ日露戦争前最後ニ極東地方ヲ巡遊シタルトキノ形勢ヲ以テ今日ニ比較スレハ如何ナル變化ヲ生セシヤハ驚嘆ニ堪ヘサル所ナリ露国ハ旅順口、大連灣

及樺太南部ヲ失ヒ而シテ韓国ハ日本ノ勢圈内ニ帰セリ
日本ハ尙ホ之レヲ以テ足レリトセス平和ノトキニ於テモ猶
ホ其侵略ヲ繼續セリ日本ノ侵襲的ナル今後數年ヲ出テスシ
テ露國ノ根拠地タル浦潮斯德ヲ亡失スヘキ月ナキヲ期セム
ヤ

(ビルジエワヤ、ウエドモスチ新聞ヨリ転載)

エ・ヂミトリエフ

一八一 明治四十年三月四日

在浦塩野村領事ヨリ
林外務大臣宛

対日本交渉問題ニ関スル「ノーウオーエ・ウ
レーミヤ」社説訳出報告ノ件

公第一〇五号

十二月十日接受

十一月十四日「ノーウオーエ・ウレーミヤ」カ其社説欄ニ於
テ論シテ曰ク露國政府ハ俘虜收容費ノ件ニ関スル日本政府
ノ提議ヲ容レ十一月二十三日「ベンケンドルク」大使ヲ經
テ倫敦ニ於テ要求額ノ全額ヲ小村大使ニ交附スルコトセ
リ日露兩國交渉事件ノ未ク全ク解決ヲ告ケサルニ先チ露國
政府カ俘虜收容費ノ精算ヲ快諾セルカ如キハ至當ノ措置ト

權公使ハ意志薄弱ニシテ祖國ノ利害ヲ顧慮スルノ念ナシ斯
クシテ日本ノ漁業者ハ漁業協約締結前既ニ露國ノ沿岸ニ於
テ漁業ニ從事スルノ權利ヲ認メラレ我臣民当然ノ權利ハ今
尙ホ兩國政府ノ調査中ニ屬ス
「ポーツマス」條約ハ既ニ該問題ノ解決ヲ与ヘ之ニ関シ何
等疑ノ余地ナキノミナラス望月代議士ノ質問ニ對シ林外務
大臣カ議會ニ於テ為セル答弁ニ拠ルモ同國政府カ南部樺太
島ニ於ケル露國臣民ノ權利ヲ確認シ居レルハ疑フ可カラサ
ル事實ナリ

要スルニ該問題ハ既ニ法理上ノ解決ヲ了ヘ今ヤ実行ニ着手
スヘキノ秋ナリ我國カ所謂相互ノ交讓主義ヲ旨トシ兩國交
渉案件ヲ解決シ来レル今日僅ニ南部樺太問題ノ未ク其ノ決
着ヲ見サルハ如何ニモ遺憾ノ次第ナラスヤ露國外交当局者
タルモノ遷延徒ニ日ヲ移スノ愚ヲ避ケ祖國ノ為メ速カニ該
問題ヲ解決スルヲ要ス

明治四十年十二月四日

在浦潮

領事 野村基信印

外務大臣伯爵 林 董殿

云フヲ得サルモ是ニ依リテ兩國間交渉事件ハ一先ツ段落ヲ
告ケタリ

「ポーツマス」條約ノ精神ニ基キ曩キニ兩國政府ハ通商航
海條約並ニ漁業協約ヲ締結シ進テ俘虜收容費ノ精算ヲ決行
シタルカ今尙ホ兩國間ニ存スル所ノ問題ハ南部樺太島ニ於
テ露國臣民カ被リタル損害ノ精算ナリ

新ニ締結サレタル漁業條約ニ依レハ日本ハ甚タ有利ノ地位
ヲ占メ露國ハ甚タ不利ノ地位ニ置カレタリ是レ露國政府カ
日本ノ微々タル讓歩ニ對シ多大ノ讓歩ヲ敢テセルニ基クモ
ノナリ同條約ニ依レハ日本人ハ延長千露里ニ亘ル露國ノ境
土ニ於テ露國臣民ト同様ノ漁撈權ヲ享有シ露國臣民ハ僅カ
ニ南部樺太沿岸ニ於テ漁業權ヲ獲得シタルニ過キス然カモ
同權侵害ニ對スル賠償ハ今尙ホ等閑ニ附セラレ居レリ

露國政府ハ何ヲ苦ンテ漁業協約ノ締結ニ先チ仮條約ナルモ
ノヲ結ヒ我カ沿岸ニ於テ日本人ヲシテ漁業ニ從事スルコト
ヲ承認シタルヤ我外交当局者ハ何カ故ニ斯クモ交讓ニ重ヌ
ルニ交讓ヲ以テシ祖國ノ重要問題ヲ等閑視セルヤ
日本政府ハ「ポーツマス」條約ノ誓約ニ反シ露國臣民ニ南
部樺太島ノ漁業ヲ許与セサルノミナラス漁場並ニ建築物一
切ヲ沒收シ之ヲ自國ノ臣民ニ貸与セルノ事實アルモ露國全

一八二 明治四十二年二月二十六日

本野駐露公使ヨリ
林外務大臣宛

公表文書ノ誤謬ニ関スル件

附屬書 日露漁業協約公表文書中誤謬ノ件々

附記一 日露通商航海條約締結會議錄並訂正

二 日露漁業協約締結會議錄(訂正済)

機密第五号

二月廿一日接受

帝國政府ノ發表ニ係ル日露通商條約漁業協約滿洲ニ於
ケル日露鐵道接続業務仮協約及日露協商ニ関スル外交
文書露國政府ヨリ請求ノ件

通商漁業鐵道及政治上ニ関スル日露間ノ諸條約締結談判ニ
關係スル往復書類發表方ニ就テハ從來電信及郵便ヲ以テ屢
往復ヲ重ネ且此等書類ニシテ露國政府ノ發布ニ係ルモノハ
其都度及進達置候処今回露國外務省ヨリ此等書類ニシテ日
本政府ノ発希ニ係ルモノノ日本文及仏文各一部宛送付アリタ
キ旨請求致シ来リ候然ル処帝國政府ニ於テ発表相成リタル
此等諸書類ノ訳文ニシテ通商談判ニ関スルモノハ先便閣下
宛私信ヲ以テ申進タル如ク又漁業談判ニ関スルモノハ本
機密信附屬書ノ如ク尠ナカラサル誤謬及不穩當ノ廉有之候
(鐵道問題關係書類ハ目下査閲中ニ有之候)ニ就テハ此誤

露ノ儘先方へ送附致候事ハ甚好マシカラス且帝國政府ニ於テ將來ノ為記録ニ保存セラルルモノハ斯ノ如ク夥シキ誤謬ノ儘ニ附シ置カルヘキモノニ無之ト存候ニ就テハ此等誤謬ヲ訂正シタルモノ御再製方御取計ノ上至急數部當館へ御郵送相成候様致度尙ホ鉄道問題ニ関スル往復書類ニ関シテハ其内再ヒ上申可致又政治上ノ協約ニ関スル文書ハ御発表相成リタル義ニ有之候ハハ是亦數部御送附相成候様致度此段及稟申候敬具

明治四十一年一月廿八日

在露

特命全權公使男爵 本野 一郎 (印)

外務大臣伯爵 林 董 殿

(附屬書)

日露漁業協約公表文書中誤謬ノ件々

明治四十年十一月廿九日官報号外ヲ以テ發表セラレタル日露漁業協約締結會議録往復文及關係文書ノ翻譯文中誤謬又ハ不穩當ノ甚シト認メラルモノ左ノ如シ

- 一、露國専門委員姓名中「ブライニコフ」トアルハ「ブラジュニコフ」ノ誤
- 二、第二頁下段末尾ヨリ六行目「公正ニシテ調和的ノ精神

同様ノ誤アリ)

十一、同頁同段十一行目「該地方」ノ下ニ「一部ニ關スル」ヲ加フヘシ

十二、同頁同段廿五行目「(即入江及河川ヲ删除スルトキハ土民ノ利益ニ歸スヘシ)」トアルハ「(即土民ノ利益ノ為メニ入江及河川ヲ删除スルコト)」ノ誤

十三、第六頁上段十三行目「同一ノ觀念ニ相当スト謂ヒ」トアルハ「同一ノ觀念ニ一致スルモノナラサルヘカラスト謂ヒ」ノ誤

十四、第七頁第二行目ノ次ニ左ノ一項ヲ脱漏セリ「日本帝國政府ハ上記ノ產物ニ對シ何等ノ税ヲ課セサルヘキコトヲ約ス」

十五、同頁下段第三行目「知悉シタルニ依リ」以下ノ文章ハ誤訳ナリ之ハ「知悉シテ茲ニ該案中説明ヲ必要トスル種々ノ点ニ関シテ注意ヲ喚起セサルヘカラスト思考セリ」ト改ムヘシ

十六、同頁同段五行目ノ冒頭「就中一ハ不必要ナリ而シテ本行ノ末尾ヨリ第七行目ニ至ル訳文ハ不穩當ナリ之ハ改メテ左ノ如クスヘシ

「及採取スルノ權利」トアリ 即漁業條約ノ基礎タルヘカ

ヲ有スルニ依リ」トアルハ露國外務大臣ノミカ此精神ヲ有スルカ如ク解セラルル訳文ナリ原文ニハ現ニ「双方ニ於テ」ト明記シアリ

此処ハ「外務大臣ハ本談判カ双方ニ於テ公正且調和的ノ精神ヲ以テ行ハレ」云々ト訳スヘキモノナリ

三、第三頁上段第一行目ノ「本國公使」ハ「本野公使」ノ誤

四、第四頁下段五行目ノ「本野氏ハ露國ノ主張ニ對シ」以下七行目ノ「抗議シ」迄ハ不穩當ノ翻譯ナリ之レハ「本野氏ハ日本國カ此ノ文字ノ意義ヲ擴張セリト云ヘル露國

ノ主張ニ對シ抗議シ日本國ハ國際上並外交上ノ用語ニ於テ普通使用スル意義ニ從ヒ此文字ヲ解セリ」ト改ムヘシ

五、同頁同段廿行目「ノ闕読ヲ必要トスル所以ナリトス」ハ「ヲ闕読セハ明ナル所ナリトス」ト改ムヘシ

六、同頁同段廿六行目ノ「水深淺キ」ハ「興行淺キ」ノ誤

七、第五頁上段十二行目「該禁止ハ」ノ下ニ「條約ニ依リ」ヲ加フヘシ

八、同頁同段二十一行目「魚類」ノ下ニ「(鮭)」ヲ脱ス

九、同頁同段二十五行目「準抛セサルヲ得ス」ハ「準抛シタルナリ」ノ誤

十、同頁下段一行目「哩」ハ「海里」ノ誤(以下二三ヶ所

ラサル譯和條約第十一條中ニ使用セル漁業權ナル文字ハ過度ニ広義ニ解セラレ

十七、第八頁上段第一行及二行ノ訳文不穩當ナリ之ハ改メテ「其ノ確定ノ際或權利(デ、ドロア)ナル文字ニ換ヘラレタリ即其ノ權利ハ追テ決定スヘキモノナリ」トナスヘシ

十八、同段第十行ヨリ第十一行ニ渉ル文句ヲ改メテ「露西亞國談判委員ハ日本臣民カ露西亞國領水ノ總テノ方面ニ於テ漁業ヲ営ム權利ヲ認メタル第一條ハ」ト為スヲ可トス

十九、同段第十四行目「其ノ實價ヲ報償スルヲ得ス」ハ甚シキ誤訳ナリ改メテ「其ノ實際上價值アルコトヲ認ムルコトヲ得ス」トナスヘシ

二十、同段二十行目ノ「産業」ナル語ハ「斯業」ノ誤

二十一、同段末尾ヨリ九行目ノ「日露兩國官民」トアルハ「日露兩國臣民」ノ誤

二十二、同頁下段最初ノ三行ノ訳文亦不穩當ナリ改メテ

「帝國政府カ日本國臣民ト土地ノ住民及移住民ト均等ニ待遇スルコトヲ得サルハ全然明白ナリ此等住民及移住民

ハ格段ナル保護並特權且無償ヲ以テ漁業ヲ営ムノ權利ヲ

モ從來享有シ且將來モ享有スヘキモノナリ」トナスヲ要ス

二十三、同段第六行「斯ク」以下ハ誤訳ナリ改メテ「即チ將ニ発布セラルヘキ漁業法中ニハ鮭族ノ魚類ヨリ肥料ヲ製造スルコトヲ禁セムトノ案アリ」云々ト為スヘシ

二十四、同段二十行目「露国全権委員ニ於テ撤回セラレ」トアルハ改メテ「指摘シ露国全権委員ニ於テ」トナシ且二十一行目末尾「再度闕読セラレムコトヲ望ム」ハ改メテ「再度考究セラレンコトヲ求ムルノ権利アリト信ス」ト為スヘシ

二十五、第十頁下段第八行目「吾人ヲ刺激スル」ハ奇異ナル訳字ナリ「吾人ノ抱懐スル」ト改ムル方可ナラン

二十六、同段第廿一行目「右写ノ交付ヲ受ケタル後」ハ誤ナリ尙其後文モ不穩当ナルニツキ之ヲ改メテ「本野氏ハ右ノ趣ヲ断リ置キ扱「インレット」ナル文字ハ「アンス」ナル文字ト均シク不正確ナル文字タルヲ免レスト思考セラレ依テ漁業ヲ許可スル地方ト之ヲ許可セサル地方トヲ決定スル為メニハ此文字ヲ以テ満足スルヲ得サルコトハ今ヨリ宣言シ置カサルヘカラス依テ日本国全権委員ハ」云々ト為ス方穩当ナリ

尾「コトヲ希望セリ」ハ「コトノ希望ヲ以テ行動セリ」トノ意義ニ改ムヘキモノナリ

三十二、同段末尾ヨリ第六行目以下ノ三行誤訳ナリ左ノ如ク改ムヘシ

「帝國政府ハ其ノ讓歩シ得ル最大限ヲ腹藏ナク開示シ其對案タルヤ深キ研究ヲ経タルモノニテ交渉ノ進行中起リ来ルヘキ本問題考究ノ結果根帯ノ問題ニ変更ヲ加フルカ如キ意思ハ之レナキモノナルコトヲ注意セサルヘカラスト認ム」

三十三、第十二頁上段四行目五行目ニモ誤謬アリ改メテ左ノ如クスヘシ

「一、露西亜ハ海洋ニ瀕スル沿岸ニ於テ漁業ノ或ル権利ヲ日本国ニ讓与スルコトヲ約シタリ即之ニヨリ入江及河川ハ問題外ニ置キタルナリ」

三十四、同段第二十四行目乃至二十六行目ノ覚書ノ抜萃訳文ハ誤解ヲ来スノ恐アル訳シ方ナリ此文ノ意義ハ

「リマンノ漁区ハ講和條約ノ豫見セル協約ノ目的タルヘキ漁区中ニ包含セラレサルヘカラス該漁区ハ海洋ニ瀕スル沿岸ニ存在スルモノニシテ前記條約ノ除外セル入江及河川中ニ在ラサルヲ以テナリ」

二十七、第十一頁上段十六行目以下十八行目迄ノ翻訳正確ナラス之ハ左ノ意義ナリ

「割讓以來其他ノ露領沿海地方ニ於ケル漁業權ノ問題ハ日本国ニ取リテハ全ク専門的利益ノミニ屬シ自国臣民ニ留保セラレタル特種ノ權利ノ限界ハ何程ナルカヲ精確ニ定ムルノ必要アルニ止マル然ルニ露国ニ取リテハ」云々二十八、同段廿二行目「叙上ノ根帯の目的ヲ達スルカ為」ハ不穩当ナリ改メテ「叙上ノ根帯の目的ヲ達セントスルト同時ニ」ト為スヘシ

二十九、同段末尾ヨリ十行目「露西亜全権委員ノ加ヘタル」以下ハ左ノ如ク改ムヘシ

「露西亜国全権委員ノ加ヘ置キタル制限中如何ナルモノクリトモ今更之ヲ拋棄スルコトヲ得サルナリ」

三十、同段末尾ヨリ八行目ヨリ七行目ニ至ル翻訳ハ全然誤訳ナリ原文ト全ク反対ノ意義ニ訳セラル原文ハ「ポーツマス條約第十一條ノ文言ノ正式ナル解釈ヨリモ寧ろ漁業ノ實際的必要ニ從ヒテ」ノ意義ナリ

三十一、第十一頁下段十四行目ヨリ十六行目迄及二十二行目中「然レトモ」以下二十七行目迄ハ讓与列挙ノ文句ニアラサルヲ以テ各一字宛上テ印刷スヘキモノナリ且末

三十五、同段第二十七行目以下モ稍ヤ原文ト相当セサル訳シ方ナリ改メテ左ノ如ク為スヘシ

「加之日本ノ意見書ハ「ポーツマス」條約第十一條ニ就テ下シ得ヘキ唯一ノ解釈即入江及河川ヲ删除スルコトノ解釈ヲ變更スルニ足ルヘキ法律學上ノ根拠ヲ有セス」

三十六、第十二頁第十八行目ノ次第十九行目ノ前ニ全一項脱漏セリ即左ノ文ヲ挿入スヘシ

「入江及河川ノ删除ハポーツマス條約ニヨリ吾人ノ利益ノ為ニ一ノ權利ヲ設定シタルモノニシテ国家ノ利益ヨリ觀テ入江及河川ハ沿海地方ノ露国殖民事業及国民ノ航海及漁業發達ノ為支柱ノ用ヲ為スモノナレハ益々以テ吾人ハ此權利ヲ拋棄スルコトヲ得ス從テ入江及河川ヲ露国ノ移住民以外ノ者ニ許スルカ如キハ吾人ノ犠牲ニ供スルコト能ハサル巨大ノ經濟的利益ニ反スルモノナリ

三十七、同段二十三行目「水深淺キ」トアルハ「奥行淺キ」ノ誤

三十八、第十三頁第二行目「前記事業ニ必要ナル」云々ノ文句ハ第一行目ノ終「モノトス」ノ次ニ直ニ続ケテ印刷スル方可ナリシ尙ホ此文句ハ次ノ如ク改ムヘシ即

「当該沿岸地方ノ英文及露文ノ航海地圖ハ前記事業ノ材

料タルコトヲ得ヘシ」云々

三十九、同頁下段九行目「前記ノ如ク」以下「欲ス」迄ハ左ノ如ク改ムヘシ「前記ノ如キ解釈ヲ維持スルヲ以テ論理ニ合ヒタルモノト信ス」

四十、同段十九行目「決議」ハ誤訳ナリ「停止」又ハ「停滞」ノ意義ニ訳スヘキモノナリ

四十一、第十四頁下段四行目以下亦不穩当ナリ改メテ「露国移住民事業ノ利益ハ日本国全権委員カ十月十三日（九月三十日）ノ会議ニ於テ提議シタル書キ方ニ依リ完全ニ保護セララル」云々ト為スヘシ

四十二、同段末尾ヨリ三行目「該声明ニ同意シ」ハ「該声明ヲ領シ」ト改ムヘク「一定」ハ「或ハ」ト改ムヘシ

四十三、第二十頁上段第二十四行目ハ左ノ如ク改ムル方可ナリ

「農民又ハ土民ノ利益ノ為何等ノ留保ヲ為ササルヘキコトヲ約ス」

四十四、同段第二十六行目「神聖ナル」ハ誤解ナリ之ハ

「穩健ナル」又ハ「妥当ナル」ノ意義ナリ

四十五、第二十二頁下段末尾ヨリ五行目「露国政府ノ怠慢ナラサル如ク日本政府ハ」ト為スヘシ

シク原文ト符合セサルモノアリ原文ノ意義ハ「千九百七年三月八日ノ口上書ニ対スル回答トシテ露西亜国全権委員ハ談判ノ現状ハ、漁区ノ問題ニ関シテ日本国政府ト間モナク一致スルコトヲ得ルノ望アルコトヲ示シ居レルヲ以テ帝国政府ハ漁業協約ノ締結迄ハ前記問題ヲ直チニ解決スルコトヲ見合ハサンコトヲ選フ旨本野閣下ニ通牒スルノ光榮ヲ有ス

五十二、同頁下段第十四行目「日本国外務大臣」ハ「日本国公使」ノ誤

五十三、同段末尾ヨリ九行目「記入」ハ「書キ方」ト改ムル方可ナリ

五十四、第二十五頁上段第四行目「漁業者」ヲ「企業家」ト改ムヘク五行目「蓋シ」以下ハ左ノ如ク改ムヘシ「蓋シ漁区ヲ借受クルコト無クシテ魚類製造業ニ従事スル所ノ日本臣民有ルヘキヲ以テナリ」

五十五、同段末尾ヨリ十行目及末行ノ「引證」ナル訳字ハ不妥当ナリ之ハ「包含」又ハ「掲載」ノ意義ニ訳スヘキモノナリ

五十六、同段末尾ヨリ六行目ヨリ五行目ニ亙リ「説示セムト欲シタリ」ハ「説示シタリ」ト改ムヘシ

五十七、同段末行「ニ同意シ」ハ「ヲ領シ」ト改ムヘシ

四十六、第二十三頁上段第十一行目「自己ノ主張ヲ重テ吹道セントスルニ対シテハ深く主張スルヲ得ス」トハ不分明ナルノミナラス原文ト趣ヲ異ニスル訳文ナリ之レハ「自己ノ決定ヲ再考セラレンコトヲ飽ク迄主張セサルヲ得ス」ノ意義ナリ

四十七、同頁下段第五行目亦誤謬ナリ「日本臣民ノ為ニ漁業ノ許可セララルヘキ地方ハ河川及入江除外ノ結果著シク減縮セラレタルヲ以テ」云々ト為スヘシ

四十八、同段第十行目乃至第十三行目ノ訳文原文ト符合セス左ノ如ク改ムヘシ

「日本帝国政府ハ露西亜帝国政府ニ於テ一箇年ヲ期間トシテ日本海「オコーツク」海及「ベリーング」海ニ於ケル漁区ヲ競売ニ附セントスルノ企画アルコトヲ知り且漁業協約談判委員ノ既ニ到達シタル效果ニ鑑ミ本協約ノ近日締結セララルニ先チテ」云々

四十九、同段末尾ヨリ六行目「覚書中ニ記載セラレタル日本国政府」ノ下ニ「或ル」ヲ加フヘシ

五十、第二十四頁上段十行目「而シテ却テ」ハ「然レトモ」ノ誤リ

五十一、同段第二十行目乃至二十四行目ノ口上書訳文ハ少

五十八、同頁下段第二行目「外務大臣」ハ公使ノ誤
五十九、同段第十五行「協定ヲ承認セムトスルニ付テハ日本政府ノ抗拒ニ依リ生シタル」ハ「協定ヲ承認スルコトヲ日本政府ニ於テ抗拒シタルニ依リ生シタル」ト改ムヘシ

六十、同段第十八行「根元地トシテ使用セラルルモノナルカ故ニ」ハ「根元地タルカ故ニ」ト改ムヘシ

六十一、同段末尾ヨリ第三行「日本国外務大臣」ハ「日本国公使」ノ誤

六十二、同段末行「一切ノ協定ニ反シ」ハ「一切ノ期待ニ反シ」ノ誤

六十三、第二十六頁上段第一行「基本草案」ハ「大綱」又ハ「根幹ノ問題」ト改ムヘシ

六十四、第二十七頁上段五行「貸下期間以外ニ亙リ」ハ「貸下期間以外ニ」又ハ「貸下期限ノ外ニ」ト改ムルヲ可トス

六十五、同段第二十四行「ヲ成立セシメタリ」ハ「ノ成立ヲ得セシメタリ」ト云フ方可ナラン

註 右本野公使ノ指定ニヨリ明治四十一年四月十五日官報ニ訂正記事掲載ス後掲載附記ニハ其ノ訂正済ノモノナリ

(附記一)

日露通商航海條約締結會議録

目次

- 一、日露通商航海條約締結會議録第一号(第一回會議)
 - 附屬書第一号日露通商航海條約案(日本政府提出案)、議定書案並外交文書案四通
 - 同 第二号同上條約案、議定書案並外交文書案說明書
 - 二、日露通商航海條約締結會議録第二号(第二回會議)
 - 附屬書露西亞國政府修正摘要書
 - 三、日露通商航海條約締結會議録第三号(第三回會議)
 - 附屬書露西亞政府修正摘要書(承前)
 - 四、日露通商航海條約締結會議録第四号(第四回會議)
 - 附屬書露西亞國政府修正案摘要書ニ対スル回答書
 - 五、日露通商航海條約締結會議録第五号(第五回會議)
 - 六、日露通商航海條約締結會議録第六号(第六回會議)
 - 七、日露通商航海條約締結會議録第七号(第七回會議)
- 日露通商航海條約締結會議録
- 日露通商航海條約締結會議録第一号
- 第一回會議

缺席者 商工務省委員商工局參事

官「ランゴヴォエ」氏、

商工務省委員通商局長

「アレクセーエフ」氏

「イズヴォルスキー」閣下へ開議ヲ宣言シ兩國交譲ノ精神ヲ證明シ日露通商航海條約締結ニ関スル會議ノ事業カ兩國ノ利益ニ便スヘキ結果ニ達スヘキ希望ヲ述ヘタリ

本野氏ハ露西亞國外務大臣ノ陳述セル意見ヲ贊成シ議事ノ進行ヲ容易ナラシムカ為露西亞國全權委員ニ對シテ追テ本件ニ関スル詳細ナル說明書(附屬書第二号)ヲ交付スルコトト為シ以テ日本國政府作成通商航海條約案(附屬書第一号)ヲ交付セリ

「イズヴォルスキー」氏ハ此ノ通知ニ付日本國公使ニ謝辭ヲ述ヘ以テ該案ヲ慎重ナル調査ニ附スヘキコトヲ約シ同時ニ氏ハ日本國全權委員ニ對シテ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ノ全權委任狀ハ、未タ準備セラレズト雖次回ノ會議ニ於テ該書類ノ交換ヲ行フコトヲ得ヘク準備スヘキ旨ヲ通知セリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ會議事業順序ノ問題ヲ提起シ日本國政府作成條約案カ露西亞國政府ニ依リテ調

千九百零六年 八月四日 午後二時三十分外務大臣兼露西亞國皇帝陛下ノ侍從「イズヴォルスキー」閣下議長ノ下ニ露西亞國外務省ニ於テ開會

列席者

日本國 全權委員聖彼得堡駐劄日本國特命全權公使本野閣下、書記官聖彼得堡日本公使館一等書記官落合氏、書記官同公使館二等書記官丸毛氏

露西亞國 全權委員「メートル、ド、ラ、クル、アムペリヤール」元老院議員「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏、商工務省委員商務局次長「プリレジャイエフ」氏、書記官商工務省外國貿易課長、帝室チャンチオンム、「ウエルクホウスキー」氏、書記官同省外國貿易課部長「プロトポポフ」氏、書記官同省外國貿易課部長「リッサンコ」氏、書記官外務省第一局事務取扱「グラヴェ」氏、

查セラレ露西亞國ノ希望カ決定セラルルヤ直ニ次回ノ會議ヲ開クヘキ旨ヲ提議セリ然ルトキハ條約案ノ逐條討論ヲ為シ以テ談判ヲ進行セシムルコトナルヘク其ノ議事録ハ簡明ナル文体ヲ以テ編成シ討議ノ最重要ナル点ノ證明ニ限ルヘク兩國全權委員ノ認可ヲ經且本書ニ通テ作成シ共ニ其ノ記名ヲ為スコトヲ要ス

露西亞國全權委員ノ請求ニ基キ「プリレジャイエフ」氏ハ露西亞國境地利洪牙利國間通商條約締結會議ニ於テ諸會議ニ對シ單一ノ議事録ヲ作りタルコト且此ノ方法ハ日露通商條約ノ會議ニ於テモ亦之ヲ採用スヘキ意思ヲ陳述シタリ

本野氏ハ會議録カ簡明ニ編成セラルヘキコトニ付異議ヲ有セサルモ疑ノ存スル場合ニ於テハ會議録ニ拠ルコトアルヘキ事ヲ考察シ其ノ編成ニ付最大正確ヲ加フヘキ事ヲ主張シ同時ニ「プリレジャイエフ」氏カ提唱セル會議録編成方法ニ関スル問題ノ解決ハ全ク議事ノ進行ニ関スルモノナルカ故ニ後日ニ之ヲ留保スルコトヲ得ヘキ意見ヲ陳述シタリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ日本國全權委員ノ所見ニ贊成シ此ノ問題ヲ中止シタリ

生ニ関スル特別ノ法律、勅令及規則ニシテ外國人一般ニ適用スヘキモノニハ何等ノ影響ヲ及ボササルモノトス

第三條

兩締約國ノ一方ノ臣民カ他ノ一方ノ版図内ニ於テ住居、商業若ハ工業ノ為ニ供スル家宅、倉庫、店舗及之ニ屬スル構造物ハ侵スヘカラス
右家宅及建造物ヘハ猥ニ侵入搜索スヘカラス又帳簿、書類或ハ簿記帳ヲ検査点閱スヘカラス但内國臣民ニ對シ法律、勅令及規則ヲ以テ制定セル條件及定式ニ抛ルトキハ此ノ限ニ在ラス

第四條

全露西亜國皇帝陛下ノ版図内ノ生産或ハ製造ニ係ル物品ヲ何レノ地ヨリ日本國皇帝陛下ノ版図内ヘ輸入シ又日本國皇帝陛下ノ版図内ノ生産或ハ製造ニ係ル物品ヲ何レノ地ヨリ全露西亜國皇帝陛下ノ版図内ニ輸入スルニモ總テ別個ノ生産或ハ製造ニ係ル同種ノ物品ニ課スル所ノ税ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ税ヲ課セラルコトナカルヘシ

兩締約國ノ一方ノ版図内ヘ別國ノ生産或ハ製造ニ係ル物品ノ輸入ヲ禁止スルニ非サレハ他ノ一方ノ版図内ノ生産或ハ製造ニ係ル同種ノ物品ヲ何レノ地ヨリ輸入セラルルモノ之ヲ

第七條

日本國皇帝陛下ノ版図内ノ諸港ヘ日本國ノ船舶ヲ以テ適法ニ輸入シ若ハ輸入セラルヘキ物品ハ又露西亜國ノ船舶ヲ以テ同様ニ之ヲ右諸港ニ輸入スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ日本國船舶カ右様ノ物品ヲ輸入スルトキ課スヘキ税金或ハ雜費ノ外何等ノ名義ヲ以テスルモ更ニ別種或ハ多額ノ税金、雜費等ヲ課セサルヘシ又全露西亜國皇帝陛下ノ版図内ノ諸港ヘ露西亜國ノ船舶ヲ以テ適法ニ輸入シ若ハ輸入セラ

ルヘキ物品ハ又日本國ノ船舶ヲ以テ同様ニ之ヲ右諸港ヘ輸入スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ露西亜國船舶カ右様ノ物品ヲ輸入スルトキ課スヘキ税金或ハ雜費ノ外何等ノ名義ヲ以テスルモ更ニ別種或ハ多額ノ税金、雜費等ヲ課セサルヘシ右相互對等ノ取扱ハ右物品ノ直チニ原産地ヨリ到ルト其ノ他ノ場所ヨリ到ルトヲ問ハス必ス之ヲ施スモノトス
輸出ニ関シテモ前項ノ場合ト同様全ク均等ノ取扱ヲ施スヘシ故ニ締約國ノ一方ヨリ適法ニ輸出シ若ハ輸出セラルヘキ物品ハ其ノ輸出ノ日本國船舶ニ依ルト露西亜國船舶ニ依ルトニ拘ハラス又其ノ仕向先ノ締約國ノ一港タルト第三國ノ一港タルトヲ問ハス締約國ノ版図内ニ於テハ之ニ課スルニ同一ノ輸出税ヲ以テシ又之ニ許スニ同一ノ奨励金並税金払

禁止スルコトナカルヘシ此規定ハ人畜或ハ農業ニ有用ナル植物ノ安全ヲ保護スルニ必要ナル衛生上及其ノ他ノ禁止ニ適用スヘカラサルモノトス

遼東租借地ノ生産若ハ製造ニ係ル物品ニシテ陸路滿洲國境ヲ經テ露西亜國ヘ輸入スルモノ及露西亜國ノ生産若ハ製造ニ係ル物品ニシテ滿洲國境ヲ經テ陸路遼東租借地ニ輸入スルモノハ孰レモ輸入税ヲ免セラルヘシ

第五條

兩締約國ノ一方ノ版図内ヨリ他ノ一方ノ版図内ヘ輸出スル一切ノ物品ヘハ他ノ各外國ヘ輸出スル同種物品ニ對シ賦課シ若ハ賦課スヘキ所ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ税金又ハ雜費ヲ賦課スルコトナカルヘシ又兩締約國ノ一方ノ版図内ニ於テ他ノ各外國ニ向ヒ物品ノ輸出ヲ禁止スルニ非サレハ他ノ一方ノ版図内ヘ同種ノ物品ヲ輸出スルコトヲモ禁止セラルヘシ

第六條

兩締約國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版図内ニ於テ内地通過税、保税倉庫、奨励金、便益及戻税ニ関シ最惠國ノ臣民或ハ人民ト全ク均等ノ取扱ヲ享受スヘシ

戻ノコトヲ以テスヘシ

第八條

政府、官吏、公吏、一私人、会社若ハ何等施設ノ名義ヲ以テスルカ又ハ其ノ利益ノ為ニ課セラルル所ノ噸税、港税、水先案内料、燈台税、檢疫費其ノ他之ト同種ノ税金ハ其ノ性質並名義ノ如何ニ拘ハラス同一ノ條件ヲ以テ同様ノ場合ニ於テ内國船舶一般ニ課スルモノニ非サレハ兩締約國ノ一方ハ其ノ版図内ノ港ニ於テ之ヲ他ノ一方ノ船舶ニ課セサルヘシ此ノ如キ均等ノ取扱ハ兩國ノ船舶カ何レノ地或ハ港ヨリ來リ又何レノ所ニ往クモノタリトモ相互同一タルヘキモノトス

第九條

兩締約國ノ一方ハ其ノ版図内ノ港、灣、船渠、碇泊所或ハ河川ニ於テ船舶ノ繫留又貨物ノ船積、船卸ニ関スル一切ノ事項ニ就キ他ノ一方ノ締約國ノ船舶カ均霽セサル特典ヲ自國船舶ニ許与セサルヘシ但シ本件ニ関シテモ亦兩締約國ノ目的ハ兩國ノ船舶ニ對シ互ニ全ク均等ノ取扱ヲ施スニ在ルモノトス

第十條

兩締約國ノ沿海貿易ハ本條約ニ於テ規定スルノ限ニ在ラス

各其ノ法律、勅令及規則ニ從ヒ之ヲ規定スヘキモノトス然レトモ日本国皇帝陛下ノ版図内ニ於ケル露西亜国臣民又ハ全露西亜国皇帝陛下ノ版図内ニ於ケル日本国臣民ハ此ノ事項ニ関シテハ各右法律、勅令及規則ヲ以テ他ノ外国臣民或ハ人民ニ許与シ若ハ許与セラルヘキ諸權利ヲ享有スルモノトス

全露西亜国皇帝陛下ノ版図内ノ二箇以上ノ港ヘ仕向ケタル荷物ヲ外国ニ於テ積載シタル日本国船舶及日本国皇帝陛下ノ版図内ノ二箇以上ノ港ヘ仕向ケタル荷物ヲ外国ニ於テ積載シタル露西亜国船舶ハ外国貿易ヲ許サレタル仕向港ノ一ニ於テ其ノ積荷ノ一部ヲ陸揚シ而シテ其ノ最初ニ積載シタル荷物ノ剩余ヲ陸揚スル為他ノ一港若ハ激港ヘ進航スルトヲ得ヘシ但常ニ兩國ノ法律及税関規則ニ從フヘキモノトス

第十一條

兩締約国ノ一方ノ軍艦或ハ商船ニシテ暴風又ハ其ノ他ノ危難ニ遭遇シ避難ノ為已ムヲ得ス他ノ一方ノ港ニ進入スルモノハ内国船舶ノ扱フヘキ税金ノ外何等ノ税金ヲ払フコトナク其ノ港ニ於テ更ニ積載ヲ為シ一切ノ需用品ヲ求メ再ヒ航行スルヲ得ヘシ但商船ノ船長ニシテ其ノ費用ヲ支弁スル為

ル期限内ニ当該總領事、領事、副領事或ハ代弁領事ヨリ請求アレハ之ヲ引渡スヘシ而シテ右領事官、持主或ハ代理人ハ内国船舶難破ノ場合ニ於テ払フヘキ所ノ物品保存費並難救助費及其ノ他ノ費用ノミヲ払フヘキモノトス

難破船ヨリ救上ケタル貨物及商品ハ消費ノ為ニ通関手續ヲ為スモノニ非サレハ一切ノ関税ヲ免除スヘシ但消費ノ為ニ売捌ク場合ニハ普通ノ関税ヲ納ムルヲ要スルモノトス
兩締約国ノ一方ノ臣民ニ屬スル船舶ニシテ他ノ一方ノ版図内ニ於テ淺瀬ニ乗上ケ或ハ難破シタルトキ其ノ持主、船長若ハ他ノ持主代理人カ不在ノ場合若ハ現場ニ在リテ請求スル場合ニハ当該總領事、領事、副領事若ハ代弁領事ハ其ノ自国民ニ必要ナル補助ヲ与フル為干与スルコトヲ許サルヘキモノトス

第十二條

本條約ニ於テハ日本国ノ国法ニ從ヒ日本国船舶ト看做サルヘキ一切ノ船舶ハ之ヲ日本国船舶ト看認メ又露西亜国ノ国法ニ從ヒ露西亜国船舶ト看做サルヘキ一切ノ船舶ハ之ヲ露西亜国船舶ト看認ムヘシ

日本国ノ現行法律ニ從ヒ作成シタル日本国ノ船舶積量測定證書及露西亜国ノ現行法律ニ從ヒ作成シタル露西亜国ノ船

其ノ積荷ノ一部ヲ売却スルヲ要スル場合ニハ該船長ハ其ノ寄港地ノ規則及税目ヲ遵守スヘキモノトス
兩締約国ノ一方ノ軍艦或ハ商船ニシテ他ノ一方ノ沿海ニ於テ淺瀬ニ乗上ケ或ハ難破シタルトキハ地方官ヨリ其ノ事件ノ生シタル地方ニ在ル所ノ總領事、領事、副領事又ハ代弁領事ヘ其ノ旨ヲ通知スヘシ但若其ノ地方ニ領事官ノ駐在セサルトキハ最近地方ノ總領事、領事、副領事又ハ代弁領事ヘ通知スヘシ

全露西亜国皇帝陛下ノ領水ニテ難破シ若ハ海岸ニ乗上ケタル日本国船舶ノ救助ニ関スル一切ノ手續ハ露西亜国法律、勅令及規則ニ從テ之ヲ為スヘク又相互ノ主義ニ基キ日本国皇帝陛下ノ領水ニテ難破シ若ハ海岸ニ乗上ケタル露西亜国船舶ニ関スル一切ノ救助ノ処分ハ日本国法律勅令及規則ニ從テ之ヲ為スヘシ

右難破若ハ乗上ケタル船舶並其ノ器具及其ノ他一切ノ附屬品及該船舶ヨリ救上ケタル貨物並商品及右等ノ諸物件ニシテ海中ニ投棄セラレタルモノ又ハ之ヲ売却シタルトキハ其ノ取得金並該遭難船内ニ発見セラレタル一切ノ書類ハ右船舶ノ持主或ハ代理人ヨリ要求スルトキハ之ニ引渡スヘシ右持主或ハ代理人ノ現場ニ在ラサルトキハ内国法律ニ定メク

船舶積量測定證書ハ日本国及露西亜国ノ諸港ニ於テ更ニ測定ヲ為スコトナクシテ承認セラルヘキモノトス

第十三條

兩締約国ノ一方ニ屬スル軍艦或ハ商船ノ海員ニシテ他ノ一方ノ版図内ニ於テ脱船スル者アルニ際シ右船舶所屬国ノ領事又ハ其ノ代理人ヨリ其ノ逮捕、引渡ノコトヲ地方官ニ依頼スルトキハ該地方官ハ其ノ権力ノ及フ限該脱船人ヲ逮捕シ且之ヲ引渡ス為助力ヲ為スヲ要スルモノトス

但海員カ其ノ各自ノ所屬国ニ於テ脱船シタルトキハ此ノ規定ヲ適用セサルモノトス

第十四條

兩締約国ハ其ノ一方ノ通商航海及工業ヲ他ノ一方ニ於テ總テ最惠国ノ基礎ニ置ク主意ヲ有スルニ因リ通商航海工業及手工業ニ関スル一切ノ事項ニ関シ其ノ一方ヨリ別国ノ政府、船舶、臣民或ハ人民ニ現ニ許与シ或ハ将来許与スヘキ一切ノ特典、殊遇若ハ免除ハ他ノ一方ノ政府、船舶又ハ臣民ニモ即時ニ且條件ヲ附セスシテ之ヲ許与スヘキコトヲ兩締約国ニ於テ約ス

第十五條

兩締約国ノ一方ハ他ノ一方ノ港、都府及其ノ他ノ場所ニ總

領事、領事、副領事、領事代及代弁領事ヲ置クコトヲ得ヘシ但領事官ノ駐在ヲ認許スルニ便宜ナラサル場所ハ此ノ限ニ在ラス
然レトモ右ノ制限ハ他ノ諸外国ニ対シ之ヲ適用スルニ非サレハ一方ノ締約国ニ対シテ之ヲ適用スルヲ得サルモノトス

總領事、領事、副領事、領事代及代弁領事ハ相互ノ條件ヲ以テ一切ノ職務ヲ執行シ且其ノ在留国ニ於テ最惠国ノ領事官ニ現ニ許与シ或ハ將來許与セラルヘキ一切ノ特典、特権、免除及職權ヲ享有スルコトヲ得ヘシ

露西亞國ニ於ケル文書檢閱ニ対シテハ日本國ヨリ露西亞國ニ派遣スル外交代表機關及正式領事館並之ニ附屬スル諸官吏ハ新聞雜誌並學術技芸及文學ノ著作ニ関シ完全ナル自由ヲ享有スヘシ

第十六條

而締約国ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版図内ニ於テ法律ニ定ムル所ノ手續ヲ履行スルトキハ専売特許、商標及意匠ニ関シ内国臣民ト同一ノ保護ヲ受クヘシ

第十七條

本條約ハ批准交換後十日ヲ経テ實施セラレ茲ニ規定シタル憲ノ查證ノ有効期限ヲ六箇月トス露西亞國官憲カ日本國臣民ニ外国行旅券ヲ交付シ若ハ其ノ所持ノ旅券ニ露西亞國出發許可ノ旨ヲ記入スルニ当リ徵收スル手数料若ハ取立金ハ何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス五十哥ヲ超過セサルヘシ

而細露西亞ニ旅行シ若ハ居留スル日本國臣民ノ旅券或ハ居住券ニ対シ徵收スル查證料及手数料若ハ取立金ハ歐羅巴露西亞ニ対スル旅券或ハ居住券ニ関シ徵收スル金額ノ二分ノ一ヲ超過セサルヘシ

第二 露西亞帝國政府ハ滿洲國境ヲ經テ露西亞領土ニ輸入

スル日本國ノ貨物及商品ニ対シ賦課スル輸入税率ヲシテ如何ナル場合ニ於テモ西比利亞諸港ヲ經テ露西亞國領土ニ輸入スル貨物及商品ニ対シテ賦課スルモノヲ超過セシメサルコトニ同意ス

第三 本議定書ハ本日調印シタル通商航海條約ノ批准ト共

ニ批准セラレタルモノト看做サルヘシ又本議定書ハ前記條約ノ無効ニ歸スルト同時ニ終了スヘキモノトス
右證據トシテ雙方ノ全權委員ハ本議定書ニ記名調印スルモノナリ

方法ニ依リ終了スル迄効力ヲ持續スヘシ

而締約国ノ一方ハ明治四十三年七月十七日即千九百十年七月四日(十七日)以後ハ何時タリトモ本條約ヲ終了セムコトヲ欲スル旨ヲ他ノ一方へ通知スルノ權利ヲ有スヘシ而シテ此ノ通知ヲ為シタル後十二箇月ヲ經過シタルトキハ本條約ハ全然消滅ニ歸スヘキモノトス

第十八條

本條約ハ批准セラレヘシ該批准ハ成ルヘク速ニ且如何ナル場合ニ於テモ其ノ調印後四箇月以内ニ東京ニ於テ交換セラレヘシ

右證據トシテ雙方ノ全權委員ハ本條約ニ記名調印スルモノナリ

明治三十九年 月 日即千九百六年 月 日(月日)

ニ於テ之ヲ作ル

議定書案

日本國皇帝陛下ノ政府及全露西亞國皇帝陛下ノ政府ハ本日調印セシ通商航海條約ノ外雙方ニ関スル特別ノ事項ヲ規定スルヲ以テ兩國ノ利益ト為シ雙方ノ全權委員ハ左ノ約定ニ同意セリ

第一 日本國臣民ノ携帶スル自國旅券ニ対スル露西亞國官

明治三十九年 月 日即千九百六年 月 日

() 月 日) ニ於テ之ヲ作ル

在露日本國公使ヨリ露國外務大臣ニ至ル

外交文書案

拜啓陳者從來松花江ノ航權ハ千八百五十八年五月十六日締結露清條約中ニ露清兩國ノ船舶ノ外之ヲ他國ノ船舶ニ許与セサルコトニ規定相成居候処其ノ後ニ於ケル滿洲内地ノ商業ハ著シク發達シタル事實ニ鑑ミ貴國政府ハ貴國ニ関スル限り該航權ヲ今後日本帝國ノ船舶ニ及ホスコトニ御同意相成候様致度帝國政府ノ訓令ニ依リ此段得貴意候敬具

露國外務大臣ヨリ在露日本國公使ニ至ル

外交文書案

拜啓陳者從來松花江ノ航權ハ千八百五十八年五月十六日締結露清條約中ニ露清兩國ノ船舶ノ外之ヲ他國ノ船舶ニ許与セサルコトニ規定相成居候処其ノ後ニ於ケル滿洲内地ノ商業ハ著シク發達シタル事實ニ鑑ミ該航權ヲ今後日本帝國ノ船舶ニ及ホスコトニ関スル日本國皇帝陛下ノ政府ノ本日附公文ニ対シ帝國政府ハ帝國ノ関スル限り全然之ニ同意ヲ表シ候此段得貴意候敬具

在露日本国公使ヨリ露国外務大臣ニ至ル

外交文書案

拜啓陳者日本国ト亞露ノ通商及漁業上ノ關係著シク發達シ且今後益々重要ト可相成ハ明瞭ニ有之候ニ付此際帝國政府ハ浦潮港及「ニコラエフスク」港ニ帝國領事館「ペトロパウロフスク」港ニ領事館分館ヲ設置致度候間貴国政府ニ於ト之ニ御同意相成候様致度帝國政府ノ訓令ニ依リ此段得貴意候敬具

露国外務大臣ヨリ在露日本国公使ニ至ル

外交文書案

拜啓陳者亞露ト日本国ノ通商及漁業上ノ關係著シク發達シ且今後益々重要ト可相成ハ明瞭ニ有之候ニ付浦潮港及「ニコラエフスク」港ニ日本国領事館「ペトロパウロフスク」港ニ領事館分館ヲ設置スルコトニ關スル日本国皇帝陛下ノ政府ノ本日附公文ニ對シ帝國政府ハ前記各港ニ日本国領事館及領事館分館ヲ設置スルコトニ全然同意ヲ表シ候此段得貴意候敬具

附屬書第二号

千九百零六年八月二十七日 日本国全權委員本野閣下送付日露通商航海條約案、議定書案並外交文書案說明書

年七月二十三日黒龍江總督ニ對スル内務大臣ノ指令ニ依リ該地方官憲ハ之カ許可ヲ与ヘタリ而シテ此ノ日本国臣民ノ出願カ許可セラル理由ハ該指令ニ詳ナリ
元來火葬ハ外国ニ於テ死亡セル日本国臣民ノ常習ニシテ既ニ露西亞国官憲カ該出願ノ正当ヲ認メタルモノナルカ故ニ日本国臣民ニ對シ條約ヲ以テ此ノ權能ヲ保障セラレムコトヲ希望ス

五項

「農業及不動産ノ所有權ニ關スル各般ノ事項ニ關シテハ露西亞國ニ於ケル日本国臣民及日本国ニ於ケル露西亞國臣民ハ最惠國ノ臣民又ハ人民ト均等ノ取扱ヲ受クヘキモノトス」ノ一項ノ挿入

「日本国政府ハ農業及不動産所有權ニ關スル問題ハ内國法ニ依リテ規定セラルヘキモノナリト雖露西亞國ニ於ケル日本国臣民日本国ニ於ケル露西亞國臣民ハ此ノ点ニ關シ自余諸国臣民ト差等若ハ劣等ノ取扱ヲ受クヘカラサルモノト思考シ為ニ本條中ニ最惠國ノ條款ヲ挿入シタリ」
此ノ如キ規定ハ尙現行日仏通商航海條約中ニモ存セルモノナリ

第八項

「前記ノ免除ハ不動産ノ所有ニ附著スル所ノ賦課金及一般林外務大臣時代 日露漁業協約 一八二

第一條

第二項

「司法取扱ニ關スル各般ノ事項ニ付」ト「内國臣民ノ享有スル總テノ權利及特典ヲ享有スヘシ」
トノ間ニ「相互ノ條件ヲ以テ」ノ文字ノ挿入
此ノ挿入ハ下ノ如ク本項ノ意義ヲ明定スルノ目的ヲ以テ提議セラレタルモノトス

兩締約國ノ一方カ他ノ一方ノ臣民ニ對シ裁判所ニ自由ニ訴出ツルコト及司法行政ニ關スル權利及特典ヲ許与スルノ意思ハ其ノ全部無條件ニテ之ヲ許与スルニ非ス此ノ自由、權利若ハ特典ハ其ノ自由、權利及特典カ他ノ一方ニ依リテ同様ニ許与セラルルニ非サレハ他ノ一方ノ臣民ニ對シ又之ヲ許与セサルモノトス

第四項

「又埋葬ノ權利ヲ享有ス」ト「其ノ宗教上ノ慣習ニ從ヒ其ノ自国人ヲ」トノ間ニ「若ハ火葬」ノ文字ノ挿入
千八百九十九年浦潮斯德滞在日本国臣民ハ火葬場ヲ設置セムト欲シ該港ノ露西亞國地方官庁ニ對シテ其ノ許可ヲ出願シタリ露西亞國地方官憲ハ之ヲ專断スルコトヲ得ス為ニ當該本省ニ對シ其ノ指令ヲ求メタリ而シテ千九百一

ノ内國臣民カ土地所有者、農業者又ハ土地若ハ建物ノ占有者トシテ負擔スルコトアルヘキ軍事上ノ賦役及徵發ヲ包含セサルモノトス」

本條第七項ノ解釈上一切ノ誤解ヲ生セサシムカ為メ日本国政府ハ本項ニ於テ第八項ニ包含セル免除ノ範圍ヲ明定スルヲ必要ト信シ為ニ現行日露通商條約（第二條第二項）ヲ茲ニ再掲シタリ

第二條

第二項

「兩締約國一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内何レノ所ニ於テモ」ト「正業ニ屬スル各種ノ生産物、製造品及貨物ノ卸売」云々トノ間ニ「總テ工業又ハ手工業ニ從事シ」ノ挿入
日本帝國政府ハ此ノ挿入ニ依リ兩締約國一方ノ臣民ニ對シ各他ノ一方ノ版圖内ニ於テ工業及手工業ノ自由並農業ノ自由ヲ保障セムコトヲ提議セリ商業ノ自由カ保障セラレタル時ニ當リ工業若ハ手工業ヲ排除スルノ何等理由ナカルヘシ

同項

「營業」ハ「商業ニ從事ス」ニ修正
日本国政府ハ此ノ修正ニ依リ兩締約國一方ノ臣民ニ對シ

他ノ一方ノ版図内ニ於テ各埠ニ住居及商業ニ従事スル為
ノミナラス尙或營業ヲ為スノ目的ヲ以テ家屋及商店ヲ賃
借及所有シ又ハ土地ヲ賃借スルノ権利ヲ保障セムト欲ス

第四項

「公安」ノ次ニ「及衛生」ノ挿入及「現ニ行ハレ又ハ行ハ
ルルコトアルヘキ」ノ挿入ハ本項ノ條文ヲ完補セムカ為ニ
シテ其ノ結果衛生ニ関スル法規ハ警察又ハ公安ノ法律ト同
様ノ地位ニ置カルヘキモノト為ルヘシ

第三條

第一項

「商業」ノ次ニ「若ハ工業」ノ挿入

此ノ挿入ハ原條文ヲ完補セムト欲スルモノニシテ其ノ理
由ハ第二條第二項ニ説明セルモノニ同シ

第四條

第三項

「遼東租借地ノ生産若ハ製造ニ係ル物品ニシテ陸路滿洲國
境ヲ經テ露西亜國ニ輸入スルモノ及露西亜國ノ生産若ハ製
造ニ係ル物品ニシテ滿洲國境ヲ經テ陸路遼東租借地ニ輸入
スルモノハ孰レモ輸入税ヲ免セラルヘシ」
露西亜國政府ハ亞細亞露西亜ニ於ケル輸入物ニ對スル關

國民ニ必要ナル救助ヲ与ヘムカ為ニ其ノ職權上ノ助力ヲ与
フルコトヲ許可セラルヘシ持主、船長又ハ其ノ他ノ代理人
カ現場ニ在リテ此ノ種ノ救助ヲ出願セル場合ニ於テモ亦同
シ」ハ「其ノ持主又ハ船長其ノ他ノ代理人カ不在ノ場合又
ハ現場ニ在リテ之ヲ請求スル場合ニハ當該總領事、領事、
副領事又ハ代弁領事ハ其ノ自國民ニ必要ナル補助ヲ与フル
為干与スルコトヲ許サルヘキモノトス」ニ修正

此ノ修正ハ単ニ條文ノ形態ヲ變更セルモノニシテ固ヨリ
其ノ根本ノ意義ヲ變更シタルモノニ非ス

第十二條

第二項

「日本國ノ現行法律ニ從ヒ作成シタル日本國ノ船舶積量測
度證書及露西亜國ノ現行法律ニ從ヒ作成シタル露西亜國ノ
船舶積量測定證書ハ日本國及露西亜國ノ諸港ニ於テ測度ヲ
為スコトナクシテ承認セラルヘキモノトス」

兩締約國一方ノ港内ニ於ケル他ノ一方ノ船舶積量測定證
書ノ相互承認ハ税関ノ手續ヲ簡易ニセムカ為各自國臣民
ノ利益上必要ナルモノト認メ日本國政府ハ露西亜國政府
ニ對シテ第十二條ニ本項ノ附加ヲ提議スヘキモノト信ス

第十四條

税率施行ニ關スル千九百年六月ノ勅令ヲ以テ陸路黒龍江
省ニ輸入セル清國産物ニ對シテ製茶及若干禁止物ヲ除キ
總テ輸入税ヲ免除シ又千九百四年五月一日ノ新勅令ヲ以
テ黒龍江總督府ニ輸入セル外國物品ハ製茶ヲモ包含シ總
テ輸入税ヲ免除セリ

日本國政府ハ露西亜國政府ノ上記ノ措置ニ鑑ミ本項ノ規
定ハ兩國ノ利益適合セルモノト思考シ露西亜國政府ノ異
議ニ逢著セサルヘシト信シ此ノ処置ヲ取り以テ之ヲ露西
亜國ニ提議スルモノナリ

第六條

「通過税ノ免除、保税倉庫、奨励金、便益及戻税其ノ他最
惠國臣民ニ許与セラルルコトアルヘキ一切ノ利益ニ關ス
ル」ハ「於テ内地通過税、保税倉庫、奨励金、便益及戻税
ニ關シ最惠國ノ臣民又ハ人民ト全ク均等ノ取扱ヲ受クヘ
シ」ニ修正

此ノ修正ノ目的ハ本條ノ意義ヲ明定スルニ在ルニ過キス
從テ特ニ説明ヲ要セス

第十一條

第六項

「持主又ハ船長其ノ他ノ代理人カ不在ノ場合ニ於テ其ノ自

第三行ニ「工業及手工業」第六行、第八行及第九行ノ間孰
レモ「船舶ニ」竝第十一行ノ初ニ「及工業」ノ挿入
第二條修正ノ結果「工業及手工業」ノ挿入ハ第二條ニ於
ケルト同一ノ理由ニ依リテ提議セラルルモノナリ

日本國政府ハ船舶モ又最惠國ノ取扱ヲ受クヘキモノト思
考シ「船舶ニ」ノ挿入ヲ提議スヘキモノナリト信ス

第十五條

第三項

「行使スヘシ」ハ「相互ノ條件ヲ以テ行使スルコトヲ得」
ニ修正シ而シテ「特典、特權、免除」ノ次ニ「及職權」ヲ
挿入ス

右第一ノ修正ハ第一條第二項ニ付説明シタルモノト同一
ノ理由ニ依レルモノナルカ故ニ兩締約國一方ノ版図内ニ
於テ他ノ一方ノ領事ノ特典等ノ享有ハ其ノ特典、特權カ
其ノ一方ノ領事ニ對シテモ又許与セラルヘシトノ條件ニ
非サレハ許与セラレサルモノトス

第二ノ修正即チ「及職權」ノ挿入ニ付テハ日本國政府ハ
左ノ事由ニ依リテ之ヲ提議スルモノナリ

即チ露西亜國ニ於ケル日本國領事日本國ニ於ケル露西亜
國領事ノ職權ニ關シ日露兩國間ニ協定ノ存セサルトキハ

該領事ハ一般ニ認メラレタル国際慣例ニ拠ルニ非サレハ五ニ其ノ職務ヲ行使スルコトヲ得サルヘシ然ルニ日露兩國間商業上ノ關係次第ニ親密ヲ致シ將來漸ク複雑ヲ致スヘキカ故ニ兩締約國ハ遠カラズ其ノ各自領事ノ職權ニ關スル特別條約ノ必要ヲ見ルニ至ルヘシ今本項中ニ「及職權」ノ文字ヲ挿入スルトキハ露西亞國ニ於ケル日本國領事及日本國ニ於ケル露西亞國領事ハ其ノ各自職權ニ關シ最惠國ノ領事ト同一ノ地位ニ置カラルコトナルヘク特別條約ナキモ其ノ駐在國ニ於テ既ニ其ノ邦國ニ對シ領事條約ヲ有セル國ノ領事ニ与ヘタル職權ヲ行使スルコトヲ得ヘシ日本國ニ於ケル最惠國領事ノ職權ハ千八百九十六年ノ日獨領事職務條約及千八百九十七年日白領事職務條約中ニ規定セラルルモノニシテ日本國ニ於ケル仏蘭西國ノ領事ハ相互ノ名義ヲ以テ右諸條約ニ依リ獨逸國及白耳義國ノ領事ニ許与セル職權ヲ享有スルコトヲ得タリ

第四項

「露西亞國ニ於ケル文書檢閱ニ對シテハ日本國ヨリ露西亞國ニ派遣スル外交代表機關及正式領事館竝之ニ附屬スル諸官吏ハ新聞雜誌並學術技芸及文學ノ著作ニ關シ完全ナル自由ヲ享有スヘシ」

議定書

第一号

「日本國臣民ノ携帶スル自國旅券ニ對スル露西亞國官憲ノ查證ノ有効期限ヲ六箇月トス露西亞國官憲カ日本國臣民ニ外國行旅券ヲ交付シ若ハ其ノ所持ノ旅券ニ露西亞國出發許可ノ旨ヲ記入スルニ當リ徵收スル手数料若ハ取立金ハ何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス五十哥ヲ超過セサルヘシ」

此ノ規定ヲ提議シ日本國政府ハ露西亞國政府ハ之カ承認ニ付何等異議ヲ有セサルヘシト確信ス蓋シ之ト同様ノ規定ハ既ニ露獨條約中ニ存セルモノナレハナリ(千九百四年七月十五日 伯林ニ於テ締結シタル露獨通商航海條約追加條約第二條)

「亞細亞露西亞ニ旅行シ若ハ居留スル日本國臣民ノ旅券或ハ居住券ニ對シ徵收スル查證料及手数料若ハ取立金ハ歐羅巴露西亞ニ對スル旅券或ハ居住券ニ關シ徵收スル金額ノ二分一ヲ超過セサルヘシ」

日本國ト亞細亞露西亞トノ間就中黑龍江省ニ於ケル通商及漁業ノ關係ハ次第ニ其ノ發達ヲ致スヘキモノナルカ故ニ日本國政府ニハ露西亞國政府カ此ノ規定ヲ承認シ黑龍

由ヲ享有スヘシ」

本項ノ附加ニ付テハ日本國政府ハ之ト同様ノ自由ヲ露西亞國政府カ既ニ千九百四年ノ露獨條約及千九百五年ノ露亞條約ニ依リ獨逸國及仏蘭西國ノ外交代表機關及正式領事館竝其ノ附屬官吏ニ許与シタルカ故ニ露西亞國政府ハ今復日本國ニ對シテ何等異議ヲ有セサルヘシト信シテ之ヲ提議スルモノナリ

第十七條

「本條約ハ批准交換後十日ヲ經テ實施セラレ茲ニ規定シタル方法ニ依リ終了スル迄効力ヲ持續スヘシ」

第一項ハ急速ニ本條約ヲ施行セムトノ希望ニ依レルモノナリ

第二項ニ付テハ日本國ト諸外國トノ現行各通商條約ニハ兩締約國ノ一方カ他ノ一方ニ對シ千九百十年七月十七日 四 後其ノ條約ヲ終了セムコトヲ欲スル旨ヲ通知スルコトヲ得ヘク而シテ此ノ通知後十二箇月ヲ經過シタルトキハ其ノ條約ハ全然消滅ニ歸スヘキモノトストノ規定ヲ包含セリ故ニ日本國政府ハ本條約ニ付テモ亦同様ノ權能ヲ保障セムコトヲ欲ス

江省ニ於ケル日本國臣民ノ出入ヲ便セムコトヲ希望セリ此ノ地方ニ於ケル日本國臣民殊ニ日本國漁業者ノ往來ハ甚頻繁ナルカ故ニ其ノ都度歐羅巴露西亞ニ於ケルト同様ノ徵收金ヲ納附スヘキモノナルトキハ此ノ徒ニ取リテ甚過重ナル負擔タルヘシ

第二号

「露西亞帝國政府ハ滿洲國境ヲ經テ露西亞國版図内ニ輸入スル日本國ノ貨物及商品ニ對シ賦課スル輸入税率ヲシテ如何ナル場合ニ於テモ西比利亞諸港ヲ經テ露西亞國ノ版図内ニ輸入スル貨物及商品ニ對シテ賦課スルモノヲ超過セシメサルコトニ同意ス」

日本國政府ハ此ノ規定ヲ提議シテ露西亞國政府ハ既ニ滿洲國境ヲ經テ輸入セル物品ニ關シテ採レル特別処置ニ基因スヘキ課税ノ不均等ニ對スル保障ヲ与ヘタルカ故ニ此ノ提議ヲ承認スルニ付何等異議ヲ有セサルコトヲ希望セムト欲ス又日本國政府ハ露西亞國政府カ西比利亞諸港ニ於ケル自由港ノ廢止中ト雖モ概シテ滿洲國境ヲ經テ輸入セル清國ノ物品及商品ニ對スル輸入税ノ免除ヲ保持シタルカ故ニ今復何等異議ヲ有セサルヘシト思考ス

外交文書第一

日本国船舶松花江航権ノ件

千八百五十八年露清兩國間ニ締結セル愛暉條約第一條ハ黒龍江、松花江及烏蘇里ノ航行権ハ特ニ露清兩國ノ船舶ニ留保セラルヘキコトヲ規定セリ故ニ「ポーツマス」會議會議録ニ記載セル如ク露西亜國全權委員ハ露西亜國ハ滿洲ニ於テ機會均等ノ主義ニ反セル何等專屬の特権ヲ有セス而シテ實際此ノ如キ特権存スルトキハ其ノ特権ハ無効ニ歸スヘキコトヲ声明シタリ且此ノ点ニ関スル討議ノ結果講和條約第三條第二項ハ雙方ノ一致ヲ以テ下ノ如ク決定セラレタリ「露西亜帝國政府ハ清國ノ主權ヲ侵害シ又ハ機會均等主義ト相容レサル何等領土上利益又ハ優先的若ハ專屬的讓与若ハ免稅ヲ滿洲ニ於テ有セサルコトヲ声明ス」

松花江ハ滿洲ノ内地ニ在ルカ故ニ露清兩國船舶航行ノ特権ハ機會均等主義ト相容レズ從テ上記講和條約ノ宣言及規定ト相背馳スルモノナリ

日本国臣民ハ日清條約ニ依リ總テ清國ノ内地ニ於ケル河川ノ航行権ヲ有ス而シテ松花江ノ航行ハ滿洲ニ於テ日本国臣民力有セル經濟上ノ利益上日本国臣民ニ取リテ最大重要ナルモノナリ

ト為リ而シテ漁業條約カ日露兩國間ニ締結セラルトキハ益其ノ人煙ノ増加スヘキヤ疑ヲ容レズ通商關係ノ發達ハ兩國共通ノ目的タルカ故ニ日本帝國政府ハ露西亜帝國政府カ同様ノ意思ニ膺リ此ノ沿海地方ニ於ケル日本国臣民ノ接近及滞在ニ對シ便宜ヲ与フルコトヲ拒マサラムコトヲ信セムト欲ス

東部西伯利亞及浦潮斯德特ニ其ノ附近ニ於ケル日本国臣民通商上ノ利益ノ大發展ニ依リ又日本海、「オコーツク」海及白令海ニ於ケル露領沿海漁業権ノ設定ニ依リ日本國政府ハ有効ニ此ノ地方ニ於ケル日本国臣民ノ著大ナル利益ヲ保護セムカ為ニ浦潮斯德、「ニコラエフスク」及「ペトロパウロフスク」ニ於ケル正式領事館ヲ設定スルヲ以テ最緊急ノ事ト思考ス

日本國政府ハ此ノ領事館設定問題カ日露兩國間親交關係ノ復活ノ時ニ其ノ確定セラレムコトヲ熱望ス

日露通商航海條約締結會議録第二号

第二回會議

千九百零六年十月二十三日 日午後四時外務省ニ於テ開會

列席者

日本國 全權委員本野閣下、聖彼得堡日本公

林外務大臣時代 日露漁業協約 一八二

外交文書第二

浦潮斯德、「ニコラエフスク」及「ペトロパウロフスク」ニ於ケル日本國領事館設定ノ件

「ポーツマス」會議會議録第十号ノ末文ニ於テ此ノ問題ニ関スル一節ニ曰ク「ウァッテ」氏ハ本條草案末文ニ掲ケタル浦潮斯德ニ於ケル領事任命ノ件ハ別ニ之ヲ攻究スヘキモノニシテ講和條約中ニ之ヲ掲ケヘキモノニ非スト述ベ小村男爵ハ此ノ問題タルヤ戰前久シク日露間ノ交渉事件タリシモノナルカ故ニ此ノ際之ヲ解決セムトシタルモノナリト雖本件ノ解決ヲ通商條約談判ノ時ニ讓ルコトニ對シテハ故障ナキ旨ヲ陳ヘ兩國全權委員ハ此ノ意見ヲ容ルルコトニ決シタル旨ヲ記セリ

元來正式領事館ノ代リニ日本國貿易事務官ノ設置ハ全ク特別ナル場合ニ於テ承認セラレタルモノナルカ故ニ當時ノ露西亜國官憲ハ該貿易事務官ニ對シテ幾ムト總テ領事ノ權限ヲ認メタリ然レトモ該貿易事務官ノ設定以來三十年間其ノ職權及特権ハ次第ニ露西亜國官憲ノ回收若ハ拒否スル所ト為リ終ニ近年ニ至リ該事務官ハ既ニ以テ有効ニ此ノ沿海地方ニ於ケル日本国臣民ノ廣大ナル利益ヲ保護スルニ足ラサルコトト為リ今ヤ此ノ地方ニ於ケル日本国臣民ハ漸次衆多

露西亜國

使館書記官落合氏、丸毛氏、津田氏
全權委員 「マレヴスキ」氏、マレ
ヴィッチ氏、閣下商務省委員「ラン
ゴゾオエ」氏、「アレクセイエツフ」
氏「ブリレジャイエツフ」氏、會議
書記官「ウエルクホウスキー」氏、
「ペトロフ」氏、「リッサンコ」氏、
「ド、マルテンス」氏、「ヴォヅネセ
ンスキー」氏

會議ノ開始ニ臨ミ兩國全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ此ノ手續ハ外交上ノ慣例ニ由リ之ヲ行ヒ「マレヴスキ」氏、「マレヴィッチ」閣下ハ本野閣下ニ對シテ陳述シテ曰ク

日露兩國間通商航海條約締結ニ関スル第一回ノ會議以來既ニ二箇月以上ヲ經過シタリ而シテ我帝國政府ハ貴下カ本職ニ提示セラレタル條約案ノ慎重ナル調査ニ此ノ期間ヲ使用シタルコトヲ疑フコトナカルヘク日本國政府提案ノ豫先調査ノ任ニ當レル我當該官憲ハ其ノ複雑ナル利益ニ関シ立案セル規定ノ分析ニ付特別ナル注意ヲ傾尽シタリ而シテ該調査事業ノ結果ハ行々當サニ其ノ討議ノ進行

ト共ニ現ハルルコトアルヘシ蓋シ談判ノ現状ニ於テ貴國政府力千八百九十五年ノ條約中ニ挿入セムト欲セル變更ノ全体ヨリ生スヘキ一切ノ問題ニ付確定的ニ之ヲ断定スルハ早計ト謂フヘク實際七月二十二日ノ會議ニ於テ貴下カ予ニ送付セムト欲セラレタル條約案ハ著シク日露間ノ旧通商規定即チ今將ニ締結スヘキ條約ノ基礎ト為ルヘキ規定ト異レハナリ千八百九十五年ノ條約ニ對シ貴國政府カ提案セル變更ハ第一、編成ノ變更第二、新條項ノ附加及第三、旧條約若干規定ノ除去ノ三種ニ細分スルコトヲ得ヘシ

閣下ノ説明書ハ吾人ニ取リテ大ニ有益ノモノニシテ之カ為ニ日本國政府ヲシテ旧條約ノ若干條項ヲ變更シ而シテ幾多ノ新規定ヲ加フルコトニ決セシメタル理由ニ付貴重ナル參考ト為リ以テ吾人ノ任務ヲ容易ナラシメタリ然レトモ吾人ハ貴下ニ對シ數多ノ點ニ付補助的説明ヲ求ムルノ已ムヲ得サルコトヲ貴下ニ秘スルコトヲ得ス敢テ望ムラクハ貴下カ吾人ニ對シテ此ノ説明ヲ与フルヲ拒マサラムコトヲ

先ツ旧條約ノ一聯ノ條項カ何等理由ノ説明ナク其ノ削除ヲ為セルアリ又新條項ノ範圍カ充分ニ説明書ニ由リテ確採用ト認定セラレタリ

第一條第二項ノ朗読後「マレヴズスキー、マレヴィッチ」氏ハ案文中「相互ノ條件ヲ以テ」ト言ヘル語ノ挿入ニ際シ説明書中ニ掲ケタル文案ニ於ケル解釈ハ第二項ノ文意ト矛盾セルカ如ク見ユル旨ヲ説示セリ蓋シ本項ハ千八百九十五年ノ旧文案ニ於テハ裁判上兩國臣民ニ對シテ自國民ノ取扱ヲ与ヘタルカ故ニ此ノ點ニ關シ日本國ニ於ケル露西亞國臣民及露西亞國ニ於ケル日本國臣民ハ内國人ノ有スル一切ノ權利ヲ享有シタリ然ルニ日本國提出新條約案ニ拠レハ此ノ全權ハ既ニ日露各國ノ臣民ニ与ヘラレサルコトトナリ裁判上ノ自由、權利及特權ハ同一ノ自由、權利及特權カ同一ノ方法ヲ以テ他ノ一國ニ与ヘラレタルニ非サレハ他ノ國民ニ對シテ締約國ノ一方ニ依リテ与ヘラルルコトヲ得サルモノトス露西亞國全權委員ノ意見ニ於テハ日本國政府カ果シテ指定セラレタル意義ニ於テ各自國民ノ權利ヲ制限スルノ意思ヲ有スルモノナルトキハ全ク第二項ノ文案ヲ變更スヘキモノト為セリ

本野氏ハ露西亞國全權委員ハ上記挿入ノ事項ニ付追加説明ヲ得ムト欲スルモノナルカ又ハ之ニ對シテ修正ヲ加ヘムト欲スルモノナルカヲ質問シ日本帝國政府ハ討議ニ基ケル修

定セラレサルガ如ク視ユルモノアリ是ヲ以テ吾人ハ吾人ノ疑点カ氷積セラレタルトキハ追テ貴下ニ對シテ吾人ノ對案ヲ送付スヘキ權利ヲ吾人ニ留保シ以テ我修正案ノ編成ハ之ヲ他日ニ譲ルヲ以テ會議ノ事業ノ利益ニ適合セルモノト認メタリ

是ヲ以テ予ハ條約案第一號会ノ討議ニ移リ其ノ間貴國提出案ノ調査上逢著スヘキ困難ヲ挙ケテ之ヲ貴下ニ提示セムト欲ス同時ニ予ハ亦露西亞國政府カ貴國政府提出案ノ若干條項ニ關シ必要ナリト信セル修正ヲ提示スルノ義務ヲ尽サムト欲ス而シテ此ノ注意事項ノ摘要ハ第一回ノ會議ニ於テ合意シタルカ如ク書面ニ由リテ遲滞ナク之ヲ貴下ニ提示スヘシ

貴下ニシテ此ノ討議方法ヲ聴容セラルルトキハ雙方互ニ變更ナキ條款ノ編成ハ之ヲ確定セルモノト看做スノ方針ヲ採リ今ヨリ條約案ノ逐條討議ヲ開始スヘシ
本野氏ハ此ノ提議セラレタル議事方法ヲ承認スルニ付異議ヲ有セス而シテ日本國政府案ノ逐條討議ヲ為サムト期セル旨ヲ聲明セリ

露西亞國委員ノ書記官ハ日本國提出案第一條第一項ノ朗読ニ移リ本項ハ雙方何等變更ノ加フヘキモノナカリシカ故ニ正ヲ勸誘シ説明書中ニ論述セラレタルカ如ク兩國臣民均等權利ノ設定ヲ希望セリ

「マレヴズスキー、マレヴィッチ」氏ハ提議ノ變更ノ正確ナル意義ニ關シ補足的説明ヲ得ムコトノ希望ヲ述ベ露西亞國政府ニ於テハ各自國民ニ對シ單純ニ自國民ノ取扱ヲ許シタル第二項ノ旧文案ヲ保持セムコトヲ択ミ氏ハ以為兩締約國ノ一方ハ訴訟上ノ權利及特權適用ニ付其ノ訴訟法ノ特質ノ為勢訴訟上ノ權利及特權ノ適用ニ於テ或均一ヲ生スヘキ特別ナル訴訟法ヲ有スヘキカ故ニ此ノ提議ニ係レル變更ハ實際超越スヘカラサル困難ヲ惹起スルノ虞ナキヲ保セス蓋シ特別ナル場合ニ於テ其ノ管轄裁判所ハ其ノ告訴者ニ對シテ或便宜ヲ与フルニ臨ミ之ト同様ナル便宜若ハ方法カ他ノ一國ニ於テ与ヘラルルモノナルヤ否ヲ確ムルノ義務アレハナリ

本野氏ハ露西亞國全權委員ノ説明ヲ領シ第二號会ニ於テ本件ヲ確定セムト期セリ

第一條第三項ニ移リ本項ハ何等ノ議論ヲ生セザリシヲ以テ該文案ハ確定セルモノト看做サレタリ
日本國提出案第一條第四項ハ「或ハ、ハ、ハ、ハ、ノ身体ヲ火葬スル」ト言ヘル語ノ挿入ヲ包含ス「マレヴズスキー、マ

レヴィッチ」氏ハ露西亜国政府ハ此ノ挿入ヲ諾セル旨ヲ声明セリ

第一條新項(第五)ノ討議ニ移リ日本國ノ提議ニ由レハ本項ハ左ノ如ク記載セラルルモノトス

農業及不動産ノ所有權ニ関スル各般ノ事項ニ付テハ露西亜國ニ於ケル日本國ノ臣民及日本國ニ於ケル露西亜國ノ臣民ハ最惠國ノ臣民又ハ人民ト同一ノ取扱ヲ受クヘキモノトス

「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ本項ハ二箇ノ觀念即チ第一、不動産所有權第二、農業ニ関スル事ヲ説示シ其ノ第一ニ関シテハ露西亜國全權委員ハ露西亜帝國ノ法律ニ拠レハ若干ノ制限ヲ除キ外國臣民ハ通則上特定若干地方及州ヲ除キ露西亜國ニ於テ不動産取得ノ權利ヲ有スルコトヲ認證シ為ニ露西亜帝國政府ハ此ノ便宜ヲ拳クテ又之ヲ日本國臣民ニ許セムト期セルモ露西亜國臣民ハ日本國ニ於テ同一ノ權利ヲ享有スルカヲ明知セムト欲シ此ノ目的ヲ以テ露西亜國全權委員ハ問題トナレル條款ニ對シテ「相互ノ條件ニ於テ」トノ語ヲ加ヘムコトヲ提議セリ此ノ附加ハ日本國ニ於ケル露西亜國臣民ニ對シテ不動産所有ノ權利ヲ保障スルヲ以テ目的ト為スモノニシテ氏ハ日本國全權委員

ヲ證示スルモノニシテ露西亜國ニ於テハ法律ノ制限ハ若干地方ニ関スルニ過キササルモ(※脱文アリ後掲)キハ外交上ノ協定カ其ノ目的トスル所果シテ如何ニ帰著スヘキカ氏ノ意見ニテハ凡ソ國際間ノ條約カ一タヒ調印セラレタルトキハ各締約國臣民ニ對シテ其ノ許与セラレタル權利ノ行使ト其ノ鞏固トヲ保障スルモノナリ千八百九十五年ノ條約ハ不動産ニ関スル條款ヲ包含セサルニ反シテ新條約ハ其ノ現草案ニ於テ日露兩國臣民相互ノ所有權ノ承認ニ関シ一歩ヲ進メタルカ如シ由是觀之日本國ハ露西亜國臣民ニ對シテハ同一ノ便宜ヲ保障スルコトナク日本國臣民ノ為ニノミ露西亜國ニ對シテ前記特典ヲ要求スルモノナリ極メテ現実ナル權利ヲ与フル條約ノ條約款ト來ルヘキ輿論ノ變更ニ関スル漠然タル希望トノ間ニ著大ナル差異アルヤ言フ俟タス提議條款カ承認セラレタル場合ニ於テ露西亜國ノ輿論ハ露西亜國ニ与ヘラレタル對価ノ何物タルカラ問フヘキヤ必セリ之ヲ要スルニ日本國ノ要求セル讓歩ハ露西亜國全權委員ノ所見ニ由レハ片務的性質ヲ有スルカ如ク然リ

本野氏ハ完全ナル對価ノ存セル事ヲ肯認シ以テ此ノ條款ナキトキハ日本國政府ハ露西亜國臣民ニ對シテ自余諸外國ニ許与セル權利ヲ拒否スルコトヲ得ヘク此ノ約款ニシテ削

員ニ對シテ日本國ノ法制カ之ト反對セサル場合ニ於テ此ノ保障ヲ確認セムコトヲ請ヘリ

本野氏ハ日本國ノ法制ニ於テハ不動産ヲ二種ニ區別シ第一、家屋第二、土地ト為シ日本國ニ於テ外國人之ヲ取得スルコトヲ得ルモ土地ノ購入ハ外國人ニ對シテ之ヲ許サズ此ノ問題ノ規定ハ内國法制ヲ以テ常ニ之ヲ日本國ニ留保セルカ故ニ露西亜國臣民ノ為ニ此ノ通則ニ對スル例外ヲ設ケムト主張スルコトハ不可能ナル事ニシテ所有權ニ関スル内國法制ヨリ之ヲ見レハ日本國ニ於ケル露西亜國臣民ハ自余各國臣民ト全然均等ノ地位ニ在リ日本國政府カ露西亜國ニ於ケル日本國臣民ノ為ニ求ムル所ノモノハ此ノ均等ノ待遇ニ在ル旨ヲ説示セリ

「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ此ノ點ニ関シ日露兩國ノ法制ヲ比較シ難キ旨ヲ説示シ其ノ基礎ト為ルヘキ原則ノ差異ハ甚著大ニシテ固ヨリ外國臣民ハ露西亜國ニ於テ此ノ點ニ付多少ノ制限ニ服從セリト雖通則上外國臣民ハ合法的ノ一切ノ方法ニ由リ各種ノ不動産取得ニ付テハ完全ナル全權ヲ有ス之ニ反シテ本野氏ノ説明ニ於ケルカ如ク日本國法制ハ明確ニ外國人ニ對シテ日本國ニ於ケル土地ノ取得ヲ禁セリ是レ日露兩國法制間所有權ニ関スル全然取扱ノ不均一

除セラルトキハ露西亜國臣民ハ自余諸外國人ニ比シテ劣等ナル境遇ニ立ツコトトナルヘク又露西亜國ニ於ケル日本國臣民ニ於テモ同様ノ事トス露西亜國政府ハ此ノ權能カ自余諸外國人ニ許与セラレタルニ拘ラス獨リ日本國臣民ニ對シテノミ若干地方ニ於ケル土地ノ所得ヲ禁スルコトヲ得ヘシ故ニ第一條第五項ノ規定ハ優ニ其ノ存在ノ理由ヲ有シ日露兩國臣民ニ對シ最惠國民ノ取扱ヲ保障スルモノナリ加之露西亜國ニ於ケル日本人及日本國ニ於ケル露西亜人間ニ於ケル土地所有權ニ関シテ露西亜國全權委員カ主張スル所ノ不均等ハ又事實上存セサルモノナリ日本人ハ昔時黒龍江諸州ニ於テ土地ヲ取得スルコトヲ得タリシモ今ヤ此ノ取得ハ日本人ニ禁止セラレタルコトト為レルカ故ニ日本國臣民カ最入込ミ易キ露西亜國ノ地方ニ於テ日本國臣民ハ既ニ土地ヲ買得スルコトヲ得ス日本國全權委員ハ日本人カ土地ノ取得上最大利益ヲ有スルハ正ニ歐羅巴露西亜ニ非ス從テ法律上ヨリ觀察スルモ亦事實上ヨリ觀察スルモ日露兩國各臣民ノ境遇上何等不均等ノ存スルヲ見スト

「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ先ツ露西亜國ノ法律ハ例外ナク一切ノ外國人ニ對シ黒龍江地方ニ於ケル不動産ノ取得ヲ一般ニ禁セルコトヲ説示シ而シテ日本國全權委員

カ引證セル各場合ニ付教示セラレムコトヲ欲シ本野氏カ説述セル取得ノ事ハ禁止法ノ發布以前ノ時期ニ関スルモノナリト推定シ外人ニ対シテ露西亜国ニ於ケル土地ノ取得ヲ許可セル一般規定ニ付テハ立法者カ此ノ権能ヲ外人ニ許与シ以テ在外露西亜国人ノ為ニ完全ニ之ヲ相互的トナスヘントノ推定ニ拠レルモノナル事ハ争フヘカラサルコトナルヘシト為セリ

本野氏ハ黒龍江地方ニ於ケル日本人取得ノ土地ニ関シ正確ナル説明書ヲ示スヘキコトヲ約セリ但シ本件ノ規定ハ保持セラレムコトヲ固執シ露西亜国全権委員ニ対シテ満足スヘキ方法ヲ以テ之カ解決ヲ為サムカガニ本件ヲ再議セムコトヲ請求シタリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ追テ此ノ討議ヲ再開スヘキコトヲ約シ本項ニ掲ケタル「農業」ト言ヘル字句ノ討議ニ移ラムコトヲ提議シ其ノ範圍ト正確ナル意義トヲ質問シタリ

本野氏ハ「農業」ナル文字ハ単ニ農事産業ヲ謂フモノニシテ即チ特ニ露西亜国ニ於ケル日本人及日本国ニ於ケル露西亜国人ノ為ニ其ノ耕作上ノ借地権ヲ許スルモノナルコトヲ確言セリ

本野氏ハ日本国ニ於ケル不動産ノ所有ハ此ノ事案ノミニ依リテ何等人の兵役ノ義務ヲ生セス從テ兵役ノ原則ハ兩國互ニ相同シキコトヲ肯認セリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ此ノ声明ヲ領シ旧日露條約中ニ使用セル「内国臣民」ナル文字ニ冠セル「一般ノ」ナル文字ヲ削リ「不動産ノ賃借者」ノ文字ヲ以テ「土地若ハ建物ノ占有者」ナル文字ニ代ヘムコトヲ提議シタリ

第二條第一項ハ修正ヲ加フル所ナシ
同條第二項ノ朗読後「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ露西亜国政府ハ日本国ノ提議ニ基キ「各種ノ工業又ハ手工業」及「営業ニ従事ス」ナル文字ヲ本項ニ挿入スルノ異議ナキ旨ヲ声明シ同時ニ氏ハ右「各種ノ工業又ハ手工業」ナル文字ノ前ニ「總テ其ノ」國ノ法律、規則及命令ニ遵由シテ「ナル文字ヲ加ヘムト提議シタリ此ノ修正ハ例ヘハ特ニ内国臣民ニ留保セル採鋳業ノ如キ工業カ露国ニ存スルカ故ニ其ノ必要アルモノノ如シト為セリ

本野氏ハ露西亜国全権委員カ提示セル留保ハ既ニ本項ノ終リニ存セルコトヲ説示シ從テ此ノ如キ字句ノ重複ハ不必要ト看做セリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ從來本野氏ト同一ノ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ條約案第二條ニ掲ケタル「各種ノ産業」ナル文字ニ付本野氏ノ注意ヲ喚起シ之ヲ以テ農事産業ニ関スルモノトスルトキハ何カ故ニ「農業」ナル文字ヲ第一條ニ掲ケタルカ本野氏ニ対シテ其ノ補足的説明ヲ提示セムコトヲ求メタリ

第六項及第七項ノ朗読ニ移レリ修正ヲ加フル所ナシ
日本国提出案第一條第八項ノ討議ニ移レリ其ノ條文ハ次ノ如シ「前記ノ免除ハ不動産ノ所有ニ付著スル所ノ賦課金及一般ノ内国臣民カ土地所有者、農業者又ハ土地若ハ建物ノ占有者トシテ負担スルコトアルヘキ軍事上ノ賦役及徵發ヲ包含セサルモノトス」

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ之ト同一ノ例外ハ露獨條約及露境洪條約中ニモ亦存セルコトヲ證言シ從テ日本国ニ於ケル兵役ノ性質確定セラルルトキハ露西亜帝国政府ハ本條約ニ於ケル此ノ規定ノ附加ヲ承認スルニ付不都合アルコトヲ見サルヘク露西亜国ニ於ケル兵役ハ専ラ人的ノモノニシテ本文ノ留保ハ宿舎、馬匹、輸送方法ノ供給ニ関スルニ過キスシテ毫モ軍隊内ノ役務ヲ規定セルモノニ非ス此ノ如キ原則ハ日本国ニ於テモ亦之ヲ採用セルヤ否ヤヲ知ルコトヲ要ス

感ヲ抱キタリシモ偶々本項條文ノ調査ヲ為スヤ其ノ意見ヲ變更スルコトト為レリ蓋シ本項ハ一箇ノ句讀ニ依リテ分割セラレタル二箇ノ部分ヲ包含シ其ノ第一ハ手工業ニ従事シ及商業ヲ営ムノ権利ヲ包含シ其ノ第二ハ特ニ不動産ノ所有及賃借ノ権利ヲ規定スルモノニシテ旧文言ノ留保カ關係スル所ノモノハ此ノ第二ノ部分ニ過キス

本野氏ハ第二讀會ニ於テ修正案ニ對スル確定的回答ヲ為スヘキ旨ヲ約セリ

第二條第三項ノ討議ニ移レリ本項ハ千八百九十五年ノ條約文ト同一ナルカ故ニ直ニ可決セラレタリ

露西亜国全権委員ハ露西亜国政府ハ第二條ノ末項ニ日本国政府カ提議セル「及衛生ニ関スル」及「現ニ行ハレ又ハ行ハルルコトアルヘキ」ナル文字ヲ挿入スルコトニ付何等支障ノ存セサルコトヲ声明シタリ

露西亜国全権委員ハ第三條第一項ニ掲ケタル「若ハ工業ノ為ニ」ナル文字ニ付テモ亦同様ノ声明ヲ為セリ

本條第二項ハ何等修正ヲ加フル所ナシ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ千九百四年ノ独逸國（第六條）千九百五年ノ仏蘭西國（第十四條）千九百六年ノ墺地利洪牙利國（第二條）千九百六年ノ「ルーマニー」

國及「ブルガリー」國ト露西亞國トノ新通商條約ニ採用セル最惠國條款ノ文例ニ依リ第四條ノ最初ノ二項ヲ修正セムコトヲ提議シタリ而シテ本項ハ左ノ如ク前記各條約中ニ記載セラレタリ

、、、、ニ輸入セラルヘキ露西亞國ノ土地若ハ工業ノ生産物及露西亞國ニ輸入セラルヘキ、、、、ノ土地若ハ工業ノ生産物ニシテ或ハ消費或ハ入庫或ハ再輸出又ハ通過ニ供セラルヘキモノハ最惠國ノ生産物ト同様ノ取扱ヲ受クヘク如何ナル場合ニ於テモ亦如何ナル理由ニ依ルモ該生産物ハ一層高額ナルカ又ハ他ノ種類ノ課税ヲ課セラルルコトナク又他國ノ同種生産物カ負担セサル附加税又ハ禁止ヲ被ラサルヘシ殊ニ總テノ殊遇若ハ便宜、締約國ノ一方カ永久又ハ一時ノ名義ヲ以テ無償又ハ相殺ヲ以テ第三國ニ許与スヘキ一般税率又ハ協定税率ニ規定セル輸入税ノ免除及軽減ハ即時且條件、留保又ハ相殺ナク他ノ一方ノ土地若ハ工業ノ生産物ニ適用セラルヘシ此ノ新文言ハ最惠國ノ取扱ニ付最完全ナル定義ヲ与ヘタルモノニシテ露西亞帝國政府ノ意見ニ於テハ新文言ニ依リテ既ニ多少無効ト為リタル旧文言ヲ修正スルニ若カス本野氏ハ此ノ提議セラレタル文言ヲ調査シ日本國政府ノ訓

視料以外ニ何等關稅ヲ納附スルノ義務ヲ有スルコトナシ
第二ニ露西亞國全權委員ハ下ノ説示ヲ為シテ曰ク旧條約第十條ハ現條約案ト相隣離セル最終ノ一項ヲ包含シ露西亞國船舶ニ對シテ特定三港以外ノ日本帝國諸開港間ニ其ノ荷物輸送ノ權利ヲ保障セリ露西亞帝國ハ將ニ締結スヘキ新條約ニ於テモ亦此規定ヲ保存セムコトヲ欲ス日本國カ英独仏各國ニ對シ其ノ現行條約ニ從ヒ此ノ殊遇ヲ与フルモノトセハ從來露西亞國船舶ニ許与シタル此ノ權能ノ確認ハ總テノ點ニ於テ最惠國取扱ノ原則ニ適合セルモノニシテ露西亞國カ此ノ殊遇ノ享有ヲ除外セラルトキハ將ニ締結スヘキ條約ノ基礎ト為ルヘキ千八百九十五年ノ日露旧條約ノ原則ニ對シテ重大ナル侵害ヲ及ホスヘキモノナリト

本野氏ハ條約案第十四條ニ付日本國政府カ提議セル「船舶ニ」ノ文字ノ附加ニ依レル末項ノ除去ヲ説明シ此ノ文字ノ挿入ハ通商航海ニ關スル一切ノ事項ニ付最惠國條款ノ適用ヲ保障スルモノナルカ故ニ日本國政府ハ本條約ニ於ケル缺文ノ記入ヲ以テ不必要ト看做セリ且本野氏ハ次回ノ會議ニ於テ此ノ點ニ付之カ詳説ヲ為サムトスル旨ヲ聲明セリ

「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ日本國全權委員ノ此ノ誓約ヲ領シ條約案第十四條ニ掲クル「船舶ニ」ナル文字ノ挿入ハ最惠國條款ニ拠リ露西亞國船舶ニ對シ他諸外國ノ

令ニ接シタル後其ノ回答ヲ為スヘキコトヲ約セリ
本條約案ニ關スル經濟上ノ條件ニ關シ補足的説明書ノ接受ニ至ル迄第四條末項ノ討論ヲ延期セムトノ「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ノ請求ニ基キ本項ノ討論ヲ中止シタリ
第五條ノ討論ニ移レリ其ノ文言ハ千八百九十五年ノ條約ニ於ケル同條ノ文言ト異ル所ナキカ故ニ本條ハ確定可決セラレタリ

露西亞國全權委員ハ條約案第六條ハ露西亞國政府ノ承認スル所ト為レル旨ヲ聲明セリ
第七條ノ討論ニ移レリ毫モ修正ヲ加フル所ナシ而シテ露西亞國全權委員ハ條約ノ條文中ニ於ケル交互ノ注意ニ關シ一般の説明ヲ為セリ此ノ留保ヲ除キ第七條ハ確定可決セラレタリ
第八條及第九條ノ文言モ「一方ノ」ナル文字ノ挿入ヲ以テ亦確定可決セラレタリ
第十條ニ付テハ露西亞國全權委員ニ於テ下記ノ陳述ヲ為セリ即チ「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ先ツ最近ノ露西亞通商條約第十五條ニ掲ケタル留保ヲ以テ本條第二項ヲ補修セムコトヲ提議セリ此ノ留保ノ文言ハ次ノ如シ「獨逸國ハ其ノ荷物ニ付内國航海定率ノ外徴収セラルルコトナキ監

船舶ニ与ヘタル許可ヲ保障スルモノトシテ解釈スヘキコトヲ説示セリ然レトモ氏ハ條約ノ條文中ニ特定セル權利ト單純ナル解釈ニ基ケル殊遇ノ享有トノ間ニ大差ノ存スヘキ事ヲ證明セリ
第十一條第一項第二項第三項第四項及第五項ハ修正ヲ加フル所ナク「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ日本國政府カ本條第六項ニ加ヘタル修正ハ露西亞國政府之ヲ承認セル旨ヲ聲明シタリ

第十二條第一項ハ旧條約ノ文面ヲ保存シタルモノナルカ故ニ第二項ノ討論ニ移レリ本項ハ日本國提出案ニ於テ下ノ如ク記載セラレタリ「日本國ノ現行法律ニ從ヒ作成シタル日本國船舶積量測定證書及露西亞國ノ現行法律ニ從ヒ作成シタル露西亞國船舶積量測定證書ハ日本國及露西亞國ノ諸港ニ於テ更ニ測定ヲ為スコトナクシテ承認セラルヘキモノトス」

「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ固ヨリ兩國ノ利益上成ルヘク船舶積量測定ニ關スル稅關ノ手續ヲ簡單ニスヘキコトヲ認ムト雖兩國船舶積量測定方法ノ差異ハ其ノ測定書承認ノ為ニ特別ナル協定ヲ必要トス此ノ種ノ條約ハ既ニ露西亞國ト各外國トノ間ニ締結セラレタルモノニシテ露西亞

國政府ハ日本國ニ對シテモ又此ノ如キ取極ヲ締結セムト欲ス目下唯條約文中ニ此ノ如キ専門的協定ノ將來ノ締結ヲ確認スヘキ特別ナル一項ヲ記入セムト欲ス此ノ條項ハ千九百六年ノ露西亞國及塊地利洪牙利國間通商條約第十六條ニ拠リ下ノ如ク記載セラルルコトアルヘシ「兩締約國ノ一方ヨリ交付シタル船舶積量測定證書ハ追テ兩國間ニ協定スヘキ特別ノ取極ニ依リ他ノ一方ニ於テ之ヲ承認スヘシ」

露西亞國全權委員ノ請求ニ基キ通商局長「アレキセイエツフ」氏ハ船舶登簿噸數算定制度ノ一致セサルカ為積量測定證書承認上通商條約ト獨立セル別異ノ取極ヲ必要トスル旨ヲ確認セリ

第十三條ハ何等文言ノ修正ナキニ依リ確定可決セルモノト認メラレタリ

露西亞國全權委員ハ露西亞國政府カ日本國政府ノ提議ニ係ル「工業及手工業」及後段「船舶ニ」、「船舶ニ」及「及工業」ナル文字ヲ第十四條ニ記入スルコトニ付何等支障ヲ見サル旨ヲ聲明セリ但シ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ「手工業」ナル文字ヲ複數ニ為スニ若カスト思考セリ此ノ提議ハ日本國全權委員ニ依リテ承認セラレ日本國全權委員モ亦「領事代」ナル簽字ヲ第十五條第一項ヨリ削除ス

正ヲ承認シ其ノ提議セル文言ヲ調査スヘキ旨ヲ誓約セリ商標及特許ニ關スル草案第十六條ノ討議ニ移レリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ千八百九十五年ノ旧條約ニ於ケル此ノ規定ヲ保持スルニ付總テ異議ヲ有セサル旨ヲ聲明シ千八百九十五年五月二十七日ノ議定書第四ノ文言ニ拠リ本條ヲ補正スルノ必要ニ付本野氏ノ注意ヲ喚起セリ實際本項ハ日本國ニ對シ露西亞國ト工業及商業所有權相互ノ保護ニ關スル特別條約ヲ締結スルノ義務ヲ課セルモノナルモ此ノ規定ハ竟ニ効力ヲ生セス為ニ外國ノ特許、商標、意匠ノ保護ハ果シテ日本國ニ於テ法律ニ拠リテ保障セラルルカヲ知悉セサルヘカラス其ノ保護セラレサル場合ニ於テハ千八百九十五年五月二十七日ノ議定書第四ニ基キ作成セル第二項ニ拠リテ第十六條ヲ補正セサルヘカラス即チ本項ハ下ノ如ク記載セラルヘキモノトス「兩締約國ハ成ルヘク速ニ工業及商業所有權ノ保護ニ關シ相互條件ヲ基礎トシテ一ノ條約ヲ締結セムカ為談判ヲ開クコトヲ約ス」

本野氏ハ日本國政府ハ議定書第四ニ掲クル特別協定ノ締結ニ付屢々露西亞國政府ニ通知シタルモ露西亞國政府ハ此ノ提議ヲ排斥シタリ故ニ日本國政府ハ議定書第四ノ文言ヲ削除スヘキモノト信シタリ而シテ日本國政府ハ露西亞國政府

ルニ付何等ノ支障ヲ見スト為セリ

本條第二項及第三項ハ其ノ第三項中ニ「相互ノ條件ヲ以テ執行シ」及「及職權」ノ文字ノ挿入ヲ以テ會議ニ於テ可決ト聲明セラレタリ

兩國全權委員ハ雙方ノ領事館ノ職權ヲ明確ナラシムルノ必要上兩國間領事條約締結ノ機會ニ關シテ多少ノ意見ヲ交換セリ

第十五條新第四項ヲ再度朗誦シタル結果檢閱ニ關シ兩國外交官及正式領事官ノ取扱均等ニ為スコトニ關スル問題ヲ生シ露西亞國全權委員ハ此ノ點ニ關シ日本國法制ノ提示ヲ望ミ露西亞帝國政府ハ露西亞國ニ駐在セル外交官及領事官ニ對シ既ニ独逸國仏蘭西國及塊地利洪牙利國ノ外交官及領事官ニ對シテ許与セル檢閱上ノ免許ヲ許与スルニ付何等支障ヲ見サル旨ヲ確認シタリ但シ前記讓与ハ相互ノ條件ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ為スコトヲ得ス此ノ目的ニ於テ露西亞國全權委員ハ下記ノ文言ヲ以テ本項ヲ記載セムコトヲ提議セリ「締約國ノ一方カ他ノ一方ノ版圖内ニ派遣セル外交官及正式領事官ハ新聞雜誌並學術、技藝及文學ノ著作物ノ檢閱ニ關シ相互ノ條件ヲ以テ完全ナル自由ヲ享有スヘシ」日本國全權委員ハ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ノ修

ニシテ其ノ從前ノ態度ニ復スルトキハ此ノ點ニ付其ノ談判ヲ妨礙スヘキ異議ヲ有スルコトアルヘシト信セサル旨ヲ說示セリ

露西亞國全權委員ノ請求ニ依リ商工務省參事官「ランゴヴォエ」氏ハ露西亞國商人ハ常ニ特許及商標ノ保護ニ付日本國ト取極ノ存立セムコトヲ希望セルコトノ證明者ト為リ本野氏カ基礎トセル日本國ノ提議ニ關シ何等聞知スル所ナシトセリ

此ノ意見ノ交換後本項ノ討議ハ之ヲ次回ノ會議ニ延期シタリ條約案第十七條ノ討議ニ移ルニ臨ミ露西亞國全權委員ハ千八百九十五年ノ條約第十七條ニ關シ本野氏ノ注意ヲ喚起セリ本條ハ日本國ノ市区ニ編入セラレタル外國人居留地ニ於ケル永代借地ニ關スルモノニシテ本條中ノ或規定ハ全ク其ノ必要ヲ有シ此ノ規定ヲ删除スルトキハ露西亞國ノ利益ニ對シ重大ナル危害ヲ加フルニ至ルヘシ殊ニ永代借地券ノ確認及無借料ニテ既ニ貸与シタル各地所ノ免稅ニ關スルモノニシテ新通商條約ハ前記規定カ日本國ト諸外國トノ間ニ締結セル他ノ數多ノ條約中ニ存スルトキハ益前記規定ヲ保存セサルヘカラサルモノトス

本野氏ハ千八百九十四年、千八百九十五年及千八百九十六年ニ於テ日本國力縮結セル諸條約中ニ前記條文ヲ挿入セシ理由ハ當時日本國力過渡の事情ノ下ニ在リシカ為ナル事ヲ說明シ此ノ事情ハ今ヤ既ニ経過シテ了リ現條約中ニ此ノ如キ規定ヲ保持スヘキ現実的理由ナシト為セリ

「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ旧條約第十七條ノ全文ヲ保持セムト提議スルニ非ス唯永代借地券ノ確認及無借料ニテ既ニ貸与シタル各地所ノ免税ニ関スル本條ノ規定ヲ保持セムト欲スル旨ヲ弁明シ一切ノ留保ヲ以テ下ノ如キ旧第十七條ノ新文言ヲ會議ニ提出スルコトヲ得ヘシト信シタリ「日本帝國政府ハ日本國ノ市区ニ編入セル旧外國人居留地ニ於ケル永代借地券ヲ確認シ右借地券ニ載セタル條件ノ外ハ此ノ財産ニ関シテ別ニ何等ノ條件ヲ附セサルヘシ前記外國人居留地公共ノ目的ノ為ニ日本國政府ヨリ無借料ニテ既ニ貸与シタル各地所ハ永代ニ免税セラルヘシ且該地所ニシテ最初貸与シタルトキノ如ク公共ノ目的ニ使用セラル限ハ總テノ公課ヲ免スヘシ但シ土地收用權ニハ從フヘキモノトス」

本野氏ハ此ノ修正ニ付テハ調査ヲ為シ而シテ次回ノ會議ニ

附屬書

露西亞國政府修正摘要書

第一條第二項

司法事項ニ關スル日本國提出案第一條第二項ニハ「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文字ヲ挿入シアリ此ノ挿入ハ本野閣下送附ノ說明書中ニ明カナルカ如ク司法上ノ自由、權利及特典ハ兩締約國ノ一方ニ依リ同様ニ許与セラレタルニ非サレハ他ノ一方ノ臣民ニ對シテ許与セラレストノ意義ニ於テ本項ヲ明定セムトノ目的ヲ以テ提議セラレタルモノニシテ第一、說明書ニ提議セル該條文ノ解釈ハ第二項ノ一般意義ト牴觸セルカ如ク見ユルコトヲ注意スルコトヲ要ス蓋シ本項ノ規定ニ依レハ「兩締約國一方ノ臣民カ享有セル司法上ノ一切ノ權利及特典」ハ他ノ一方ノ臣民ニ對シテモ均シク許与セララルヲ以テ前記ノ解釈ハ此ノ完全ナル權利ノ享有ニ對シテ制限ヲ附スルモノナレハナリ提案ニ依レハ千八百九十五年ノ條約ニ規定セル司法上ノ權利ハ相互ノ臣民ニ与ヘラルモノニ非ス唯互ニ許与セララルコトアルヘキ權利ニ限り之カ許与ヲ為スモノトス果シテ之ヲ以テ日本國政府ノ意思ナリトセハ必スヤ自國臣民待遇ノ主義ニ基ケル第二項ノ文言ハ全部之ヲ修正セサルヘカラス

於テ其ノ確定的意見ヲ回答スヘキコトヲ約セリ

露西亞國全權委員ハ日本國政府ノ說明書ニ抛リ第一、露西亞帝國政府ハ條約ノ施行期ヲ二箇月ト定ムヘキ旨ヲ提議シ第二、露西亞國政府ハ本條ノ案文ヲ改メテ最近露西亞國全三條ニ使用セル文言ノ如クスルニ如カスト為シ露西亞國全權委員ノ請求ニ基キ商務局長「ブリレジャイエッフ」氏ハ將ニ締結スヘキ條約ニ掲クヘキ確定期日ニ付テ疑義ヲ挿ミ協定セル施行期ハ千九百十一年ニ在リト推定スル旨ヲ述ヘ此ノ問題ハ未タ充分ニ明確ニセラレタルニアラス而シテ露西亞國全權委員ハ之ヲ後日ノ討議ニ附スヘキコトヲ請求シ次ニ露西亞國政府ハ條約案第十八條ノ新文言ヲ承認セル旨ヲ聲明セリ

日程終了シタルヲ以テ會議ハ其ノ議事ヲ擧ケテ之ヲ次回ノ會議ニ附スルコトヲ為セリ前記討議諸條ニ對スル露西亞國政府修正案摘要書（附屬書参照）ハ會議ノ終ニ於テ之ヲ日本國全權委員ニ交付シ午後六時三十分ヲ以テ散會セリ

本 野 郎（記名）

「エヌ、マレヴスキ、マレヴィッチ」（記名）

第二、又締約國雙方ノ法制ノ差異ヲ思量セサルヘカラス締約國雙方各々其ノ自國ノ慣習ニ基因セル特別訴訟法ヲ有スルカ故ニ露西亞國ノ裁判所ニ對シテ日本國ノ裁判所カ露西亞國ノ臣民ニ對シテ許与スルコトヲ得ヘキモノト同一ノ便宜ヲ日本國臣民ニ對シテ許与スヘシト主張スルコト難シ例ヘハ日本國ノ法制ハ露西亞國ノ法制ニ於テ認許セル「訴訟上ノ救助ヲ受クルノ權」ヲ認メサルモノトセハ日本國裁判所ニ出訴スル露西亞國臣民ニ對シテ之カ適用ヲ為スヘシト主張スルコト能ハサルヘク之ト同様ニ露西亞國裁判所ニ出訴スル日本國臣民ニ對スル場合ニ付テモ亦同シ

第一條第二項ハ千八百九十五年ノ條約ニ規定セラレタルカ如ク露西亞國ニ於ケル日本國臣民及日本國ニ於ケル露西亞國臣民ニ對シテ司法上單純ニ自國臣民ト同様ノ權利ヲ許与セリ此ノ規定ヲ存スルコトハ或ハ兩國ノ利益ニ適合セルモノナルヘク且此ノ規定ハ概シテ此ノ種條約ノ大半即チ露英條約第十二條露獨條約第二條露仏條約第二條ニ於テ採用セラレタルモノナリ

日本國政府カ提議セル修正ハ實際著大ナル困難ヲ生スルノ虞ナキニ非ス蓋シ特別ナル場合ニ於テ露西亞國ニ於ケル日本國臣民又ハ日本國ニ於ケル露西亞國臣民ニ對シ一定ノ司

法上ノ便宜ヲ許スルニ先チ管轄裁判所ハ之ト同様ノ便宜
カ兩締約國ノ一方ニ於ケル自國臣民ニ對シテ許与セラルル
モノナルヤ否ヲ確メサルヘカラス之ヲ要スルニ日本國政府
ノ此ノ提議ノ正確ナル意義ニ付更ニ詳密ナル説明ヲ得ムコ
トヲ欲ス

第一條第五項

日本國政府ハ第一條中ニ新タナル一項(第五項)ヲ加ヘタ
リ其ノ文言ハ次ノ如シ「農業及不動産ノ所有權ニ關スル各
般ノ事項ニ關シテハ露西亞國ニ於ケル日本國臣民及日本國
ニ於ケル露西亞國臣民ハ最惠國ノ臣民或ハ人民ト均等ノ取
扱ヲ受クヘキモノトス」

此ノ附加ハ説明書ニ述ヘアルカ如ク農業及不動産所有權ニ
關シ露國ニ於ケル日本國臣民ニ對シテ最惠國條款ヲ以テ保
障セムトスルニ在リ

露西亞國ノ根本法ニ依レハ若干ノ制限ヲ除キ外國臣民ハ特
定ノ或地方ヲ除キ通則上露西亞國ニ於テ不動産取得ノ權利
ヲ有ス故ニ日本帝國ノ臣民ニ對シ此ノ權能ヲ許与スルニ付
何等支障ノ在ルヲ見ス然ルニ本文ニ於テハ日本國政府ハ自
國臣民ノ為ニ露西亞國ニ於テ不動産所有ノ權利ヲ要求スル
モ露西亞國臣民ニ對シテハ同一ノ權利ヲ保障スルコトヲ得
ルカ詳言セハ日本國提出案ノ規定ハ露西亞國臣民ニ對シ日

本國ノ版図内ニ於テ不動産所有權取得ノ權利ヲ与フルモノ
ナルカ果シテ然リトセハ「相互ノ條件」ナル文字ヲ挿入シ
以テ本項ノ規定ヲ承認スルニ付固ヨリ何等ノ困難ヲ有セス
之ヲ要スルニ此ノ取扱ノ均等ハ雙方互ニ設定セラルヘキヲ
正當トス本項中ニ挿入セル「農業」ナル文字ニ付テハ日本
國政府カ此ノ文字ニ如何ナル範圍ヲ与ヘタルカヲ知ラムト
欲ス日本國政府ノ説明書ニハ此ノ文字ノ正確ナル意義ヲ明
示セス單ニ田畑ノ労働又ハ土地ノ耕作ニ關スルモノナルカ
露西亞國ト諸外國トノ諸通商航海條約ニハ農業又ハ土地ノ
耕作ニ關スル何等特別ノ規定ヲ包含セス故ニ兩締約國ノ為
ニ此ノ文字ノ包含セル明了ナル意義ヲ知悉セスシテ將ニ縮
結スヘキ條約中ニ此ノ如キ新用語ヲ挿入スルハ難事ト為サ
サルヲ得ス

第一條第八項

本條ハ兵役及之ニ代ハルヘキ賦課金ニ關シテ前諸項ニ規定
セル免除ニ關スル留保ノ場合ヲ掲ケタリ此ノ留保ハ日本國
政府ノ説明書ニ於テ承認スルカ如ク日壤通商條約ヨリ採リ
來レルモノニシテ又露國條約及露獨條約中ニモ存スルモノ
ナリ故ニ露西亞國政府ハ果シテ日露兩國兵役ノ原則カ同一
ナルコト確実ナルトキハ本項ノ挿入ヲ承認スルニ付異議ヲ

ナリ

第二條第四項

有セサルヘシ露西亞國ニ於テハ總テ獨逸國及壤地利洪牙利
國ニ於ケルカ如ク其ノ兵役ハ本人專屬ノ性質ヲ有シ如何ナ
ル方法ニ於テモ土地ノ所有ニ關係セス土地ノ所有ニ附著セ
ル軍事上ノ負担ハ露西亞國ニ於テハ上記諸國ニ於ケルカ如
ク宿舎、馬匹、輸送方法等ノ供給ニ限レルモノニシテ如何
ナル方法ニ於テモ入隊服役ヲ為スモノニ非ス日本國ノ法律
ハ果シテ此ノ原則ニ合致セルモノナルカ或ハ不動産ノ所有
ハ人身的服役ノ義務ヲ包含スルカ本野閣下ノ説明書ハ此ノ
点ニ付何等ノ説明ヲ与ヘス
本項ノ字句ニ付テハ「臣民」ノ前ノ「總テ」ノ文字ヲ除去
シ「土地又ハ建物ノ保有者」ハ「不動産ノ賃借者」ト改メ
ムコトヲ希望ス是レ最近ノ露獨條約ニ使用セル用語ナリ

第二條第二項

日本國政府ハ第二條第二項中ニ「總テノ工業若ハ手工業」
ナル字句竝「營業」ナル文字ヲ挿入セムト提議セリ
露西亞國政府ハ此ノ修正ヲ承認スルニ付異議ヲ有セスト雖
「總テ其ノ國ノ法律、命令及規則ニ遵守シテ」ナル文字ヲ
上記第一ノ修正字句ノ前ニ置カムト欲ス此ノ修正ハ露西亞
國ニ於テハ手工業及例ヘハ特ニ自國臣民ノミニ留保セル採
斂業ノ如キ工業ノ存スルアルカ故ニ其ノ必要ヲ認ムルモノ

第二條第四項ハ日本國提出案ノ文言ニ依レハ「及衛生」及
「現ニ行ハレ又ハ行ハルルコトアルヘキ」ノ文字ニ依リテ
修正セラレタルモノナリ露西亞帝國政府ハ此ノ修正ヲ承認
スルト同時ニ更ラニ法律、命令及規則ノ列挙中ニ「工業、
手工業、職業」ノ文字ヲ加ヘ以テ本條ヲ補正セムト欲ス
此ノ修正ノ文字ハ日本國政府カ本條第二項中ニ加ヘムト欲
シタル用語ヲ思量セルモノナリ蓋シ各種手工業及職業又ハ
工業ニ從事スルノ自由カ兩締約國ノ臣民ニ對シ相互ニ保障
セラレタル以上ハ商業、警察、公安及衛生ニ關スルノミナ
ラス工業、手工業及職業ニ關シテモ亦法律ニ遵守スヘキコ
トヲ本條ニ於テ規定スルコトヲ必要ト為セハナリ

第四條第一項及第二項

第四條及殊ニ其初ノ二項ハ千八百九十五年ノ條約ト同一ノ
文言ヲ以テ最惠國條款ヲ規定スルモノナリ露西亞帝國政府
ハ此ノ規定ノ根本ニ觸接スルコトナク千九百四年ノ露獨新
通商條約ニ用キタル最惠國條款ノ文例ヲ以テ此ノ二項ノ文
言ニ代ヘムコトノ提議ヲ為スヘキモノト信ス此ノ規定ニ關
スル露獨條約第四條ノ文言ハ次ノ如シ「獨逸國ニ輸入セラ

ルヘキ露西亞國ノ生産物及製造品並露西亞國ニ輸入セラルヘキ独逸國ノ生産物及製造品ニシテ消費、保税倉庫、再輸出又ハ通過ニ係ルモノハ最惠國ノ物品ト同一ノ取扱ヲ受ケ如何ナル場合ニ於テモ且如何ナル事由ニ依ルモ總テ別國ノ同種物品ニ課スル所ノ税ヨリ高額ナルカ又ハ之ト異レル料金、課税又ハ賦課金ヲ課セラルコトナク又總テ別國ノ同種物品カ被ルコトナキ附加税又ハ禁止ヲ受クルコトナカルヘシ殊ニ兩締約國ノ一方カ第三國ニ對シ永久又ハ一時、無償又ハ有償ノ名義ヲ以テ許与スヘキ總テノ便宜、一般税率又ハ協定税率ニ規定セル輸入税ノ免除及減額ハ他ノ一方ノ生産物及製造品ニ對シ速時且無條件、無留保又ハ無償ヲ以テ之ヲ適用スヘキモノトス

此ノ規定ハ最惠國ノ取扱ニ付最詳密且最完全ナル査定ヲ与フルモノニシテ之ト同一ノ文言ヲ以テ將ニ締結スヘキ條約ノ本條ヲ作成スルコトヲ要ス此ノ如キハ最大注意ヲ以テ作成シタル同一ノ規定カ既ニ雙方ノ承認ヲ得以テ千九百四年以來露西亞國ト下記諸國トノ間ニ締結セル新通商規定中ニ掲ケラレタルカ故ニ此ノ如キ規定ハ最善ク時宜ニ適セルモノナリ即チ千九百五年ニ於テ仏蘭西國(第十四條)千九百六年ニ於テ埃地利洪牙利國(第二條)及千九百六年ニ於テ

カ條約案中ヨリ本項ヲ削除シタル理由ノ說明ナシ然ルニ日本國諸開港間ニ其ノ荷物ヲ輸送スルノ權能ハ英吉利國ニ對シテハ千八百九十四年ノ條約(第十一條)ニ依リ独逸國ニ對シテハ千八百九十六年ノ條約(第十三條)ニ依リ仏蘭西國ニ對シテハ千八百九十六年ノ條約(第十二條)ニ依リ日本國ハ皆之ヲ許与セルコトヲ省ミサルヘカラス而シテ此ノ諸條約ハ現ニ今尙施行セラレ以テ千九百十一年ニ至ル迄其ノ效力ヲ繼續スヘキモノナリ日露新條約モ亦同一ノ期限ヲ有スルモノナルカ故ニ上記各國ニ對スル日本國ノ諸條約ト同時ニ適用セラレサルヘカラス然ラハ則チ露西亞國船舶ニ對シ諸別國ノ船舶ニ對シテ許与セル此ノ權能ヲ拒否スルハ全然最惠國ノ主義ニ違背スルモノト謂ハサルヘカラス日本國政府カ條約案第十四條ニ提議セル「船舶ニ」ノ文字ノ挿入ハ最惠國條款ニ依リ露西亞國船舶ニ對シテ日本國ニ於ケル諸別國ノ船舶ニ許与シタルト同一ノ特權ヲ保障スルモノトシテ解釈セサルヘカラス但シ國際間ノ協定ヲ以テ特定セル權利ト單純ナル解釈ニ基ケル殊遇ノ享有トノ間顯著ナル差異ノ存スルモノアリ

且日露通商航海新條約ハ兩國交戦以前ニ施行セル旧通商規定ヲ以テ基礎ト為スヘキコトハ明カニ「ポーツマス」條約

「ルーマニ」國等はナリ故ニ專ラ最惠國ノ取扱ヲ基礎トスル日露新條約ニ於テモ又此ノ字句ヲ襲踏スルヲ可トス露西亞帝國政府ハ日本帝國政府カ新ニ採用セル字句ヲ以テ既ニ多少旧式ニ屬セル以前ノ字句ニ代ユルニ付何等異議ヲ有セザラムコトヲ希望ス

第十條第一項及第二項

第十條第一項及第二項ニ修正ヲ加フル所ナシ但シ露西亞帝國政府ハ「其ノ荷物ノ此ノ終リノ部分ニ付テハ自國船舶ニ對シテ定メタル税率ノ外徵收セララルコトナカルヘク且監視料ノ外其ノ荷物ニ付何等關稅ヲ払フコトナカルヘシ」トノ文字ヲ加ヘ以テ第二項ヲ修正セムコトヲ提議ス此ノ規定ハ露獨新通商條約第十五條ニ存スルモノニシテ其ノ目的ハ兩締約國ノ通商航海ヲ容易ナラシムルニ在リ故ニ露西亞帝國政府ハ此ノ提議カ日本國政府ノ欲迎ヲ受クヘキコトヲ疑ハス

加之本條ニ付テハ下ノ注意ヲ為ササルヘカラス即チ千八百九十五年ノ日露條約ノ該當條文ハ日本國政府提出案ニ於テ削除セラレタル末項ヲ包含シ此ノ末項ハ露西亞國船舶ニ對シ特定三港ノ外日本帝國ノ開港間ニ其ノ荷物ヲ輸送スルノ權利ヲ保障スルモノナリ本野閣下ノ說明書ニハ日本國政府

ニ規定スル所ナリ故ニ露西亞帝國政府ハ露西亞國船舶ノ為ニ千八百九十五年ノ條約ニ規定セル重要ナル讓与ヲ依然保持セムコトヲ主張シ以テ此ノ決意カ嚴格ニ確認セラレムコトヲ欲ス

第十二條第二項

條約案第十二條第二項ハ兩締約國ノ一方ノ港内ニ於ケル他ノ一方ノ船舶積量測定證書ノ相互承認ノコトヲ規定ス船舶積量測定ニ關スル稅關ノ手續ヲ簡易ナラシムルコトハ兩國ノ利益タルヤ言フ須タス然レトモ日露兩國間船舶積量測定制度ハ其ノ測定證書相互承認ヲ保障スルニ先チ須ラク互ニ相一致セシムルコトヲ要スル或差異ノ存スルモノアルヘシ露西亞國ニ於テハ英吉利國ノ規定(English rule)ヲ適用シ「ムールソム」式ヲ採用セリ然レトモ露西亞國船舶登簿噸數ノ算定ハ特別ノ規定ニ從フモノナルカ故ニ露西亞國ハ船舶積量測定ニ關シ諸外國ト幾多ノ宣言ヲ交換シ此ノ種ノ條約ハ埃地利洪牙利國、白耳義國、大不列顛國、独逸國、希臘國、丁抹國、西班牙國、伊太利國、仏蘭西國、亞米利加合衆國、瑞典國及諾威國ニ對シテ既ニ締結セラレタリ日露兩國間ニ於テモ亦通商航海ノ利益上此ノ種ノ協定ヲ締結スルコトヲ指定セサルヘカラス此ノ協定ハ專門の性質

ヲ有セルモノニシテ固ヨリ通商條約ト独立セル外交文書ヲ作成スヘキモノナリ然レトモ日本国政府ノ希望ニ応セムカ為露西亞帝国政府ハ目下條約案第十二條中ニ此ノ点ニ關スル特別條項ヲ挿入スルニ付異議ヲ有セス此ノ條項ハ「ルーマニー」国トノ通商條約第十二條及露壤通商條約第十六條ニ依リ作成スルコトヲ得ヘシ此ノ兩條約ハ千九百零六年ニ於テ締結セラレタルモノニシテ其ノ規定ノ字句ハ次ノ如シ「兩締約國ノ一方カ交付セル船舶積量測定證書ハ兩締約國間ニ既ニ協定シ及將來協定スヘキ特別ノ取極ニ依リ他ノ一方ニ於テ之ヲ承認スヘシ」

此ノ規定ハ「既ニ協定シ」ナル文字ノ削除ノ外他ノ修正ヲ為スコトヲ要セサルヘシ

第十四條

「工業及手工業」、「船舶」及「工業」ナル文字ノ挿入ハ既ニ第二條ニ於テ承認セル修正ニ基因セルモノナルカ故ニ露西亞帝国政府ハ唯「手工業」ナル文字ヲ複數ニ為スヘキコトヲ提議シ以テ此ノ挿入ニ付何等異議ヲ有セス

第十五條第三項

本條第三項ニ關スル説明書ニ於テ日本国政府ハ兩國領事職務上ノ權限ヲ明定セムカ為ニ日露兩國ノ間ニ領事職務條

第十六條

條約案第十六條ハ全然千八百九十五年ノ條約第十六條ニ同シ然レトモ特許、商標及意匠相互保護ノ規定ハ日本国ニ對シテ露西亞国ト工業及商業所有權ノ相互保護ニ關スル特別條約ヲ締結スルノ義務ヲ設定シタル五月二十七日ノ議定書第四ニ依リ完成セラレタルコトヲ注意セサルヘカラス此ノ規定ハ其ノ後実行セラレス而シテ今回日本国ノ提案ハ総テ旧條約第十六條ノ全文ヲ其ノ儘維持スルニ在ルカ故ニ前記議定書第四ノ規定シタル義務ハ全然拋擲セラルルニ至ルヘシ故ニ外国ノ特許、商標及意匠保護ニ關スル法律カ日本国ニ於テ發布セラレ而シテ第十六條ニ規定セル便宜ハ片務的ニ非サルカラ知ラムコトヲ望ム日本帝国公使館ノ斡旋ニ依リ特許、商標及意匠ノ保護ハ露西亞国ノ法律ニ依リテ規定セラレタル手續ヲ遵守スルコト竝日本国ニ於ケル露西亞国臣民ニ對シテ同様ノ取扱ヲ保障スルコトノ條件ヲ以テ曩ニ(千九百零六年四月二十八日) 既ニ露西亞国ニ於ケル日本国臣民ニ對シテ特許セラレタリ今乃チ實際日本国ニ於ケル露西亞国皇帝陛下ノ臣民カ此ノ点ニ付露西亞国ニ於ケル日本国皇帝陛下ノ臣民ト同様ニ保護セラルルヤ否ヲ知ラムト欲ス

約ノ欠缺セルヲ認メ商業關係ノ發達上此ノ不便ヲ匡正スルノ必要ヲ見タリ此ノ領事職務條約ノ締結ニ至ルマテ日本国政府ハ露西亞国ニ於ケル日本国ノ領事ヲシテ最惠國ノ地位ニ置カシメムト欲シ露西亞帝国政府モ亦日本国ニ於ケル露西亞国領事ニ關シ全ク同一ノ意見ヲ有シ此ノ意義ヲ以テ第十五條第三項ヲ修正スルニ付何等異議ヲ有セス

第十五條第四項

露西亞国政府ハ又露西亞国ニ於ケル日本国ノ正式領事及外交官ニ對シ露西亞国カ独逸国、仏蘭西国、壤地利洪牙利国ノ外交官及領事ニ對シテ許与シタル露西亞国ノ檢閱ニ關スル同様ノ便宜ヲ保障スヘキ新タナル一項ヲ加ヘ以テ第十五條ヲ補修スルコトヲ承認ス此ノ便宜ハ固ヨリ相互ノ條件ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ許与スルコトヲ得ス故ニ露西亞国政府ハ本項中ニ「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文字ヲ挿入セムコトヲ提議ス此ノ挿入及若干文言修正ノ結果本條ハ下ノ如クナルヘシ「兩締約國ノ一方ヨリ他ノ一方ニ派遣セラレタル一切ノ階級ノ外交官及領事官ハ新聞雜誌並學術技芸及文學ノ著作ニ關シ相互ノ條例ヲ以テ完全ナル自由ヲ享有スヘシ」

若夫レ然ラサルトキハ千八百九十五年五月二十七日ノ議定書第四ニ遵拠シテ作成セル第二項ヲ以テ下ノ如ク第十六條ヲ完成セサルヘカラス「兩締約國ハ成ルヘク速ニ工業及商業所有權ノ保護ニ關シ相互條件ヲ基礎トシテ一ノ條約ヲ締結セムカ為商議ヲ開クコトヲ約ス」

千八百九十五年ノ旧條約第十七條

日本国ニ於ケル外国人居留地及永代借地ニ關スル千八百九十五年ノ條約第十七條ハ今ヤ全然日本国ノ提案ヨリ除去セラレタリ而シテ本野閣下ノ説明書ニハ其ノ理由ヲ説明セス日本国ニ於ケル外国人居留地カ竟ニ日本国ノ市区ニ編入セラレタル以來千八百九十五年ノ條約第十七條規定ノ大半ハ其ノ存在ノ理由ヲ喪失シタリ然レトモ從來日本国ニ於ケル永代借地及無借料ニテ既ニ貸与シタル各地所ノ免稅ニ關スル本條ノ規程ハ總テ其ノ必要ヲ持續シ日本国ニ於ケル露西亞国臣民ノ利益ヲ侵害スルニ非レハ之ヲ廢除スルコトヲ得ス是レ此ノ規定ノ適用カ千九百零五年五月二十二日海牙仲裁裁判ノ判決ニ依リテ解決シタル國際紛争ヲ惹起シタル所以ナリ該判決ハ均シク露西亞国臣民ニモ適用セラルルモノナリト雖仲裁裁判所ハ単ニ詳細ノ問題就中永代借地上ニ築造セラレタル家屋稅ノコトヲ裁判シタルコトヲ注意スルコト

ヲ要ス故ニ新通商條約中ニ旧條約第十七條ヲ以テ明定シタル許与ヲ保持スルノ必要アリ此ノ確認ハ之ト同様ノ規定カ日英條約、日仏條約、日独條約中ニ存在シ而シテ最惠國ノ主義ニ基キ露西亞國モ又之ヲ取得シタル以上ハ益其ノ必要ヲ見ルモノナリ

此ノ理由ニ基キ露西亞帝國政府ハ新條約中ニ下ノ如キ條文ヲ以テ第十七條(第一)ヲ挿入セムコトヲ提議ス「日本帝國政府ハ日本國ノ市区ニ編入セル旧外國人居留地内ニ於ケル土地ノ永代借地ヲ確認シ該永代借地カ包含セルモノノ外此ノ財産ニ對シテ何等條件ヲ附スルコトナシ外國人居留地公共ノ目的ノ為ニ無借料ニテ日本國政府カ既ニ貸与シタル各地所ハ永代ニ保存セラルヘシ且該地所ニシテ最初貸与シタルトキノ目的ニ使用セラルル限ハ總テノ租税及徴收金ヲ免スヘシ但シ土地収用權ニハ從フヘキモノトス」

第十七條

日本國提出案第十七條ハ其ノ第一項ニ於テ將ニ締結スヘキ條約ノ施行期ヲ十日ト定メタリ露西亞國政府ハ露西亞帝國各洲ノ遠隔セル為之ヲ以テ甚短期ニ失セリト認メ之ヲ二箇月ニ延長セムコトヲ提議ス而シテ該條約ヲ廢止スヘキ方法ニ付テハ最近ノ露通商條約第三條ノ字句ヲ採用スルニ若

開會後「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ本野閣下ニ對シテ陳述シテ曰ク

日本國全權委員閣下、予ハ條約案ノ討議ヲ再開スルニ臨ミ談判ニ関スル一般事項ニ付閣下ノ注意ヲ喚起セムト欲スルモノアリ

「ポーツマス」談判ノ際日露通商關係回復問題ノ提起セラレタル時ニ於テ露西亞國全權委員ハ講和ノ專実ノミニヨリテ直ニ千八百九十五年ノ旧條約カ再ヒ其ノ效力ヲ生スヘキモノト看做シタリ此ノ如キ見解ハ固ヨリ此ノ會議ニ之ヲ保持スルコトヲ得スト雖而締約國ハ千八百九十五年ノ條約ヲ以テ將ニ締結スヘキ新協定ノ基礎ト認ムルトニ一致シタリ此ノ根本的觀念ハ千九百零五年四月二十九日ノ議定書ニ記載セラレタルモノニシテ以テ日露兩國經濟關係ノ問題ヲ解決シ而シテ「ポーツマス」條約第十二條ハ旧條約ノ原則ヲ保持スルニ付而締約國ノ決意ヲ確定シタリ

此ノ如キ決意ハ固ヨリ實際上ノ理由ニ胚胎セルモノニシテ日露兩國ハ千八百九十五年以來長久ニシテ困難ナル談判ノ後決定セル協定ニ依リテ連結セラレタリ此ノ協定ノ締結ハ條約上ノ範圍ニ對シ兩國政府ノ苦心ニ依リ各先ツ自國經濟上ノ利益ヲ規定セリ然レトモ此ノ企画ハ其ノ成

カス即チ該條約ニ則トリ條約案第十七條ハ左ノ如ク之ヲ作成スヘキモノトス「本條約ハ批准交換後二箇月ヲ經テ實施セラレ千九百十一年即チ明治四十三年七月四日迄其ノ效力有ス而締約國ノ一方カ右期限ノ滿了前十二箇月内ニ本條約ヲ終了セムト欲スル旨ヲ他ノ一方ニ通知セサルトキハ本條約ハ而締約國ノ一方又ハ他ノ一方カ之ヲ通知シタル日より起算シテ一年間其ノ效力ヲ持續スルモノトス」

日露通商航海條約締結會議錄第三号

第三回會議

千九百零六年 十月二十六日 午後四時露西亞國外務省ニ於テ開會

列席者

日本國 全權委員本野閣下、聖彼得堡日本國公使館書記官落合氏、丸毛氏、津田氏

露西亞國

全權委員「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏、商工務省委員「ランゴヴォエ」氏、「アレキセイエフ」氏、「プリレジャイエフ」氏、會議書記官「ウエルクホウスキー」氏、「リッサンコ」氏、「ド、マルテンズ」氏、「ウォヅネセンスキ」氏

功ヲ見ルコト能ハス千八百八十九年ノ條約ノ實施ハ東京内閣ノ請求ニ依リ中止セラレ其ノ後通商上ノ協約改正ノ目的ヲ以テ兩國意見ノ交換ヲ為シ日本國政府ハ露西亞國ノ提議ニ對シ全ク條約ノ要素ヲ離脱シ而シテ露西亞國ニ對シテ單純ニ相互的トナスコトノミヲ讓与セサルニ過キサリキ

此ノ原則ハ最有カナルモノニシテ最惠國條款ハ締結條約ノ施行期タル千八百九十九年七月五日以來不變的ニ互ニ適要セラレタリ是兩國商業上ノ利益ハ外交上ノ協約ニ抛リ確定セル制度ニ適合セルコトヲ明證スルモノナリ然ラハ則チ旧條約ヲ保持シ之ヲ以テ將ニ締結スヘキ條約ノ基礎ト看做スヘキ「ポーツマス」談判ノ賢明ナリシコトヲ認識スルコトヲ要ス此ノ如キハ此ノ談判ニ関シテ得ラレタル出発点ニシテ新條約ハ税率ノ讓歩ヲ包含シ日露兩國ニ對シ最惠國ノ取扱ヲ保障スルコトニ限ルヘキモノトス

ト此ノ事由ニ基キ露西亞國全權委員ハ第四條第三項ニ掲クル條項ハ千八百九十五年ノ條約ノ原則ニ反セルコトヲ認ム蓋シ日本國政府ハ本項ニ於テ滿洲ノ國境ヨリ露西亞國ニ輸入セル遼東租借地ノ生産物若ハ製造物及滿洲ノ國境ヨリ右租借地内ニ輸入セル露西亞國ノ生産物若ハ製造物ニ對スル

輸入税ノ免除ヲ提議セリ此ノ條項ハ日露兩國間ニ稅率ニ關スル相互讓歩ノ協定ヲ設ケムトスルモノナリ

此ノ形式上ノ理由以外ニ露西亞國全權委員ハ根本的ノ理由ニ基キ露西亞國政府ハ日本國ノ提議ヲ排斥スヘキモノト信シタリ

「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ此ノ條項ノ説明書中ニ引用セル千九百四年五月一日ノ勅令ハ國際間ノ協定ニ基クモノニ非ス唯特ニ露西亞國ノ自治權ニ屬セル旨ヲ證明シ例外ノ場合ニ屬セル此ノ立法上ノ措置ハ暫定的性質ヲ有スルモノニシテ任意ニ之ヲ取消スコトヲ得ヘク又此ノ暫定的措置ニ依リテ一定ノ期間露西亞國政府ヲ拘束スヘキ國際協定ノ基礎ヲ作ルコトヲ得サルモノトス此ノ勅令ハ帝國關稅規則第九百三十七條ノ形態ヲ以テ成典トナリタルハ事實ナリト雖露西亞國政府ハ黑龍江省ノ例外的制度ノ廢止ニ就テハ固ヨリ完全ナル自由ヲ有ス前記廢止ハ固ヨリ既定ノ順序ニ從フヘキ新立法專業ヲ要スヘシ日本國全權委員ハ露西亞國ノ輿論カ浦塩斯德自由港ノ問題ニ甚重キヲ置ケルコト及當該官憲ハ今ヤ此ノ問題ノ調査ニ從事セルコトヲ知ラサルヘカラス事情此ノ如クナルカ故ニ露西亞國政府ハ一定ノ年限間繼續シテ之ヲ自由港トナスニツキテ外交上ノ協定

此ノ如キ讓與ハ露西亞國ノ為ニ正当ナル報償ヲ發見シ難キ程廣大ニシテ且夥多ナル利益ヲ侵害スルモノナリ

此ノ意見ノ陳述ニ對スル答弁トシテ日本國全權委員ハ第二誦會ニ於テ「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏カ主張セル論旨ニ對シ其ノ意見ヲ說示スヘキ旨ヲ聲明シ目下露西亞國提唱意見ノ要點ヲ表明スルコトヲ要スト信シタリ「ポーツマス」ニ於テ旧條約ヲ取りテ新條約ノ基礎ト為スヘキコトヲ約シタルコトハ事實ナリト雖此事實ハ以テ毫モ將ニ締結スヘキ條約中ニ事實ノ新狀況ニ依リテ必要トナリタル若干新條項ヲ挿入スルノ機會ヲ除去スルモノニ非ス從テ千八百九十五年ノ條約ノ文字ヲ固守スヘキモノト信セシムヘキモノニ非ス若シ之ヲ以テ「ポーツマス」談判委員ノ希望ナリシトセハ單ニ旧通商條約再施行ノ旨ヲ講和條約中ニ記入スヘカリシナリ而シテ本項ノ挿入ハ新狀況ニ依リ其ノ必要ヲ生シタルモノナリ又本野氏ハ本條項ハ日本國ヨリ輸入セル日本國ノ商品ニ關スルモノニ非スシテ專ラ遼東租借地内ニ於ケル生産物若ハ製造品ニ關スルモノナルコトヲ注意セリ

「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ第二誦會ニ於テ此ノ問題ノ基礎ニ關シ補足的説明ヲ与フヘントノ誓約ニ付日本

ヲ締結スルコトハ困難ナルヘントセリ

此ノ觀念ニ基キ露西亞國全權委員ハ日本國ノ請求範圍ヲ論議シ以為ク日本國ノ請求ハ滿洲國境ニ於ケル現行制度ノ規定以外ニ出ツルモノニシテ千九百四年五月一日ノ法律ニ依レハ黑龍江口及黑龍江以南ノ諸港及滿洲國境ヲ經由シテ輸入セル外國商品免税ノ許可ハ單ニ黑龍江省ノミニ限レルモノニシテ此ノ地方ノ境界ヲ超ヘタル商品ハ一般稅率ニ揭ケタル課稅ニ從フヘキモノナリ而シテ日本國ノ提議ハ黑龍江省ニ限局セスシテ滿洲國境ヲ經過シ陸路ニ依ル露西亞國內ニ於ケル一切ノ輸入ニ對シテ免税セムトスルモノナリ此ノ如キ規定ニ依ルトキハ遼東租借地ノ生産物ハ輸送費ヲ支持スル限リ深く自由ニ西比利亞ニ侵入スルコトヲ得ヘシ日本國力要求セル讓與ノ範圍ハ露西亞國力最惠國臣民ノ基礎ニ於テ條約ニ拘束セラレタル諸國ニ對シ此ノ殊遇ヲ与フヘキ義務ニ依リテ増加セラルヘク之カ為露西亞國政府カ一定ノ期間滿洲國境ニ無制限ノ自由港ヲ設定スヘキ國際條約ニ依リテ束縛セラルヘキ場合ニ於テハ管ニ遼東ノ生産物カ關稅ヲ課セラルルコトナクシテ露西亞國內ニ到來スルコトヲ得ヘキノミナラス尙此ノ殊遇ハ歐羅巴及亞米利加諸國殆ト全部ノ貨物ニ適用セラルヘシ

國全權委員ニ謝辭ヲ述ヘ自己ハ毫モ旧條約ノ條文中ニ新條項ヲ挿入スルコトニ付兩締約國ノ權利ヲ爭ハサルコトヲ附言セリ然レトモ此ノ新規定ハ旧協定ノ根本的の原則ニ適應セサルヘカラス旧協定ハ相互ノ原則ニ基ケルモノナルカ故ニ條約上ノ協定ハ之ニ依リテ制限セラレサルヘカラス是ニ由リテ之ヲ觀レハ第三項ノ提議ハ「ポーツマス」條約第十二條ニ掲ケタル方針ニ違背セルコトハ爭フヘカラサルモノナルカ如シ最後ニ旧條約ヲ單純ニ更新スルコトハ事實ノ變化カ千八百九十五年ノ條約ノ若干規定ヲ無効ト為シタルニ依リ之ヲ行フコト能ハサルモ之カ修正ニ就テハ依然トシテ「ポーツマス」條約ニ認メタル方針ニ基カサルヘカラス本野氏ハ第四條末項ニ掲ケタル提議ハ課稅ノ讓歩ニ關スルモノニ非ス唯新狀況ニ依リテ發生シタルモノナリト信シ日露兩國間ノ一般的條約上ノ協定ニ關スルモノニ非ス唯稅率ノ部分的變更ニ關スルモノナリ且租借地内ニ輸入セル露西亞國ノ生産物モ亦同一ノ免税ヲ享有スルカ故ニ相互ノ原則ハ毫モ侵害セラレサルモノナリ

「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ之ニ反シテ提議條項ハ稅率ヲ零ニ定メタル協定ヲ規定セリト信シタリ

日本國提出案全体ノ討議ヲ終リ會議ハ附屬書ノ討議ニ移レ

リ時ニ露西亜国全権委員ハ旧日露通商條約ハ本條約案ニ附屬セラレサル數多ノ別約ヲ包含セルコトヲ注意シ本野氏ノ説明書ハ此ノ遺脱ニ付何等説明ヲ与ヘス此ノ別約ハ露西亜国、瑞典国及諸威国並細亞接壤諸國ノ境界關係ヲ規定セル特別規定ニ關係ヲ有スルモノニシテ又其ノ許与ハ相互ノ原則ニ背馳セスト宣言セラレタル特別性質ノ免税、免除及特典ヲ掲ケタル此ノ規定ハ尙施行セラルモノナルカ故ニ露西亜国全権委員ノ意見ニ依レハ將ニ締結スヘキ條約中ニ全部之ヲ保存スルコトヲ要スト為シ此ノ理由ニ依リ「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ將ニ締結スヘキ條約中ニ包含セラルヘキ別約トシテ此ノ規定ヲ作成シ且露獨條約ノ規定ニ倣ハムコトヲ提議シ同時ニ露西亜国全権委員ハ如何ナル事由ニ依リ此ノ留保カ條約案中ヨリ除却セラレタルカヲ知ラムト欲スル旨ヲ説示シタリ

本野氏ハ露西亜国ノ提案ヲ調査シ次回ノ討議ニ於テ其ノ回答ヲナスヘキ旨ヲ声明セリ然レトモ本野氏ハ千八百九十五年ノ條約ニ附屬セル別約ハ旧條約ニ於テ露西亜国カ日本國ニ許与セル利益ニ對シ日本國カ露西亜國ニ對シテ許与シタル報償ノ性質ヲ有シタルモノノ如ク見ユルコトニ注意セシマルコトヲ要スト信シタリ

律ニ由リテ五十哥ト為セルコトヲ議定書中ニ記載スルニ付異議ヲ有セス然レトモ露西亜國全権委員ハ此ノ手数料ハ政府ニ對シ旅券ノ印刷費ヲ支辨セシムルニ過キサルトヲ注意セムコトヲ請ヒ旅券規則第二百一條ハ此ノ手数料以外ニ赤十字ノ為ニ五留ノ取立金ノ專ヲ規定シ露西亜國臣民ハ總テ外國人ト共ニ此ノ徴収ニ從フヘキモノトス

露西亜國委員ノ書記官ハ議定書第一第二項ノ討議ニ移リタリ本号ハ並細亞露西亜内ニ滞在若ハ旅行スル日本國臣民ニ對スル特種ノ特權ヲ規定シタルモノナリ

本條項ノ討議ニ移リ露西亜國全権委員ハ先第一ニ日本帝國政府ノ請求ハ明確ナラサルカ如ク見ユルコトヲ説示シ露西亜國全権委員ハ本條項ハ露西亜國出発ノ際領事ノ査證若ハ旅券交付ノ手数料ニ關スルカ又ハ内地居住ノ為ノ旅券交付ノ手数料ニ關スルカヲ説示セラレムコトヲ欲シ露西亜國出発ノ為ノ旅券手数料ハ居住許可ニ對スル印紙税(七五哥及一留)ト同様既ニ極メテ小額ナリ(五十哥)稍々高額ナル領事ノ査證料(二留二五哥)ニ至リテハ此ノ査證ノ期間カ六箇月ニ拡張セラルヘキコトヲ考量スルコトヲ要ス此ノ期間内ハ其ノ地方駐在露西亜國領事カ合法的ニ査證セル内國旅券ヲ所持セル外國人ハ其ノ旅券ニ對シ追加納附金ヲ納附ス

「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ日本國全権委員ニ對シテ千八百九十五年ノ條約ノ別約ニ掲ケタル留保ハ一般の性質ヲ有セルモノニシテ露西亜國カ諸外國ト締結シタル総テノ通商上ノ協約中ニ此ノ留保カ反覆セラレタルコトニ注意セムコトヲ請ヒ此ノ留保ハ其ノ性質ノ如何ヲ問ハス以テ保障トシテ看做サレズ此ノ留保ノ結果此ノ規定ノ理由ニ關シ露西亜國政府ノ修正案摘要書(附屬書参照)ニ付更ニ長ク之ヲ討議スルノ必要ヲ認メスト為セリ

次ニ會議ハ日本國提出條約案附屬議定書第一第一項ノ討議ニ移リ本号ハ日本國臣民ノ携帯スル自國旅券ニ對スル露西亜國官憲ノ査證ノ有効期限ヲ六箇月ニ拡張シ露西亜國官憲カ日本國臣民ニ外國行旅券ヲ交付シ及其ノ所持ノ旅券ニ露西亜國出発許可ノ旨ヲ記入スルニ當リ徴收スル手数料若クハ取立金ヲ五十哥ト定メタリ

露西亜國全権委員ハ獨逸國及塊地利洪牙利國ト露西亜國トノ間ノ通商規定ニ拠リ露西亜國政府ハ最惠國條款ニ從ヒ日本國臣民ニ對シ上記諸國ノ人民ニ許与セル旅券ノ便宜ヲ保障スヘキコトヲ聲明シ日本國臣民ノ旅券ニ對スル露西亜國官憲ノ査證有効期間ハ六箇月ニシテ露西亜國政府ハ露西亜帝國出発ノ際露西亜國官憲カ交付スヘキ旅券ノ手数料ヲ法

ルコトヲ要セスシテ國境ノ經過及再經過ヲ為スコトヲ得ヘシ此ノ請求セラレタル殊遇ハ説明書ニ依レハ特ニ日本國漁業者ノ為ナルカ故ニ露西亜國全権委員ハ六箇月ノ期間ハ以テ漁業季ニ充分ナリト思考セリ

内國旅券ノ有効期間ニ關シ日本國全権委員ハ露西亜國沿海地方ニ使用セラルヘキ各種ノ漁業者ニ對シ「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ノ注意ヲ喚起シ純然タル漁業者以外ニ日本國ノ労働者ハ漁業ニ關スル各種ノ工業ニ従事スヘク此ノ徒ハ漁業季間外ハ露西亜國ノ版図内ニ滞在セサルヘカラス又其ノ數ノ漸ク増加スル傾アル日本國商業上ノ旅客ニ就キテモ同様ナルモノニシテ日本國政府ハ其ノ臣民ノ為ニ旅券ノ特別殊遇ヲ要求シ以テ此ノ種ノ旅客及労働者ニ對シテ特別ノ觀察ヲナセリ

「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ本野氏カ最詳密ニ其ノ請求セル許与ノ範圍ヲ説明セムコトヲ望ミ日本國全権委員ニ對シテ日本國臣民ニ對スル領事査證料ノ減額ハ露西亜國ニ於テ最惠國條款ヲ享有セル諸國臣民ノ為ニ同様ノ減額ヲ為スノ必要ヲ生スヘキコトヲ考量セムコトヲ求め且非正式ノ名義ニテ參考ノ為旅券ノ新規則カ内務省ニ於テ制定セラルヘキコトヲ附言セリ此ノ法律案ハ現行旅券制度中ニ大

ナル便宜ヲ採入シ帝國「ドウマ」ノ初ノ會議ニ於テ其ノ調査ニ附セラルヘキモノナリ
本野氏ハ此問題ニ付第二読會ニ於テ其ノ補足的説明ヲ与フヘキコトヲ約シ此ノ條項ハ領事查證料及外國人ニ對スル居住ノ許可及旅券ニ付露西亞國ニ於ケル徵收金ニ關スルモノナリト信シ此ノ手数料ハ如何ニ小額ナルモ單純ナル労働者ニ取リテハ甚タ重キモノナリト為セリ

會議ハ議定書第二ノ討議ニ移リタリ本号ハ滿洲國境ヲ經ルモノト西比利亞ノ諸港ニ依レルモノト其ノ輸入税ノ同一ナルコトニ關スルモノナリ

此ノ問題ノ基礎ヲ調査スルニ先チ露西亞國全權委員ハ日本國全權委員ニ對シテ會議ノ初ニ於テ為シタル一般の注意ヲ喚起シ日本國全權委員カ請求セル便宜ハ税率ノ協定ヲ推定スルモノニシテ是レ「ポーツマス」條約第十二條ニ抵触セルモノナルコトヲ證明シ此ノ唯一ノ理由ハ日本國ノ提議ヲ排斥スルニ足ルモノト為セリ然レトモ「マレヴスキ」マレヴィッチ」氏ハ此ノ問題ノ經濟上ノ價值ニ付説明セムトスル旨ヲ聲明セリ此ノ点ニ付自由港ノ制度ハ常ニ黒龍江口以北ニ於ケル太平洋ノ諸港ニ存セルコトヲ明示シ此ノ制度ハ自由港カ黒龍江口及黒龍江口以南ニ於テ停止セラレタル

テ露西亞國カ締結セル新通商規定ニ存スルモノナルカ故ニ日本國ハ此ノ特權ヲ主張スル何等ノ理由ヲ有セス
且清國ノ國境貿易ニ對シテ許与セル便宜ハ總テ條約ノ性質ヲ有セス專ラ露西亞國ノ国内法制ニ屬スルモノナルコトヲ考察スヘキモノナリ

會議ノ終ニ於テ露西亞國全權委員ハ日本國全權委員ニ對シテ露西亞國政府修正案ノ摘要書ノ殘部（附属書参照）ヲ交付シ日本國全權委員ト共ニ爾後談判ノ進行ニ關シテ協定ヲナセリ

午後五時三十分散會

本 野 郎（記名）
「コヌ、マレヴスキ、マレヴィッチ」（記名）

附属書第三号

露西亞國政府修正摘要書（承前）

第四條第三項

日本國政府ハ條約案第四條第三項ニ於テ遼東租借地ノ生産若ハ製造ニ係ル物品ニシテ陸路滿洲國境ヲ經テ露西亞國ニ輸入スルモノ及露西亞國ノ生産若ハ製造ニ係ル物品ニシテ滿洲國境ヲ經テ陸路遼東租借地ニ輸入スルモノニ對シ執レ

林外務大臣時代 日露漁業協約 一八二

時期即チ千九百年ニ於テモ亦保持セラレ且西比利亞ノ北岸モ亦全ク特別ナル關稅制度ニ依リテ規定セラレ外國商品ノ輸入ハ「カラ」海航行ノ困難ニ依リ「エニッセイ」及「オビ」ノ河口ニ於テ特別殊遇ノ取扱ヲ受ク「エニッセイ」河口ニ就キテハ大蔵大臣ハ千九百五年五月五日ノ勅裁ニ依リ免稅輸入商品目錄調製ノ權利ヲ有ス故ニ議定書第二ニ掲クルカ如キ日本國政府ノ希望ハ黒龍江省ノ地境ヲ經由スル日本國商品輸入税ノ全免ヲ附帶スルモノナリ

滿洲國境ニ於ケル清國商業ニ許与セル便宜ハ露西亞國全權委員ノ意見ニ依レハ日本國政府請求ノ論拠ニ引用スルコトヲ得ス蓋シ此ノ殊遇ハ例外ノ性質ヲ有スルモノニシテ特ニ亞細亞ノ接壤地方ノ商業ノミニ適要セラルルモノナレハナリ此ノ國境ノ商業ニ許与セル特別免除ハ常ニ相互ノ原則ニ違背スヘカラサルモノト看做サレ露西亞國カ締結セル通商條約ニ於テ特別留保ノ目的ヲ為シ千八百九十五年ノ日露條約ニ附屬セル別約ニ於テモ亦同様ニシテ此ノ別約ニ依レハ兩締約國ノ商業關係變更ノ為ニ亞細亞ノ接壤國ニ對スル露西亞國ノ商業關係ニ對抗スルコトヲ得ス此ノ点ニ付露西亞國ニ對スル日本國ノ狀況ハ變動ヲ受ケサルモノニシテ此ノ留保ハ独逸國、奧地利洪牙國、「ルーマニ」國等ニ對シ

モ輸入税ヲ免スヘキコトヲ提議セリ此ノ規定ハ兩國間ニ稅率ノ相互讓与ヲ為スヘキ條約上ノ協定ヲ設定スヘキモノナリ然ルニ千九百五年「ポーツマス」條約第十二條ハ兩國政府ニ對シ千八百九十五年ノ旧條約ヲ基礎トシテ新通商條約ヲ締結スルノ義務ヲ課スルモノナルヲ以テ日本國政府ノ要求ハ該旧條約カ單ニ兩締約國ニ對シ最惠國ノ取扱ヲ保障セムトスル條約上ノ制度ト全然相反スルニ至ルナリ此ノ唯一ノ主義ハ千八百九十五年ニ於テ義務のモノナリト宣言セラレ次テ日露兩國間經濟上ノ關係ヲ規定スヘキモノト為セリ

之ヲ要スルニ露西亞國政府ノ意見ニ依レハ日本國ノ此ノ提議ハ「ポーツマス」條約第十二條ノ明文ト顯著ナル矛盾ヲ為スモノナリ
此ノ形式的理由ノ外ニ尙最切実ナル實際的理由ノ存スルアリ此ノ實際的理由ニ依リ露西亞國政府ハ日本國ノ此ノ提議ヲ承認スルコトヲ得ス

即チ第一、説明書中此ノ請求事項ノ論拠トシテ引用セル千九百四年五月一日附ノ勅令ハ國際上ノ協定ニ基クモノニ非スシテ專ラ露西亞國ノ自治權ニ屬スルモノナリ例外ノ場合

ニ属セル此ノ法制上ノ措置ハ臨時的性質ヲ有スルモノニシテ任意ニ取消スコトヲ得ヘク之カ為ニ一定ノ期間露西亜国政府ヲ拘束スヘキ国際上ノ協商ノ基礎ヲ形成スルコトヲ得ヘキモノニ非ス

第二、千九百四年ニ於テ許与セラレタル殊遇ハ単ニ黒龍江省ニ輸入セル外国商品ノ免税ニ関スルモノニシテ黒龍江省境外ニ於ケル外国輸入ノ物品ハ固ヨリ関稅ヲ納附セサルヘカラス然ルニ日本国ノ提議ハ黒龍江省ニ限局セス滿洲国境ヲ経テ陸路露国ニ輸入セル物品ニ対シ免税ヲ擴張セムトセリ此ノ如キ規定ニ拠ルトキハ遼東租借地ノ生産物ハ其ノ輸送費ヲ支持ズル限リ遠ク自由ニ西比利亞ニ進入スルコトヲ得ヘク其ノ結果日本国ノ希望ハ黒龍江省ニ於ケル現行自由港制度ヲハ條約ノ規定ニ依リ更ニ現状ヨリ比類ナキ広大ナルモノト為サムトスルモノナリ

此ノ如キ讓与ハ之ニ対シテ其ノ正当ナル対価ヲ發見シ難キ広大且重要ナル利益ヲ包有スヘク遼東租借地ニ対シ日本国カ提議セル關稅ノ免除ハ固ヨリ以テ充分ナル対価ト見做スコトヲ得サルヘキヤ明ナリ

日本国ガ請求セル讓与ノ範圍ハ露西亜国カ最惠国ノ基礎ニ基キ條約ニ依リテ拘束セラレタル諸国ニ対シ同様ノ殊遇ヲ

ニシテ其ノ讓与ハ相互ノ主義ニ変更ヲ及ホスヘカラサルモノト宣言セラレタル特別性質ノ免除及特典及特權ヲ規定シ而シテ此ノ規定ハ尙現今施行セラルルモノナルカ故ニ此ノ規定ヲ挙ケテ尽ク之ヲ將ニ締結スヘキ條約中ニ存スルコトヲ必要トス加之此ノ規定ハ一定ノ必要ヲ有スルモノナルコトヲ考慮シ且批准ノ形式ヲ簡易ニ為サムカ為ニ露西亜国政府ハ別約(第六号第一)トシテ新條約中ニ此ノ留保ヲ挿入セムコトヲ提議ス此ノ別約ハ露獨條約ノ例ニ依リ次ノ如ク之ヲ記載スヘシ

第一條 幅員五十「ヴェルスト」ニ達スル国境地带内ノ地方貿易ヲ容易ナラシムル為ニ接壤諸国ニ現ニ許与シ又ハ將來許与スルコトアルヘキ殊遇

第二條 輸入又ハ輸出ニ関シ「アルカンジェル」洲ノ住民及亜細亞露西亜ノ北部沿岸(西比利亞)ニ現ニ許与シ又ハ將來許与スルコトアルヘキ殊遇

第三條 千八百三十八年四月二十六日五月八日露西亜国ト瑞典国及諾威国トノ間ニ締結シタル條約中ニ包含セラレタル特別條款

第四條 露西亜国ト其ノ亜細亞ニ於ケル接壤諸国トノ商業ニ関スル規定

与フヘキ義務ヲ加重セラルルコトト為ルヘシ亜細亞ノ接壤諸国ニ許与セル免除ニ関シ右諸條約ノ大半中ニ掲ケタル留保ハ此ノ規定ニ対スル例外ヲ為スモノニシテ之ヲ日本国ニ適用スヘキモノニ非ス千八百九十五年ノ條約ハ特ニ別約第一條ニ於テ亜細亞ノ隣接国ニ対スル露西亜国ノ通商關係ハ露西亜国ト日本国トノ通商關係ヲ變更セムカ為ニ之ヲ引用スルヲ得サル旨ヲ明記セリ

第三、清国ノ商品ニ対シ關稅規則ニ規定セル特殊ノ特權ニ就テハ此ノ便宜カ一定ノ條約ニ基カサルカ故ニ固ヨリ條約ノ性質ヲ有セサルモノナルコトヲ考量セサルヘカラス露西亜国ハ任意ニ此ノ措置ヲ取消スコトノ自由ヲ有ス且清国ニ対シテ許与シタル特別ノ免税ハ接壤諸国ニ対シテ設定シタル国境貿易便宜ノ範圍ニ属スルモノナルニ過キス從テ此ノ如キ殊遇ハ常ニ最惠国ノ取扱中ヨリ除外セラルルモノナリ

千八百九十五年ノ條約ノ別約

日露通商旧條約ニハ現條約案ニ附屬セラレサル數多ノ別約ヲ包含シ本野閣下ノ説明書ニハ此ノ削除ニ関シ何等理由ヲ述ヘス該別約ハ露西亜国、瑞典国、諾威国、亜細亞ノ接壤諸国ノ間其ノ境界ノ關係ヲ規定セル特別規定ニ関スルモノ

第五條 露西亜国ニ於テ建造シ且露西亜国臣民ニ屬スル船舶ニ与ヘラルル建造後三箇年間航海稅ノ免除

第六條 露西亜国ニ於テ遊船俱樂部ト称スル各種ノ娯樂協會ニ許与シタル免除

第七條 露西亜国政府カ留保スルコトアルヘキ各種ノ物品ニ関スル專売權

議定書第一項

議定書案ハ旅券ニ関スル特別規定ヲ包含シ其ノ第一項ノ一号ニ於テ日本国臣民ノ携帯スル旅券ニ対スル露西亜国官憲查證ノ有効期限ヲ六箇月ニ擴張シ露西亜国官憲カ日本国臣民ニ外国旅券ヲ交付シ及其ノ所持ノ旅券ニ露西亜国出發許可ノ旨ヲ記入スルニ當リ徵收スル手数料ヲ五十哥ト定メタリ

独逸国及奧地利洪牙利国ト露西亜国トノ通商條約ニ於テ該諸国臣民ノ旅行券ニ対スル露西亜国領事ノ查證ノ有効期間ハ六箇月ト為セリ此ノ規定ハ日本国臣民ニ対シ同一便宜ノ享有ヲ保障スルニ付最惠国取扱ノ主義ニ適用スルモノナリ露西亜国出發ノ際其ノ外国人ニ対シテ旅券交付ノ手数料五十哥ニ付テモ又法律ニ規定セル所ニシテ(旅券規則第二百一條第四項)露西亜帝国政府ハ議定書中ニ此ノ手数料ノ額

ヲ記載スルコトニ付何等異議ヲ有セス但シ此ノ手数料ハ旅券印刷ニ関シ政府ニ対スル費用ノ支弁タルニ過キサレコトヲ注意スルコトヲ要ス
終ニ露西亜国出發ノ許可ニ付テハ通則トシテ全ク手数料ヲ免除セラルルモノトス前記事實ノ結果露西亜国政府ハ其ノ末文ニ「国庫ノ為ニ」ナル文字ヲ加ヘ以テ議定書第一項第一号ヲ承認スルニ付異議ヲ有セス此ノ第一ノ説明ハ外国人ニ対シテ交付セル各旅券ニ対シ赤十字ノ為ニ五留ノ徴収ヲ規定セル前記旅券規則第二百一條ニ關係スルモノニシテ露西亜国臣民及外国人ハ孰レモ一時的性質ヲ有セル此ノ徴収ニ服スルモノトス

第一項第二号ハ亞細亞露西亜ニ旅行又ハ滞在ノ日本国臣民ニ対スル特種ノ特權ヲ規定スルモノニシテ殊ニ同項ハ該日本国臣民ニ対シ歐羅巴露西亜ニ於ケル手数料ニ比シテ半減ノ査證及滞在許可ノ手数料ヲ規定セリ此ノ規定ニ關スル説明書ニ於テ此ノ特別ノ殊遇ハ黒龍江省ニ於ケル日本国臣民ノ出入ヲ容易ナラシメムカ為ナリト為セリ又此ノ説明書ニ拠レハ日本国臣民就中日本国漁業者ノ此ノ地方ニ於ケル往來ハ甚頻繁ニシテ其ノ出入ノ際一々歐羅巴露西亜ニ於テ徴収セラルヘキ旅券査證料ノ同額ヲ支弁スルハ其ノ困難ヲ感

議定書案第二項

議定書案第二項ハ滿洲地境及西比利亞ノ諸港經由輸入税ノ均等ニ關スル日本国政府ノ提議ヲ包含ス

日本国政府ハ此ノ規定ニ於テ滿洲国境ヲ經テ露西亜国ニ輸入セル物品ニ対スル特別措置ニ基因スルコトアルヘキ税率ノ不均等ニ対スル保障ヲ定メムト欲シ露西亜国政府カ概シテ西比利亞沿岸ニ於ケル自由港ノ廢止中ト雖滿洲ノ国境ヲ經テ輸入セル清国商品ニ対スル輸入税ノ免除ヲ保持シタル事實ヲ以テ日本国政府要求ノ理由ト為スヘキモノト信シタリ

此ノ提議ノ根本ヲ論究スルニ先チ日本国提出條約案第四條末項ニ關スル一般の注意ヲ喚起スルコトヲ要ス

蓋シ議定書第一項ニ掲ケタル便宜ノ目的ハ税率ノ協定ニ在リ而シテ之ニ由テ此ノ種ノ通商上ノ協定ニ採用セラレタル條約上ノ殊遇ヲ得ムトスルニ在リ而シテ「ポーツマス」條約第十二條ニ依リ兩國政府カ当サニ探ルヘキ基礎ハ即チ最惠国取扱ノ主義ニ存スルモノナリ此ノ理由ニ基キ該提議ハ遠ク其ノ起点ヲ離レテ税率ノ讓歩ヲ強要セムトスルモノトシテ排斥セラレサルヘカラス

然レトモ日本国政府ニ対シ總テ日本国ノ提議ニ係ル諸事項

スル所ナルカ故ナリト為セリ
先ツ該説明書ハ其ノ半減スヘキ手数料ノ何ナルカヲ明示セサルコトヲ注意スルコトヲ要ス領事ノ査證ナルカ露西亜国出發ノ際其ノ旅券ニ課スヘキ料金ナルカヲ地方官憲カ外国人ニ対シ露西亜国ニ於テ交付セル滞在旅券ニ課セル料金ナルカ之ヲ知悉スルコトヲ得ス此ノ点ニ關シ尙注意セムト欲スルコトハ右外国人カ携帯セル自国旅券ハ六箇月間露西亜国ニ於ケル滞在ニ付有効ニシテ露西亜国領事カ合法ニ査證セル旅券携帯外国人ハ此ノ期間追加手数料ヲ納付スルコトヲ要セス以テ露西亜国ノ国境ヲ通過及再通過スルコトヲ得ヘク而シテ露西亜国ニ滞在セル外国人カ露西亜国ノ旅券ヲ領受スルコトヲ要スルハ其ノ滞在六箇月ノ後ニ在ルコト是ナリ

故ニ西比利亞沿岸ニ到来セル日本国漁業者ハ例外ノ場合ニ非サレハ露西亜国ノ交付セル旅行券ヲ領受スルコトヲ要セサルヘシ蓋シ其ノ滞在カ上述ノ期間即チ六箇月ヲ超過スルコト甚稀ナレハナリ

加之此ノ問題ヲ確定セムカ為ニハ露西亜国政府ハ此ノ請求事項ニ關シ更ニ明白ナル説明ヲ得サルヘカラス

ヲ慎重ニ調査セシコトヲ證明セムカ為露西亜国政府ハ日本国ノ此ノ提議ヲ排斥シタル根本の事由ヲ更ニ説明セムト欲ス

抑自由港ノ制度ハ常ニ黒龍江口以北ノ太平洋諸港ニ対シテ存シタル事ヲ考慮セサルヘカラス此ノ制度ハ黒龍江口及其ノ以南ニ対シテ自由港ノ制度ヲ廢止シタル時期即チ千九百年ニ於テモ尙其ノ保持ヲ見タリ且西比利亞ノ北岸ハ全ク特別ナル關稅制度ニ依リテ規定セラレ外国商品ノ輸入ハ「カラ」海交通ノ困難ノ為「エニッセイ」及「オビ」ノ河口ニ於テ例外ナル殊遇ノ取扱ヲ受ク故ニ議定書第二項ニ規定セルカ如キ日本国政府ノ希望ハ竟ニ黒龍江省ノ地境ヲ經由スル日本商品輸入税ノ全免ヲ要求スルモノト謂ハサルヘカラス

日本国政府カ其ノ要求ノ援助トシテ主張スル滿洲ノ露西亜国ノ国境ヲ經由スル清国輸入貨物ニ許与セル免除ハ之ヲ以テ其ノ事由ト為スコトヲ得ス露西亜国ノ国境ヲ經由スル輸入貨物ニ対シ清国カ享有スル殊遇ハ例外ノ性質ヲ有シ特ニ亞細亞接壤諸國ノ商業ノミニ適用セララルモノナリ此ノ如ク国境貿易ニ許与セル特別ノ免除ハ常ニ相互ノ主義ニ違背セサルモノト看做サレ露西亜国カ諸國ニ対シテ締結セル各

通商條約中ニ特別留保ノ事項ト為レリ千八百九十五年ノ日露條約附屬別約及独逸国、壤地利洪牙利国、「ルーマニー」国等ニ対シ露西亜国カ締結セル諸新通商協定ニ於テモ皆然ラサルハナシ故ニ日本国ハ此ノ特權ヲ主張スルノ何等理由ヲ有セサルモノナリトス

日露通商航海條約締結會議録第四号

第四回會議

千九百零六年十一月十九日 十九日 午後四時露西亜国外務省ニ於テ開會

列席者

日本国 全權委員本野閣下、聖彼得堡日本国公使館書記官落合氏、丸毛氏、津田氏

露西亜国

全權委員「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏、商工務省委員「ランゴヴォエ」氏、「アレクセイエフ」氏、「プリレジャイエフ」氏、會議書記官「ウエルクホウスキ」氏、「ペトロフ」氏、「ド、マルテンス」氏、「ヴォネセンスキ」氏

開會後露西亜国全權委員ハ日本国全權委員ニ対シ第一號會議

第二ノ異議ニ付日本国全權委員ハ司法上兩國ノ法制ノ差異ニ基因セル踰越スヘカラサル困難ノ存スヘキコトヲ考量セス第一條第二項ニ規定セル相互ノ事ハ主トシテ訴訟手續上於テ実益ヲ見ルモノニシテ本野氏ノ意見ニ依レハ兩國法制中ニ存スルコトアルヘキ規定ノ差異ニ付互ニ兩國ノ訴訟法ヲ承知スルコト容易ナリト為セリ

然レトモ其ノ調和ノ精神ヲ表證セムカ為ニ日本国全權委員ハ露西亜国全權委員カ其ノ削除ヲ固執スヘキモノト信スルトキハ「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文字ヲ削除スルコトヲ承認スヘシ

「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ本野氏ニ対シ其ノ説明ヲ陳謝シ「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文字ノ削除ニ対スル其ノ承認ヲ領シタリ然レトモ「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ十月二十三日ノ會議ニ於テ指示シタル牴觸ハ其ノ文言ニ関スルモノニアラスシテ日本国政府説明書ノ制限的解釋ニ関セル旨ヲ説示シタリ

本野氏ハ第一條第五項ニ移リ先ツ「農業」ノ意義ニ関シ此ノ語ハ一切農業上ノ事業ニ從事スルノ權能ヲ指示スルモノナルコトヲ声明スルモノナルカ故ニ此ノ條文ニ依リ日本国ニ於ケル露西亜国人ハ露西亜国ニ於ケル日本国人ノ如ク土

ニ於テ確定セル規定ニ觸ルコトナク其ノ新討議ヲ請求セル條款ニ関シテ條約案ノ第二號會ヲ開クヘキコトヲ提議セリ
本野閣下ハ此ノ提議セラレタル日程ヲ承認シ十月二十三日ノ會議ニ提起セラレタル各種ノ問題ニ付補足的説明ヲ与フヘキ旨ヲ声明セリ

第一條第二項ノ討議ニ移リ日本国全權委員ハ條約案ニ掲ケタル「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文字ノ削除ハ二箇ノ理由ニ依リ露西亜国ノ側ヨリ主張セラレタルモノナルコトヲ注意セリ即チ第一、内国臣民カ享有スル司法上ノ一切ノ權利及特典ヲ許スル文言ト相互ノ條款トハ相一致セサルコト第二、兩締約國法制ノ差異ノ為實際上著大ナル困難ノ存スル虞アルコト是ナリ

日本国全權委員ハ露西亜国政府カ日本国臣民ニ対シ相互ノ條件ヲ以テ日本国ノ法制カ日本国臣民ニ対シテ許与スル司法上ノ一切ノ權利及特典ヲ許与スルコトキハ露西亜国臣民モ亦日本国ニ於テ同様ノ權利ヲ享有スルモノトセハ第一條第二項ノ文言ト相互ノ條款トノ間所謂牴觸ノ存スルコトヲ認ムルコト能ハス故ニ露西亜国臣民ハ日本国ニ於テ司法上日本国臣民カ享有スル一切ノ權利ヲ享有スヘシ

地ノ耕作及総テ他ノ農業上ノ事業ニ從事スルノ權利ヲ有ス露西亜国全權委員ハ露西亜国臣民カ日本国ニ於テ農業ニ從事スルノ權利ヲ有セリトノ日本国全權委員ノ證言ヲ領シ「農業」ナル用語ハ承認セラレタリ

同項(第五項)ノ討議ヲ繼續シ日本国全權委員ハ第二ニ土地所有權ノ問題ニ関スル其ノ意見ヲ陳述セリ此ノ点ニ付テハ日本国全權委員カ十月十日、二十三日ノ會議ニ於テ与ヘタル説明ニ拠ルノ外ナク日本国全權委員ハ其ノ論旨ヲ確認スルニ限ルヘシ即チ法律上及事實上日本国ニ於ケル露西亜国臣民ト露西亜国ニ於ケル日本国臣民トノ間ニ土地ニ関スル何等取扱上ノ不均等ハ存スルモノニアラス法律上ニ於テハ兩國ハ其ノ内國法制ヲ以テ土地所有權ノ問題ヲ規定スルコトニ付全ク自由ニシテ兩國臣民ハ最惠國ノ取扱ヲ享

有シ事實上ニ於テハ露西亜国ノ版圖ノ廣大ナルニ拘ラス日本国臣民カ之ヲ取得スルノ大利益ヲ有セル日本国ノ接壤地方即チ黒龍江沿海地方ニ於テ土地ヲ取得スルコトヲ得サルニ依リ事實上露西亜国ニ於ケル日本国臣民ハ日本国ニ於ケル露西亜国臣民ヨリ優越ナル境遇ニ在ルモノニアラス

之ヲ要スルニ本野氏ノ意見ニ依レハ法律上ヨリ觀察スルモ將タ事實上ヨリ觀察スルモ土地所有權ニ関シ日本国ニ於ケ

ル露西亞國臣民ト露西亞國ニ於ケル日本國臣民トノ間ハ全ク均等ナリトス

「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ反對ノ意見ヲ有シ土地取得ノ權利ニ關シ外國人ニ對スル制限ニ付明確ナル不權衡ノ存セルモノト思考シ日本國ニ於テハ此ノ制限ハ全國ニ適用セラルルモ露西亞國ニ於テハ露西亞帝國ノ或部分ニ限レリ然レトモ露西亞國全權委員ハ露西亞國政府力讓歩ノ名義ヲ以テ其ノ調和ノ精神ヲ表證セムカ為ニ本項中ニ「所有權」ナル文字ヲ記入セムトセル旨ヲ聲明セリ

本野氏ハ再語ヲ続キ露西亞國臣民カ日本國ニ於テ他ノ諸外國人ノ有スル如キ特別性質ノ不動産所有權ヲ最明確ニ確定保障セムカ為ニ左ノ如ク第一條第五項ヲ修正スルニ付異議ヲ有セサル旨ヲ述ヘタリ

農業、不動産ノ所有權並其ノ他何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス土地ノ保有ニ關スル各般ノ事項ニ付テハ露西亞國ニ於ケル日本國臣民及日本國ニ於ケル露西亞國臣民ハ最惠國ノ臣民又ハ人民ト均等ノ取扱ヲ受クヘキモノトス
「何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス土地ノ保有」ナル文字ノ附加ニ依リ日本國全權委員ハ永代借ニ關スル露西亞國臣民ノ權利ハ充分ニ保障セラレタリト思考セリ

ナル方法ニ於テモ土地ノ所有ニ關係セス而シテ正ニ獨逸國若ハ露西亞國ニ於ケルト同一ノ性質ヲ有スルコトヲ肯認セリ

本項ノ文言ニ關シ日本國全權委員ハ「賃借者又ハ」ナル文字ノ後ニ「保有者」ナル文字ノ附加ヲ以テ露西亞國ノ提議ヲ承認シタリ故ニ本項ノ末文ハ「不動産ノ所有者、小作人、賃借者又ハ保有者トシテ負担スヘク」トナルヘシ

「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ「不動産ノ保有者」ト謂ヘル文字カ同條第五項ニ暗示セルモノト推定シ日本國ノ提議ヲ承認セリ

第八項ハ確定セラレタリ

第二條ニ關シ本野氏ハ本條第二項中ノ「從事シ」及「總テ工業又ハ手工業」ノ間ニ「其ノ國ノ法律、命令及規則ニ遵由シテ」ナル文字ノ挿入ニ付異議ヲ有セス又第四項中「商業」及「警察、公安及衛生ニ關スル」ノ間ニ「工業、手工業、職業」ナル数字ノ附加ヲ承認シタリ

「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ前條第五項ニ拠リ「職業」ト「警察」トノ間ニ「所有權」ナル文字ヲ挿入セムコトヲ提議シタリ

本野氏ハ此ノ附加ヲ承認セリ

且第六項ノ條文ト結合セラレタル第五項ノ右修正條文ハ露西亞國臣民ニ對シ課税上最惠國臣民ノ取扱ニ關シ最有効ナル保障ヲ与ヘタルモノナリ

露西亞國臣民ノ權利ハ此ノ如ク全ク保障セラレタルカ故ニ日本國全權委員ハ千八百九十五年ノ旧條約第十七條ノ若干規定カ本條約中ニ再掲セラルルノ必要ナシト思考シ為ニ露西亞國全權委員ニ對シ本條ニ關スル修正ニ固執セザラムコトヲ提議セリ

「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ第五項中露西亞國臣民ニ對シ永代借權ヲ保障スヘキ「何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス土地ノ保有」ナル文字ヲ挿入スルニ付異議ヲ有セス前記土地ノ課税ニ付テハ第一條第六項カ旧條約第十七條末項ニ掲クル全然「無借料」ノ事ヲ包含スヘキ證明ヲ得ムコトヲ欲シ日本國全權委員カ此ノ点ニ付明確ナル證明ヲ与フルコトヲ得ヘキヤヲ問ヘリ

本野氏ハ之ニ對シ積極的の回答ヲ与ヘタルヲ以テ第一條第五項及第六項ノ文言ハ採用セラレタリ
第一條第八項ノ討論ニ移レリ

日本國全權委員ハ既ニ本項ニ關シ為シタル口頭ノ聲明ヲ確認シ更ニ日本國ニ於テハ兵役ハ専ラ對人的性質ヲ有シ如何條約案第四條ニ移レリ日本國全權委員ハ本條ノ初ノ二項ノ文言ニ關スル露西亞國全權委員カ提議セル修正ニ對シ慎重ニ之カ調査ヲ為シ以テ此ノ点ニ付速ニ日本國政府ノ訓令ヲ求メムトセルコトヲ説示セリ

日本國政府ハ露西亞國政府ノ提議セル文言ヲ精査シタル後問題ノ根本ニ付何等實質的異議ヲ有セス

此ノ兩項ハ旧條約ニ於テ露西亞國政府カ承認セル條文ノ再出ニ過キス條文ノ解釈上實際何等困難ノ發生ヲ見サルカ故ニ日本國政府ハ提議條文ヲ保持セムト欲シタリ

「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ千八百九十五年ノ條約ニ於ケル最惠國條款ノ旧文言ハ實際誤解ヲ生セザリシト日本國全權委員ノ證言ヲ確認セリ然レトモ「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ他諸國ニ對スル露西亞國ノ通商關係ニ於テハ然ラザリシコトヲ認メタリ最惠國條款ノ同一文言ハ露西亞國ノ數多通商條約中ニ掲ケラレタルモ露西亞國生産物ノ一種殊ニ對シ之カ保障ヲ為サズ即チ「ブリュッセル」砂糖條約ニ參同セル諸國ニ於ケル露西亞國砂糖ノ輸入ニ對シ重税ヲ課セリ砂糖及場合ニ從ヒ其ノ他ノ商品ニ對スル重税ノ徵收ヲ防カムカ為ニ露西亞國政府ハ最惠國條款ニ對シ露西亞國ノ為ニ制限的解釈ノ偶生ヲ防障スヘキ新文言

ヲ与ヘムト決定セリ故ニ現條約ニ於テ此ノ文言ヲ採用セムコトヲ希望セリ

本野氏ハ露西亞国全權委員ニ對シテ其ノ説示セル説明ヲ謝シ露西亞国ノ提議ヲ再考スヘキコトヲ約セリ然レトモ本野氏ノ所見ニ依レハ條約案第十四條ト結合セル第四條ノ旧文言ハ一切差等ノ取扱ニ對シ充分ニ露西亞国ノ輸出ヲ保障スルカ如シ蓋シ日本国ハ若干邦国ニ對シ一定條件ノ下ニ許与セル最惠国條款ニ基ケル通商條約ヲ有ス然シテ日露條約ニ於テ此ノ條款ハ何等條件ノ存スルコトナク許与セラルルモノナルカ如ニ制限的解釈ニ從フコトナカルヘシ此ノ問題ノ解決ハ延期セラレタリ

第十條ノ討議ニ移リ本野氏ハ日本国政府カ露獨條約第十五條ノ例ニ倣フテ本條第二項中ニ露西亞国全權委員カ提議セル附加規定ノ範圍ヲ詳知セサルコトヲ説示シ此ノ附加規定ハ日露航海關係上何等實際的必要ヲ有セサルカ如シト為セリ

千八百九十五年ノ旧條約第十條第三項ヲ復活セシメムトノ露西亞国全權委員ノ請求ニ付日本国全權委員ハ是又現今ノ狀況ト全ク異ナレル場合ニ於テ日本国及諸外国間ニ締結シタル旧條約ノ痕跡ヲ再用スルノ必要存セスト思考セリ加之貨物ノ一部分ハ日本国ニ於テ全ク其ノ監視料ヲ免除セラルルモノト思考シ且其ノ監視上税關吏ニ對スル何等報酬ノ存セサルモノト為セリ

日本国全權委員ノ此ノ説明ニ對シ「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ露西亞国ニ於テ右監視料ノ存スルコトニ付本野氏ノ注意ヲ喚起シ其ノ諸同僚ト共ニ其ノ提議ニ係レル附加規定ニ固執セサルコトヲ声明セリ

旧條約第十條第三項ヲ復活セムトノ問題ニ付露西亞国全權委員ハ條約案第十四條及殊ニ新ニ掲ケタル「船舶ニ」ノ文字ハ露西亞国ニ對シテ既ニ千八百九十五年ノ旧條約第十條ニ規定セル殊遇ノ享有ヲ保障シ而シテ其ノ享有ハ又日本国カ現行條約ニ依リ自余諸国ニ与ヘタルモノナリトノ日本国全權委員ノ證言ヲ領セリ然レトモ一般の觀察上將ニ締結スヘキ條約中ニ此ノ規定ノ保持ヲ固執スヘキモノト信シ本項ハ露西亞国船舶ノ航海ニ對シ何等實際上ノ価値ヲ有セス露西亞国全權委員ノ意見ニ依レハ新條約中ニ此ノ讓歩ノ專ヲ保持セムト欲スル所以ハ取扱均等ノ原則ヨリ觀察シタルニ過キス其ノ除却ハ露西亞国ノ商船カ自余諸国ノ船舶ニ与ヘラレタル若干特權ヲ喪失スヘシトノ推定ヲ生セシムルモノトセバ不快ノ感觸ヲ生スヘシ此ノ理由ニ依リ「マレヴスキ

日本国ノ諸開港ニ於ケル露西亞国船舶ノ航海權ハ本條約第十四條ニ依リ特ニ露西亞国船舶ニ對シテ許与セル最惠国ノ取扱ニ依リ充分ニ保障セラルルモノナリ且日本国全權委員ハ本條ノ「船舶ニ」ナル文字ハ自余諸国ニ對シテ日本国カ締結セル旧條約ノ該當條項中ニ存セザリシコトヲ注意セシムヘキモノト信シ而シテ日本帝国政府カ此ノ文字ヲ同條中ニ附加スヘキモノト信シタル所以ハ露西亞国船舶ニ對シテ最惠国ノ取扱ヲ留保セシメムカ為ナリ是ヲ以テ日本国全權委員ハ此ノ説明後露西亞国全權委員カ其ノ本條ニ對シテ提議セル修正ニ固執セサルコトヲ信セムト欲シタリ

第十條第二項末文ノ提議附加ニ関シ露西亞国全權委員ハ下ノ如キ説明ヲ通告セリ此ノ規定ハ露西亞国關稅規則第七十一條ニ基ケルモノニシテ二箇ノ目的ヲ有シ第一、陸揚セサル貨物ノ一部分ハ關稅ヲ免除セラルルコト第二、外国船舶ハ其ノ積載貨物ノ一部分ニ對スル監視料ヲ納付スルノ義務是ナリ此ノ監視料ハ其ノ第七十一條ニ依リ碇泊外国船舶内ニ勤務セル各税關吏ニ對シ一日ニ付四十哥ト定メラレタリ

本野氏ハ條約案ニ掲ケラレタルカ如キ第十條第二項ハ大ニ通商航海ノ利益ヲ保障スルモノナリト信シ陸揚セサル外国一、マレヴィッチ」氏ハ本野氏ニ對シ最調和的方法ヲ以テ之ヲ解決セムカ為此ノ問題ヲ再考セムコトヲ請ヘリ

日本国全權委員ハ日本国政府ノ名ヲ以テ第十二條ニ對スル露西亞国全權委員提議ノ修正カ承認セラレタル旨ヲ聲明シ本條第二項ハ下ノ如ク記載スルコトト為セリ曰ク兩締約国ノ一方ヨリ交付シタル船舶積量測定證書ハ追テ兩國間ニ協定スヘキ特別ノ取極ニ依リ他ノ一方ニ於テ之ヲ承認スヘシ

本野氏ハ第十四條ノ「手工業」ナル文字ヲ複數ニ為スコト及第十五條第一項ノ「プロコンシユール」ナル文字ヲ削除スルコトニ付異議ヲ有セサル旨ヲ報告セリ

本條第四項ニ付テハ本野氏ハ日本国ニ於テ檢閲ノ制度存スルコトナク而シテ本野氏ノ所見ニ依レハ日本帝国政府ハ此ノ制度ヲ採用スルノ意思ヲ有セサルカ故ニ「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文字ノ挿入ハ承認セララルコトヲ得スト認メ為ニ独逸国ニ對シ露西亞国政府カ承認セル千九百四年七月二十八日ノ露獨追加條約ノ條文ノ再掲ニ過キサル日本国提出條約案ノ條文ヲ保持セムト提議シタリ

故ニ此ノ点ニ関シ独逸国ノ外交代表機關及領事館ニ對スルト同一ナル原則ヲ日本国外交代表機關及正式領事館ニ對シ

承認スルコトヲ拒マサルコトヲ希望セムト欲シタリ
「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ露西亜国修正書中ニ
掲ケタル説明ハ露西亜国政府ハ毫モ日本国外交代表機関及
領事館ニ対シ独逸国外交代表機関及領事館ニ与ヘタル檢閱
ニ關スル同一ノ便宜ヲ拒マサルコトヲ確定セムトスルコト
ヲ暗示シ是故ニ日本国ニ於ケル露西亜国代表者ニ對スル相
互ノ事ニ關スルニ過キス故ニ檢閱制度ノ欠缺ハ露西亜国政
府ニ取リテ此ノ相互ノ充分ナル保障ナリト認ムルコト能ハ
ス蓋シ日本国政府ノ自治權ニ屬セル此ノ如キ事物ノ状態ハ
常ニ變更セラルルコトアルヘケレハナリ而シテ「マレヴス
キー、マレヴィッチ」氏ハ如何ナル性質ナルヲ問ハス兩締
約国ノ一方ノ官吏ニ許シタル便宜ハ正ニ當ニ他ノ一方ノ
官吏ニ對シテ事實上保障セラルヘキノミナラス尙又法律
上保障セラルヘキモノナルカ故ニ露獨追加條約中ニ檢閱ニ
關スル片務的條款ノ存在ハ單純ナル錯誤ニ依ルモノナルコ
トヲ説明シ日本国全權委員ニ對シ檢閱ニ關シ露獨條約中ニ
掲ケタル條文ハ檢閱ノ制度ニ關スルモノニアラズシテ一定
ノ政府的機關ニ依リテ適用セラルヘキ制度の措置ニ關セル
モノナルコトヲ注意セムコトヲ請ヒ日本国ノ郵便官庁及
警察ハ外國ヨリ到來セル印刷物ニ對シ此ノ種ノ若干權限ヲ

有セリトノ報告ニ接シタリ然レトモ日本国政府カ相互ノ規
定中ニ「檢閱」ナル語ヲ使用スルニ付困難ナリト認ムルト
キハ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ本項ノ他ノ文言
ヲ提議セムトスル旨ヲ聲明シタリ
本野氏ハ此ノ新文言カ通知セラルルヤ直ニ之ヲ調査スヘキ
コトヲ約セリ

特許、商標及意匠ニ關シ日本国全權委員ハ露西亜国ニ於ケ
ル日本国臣民及日本国ニ於ケル露西亜国臣民ノ權利カ完全
ニ第十六條ノ規定ニ依リ保護セラルルモノト思考セリ
日本国ニ於ケル露西亜国臣民カ實際露西亜国ニ於ケル日本
国臣民ト同一ノ程度ニ於テ保護セラルルカノ点ニ付露西亜
国全權委員カ説示セル憂慮ニ付工業及商業所有權ノ保護ニ
關スル最完全ナル法律カ現今日本国ニ施行セラルルカ故ニ
此ノ憂慮ハ全ク必要ナキコトヲ注意セシムルコトヲ要セス
(千八百九十九年三月法律第三十六号、第三十七号、第三
十八号及其ノ施行ニ關スル同年ノ諸勅令参照)
日本国全權委員ハ此ノ聲明後此ノ点ニ關シ特別條約ノ将来
締結ノ為ニ特別條項ヲ掲クルノ必要ナシト思考セリ
然レトモ若シ露西亜国政府ニ於テ上記特別條約ノ為本條第
二項トシテ追加條項ノ挿入ヲ強テ主張セラルルナラハ日本

帝國政府ハ之ニ對シテ異議ヲ有セスト為セリ

露西亜国全權委員ハ本野氏ニ對シ此ノ聲明ヲ謝シ而シテ本
項第二項ノ討議ニ移リ下ノ文言ヲ以テ之ヲ規定スルコトヲ
承認シタリ「兩締約国ハ成ルヘク速ニ工業及商業所有權ノ
保護ニ關シ相互條件ヲ基礎トシテ一ノ條約ヲ締結セムカ為
商議ヲ開クコトヲ約ス」

日本国全權委員ハ本條約施行期ノ十日ヲ二箇月ニ改メムト
ノ露西亜国ノ提議ヲ承認セリ

第十七條ノ文言ニ付テハ根本上ノ何等差異カ原文ト露西亜
国ノ修正文トノ間ニ存セサルカ故ニ案文ヲ保持スルノ意見
ヲ有セリ

此ノ文言ハ可決セラレタリ

會議ノ終ニ於テ日本国全權委員ハ露西亜国全權委員ニ對シ
千九百零六年十月十日ノ會議ニ提示シタル露西亜国修正案ノ
摘要書ニ對スル回答書(附屬書参照)ヲ交付セリ

午後六時散會

本 野 一 郎 (記名)

「エヌ、マレヴスキー、マレヴィッチ」(記名)

附屬書第四号

千九百零六年十月二十三日ノ會議ニ提出セル露西亜国
政府ノ修正案摘要書ニ對スル回答書

第一條第二項

露西亜国全權委員ハ十月二十三日ノ會議ニ於テ第一條第二
項ノ修正トシテ「相互ノ條件ニ於テ」ナル文字ノ削除ヲ提
議シタリ其ノ理由ハ

第一、一國臣民カ享有スル司法上一切ノ權利又ハ特典ヲ許
与スル規定ト相互ノ條款トハ互ニ相抵觸スルモノナルコ
ト

第二、兩締約国法制ノ差異ニ基キ實際上著シキ困難アルヘ
キコトヲ虞ルルコト

是ナリ日本国全權委員ハ露西亜国政府カ日本国臣民ニ對
シテ相互ノ條件ヲ以テ日本国ノ法制カ自國臣民ニ許与ス
ル司法上一切ノ權利又ハ特典ヲ許与スルトキハ露西亜
国臣民ハ日本国ニ於テ同様ノ權利ヲ享有スヘキカ故ニ第
一條第二項ノ規定ト相互ノ條款トノ間ニ所謂抵觸アリト
ノコトハ之ヲ承認スルヲ得ス從テ露西亜国臣民ハ日本国
ニ於テ司法上自國臣民ノ享有スル一切ノ權利ヲ享有スヘ
シ

第二ノ異議ニ付テモ亦日本国全權委員ハ司法上兩國法制ノ

差異ニ基因セル踰越シ難キ實際上ノ困難存スルコトアルヘ
ント思考セス第一條第二項ニ規定セル相互ノ事ハ主トシテ
訴訟手続上ニ於テ實際ノ必要ヲ見ルモノニシテ兩國法制ノ
間ニ存スルコトアルヘキ差異ニ付テハ互ニ兩國ノ訴訟法ヲ
審ニスルノ簡易ナルニ若カス
然レトモ日本国全権委員ハ調和ノ精神ヲ表彰セムカ為露西
亜国全権委員カ前記削除ニ関シテ自己ノ意見ヲ固執セサル
ヘカラスト思考セラルルニ於テハ「相互ノ條件ニ於テ」ナ
ル文字ノ削除ヲ認諾スヘシ

第一條第五項

露西亞国全権委員ハ前記會議ニ於テ本項中ニ包含セル「農
業」ナル文字ノ範圍ニ付説明セムコトヲ求メタリ
日本国全権委員ハ此ノ文字カ一切ノ農業上ノ勞務ニ從事ス
ルノ權能ヲ指示スルモノナルコトヲ容易ニ声明スヘシ故ニ
本條ノ規定ニ依レハ日本国ニ於ケル露西亞国臣民及露西亞
国ニ於ケル日本国臣民ハ土地ノ耕作其ノ他一切ノ農業上ノ
勞務ニ從事スルノ權利ヲ有スヘシ

土地ノ所有權ニ関シ露西亞国全権委員カ提示シタル意見ニ
付日本国全権委員ハ十月二十三日ノ會議ニ於ケル説明ニ拠
ルノ外ナシ日露兩國ハ其ノ内國法ヲ以テ所有權ニ関スル一

國ノ臣民又ハ人民ト均等ノ取扱ヲ受クヘキモノトス
其ノ他「何等ノ名義ヲ以テスルヲ問ハス土地保有」ナル語
ノ挿入ニ依リ日本国全権委員ハ永代借地ニ関シ露西亞国臣
民ノ權利カ充分ニ保障セラレタリト思考ス

加之第六項ノ規定ト結合セル第五項ノ右修正規定ハ露西亞
国臣民ニ対シ其ノ課税ニ関シ最惠国臣民ノ取扱上最有力ナ
ル保障ヲ確メタルモノナリ

露西亞国臣民ノ權利カ此ノ如ク完全ニ保障セラレタルニ依
リ日本国全権委員ハ千八百九十五年ノ旧條約第十七條ノ若
干規定ヲ拳ケテ更ニ之ヲ本條約ニ再掲スルノ実益ナカルヘ
ント思考シ露西亞国全権委員ニ対シテ本條ニ關スル其ノ修
正ノ承認ヲ固執セサラムコトヲ提議ス

第一條第八項

日本国全権委員ハ既ニ本項ニ關シテ為シタル口頭宣言ヲ確
認シ更ニ日本国ニ於ケル兵役ハ専ラ人的性質ヲ有シ全ク獨
逸國又ハ露西亞国ニ於ケルモノト同様ノ性質ヲ有シ如何ナ
ル方法ニ於テモ土地ノ保有ニ關係セサルコトヲ確認ス
本項ノ字句ニ付日本国全権委員ハ「借地人若ハ」ナル文字
ノ次ニ「保有者」ナル文字ヲ挿入シ以テ露西亞国ノ提議ヲ
承認ス而シテ本項ノ末文ハ左ノ如シ

切ノ問題ヲ規定スルコトヲ得ヘク而シテ兩國臣民ハ最惠国
臣民ノ取扱ヲ享有スルモノナルカ故ニ日本国全権委員ハ法
律上日本国ニ於ケル露西亞国臣民及露西亞国ニ於ケル日本
国臣民トノ間ニ土地ニ關スル取扱上何等不均等ノ存スルコ
トナシトノ論旨ヲ確認スルニ止ムヘシ

又事實上ニ於テモ露西亞国ニ於ケル日本国臣民ハ露西亞国
版圖ノ廣大ナルニモ拘ラス日本国ノ附近即チ黒龍江省ニ於
テ土地ヲ取得スルノ利益ヲ有スヘキ地方ニ於テ之カ取得ヲ
為スヲ得サルモノトセハ日本国ニ於ケル露西亞国臣民ニ比
シテ優等ナル地位ニ在ラサルヘシ之ヲ要スルニ法律上ヨリ
觀察スルモ將ク又事實上ヨリ考察スルモ日本国ニ於ケル露
西亞国臣民ト露西亞国ニ於ケル日本国臣民トハ土地ノ所有
權ニ關シテ全ク均等ナルヘシ

然レトモ最明白ニ露西亞国臣民カ日本国ニ於テ別国臣民ノ
如ク土地ノ所有ニ關スル特別性質ノ不動産權ヲ確定且保障
セムカ為ニ日本国全権委員ハ下ノ如ク本條第五項ヲ修正ス
ルニ付異議ヲ有セサルヘシ

農業、不動産ノ所有權其ノ他何等ノ名義ヲ以テスルヲ問
ハス土地ノ保有ニ關スル各般ノ事項ニ付テハ露西亞国ニ
於ケル日本国臣民及日本国ニ於ケル露西亞国臣民ハ最惠

「不動産ノ所有者、小作人、賃借人又ハ保有者トシテ負
担スルコトアルヘキ」

第二條

日本国全権委員ハ本條第二項「從事シ」ト「各種ノ工業及
手工業」トノ間ニ「總テ其ノ國ノ法律、命令及規則ニ遵守
シテ」ナル文字ノ挿入ニ付異議ヲ有セス

日本国全権委員ハ又本條第四項「商業」ト「警察、公安及
衛生」トノ間ニ「工業、手工業、職業」ナル文字ノ挿入ニ
付異議ヲ有セス

第四條

日本国全権委員ハ本條ノ最初ノ二項ノ文言ニ付露西亞国全
権委員カ提議セル修正ヲ精査シ以テ此ノ点ニ付日本国政府
ノ訓令ヲ求メタリ

日本国政府ハ露西亞国政府カ提議セル文言ヲ審査シタル後
本問題ノ根本ニ付テハ何等實質的異議ヲ有セス
本問題タル二項ハ単ニ旧條約ニ於テ露西亞国政府ガ承認シ
タル文言ノ再掲ニ過キササルカ故ニ此ノ規定ノ解釈ニ付テハ
事實上何等ノ困難ヲ生セス從テ日本帝国政府ハ此ノ提議ニ
係レル條文ヲ保持スルノ意見ナリ

故ニ日本国全権委員ハ露西亞国全権委員ニ対シテ日本国提

出ノ文言ニ對シ修正ヲ加ヘスシテ之ヲ承認セムコトヲ請求スルノ光榮ヲ有ス

第十條

日本帝國政府ハ露獨條約第十五條ニ依リ本條第二項ニ付露西亜國全權委員カ提議セル文字ノ附加ノ範圍ヲ審ニセス此ノ附加ハ日露兩國航海關係上何等實益ヲ有セサルカ如シ千八百九十五年ノ舊條約第十條第三項ヲ復活セシメムトノ露西亜國全權委員ノ請求ニ關シ日本帝國政府ハ現在ノ場合ト全ク別異ナル場合ニ於テ日本國ト諸外國トノ間ニ締結シタル條約ノ旧痕跡ヲ再用スルノ必要ナカルヘント思考ス且日本國ノ諸開港ニ於ケル露西亜國船舶航行ノ權利ハ本條約第十四條ニ依リ特ニ露西亜國船舶ニ許与スル最惠國臣民ノ取扱ニ依リ充分ニ保障セラルルモノナリ加之日本國全權委員ハ本條ノ「船舶ニ」ノ文字ハ日本國ト諸別國トノ間ニ締結シタル旧條約ノ條文中ニ存セサルコトヲ注意セシムヘキモノト信ス而シテ日本帝國政府カ本條ニ於テ此ノ文字ヲ挿入スヘキモノト信シタル所以ハ特ニ露西亜國船舶ニ對シ最惠國臣民ノ取扱ヲ留保セムカ為ニ外ナラス是ヲ以テ日本國全權委員ハ此ノ説明ニ依リ露西亜國全權委

故ニ日本國全權委員ハ露西亜國政府カ此ノ点ニ關シ日本國ノ外交代表機關及正式領事館ニ對シ獨逸國ノ外交代表機關及領事館ニ對スルト同様ノ原則ヲ認許スルヲ拒マサルコトヲ希望セムト欲ス

第十六條

特許、商標及意匠ニ關シ日本帝國政府ハ露西亜國ニ於ケル日本國臣民ノ權利及日本國ニ於ケル露西亜國臣民ノ權利ハ本條ノ規定ニ依リ完全ニ保護セラレタリト思考ス日本國ニ於ケル露西亜國臣民カ實際露西亜國ニ於ケル日本國臣民ト同一ノ程度ニ於テ保護セラルルヤ否ノ点ニ付露西亜國全權委員カ説示セル憂懼ニ付テハ工業及商業所有權保護ニ關スル最完全ノ法律(千八百九十九年三月法律第三十六号、第三十七号、第三十八号及同年此ノ諸法律ノ施行ニ關スル諸勅令參照)カ今ヤ日本國ニ施行セラルルカ故ニ該憂懼ハ全然無益ナルコトヲ玆ニ注意スル迄モナカルヘシ日本國全權委員ハ右ノ宣言ヲ為シタル後此ノ点ニ付將來特別條約ノ締結ノ為特別ノ條項ヲ挿入スルノ必要ナカルヘシト思考ス

然レトモ露西亜國政府カ上記條約ノ為本條第二項トシテ追加條項ヲ挿入セムト主張スルニ於テハ日本帝國政府ハ之ニ

員カ本條ニ對スル其ノ修正ノ提議ニ固執セサルムコトヲ欲ス

第十二條

日本國全權委員ハ本條第二項ニ關シ露西亜國全權委員カ提議セル修正ヲ承認ス

第十四條

日本國全權委員ハ本條ニ於ケル「手工業」ナル文字ヲ複數ニ為スコトニ付何等異議ヲ有セス

第十五條

第十五條第一項「領事代」ナル文字ノ削除ハ日本國全權委員ニ於テ何等異議ヲ有セス本條第四項ニ於ケル「相互ノ條件ヲ以テ」ナル文字ノ挿入ニ付日本國ニ於テハ檢關ノ制度存セサルノミナラス日本國全權委員ノ知悉スル所ニ依レハ日本帝國政府ハ此ノ如キ制度ヲ日本國ニ採用スルノ意思ヲ有セサルカ故ニ日本國全權委員ハ之ニ對シテ其ノ承認ヲ与フルコトヲ得サルヲ遺憾トス故ニ日本國全權委員ハ日本國提出案ノ條文ヲ保持セムコトヲ提議ス且此ノ條文ハ露西亜國政府カ獨逸國ニ關スル事項ニ付承認シタル千九百四年七月^{十五日}ノ露獨追加條約規定ノ再出ニ過キス

對シ異議ヲ有セス

第十七條

日本國全權委員ハ將ニ締結セラルヘキ條約ノ施行期ノ十日ヲ二箇月ニ變更セムトノ露西亜國ノ提議ヲ承認ス本條ノ文言ニ關シ該文言ト露西亜國ノ修正トノ間何等根本上差異ノ存セサルヲ以テ日本國全權委員ハ該提議ノ條文ヲ保持セムト欲ス

日露通商航海條約締結會議録第五号

第五回會議

千九百六年十二月二十五日 十一月一日午後三時露西亜國外務省ニ於テ開會

列席者

日本國 全權委員本野閣下、聖彼得堡日本公使

館書記官落合氏、丸毛氏、津田氏

露西亜國

全權委員「マレヴスキー、マレヴィツ

チ」氏、商工務省委員「アレクセイ

エッフ」氏、「プリレヂャイエッフ」

氏、會議書記官「ウエルクホウスキー」

氏、「ペトロック」氏、「ド、マルテン

ス」氏、「ウオヅネセンスキー」氏

會議ノ開始ニ臨ミ露西亜国全権委員ハ條約案ノ全体ヲ確定セルモノト見做スコトヲ得ムカ為ニハ尙ホ僅ニ若干点ノ解決スヘキモノアルニ過キサルトヲ證言シ日本国全権委員ノ希望ニ從ヒ去ル十一月六日ノ會議録ニ掲ケタル條約案第四條第一項及第二項ニ関スル其ノ説明宣言書ヲ新調査ニ付スルコトヲ怠ラス右説明書ニハ第一、日本国全権委員ノ意見ニ於テ條約案第十四條ト結合セル旧條約第四條ノ文言ハ一切ノ特別の取扱ニ對シ露西亜国ノ輸出ヲ十分ニ保障スルコト第二、日本国政府ノ意見ニ從ヒ條件付最惠國條款ノ理論ハ日露條約ニ於テ認許セラレサルカ故ニ最惠國條款ノ適用ハ制限の解釈ニ從フコトヲ説示セリ依テ此ノ説明ヲ領シ而シテ露西亜国政府カ懷抱セル調和ノ精神ノ説明ヲ為サムカ為ニ露西亜国全権委員ハ露西亜国政府ノ名義ヲ以テ千八百九十五年ノ條約第四條ノ初ノ二項ノ旧文言ハ變更ヲ加フルコトナク之ヲ保持セムトノ日本国ノ提議カ承認セラレタルコトヲ聲明セリ

本野氏カ露西亜国全権委員ニ對スル口頭及文書ニ依レル説明ノ結果露西亜国政府カ千八百九十五年ノ條約第四條ノ初ノ二項ノ旧文言ヲ變更スルコトヲ固執セストノ露西亜国全権委員ノ聲明ヲ領シ露西亜国全権委員ニ對シテ此ノ終局ニノ如キハ右租借地内ニ滿洲国境ヲ經テ黑龍江省中ニ外國商品ノ輸入ヲ為スヲ以テ特別ノ目的ト為セル幾多工業上ノ企業ヲ創設スルコトト為ルヘク此ノ如キ輸入ハ又著シク其ノ發達ヲ為スヘシ然シテ黑龍江省ハ此ノ取引カ露西亜国ノ商業ニ對シ輕微ノ關係ヲ呈スルニ過キサルカ故ニ遼東ニ發送スヘキ貿易商品ノ該当分量ヲ輸出スルコトヲ得ス是故ニ總テ税率協定ノ基礎ト為ルヘキ商業上ノ均衡ハ正ニ此ノ点ニ於テ缺如セルヲ見ルナリ此ノ見解ニ基キ露西亜国全権委員ハ日本国全権委員ニ對シ切ニ此ノ提議ニ固執セザラムコトヲ請ヘリ

本野氏ハ之カ回答トシテ満足スヘキ解決カ今ニ至ルマデ此ノ討議ニ付猪見セラレタルコトヲ得サリシコトヲ遺憾ト為シ日本国政府ニ對シテ露西亜国全権委員カ詳述セル論旨ヲ傳達シ以テ露西亜国全権委員ニ對シ追テ此ノ点ニ付日本国ノ決意ヲ通知スルコトヲ怠ラサルヘキ旨ヲ聲明セリ

第十條ノ調査ニ移リ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ日本国全権委員ハ會議録中ニ露西亜国ニ於テ外國船舶ニ對シテ徵收スヘキ監視料ニ関スル註解ヲ挿入スルコトニ付何等異議ヲ有セサルコトヲ證言セリ然レトモ本野氏ハ日本国カ此ノ点ニ付最惠國ノ取扱ヲ有スルコトノ言證ヲ得ムコト

達セムカ為ニ其ノ傾注シタル苦心ヲ謝セリ

再ヒ第四條ノ討議ヲ開キ露西亜国全権委員ハ滿洲ノ国境ヲ經テ露西亜国ニ輸入セル遼東租借地ノ生産又ハ製造ニ係ル物品ニ對シ輸入税ヲ免除セムトノ日本国政府ノ提出案ニ付十一月八日ノ會議ノ始ニ於テ聲明シ置キタル異議ヲ保持シ以テ下ノ注意ヲ為セリ露西亜国政府ヲシテ日本国ノ提議ヲ排斥セシメタル主タル理由ハ下記二箇ノ意思ニ在リ第一、既ニ會議録第三号ニ表示セラレタルカ如ク千九百四年五月一日ノ勅令ニ依リ現今滿洲国境上ニ設定セル自由港ノ事ハ審査中ニ在リ問題ノ豫先調査ハ既ニ終了シタリト雖目下其ノ確定的解決ヲ推定スルコト難ク立法議會ハ遠カラズ召集セラルヘク而シテ自由港ノ問題ニ付宣言スルコトアルヘキヤ必セリ事情此ノ如クナルヲ以テ露西亜国政府ハ將ニ締約スヘキ條約ノ有効期間中滿洲国境上ニ自由港ヲ保持スルノ明約ヲ負担スルコト難シ第二、仮令免税ヲ黑龍江省ニ限ルトスルモ此ノ免除ニ對シテ正当ナル報償ヲ發見スルコト能ハサルヘシ蓋シ此ノ請求ニ係レル殊遇ハ舊ニ遼東及最惠國ノ取扱ヲ享有スル諸國ヨリ輸入セル商品ニ對スルノミナラス尙租借地内ニ於テ其ノ商業上合法的ニ採用セル一定ノ變形ヲ加ヘラレタル物品ニ對シテモ亦適用セラルヘシ此

ヲ欲シ露西亜国全権委員ハ右監視料ハ舊ニ外國船舶ニ對スルノミナラス尙関稅ヲ課スヘキ外國商品ヲ積載シテ露西亜国ノ港灣中ニ碇泊セル内國船舶ニ對シテモ亦適用セラルヘキ法律ノ明文ニ依リ徵收セラルヘキモノナルカ故ニ此ノ證言ヲ与ヘムト欲シタリ新條約中ニ露西亜国船舶カ日本国ノ諸開港中ニ其ノ貨物ヲ輸送スルノ權利ニ関スル千八百九十五年ノ旧規定ヲ再掲セル露西亜国政府提出本條第三項ニ付「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ日本国政府カ其ノ實際上ノ必要ヲ認メストシテ新條約中ニ此ノ規定ノ挿入ヲ排斥シタルコトヲ説示シタリ然レトモ日本国政府ハ露西亜国船舶ニ對シテ最惠國ノ取扱ニ依リ日本国ノ諸開港内ニ航行スルノ權能ヲ認ムルコトヲ拒メルニアラス此ノ取扱ハ日本国政府カ露西亜国船舶ニ對シテ特ニ最惠國條款ヲ留保スルノ目的ヲ以テ條約第十四條ニ掲ケタル「船舶ニ」ナル文字ノ附加ニ依リ露西亜国船舶ニ對シテ許与セラレタルモノナリ十一月十九日ノ會議ニ於テ日本国全権委員ノ證言及共ノ補足的説明ニ依リ露西亜国全権委員ハ露西亜帝國政府ハ此ノ規定ノ挿入ヲ固執セサルコトヲ聲明シタリ然レトモ條約ニ依リテ諸外國ニ与ヘタル此ノ殊遇ハ右諸外國ノ承認ヲ以テ將ニ締結スヘキ條約ノ有効期間前ニ廢止スルコトヲ得ヘ

ントノ理由ニ基キ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ日本国政府ハ明示的ニ此ノ殊遇ヲ規定セル條約ノ有効期間前ニ此ノ殊遇ヲ廃止スルノ意思ヲ有セストノ説明ヲ得ムコトヲ欲シタリ

監視力ニ関スル露西亜国ノ声明ヲ領シ日本国全権委員ハ日本国政府カ露西亜国船舶ニ対シ最惠国ノ取扱ヲ許スルノ明白ナル意思ニ付露西亜国全権委員ニ対スル説明ノ結果露西亜国政府カ尙千八百九十五年ノ條約第十條中ノ一條文ヲ再掲セシムルコトヲ固執セサルコトヲ證認セルコトヲ至幸トシ本野氏ハ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ニ対シテ日本国政府ハ毫モ關係列国ノ承認ヲ以テ本條約ノ有効期間中此ノ規定ヲ廃止スルノ意思ヲ有セサルコトヲ声明スルニ付何等困難ヲ有セスト為セリ

會議ハ第十五條第四項ノ討議ニ移リタリ
露西亜国全権委員ハ十一月十九日ノ會議録ニ掲ケタル説明ニ基キ本野氏ニ対シテ本條第四項ハ左ノ文言ヲ以テ記載スルコトヲ承認セムコトヲ請ヘリ「日本国政府ヨリ露西亜国ニ派遣スル外交代表機關及正式領事館竝之ニ附屬スル諸官吏ハ新聞雜誌並學術、技芸及文學ノ著作物ノ檢閲ニ関シ相互ノ條件ヲ以テ完全ナル自由ヲ享有スヘシ」

日露通商航海條約締結會議録第六号

第六回會議

千九百七年五月一日午後三時露西亜国外務省ニ於テ
四月十九日

開會

列席者

日本国 全権委員本野閣下、聖彼得堡日本国公使館一等書記官落合氏、丸毛氏、津田氏

露西亜国 全権委員「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏、商務省委員「アレクセイ エッフ」氏、「プリレジャイエッフ」氏、會議書記官「ド、マルテンス」氏

開會ニ臨ミ露西亜国全権委員ハ條約第十七條及第十八條ノ確定文言ヲ朗讀シ而シテ十一月八日ノ會議ニ於テ問題ト為リタル別約ニ規定セル最惠国條款ニ関スル留保ノ討議ヲ再開セリ

日本国全権委員ハ右別約前文ノ條文ヲ提議セリ其ノ提案ニ依レハ此ノ前文ハ下ノ如ク記載セラルヘキモノナリ「左記ノ留保ハ外国トノ貿易及關係ニ一般ニ適用セラルル規定ト毫モ關係ヲ有セサル例外ノモノナルニ因リ本條約ニ抵触セ

本野氏ハ日本国政府ノ名ヲ以テ第十五條第四項ノ案文ヲ承認シタリ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ日本国全権委員ニ対シテ其ノ承認ヲ謝シ而シテ此ノ終ノ問題カ協定セラレタルカ故ニ條約ノ全体ハ以テ確定セラレタルモノト看做スヲ得ヘキコトヲ証認シ今後會議ノ事業ハ條約ノ附屬書ニ掲ケタル條項ノ討議ニ供セラルヘント為セリ本野氏ハ第四條第三項ヲ除キ最完全ノ協定カ兩國全権委員間ニ生スルコトヲ得タルコトニ付満足ヲ以テ之ヲ證認シ而シテ一時中止シアル諸問題モ亦同様ノ解決ヲ得ヘキコトノ希望ヲ述ヘタリ

散會ニ臨ミ露西亜国全権委員ハ條約案第七條及第八條ノ條文ハ之ヲ単一ノ一條ニ集合スルニ若カサル意見ヲ表示シ又條約ノ前文ニ於ケル「明治三十八年九月五日即チ千九百五年八月廿三日締結」ナル文字ニ代フルニ「ポーツマスニ於テ締結」ナル文字ヲ以テセムコトヲ提議セリ

本野氏ハ主義ニ於テハ此ノ提議ノ修正ニ對シ異議ヲ有セサルモ唯確定條文及形態ノ問題ハ會議專業ノ終局ノ際之ヲ討議スルコトヲ得ヘント思考セリ

午後四時散會

本野 一郎 (記名)
「エヌ、マレヴスキー、マレヴィッチ」(記名)

サルモノト看做ス但シ如何ナル場合ニ於テモ左記諸例外ノ為ノ外ハ本條約ニ定メタル内国臣民待遇及最惠国臣民待遇ノ原則ニ反シテ之ヲ引用スルコト能ハサルモノト知ルヘシ」
「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ此ノ提案ノ文言ヲ承認シ而シテ雙方ノ同意ヲ以テ決定シタル文言ニ於テ露西亜国ノ方ニ於ケル別約ノ朗讀ヲ為セリ即チ

第一條 幅員五十「ヴェルスト」ニ達スル国境地帯内ノ

地方貿易ヲ容易ナラシムル為ニ接壤諸国ニ現ニ許与シ

又ハ将来許与スルコトアルヘキ殊遇

第二條 輸入又ハ輸出ニ関シ「アルカンジェル」洲ノ住

民及亞細亞露西亜ノ北部沿岸(西比利亞)ニ現ニ許与

シ又ハ将来許与スルコトアルヘキ殊遇

第三條 千八百三十八年四月二十六日露西亜国ト瑞典国

及諸威国トノ間ニ締結シタル條約中ニ包含セラレタル

特別條款

第四條 露西亜国ト其ノ亞細亞ニ於ケル接壤諸国トノ商

業ニ關スル規定

第五條 露西亜国ニ於テ建造シ且露西亜国臣民ニ屬スル

船舶ニ与ヘラルル建造後三箇年間航海稅ノ免除

第六條 露西亜国ニ於テ遊船俱樂部ト称スル各種嬉遊協

会ニ許与シタル免除

第七條 露西亞國政府カ留保スルコトアルヘキ各種ノ物品ニ関スル專売權

本野氏ハ日本帝國政府ハ新通商條約中ニ此ノ別約ノ再掲ニ付異議ヲ有セスト雖此ノ別約中ニ韓國及「マラッカ」海峽以東ニ位セル東部亞細亞ニ於ケル日本國ノ隣邦トノ日本國ノ關係ニ関スル若干規定ヲ挿入セシメムト欲ス此ノ規定ハ專売權ニ関スル第三條ヲ附加スヘキ二條ノ別約ヲ形成スヘキモノナルカ故ニ此ノ三條ハ下ノ如ク之ヲ記載スヘキモノナリ

第一條 日本國ト韓國トノ間ニ於ケル通商、工業及航海ニ関スル特別關係ノ規定

第二條 日本國ト「マラッカ」海峽以東ニ於テ日本國ニ隣接セル東亞細亞諸國トノ通商ニ関スル規定

第三條 日本國政府カ留保スルコトアルヘキ各種ノ物品ニ関スル專売權

「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ露西亞帝國政府ハ日本國ニ對シ其ノ好意ノ明確ナル證明ヲ与ヘムト欲シ上記條項ノ挿入ヲ承認スト雖露西亞國カ日本國提出案第一條及第二條中ニ規定セル事項ニ関シ諸外國ヨリ劣等ナル地位ニ置

故ニ前記別約ノ規定ハ右規定カ日本國ニ於テ最惠國條款ヲ享有スル他國ニ適用セラルルニ非サレハ露西亞國ニ對シテ其ノ實際上ノ効力ヲ生セサルヘシ

本使ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

露西亞國全權委員ノ請求ニ基キ「ランゴヴォエ」氏ハ日本國送附外交書ノ文言ハ「日本國ニ依リテ將來第一條及第二條ニ掲クル諸國ニ對シテ許与セラルルコトアルヘキ殊遇ノミナラス尙右諸國ニ對シ既ニ許与セラレタル殊遇ヲモ包含スルモノナルヤヲ知ラムト欲スル旨ノ希望ヲ述ヘタリ

日本國全權委員ハ其ノ朗誦セシメタル日本國送附ノ外交文書ハ無差別ニ將來ノ利益及其ノ既ニ許与セル利益ヲ豫見セラルコトヲ確認セリ

同時ニ本野氏ハ露西亞國政府カ相互ノ名義ヲ以テ露西亞國ニ對シ別約(第一條乃至第五條)ニ掲クル留保ニ関シテモ亦同様ノ宣言ヲ為スコトヲ拒マサルヘントノ證言ヲ得ムト欲スル旨ヲ述ヘタリ

「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ露西亞國政府ハ條約調印ノ際交換セラルルコトアルヘキ同様ノ文書ニ依リ日本國送附ノ外交文書ニ對シ之カ回答ヲ為サムトスル旨ヲ承認

カレサルコトノ證明ヲ有セムト欲スル旨ヲ聲明シ此ノ點ニ関シ條約ニ附屬セル外交文書ノ形態ヲ有セル明示の宣言ヲ以テ總テ不均等ノ取扱ニ對シ露西亞國ヲ豫防セサルヘカラスト為セリ

本野氏ハ日本國政府ノ名ニ於テ此ノ證明ヲ与フルニ付異議ヲ有セス而シテ通商條約ト同時ニ締結スルコトヲ許サレタル下ノ外交文書ヲ朗誦シタリ

以書翰致啓上候陳者本日日本國ト露西亞國トノ間ニ締結シタル通商航海條約ニ記名スルニ方リ本使ハ日本帝國政府ノ名ヲ以テ左ノ宣言ヲ為スノ光榮ヲ有シ候

日本帝國政府カ日本國ト韓國トノ間ニ於ケル商業、工業及航海ニ関スル特殊關係ニ関スル規定竝日本國ト其ノ東亞細亞ノ隣接諸國トノ間ノ商業ニ関スル規定ヲ本條約ノ別約中ニ記入スルコトヲ露西亞帝國政府ニ提議シタルハ決シテ露西亞國ヲ他ノ諸國ト異ルカ又ハ之ヨリ劣等ノ地位ニ置クノ意思ニ出テタルニ非ス

日本國カ前記別約中ニ規定セル或種ノ利益ヲ韓國又ハ「マラッカ」海峽ノ東部ニ位スル其ノ隣接亞細亞諸國ニ許与スル場合ニハ右利益ニ関シ日本國カ他ノ最惠國條款ヲ有スル諸國ニ適用スルト同一ノ取扱ハ均シク之ヲ露西亞國ニモ適用スヘシ

セリ露西亞國ノ右外交文書ハ左ノ如ク記載セラルルモノナリ

以書翰致啓上候陳者本日露西亞國ト日本國トノ間ニ締結シタル通商航海條約ニ記名スルニ方リ本大臣ハ露西亞帝國政府ノ名ヲ以テ左ノ宣言ヲ為スノ光榮ヲ有シ候

露西亞帝國政府カ別約(露西亞國ノ方ニ於テ)第一條乃至第五條ニ掲クル規定ヲ本條約ノ別約中ニ記入スルコトヲ日本帝國政府ニ提議シタルハ決シテ日本國ヲ他ノ諸國ト異ナルカ又ハ之ヨリ劣等ノ地位ニ置クノ意思ニ出テタルニ非ス

露西亞國カ前記別約中ニ規定セル或種ノ利益ヲ最惠國條款ヲ有スル或一國ニ許与スル場合ニハ右利益ニ関スル同一ノ取扱ハ均シク之ヲ日本國ニモ適用スヘシ

故ニ右別約ノ規定ハ最惠國條款ヲ有スル他ノ諸國ニ適用セラルルニ非サレハ日本國ニ對シテ其ノ實際上ノ効力ヲ生セサルヘシ

本大臣ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

右外交文書ハ雙方ノ承認スル所ト為リ兩國全權委員ハ互ニ其ノ宣言文書ヲ交換セリ

ニ移レリ「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ其ノ第三回會議中ニ會議ニ提出シタル説明ニ基キ露西亜国政府ハ日本國提出案ノ文言ヲ以テ議定書第一項ヲ承認スト雖「國庫ノ為ニ徵收スル」ノ文字ヲ加ヘ以テ之ヲ補充セムト請求セル旨ヲ聲明セリ

本野氏ハ之ニ對シテ異議ヲ有セサル旨ヲ聲明シ而シテ日本國政府ハ旅券ニ関シ露西亜国全權委員カ提示セル説明書ニ基キ議定書第一号第二項ヲ拋棄スル旨ヲ附言セリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ此ノ聲明ヲ領シ而シテ日本國提出案第四條第三項ニ規定セル遼東トノ通商關係ノ事項ニ関シ雙方ノ一致ヲ以テ決定シタル條文ヲ以テ議定書案第二号ニ代ヘムコトヲ提議シ露西亜国全權委員ハ日本國全權委員ト特別談判ノ結果遼東問題ニ関スル本号ノ新條文ヲ決定シタルコトヲ會議ニ報告シ日露兩國政府ハ締約兩國ノ商業上ノ利益ニ於テ遼東租借地ト亞細亞露西亜ニ於ケル滿洲接壤地方トノ間ノ商業上ノ特別制度ヲ設定スルコトアルヘント思考シ露西亜国及日本國ニ對シ全ク特別ナル境遇ニ立テル滿洲ノ附近ハ此ノ協定ヲ必要トスヘク兩國政府ハ各自國境上ノ關稅制度ニ関シ互ニ完全ナル自由ヲ留保シテ以テ一方ニ於テハ遼東租借地ニ輸入セラルヘキ(一)

「ランゴヴォエ」氏ハ露西亜国全權委員ノ請求ニ基キ議定書第三号ノ文言ノ別約ノ末尾ヨリ一行目トノ間ニ差異ノ存スルコトヲ注意シ即チ議定書第三号ハ其ノ期間ノ指示(本議定書ハ前記條約ノ無効ニ歸スルト同時ニ終了スヘキモノトス)ヲ包含スレトモ議定書第三号ニ該當スル別約ノ末尾ヨリ一行目ニハ期間ニ関スル正確ナル指定ヲ包含セスト為セリ

本野氏ハ議定書案ハ日本國政府ノ作成ニ係ルモノナルモ別約案ハ露西亜国政府ノ作成ニ係レル事實ヲ挙ケテ此ノ文言ノ差異ヲ説明シ且本野氏ハ此ノ文言ノ差異ハ問題ノ根本ニ関シ變更ヲ生スルモノト思考セスト為セリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ全ク本野氏ノ此ノ見解ニ同意シ此ノ末尾ヨリ一行目ニハ別約ハ「條約中ニ其ノ全文ヲ記入シタルト同一ノ効力ヲ有スヘシ」トノ正確ナル指示ヲ包含スルカ故ニ議定書及條約ト同一ノ期間ヲ有スルヤ明ナリト為セリ

此ノ説明ノ結果別約及議定書ノ文言ハ確定セラレタルモノト看做サレタリ

次ニ會議ハ松花江ノ航行並浦潮斯德、「ニコラエフスク」及「ベトロパウロフスク」ニ於ケル日本國領事館ノ設定ニ関

黒龍江及(二)沿海露領地方ニ於ケル生産若ハ製造ニ係ル物品又一方ニ於テハ右露領二地方内ニ輸入スル遼東租借地ニ於ケル生産若ハ製造ニ係ル物品ヲ挙ケテ之ヲ滿洲ノ産物ニ準セムトスル旨ヲ互ニ聲明セリ兩國政府間ニ於ケル此ノ一致ノ結果露西亜国全權委員ハ日本國全權委員ニ對シ條約案第四條第三項ヲ下ノ如キ新條項ト為シ以テ之ヲ議定書中ニ挿入セムコトヲ提議セリ

遼東租借地内ノ生産物又ハ製造品ニシテ陸路滿洲國境ヲ經テ露西亜国黒龍江州及沿海州ニ輸入セラルルモノ及前記露西亜国二洲内ノ生産物又ハ製造品ニシテ陸路國境ヲ經テ遼東租借地内ニ輸入セラルルモノハ稅關上ノ便宜及課稅ニ関スル一切ノ事項ニ付雙方共ニ滿洲ノ生産物又ハ製造品ト同一ノ取扱ヲ受クヘシ

本野氏ハ日本國政府ノ名義ヲ以テ右修正セラレタル條文ヲ承認シタリ故ニ議定書第二号ハ確定セラレタルモノト看做サレ又議定書第三号ノ文言モ亦何等異議ヲ生セザリシヲ以テ確定セラレタルモノト看做サレタリ即チ第三号ノ文言ハ左ノ如シ

本議定書ハ本日調印シタル通商航海條約ノ批准ニ依リ批准セラレタルモノト看做サルヘシ又本議定書ハ前記條約ノ無効ニ歸スルト同時ニ終了スヘキモノトス

スル日本國提出案附屬外交文書ノ討議ニ移レリ松花江ニ関シ露西亜国全權委員ハ兩國政府ハ通常ノ外交方法ニ委セムカ為ニ此ノ通商談判ノ問題ヲ分離スルコトニ一致シタリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ上記領事館ノ事ニ関シ下ノ如ク説明ヲ為セリ

第一、浦潮斯德ニ付テハ露西亜帝國政府ハ通商上及露西亜國船舶航海上最大關係ヲ有スル日本國諸港ノ一ニ露西亜國領事館ノ設定ヲ認許セラルヘキ條件ヲ以テ通商條約締結後直ニ浦潮斯德ニ於ケル日本國領事館ノ設定ヲ認許セムト欲セリ此ノ一港ノ選定ハ未タ確定セラレスト雖此ノ点ニ付既ニ諮問セラレタル當該官憲ハ執照ヲ指定セムコトニ一致セリ露西亜国全權委員ハ本野氏ニ對シ數日内ニ之カ確答ヲ為スニ至ルヘキ希望ヲ有セリ

第二、「ニコラエフスク」ニ関シ露西亜國政府ハ主義ニ於テハ此ノ地ニ日本國領事館ヲ設定スルニ付異議ヲ有セス然レトモ日本國政府ヲシテ該港ヲ要求セシメタル理由ハ密接ニ漁業ノ利益ニ関スルモノナルカ故ニ露西亜國政府ハ漁業條約ノ締結ニ至ル迄此ノ問題ヲ留保スヘク露西亜國力對価ノ名義ヲ以テ例ヘハ小樽ノ如キ日本

國ノ該当港ニ露西亜國領事館設定ノ認許ヲ請求スヘキハ勿論ノコトトス

第三、終ニ「ペトロパウロフスク」ニ付テハ露西亜國政府ハ此ノ問題カ通商條約ト何等直接ノ關係ヲ有セス從テ通常ノ外交方法ニ依リ各別ニ議定セラルヘキモノト思考ス之カ為ニ露西亜國全權委員ハ切ニ本野氏ニ對シ會議中ニ此ノ問題ノ討議ヲ廃止モムコトヲ請ヘリ又日本國全權委員カ日本國公使館ト露西亜國外務省トノ間直接關係ニ依リ慣例ニ從ヒ領事館ノ問題ニ關スル協定ヲ設クルコトヲ概括的ニ承認セムコトヲ請ヘリ

本野氏ハ此ノ声明ヲ領シタリ但シ各別ニ領事館ノ問題ヲ討議スルコトヲ承認スルモ少クトモ條約調印前ニ浦潮斯德及「ニコラエフスク」ニ關スル事項ニ付之ヲ決定スルノ留保ヲ以テ之ヲ承認スヘキコトヲ注意セリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏ハ成ルヘク速ニ執贊及小樽ニ關シ確定回答ヲ得ムカ為ニ其ノ尽力ヲ為スヘキコトヲ約セリ

本野氏ハ會議ノ事業カ幸福ニ終了セルモノト看做サルヘキコトヲ證認シ露西亜國全權委員ニ對シ其ノ會議ニ於テ傾注モル懇切ノ情ヲ謝シ而シテ商工務省ノ各委員ニ對シ會議事

使法学博士本野閣下、書記官、落合氏、津田氏

露西亜國 全權委員外務大臣「メートル、ド、ラ、クール、アムペリヤール、」
「アレキサンデル、イスヴォルスキー」閣下、全權委員商工務大臣、帝國參事院議員、「エキューイエ、ド、ラ、クール、アムペリヤール、」
「ドミトリ、フィロゾフォウ」閣下、全權委員元老院議員「メートル、ド、ラ、クール、アムペリヤール、」
「ニコラス、マレヴスキー、マレヴィッチ」閣下、商工務省委員「アレクセイエッフ」氏、「ブリレジャイエッフ」氏、書記官
「グールケヴィッチ」氏「ストラカッチ」氏「グラヴェ」氏、「エヌ、ド、マルテンス」氏

兩締約國全權委員ハ通商航海條約ノ正文及附屬書ヲ審査シ其ノ妥當ナルコトヲ認メ互ニ其ノ各全權委任狀ヲ交換シ慣例ニ從ヒ條約及關係書類ニ記名調印ヲ為セル然ル後各全權委員ハ前記外交文書ヲ互ニ領收セリ

業ノ成功ニ与リテカアリタル其ノ尽瘁ノ勞ヲ謝シ此ノ通商上ノ協定カ兩國間友誼的關係ヲ確保スルニ至ルヘキ希望ヲ述ヘタリ

「マレヴスキー、マレヴィッチ」氏又ハ日本國全權委員ニ對シ此ノ談判ニ於ケル其ノ大ナル調和心ヲ謝シ「マレヴスキー、マレヴィッチ」自身ノ名ニ於テ並其ノ諸同僚ノ名ニ於テ日本帝國公使館各書記官ノ懇切ナル助力ヲ謝シ本野氏ト共ニ新條約カ兩國ノ關係ヲ鞏固ニシ且發達セシムルニ至ルヘキ希望ヲ有シ以テ本野氏ノ希望ニ對シ滿腔ノ同意ヲ表セリ

午後四時散會

本野 一郎 (記名)
「エヌ、マレヴスキー、マレヴィッチ」(記名)

最終會議 日露通商航海條約締結會議錄第七号

千九百十七年七月二十五日 午後二時露西亜國外務省ニ於テ開會

列席者 日本國 全權委員露西亜國駐劄日本國特命全權公

午後三時散會

本野 一郎 (記名)
「イスヴォルスキー」(記名)
「デ、フィロゾフォウ」(記名)
「エヌ、マレヴスキー、マレヴィッチ」(記名)
落合 謙太 郎 (記名)
「エヌ、ド、マルテンス」(記名)

(追記)

本野公使私信ノ別紙(參考ノモノ)
本年十月十日官報号外ヲ以テ發表セラレタル日露通商航海條約締結會議錄訳文ニハ無數ノ誤謬アリテ其重要ナラサルモノ擧ゲテ數フベカラザル程夥シキモ暫ク之ヲ措キ誤謬重大ニシテ點過スルトキハ事實上差支ヲ惹起スヘント認メラル、モノ、ミヲ擧グルモ實ニ左ノ如シ

- 一、第一項下欄末尾ヨリ八行目中毎會議單一ノトアルハ甚シキ誤謬ナリ此レハ會議全体ニ對シ單一ノト改ムベシ
- 二、第五項下欄ノ中央以下ヨリ第六項ノ上欄末尾附近迄ニ掲載セラレタル外交文書第一、外交文書第二ト題スル二個ノ文書ハ第八項下欄末尾ヨリ第七行目ニ至ル文書ノ次ニ挿入セラルベキモノナリ該二個ノ文書ハ會議錄第一号

附屬書第一号末段ニ掲ゲタル四通ノ外交文書案ヲ日本政
府ヨリ提議シタル説明書ニシテ附屬書第二号ノ末尾ニ附
加セラルベキモノナリ

三、第八項上欄末尾ヨリ第三行目ニ十六個月トアルハ十二
個月ノ誤ナリ同欄末行保障ノ文字ハ誤訳ナリ之ハ保有者
若クハ獲得ノ意義ヲ以テ訳スベキモノナリ

四、第十項下欄第二十二行目ニ有セザルガ如ク然リトアル
ハ原文ト全ク反対ノ翻訳ナリ之レハ有スルモノ、如シト
改ムヘシ

五、同欄末尾ヨリ第八行目露西亜国ニ於ケル露西亜人トア
ルハ日本国ニ於ケル露西亜人ノ誤

六、第十六項上欄末尾ヨリ第十行目最惠国臣民ノ地位トア
ル臣民ハ原文ニ無ク且此ノ文字ヲ加フルトキハ誤解ヲ生
スベシ寧ろ単ニ最惠国ノ地位ト為ス可トス若シ単ニ最
惠国ノ地位ト訳スルトキハ不明瞭ナリトセバ最惠国領事
ノ地位ト訳セザルベカラズ

七、第十七項下欄第九行目此ノ協定ノ締結ハヨリ同欄十四
行目ニ至ル迄ノ文章ハ雷ニ其意義明瞭ナラザルノミナラ
ズ原文ト異ナリタル趣意ニ解セラル、ベキ翻訳ナリ本文
章ヲ原文ノ意義ニ從ヒ翻訳スレバ左ノ如シ

其調査ニ附セラルベシト云ヘリト改ムベシ
十、第二二項下欄第三行目告知スルコトハ重大ノ誤解ヲ来
スベキ訳文ナリ se renseigner de ハ承知スルコト又ハ
知悉スルコトノ意義ニ訳スベキモノナリ

十一、第二三項下欄第二二行目偶生ヲ保障スベキトアルハ
亦甚シキ誤訳ナリ之ハ偶生ヲ防禦スヘキトノ意義ニ訳ス
ヘキモノナリ然レトモ若シ原文ノ文字ニ成ルベク拘泥シ
テ訳スルコトヲ可トスルナラバ最惠国條款ニ関シテ制限
的解釈ノ偶生ニ対シ露西亜国ヲ保障スヘキト改ムヘキモ
ノナリ

十二、第二四項上欄第二十行目右監視料ノ存セサルコトニ
付ハ原文ノ意義ニ正反対ノ翻訳ナリ改メテ右監視料ノ存
スルコトニ付ト為サルベカラズ

(附記二)

日露漁業條約締結會議録、往復文及關係文書

目次

- (一) 日本国公使ヨリ露国外務大臣ニ至ル書翰(千九百
六年七月十三日附)
六月三十日附)
- (二) 露国外務大臣ヨリ日本国公使ニ至ル書翰(千九百
六年八月九日附)
七月二十七日附)

(該文章冒頭ヨリ)

「此ノ如キ決意ハ固ヨリ實際上ノ理由ニ胚胎セルモノニ
シテ千八百九十五年以後日露兩國間ニ長久且困難ナル談
判ノ後締結セラレタル條約存在セリ此條約締結以前兩國
政府ハ協定税率ノ基礎ニヨリ相互ノ經濟的利益ヲ決定シ
置カンコトヲ勉メタリトモ其計劃ハ成功セザリシ千八百
八十九年ノ條約ノ実施ハ現ニ東京内閣ノ要求ニヨリ中止
セラレ爾後通商條約ノ改正ヲ目的トスル交渉ヲ再起シタ
ルニ方テヤ日本国政府ハ露西亜国ノ提議ニ答フルニ同政
府ハ協定税率ノ要素ハ總テ之ヲ排斥シ只單純ナル相互主
義ヲ諾スルノ外為ス能ハザル旨ヲ以テセリ」

八、第一七項下欄末尾ヨリ二行目其他數多ノ場所ニ所謂黒
龍江省トハ原文 les Provinces de l'Amour ノ翻譯語ト
シテ穩当ナラズ沿黒龍江省カ若クハ沿黒龍江地方ト訳ス
方實際ニ近シ

九、第一九項下欄第三行目ヨリ四行目ニ互ル且非正式ノ名
義ニテ參考ノ為メ云々トアルハ讀者ノ誤解ヲ来スベキ翻
訳ナリ之ヲ且ツ公然トナク參考ノ為メ附言シテ旅券新規
則ガ内務省ニ於テ制定セラルベク此法律案ハ現行旅券制
度中ニ大ナル便宜ヲ挿入シ帝國議會ノ最近ノ會議ニ於テ

(三) 露国外務大臣ヨリ在東京露国公使ニ至ル電信(千
九百六年八月二十八日附)

(四) 日露漁業協約締結會議録第一号(第一回會議、千
九百六年八月十四日)

附屬書千九百六年八月十四日日本国全權委員本野閣
下ノ提出ニ係ル日露漁業協約案

(五) 日露漁業協約締結會議録第二号(第二回會議、千
九百六年九月十三日)

「グバストク」閣下ヨリ本野閣下ニ至ル書翰(千九
百六年八月二十五日附)

附屬書第一号千九百六年九月五日露西亜国全權
委員「グバストク」閣下ノ照會ニ係ル日露漁業協約
案

同第二号千九百六年八月二十三日露西亜国全權委員
「グバストク」閣下ノ提示ニ係ル日露漁業協約案說
明書

同第三号千九百六年十月十三日(土曜日)ノ會議ニ
於テ漁業協約露西亜国案ノ説明書ニ対スル回答トシ
テ日本国全權委員本野閣下ノ提出ニ係ル意見書

同第四号千九百六年十月十三日(土曜日)ノ會議ニ於テ日本国全権委員本野閣下ノ提出ニ係ル第一條ノ文言ニ関スル修正案

本野閣下ヨリ露国全権委員ニ至ル書翰(千九百六年十月十五日附)

(六) 日露漁業協約締結會議録第三号(第三回會議、千九百六年十月二十五日)

附屬書第一号千九百六年十月二十五日(木曜日)ノ會議ニ於テ露西亜国全権委員「グバストフ」閣下ノ提出ニ係ル要点ニ関スル説明書

同第二号千九百六年十月二十五日(木曜日)ノ會議ニ於テ露西亜国全権委員「グバストフ」閣下カ「同年十月十三日附日本国全権委員ノ意見書」ニ対シテシタル答弁書

(七) 日本国公使ヨリ露国外務大臣ニ至ル覚書(千九百六年十一月七日附)

(八) 露国外務大臣ヨリ日本国公使ニ至ル回答覚書(千九百六年十一月十五日附)

(九) 「入江」ノ定義ニ関スル下調委員会第一回會議

(十七) 露国全権委員ヨリ日本国全権委員ニ至ル覚書(千九百七年三月十七日附)

(十八) 「グバストフ」閣下ノ口上書(千九百七年三月二十八日附)

(十九) 日本国公使本野閣下ヨリ露国外務大臣「イヅヴォルスキー」閣下ニ至ル覚書(千九百七年三月二十九日附)

(二十) 日本国全権委員ヨリ露国全権委員ニ至ル覚書(千九百七年四月十日附)

(二十一) 露国外務大臣「イヅヴォルスキー」閣下ノ回答覚書(千九百七年四月十三日附)

(二十二) 露国全権委員ヨリ日本国全権委員ニ至ル回答覚書(千九百七年四月十五日附)

(二十三) 「グバストフ」閣下ヨリ本野閣下ニ至ル半公信(千九百七年四月十七日附)

(二十四) 本野閣下ヨリ「グバストフ」閣下ニ至ル返信(千九百七年四月十九日附)

(二十五) 千九百七年五月四日聖彼得堡ニ於テ作成シタル日露漁業協約ノ原則ノ承認ヲ証スル議定書

(二十六) 日露漁業協約締結會議録第四号(第四回會議、

(千九百六年十一月十七日開會)

「アンス」ナル語ノ定義ニ関スル露国委員ノ意見

(十) 「入江」ノ定義ニ関スル下調委員会第二回會議(千九百六年十一月三十日開會)

露国委員ノ下シタル定義ニ対シ日本国委員ノ意見

(十一) 「入江」ノ定義ニ関スル下調委員会第三回會議(千九百六年十二月十日開會)

日本国委員ヨリ提出シタル意見ニ対シ露国委員ノ答弁

(十二) 日本国全権委員ヨリ露国全権委員ニ至ル覚書(千九百七年一月二十三日附) 並附屬覚書

(十三) 本野閣下ヨリ「グバストフ」閣下ニ至ル半公信(千九百七年一月一日附) 並別紙覚書(千九百七年一月十九日附)

二月一日 非正式会見ニ於ケル決議

(十四) 「グバストフ」閣下ヨリ本野閣下ニ至ル返信(千九百七年一月二十日附)

(十五) 日本国全権委員ヨリ露国全権委員ニ至ル覚書(千九百七年二月二十八日附)

(十六) 本野閣下ノ口上書(千九百七年三月八日附)

千九百七年六月十八日

(二十七) 日露漁業協約締結會議録第五号(最終會議、千九百七年七月十五日)

○日露漁業協約締結會議録、往復文及關係文書

(一) 日本国公使ヨリ露国外務大臣ニ至ル書翰(千九百六年七月十三日附)

第十九号

以書翰致啓上候陳者日本帝国政府ハ千九百五年九月五日「ポーツマス」ニ於テ調印セラレタル講和條約第十一條及第十二條ノ規定ニ從ヒ露西亜帝国政府ト一ノ通商航海條約竝一ノ漁業協約ヲ締結セムトノ希望ヲ以テ本使ニ其ノ全權御委任狀竝本事項ニ必要ナル訓令ヲ送達セラレ候ニ付茲ニ別紙御委任狀訳文及送附候就テハ閣下ヨリ前記事項ニ関シ露西亜帝国政府ノ執ラル、処置ヲ成ルヘク速ニ本使ニ御通譯被下候得者幸甚ノ至ニ存候

本使ハ茲ニ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候敬具

千九百六年七月十三日 在聖彼得堡日本国公使館ニ於テ

本野 一郎(記名)

外務大臣「イヅヴォルスキー」閣下

(別紙御委任狀訳文添付)

(二) 露国外務大臣ヨリ日本国公使ニ至ル書翰(千九百六年八月九日附)

以書翰致啓上候陳者本年六月三十日附貴翰第一九号ニ関シ本大臣ハ我至尊ナル皇帝陛下カ千九百五年八月二十三日「ポーツマス」ニ於テ調印セラレタル講和條約第十一條ノ規定ニ從ヒ日露兩國間ニ一ノ漁業協約ヲ締結調印セムカ為外務次官「グバストフ」氏ヲ全權委員ニ任命シ閣下ト談判ヲ開始スルノ任務ヲ授ケラレ候事ヲ閣下ニ通牒スルノ光榮ヲ有シ候

「グバストフ」氏ニ隸屬スヘキ専門委員ノ氏名ハ後日閣下ニ御通知致スヘク候

本大臣ハ茲ニ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表シ候敬具

千九百六年七月二十七日外務省第一局ニ於テ

「イズヴォルスキー」(記名)

日本国特命全權公使本野一郎閣下

(三) 露国外務大臣ヨリ在東京露国公使ニ至ル電信勅命ヲ以テ「コンセイエー、プリヴェー」

ハ「ポーツマス」條約第十一條ニ基ク漁業協約ヲ締結セムカ為全權委員ノ資格ヲ以テ本野氏ト談判ヲ開始スルノ任務

リヴェー「グリム」氏、専門委員「コムマンドル」島長官「コンセイエー」デタ「グレブニツキー」氏

外務次官「グバストフ」閣下ハ日本国公使本野閣下ニ對シテ歓迎ノ意ヲ表シ露西亜国外務大臣ノ名ヲ以テ會議ヲ開キ同時ニ外務大臣ハ本談判カ双方ニ於テ公正ニシテ調和的ノ精神ヲ以テ行ハレ本談判カ兩國ノ利益ノ為ニ満足ナル一致ヲ見ルニ至ラムコトヲ希望スル旨ヲ述ヘタリ本野氏ハ「グバストフ」氏ノ厚遇ヲ陳謝シ等シク將來ニ於ケル兩國ノ政策ノ為ニ最迅速ニ此ノ談判ノ良好ナル落着ヲ見ルニ至ラムコトヲ希望スル旨ヲ述ヘ自国政府ノ漁業協約案ヲ外務次官ニ交付セリ(附屬書第一号)同時ニ日本国公使ハ既ニ干渉ヲ始メタル新聞紙ノ秘密漏洩ヲ避クル為談判ノ経過ヲ極メテ秘密ニ附セムトノ意見ヲ提出シ「グバストフ」氏ニ漁業協約案ヲ手交スルニ際シ本野氏ハ追テ協議ノ上時日ヲ定ムヘキ次会ノ開會前ニ書面ヲ以テ露国側ノ意見書並修正案ヲ提出セラレムコトヲ希望スル旨ヲ表明セリ

「グバストフ」氏ハ日本政府ノ草案ヲ受領スルニ際シ露国政府ノ意見書ヲ送達スルニツキ約二週間ノ猶豫ヲ求メタリ進行中ノ談判ニ付守ルヘキ秘密ニ関シテハ必要ノ場合兩國

ヲ授ケラレタリ

「イズヴォルスキー」(記名)

在東京露国公使宛

(四) 日露漁業協約締結會議録第一号

第一回會議

千九百六年八月十四日午後三時開會

列席者

日本国 全權委員日本国特命全權公使本野閣下、書記官公使館一等書記官落合氏、書記官公使館二等書記官丸毛氏

露西亜国 全權委員外務次官「コンセイエー、プリ

ヴェー」「グバストフ」閣下、専門委員「アツセスール、ド、コレージュ」「ブラジニコフ」氏、書記官外務大臣附帝室「デヤンチオンム」「メイエンドルフ」男爵、書記官外務省在勤「スクレテール、ド、コレージュ」「ウオヅネセンスキー」氏

列席者

露西亜国 専門委員漁業視察官「コンセイエー、プ

全權委員カ豫メ協定シタル後新聞紙ニ通知セムコトノ意見ヲ述ヘ本野氏ハ之ニ同意セリ

日本国ノ代表者ハ「グバストフ」氏ニ其ノ全權委任状ノ写並訳文ヲ提示セムコトヲ求メ外務次官ハ之ヲ欣諾セリ

午後三時三十分散會

本野一郎(記名)
「セー、グバストフ」(記名)

附屬書第一号

千九百六年八月十四日日本国全權委員本野閣下ノ提出ニ係ル日露漁業協約案

日本国皇帝陛下及全露西亜国皇帝陛下ハ明治三十八年九月五日即千九百五年八月二十三日締結講和條約第十一條ニ依リ漁業協約ヲ締結セムカ為日本国皇帝陛下ハ、、、ヲ各其、、、ヲ全露西亜国皇帝陛下ハ、、、ヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ兩國全權委員ハ互ニ其ノ委任状ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ左ノ諸條ヲ協議決定セリ

第一條

露西亜帝國政府ハ本協約ノ規定ニ依リ日本海、「オコーツク」海及「ペーリング」海ニ屬スル露西亜國領水ニシテ土民ノ為留保シアル河川及入江ヲ除クノ外總テ露西亜國臣民

ニ漁業ヲ営ムコトヲ許ス場所ニ於テ一切ノ魚類及水産物ヲ捕獲及採取スルノ権利ヲ日本国臣民ニ許ス

第二條

本協約第一條ニ記載シタル各方面ニ於ケル漁区ノ貸下ハ其ノ短期タルト長期タルトヲ問ハス総テ競争入札ノ方法ニ依リ日本国臣民ト露西亞国臣民トノ間ニ何等ノ區別ヲ設クルコトナカルヘシ前記入札ノ時日及場所、貸下ニ関スル必要事業並公売ニ付スル各種漁区ハ入札施行ヨリ少クトモ二箇月前ニ浦潮港駐在日本国領事ヘ公然通牒セラルヘシ

第三條

前條ノ規定ニ依リ漁区ノ貸下ヲ受ケタル日本国臣民ハ其ノ漁業ト關聯スル総テノ目的ヲ以テ附帯岸地ヲ自由ニ使用スルノ権利ヲ有スヘシ前記日本国臣民ハ該岸地ニ於テ漁船及漁網ニ必要ナル修繕ヲ加ヘ漁網ヲ曳キ魚類及水産物ヲ揚陸シ並捕獲物及採取物ヲ塩漬シ乾燥シ製造シ若ハ貯蔵スルコトヲ得且此等ノ目的ヲ以テ建物、倉庫、小屋及乾燥場ヲ自由ニ築造シ若ハ移転スルコトヲ得ヘシ又本協約第一條ニ記載シタル各方面ニシテ貸下ヲ了セサル総テノ部分ニ於テ日本国臣民ハ自由ニ且露西亞国臣民ト同一ノ条件ヲ以テ一切ノ魚類及水産物ヲ捕獲及採取スルノ権利ヲ有シ且個人ノ

第八條

漁業權ヲ取得シタル日本国臣民ハ健康證書ヲ有スル船舶ヲ以テ日本国ト漁場トノ間ニ直接往復スルコトヲ得ヘシ前記船舶ハ一ノ漁場ヨリ他ノ漁場ヘ漁業上必要ナル人員、物件並漁獲物及採取物ヲ運搬スルコトヲ得ヘシ

第九條

本協約第一條ニ記載シタル各方面ニ於ケル魚類ノ養殖、保護、漁業取締其他漁業ニ関スル現今若ハ将来ノ法令ハ日露兩國臣民ニ對シ均一ニ適用セラルヘシ露西亞国政府ニ於テ新ニ前項ノ法令ヲ設クルトキハ之カ施行ヨリ少クトモ六箇月前ニ之ヲ日本国政府ニ通牒スヘシ

第十條

本協約ニ於テ「魚類及水産物」ト称スルハ一切ノ魚類及水産動物ヲ謂フ

第十一條

本協約第一條ニ記載シタル各方面ニ於ケル漁業ニ関シ特ニ本協約ニ掲ケサル事項ニ就テハ日本国臣民ト露西亞国臣民ト均一ノ待遇ヲ享クヘシ

第十二條

本協約ハ兩締約国相互ノ合意ニ依リ十五箇年毎ニ之ヲ更新

財産權ニ妨ナキ限り借区ノ附帯岸地ヲ使用スルト同一ノ方法及範圍内ニ於テ漁業ト關聯スル總テノ目的ヲ以テ前記貸下ヲ了セサル部分ノ附帯岸地ヲ使用スルコトヲ得ヘシ

第四條

本協約第一條ニ記載シタル各方面ニ於ケル漁業權並漁業及之ニ使用スル財産ニ對シ現ニ賦課シ又ハ将来賦課スルコトアルヘキ一切ノ税金若ハ取立金ニ関シテハ日本国臣民及露西亞国臣民ハ均等ノ取扱ヲ享クヘシ

第五條

本協約第一條ニ記載シタル露西亞国領水ニ於テ捕獲若ハ採取シタル魚類及水産物ニシテ日本国ニ輸出セラル、トキハ其ノ製造セラレタルト否トヲ問ハス露西亞国政府ハ之ニ對シテ何等ノ税ヲ課スルコトナカルヘシ

第六條

日本国臣民カ漁業若ハ魚類及水産物ノ製造ノ為使用スル人員ノ国籍ニ関シテハ何等ノ制限ヲ設クルコトナカルヘシ

第七條

日本国臣民ハ魚類及水産物ノ製造方法ニ関シ何等ノ制限ヲ受クルコトナカルヘシ

スヘキモノトス

第十三條

本協約ハ批准セラルヘシ該批准ハ成ルヘク速ニ且如何ナル場合ニ於テモ調印後四箇月以内ニ東京ニ於テ交換セラルヘシ

右證據トシテ兩國全權委員ハ本協約ニ記名調印スルモノナリ

明治 年 月 日即千九百 年 月 日

(五) 月 日) 聖彼得堡ニ於テ之ヲ作ル

(五) 日露漁業協約締結會議録第二号

第二回會議

千九百六年 十月十三日 午後四時三十分開會

列席者

日本国

全權委員 聖彼得堡駐劄日本国特命全權公使 本野閣下、書記官 聖彼得堡日本国公使館書記官 落合氏、丸毛氏、津田氏

露西亞国

全權委員 外務大臣代理 「コンセイエー」、プリヴェー「グバスタフ」閣下、

専門委員 商工務省參事官 「コンセイエー」、プリヴェー「ランゴボイ」氏、

専門委員「コムマンドル」島長官「コ
ンセイエー、デター」「グレブニツキ
ー」氏、専門委員商事航海局長「コ
ンセイエー、ド、コレージュ」「カチッ
シーヌ」氏（専門委員商事航海局長「コ
ンセイエー、プリヴェー」
「アレキセイエフ」氏）、専門委員「アッ
不在ニ付臨時代理」
セッスール、ド、コレージュ」「ブラ
ジニコフ」氏、書記官「メイエンドル
フ」男爵、同「ウォヅネセンスキー」
氏

闕席者

露西亜国 専門委員商事航海局長「コンセイエ
ー、プリヴェー」「アレキセイエフ」氏、
専門委員漁業視察官「コンセイエー、
プリヴェー」「グリム」氏

露西亜国全権委員ハ会議ヲ開始スルニ当リ八月二十三日
（九月五日）日本国全権委員ニ手交セシ露国案並説明書（附
屬書第一号及第二号参照）ニ関シ意見ヲ述ヘムコトヲ日本
国全権委員ニ求メタリ

日本国全権委員ハ日本案並露国対案ハ既ニ双方ノ知悉スル

「海ヲ包含セシメタル事実ハ「ボーツマス」ノ談判委
員カ漁業ナル文字中ニ均シク水産哺乳動物ノ漁獲ヲ含ムモ
ノト解スル意思ナリシコトヲ示スモノナリ次ニ露国談判委
員カ充分ナル漁業権（ブレイン、ドロア、ド、ペーシユ）
及漁業ノ権利（デ、ドロア、ド、ペーシユ）ナル文字ノ間
ニ設ケタル區別ハ「ボーツマス」條約會議録第七号ニ從フ
トキハ漁業区域ノ範圍ノ觀念ニ歸著スルニ過キス「ボーツ
マス」ニ於ケル露国談判委員ハ漁業権ナル文字ヲ用キル
ニ當テ漁業ノ権利其ノ者ヲ制限セムトセス単ニ漁区ノ範圍
ヲ制限セムトシタリ是即前記會議録第七号ヲ闕読セハ自ラ
明ラナリ

第二ノ点ニ関シ日本国全権委員ハ「ボーツマス」ニ於ケル
談判委員カ同條約第十一條ノ規定ニ依テ日本人ニ有名無実
ナラサル現実有効ノ権利ヲ附与スルノ意思ヲ有セシコトヲ
注意セリ而シテ本協約ノ規定中ヨリ入江及河川ナル文字ヲ
全然削除スルトキハ叙上ノ権利ハ有名無実トナルノ虞アリ
總テノ場合ニ於テ入江及河川ナル文字ヲ削除スルコトハ疑
モナク漁業権ヲ著シク減殺スルモノナリ普通ノ語義ニ依レ
ハ入江（アンス）ナル文字ハ奥行浅キ小灣ヲ指シ貸下ヲ受
クヘキ一漁区内ニ一若ハ数多ノ入江アルコトアルヘク又一

所ナルニ依リ今ハ両案ヲ詳細ニ研究スヘキ時期ナリ依テ逐
時研究ニ移ラムコトヲ提議シ「グバストフ」氏之ニ同意セ
ルヲ以テ本野氏ハ本協約ノ根柢ト思考スル第一條ノ特ニ重
要ナルコトニ付露国全権委員ノ注意ヲ喚起セリ
次ニ露国案ノ全体ニ関シ日本国全権委員ハ同案ヲ熟閱シタ
ル結果妥当ナル基礎ヲ有セスト思惟セラルヘキ或種ノ主張
ヲ撤回セムコトヲ望ム旨ヲ述ヘタリ

露国案ノ第一條中（一）漁業権（二）領水ノ範圍ニ就テ述ヘタル第
一ノ点即漁業権ニ関シ露国ハ「ボーツマス」條約第十一條
ニ於テ日本国方此ノ文字ニ与ヘタル意義ト著シク相違セル
意義ニ用キタリ本野氏ハ露国ノ主張ニ對シ日本国ハ國際上
並外交上ノ用語ニ於テ普通使用スル意義ニ從テ此ノ文字ノ
意義ヲ一層広義ニ解スル旨ヲ抗議シ漁業（「ペーシユ」、
「フィツシング」）ナル文字カ単ニ魚類ノ漁獲ニ止ラス臘酌
獸及鯨ノ如キ他ノ水産物ノ漁獲ヲモ含ムコトヲ主張シ此主
張ヲ確ムル為日本国全権委員ハ此ノ事項ニ関シ信憑スルニ
足ルヘキ「ラ、フォンテーヌ」ノ仏文著書五百二十頁及米
國ノ出版物（合衆國「フォーレン、リレーシヨンス」中ニ
用キタル海豹漁（シール、フィツシング）ナル文字ヲ引證
セリ且講和條約第十一條及本協約案第一條中ニ「ペーリ

入江内ニ一若ハ数多ノ漁区ノ存スルコトアルヘシ故ニ一入
江ノ存スル所ニ於テ日本人カ漁業ニ從事スルコト能ハスト
決定スルトキハ該日本人ト地方官憲トノ間ニ無數ノ困難ヲ
生シ又屢誤解ヲ惹起スヘク地方官憲ハ自己ノ任意ニ之ヲ処
分スルナラム「ボーツマス」ニ於ケル談判委員ハ日本国臣
民ニ有名無実ノ権利ヲ与ヘムトセシニアラスシテ露国漁民
ニ對スルト同様ニ現実ノ権利ヲ公平ニ附与セムトセシヤ明
ナリ是露国人並外國人ノ為ニ存スル權利ノ保障ニ関スル講
和條約第十一條ノ規定ノ明示スル所ナリ從テ日本国全権委
員ハ日本案ヲ全部維持セムコトヲ要求セサルヲ得サルモ交
讓ノ精神ニ置キ両案ニ對シ公平ニ第一條ヲ修正セムコトヲ
希望スル旨ヲ述ヘタリ依テ日本国全権委員ハ一方ニ於テ河
川ナル文字ノ削除ヲ承諾スルニ代ヘテ他方ニ於テ日本国臣
民ニ漁業ヲ許可スヘキ範圍内ニ入江ヲ含マシメムコトヲ要
求スヘント述ヘ了リテ後日本国全権委員ハ此ノ意味ヲ以テ
認メタル第一條ノ修正案ヲ露西亜国全権委員ニ手交セリ
（附屬書第三号及第四号参照）

露西亜国全権委員ハ慎重ニ日本国全権委員ノ意見ヲ聴取シ
タル旨ヲ答ヘ之ニ對スル自己並露国委員ノ謝辭ヲ呈シ即時
ニ該意見ニ就キテ討議スルヲ得サルモ暫時専門委員ノ意見

ヲ徴セムコトヲ請ヘリ

玆ニ於テ「グレブニツキー」氏ハ意見ヲ陳示シテ曰ク場所ニ関シテ日本国全権委員カ慮ルル將來ニ於ケル地方官憲ノ誤解ハ幸ニ漁区ト入江トカ相符合スルニ依リ將來ニ於テ之ヲ避クルコトヲ得ヘシ其ノ理由タルヤ漁区ノ配置ハ中央政府ヨリ發スル規則ニ從テ之ヲ定メ地方官憲ノ發スル規則ニ從テ定ムルコトナキヲ以テナリ尙露西亜国臣民ニハ「ペーリング」海ニ於テ水中哺乳動物（鯨族）ヲ漁獲スルコトヲ禁止セリ而シテ該禁止ハ條約ニ依リ之ヲ英國並米國ノ国籍ヲ有スル漁夫ニ擴張セリ日本國ハ華盛頓ノ最終條約ノ調印者中ニ加入セサルヘカラスト

日本国全権委員ハ之ニ答フルニ日本國ハ日本国臣民ノ為ニ特別ノ待遇ヲ要求スルニアラス露西亜国民ニ与フルモノト均等ナル待遇ヲ要求スルモノナルコトヲ以テセリ若モ一般ノ利益ニ於テ特別ノ提定アリトセハ素ヨリ之ニ違背スヘキニアラス日本国臣民ノ為ニ要求スル唯一ノ權利ハ哺乳動物ノ漁業ニ関シ競売アリタル場合ニ日本人カ入札シ得ルコト之ナリト述ヘタリ

「グレブニツキー」氏ハ「ペーリング」海ニ於ケル漁業カ主トシテ魚類（鮭）ヲ目的トスルコトヲ述ヘタルニ日本國

意ヲ喚起セリ

「グレブニツキー」氏ハ問題タル露領沿岸ノ全地域七千四百海里中二千八百六十五海里即殆ト其ノ半部ハ日本人ニ競売シ得ルモノナルカ故ニ有名無実ト謂ヘルハ誇張ノ言ナリトノ意見ヲ陳述セリ

日本国全権委員ハ露西亜國ノ解釈ニ從テ日本人ニ競売シ得ル漁区ト日本人ニ競売シ得サル漁区トノ双方ノ數量ヲ確定スルニアラサレハ露西亜國ノ与フル讓与ノ価値ヲ評価シ得サルヘシト謂ヘリ

「グレブニツキー」氏ハ二千八百六十五海里ナル数字ハ既ニ入江ヲ削除シテ謂ヒシ數ナル旨ヲ答ヘタリ

日本国全権委員ハ入江内ニ存スル漁区及既存漁区内ニ存スル入江ノ正確ナル範圍若ハ大体ノ範圍ヲ知ラムコトヲ希望スル旨ヲ述ヘタルニ露西亜國全権委員ハ露國専門委員ノ意見ニ依リ該地方ノ一部ニ關スル精確ナル地圖ナキヲ以テ其ノ數ハ今日正確ニ之ヲ指示スルコトヲ得スト答ヘタリ

「ランゴボイ」氏ハ「アカデミー」ノ辭書ニ依レバ「漁業」ナル文字ハ単ニ漁獲ノ漁獲ノミヲ指ストノ意見ヲ述ヘタリ

日本国全権委員ハ此ノ意見ハ語原上精確ナルヘキモ是外交上ノ用語ニアラス外交上ノ用語トシテハ漁業ナル文字ハ一

全権委員ハ此ノ点ニ付同意シタルモ水中哺乳動物ノ漁業ハ同海ニ於テ均シク重要ナルコトヲ附言セリ

露西亜國全権委員ハ意見ヲ陳述シテ曰ク第一條中ノ問題ヲ処理スルニ當テ露西亜國談判委員ハ全然「ポーツマス」條約ニ準拠シタルナリ

玆ニ於テ日本国全権委員ハ講和條約中ニ用キタル文字ニ付種種解釈ノ異ルコト有リ得ヘキ事實ニ関シ露西亜國全権委員ノ注意ヲ喚起セサルヘカラスト認メ第一、漁業ナル文字ニ付「ポーツマス」談判委員ハ之ヲ最広義ニ約シ露國案其ノ者モ固有ノ意義ニ於ケル魚類ノ漁獲ノミナラス他ノ水産物ニモ之ヲ適用セリ從テ此ノ文字ハ國際慣習上ノ見地ヨリスルニセヨ或ハ博言學上ノ見地ヨリスルニセヨ要スルニ日本案カ此ノ文字ニ与ヘタル意義ヲ有スルニスキスト述ヘタリ第二、日本国全権委員ハ更ニ入江ナル文字ニ関シテ聲明シテ曰ク此ノ文字ヲ削除スルトキハ日本人ハ漁区ノ貸下ヲ受クルニ付最早均等ナル待遇ヲ享受シ得サルヘシ斯ノ如キハ本協約ヲシテ實際有名無実ノモノタラシムルモノナリト最後ニ日本国全権委員ハ入江ナル文字ニ就テハ相矛盾セル解釈ヲ与ヘ得ルカ故ニ之ヲ削除スルトキハ實際上無數ノ紛争ヲ生スヘシト述ヘ此ノ点ニツキ露西亜國全権委員ノ注

層広義ニ解セル旨ヲ答ヘタルニ「ブラジニコフ」氏ハ「ポーツマス」會議録ノ明文ニヨリテ協約ノ効果ヲ入江及河川

ニ及ボササルコトニ確定セル以上最早再此ノ問題ニ立戻リテ討議スルハ無益ノコトニシテ今日討議ノ目的トスル所ハ入江ナル文字ノ解釈ヲ確立スルニアルコトヲ注意セリ

日本国全権委員ノ考察ハ大体ニ於テ露國専門委員ノ所説ニ合致セルコトヲ認ムルモ該文字ハ「ポーツマス」條約中ニ於テモ亦日本ノ提示セシ漁業協約案カ与ヘタル意義ト同一ノ意義ヲ有スヘキモノナルコト並條約ノ條文ノ解釈ニ關シテハ談判委員ノ意思ノ合致ヲ考量セサルヘカラスト此ノ見地ヨリスルニ此ノ文字ハ以上説明セン以外ノ意義ヲ有セサルナリ（即土民ノ利益ノ為メニ入江及河川ヲ削除スルコト）ト謂ヘリ

「ブラジニコフ」氏ハ入江ヲ削除スルトキハ日本国民ノ權利ヲ著シク減殺スヘシトノ意見ハ之ヲ認ムルモ之ヲ削除スルカ為協約ヲ有名無実ノモノトナスコトナシトノ確信ヲ述ヘ其ノ理由トシテハ入江及河川ヲ削除スルモ尙漁業ニ利アル稍広大ナル沿岸ヲ残スヘク原則トシテハ入江及河川ハ之ヲ削除スルモ特別ノ各場合ニ此ノ文字ヲ適用スルニ當テ互ニ協議ヲ遂クルコトヲ得ヘシト謂ヘリ

日本国全権委員ハ「ポーツマス」條約ニ依テ確立セラレタル
ル删除主義ニハ同意スヘキモ入江ナル文字ノ解釈ニ関シテ
協議ヲ為スノ必要アリトシ「ポーツマス」會議ノ談判委員
ハ土民ニ留保セル入江ニ著眼セシコトヲ主張シタリ
「ブラジニコフ」氏ハ入江删除ノ原則ハ聖彼得堡駐劄日本
国公使本野氏カ既ニ本年六月一日ノ口上書ニ於テ承認セ
シ所ナル旨ヲ述ヘタリ

日本国全権委員ハ右口上書ノ趣旨ヲ承認セシモ入江ナル文
字ノ解釈ハ當時与ヘラレサリシモノナルカ故ニ今茲ニ問題
ト為ルハ正ニ此ノ文字ノ真正ノ意義如何ヲ知ルニ在リト謂
ヘリ

「グレブニツキー」氏ハ灣（ベ）ナル語ノ変体タル英語
ニ所謂入江（インレット）ナル文字ヲ以テ仏語ノ入江（ア
ンス）ナル文字ニ換ヘムコトヲ提議セリ

日本国全権委員ハ「インレット」ナル文字ノ固有ノ意義ヲ
知悉セサル旨ヲ述ヘ「アンス」ナル文字トノ比較研究ヲ為
サムコトヲ留保セリ

「グレブニツキー」氏ハ「インレット」ハ陸地ニ彎入シ稍
閉塞セル灣ヲ意味シ「ポーツマス」條約ノ英文中ニアル文

回會議ノ議事録ニ記名シタリ

午後六時二十五分散会

本野 一郎 (記名)

「セー、グバストフ」(記名)

「グバストフ」閣下ヨリ本野閣下ニ至ル書簡

(千九百六年九月五日附)

以書簡致啓上候陳者本年八月十四日ノ漁業協約締結會議第
一回會議ニ於テ貴全権委員ヨリ御提出相成候貴国ノ提案ヲ
詳細ニ研究致候結果露国談判委員ニ於テ作成致候漁業協約
露国案竝説明書ヲ茲ニ閣下ニ送付スルノ光榮ヲ有シ候之ト
同時ニ本員ハ次回ノ會議ノ期日ニ関シ閣下ト協定致度候本
員ハ茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

「グバストフ」(記名)

特命全権公使 本野 一郎 閣下

附屬書第一号

千九百六年九月五日 露西亜国全権委員「グバ
ストフ」閣下ノ照会ニ係ル日露漁業協約案

全露西亜国皇帝陛下及日本国ノ皇帝陛下ハ千九百五年
八月二十三日 即明治三十八年九月五日締結セラレタル講和
九月五日 日即明治三十八年九月五日締結セムカ為全露西亜
條約第十一條ニ依リ一ノ漁業協約ヲ締結セムカ為全露西亜

林外務大臣時代 日露漁業協約 一八二

字ナリト説明シ其ノ適例トシテ亜米利加ノ地図上ニ在ル
「アラスカ」ノ「クークス、インレット」ヲ挙ケタリ

日本国全権委員ハ「インレット」ノ精確ナル意義如何ヲ質
問セルニ「グレブニツキー」氏ハ「インレット」ナル文字
ハ小灣ヲ指スト答ヘ日本国全権委員ハ「アンス」及「イン
レット」ノ二者ノ意義カ同一ノ觀念ニ一致スルモノナラサ
ルヘカラスト謂ヒ露西亜国全権委員ハ英文ヲ以テ一屬正確
ナリト信スト主張セリ日本国全権委員ハ「インレット」ナ
ル文字ニ関スル理由ヲ附シタル説明書ヲ交付セラレムコト
ヲ求メ自ラ之ヲ詳細ニ研究スヘシト約セリ

露西亜国全権委員ハ「アンス」ナル語ノ解釈ハ次回ノ會議
ノ問題タルヘシト論結セリ

日本国全権委員ハ自己ノ意見ヲ充分比較研究セラレムコト
ヲ反覆要請シ自身モ亦「アンス」及「インレット」ノ差異
ヲ攻究スヘク尙「河川」ニ関シテハ之ヲ拋棄スルノ意向ナ
ルニ付「入江」ナル文字ニ依ル除外ハ之ヲ拋棄セムコトヲ
希望スト述ヘタリ

本問題ハ依然懸案トシテ残レリ

茲ニ於テ兩國全権委員ハ互ニ其ノ全権委任状ヲ交換シ第一

国皇帝陛下ハ、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

委員ハ互ニ其ノ委任状ヲ示シ其ノ良好妥当ナルヲ認め左ノ
諸條ヲ協議決定セリ

第一條

露西亜帝国政府ハ本協約ノ規定ニ依リ河川及入江ヲ除キ日
本海、「オコーツク」海及「ベリリング」海ニ瀕スル露西
亜国沿岸ニ於テ漁類、無脊椎動物及水藻類ヲ捕獲及製造ス
ルノ權利ヲ日本国臣民ニ許ス前記河川及入江ハ本協約ノ
規定ヨリ之ヲ除外ス

第二條

日本国臣民ハ本協約第一條ノ示ス領水内ニ於テ魚類無脊椎
動物及水藻類ノ捕獲及製造ニ従事スルコトヲ得ヘシ但シ魚
類、無脊椎動物及水藻類ノ捕獲及製造ノ目的ヲ以テ特ニ設
ケラレタル水陸両面ニ亘ル漁区ニ限ル漁区ノ貸下ハ競売ノ
方法ニ依テ之ヲ為シ日本国臣民ハ前記領水内ニ於テ漁区ノ
貸下ヲ受ケタル露西亜国ノ実業家ト同一ノ權利ヲ享有スヘ
シ

前記競売ノ為ニ指定シタル時日及場所竝各種漁区ノ貸下ニ
関シ必要ナル細目ハ競売施行ヨリ少クトモ二箇月前浦潮斯

德駐在自本國領事へ公然通牒セラルヘシ

第三條

本協約第二條ノ規定ニ依リ漁区ノ貸下ヲ受ケタル日本國臣民ハ其ノ漁区ノ境界内ニ於テ漁業ニ従事スルカ為貸与セラレタル附帯ノ岸地ヲ自由ニ使用スルノ權利ヲ有スヘシ前記日本國臣民ハ該岸地ニ於テ漁船及漁網ニ必要ナル修繕ヲ加ヘ漁網ヲ曳キ魚類及水産物ヲ揚陸シ並漁獲物及採取物ヲ塩漬シ、乾燥シ、製造シ又ハ貯藏スルコトヲ得ヘシ且此等ノ目的ヲ以テ一漁期間ニ必要ナル倉庫、小屋、乾燥場ヲ自由ニ築造スルコトヲ得ヘシ

第四條

本協約ノ規定ニ支配セラルヘキ各地方ニ於テ漁区ノ貸下ヲ受ケタル日本國臣民及露西亞國臣民ハ本協約第一條ニ指定セル各地方ニ於テ漁業ヲ為シ且捕獲物ヲ製造スル權利並漁業ニ必要ナル動産及不動産ニ對シ賦課シ又ハ賦課セラルルコトアルヘキ一切ノ公課ニ関シテ均等ノ取扱ヲ亨クヘシ

第五條

露西亞帝國政府ハ本協約第一條ニ指定セル露西亞國領水ニ於テ捕獲又ハ採取セラレタル魚類、水産無脊椎動物及水藻類ニ對シ此等ノ魚類、水産無脊椎動物及水藻類カ日本國ニ

第九條

本協約ノ規定ニ支配セラルヘキ各地方ニ於テ漁区ノ貸下ヲ受ケタル日本國臣民及露西亞國臣民ハ魚類ノ養殖方法並魚類、水産無脊椎動物及水藻類ノ保護ニ関スル取締其ノ他漁業上一切ノ事項ニ関スル現行又ハ將來ノ法律規則ニ関シ均等ノ取扱ヲ受クヘシ
前記法律規則カ新ニ發布セラレタルトキハ其施行ヨリ少クトモ六箇月前日本國政府ニ通牒セラルヘシ

第十條

本協約ニ於テ特ニ規定セサル事項トモ本協約第一條ニ指定セル各方面ニ於ケル漁業ニ関スルモノニ付テハ日本國臣民ハ本協約ノ規定ニ支配セラルヘキ各地方ニ於テ漁区ノ貸下ヲ受ケタル露西亞國臣民ト同一ノ待遇ヲ亨クヘシ

第十一條

本協約ハ十箇年毎ニ兩締約國相互ノ合意ニ依リ之ヲ更新スヘキモノトス

第十二條

本協約ハ批准セラルヘシ而シテ其ノ批准書ハ成ルヘク速ニ且如何ナル場合ニ於テモ調印後四箇月以内ニ、、、、、、、、、、、ニ於テ交換セラルヘシ

輸出セラルヘキモノナルトキハ其ノ製造セラレタル否トヲ問ハス何等ノ税ヲ課スルコトナカルヘシ日本帝國政府ハ上記ノ産物ニ對シ何等ノ税ヲ課セサルヘキコトヲ約ス

第六條

日本國臣民カ魚類、水産無脊椎動物及水藻類ノ漁獲又ハ製造ノ為使用スル人員ノ国籍ニ関シテハ何等ノ制限ヲ設ケルコトナカルヘシ

第七條

露西亞國政府ハ魚類、水産無脊椎動物及水藻類ノ製造方法ニ関シテ漁区ノ貸下ヲ受ケタル露西亞國實業家ニ加ヘサル特別ノ制限ヲ日本國臣民ニ加フルコトナキヲ約ス

第八條

漁業權ヲ取得シタル日本國臣民ハ健康證書及日本國ニ於テ當該露西亞國領事ノ發シタル證明書ヲ有スル船舶ヲ以テ日本國ト漁場トノ間ニ直接往復スルコトヲ得ヘシ
前記船舶ハ一ノ漁場ヨリ他ノ漁場ヘ漁業上必要ナル人員、物件並漁獲物及採取物ヲ運搬スルコトヲ得ヘシ但シ前記船舶ハ一切ノ關係ニ於テ沿岸航海ニ関スル露西亞國ノ現行又ハ將來ノ法律ヲ遵守スヘキモノトス

右證據トシテ兩國全權委員ハ本協約ニ記名調印スルモノナリ

千九百零六年 月 日 (月 日) 即明治 年 月 日 聖彼得堡ニ於テ文ヲ作ル

附屬書第二号

千九百零六年八月二十三日 露西亞國全權委員「グバストフ」閣下ノ提示ニ係ル日露漁業協約案說
明書

露西亞國全權委員ハ本年八月一日(十四日)日本國全權委員ノ提出セル日露漁業協約案ヲ知悉シテ茲ニ該案中說明ヲ必要トスル種種ノ点ニ関シテ注意ヲ喚起セサルヘカラスト思考セリ

同案第一條中ニ「一切ノ漁業及水産物ヲ捕獲及採取スルノ權利」トアリ即漁業協約ノ基礎タルヘカラサル講和條約第十一條中ニ使用セル漁業權ナル文字ハ過度ニ広義ニ解セラレ魚類ノ漁獲ノミナラス哺乳動物(鯨族)無脊椎動物、水産動物ノ漁獲ヲモ包含セシメタリ(日本案第十條參照)トモ元來漁業ナル語ハ其ノ真義ニ於テ決シテ斯ノ如ク広義ニ約スヘキモノニアラス歴史上並博言學上其ノ他ノ論拠ニ

基ク吾人ノ定義ニ依レバ漁業ナル文字ハ専ラ魚類ノ漁獲ノ
ミニ就キテ謂フモノナリトス併ナカラ日本國ノ希望モアル
コトナレハ露西亞帝國政府ハ一層広義ニ之ヲ解シ水産無脊
椎動物及水藻類ノ漁業ヲモ包含スルモノト約スヘシ哺乳動
物(鯨、海豹、臘酌獸、臘虎)ニ関シテハ露西亞國談判委
員ハ何レノ外國ニモ露國領水ニ於テ之ヲ捕獲ヲ許スコトハ
到底問題トナリ得サルモノナルコトヲ宣言スルノ光榮ヲ有
ス

草案ノ第一條ノ第二ノ部分ニ於テ日本國政府ハ日本海、
「オコーツク」海及「ペーリソング」海ニ屬スル露國領水ニ
シテ土民ノ為留保シアル河川及入江ヲ除クノ外総テ露西亞
國臣民ニ漁業ヲ営ムコトヲ許ス場所ニ於テ漁業ヲ営ムコト
ノ權利ヲ日本國臣民ノ為ニ要求セリ「ポーツマス」條約第
十一條ノ精確ナル意義ニ基キ帝國政府ハ到底太平洋沿岸ノ
自國領水ノ各方面ニ於テ自由ニ漁業ニ從事スルノ權利ヲ日
本國臣民ニ讓与スルコトニ同意スルヲ得ス且又入江及河川
ニハ必然本協約ノ効力ヲ及ホササルヘキモノト信ス

「ポーツマス」條約ノ八月十八日(三十一日)ノ會議ニ於
テ日本國全權委員ハ太平洋沿岸ノ露西亞國領地ニ於ケル漁
業權ヲ日本國臣民ニ讓与セムコトノ要求ヲ提出セリ其ノ要

本國ニ讓与スルコトヲ約スルモ入江及河川ハ之ヲ討議ノ目
的以外ニ置キ本協約ノ規定ヨリ当然削除セラルヘキモノト
ス事實上モ露西亞國全權委員ハ日本國ノ提案中ニ在リシ
「沿岸、灣、港、入江及河川」ナル文字ヲ承認セシコトナ
ク日本國ノ有スヘキ權利ノ範圍ハ入江及河川ニ及ハス独リ
海洋ニ瀕スル沿岸ニノミ及フヘキ旨ヲ宣言シ日本國全權委
員ハ此ノ留保ニ同意セリ結局灣、港、入江及河川ナル文字
ハ確定條文中ヨリ削除セラレタリ

露西亞國談判委員ハ日本臣民カ露西亞國領水ノ總テノ方面
ニ於テ漁業ヲ営ム權利ヲ認メタル第一條ハ前記第二ノ主義
ト矛盾ス從テ本協約中ニ規定スルヲ得ストノ宣言ヲ為ササ
ルヘカラサルモノト思考ス

第一條ノ末文ニ規定セル如ク土民ニ留保セル入江及河川ニ
本協約ノ効果ヲ及ホササルコトニ関シテハ其ノ實際上ノ價值
アルコトヲ認ムルコトヲ得ス現ニ太平洋沿岸ノ露西亞國領
地ニ在ル土民ハ其ノ數僅ニ數千人ノミニシテ漁業ヲ営ムト
雖現時更ニ國家經濟ニ貢獻スル所ナシ加之土民ノ営ム漁業
ハ速カラスシテ不幸ニモ全然絶滅スルノ運命ヲ有スヘキコ
トハ確ニ疑ナキコトナリ

第三條ニ修正ヲ加ヘムコトヲ提言セル理由ハ次ノ如シ

求ハ「露西亞國ハ日本海、「オコーツク」海及「ペーリソ
グ」海ニ瀕スル露西亞國領地ノ沿岸、灣、港、入江及河川
ニ於テ充分ナル漁業權ヲ日本國臣民ニ讓与スヘキコト」ト
記サレタリ之ニ對シテ露西亞國全權委員ハ「露西亞國本問題
ニ関シ日本ト協定ヲ為スノ意向ナルモ右漁業ノ權利ハ独
リ海洋ニ瀕スル沿岸ニノミ及ヒ入江及河川ニ及ハス且既存
ノ權利ハ依然効力ヲ有セサルヘカラサル旨」ヲ答ヘ會議錄
ニ示ス如ク此ノ留保ニ同意ヲ表シ茲ニ第十一條ハ講和條約
確定ノ際該條約中ニ規定セラルルコトナレリ而シテ日本
國ニ讓与スヘキ漁業權ノ範圍並性質ノ問題ハ講和條約第十
一條ノ意義並豫備談判ヨリ生スル次ノ二原則ニヨリテ解決
スルヲ得ヘシ

一、露西亞國ハ日本國ニ或種ノ漁業權ヲ讓与スルコトヲ約
セリ右讓与スヘキ漁業權ノ種類ハ特別ノ協定ニ依リテ之ヲ
決定スヘキモ充分ナル權利即露西亞國臣民ト同等ノ權利ハ
到底之ヲ讓与スルヲ得ス現ニ日本國ノ提案ニ係ル「充分ナ
ル權利」(プレン、ドロア)ナル文字ハ露西亞國全權委員
ノ回答ニ次テ其ノ確定ノ際或權利(デ、ドロア)ナル文字
ニ換ヘラレタリ即其ノ權利ハ追テ決定スヘキモノナリ
二、露西亞國ハ海洋ニ瀕スル沿岸ニ於テ或種ノ漁業權ヲ日

太平洋沿岸ノ露西亞國領地ニ於ケル漁業管理ノ方法ニ依レ
ハ水陸両面ニ亘ル漁区貸下ノ公売ハ經營ノ最適例ナル形式
ニシテ自由ニ斯業ヲ営ムノ權利ハ近接スヘカラサル荒蕪ノ
沿岸地方ニ於テ例外ノ場合ニ認メラルルニ過キス帝國政府
ハ經營並漁業取締ノ改善ヲ目的トスルカ故ニ嚴格ニ經營ノ
第一方法ニ從ヒ特ニ此ノ利用ノ為ニ設ケラレタル漁区ノ貸
下ヲ為シ並日露兩國何レノ国籍ヲ有スルニ論ナク一切ノ企
業家ニ對シテ均等ノ待遇ヲ与ヘムト欲ス但シ之カ為沿岸十
「サジエース」ヲ使用セシムル海岸水路ノ權利(法典第
十二卷第一部第三百五十八條以下参照)ヲ廢止スルコトナ
キハ勿論ナリ

追テ發布セラルヘキ漁業法ニ依レハ漁獲ニ必要ナル水面並
該産業ノ全目的ニ必要ナル陸地ニ亘ル漁区ヲ特別ノ企業家
ニ貸下ケムトノ提案アリ

草案第四條ニ関シ講和條約ノ正確ナル意義ニ基キ露西亞國
談判委員ハ前記日本案第一條ノ説明書中ニ示サレタル如ク
漁業權ニ関シテ日露兩國臣民カ完全ニ均等ナルヘキコトヲ
認ムルハ正当ニ非スト信スルコトヲ注意セサルヘカラス帝
國政府ハ住民殊ニ土民、地方民及移住民ト企業者及特別ノ
漁民トノ間ニ常ニ嚴確ナル區別ヲ設ケ沿岸ノ移住ニ依ル國

家ノ利益ヨリ打算シテ前者ヲ優遇セリ
企業者ニ与ヘラルヘキ漁業ノ利源経営ノ唯一ノ形式ハ若干
ノ漁区ヲ貸下クルコトナルニ依リ露西亜国談判委員ハ本協
約ノ効力ノ及フ地方ニ於テ漁区ノ貸下ヲ受ケタル露西亜国
臣民ト均等ナル権利ヲ日本国臣民ニ讓与スルヲ至当ナリト
思考ス

帝國政府カ日本国臣民ト土地ノ住民及移住民ト均等ニ待遇
スルコトヲ得サルハ全然明白ナリ此等住民及移住民ハ格段
ナル保護竝特權且無償ヲ以テ漁業ヲ営ムノ權利ヲモ從來享
有シ且將來モ享有スヘキモノナリ

草案第七條ヲ修正セル理由ハ漁獲物ノ製造方法ヲ企業者ノ
自由ノ処置ニ一ニスルコト能ハサルコト竝該事項ニ関シ或
種ノ規則ヲ注意スルノ必要アルコトニアリ即將ニ發布セラ
ルヘキ漁業法中ニハ鮭族ノ魚類ヨリ肥料ヲ製造スルコトヲ
禁セムトノ案アリ兎ニ角以上ノ結果トシテ生スルコトアル
ヘキ制限ハ日露兩國ノ企業者ニ等シク擴張セラルヘシ
第九條ニ関シ前記ノ原則ニ從ヘハ本協約ニ依リ産業ニ從事
スル日本国臣民ハ本協約第一條ニ指定セラレタル各方面ニ
於テ漁区ノ貸下ヲ受ケタル露国漁業者ト均等ナル待遇ヲ受
クルヲ得サルコトヲ示ササルヘカラス

第一ノ点ニ関シ露西亜国ノ説明書ハ講和條約第十一條中
ニ用キタル漁業權ナル文字ニ付日本国政府ノ与ヘタル意
義ニ對シ歴史上及博言學上其ノ他ノ論拠ニ基キテ之ヲ争
ヘリ

日本国全權委員ハ日本国政府カ歴史上及博言學上其ノ他
ノ論拠ニ從テ實際該文字カ有スル意義ヨリモ一層広キ意
義ヲ該文字ニ与ヘタリト謂フ主張ニ對シテ極力抗議セサ
ルヘカラスト信ス日本国政府ハ一般ニ外交上ノ用語ニ於
テ該文字ニ与フル意義ヲ之ニ附シタルノミ
現ニ外交上ノ用語トシテ漁業(「ペーシユ」、「フイッシ
ング」)ナル文字ハ決シテ露西亜国説明書カ与ヘシ如キ
魚類ノ漁獲ノミニ限レル意義ヲ有セサルナリ

二三ノ实例ヲ挙示セムニ日本国全權委員ハ白耳義國ノ元
老院議員ニシテ國際法ノ教授タル「エツチ、ラ、フオン
テーヌ」氏ノ万国仲裁裁判ニ関スル知名ノ著書「パジク
リージー、アンテルナショナル」(「ブリュッセル」、
千九百二年出版)ヲ露西亜国全權委員ニ於テ参考セラレ
ムコトヲ望ム該著書ノ第五百二十頁ニ於テ臘肭獸ノ漁獲
ノ為武裝船ノ拿捕長カ英國國民ニ賠償スヘキ損害賠償額ヲ
決定スル目的ヲ以テセル仲裁裁判協約ノコトヲ記載セリ
(同第四百二十五頁参照)

日本案第十條ハ之ヲ規定スルノ必要ナカルヘシ何トナレハ
漁業ナル文字ハ本漁業協約露国案第一條中ニ充分定義セラ
レアルヲ以テナリ
第十一條ニ関シテモ亦第九條ニ関スルト同一ノ觀察ヲ下シ
得ヘシ

本協約ノ有効期限ニ関シテハ慣習ニ從ヒ十年ニ制限スルヲ
優レリトス

附屬書第三号

千九百六年十月十三日(土曜日)ノ會議ニ於テ
九月三十日(土曜日)ノ會議ニ於テ
漁業協約露西亜国案ノ説明書ニ對スル回答トシ
テ日本国全權委員本野閣下ノ提出ニ係ル意見書

露西亜帝國政府ノ對案及之ニ附帶セル説明書ヲ熟閱シタル
結果日本国全權委員ハ理由ナシト思考セラル、或種ノ主張
ヲ指摘シ露西亜国全權委員ニ於テ撤回セラレ日本帝國政府
ノ提出セシ最初ノ草案ヲ再度考究セラレムコトヲ求ムルノ
權利アリト信ス

第一條

第一條ニ對スル露国ノ説明書ハ特ニ次ノ二点ヲ研究セリ

- 一、漁業權ナル文字ノ意義
- 二、日本国カ漁業權ヲ要求スル露西亜国領水ノ範圍

英語ニ所謂漁業(フイッシング)ナル文字モ亦日本案カ
此ノ文字ニ与ヘタル意義ニ於テ外交上ノ用語トシテ普通
ニ使用セラルルモノナリ即臘肭獸ノ漁獲ヲ「シール、フ
イッシング」ト謂ヘリ(合衆國「フオレン、リレーシヨ
ンス」千八百七十三年第一部第四百二十六頁)

日本国全權委員ハ漁業權ヲ日本国人ニ許与スヘキ地方ノ
内ニ「ペーリング」海ヲ包含セシメタル唯一ノ事實ハ前
記ノ各方面ニ於ケル主タル漁業カ臘肭獸其ノ他ノ海獸ノ
捕獲ニ在ルカ故ニ明ニ「ポーソマス」談判委員ニ於テ哺
乳動物ヲ删除セサルノ意思ヲ有セシモノナルコトヲ示ス
モノナリ

日本国全權委員カ漁業ノ權利(デ、ドロア、下、ペーシ
ユ)ナル文字ヲ以テ充分ナル漁業權(プレーン、ドロア、
ド、ペーシユ)ナル文字ニ換ヘタルコトニ関スル議論ニ
就テハ日本国全權委員ハ此ノ修正ハ露西亜国ノ説明書カ
之ニ附与セムトスル如キ程度ノモノニアラサルコトヲ確
認スル為會議録第七号ヲ熟読スレハ足ルコトヲ注意スヘ
シ前記ノ修正ハ漁業權ヲ或地方ニ於テ日本国臣民ニ許与
セラルヘキコトヲ精確ニセムカ為ニ他ナラサリシノミ是
即前記會議録中ニ「露西亜国回答書ニ於テ露西亜国全權

委員ハ露国ハ本問題ニ関シ日本国ト協定ヲ為スノ意向ナルモ右漁業ノ權利ハ独リ海洋ニ瀕スル沿岸ニノミ及ヒ入江及河川ニ及ハス且既存ノ權利ハ依然効力ヲ有セサルヘカヲサレ旨ヲ説明セリ」ト明記セル所以ナリ併ナカラシカガ露西亜国ハ或種ノ漁業權ヲ許スルコトヲ約束セリトノ結果ハ決シテ生セサルナリ「ポーツマス」ノ露西亜国全權委員ノ留保ハ専ラ入江及河川ノ問題ニ限ラレタリ故ニ前記會議録ニ「日本国全權委員ハ叙上ノ條件ニ同意ヲ表シタルニ依リ第十二條ノ文言ハ左ノ如ク確定セラレタリ」ト確實ニ記載セラレタルナリ
第一点ヲ約言セムカ為日本国全權委員ハ次ノ如キ宣言ヲナスヘシ

「ポーツマス」條約談判委員ハ同條約第十一條中ニ「漁業ノ權利」ナル文字ヲ挿入シタルモ決シテ之カ為此ノ文字ノ意義ヲ制限スルノ意思ニアラサリシト從テ此ノ文字ハ本来ノ魚類ノミナラス水産哺乳動物、無脊椎動物及植物ノ漁獲ニモ適用セラレヘシ

要スルニ日本国全權委員ハ日本国案第一條ノ第一ノ部分ヲ全部維持セムコトヲ露西亜国全權委員ニ提言スルノ光榮ヲ有ス

ル文字ニ日本案カ与ヘタル如キ意義ヲ与ヘサルトキハ日本国臣民ノ漁業權ハ全然滅却セラレルカ若ハ著シク減殺セラレヘシト思考ス

黒龍江方面ニ於ケル漁業ノ主タル目的ハ鮭等ノ如キ紅魚ノ漁獲ニ在リ從テ河川ヲ全然删除スルトキハ日本人ノ漁業權ハ著シク制限セラレヘキヤ明ナリ入江ノ删除ニ就テモ亦此ノ如シ現ニ自然ノ意義ニ於テ入江トハ輿行淺キ小灣ヲ指セリ日本国全權委員ハ海洋ニ瀕セル露領沿岸ノ詳細ナル地図ヲ有セサルカ故ニ該沿岸ノ正確ナル地形ヲ確知スルヲ得スト雖該沿岸中ニハ數多ノ入江アルヘキハ想像スルヲ得ヘシ漁区ノ範圍狭少ナルトキハ該漁区ハ入江内ニ存スルコトアルヘク反之其ノ範圍広大ナルトキハ入江ハ該漁区内ニ存スルコトアルヘシ兩者何レノ場合ニセヨ日本国競落人ノ運命ハ果シテ如何若モ入江カ日本人ノ漁業權ヲ行使シ得ル地方内ニ含まレサルトキハ其ノ權利ハ全ク有名無実トナルヘシ何トナレハ一漁区カ一入江内ニ存シ若ハ一入江カ一漁区内ニ存スル總テノ場合ニ於テ日本人ハ貸下ヲ受クルコトヲ得サレハナリ且「ポーツマス」條約第十一條ノ規定ヨリ入江ヲ删除セン意義ニシテ果シテ此ノ如キモノナリトスレハ漁区ヲ日本人ニ競

第二点即帝國政府カ我臣民ノ為ニ漁業權ヲ要求スル露西亜国領水ノ範圍ニ関シテ露西亜国全權委員ハ其ノ説明書ニ於テ入江及河川ハ本協約ノ規定ヨリ当然删除セラルヘキコト竝日本国臣民ノ漁業權ハ日本海「オコーツク」海及「ベーリング」海沿岸一帯ノ露西亜国領水ニ限ラルヘキコトヲ宣言セリ

日本国全權委員ハ河川及入江ノ删除ニ関スル露西亜国全權委員ノ提議ニ對シテハ強テ争ハサルヘキモ次ノ意見ニ就キテ露西亜国全權委員ノ考量ヲ煩ハササルヘカラス日露兩國全權委員カ「ポーツマス」條約中ニ第十一條ノ規定ヲ設ケタルハ明ニ前記諸海洋ニ屬スル露西亜国領水ニ於テ日本国臣民ニ現実有効ナル漁業權ヲ公平ニ許与スルノ意思ヲ有シタリ日本国全權委員ハ當時ニ於ケル露西亜帝國政府ノ意思モ亦等シク此ノ如キモノナリト信セサルヲ得サルコトヲ認ムルヲ幸福トス

故ニ日本海「オコーツク」海及「ベーリング」海ニ瀕スル露領沿岸ニ存スル河川及入江ヲ本漁業協約ノ規定ヨリ全然删除スルトキハ日本国全權委員ハ本協約ノ規定ニ依リテ日本国臣民ニ許与セラレヘキ漁業ノ權利カ有名無実ノモノトナルナキカラ疑ハサルヲ得ス又入江及河川ナ

落セシメサラムトセハ地方官憲ノ行政処分ヲ以テ足ルヘク本協約ニヨリ与ヘラルヘキ漁業權ハ全ク偶然ノモノトナルヘシ

「ポーツマス」ノ談判委員ハ漁業ノ權利カ特別協約ニヨリテ日本国臣民ニ許与セラレヘキコトヲ決定スルニ際シ該談判委員ノ意思ハ明ニ叙上ノ如キモノニアラス現実有効ナル漁業ノ權利ヲ誠實公平ニ日本国臣民ニ与ヘムトセシモノニシテ此ノ意思ヲ明證スルモノハ露西亜国臣民若ハ外国人ニ屬スル既存權利ノ保護ニ注意セルコトナリ該談判委員ノ考察ニヨレハ日本国臣民ハ前記海洋ニ屬スル露西亜国領水ノ他ノ部分ニ於テ露西亜国人者ハ外国人ノ保有スル權利ト全ク同一ノ權利ヲ有セサルヘカラス從テ「ポーツマス」條約第十一條ニ於テ河川及入江ヲ删除セル意味ハ日本案ニ示セル意味ニ於テ解釈ヲ下スヨリ他ナキナリ

日本国全權委員ハ完全ナル一致ヲ見ルニ至ラムコトヲ希ヒ交譲ノ精神ヲ證明セムコトヲ欲スルニ依リ河川ヲ漁場ノ範圍ヨリ除スルコトニ就テハ敢テ主張セサルヘキモノ之ニ代ヘテ競売ニ附スヘキ漁区カ入江ヲ含ミ若ハ入江内ニ存スル何レノ場合ニ於テモ之ヲ日本国臣民ニ貸下ケ得ルコトト為サムコトヲ切ニ要求スヘシ

要スルニ日本全権委員ハ茲ニ添付セル文書ニ付露西亜国全権委員ノ考量ヲ煩ハスノ光荣ヲ有ス

附屬書第四号

千九百六年十月十三日 (土曜日)ノ會議ニ於テ日本全権委員本野閣下ノ提出ニ係ル第一條ノ文言ニ關スル修正案

露西亜帝國政府ハ本協約ノ規定ニ依リ日本海、「オコーツク」海及「ベーリング」海ニ屬スル露西亜國領水全部ニ於テ一切ノ魚類及水産動物ヲ捕獲、採取及製造スルノ權利ヲ日本國臣民ニ許与ス

本野閣下ヨリ露國全権委員ニ至ル書簡(千九百六年十月十五日附)

以書簡致啓上候陳者本年十月十三日(土曜日)ノ漁業協約締結會議ニ於テ口頭ヲ以テ提言スルノ光荣ヲ有シ候意見ノ摘要書ヲ茲ニ閣下ニ御送付致候就テハ漁区ニ關スル左記本員ノ質問ニ對シ成ルヘク速ニ御回答被下候ハハ幸福ノ至ニ存候

一、日本海「オコーツク」海及「ベーリング」海ニ於テ最近ノ露國規定ニ從ヒ現存スル漁区ノ全數如何

闕席者

露西亜國 専門委員「グリム」氏

露西亜國全権委員ハ日本國全権委員ニ左ノ趣旨ヲ述ヘテ會議ヲ開始セリ曰ク露西亜國談判委員ハ閣下カ前回ノ會議ニ於テ本協約ノ対策第一條ニ關シテ述ヘラレタル意見竝提案ヲ熟閱シタリ吾人カ共同從事セル至難至要ノ問題ヲ最善良ニ解釈セムカ為談判ノ進行中ニ於テ吾人ヲ指導スル原則竝吾人ノ抱懷スル善意ニ關シ閣下ノ精神ニ全然疑惑ナカラムコトヲ希望スルニ依リ一般主要ノ考量ニ關シテ簡略ナル説明ヲ為スヘシト

次ニ書記官「メイエンドルフ」男爵ハ露西亜國全権委員ノ請求ニ応シテ要点ニ關スル説明書ヲ朗誦セリ(附屬書第一号参照)

右朗誦了ルヤ露西亜國全権委員ハ日本國全権委員ノ十月十三日附最終覺書ニ關スル詳細ナル自己ノ意見書ヲ示シ(會議銀第二号附屬書第三号参照)且漁業ナル文字ノ解釈ニ關スル日本國ノ主張ヲ覆サムコトヲ努メ日本國全権委員カ曩ニ引用セシ同一ノ科学上ノ著書ヲ援用シテ之ヲ駁セリ「入江」ナル文字ニ關シテハ「グバストフ」氏ハ下調委員會会ヲ構成シテ之ニ其ノ定義ノ決定ヲ委任セムコトヲ提議セリ

二、右漁区中前回ノ會議ニ於テ露國専門委員ノ説明セラレシ如ク「アンス」ナル文字ヲ「インレット」ノ意義ニ約スル場合ニ日本國臣民ニ貸下ラレサルヘキ漁区ノ數如何本員ハ閣下ノ御厚誼ニ對シ豫メ訳辞ヲ呈シ茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

本野 一郎(記名)

「グバストフ」閣下

(六) 日露漁業協約締結會議録第三号

第三回會議

千九百六年十月十五日午後四時二十分開會

列席者

日本國 全権委員 聖彼得堡駐劄日本國特命全權公使本野閣下、書記官 落合氏、丸毛氏、津田氏

露西亜國 全権委員 外務大臣代理「グバストフ」閣下、専門委員「ランゴボイ」氏、「アレキセイエフ」氏、「グレブニツキ」氏、「ブラジニコフ」氏、書記官「メイエンドルフ」男爵、「ウォヅネセンスキー」氏

(附屬書第一号参照)

日本國全権委員ハ右朗誦セラレタル文書カ熟閱ヲ要スル迄ニ極テ重要ナル諸点ヲ包含スルコトヲ宣言シ且其ノ写ノ交付ヲ要請セリ

本野氏ハ右ノ趣ヲ断リ置キ扱「インレット」ナル文字ハ「アンス」ナル文字ト均シク不正確ノ文字タルヲ免レスト思考セラレ依テ漁業ヲ許可スル地方ト之ヲ許可セサル地方トヲ決定スル為メニハ此ノ文字ヲ以テ満足スルヲ得サルコトハ今ヨリ宣言シ置カサルヘカラス依テ日本國全権委員ハ「入江」ナル文字ノ意義ニ相当スル沿岸地方ノ目錄ヲ共同決定スルノ任務ヲ有スル下調委員ヲ任命セムトスル露西亜國全権委員ノ提言ニ同意スルヲ得ス日本國全権委員ノ意見トシテハ斯ル事業ニ入ルニ先チ第一ニ此ノ文字ノ意義ヲ確定スルヲ絶対的必要トナスカ故ニ若モ下調委員會カ入江ナル文字ノ意義ヲ確定スルヲ以テ其ノ任務ト為スニ於テハ前記委員ヲ任命セムトスル意見ニ同意スヘシ「漁業權」ナル文字ノ意義ニ關シテハ日本國全権委員ハ露西亜國全権委員ノ説明セル見解ニ同意ヲ表スルコト能ハサルヲ遺憾トスルモノナリ今ハ単ニ自己ノ觀察ヲ陳述スルニ止メ後日更ニ其ノ詳細ニ五テ述フル所アルヘシ

露西亞國全權委員ハ下調委員會ノ構成ニ同意セシコトニ関シ日本國全權委員ニ陳謝シ該委員會ノ目的ヲ「入江」ナル文字ノ意義ノ確定ニ限ルコトニ関シテハ異議ナキ旨ヲ宣言シ且委員トシテ「ブラジニコフ」氏及「グレブニツキ」氏ヲ指名セリ

日本國全權委員ハ露西亞國全權委員ノ宣言書ヲ受領シ落合氏及丸毛氏ヲ推薦シ該下調委員會ノ事業ハ兩國全權委員ノ承認ヲ強サルヘカサル旨ヲ附言セリ

午後五時散會

本野 一郎 (記名)

「セー、グバストフ」(記名)

附屬書第一号

千九百零六年十月二十五日 (木曜日)ノ會議ニ於テ露

西亞國全權委員「グバストフ」閣下ノ提出ニ係ル要點ニ関スル説明書

露西亞國全權委員ハ爾後ノ交渉ヲ繼續スル前ニ前記交渉ノ一般の性質ニ関スル帝國政府ノ見解竝露國ノ對策カ認ムル讓与ノ真価ヲ日本國全權委員ニ説明スルヲ以テ有効ナル結果ニ到達スルカ為ニ缺クヘカラサルコトナリト思考セリ首

ツマス」條約ニ於テ露西亞國全權委員ノ加ヘ置キタル制限中如何ナルモノナリトモ今更之ヲ拋棄スルコトヲ得サルナリ

「ポーツマス」條約第十一條ノ文言ノ正式ナル解釈ヨリモ寧ろ漁業ノ實際の必要ニ從ヒ帝國政府ハ既ニ次ノ如キ種種ノ讓与ヲ提供セリ

一、太平洋沿岸ニ於ケル漁業カ特別事情ヲ有スルニ依リ露西亞國ハ沿岸ノ土地ヲ漁区トシテ貸下ヲ受クル權利ヲ日本國臣民ニ与ヘムトセリ此ノ權利ハ講和條約第十一條ノ豫見セサル所ニシテ現存セル何レノ漁業協約中ニモ絶テ

其ノ規定ヲ見サル權利ナリ千九百零四年ノ英仏移民協商ニ於テモ灣及港内ニ避難スルノ權利ヲ「ニュー、ファウン、ドランド」ニ在ル仏國臣民ニ讓与セルノミ

二、前記漁区ニ於テ魚類ヲ製造シ倉庫ヲ築造スルノ權利ヲ日本國臣民ニ与ヘタリ此ノ事實ハ既ニ露國ノ政治上ノ利益ニ直接ノ損害ヲ与ヘタルモノナリ

三、帝國政府ハ日本國漁民ニ魚類ノ漁獲權ヲ与ヘタルノミナラス漁業「(ペーシユ)」ナル文字ノ本来ノ意義如何ニ拘ラス水中無脊椎動物及水藻類ヲ漁獲スルノ權利ヲモ認メタリ

府ヨリ遠隔セル未開ノ領土ニ関スル合理的の政策ノ唯一ノ基礎ハ沿岸ノ不充分ナルカ為ニ其ノ運命ヲ左右セラルルコトナキ國民分子ノ広汎整然タル移住ヲ為スニ在リ然ルニ地方ノ事情ヨリシテ極東ノ露國領土ニ於ケル移住民ハ海洋ノ自然ノ為ニ其ノ富源ヲ求メサルヘカラス薩哈噠ノ南部割讓以來其他ノ露領沿海地方ニ於ケル漁業權ノ問題ハ日本國ニ取リテハ全ク専門的利益ノミニ屬シ自國臣民ニ留保セラレタル特種ノ權利ノ限界ハ何程ナルカラ精確ニ定ムルノ必要アルニ止マル然ルニ露國ニ取リテハ之ト異リ此ノ問題ハ實ニ死活ノ問題ニシテ其ノ解決如何ハ極東ニ於ケル露國ノ全領土ニ影響ヲ及スヘキモノナルカ故ニ國家ノ利益ヨリ打算シテ太平洋ニ瀕スル露領沿岸ノ移住ニ付障害トナルヘキ規定ハ露國ニ於テ之ニ承諾ヲ与フルヲ得サルハ明ナルコトナリ叙上ノ根柢的目的ヲ達セムトスルト同時ニ帝國政府ハ露國領水ニ於テ或種ノ條件ノ下ニ漁業ニ從事スルノ權利ヲ日本國ニ附与シタル「ポーツマス」條約第十一條ノ規定ニ基ク日本國ニ對スル露國ノ義務ヲ充分ニ認メタリ

帝國政府ハ其ノ對策ニ於テ協約上ノ權利ヲ享受スレカ為ニ日本國漁民ニ實際上必要ナル讓与ハ充分之ヲ考量シタリト雖露西亞帝國ノ死活ニ関スル利益ヲ保護スル為ニハ「ポーツマス」條約第十一條ニ於テモ亦其ノ會議録第七号ニ於テモ豫見セサリシ所ノモノナリ

四、日本國漁民ハ露國領水ニ於テ漁区ノ貸下ヲ受ケタル露西亞國漁民ト同様ノ權利ヲ与ヘラルヘシ是「ポーツマス」條約第十一條ニ於テモ亦其ノ會議録第七号ニ於テモ豫見セサリシ所ノモノナリ

五、本協約ノ有効期間ニ太平洋ニ瀕スル露領沿岸ニ於ケル沿岸航行權ノ現状ニ變更ヲ来シタル場合ハ帝國政府ハ極テ拘束セサル條件ノ下ニ其ノ産業ニ関スル一切ノ目的ニ於テ同一企業者ニ屬スル漁区間ニ交通ヲナスノ權利ヲ日本國臣民ノ為ニ維持セムコトヲ確保セリ

六、帝國政府ハ本協約ノ規定以外ニ在ル地帯ニ於テモ魚類ヲ購買スル權利及漁獲物ヲ製造スル為漁区トシテ土地ノ貸下ヲ受クル權利ヲ日本國臣民ニ与フル規則ヲ制定スル考ナリ

七、最後ニ將來ニ於ケル誤解ヲ避クル為爾後漁業ニ関スル主義ノ問題ハ地方行政官庁ノ判断ニ一任スルコトナク總テ中央政府ノ詮議ヲ經ヘキモノト決定セリ

然レトモ帝國政府ハ日本案ノ豫見セル如ク漁業ノ範圍及目的ニ一切制限ヲ加ヘスシテ日本國臣民カ漁業ニ從事スルコトヲ認ムルヲ得ス且露西亜國漁民及移住民カ享受スル一切ノ權利ヲ日本國臣民ニ擴張シ又ハ前記一般の理由ノ為ニ露領沿岸ニ於ケル沿岸航海權ヲ日本國臣民ニ讓与スルコトニ同意スルヲ得ス帝國政府ハ切ニ日露兩國相互ノ利益ニ鑑ミ且成ルヘク速ニ落著セムコトヲ希望ヲ以テ行動セリ

上述スル所ニ依リ日本國全權委員ハ露國對案ノ一般の性質竝帝國政府カ極テ重要ナル本談判ニ適用セサルヘカラスト思考スル原則ニ関シ容易ニ正確ナル觀念ヲ得ラルナラム是即本談判ノ当初ニ於テ帝國政府カ一切ノ讓歩竝全然讓歩シ得サル點ヲ成ルヘク明瞭ニ且腹藏ナク陳示スルヲ必要トセン所以ナリ

帝國政府ハ其ノ讓歩シ得ル最大限度ヲ腹藏ナク開示シ其ノ對案タルヤ深キ研究ヲ経タルモノニシテ交渉ノ進行中起リ來ルヘキ本問題考究ノ結果根蒂ノ問題ニ變更ヲ加フルカ如キ意思ハ之ナキモノナルコトヲ注意セサルヘカラスト認ム帝國政府ハ本年九月二十三日交付セシ露國案竝説明書ノ基礎タル「ポーツマス」條約第十一條ノ確立セル原則ヲ超越セサル堅固ナル意思ヲ有スルコトヲ再確言スヘシ前記説明

二、漁業ナル文字ノ解釈

第一ノ點ニ関シテハ露西亜國委員ハ本協約ノ効力ノ及フヘキ限界ハ「ポーツマス」條約ニ依リテ既ニ確定セラレシモノナルコトニ付重テ注意ヲ喚起スヘシ即其ノ第十一條ニ基キ入江及河川ヲ除キ日本海、「オコーツク」海及「ベーリング」海ニ瀕スル露西亜國領水ニ於ケル漁業權ヲ日本國臣民ニ許与スルコトヲ約シタルモノナルコトナリ吾人ハ此機會ニ際シ日本國政府カ本年五月十九日（六月一日）ノ覺書ニ依リ極テ近頃吾人ト全ク同一ノ見解ナリシコトヲ立證シ得ルヲ光榮トス即深ク該文書ノ内容ニ立入ルコトナク単ニ次ノ引證ヲ為スニ止ムヘシ

「リマン」ノ漁区ハ講和條約ノ豫見セル協約ノ目的タルヘキ漁区中ニ包含セラレサルヘカラス該漁区ハ海洋ニ瀕スル沿岸ニ存在スルモノニシテ前記條約ノ除外セル入江及河川中ニ在ラサルヲ以テナリ

加之日本ノ意見書ハ「ポーツマス」條約第十一條ニ就テ下シ得ヘキ唯一ノ解釈即入江及河川ヲ削除スルコトノ解釈ヲ變更スルニ足ルヘキ法律學上ノ根拠ヲ有セス

日本國全權委員ハ（本年十月十五日）^二日ノ覺書ニ（附屬セル）其ノ意見書ニ於テ露國説明書ノ議論ノ根蒂アルコトヲ認ムル

書ハ次ノ如ク認メラレタルモノナリ
一、露西亜國ハ日本國ニ或種ノ漁業權ヲ讓与スルコトヲ約セリ右讓与スヘキ漁業權ノ種類ハ特別ノ協定ニ依リテ之ヲ決定スヘキモ充分ナル權利即露西亜國臣民ト同等ノ權利ハ到底之ヲ讓与スルヲ得ス

二、露西亜國ハ海洋ニ瀕スル沿岸ニ於テ漁業ノ或權利ヲ日本國ニ讓与スルコトヲ約シタリ即之ニヨリ入江及河川ハ問題外ニ置キタルナリ

附屬書第二号

千九百六年十月二十五日（木曜日）ノ會議ニ於テ露

西亜國全權委員「グバストフ」閣下カ「同年九月三十日附日本國全權委員ノ意見書」ニ對シ為シタル答

弁書

第一條

漁業協約第一條ノ新規ノ文言竝本年十月二日（十五日）附日本國全權委員ノ提案ニ係ル覺書附屬ノ意見書ヨリ生スル結果ヲ見ルニ前記各種ノ新條件ト露西亜國ノ提案トノ差異ハ次ノ二點ニ存セリ

一、本協約ノ効力ヲ及ホス地域

ト共ニ入江及河川ニ協約ノ効力ヲ及ホササルトキハ日本國臣民ノ權利ヲ有名無実ノモノト為スカ若ハ著シク之ヲ滅殺スヘシト述ヘ日本ノ回答書ハ「ポーツマス」談判ノ委員ノ意思カ確ニ斯ノ如キモノニアラサリシナラムト謂ヘリ吾人ハ左ノ事項ニ関シ注意ヲ喚起セサルヘカラス

本協約ノ効力ヲ入江ニ及ホササル為日本國臣民カ協約上ノ權利ヲ行使スルニ付何等ノ障害ヲ來スコトナシ現ニ薩哈噠ノ南部ニ於テハ全然入江ナルモノナク其ノ沿岸ハ全ク屈曲ナキニモ拘ラス漁業ハ充分繁榮ヲ極メツツアリ「ポーツマス」ニ於ケル露西亜國全權委員ノ意思如何ニ関シテハ我政府現在ノ見解ト絶對的同一ニシテ我國固有ノ漁業竝移住ヲ保障スル範圍ニ於テ日本國臣民ニ漁業ノ權利ヲ認メタルニ過キス「ポーツマス」ニ於ケル露西亜國全權委員ハ叙上ノ考量ニ基キ協約ノ効力ヲ入江及河川ニ及ホサス且日本國全權委員カ用キタル「充分ナル漁業權」（ブレン、ドロア、ド、ベッシュ）ナル文字ヲ修正シテ「漁業ノ權利」（デ、ドロア、ド、ベッシュ）ナル文字ニ改メ確定會議録ニ於テ之ヲ採用スルコトナリシハ明ナルコトナリ以上ノ事實ハ「ポーツマス」ニ於テ露西亜國政府カ日本國ノ要求セン權利ヲ之ニ讓与セストノ確乎タル意思ヲ有シタルコトヲ示ス

モノナリ
入江ト漁区トノ符合ヲ口実トシテ露西亜国地方官憲カ日本
国ノ競落人ヲ除斥スルコトナキカヲ虞ルル旨日本ノ意見書
中ニ言明セラレタルモ是ハ要スルニ根拠ナキコトナリ近ク
法律ニ規定セラルヘキ規則ニ從ヘハ實際上水上漁区ノ正式
ナル範圍ハ一入江ヲ包括スルニ足ラス其ノ結果漁区ハ入江
ヨリモ小ナルカ故ニ入江カ漁区内ニ包括セラルルコトハ有
リ得サルコトトナルヘク入江外ニ存スル漁区ハ一切日本国
臣民ニ競売シ得ヘク入江内ニ存スル漁区ハ露西亜国臣民ノ
為ニ留保セラルヘシ

入江及河川ノ删除ハ「ポーツマス」條約ニヨリ吾人ノ利益
ノ為ニ一ノ權利ヲ決定シタルモノニシテ国家ノ利益ヨリ觀
テ入江及河川ハ沿海地方ノ露国殖民事業及国民ノ航海及漁
業發達ノ為支柱ノ用ヲ為スモノナレハ益々以テ吾人ハ此權
利ヲ拋棄スルコトヲ得ス從テ入江及河川ヲ露国ノ移民以
外ノ者ニ許与スルカ如キハ吾人ノ犠牲ニ供スルコト能ハサ
ル巨大ノ經濟的利益ニ反スルモノナリ

以上述フル所ニ依リ「ポーツマス」條約ノ確立セル入江及
河川ニ協約ノ効力ヲ及ホサストノ原則ハ變更ヲ加フルヲ得
ス從テ現ニ進行中ノ談判ニ於テ討議ノ目的タルヘカラルサ

トヲ日本国全権委員ニ提議セサルヘカラスト思考ス吾人ノ
見解ニ依レバ日露兩國ヨリ委員ヲ任命シテ下調査員会ヲ組
織シ之ニ該事業ヲ委任スルヲ適當トスヘシ該下調査員会ノ
作成ニ係ル草案ヲ確定認可スルノ權能ハ兩國全権委員ニ屬
スヘキモノトス當該沿岸地方ノ英文及露文ノ航海地圖ハ前
記事業ノ材料タルコトヲ得ヘシ但シ前記地圖ハ當該沿岸ノ
全部ヲ含マス從テ「アイアンヌ」港ヨリ「チギリ」河口ニ
至ル「オコーツク」海沿岸及「カムチャツトカ」岬以北ノ
「ペーリング」海沿岸ハ未タ充分ナル探險ヲ經サルニ依リ
此ノ地方ニ関スル地圖ハ該目錄ヲ作成スルニ付提供スル
ヲ得サルカ故ニ該方面ニ関シテハ原則トシテ入江ナル文字
ノ解釈ヲ確立スルニ止メサルヘカラス而シテ時ヲ經テ該沿
岸地方ニ関スル探險ノ進捗スルニ從ヒ前記ノ処置ヲ以テ入
江ノ目錄ヲ作求スルヲ得ヘシ

右ハ即本協約ノ効力ヲ及ホスヘキ地域ニ関スル確乎タル吾
人ノ見解ナリ

第二ノ点即漁業ナル文字ノ意義ニ就テノ争点ニ関シテハ左
ノ如ク陳述スルニ止ムヘシ

本年十月十五日ノ覺書ニ附屬セル日本国ノ意見書ニ於テ述

ヘラレン如ク「漁業」ナル文字ハ外交上及國際上ノ用語ト

モノト信ス按スルニ吾人ノ目的トスル所ハ「ポーツマス」
條約ノ修正ニアラス何トナレハ是吾人ノ委任ヲ超越スルモ
ノナレハナリ併ナカラ入江ナル文字ヲ與行淺キ小灣ト解ス
ルカ為生スル結果ヲ日本国ノ為ニ輕減スルコトヲ希望スル
ニ依リ明確ナル露国ノ權利カ損害ヲ蒙ルニモ拘ラス「ポー
ツマス」會議録ノ英文中ニ用キタル「インレット」ナル
文字ノ意義ヲ仏語ノ「アンス」ナル文字ニ与ヘムコトヲ提
議スヘシ斯クストキハ公平ノ処置ニ於テ露国ノ利益ヲ確
保スルト共ニ日本国臣民ヲシテ一層有利ナル條件ノ下ニ其
ノ協約上ノ權利ヲ実行セシムルコトヲ得ヘク吾人ノ切ニ希
望スルカ如ク遲滞ナク全部ノ協商ヲ遂クルニ付最良ノ方法
タルヲ失ハサルヘシ「インレット」ノ意義ハ例ヘハ「ボシ
エツト」灣、聖「オルガ」灣、「イムペリアル」浦、「ド、
カストリー」港、「アヴァチンスキー、インレット」ノ如
ク陸地ニ灣入シ稍閉塞セル灣竝陸地間ニ横ハレル或範圍ノ
海峡ヲ謂フ

入江(アンス)ナル文字ヲ英語ノ「インレット」ノ如ク適
用スルニ就テ生スルコトアルヘキ將來ノ誤解ヲ避ケムカ為
本協約ノ効力ヲ及ホササルヘキ入江(インレット)ノ意義
ニ相當スル沿岸各方面ノ目錄ヲ今日ニ於テ共同作成セムコ

シテ一般ニ魚類ノ漁獲ノミナラス一切ノ水産動植物ノ漁獲
ヲモ意味セリトノ意見ニ同意スルヲ得サルヲ遺憾トス右反
對ノ意見ヲ確實ニスルカ為ニハ露国説明書ニ對シテ日本国
全権委員ノ論拠トセシ「ラ、フォンテーヌ」ノ著者「パジ
クリジ、アンテルナシヨナール」「ベルン」(千九百二
年)ヲ熟閱スルヲ以テ足レリトス即其ノ第六百十八頁第百
六十六章(千九百年九月八日)「臘納獸ノ捕獲ニ從事スル米
国「スクーナ」型帆船及捕鯨船拿捕ノ弁護ヲ目的トスル
仲裁裁判問題ニ於テ臘納獸ノ獵獲(「シャツス、オー、フォ
ク、ア、フリーユール」)ナル文字ヲ用キタリ從テ漁業
ナル文字ハ外交上ノ用語ニ於テ各種ノ水中動物ノ捕獲ニハ
之ヲ使用セス而シテ外交上ノ用語ニ於テモ此ノ分類ヲ排斥
スルコトナキナリ

露西亜国政府ハ数次漁業ニ関スル交渉ヲナセシモ常ニ慎重
ニ「魚類ノ漁獲」(「ペーシユ、デ、ポアッソン」)ト「鯨
族ノ捕獲」(「カプチュール、デ、セタセ」)トヲ區別セリ
外觀上日本国政府ハ少クトモ農商務省ノ公刊書(東京、千
九百年)ニ於テ從來同一ノ區別ヲナセリ例ヘハ同書中ニ臘
虎及臘納獸ノ獵獲(「ラ、シャツス、ア、ラ、ルートル、
エ、オー、フォク」)ト題スル特別ノ一章(第八十七頁)

アリ

国際法（「ブラジエー、フォデレー」欧米国際公法詳論、巴里、千八百九十一年、海事関係ノ節、第五卷第二千四百四十四頁参照）ハ小漁業（即沿海漁業）ト大漁業トヲ區別シ海岸ニ沿テ実行セラルル沿岸漁業ノ目的物ハ魚類ニシテ大漁業ノ目的物ハ鯨其ノ他ノ鯨族ナリトセリ右區別ノ結果「ポーツマス」條約第十一條ニ從テ日本国民ニ許与セラ

ルヘキ漁業ハ沿岸漁業ニ限ラレ從テ哺乳動物ノ捕獲ヲ含マサルモノトス
日本ノ意見書ノ主張ニ拠レハ「ベーリシグ」海ニ於テ漁業權ノ讓与ヲ与ヘタル事実ハ即所謂該沿岸ノ主タル富ヲ形成スヘキ哺乳動物ノ捕獲ヲ含ムモノナリト為スト雖實際上露国カスル讓与ヲ為スコト能ハサルハ現ニ臘肭獸及臘虎ノ獵獲ハ露西亜国民ニモ均シク禁止セル所ノモノナルコトヲ玆ニ注意セムト欲ス

以上陳述セン所ニ依リ露西亜国政府ハ日本国政府カ漁業ナル文字ニ余リニ広キ意義ヲ与ヘタル傾向アル事実竝最正鵠ヲ得タル此ノ文字ノ解釈ハ露国説明書ノ採用セシ博言學上及歴史上其ノ他ノ論拠ニ基ク科学的解釈ナルコトヲ当然主張スヘシ

兩國全權委員ノ意見ヲ異ニスル所ハ即チ左ノ二点ニ在リ

一、漁業ノ目的タリ得可キ水産物ニ關スルコト

二、日本人ノ漁業權ヲ行使シ得可キ方面ニ關スルコト

第一、右第一点ニ關シテハ日本国草案ハ「ポーツマス」條約ニ基キ其ノ第一條ニ於テ一切ノ魚類竝水産物ハ共ニ皆日本国民ノ漁業權ノ目的タリ得可キコトヲ記載セリ然ルニ之ニ對スル露国草案ハ該解釈ヲ否認シ該漁業權ヲ以テ唯單ニ魚類、海産無脊推動物及海藻ノ漁獲ノミニ限定セリ

第二、其ノ第二点ニ關シテハ日本国草案ハ「ポーツマス」條約竝同會議録第七号制定ノ際口頭交換セラレタル声明ニ遵拠シ單ニ土民ノ為ニ留保セラルル河川竝入江ノミヲ除外シ得ルモノト信シタリ然ルニ之ニ對スル露国草案ハ入江竝河川ニ關シ何等規定ナキ同條約第十一條ニ依ラスシテ同會議録第七号ノ字句ヲ根拠トシ本協約ヨリ入江及河川ヲ全然除去シタリ

日本国公使ハ露国カ絶東ニ於テ土民及移住民ノ保護ニ關シテ多大ノ利害關係ヲ有スルコトヲ充分ニ承認シ之ト均シク又日本国カ太平洋ニ瀕スル露国沿岸ニ於テ其ノ自國ノ漁業權ヲ保護セサルヘカラサル利害關係ヲ考察ス蓋シ是本讓与

叙上ノ如ク日本国民ノ利益ノ為ニ「入江」ナル文字ニ就テハ制限セル解釈ヲ採リタルモ「漁業」ナル文字ニ關シテハ露西亜国全權委員ハ前記ノ如キ解釈ヲ維持スルヲ以テ論理ニ合ヒタルモノト信ス而シテ此ノ條件ノミニテ「入江」ナル文字ニ關スル露国ノ讓与ハ充分報償セラレタリト思考スルニ依リ日本国全權委員ニ於テモ亦「漁業」ナル文字ニ付自己ノ解釈ヲ拋棄セラレムコトヲ提言ス其ノ對価トシテ露西亜国全權委員ハ仏語ノ「アンス」ナル文字ニ英語ノ「インレット」ナル文字ノ意義ヲ与フルコトニ同意スヘシ

(七) 日本国公使ヨリ露国外務大臣ニ至ル覚書（千九百零六年十月二十四日附日本国公使館）

日本国公使ハ日露兩國間ニ漁業協約締結ノ為開催セラレタル談判ガ同協約草案第一條ノ規定ニ關シ日露兩國全權委員ノ間ニ意見ヲ異ニスルモノアルニ依リ憂フ可キ停滞ヲ見ルニ到リシコトヲ言明セサルヲ得サルヲ遺憾トス蓋シ本協約草案第一條ハ太平洋沿岸ニ瀕スル露国領水内ニ於テ日本国民ノ為ニ許与セラル可キ漁業權ノ原則ヲ規定セルモノナルカ故ニ本協約ノ大本ヲ為スモノナリト認メサル可カラサルヲ以テナリ

ハ「ポーツマス」條約要件中ノ一ニ屬スルカ故ニシテ日本国全權委員ハ「ポーツマス」條約第十一條ヲシテ決シテ之ヲ死文ニ帰セシムルコトヲ承認スル能ハス

日本国全權委員ハ兩國ノ利益ヲシテ調和セシメムカ為十月十三日（九月三十日）ノ會議ニ於テ將來ニ於ケル一切紛議ノ原因ヲ排除シ相互ノ利益ヲ確保スルニ適當スルモノト認メタル修正案ヲ提出シタリ

露国全權委員ハ該修正案ニ對シ絶対ニ之ヲ否認シ而シテ更ニ「入江」ナル文字ニ關シ本来本文字ハ灣入淺キ小灣ヲ指示スルモノナルニ拘ハラシ「ボシエット」及「オルガ」ノ如キ竝「インペラトルスカヤ」灣、「ド、カストリー」灣、「アバチンスキー」入江ノ如キ大灣ヲモ尙之ヲ包含セシメ得ヘキモノナリトノ解釈ヲ提出シタリ

然レトモ斯ノ如キ解釈ハ決シテ之ヲ承認スルコト能ハス蓋シ是若該解釈ヲ承認セムカ「ポーツマス」條約調印者ノ全ク予見セザリシ結果ニ到達ス可キヲ以テナリ即該解釈ニ依ルトキハ薩哈噠島黒龍江口間ニ於ケル黒龍江海湾（リマシ）ノ漁業ハ除外セラレサルヘカラサルコトヲ承認セサルヘカラサルヲ以テナリ斯ノ如キ結果ハ絶対ニ承認シ得ヘキコトニアラストス

「入江」ナル文字ニ関シ正当公平ナル定義ヲ下サムカ為材料蒐集ノ目的ヲ以テ一ノ下調委員會ノ設立ヲ見ルニ到リシト雖日本国公使ハ若露国委員ニシテ依然其ノ主張ヲ維持スルニ於テハ満足ナル効果ヲ納ムルコトヲ能ハサルヘキヲ憂惧シ而シテ尙「入江」ナル文字ニ関シ如何ナル定義ヲ下スニセヨ衝突ハ常ニ免レ得ヘカラサルコトヲ附言スヘシ蓋シ是其ノ確定セラレタル定義ニ該当スヘキ入江トハ果シテ何ソヤヲ絶対確實ニ定ムルハ仮令之ヲ以テ不可能事ニアラストスルモ至難ノ事ニ屬スルヲ以テナリ是即日本国公使ノ入江ナル文字ノ解釈ニ関シ將來ニ於テ紛議ノ生セムコトヲ憂惧スル所以ナリ

是時ニ際シ二箇ノ解決方法アリ左ノ如シ

- 一、大小一切ノ灣又ハ入江ニ於ケル漁業ヲ禁止スルコト
- 二、河川ヲ除クノ外全領水ニ於ケル入江ヲ除外セスシテ

漁業ヲ許可スルコト

若夫レ右第一ノ解釈方法ヲ承認ストセハ是實ニ「ポーツマス」講和條約ヲ以テ約束セラレタル漁業ノ權利ヲ日本人ヨリ除去スルモノナリ何トナレハ若入江ニシテ或程度ノ大サヲ有スルトキハ入江ノ中ニ漁区ヲ包容センメ若又入江ニシテ狭小ナルトキハ漁区ノ中ニ入江ヲ包含セシムルハ常ニ是

ノニシテ二者ノ間ニハ何等ノ差別ヲ設クヘキモノニアラサルコトヲ絶対ニ信シタリ然ルニ露国全権委員ハ漁業ヲ大小二種ニ區別シ而シテ日本国臣民ニ對シテハ小漁業ノ權利ノミヲ許与セムト欲スルモノノ如シ然レトモ「ポーツマス」條約ハ漁業ノ大小二種間ニ何等ノ差別ヲ設クスシテ概括シテ漁業權ノ日本国臣民ニ許与セラルヘキコトヲ言明ス叙上ノ議論ハ兎ニ角日本国全権委員ハ妥協ノ成立ノ為ニ本國政府ニ對シ其ノ主張ヲ固持セサルヘキコト竝日本人ノ為ニ漁獲ノ許可セラルヘキ魚類以外ノ水産物ヲ列挙方法ニ依リ定ムヘキコトヲ建言セムト欲スルモノナリ故ニ日本国全権委員ハ若露国政府ニシテ其ノ自国臣民ニ對スルカ如ク日本国臣民ニ對シテモ亦鯨ノ漁獵ヲ許可スルノ処置ニ出テタリシナラムニハ臘轔獸又ハ臘虎ノ漁獵ヲ強テ主張セサリシナルヘシ

日本国公使ハ戦後ニ於ケル諸種ノ懸案ノ満足ナル解決カ兩國相互ノ權利及利益ノ保護ノ為ニ兩國間ニ誠實親睦ナル協約ヲ成立セシムルニ到ルヘキモノナルコトヲ深ク信スルヲ以テ若外務大臣閣下ニシテ本漁業協約ノ談判ニ関シ日露兩國全権委員ノ間ニ生シタル紛議ノ解決ニ尽瘁セラルルニ於テハ深く閣下ニ感謝スル所ナリ絶東ニ於ケル兩國將來ノ政

露国官憲ノ随意ニ屬ス可キヲ以テナリ日本国全権委員ハ斯ノ如キコトヲ以テ「ポーツマス」條約調印者ノ意思ナリト信スル能ハス蓋シ該調印者ハ確實有效ナル漁業權ヲ誠實公平ニ日本国臣民ノ為ニ許与セムコトヲ欲シタリシハ毫モ疑ナキ所ナルヲ以テナリ

是ヲ以テ日本国全権委員ハ第二ノ解決方法ヲ以テ兩國ノ利益ヲ調和シ同時ニ「入江」ナル文字ノ解釈ニ関シ一切ノ紛議ヲ解決スヘキ最實際的ナル唯一ノ方法ト思考シタリ蓋シ是某々ノ入江ニシテ若移住民ノ利益ノ為又ハ土民ノ保護ノ為ニ競落人ニ對シ漁区トシテ之ヲ交付スル能ハサル場合ニ於テハ競売漁区ハ之ヲ何レノ方面ニ設置スヘキカハ露国官憲ノ随意ニ屬シ漁業者タル日本国臣民竝露国臣民ニ對シ其ノ漁場ヨリ之ヲ除外スルニ何等ノ障礙ナカルヘキヲ以テナリ

露国移民事業ノ利益ハ日本国全権委員ノ十月十三日(九月三十日)ノ會議ニ於テ提出シタル書方ニ依リ完全ニ保護セラル該書方ハ又同時ニ將來ニ於テ發生スヘキ一切ノ紛議ヲ免除スルノ利益アリ

漁業ノ目的タリ得ヘキ水産物ニ関シテハ日本国全権委員ハ魚類及其ノ他ノ水産物ハ均シク漁業權ノ目的タリ得ヘキモ略ニ関シ本談判不調ノ及ス可キ悲ム可キ結果ニ関シテハ深く主張スルニ及ハサルヘシ

(八) 露国外務大臣ヨリ日本国公使ニ至ル回答書

(千九百六年十一月十五日 附第二六二〇号露国

外務省第一局)

十月二十五日附ヲ以テ日本国公使ヨリ通牒セラレタル覺書ニ依リテ考察スルニ兩國全権委員ノ意見ノ岐ルル所ハ即左ノ二点ニ在リ

- 一、漁業ノ目的トナル水産物ニ關スルコト
- 露国ノ談判委員ハ漁業中ヨリ哺乳動物ヲ除外セムトスルノ意見ナリシナリ日本国談判委員ハ原則トシテ魚類ト其ノ他ノ水産物トノ間ニ區別ヲ設クルニ反對スト雖魚類以外ノ水産物ニシテ其ノ漁獲ヲ許可セラルヘキモノヲ列挙方法ニ依リ定メムトスルモノナルコトヲ声明セリ

露国政府ハ該声明ヲ領シ而シテ或ハ哺乳動物漁獲ノ問題ハ後日ニ至リ意見交換ノ目的ト為シ得ヘキコトヲ承認ス

- 二、紛議ノ第二点ハ日本人ノ漁業權ヲ行使シ得ヘキ方面ニ關スル問題ナリ

本紛議ハ最重要ノモノニ屬シ「ポーツマス」條約第十一條竝同會議録第七号ノ明文自体ヲ以テ除外セラレサルヘカラ

サルモノノ如ク見ユ

然レトモ同會議録中ニ使用セラルル仏語ノ「入江」ナル文字ハ少シク明確ヲ欠ク所アルヲ認ム事實海岸ハ總テ其ノ自然ノ構成ニ基キ各入江間岬角ヲ以テ間隔セラレタル入江ノ一帯ヲ以テ形成セラルルモノナリ故ニ「ポーツマス」條約第十一條並同會議録第七号ヲ嚴格ニ解釈スルトキハ條約ニ基ク日本國ノ權利ハ殆ムト有名無実ノモノタルニ至ルヘシ此ノ事實ハ本談判ノ開始ニ先チ久シキ以前ヨリ既ニ我等ノ注意ヲ喚起シタリシ所ニシテ而シテ我等ハ日露兩國ノ間ニ妥協ノ成立ヲ欲シ「ポーツマス」條約ノ附与シタル入江除外ノ權利ヲ固執セス却テ各種ノ入江ニ付キ一ノ區別ヲ認メ以テ露國重要ノ利益ニ背反スル讓与ヲモ為サムコトヲ期シタリ該區別ハ我等ノ意見ニ依レハ既成地図上ノ材料ニ基キ下調査委員會ヲシテ之ヲ審査セシムヘキ業務ニシテ該下調査委員會ノ成立ハ即日本人ノ為ニ貸下ケラルヘキ方面ニ関シ妥協ノ端ヲ開クナルヘシ
故ニ吾人ハ下調査委員會ノ業務ノ効果ニ関シテハ日本國公使ノ如ク憂懼ノ念ヲ懷ク能ハスシテ却テ吾人ハ該下調査委員會ノ事業方良好ナル効果ヲ齎ス可キコトヲ切ニ期待スルモノナリ

之ヨリ延テ「アンス」ナル語ハ地理学上ノ語トシテ「深サノ大ナラサル小灣」(即陸地ニ彎入スルコト深カラサル小灣)ヲ意味スルニ至レリ

此ノ語ノ更ニ精確ニシテ且正当ナル意義ハ地理学上ノ典籍ノ精細ナル調査ニ依リテ之ヲ知ルコトヲ得ヘシ

此ノ調査ノ結果ニ依ルトキハ「アンス」ナル語ハ地理学上ノ用語トシテハ全然明白ナル意義ヲ有スルモノニシテ「海岸ノ高低如何ニ関セス円弧ニ類似スル形状ヲ有スル小灣ニシテ半円ヲ超ユルコトナキモノ」ヲ意味ス而シテ「アンス」ハ本来一般ニ此ノ形状ヲ具有スルモノトス

總テ海岸ナルモノハ本来直線ヲ為スモノト雖一度海水ニ浸蝕セラルルトキハ著シキ變化ヲ受クルハ物理学ノ通則上当然ノコトナリ斯ノ如クシテ海岸線ハ弧形ヲ為セル小曲線(灣)ノ連続ヲ為シ其ノ曲線ハ多少突出セル岬ニ依リテ接続セラルル然レトモ其ノ海岸線タル曲線(灣)ハ大陸ニ彎入スルコト甚シカラス其ノ局線ノ係數(勾ト弦トノ比例)ハ一般ニ〇、三〇ヲ超ユルコトナシ

場合ニ依リテハ海岸ハ尙他ノ異リタル變化ヲ受クルコトアリ即波瀾力海岸ノ一部ヲ破壊シテ其ノ土砂ヲ他ノ地点ニ附著セシムルコトアリ

叙上ノ意見ヲ有スルモノナルカ故ニ本協約ノ進行ニ関スル我等ノ提案ハ其ノ終局ニ對シテ重大ナル障礙ヲ為スカ如キモノニアラスト信ス

黒龍江海灣(リマン)ノ問題ニ関シテハ我等ハ之ヲ以テ「入江」ナル文字ノ解釈ト何等關係アルモノナルヲ認メス我等ノ意見ニ依レハ本問題ハ「河川」ナル文字ノ正確ナク意義ト關聯シテ考察セラルヘキモノナリ

日本國全權委員ハ將來某々ノ場所カ「入江」ナル文字ノ正確ナル定義ニ該当スルヤ否ヤヲ決スルノ不可能ヨリ地方行政官署ト紛争ヲ來サムコトヲ疑懼シ之ヲ豫防セムカ為ニ本協約ヨリ總テ入江ヲ除外セムコトヲ提案スト雖吾人ノ意見ニ依レハ下調査委員會ニ於テ競売地区表ヲ制定スルニ於テハ各場所ニ関スル一切ノ紛議ヲ解決シ並兩國ノ希望スル妥協ヲ誘致スルノ好機ヲ提供スヘキコトヲ茲ニ重テ言明スルモノナリ

(九)「アンス」ノ定義ニ関スル下調査委員會第一回會議
千九百六年十一月十七日開會

「アンス」ナル語ハ其ノ固有ノ意義ニ於テハ一種ノ古瓶ノ柄ヲ指稱ス

此ノ場合ニ於テモ亦前記ノ場合ノ如ク海岸線ハ小曲線(灣)ノ連続ヨリ成立シ其ノ形ハ円弧ニ類似スト雖其ノ相異ル所ハニ在リテハ其ノ弦線長ク其ノ勾線短ク即其ノ係數ノ著シク小ナルニ在リ其ノ海岸ハ常ニ平低ニシテ其ノ岬ノ突出ハ甚ク少ナシ

詳細ニ就テハ委員諸氏ニ於テ「ラッパラン」氏ノ「地理学教科書」「ベンク」氏ノ地理書其ノ他「ウール」「リヒトホーフェン」諸氏ノ著書ヲ参照セラレムコトヲ請フ
故ニ一般ノ事實トシテハ總テ海岸ハ其ノ大洋ニ面スルト否ト將ク海灣内ニ在ルトニ論ナク皆前記ノ曲線(灣)ヨリ成立スルモノニシテ其ノ曲線ハ皆彎入少ナク其ノ形ハ円弧ヲ為セルモノナリ

以上ノ事實ハ地図ノ比例尺ヲ拡大スルニ從テ益明白ニ之ヲ認ムルコトヲ得可シ故ニ比例尺ノ小ナル地図ニ於テハ殆ト直線ヲ為ス海岸ト雖比例尺ノ大ナル地図ニ付同一ノ場所ヲ点檢スルトキハ數多ノ曲線(灣)ヲ以テ示サレ以テ沿岸ノ状態ヲ容易ニ知悉スルコトヲ得ルヲ認ム可シ

比例尺ノ大ナル地図ニ於テハ直線ノ海岸ハ例外ナリトス海岸ノ基本ノ要素トモ稱ス可キ此ノ曲線(灣)ハ仏國ノ地理学者之ヲ稱シテ「アンス」ト謂ヒ「ラッパラン」氏前

掲著書参照) 独逸ノ地理学者之ヲ称シテ「バイ」ト謂フ
〔ペンク〕氏前掲著書参照) 英語ニテ仏語ノ「アンス」ナ
ル語ニ対応スルハ「コーヴ」ナルモ場合ニ依リテハ「コー
ヴ」ナル語ハ陸地ニ彎入スルコト更ニ大ナル灣ヲ指称スル
コトアリ
地図学ニ関スル各種ノ材料——是本委員等ノ調査ノ直接ノ
材料ナリ——ヲ檢ストキハ仏國製ノ地図ニ屢使用セラル
ル「アンス」ノ語ノ意義カ上来説述シタル科学的意義ニ適
忒スルコトヲ證スルヲ得ルナリ尤モ實際ニハ此ノ語カ更ニ
広キ意義ニ使用セラレ世人ハ屢「アンス」ナル語ニ依リテ
陸地ニ深ク彎入スル小灣ヲ指称スルコトアリト雖其真正ノ
意義ハ正ニ斯ノ如シ其ノ巨多ノ例證ハ委員諸氏ニ於テ宜シ
ク点檢セラレムコトヲ請フ(仏蘭西、「アドリヤチック」、
朝鮮、濠洲等ノ地図)

此等ノ例證ヲ調査スルニ地図ノ上ニ現ハレタル各所ノ「ア
ンス」ハ其ノ延長必シモ一様ナデサレトモ一般ニ彎入ノ淺
キ小灣ナリ例ヘハ「アンス、ド、ヴォヴィール」ハ其ノ弦
ノ延長ハ、七五哩ナルニ反シ「アンス、ド、ローズ」ハ〇、
一七哩ニ過キス但シ「アンス」ノ語ハ又陸地ニ頗ル深ク彎
入シ且閉鎖シタル灣ニ対シ屢使用セラルルコトアリ例ヘハ

トナキモノヲモ竟ニ之ヲ日本人ニ与フルコトヲ得サルヘ
シ
疑モナク小村閣下及アラユル方法ヲ以テ露國ノ為ニ其ノ主
張ヲ為シタル「ウキッテ」閣下モ「アンス」ナル語ニ其ノ
固有ノ意義ヲ附スルノ意思ヲ有セサリシモノナリ此ノ事ハ
「アンス」ナル語ト頗ル其ノ意義ヲ異ニスル英語ノ「イン
レット」ナル語ヲ以テ此ノ語ノ訳語ト為シタルヲ以テ之ヲ
見ルモ明ナリトス

露國全權委員カ其ノ回答覺書中ニ沿海ノ漁業權ヲ日本人ニ
与フル旨ヲ申出タルハ之ニ依リテ海岸線以外ノ地方即多少
閉鎖シ且陸地ニ彎入シタル地方ト河川トヲ留保シタルナ
リ
此ノ兩者ハ沿海地ニ非ス大陸内ニ在ルモノナルカ故ニ当然
此ノ協約以外ニ在ルモノナリ加之此ノ留保ハ露國ノ工業發
展上最重要ナルモノナリ

故ニ本委員等ハ本商議ニ於テ「インレット」ナル語ハ條約
第十一條及議定書第七号ノ實質竝兩國相互ノ利益ニ最能ク
適合スルモノト解シ此ノ語ニ深ク留意セリ

本委員等ハ完全ナル協定ニ到達セムコトヲ希望シテ露國ノ
明白ナル權利ヲ犧牲ニ供シ「ポーツマス」會議ノ公文ノ用

「アンス、デギヨン」「アンス、ドーベルラック」ノ如シ
上掲ノ地図ハ前記ノ提論ヲ明カニ解説ス可シ即各海岸ハ
「アンス」ノ連続ヨリ成立スルモノナルコト竝海岸カ箇々
ノ「アンス」ニ依リテ成立スルコトハ独リ大洋ニ面シタル
ニ止マラス海灣内ニ於ケルモノニ付テモ亦然リトスルコト
之ナリ尤モ灣内ノ「アンス」ニ付テハ其ノ灣ノ名称ヲ時ト
シテ特ニ明記セサルモノアリ
地図ノ比例尺カ大ナルニ從ヒ「アンス」ノ數カ益増加スル
ハ当然ノコトナリトス(其ノ例證ハ地圖ニ依リテ明カナリ
トス)

以上説ク所ニ依リ「ポーツマス」會議ニ於テ露國全權委員
ノ答弁覺書ニ使用セラレ議定書第七号ニ挿入セラレタル
「アンス」ノ語ノ正当ナル意義ヘ之ヲ知ルコト困難ニ非ス
以上ノ意義ヲ嚴格ニ遵守シ之ヨリ由来ス可キ結果ヲ考フル
ニ協約ニ入ルヘキ地域ハ其ノ範圍甚広カラス即多少直線の
ナル海岸ノミニ限ラル可キナリ而シテ吾人ハ斯ノ如キ海岸
カ其ノ數ニ於テ甚多カラサルコトヲ言明スルヲ義務ト信ス
ル者ナリ(數例)

故ニ露國カ日本人ニ与フ可キ權利ハ甚制限セラレタルモノ
ニシテ之ヲ日本人ニ与フルモ左シテ露國ノ利益ヲ害スルコ

語ニ関シテ文理解釈ヲ主張スルコトヲ止メ日本ノ利益ノ為
ニ「アンス」ノ大部分ヲ拋棄セムトス然レトモ又本委員等
ハ「アンス」ノ一部ニシテ明ニ特種ノ性質ヲ有スルモノ即
多少孤立シタル灣ヲ為シ大体ニ於テ「インレット」ニ近キ
形ヲ為ス「アンス」ニ對シテハ之ヲ留保セムト欲ス是本委
員等ノ根本主義ノ要旨ナリトス固ヨリ或特別ナル場合ニ就
テハ特種ノ理由ニ基キ多少ノ例外ハ之ヲ認ム可キナリ

日本ノ利益ノ為ニ讓与セラレタル「アンス」カ沿岸ノ大部
分ヲ占ムル(日本委員ニ交付セラレタル地圖ニ示サルルカ
如ク沿岸ノ三分ノ二以上ナリ)事實ヲ見ルニ本委員等ハ之
ヲ以テ權衡ヲ得タルモノト認メサルヲ得ス况ヤ場合ニ依リ
テハ其ノ地理上ノ特別ナル位置ヨリシテ当然除外セラル可
キ灣ヲモ尙之ニ加ヘタルニ於テヤヤ

上記特定ノ部分ハ如何ナル場合ニ於テモ全然日本漁業ノ外
ニ立タサルヘカラス其ノ理由ハ重ねテ茲ニ反覆スルノ要無
カル可キナリ(要點ニ関スル説明書)及本年十月二十五日
附露國ノ「答弁書」参照)

本委員等ノ見ル所ヲ以テスレハ本問題ノ解決ヲ此ノ以外ノ
方法ニ俟ツコトハ不可能ナリ本野閣下ヨリ提議セラレタル
解決ノ方案ハ到底之ヲ認諾スルコトヲ得ス該提案ハ問題ヲ

解決スルモノニ非スシテ却テ問題ヲ圧抑セントスルモノナルノミナラス兩國ノ利益ヲ調和スルモノニ非スシテ却テ「ポーツマス」條約ニ豫見セラレサル新状態ヲ創設セムトスルモノナリト思考ス

本委員等ハ茲ニ「インレット」ナル新地理語ニ違著セリ依テ之カ定議ヲ説明セムトス

「インレット」ナル語ノ正当ナル定義ハ地圖學上ノ材料ノ調査ニ依リテ之ヲ説明スルコト難カラス

「インレット」ナル語ハ世界ノ各所ニ拡マリタル語ナリ多クハ閉鎖セラレタル灣ニシテ多少陸地ニ彎入シタルモノヲ指稱ス例ヘハ北亞米利加ノ太平洋沿岸ニ於ケル「ナスパイト、インレット」「ペグダー、インレット」「スック、インレット」「ミニューア、インレット」「クックス、インレット」及其ノ他數箇所、「アドリヤチック」沿岸（ドルマン）ニ於ケル「ケルカ、インレット」及「ダグラス、インレット」（朝鮮）ノ如シ

「インレット」ノ入口ハ〇、五哩（「ケルカ、インレット」ヨリ四八哩（「クックス、インレット」ニ至ル通常ハ一哩乃至五哩トス又陸地ノ彎入ニ二哩（「ナスバート、インレット」ヨリ二百里（「クックス、インレット」ニ至ル其ノ形状ニ至リテハ寧ロ「フジョール」（硝子塚ノ義）ニ

灣」ノ意義ニ於テナリ而シテソハ独逸ノ學問的用語ナル「アフト」ニ相当スルモノナリ

（十）「入江」ノ定義ニ関スル下調委員會第二回會議
千九百六年十一月三十日開會
千九百六年十一月十七日

千九百六年十一月十七日ノ會議ニ於テ露國委員ヨリ提出セラレタル「アンス」ノ語ノ定義ニ関シ下調委員會ニ提出セラレタル日本國委員ノ意見

日本委員ハ十一月十七日ノ會議ニ於テ「アンス」ノ語ニ関シ露國委員ニ依リテ与ヘラレタル定義及其ノ後露國委員ヨリ交付セラレタル機密覺書ヲ慎重ニ調査シタリ

本問題ノ詳細ニ入ルニ先チ日本委員ハ兩國委員間ノ誤解ヲ避クル為現ニ下調委員會ニ附与セラレタル権限ノ範圍ヲ確定スルコトヲ必要ナリト認ム

十月十一日ノ會議ニ於テ露國全權委員カ「アンス」ノ語ニ包含セラレヘキ沿岸諸地方ノ地名表ヲ雙方共同ノ上作成スル為下調委員會ヲ指命セムコトヲ提議セラレタルトキ日本國全權委員ハ之ニ答フルニ其ノ提議ニ賛同スル能ハサルコト及日本全權委員ノ見ル所ヲ以テスルトキハ斯ノ如キ事業ニ着手スル前ニ方リ先ツ「アンス」ノ語ノ意義ヲ確定スルノ必要アリ故ニ若下調委員會カ単ニ「アンス」ノ語ノ意

似タリ即「インレット」ノ深サハ其ノ入口ノ幅ニ超過スルコト數倍ナリ

時トシテハ「漏斗」(獨語ノ所謂「トリヒターフォオルミツヒ」)ノ形ヲ為セルコトアリ例ヘハ「ミニューア、インレット」ノ如キハ其ノ深サト入口トハ其ノ距離同一ナリ(五哩)時トシテ「インレット」ハ又頗ル大ニシテ海灣ノ形ヲ為セルコトアリ例ヘハ「クックス、インレット」ノ如シ

北亞米利加ノ大西洋沿岸ニ於ケル種々ノ「インレット」ハ稍異レル形状ヲ有シ同地方ニ在リテハ低平ナル海岸ヲ有スル大ナル海灣内ニ於ケル狭キ入口ニ此ノ名ヲ附ス例ヘハ「リットル、インレット」「イーストロッチウエー、インレット」「ニュー、インレット」「ジョンズ、インレット」ノ如ク皆甚大ナル「グレート、サウス、ベイ」ナル灣内ニ在リ

「インレット」ノ名称カ河畔平原ノ自然ノ延長タル漏斗形ノ海灣ニ使用セララルコト稀ナリトセス例ヘハ「バルリア、インレット」(英國)、「ピン、ヤン、インレット」(朝鮮)、「アッシュビエー、インレット」(朝鮮)ノ如シ

地圖學上ノ材料ニ抛ルトキハ「インレット」ナル語カ最多ク使用セララルルハ「深ク陸地ニ彎入シ多少閉鎖セラレタル義ヲ確定スルノ権限ヲ有スルニ止マルモノナラハ該委員會ヲ指命スルコトニ賛同ス可キ旨ヲ以テセリ露國全權委員ハ此ノ提議ニ賛同シ丸毛氏及本委員ハ此ノ下調委員會ノ委員トシテ任命セラレタリ

此ノ下調委員會ノ権限ハ若兩國全權委員ニ於テ必要ナリト認ムル場合ニ於テハ後日ニ至リ擴張セラレ得ヘシ然レトモ現在ニ於テハ吾人ハ「ポーツマス」議定書ニ使用セラレタル「アンス」ノ語ノ意義ヲ成ルヘク精確ニ定ムルコトニ止メサルヘカラス

本委員等ハ露國委員諸氏モ亦斯ノ如ク其ノ任務ヲ了解セラレタリト信ス何トナレハ十一月十七日ノ下調委員會會議ノ席上ニ於テ露國委員ハ「アンス」ノ語ノ意義ニ就テ其ノ意見ヲ表示セラレタルコトハ露國委員カ本委員等ニ交付セラレタル機密覺書ノ證スル所ナリ

本委員等ノ職務ヲ斯ノ如ク明白ニ定ムル以上ハ「ポーツマス」會議ニ於テ日露兩國全權委員カ申出テタル提議ニ就テ判定スルカ如キ殊ニ之ニ對シ意見ヲ發表スルカ如キハ本委員等ノ権限ニ屬セサルコト言フ俟タサル可シ

「アンス」及「インレット」ノ語ノ意義ニ関スル露國委員ノ深遠誠實ナル研究ニ就テハ切ニ敬意ヲ表ス而シテ露國委

員ハ其ノ結論トシテ「ポーツマス」ニ於ケル日露兩國全權委員ハ「アンス」ノ語ニ依リテ共ニ同一事物ヲ指稱シタルモノナルコトヲ述ヘ且疑モナク「小村閣下モ「ウキッテ」閣下モ此ノ語ニ其ノ固有ノ意義ヲ附スルノ意思ヲ有セザリシコトハ此ノ語ヲ翻訳スルニ當リ意義頗ル異ナレル英語ノ「インレット」ナル語ヲ使用シタルハ其ノ明ナル證左ナリト謂ハレタリ

露國委員ノ説ニ拠ルトキハ日露兩國全權委員カ「アンス」ナル語ニ依リテ表示セムトシタル意義ハ寧ロ英語ノ「インレット」即陸地ニ深く彎入シ多少閉鎖シタル灣ノ謂ナリ大體ヨリ論スレハ「ポーツマス」ニ於ケル兩締約國ノ意思ニ就テ明白ナル證左ナキ限ハ日露兩國全權委員カ「アンス」ノ語ニ前記ノ意義ヲ附シタルモノト見ルコトハ本委員等モ主義トシテ之ヲ承認スヘシ然リト雖本委員等ハ此ノ定義ヲ以テ日本臣民ノ漁業ノ為ニ留保セラルル地方ト然ラサルモノトヲ區別スルノ標準ト為スニ方リ之ヲ全然明白ニシテ且精透ナルモノトハ認ムルコト能ハス

露國委員ノ定義ニ曰ク『多少閉鎖シタル灣』ト然レトモ如何ナル種類ノ灣カ「アンス」ノ語（吾人ハ以後此語ヲ以テ地ヲ存セシメサルニ在リ而シテ之カ為ニハ日本委員等ハ「アンス」ノ入口及深サノ海里數ヲ基本トシテ之ヲ定ムルノ外他ニ方法ナシト信スルナリ斯ノ如クスレハ漁業地域ヲ確定スルニ付基礎トナル可キ標準ヲ得ルニ至ルヘシ「ポーツマス」ニ於ケル日露兩國全權委員ノ意思ハ露國委員諸氏ノ明言セラレタルカ如ク日本臣民ニ真実有効ナル漁業權ヲ与ヘラルルニ在リト思量スルカ故ニ此ノ意思ヲ基礎トシテ日本委員ハ「アンス」ノ語ニ次ノ如キ定義ヲ附スルノ光榮ヲ有ス

「陸地ニ彎入スル長狹ナル水面ニシテ其彎入十五海里ヲ下ラス其ノ入口ニ海里ヲ超エス陸地ニ依リテ閉鎖セラルルコトナク港タルノ性質ヲ有セス平素船舶ノ碇泊ニ使用セラルルコト無キモノ」
アンス

(十一) 「入江」ノ定義ニ関スル下調委員会第三回會議

千九百六年十一月三十日 下調委員会ニ於テ日本國委員ヨリ提出セラレタル意見ニ對スル露國委員ノ答弁
露國委員ハ「ポーツマス」會議ノ議定書第七号カ漁業協約ニ於テ定ムヘキ範圍ヲ大洋ニ面スル海岸線ノ領水ニ限リタ

英語「インレット」ニ相当スルモノトシテ使用ス可シ何トナレハ最早此ノ兩語ノ間ニ混淆ヲ来タスコトナカルヘケレハナリ）ニ包含セラレ日本臣民ノ漁業地ヨリ除外セラル可キカ灣ノ入口ハ広狹一樣ナラス灣ノ深サニ就テモ亦然リ露國委員ノ定義ニ曰ク『深く陸地ニ彎入スル所』ト然レトモ「深く」トハ果シテ何ヲ意味スヘキカ露國委員ノ覺書ニ指摘セラレタル例ニ依レハ彎入數十海里ヲ有スルモノアリ或ハ又其ノ彎入之ヨリ甚小ナルモノアリ此等ノ「アンス」中日本人ノ為ニ留保セラレタル漁業地方ヨリ除カルヘキモノハ最深キモノナルヘキカ將タ最淺キモノナルヘキカ露國委員ノ与ヘラレタルカ如キ定義ヲ基礎トシテ漁業地域ヲ定ムルトキハ竟ニ專断ニ陥ルノ外ナカルヘキナリ地圖學上ノ材料ニ拠リテ漁業地域ヲ定ムヘキヤ否ヤノ問題ハ全權委員會同ノ上決スヘキ所ナルカ故ニ措テ之ヲ論セス茲ニ問題トナルハ斯ノ如キ漠然不確定ナル定義ヲ基礎トスルトキハ如何ニシテ当該地域ヲ確定シ得ルヤニ在リ殊ニ今日尙精細ナル地圖ヲ缺ク所ノ地域ニ就テハ如何ニシテ之ヲ定ムヘキヤニ在リ

本委員等ノ見ル所ヲ以テスルニ下調委員会カ研究スヘキハ日本人ノ漁業ノ為ニ留保サレ又ハ日本人ノ漁業ヲ除外スルノ地方ヲ確定スルノ標準ヲ定メ以テ將來誤解ヲ生スルノ余ル專実ヲ考量シ十月二十五日ノ覺書ニ於テ「アンス」ノ語ニ附スルニ「インレット」ノ意義ヲ以テスルコトヲ申出デタリ

日本委員ハ其ノ意見書ニ於テ上記ノ見解ヲ主義トシテ承認シタルモ十一月四日ノ會議ニ於テ露國委員ノ与ヘタル「インレット」ノ定義ニ満足セス其ノ定義ヲ以テ不完全ナリトシ將來誤解ヲ生スヘキモノナリト為セリ

地理學上ノ用語ノ定義カ理論上如何ニ精確ナリトスルモ實際ニ於ケル其ノ適用ハ常ニ種種ノ誤解ヲ生スヘク其ノ誤解ハ結局殆ト全海岸線ノ測量ヲ為スル非サレハ解決スル能ハサルヘシ然レトモ斯ノ如キ方法ヲ採ルハ長年月ニ渉リテ日露兩國漁業ニ障礙ヲ与フモノナルコトハ言フ俟タズ
本委員等ノ見ル所ヲ以テスレバ方策ハ唯一アルノミ即「インレット」ナル語ヲ定義ノ精確ナリヤ否ヤハ之ヲ別論トシテ双方ノ協定ニ依リ「インレット」ナル語ニ対応ス可キ露國領水ノ部分ヲ列挙シ之ヲ一種ノ一覽表ニ作成シ以テ「インレット」ノ定義ヲ確定スルニ在リ本委員等ハ此ノ表ノ作成ニ付少クトモ漁業上最モ廣大ニシテ且重要ナル海岸線ニ関シ充分ナル材料ヲ有ス

「インレット」ノ語ニ對シテ本委員等ノ附シタル定義ハ通俗ノ用語ヲ以テ表明セラレタリト雖其ノ意義ハ世界ノ各所ヨリ蒐集シ来リタル例證ニ依リテ既ニ明白ニセラレタリ加之此ノ定義ハ海岸地名表ニ依リテ明白ナルヘク其ノ表ノ一部ハ(浦塩斯德ヨリ黒龍江迄)曾テ日本委員ニ參考トシテ通報セラレタリ從テ此ノ定義ハ明白ニシテ且實用ニ足ルモノナリト信スルト雖尙此ノ点ニ付テハ特ニ日本委員ノ希望ニ從ヒ出来得ル限リ此ノ定義ヲ釈明スヘシ但シ吾人カ茲ニ提出セムトスル定義ハ本委員等ノ最初ノ定義ト同一ノ地名表ニ基キテ構成セラルルモノナルカ故ニ結局ハ無用ノ業タルニ過キサル可シ

本委員等ハ「インレット」即閉鎖セラレタル灣ナル語ヲ解シテ「入口ノ幅カ其ノ最長ノ幅ヨリ小ナル灣若ハ(反對ノ場合ニ於テハ)其ノ最長ノ深サヲ超エサル灣」ト為ス「インレット」ノ広サニ就テハ一般「インレット」ノ通常ノ制限ヲ超エサルコトヲ限度トス此ノ制限ニ就テハ第一會議ノ席上ニ於テ本委員等既ニ之ヲ明ニセリ即其ノ入口ノ幅四十五海里ヲ超エス及其ノ深サ百五十海里ヲ超エサルコト是ナリ尙茲ニ附加スルヲ必要ト信スル事項ハ「インレット」ナル語ハ通常河口灣ヲ指稱スルニ使用セラルルコトナリ然レト

非サレハ幅員ノ大ナル「インレット」モアルヘク又小ナル「インレット」モアルヘシ日本委員ノ意見書カ此ノ点ニ關シテ何等ノ説明ヲ加フル所ナキハ吾人ノ遺憾トスル所ニシテ吾人ハ十一月十七日會議ノ席上ニ於テ口頭ニモ其ノ説明ヲ聞クコトヲ得サリキ

日本委員定義ノ基本的主旨ヲ斯ノ如ク研究シタル後更ニ此ノ定義ヲ我海岸ニ於ケル各種ノ灣ニ適用スルトキハ其ノ結果ハ容易ニ之ヲ知ルコトヲ得即吾人ハ数千海里ニ渉ル我海岸線ニ於テ日本委員ノ所謂「インレット」ニ入り漁業協約ヨリ除外セラルヘキモノハ唯一箇ヲ發見スルニ過キスカノ北海ニ近キ「メチグメンスカヤ」灣是ナリ

加之日本委員ノ定義ノ第一第二ノ部分ヲ包括シテ之ヲ考フルトキハ此ノ唯一ノ「メチグメンスカヤ」灣スラ其ノ所謂「インレット」ト稱スルコトヲ得サルニ至ルヘシ何トナレハ米國船ハ「チュクチュ」人ト貿易ヲ為サンカ為屢此ノ灣ニ來ルコトアレハナリ

サレハ日本委員ハ同一ノ文書中ニ於テ其ノ劈頭ニ於テハ「ポーツマス」條約ニ從ヒ漁業協約ヨリ「インレット」ヲ除外スルノ權利ヲ露國ニ認メナカラ其ノ末尾ニ於テハ「インレット」ノ語ニ一定ノ定義ヲ附スルノ結果該條約ニ認

モ河口灣ハ河川其ノ者ニ包含セラルルモノタルニ外ナラス日本委員ヨリ提出セラレタル定義ヲ見ルニ其ノ定義ハ二箇ノ部分ヨリ成立ス本委員等ハ其ノ第一ノ部分ニ就テ論議スルノ必要ヲ見ルニ過キス何トナレハ其ノ第二ノ部分「陸地ニ依リテ閉鎖セラルルコトナク港タルノ性質ヲ有セス平素船舶碇泊ニ使用セラレス」云々ハ本委員等ノ論議ニ關係ナキ事項ニ關スルモノニシテ「ポーツマス」條約ノ第十一條及「インレット」ノ地理學上ノ定義トハ何等關係ナケレハナリ

日本委員ノ提出ニ係ル定義ノ第一点「即陸地ニ彎入スル長狹ナル水面ニシテ其彎入十五海里ヲ下ラス其ノ入口ニ海里ヲ超エス」云々ニ關シテハ吾人ハ此定義ノ基礎カ寧ロ專擅的ノ觀ナキ能ハサルヲ注意セムト欲ス

如何ナル理由ニ基キテ日本委員ハ通常ノ規則ニ反シテ「インレット」ノ入口ヲ二海里以下ニ限リ其深サヲ十五海里以上トシタリヤ如何ナル理由ニ依リテ日本委員ハ入口ニ海里幅十五海里ノモノヲ「インレット」トシ幅一海里長サ七、五海里ノモノヲ「インレット」ト認メサルヤ抑「インレット」ノ特質ハ主トシテ其ノ形態ヨリ由來シ其ノ各部分ノ配合如何ニ依ルモノニシテ其ノ大小ノ如何ニ基クモノニ

メラレタル此ノ權利ヲ全然否認スルモノノ如シ
斯ノ如キ方法ヲ以テスルトキハ竟ニ結末ヲ見ルコト能ハサルニ至ルヘシ本委員等ハ此点ニ就テ注意ヲ促スヲ自己ノ義務ナリト信ス

日本委員ニ依リテ与ヘラレタル定義ニ至リテハ其ノ全部ニ於テモ亦其ノ各部ニ於テモ之ヲ承認スルコト能ハス何トナレハ其ノ定義ハ地理學上批難ヲ免ルルコト能ハサルノミナラス又露國ノ利益及權利ニ重大ナル障礙ヲ及ホスモノナレハナリ

(十二) 日本國全權委員ヨリ露國全權委員ニ至ル
覺書(千九百七年一月二十三日附)

漁業協約談判ノ為開催セラレタル千九百六年十月二十五日(十二日)ノ會見ニ於テ露國全權委員ハ日本人ノ漁業ヲ營ム能ハサル入江ノ表ヲ作成セムカ為下調委員會ヲ任命セムコトヲ提案シタルヲ以テ日本國全權委員ハ斯ル表ヲ作成ニ先テ「入江」ナル文字ノ意義ニ關シ協定ヲ遂クルノ必要ナルコト竝其ノ結果トシテ若下調委員會ニ於テ本問題ノ審査ヲ為スニ於テハ該下調委員ノ任命ニ異議ナキコトヲ説示シタリ

露國全權委員ハ該提案ニ同意シ專門委員任命ノ処置ヲ執リタリ

日本国側ニ於テ落合、丸毛ノ両氏及露国側ニ於テ「ブラジニコフ」氏ハ「ポーツマス」條約會議録中ニ記載セラルル入江ナル文字ノ正確ナル意義ヲ審査セムカ為爾來屢会见ヲ重タリ然レトモ「入江」ナル文字ノ正確ナル意義ニ関シ協定ヲ遂ケムトシテ相互ニ尽瘁努力シタルニモ拘ハラズ終ニ何等満足ナル定義ヲ発見スル能ハサリシヲ以テ日本国全権委員ハ本問ニ関シ一ノ協定ヲ遂クル目的ヲ以テ落合氏ニ許スニ「ブラジニコフ」氏ト全然私ノ名義ニ於テ協議会ヲ開ク可キコトヲ以テセリ

落合氏ノ日本国全権委員ニ提出セル報告ニ依レハ兩國ノ専門委員ハ其ノ討議ノ基礎トシテ仮ニ仏語ノ入江 (Eggs) ナル文字ヲ英語ノ入江 (Eggs) ナル文字ノ意義ニ解釈スルコト詳言スレハ陸地ニ深く灣入セル灣ニシテ其灣入ノ部分其ノ江口ノ幅ヨリ数倍大ナルモノト解釈スルニ一決シタリ本原則ニ基キ雙方誠実和衷ノ討議ヲ重タル後一月十八日(五日)ノ會議ニ於テ落合、「ブラジニコフ」ノ両氏ハ本紙添附(附録参照)ノ結論ヲ為スニ至リタリ「ブラジニコフ」氏ノ最終提案ニ基キ英語ノ入江 (インレット) ナル文字ヲ基本トセルモノ即「其ノ灣入ノ部分其ノ江口ノ幅ノ二倍以上アル灣」ノ意義ニ於テ一ノ表ヲ作成

ヲ要スト信ス蓋シ是本提案ハ陸地ニ深く灣入スル長狭ナル入江ノ觀念ト明ニ合致セサルモノナルカ故ニ東京ニ於テハ本提案ヲ以テ稍愚弄的ノモノト為スコトヲ深く怖ルルヲ以テナリ

第二、露国専門委員ハ「オコーツク」海北岸ニ於ケル入江ニ付テハ一ト三トノ係數ヲ定メムト欲スルニ拘ハラズ何か故ニ同委員ハ日本海及「ベーリング」海ニ付テハ同一方法ヲ採用スル能ハサルカ

以上ノ留保ヲ為シ而シテ日本国全権委員ハ「ブラジニコフ」氏ノ作成セル提案ハ之ヲ露国政府ノ確定提案ト見做スコトヲ得ヘキカ又ハ見做ササルヘカラサルカ竝上記ノ意義中ニハ幾分ノ変更ヲ加フルコト能ハサルヘキカヲ日本国全権委員ニ言明セラレムコトヲ露国全権委員ニ望ム

日本国全権委員ハ尙露国全権委員ト會議ノ上其ノ初ハ単ニ入江ノ問題審査ノミハ委任シタル日本国専門委員ノ権限ヲ更ニ拡張シ之ニ附与スルニ水産物ノ問題竝黒龍江海灣(リマン)ノ問題ニ関シテモ談判ノ端ヲ開クヘキコトヲ以テセリ

上記二問題ノ中其ノ第一問ニ関シテハ日本国全権委員ハ兩國委員ノ間ニ成立セル協定ニ同意シ該協定ニシテ若露国全

シタリ
本定義ニ依ルトキハ多少ノ広狭アル三十三箇ノ灣ハ日本海「ベーリング」海及「オコーツク」海ノ岸地ニ於テ日本人ノ漁場ヨリ除外セラルヘシ
以上三十三箇ノ灣以外ニ尙六箇ノ閉鎖灣及軍略上ノ点ヨリ留保セラレタル四箇ノ灣アルヲ以テ結局除外セラルヘキモノハ其ノ數四十三箇所ニ達ス

「ボドカゲルナヤ」河口ヨリ「アヤン」港ニ至ル「オコーツク」海ノ北岸ニ関シテハ「ブラジニコフ」氏ハ其ノ入江ノ灣入部分其ノ江口ノ幅ノ三倍以上アルニアラスムハ日本人ノ漁業権ヨリ除外セラルヘキモノニアラサルコトニ協定セムコトヲ提案セリ

叙上事項ニ関シテハ二箇ノ注意スヘキ点アリ左ノ如シ
第一、仮令日本国全権委員ハ妥協ノ精神ニ依リ露国委員ノ指定セル大本ヲ承認スルコト詳言スレハ「入江」ナル文字ハ之ヲ陸地ニ深く灣入シ且其ノ灣入ノ部分其ノ江口ノ幅ヨリ数倍大ナル灣ノ意義ニ解釈スヘキモノナリトコトヲ日本国政府ニ建言セサルヘカラスト信シタリトスルモ本定義ニ適切ナル解釈ヲ下シタル露国委員ハ其ノ除外セラルヘキ場所ノ表ヲ完成セムカ為ニ一ト二トノ比ト云フカ如キモノヨリモ更ニ一層承認シ得可キ係數ヲ定ムル

権委員ノ均シク承認スル所ト為ルニ於テハ之ヲ承認セラレムコトヲ日本国政府ニ建言セムト欲ス

黒龍江海灣(リマン)ノ問題ニ関シテハ「ブラジニコフ」氏ノ提案セル解決方法ハ日本国全権委員ノ充分満足スル所トナラス日本国全権委員ハ露国漁業者ノ為ニ絶対ニ留保セラレタル場所ヲ以テ多大ニ過クルモノト認メタリ次ニ「ブラジニコフ」氏ノ落合氏ニ提案セル説明ニ依レハ同氏ノ日本国漁業者ニ許与スヘシト提案スル黒龍江海灣ニ於ケル限定漁区ニ於テモ尙漁夫トシテ日本国臣民ヲ使用スル能ハサルコトヲ欲スルニ在リ然レトモ該要求ハ露国ノ反対提案ニ於テ承認シタル漁業協約草案第六條ト絶対ニ相容レサル所ノモノナリ

黒龍江海灣(リマン)ノ一般問題ニ対シ下サルヘキ解決ノ如何ニ拘ラス日本国全権委員ハ右制限ニ付テハ本国政府ノ承認ヲ受クルコト困難ナルヘキヲ認メタリ
是ヲ以テ日本国全権委員ハ上記諸点ニ関シ露国全権委員ノ更ニ之ヲ再考シ且本問ニ関シ日本国政府ニ建言シ得ムカ為一ノ確定的回答ヲ与ヘラルルニ於テハ深く露国全権委員ニ感謝スル所ナリ

「ブラジニコフ」氏ト落合氏トノ間ニ成立セル協定ノ後節

ニ関シテハ即左ノ如シ

日本国臣民ハ両国ノ合意ヲ以テ明ニ除外シタル場所ヲ除クノ外日本海、「オコーツク」海及「ペーリング」海ニ瀕スル何レノ場所ニ於テモ漁区ノ貸下ヲ願出ルトキハ之ヲ受クルコトヲ得ヘキコトヲ協定ス但シ漁業協約ニ依リ漁業ヲ許可セラレタル方面ニ於ケル魚類ノ養殖保護此等工業ニ関スル取締並漁業上其ノ他一切ノ事項ニ関スル現行若ハ将来ノ法律規則ヲ遵守スヘキモノトス此等法律規則ハ又総テ露国ノ漁業者ニモ適用セラレヘキハ言フ俟タサルモノトス又「ポーツマス」ニ於テ締結シタル講和條約第十一條第二項ニ規定セラルル場合ヲ除クノ外漁区又ハ場所ニ付テ農民又ハ土民ノ利益ノ為何等ノ留保ヲ為ササルヘキコトヲ約ス

日本国全権委員ハ両国委員ノ間ニ成立セル上記ノ協定ニ同意シ之ヲ以テ「ポーツマス」條約ノ妥当ナル解釈ヨリ来レルモノト認め本協定ノ承認セラレムコトヲ本国政府ニ建言スヘシ

千九百七年一月十八日 日附附屬最終覚書

「ブラジニコフ」氏ハ「インレット」ナル語ヲ以テ湾ノ深サカ其ノ入口ノ二倍以上ナル場合ヲ指スモノト為サムコト

一六、ベチェヴィンスキー湾（閉鎖湾）及ジロヴォイ湾

一七、アヴァチンスキー湾（閉鎖湾）

一八、ヴィリウチンスキー湾

一九、アホムテン湾及チキルコイ湾

二〇、ペンジンスカヤ湾（マメット岬ヨリ北方）

二一、サン、ニコライ湾

二二、バイカル湾（閉鎖湾）

二三、ヌイスキー湾（閉鎖湾）

二四、ナビルスキー湾（閉鎖湾）

二五、モノロウ湾

二六、クレストヴァイア湾

二七、スタルク湾（閉鎖湾）

二八、ヴァニナ湾

二九、イムペラートルスカヤ湾

三〇、ファリシーワヤ湾

三一、テルネイ湾

三二、サン、ヴラヂミル湾

三三、プレオブラジエーニエ湾ノ北岸ニ於ケル小「インレット」

ヲ提案シ且日本臣民カ漁業ヲ為ス能ハサル地域ヲ次ノ如ク列挙セムコトヲ申出テタリ

甲、「インレット」ノ語ニ相当スル湾

一、ラウレンチヤナ湾

二、メチグメンスカヤ湾

三、コニアム湾（ペンケグネイ）

四、アボレエシエフ湾（コロガン）

五、ルメリート湾

六、アマラル、ブタコフ湾（トカチェン）

七、プロヴキデーニエ湾

八、クレスト湾（此ノ湾ハ又閉鎖湾ナリ）

九、アナドイル湾（閉鎖湾）

一〇、アナスタジー湾

一一、サン、ピエール湾、サン、ポール湾及ナタリー湾

一二、グルーボカイア湾

一三、ラヴロウ湾

一四、カラガ港（閉鎖湾）

一五、モルジョヴァイア湾

乙、海岸線ニ在ラサル閉鎖湾

三四、シリユーポチナイア港

三五、チュレニー湖

三六、シエスチフトウオエ湖

三七、バロン、コルフ湾ノ北部

三八、コンスタンチン大公湾

三九、スチャースチャ湾

丙、軍略上ノ理由ニ依リ禁止セラレタル湾

四〇、ド、カストリー湾（閉鎖湾）及フレデリックス湾

四一、サント、オルガ湾

四二、彼得大帝湾

四三、ボシエツト湾

落合氏ハ「^{ペーシユ}漁業」ナル語ハ臘肭獸及臘虎ヲ除ク外総テ海産ノ魚類及動植物ノ捕獲ヲ包含スヘント申出テ「ブラジニコフ」氏ハ同氏限り之ヲ承認シタリ

「ブラジニコフ」氏ハ日本人ノ漁業地域ヨリ樺太沿岸以外ノ黒龍江（リマン）全体ヲ除外セムコトヲ申出タリ尤モ該樺太沿岸ニ於テハ露国企業家ト均シク日本企業家ニ対シテモ該日本企業家カ露国企業家ト同様黒龍江地方ノ河川漁業

ニ関スル露国ノ規則ニ従フ可キ條件ノ下ニ漁業權ヲ許与ス可キ旨申出タリ

雙方ノ協定ニ依リ明ニ除外セラレタル地域外ニ於テハ日本臣民ハ其ノ願出ニ依リテ日本海、「オコーツク」海及「ペーリリング」海ノ沿岸ノ如何ナル地ニ於テモ漁区ヲ取得スルコトヲ得ヘシ但シ魚類ノ養殖及保護ノ為並之ニ関スル産業ノ監督ノ為其ノ他漁業協約ニ依リ日本国臣民ニ漁業ヲ許与セラルヘキ地方ノ漁業ニ関スル諸種ノ事項ノ為制定セラレタル現行及今後制定セラルヘキ法律、規則ニ従フコトヲ要ス此等法律、規則ハ露国企業家ニ対シテモ均シク適用セラルルハ言フ俟タス尙又「ボーツマス」ニ於テ調印ノ講和條約第十一條第二項ニ規定セラレタル場合ノ外漁区並漁場ニ関シ移住民、農民及土人ノ為何等ノ留保ヲ為ササルコトヲ約ス

「ボドカゲルナヤ」河ノ河口ヨリ「アヤン」港ニ至ル「オコーツク」海北方沿岸ニ関シテハ此ノ地域内ノ「インレット」ニシテ其ノ深サカ入口ノ幅ノ三倍ヲ超ユルニ非サレハ日本人ノ漁業地域ヨリ除外セラレサルヘキコトヲ約ス

掲ク可シ

日本人ノ為メニ漁業ヲ許可セサル叙上ノ灣以外ニ尙岸地ニ存在セサル閉鎖灣並軍略上ノ理由ニ基キ日本人ニ対シ漁業ヲ禁止スルガ為留保セラレタル數箇ノ灣アリ

甲、英語ヲ入江(インレット)ナル文字ニ該当スル灣

一、「ラウレンチヤ」灣

二、「メチグメンスカヤ」灣

三、「コニアム」灣一名「ペンケグネイ」灣

四、「アボレエシエラ」灣一名「コロガン」灣

五、「ルメリート」灣

六、「プロヴキデエーニエ」灣

七、「クレスト」灣

八、「バアウエル」灣

九、「カラীগ」灣

十、「ベチエヴキシスカヤ」灣

十一、「アヴァチンスカヤ」灣

十二、「ペンヂシスカヤ」灣(「マメ」岬ヨリ北方迄)

十三、「ニコライ」灣

十四、「バイカル」灣

十五、「ヌイスキー」灣

(十三) 本野閣下ヨリ「グバストフ」閣下ニ至ル半公信(千九百七年二月一日附)

拜啓陳者一月二十二日(十六日)ノ会見ニ関スル覚書一部取急キ閣下ニ及回附候本職ハ該覚書中ニ毫モ誤謬ナキヲ祈リ之ニ対シ閣下ノ御確認ヲ得ハ幸甚ニ御座候敬具

千九百七年二月一日(一月十九日)

於聖彼得堡日本公使館

本野 一郎(記名)

「グバストフ」閣下

前掲半公信附屬別紙覚書(千九百七年二月一日非

正式会見ニ於ケル決議)

日露両国全權委員ハ相互ニ其ノ専門委員落合氏及「ブラジニコフ」氏ヲ伴ヒ一月二十九日(十六日)「グバストフ」氏住宅ニ於テ非正式ノ会合ヲ催シ左ノ決議ヲ為セリ

一、入江ノ問題ニ関シテハ仏語ノ入江(Bay)又ハ英語ノ入江(Inlet)ナル文字ハ其ノ灣ノ部分其ノ河口ノ幅ノ三倍以上アル灣ノ意義ニ解釈ス可ク而シテ日本国臣民ノ為ニ漁業ヲ許可セラル可キ此等灣ノ表ヲ前掲ノ表ニ基キ作成ス可シ然レトモ前掲ノ表ニ該当セサル七箇ノ灣ニ付テハ除外灣トシテ該表中ニ包含センメ之ヲ該表ノ末尾ニ

十六、「ナビリスキー」灣

十七、「クレストーワヤ」灣

十八、「スタルク」灣

十九、「イムペラートルスカヤ」灣

二十、「テルネイ」灣

二十一、「ブレオブラジエーニエ」灣

乙、除外灣

二十二、「アナドイル」灣

二十三、「ピエール」灣

二十四、「グルーボカイア」灣

二十五、「ヴキリユーチンスキー」灣及「ジロヴァニア」灣

ア」灣

二十六、「アホムテン」灣及「チキルコイ」灣

二十七、「ヴァニナ」灣

二十八、「ウラジミル」灣

丙、岸地ニ存在セサル閉鎖灣

二十九、「シュリユーポチナイア」灣

三十、「チエレニー」湖

三十一、「シエスタフートウオエ」湖

三十二、「バロシ、ヨルフ」灣ノ北部

三十三、「コンスタンチン」太公灣

三十四、「スチャースチャ」灣

丁、軍略上ノ理由ニ基ク禁止灣

三十五、「デ、カストリー」灣及「フレデリックス」灣

三十六、「オルガ」灣

三十七、彼得大帝灣

三十八、「ボシエツト」灣

以上列記ノ場所ヲ除クノ外日本国臣民ハ日本海、「オコ
ーツク」海及「ベーリング」海ニ瀕スル何レノ場所ニ於
テモ漁区ノ貸下ヲ願出ルトキハ之ヲ借受クルコトヲ得但
シ漁業協約ニ依リ日本人ニ漁業ノ許可セラルヘキ方面ニ
於ケル魚類ノ養殖保護之ニ関スル工業ノ取締並漁業上其
ノ他一切ノ事項ニ関スル現行若ハ將來ノ法律規則ヲ遵守
スヘキモノトス日本国臣民ハ此等方面ニ於テ漁区ヲ取得
シタル露国臣民ニ対シ同一法律規則ノ適用アルニ非サレ
ハ之ニ服従スルコトヲ要セサルハ言フ俟タサルモノトス
露国政府ハ又「ポーツマス」ニ於テ調印セラレタル講和
條約第十一條第二項ノ適用以外ニ其ノ未タ日本国又ハ露
国漁業者ニ貸下ケタル漁区ノ存在セサル場所ニ定住ノ為
來著スル移住民ニ対シテ漁業權ヲ許スルノ權利ヲ留

ルニ於テハ露国漁業者ト均シク漁区ヲ取得スルコトヲ得
ヘシ

露国全権委員ハ叙上ノ事項ヲ以テ全然不可分ノモノト為シ
且此等事項ニ関スル最終提案トシテ提出シタルヲ以テ日本
国全権委員ハ之ヲ擁護シ之ヲ本国政府ニ移牒スルニ合意シ
タリ

(十四) 「グバストフ」閣下ヨリ本野閣下ニ至ル返
信 (千九百七年二月二十一日附)

拜復陳者一月十六日ノ会見ニ於テ討議ニ附セラレ且承認ヲ
經タル諸問題登載ノ覚書御回附被下感謝ノ至ニ御座候微恙
ノ為乍延引致ニ感謝ノ意ヲ表シ候右覚書ニ就テハ総テノ点
ニ於テ異存無之候間右様御承相成度此段得貴意候敬具
千九百七年一月二十日

「グバストフ」(記名)

本野閣下

(十五) 日本国全権委員ヨリ露国全権委員ニ至ル
覚書 (千九百七年二月二十八日附)

日本国全権委員ハ二月一日(一月十九日)露国全権委員ニ
移牒シタル覚書ノ内容ニ関シ兩國全権委員カ各其ノ本国ノ
承認ヲ條件トシテ協定セル解決ノ日本国政府ノ承認ヲ受ケ
ムコトヲ欲シ極力之ヲ擁護シ其ノ本義ヲ日本国政府ニ移牒

保スルコトヲ合意ス土民ニ対シテモ亦然リ然レトモ露国
政府ハ一度漁区ヲ開設シタル場所ニ於テハ漁業協約存続
期間内移住民又ハ土民ニ叙上ノ權利ヲ許与セサルヘキコ
トヲ約ス

「移住民」ナル文字ノ意義ニ関シ將來ノ一切ノ紛議ヲ避
ケムカ為之ニ関スル法律規則ヲ内密ニ日本国全権委員ニ
通報スヘシ然レトモ露国法律ニ依レハ概シテ移住民ノ資
格ハ漁夫ヲ使用スルコトナク自身自ラ漁業ニ従事スル者及
其ノ家族ニノミ之ヲ認ムルモノトス

「ボドカゲルナヤ」河口ヨリ「アヤン」港ニ至ル「オコ
ーツク」海ノ北岸ニ関シテハ詳細ノ地図ヲ缺クラ以テ前
掲一ト三トノ比ニ依リテ日本国臣民ノ為ニ漁業ノ許可セ
ラレサルヘキ入江ヲ確定スヘシ

二、漁業 權 ナル文学ハ臘肭獸及臘虎ヲ除クノ
外一切ノ漁類及海産動物漁獲ノ權利ヲ包含スルモノト
ス

三、黒龍江海灣(リマン)ノ漁区ハ日本海漁業者ニシテ若
露国漁業者ト同一ナル河川漁獵ニ関スル法律規則特ニ該
方面ニ於ケル外国人ノ漁夫使用ヲ禁止スル規則ヲ遵守ス

スルコトヲ急速取り計ヘリ

日本国全権委員ハ尙其ノ未タ解決ヲ經サル漁業協約ノ其ノ
他ノ諸点ニ関シ日露兩國専門委員ノ間ニ開催セラレタル非
正式ノ会見ノ結果ヲ東京内閣ニ通報シタリ

日本国全権委員ハ其ノ本国政府ヨリ新訓令ニ接シタルヲ以
テ更ニ左ノ諸点ヲ露国全権委員ノ審案ニ附ス

一、仏語ノ入江(adag)又ハ英語ノ入江(Belt)ノ問題ニ
関シテハ日本国政府ハ左ノ注意ヲ提示スルヲ要スト信ス
(甲) 「ポーツマス」條約ハ河川及入江ヲ除クノ外日本

国臣民ノ為ニ漁業權ノ許与セラル可キ場所ヲ除外シタ

ルコトナク又二月一日(一月十九日)附覚書ノ中ニ記

載セラルル軍略上ノ理由ニ基ク一定灣ノ除外ニ関シテ

ハ何等記載セラルル所非サルナリ故ニ日本帝国政府ハ

漁業協約ヨリ此等諸灣ノ除外ヲ排斥スルヲ權利ナリト

信ス

然レトモ日本帝国政府ハ妥協ノ精神ヲ証表セムカ為日
露兩國全権委員ノ協定ニ成レル解決ニ対シテ同意ヲ表
スヘシ

(乙) 之ニ反シ日本帝国政府ハ該覚書中乙号ノ下ニ列挙
セラレタル七箇ノ除外灣ニ付テハ其ノ除外ヲ以テ理由

ナキモノト認め之ニ関シ特ニ露西亜帝國政府ノ注意ヲ喚起セサルヘカラスト信ス

露國政府ノ怠慢ナラサル如ク日本國政府モ亦日本國全權委員ノ勸言ニ基キ且露國政府ニ對シ妥協ノ精神ヲ証表セムカ為「入江」ナル文字ノ意義ニ関シ其ノ自己ノ意見ヲ放棄シ露國政府ノ主張ニ基ク「陸地ニ深く灣入セル灣ノ意義」ナル本文字ニ關スル一般の定義ヲ承認セリ是ヲ以テ日本國政府ハ露國政府カ日本國政府ノ本妥協ノ精神ニ鑑ミ江口ノ幅ト其ノ灣入部分トノ比例ニ關シ有理ニ承認シ得ヘキ解決ヲ日本國政府ニ提供セラレムコトヲ期待スルノ権利アルヘシ露國政府ノ最後ノ提案ハ該比例ヲ以テ一ト三トノ關係ニ於テ定メムトシタルモノナルコトヲ日本國全權委員ノ報告ニ依リテ知ルニ及ヒ日本國政府ノ失望シタリシコトハ敢テ茲ニ之ヲ秘スルノ要ナシ

然レトモ本問題ヲ仔細ニ審査シタル後且日本國全權委員ノ勸言アリタルニ依リ日本國政府ハ若露國政府ニシテ除外灣ノ名ヲ附シ乙号ノ下ニ列挙セル七箇ノ灣ノ除外ヲ固執セサルニ於テハ妥協ノ精神ニ基キ一ト三トノ比例ヲ承認スヘシ日本國政府ハ該灣カ日本國臣民ノ

本國政府ノ訓令ニ基キ左記ノ事項ヲ露國全權委員ニ提案スヘシ

魚類並水産物ノ製造ニ關スル新條項本條項ハ即左ノ如ク規定セラレハシ

日本國臣民ハ貸下ヲ受テタル漁区以外ノ他ノ場所ニ於テ露國臣民ト同一條件ニ於テ魚類並水産物ノ製造ニ從事スルコトヲ得

日本帝國政府ハ露西亜帝國政府ノ承認ヲ得ムト欲シ本條項ヲ提案スト雖畢竟是既ニ兩國ノ承認ヲ經タル通商航海條約(第二條第二項)中ノ二約款ノ確認ヲ要求スルニ外ナラス兩國政府ハ實ニ該條款ニ依リテ以テ兩國臣民ハ他方領土ノ何レノ場所タルヲ問ハズ其ノ國ノ法律命令及規則ヲ遵守スルニ於テハ一切ノ工業又ハ職業ヲ営ミ得ルコトヲ合意セルモノニシテ今本委員間ノ問題トシテハ単ニ魚類ノ製造ニ關スル工業ニ關シテ言フノミ故ニ日本國政府ハ露國政府方本提案ニ對シ其ノ承認ヲ拒絕スヘキ理由ヲ發見セス蓋シ是通商航海條約ノ中ニ承認セラレル一般原則ノ特殊ノ適用ニシテ此ノ工業自由ノ原則ハ又露國ト他國トノ條約中獨逸及墺地利洪牙利國トノ條約中ニ外國人ニ對シ許与セラレルモノナルヲ以テナリ是故ニ日本

漁場ヨリ除外セラルヘキ何等正当ノ理由ノ存スルヲ認メス故ニ日本國政府ハ露國政府カ叙上ノ問題ニ關シ其ノ自己ノ決定ヲ再考セラレンコトヲ飽迄主張セサルヲ得ス

(丙) 閉鎖灣ニ關シテハ日本國政府ハ之ヲ日本國臣民ノ漁場ヨリ除外スルニ同意ス然レトモ日本國政府ハ之ヲ特別項目中ニ列挙スルノ要アリト信セス日本國政府ノ意見ニ依レハ該諸灣ハ甲号ノ下ニ列挙シアル入江ノ種類中ニ入ルヘキモノナリ

二、黒龍江海灣(ハリマン)ノ漁業ニ關シテハ日本國全權委員カ既ニ露國全權委員ニ對シ説示シタルカ如ク日本漁夫ノ使用ニ關シ露國政府ノ附セル權限ハ日本帝國政府ノ意見ニ依レハ露西亜帝國政府ノ為セル讓与ラシテ殆ムト有名無実ノモノト為ラシムルモノナリ蓋シ該方面ニ於ケル日本國企業家ハ露國企業家ニ比シ著シク劣等ノ状態ニ置カルルヲ以テナリ是故ニ日本國政府ハ少クモ漁夫ノ半數ハ之ヲ日本國臣民ノ中ヨリ採用スルコトヲ日本國漁業者ニ許可セラレンコトヲ露國政府ニ望ム

三、漁業協約ノ其ノ他ノ点ニ關シ落合、「ブラジニコフ」兩氏間ニ開催セラレタル会見ニ關シテハ日本國全權委員ハ

帝國政府ハ本特殊ノ事項ニ關スル通商航海條約ノ適用ニ關シテ一切ノ紛議ヲ艾除セムカ為ニ本提案ノ露國政府ノ容ルル所トナラムコトヲ切望スルモノナリ

四、日本國臣民ノ為ニ漁業ノ許可セラルヘキ地方ハ河川並入江ヲ除外セル結果著シク減縮セラレタルヲ以テ日本國政府ハ露國政府カ該除外河川並入江以外ニ既ニ存在スル漁区ニ付テハ本漁業協約ノ存続期間内其ノ儘之ヲ開キ置クヘキコトヲ將來ノ為保證セラレムコトヲ望ム

(十六) 本野閣下ノ口上書(千九百七年三月二十八日 二月二十三)

日 聖彼得堡)

日本帝國政府ハ露西亜帝國政府ニ於テ一箇年間ヲ期間トシテ日本海「オコーツク」海及「ベトリシグ」海ニ於ケル漁区ヲ競売ニ附セムトスルノ企画アルコトヲ知り且漁業協約談判委員ノ既ニ到達シタル効果ニ鑑ミ本協約ノ近ク締結セラルルニ先テテ兩國政府ノ間ニ既ニ意見ノ背馳スルモノナキ方面ニ於ケル此等漁区ノ競売ヲ日本國漁業者ノ為ニモ一時的方法トシテ許与セラレルニ於テハ深く露國政府ニ感謝スル所ナリ

(十七) 露国全権委員ヨリ日本国全権委員ニ至ル
覚書(千九百七年三月十七日附第四五一号露国
外務省第一局)

一月二十九日(十六日)ノ非正式ノ会見ニ於テ露国全権委
員ハ露国政府ノ妥協ノ精神ヲ證表セムカ為ニ「ブラジニコ
フ」氏ノ落合氏ニ提示セル露国政府ノ名ヲ以テ制定セル其
ノ最後ノ提案ヲ修正スルコトニ同意シタリ而シテ兩國全権
委員ノ間ニ協定案ノ既ニ成立シタルニ依リ露国全権委員ハ
兩國全権委員ノ間ニ成立セル解決ハ露国ノ為ニハ全然不可
分ノモノニシテ且確定的ノモノナルコトヲ声明シタリ
(二月一日ノ本野閣下ノ覚書参照)
(二月十九日ノ露国政府ハ又先ノ意見ヲ維持スルヲ以テ自己ノ権利ナリト
信ス

然レトモ露国全権委員ハ成ルヘク速ニ兩國ノ利益ニ関シ公
平和親ノ妥協ヲ遂ケムト欲スル念切ナルヲ以テ若三月十三
日(二月二十八日)ノ非正式会見ニ於テ成立セル兩國全権
委員ノ協定ヲ以テ之ヲ最終確定ノモノト認メ得ルニ於テハ
二月二十八日(十五日)附覚書中ニ記載セラレタル日本国
政府ノ或提案ヲ承認スルニ踟躕セサルヘシ
一、仏語ノ入江 (anse) 又ハ英語ノ入江 (inlet) ノ問題ニ

有スル所トナレルモノヲ除キ本協約ノ存続期間内其ノ傳
之ヲ開キ置クヘキコトヲ将来ノ為保證セムトスルモノ
ナリ

右注意スヘキ諸点ヲ三月十三日(二月二十八日)ノ非正
式会見ニ於テ日本国全権委員ニ通報シ而シテ一月十六日
ノ協定ニ叙上ノ修正ヲ加ヘ茲ニ兩國全権委員ノ間ニ一ノ
確定協定成立シタリ

露国政府ハ此等重要ノ譲与ヲ為セルニ依リ日本国政府カ
兩國全権委員ノ間ニ良好ニ成立セル本協定ニ対シ速ニ承
認ヲ与ヘラレムコトヲ望ム

(十八) 「グバストフ」閣下ノ口上書(千九百七年
三月十五日日附露国外務省第一局)

千九百七年三月八日ノ口上書ニ対スル回答トシテ露西
兩國全権委員ハ談判ノ現状ハ漁区ノ問題ニ関シテ日本国政
府ト間モナク一致スルコトヲ得ルノ望アルコトヲ示シ居レ
ルヲ以テ帝國政府ハ漁業協約ノ締結迄前記問題ヲ直チニ解
決スルコトヲ見合ハサンコトヲ選フ旨本野閣下ニ通牒スル
ノ光榮ヲ有ス

関シ露国政府ハ日本国政府カ軍略上ノ理由ヲ名トセル灣
ヲ漁業協約ヨリ除外スルニ同意セラレタルヲ深謝ス露国
政府ハ除外灣ト称スル四箇ノ灣(「ビートル」灣、「グル
ボー」カヤ」灣、「ウィリユーチンスキー」灣、「アホムテ
ン」灣)ヲ本協約ヨリ除外スルコト竝特別項目中ニ閉鎖
灣ト称スルモノヲ置クコトニ関シテハ強テ主張スルモノ
ニアラス

二、黒龍江海灣(リマン)ノ漁業問題ニ関シテハ露国政府
ハ先ノ意見ヲ修正スルコト能ハサルヲ遺憾トス而シテ黒
龍江海灣方面ニ於テ漁区ヲ取得シタル日本国臣民ハ露国
ノ漁業者ト同一制度ノ拘束ヲ受クルヲ正当ト信ス

三、魚類竝水産物ノ購買及製造ノ問題ニ関シテハ露国政府
ハ十月二十五日(十二日)露国全権委員ノ声明セルカ如
ク若日本国臣民ニシテ現行若ハ將來ノ法律、規則及命令
ヲ遵守スルニ於テハ本漁業協約ヨリ除外セラルル場所ニ
於テモ當魚類ノ購買竝製造ノ権利ヲ他ノ外国人ト均等ニ
日本国臣民ト許与セムトス

四、露国政府ハ漁業協約中ニ認メラルル方面カ河川竝入江
除外ノ為ニ著シク縮減セラレタリト信セス然レトモ該除
外河川竝入江以外ニ現ニ存在スル漁区ハ移住民ノ既ニ占

(十九) 日本国公使本野閣下ヨリ露国外務大臣「イ
ズヴォルスキー」閣下ニ至ル覚書(千九百七年
四月九日附)
三月二十七日附)

日本国公使ハ漁業協約ノ談判ニ関シ最近生シタル紛議ヲ解
決スルカ為ニ外務大臣閣下ノ懇篤ナル協力ヲ仰カムトス
漁業協約ハ日露兩國全権委員ノ間ニ久シキニ互リ困難ナル
談判ヲ重タル後今ヤ將ニ兩國ノ代表者ニ依リ調印セラレム
トスルノ状況ニ達シタリ然レトモ今ニ至ル迄不幸ニシテ日
本国全権委員ノ其ノ本国政府ヨリ承認ヲ得ル能ハサリシモ
ノ一点アリ即黒龍江海灣ノ漁業ニ関スル問題之ナリ

露国全権委員ハ日本国全権委員ノ切ニ願フ所アリシニ拘ハ
ラス黒龍江海灣ニ於ケル漁業ニ関シテモ他方面ニ於ケルト
均シク日本企業家ノ為ニ日本漁夫ヲ使用シ得ムコトヲ要求
セル日本国政府ノ提案ヲ承認セサリシヲ以テ日本国全権委
員ハ本問ニ関スル露国全権委員ノ抗拒ヲ東京内閣ニ移牒ス
ルニ同意シタリ日本国全権委員ハ其ノ約言ノ如ク制限ノ附
セラレタル儘漁業協約草案ノ調印セラレムコトヲ本国政府
ニ上申シタリ

日本国政府ハ本問題ニ関シ更ニ仔細ニ審査ヲ遂ケタル後左

記ノ理由ニ基キ先ノ要求ヲ重テ主張セサルヲ得サルニ至リ
クリ

黒龍江海灣方面ニ於ケル露国人ノ漁業ハ著シク發達セル状
況ニ在ルヲ以テ若該方面ニ於テ漁区ヲ取得シタル日本企業
家ノ為ニ日本漁夫ヲ使用スルコトヲ許可セラルルニ非ザレ
ハ該方面ニ関シ露国政府ノ為セル讓与ハ全ク有名無実ノモ
ノトナルニ至ルヘシ故ニ若露国全権委員ノ屢詳述セラレタ
ル理由ニ基キ日本漁夫ヲ全部使用スルコト能ハサルニ於テ
ハ日本国政府ハ少クモ其ノ半数ヲ日本人ノ漁夫ノ中ヨリ採
用スルコトヲ日本国企業家ニ許可セラレムコトヲ露国政府
ニ切望ス

日本国政府ハ漁業協約ノ問題ニ関シ聖彼得堡ニ於ケル其ノ
全権代理人ニ最後ノ訓令ヲ与ヘムカ為本問ニ関スル露国政
府ノ回答ヲ憂慮シテ期待スルモノニシテ日本国公使ハ此ノ
最近ノ紛議解決ノ為ニ「イズヴォルスキー」閣下ノ極力尽
瘁セラレムコトニ付深ク感謝スルモノナリ

(二十) 日本国全権委員ヨリ露国全権委員ニ至ル覺
書(千九百七年三月二十八日附)

日本国全権委員ハ三月十三日(二月二十八日)ノ非正式会
見ニ於テ露国全権委員トノ間ニ成レル協定ニ基キ該会见ニ

テ「ナル語ヲ以テセムト欲ス該字句ハ露国ノ為セル讓
与ノ實際ニ最好ク適合スルモノトス何トナレハ該讓与ハ
露国ニ屬スル領水内ニ於テノミ有リ得ヘキ理由ノモノナ
ルヲ以テナリ露国ノ領水以外ニ於テハ何等讓与ノ必要ナ
ラサルハ明ナルコトニ屬ス

二、第二條及第七條ニ於テハ日本国政府ハ「企業家」ナ
ル文字ニ代フルニ「日本国臣民」ナル文字ヲ使用セムコ
トヲ欲ス蓋シ漁区ヲ借受クルコト無クシテ魚類製造業ニ
従事スル所ノ日本国臣民有リ得ヘキヲ以テナリ

三、日本国政府ハ露国政府カ日本漁業者ノ其ノ漁区内ニ
於テ網ヲ建ツルコトニ異議ヲ挾マサルコトヲ信ス
然レトモ本項ノ詳細ニ関シ一切ノ誤解ヲ避ケムコトヲ欲
シ日本国政府ハ之ヲ漁業協約草案ノ中ニ確定セムコト
ヲ望ム其ノ位置ハ本協約明文確定ノ際之ヲ選取スルコト
トスヘシ

四、魚類製造ノ権利ニ関シ新ニ設ケラレタル第八條中日本
帝国政府ハ「外国人」ナル文字ノ前ニ「一切ノ」ナル文
字ヲ附加セムコトヲ欲ス即本條ノ最終部分ハ左記ノ如ク
規定セララルヘシ

露西亜帝国在留一切ノ外国人ニ適用セララルル現行若ハ

於テ定メタル決定ヲ日本国政府ニ移牒シタリ

日本国政府ハ日本国全権委員ノ報告ニ接シ玆ニ新ニ其ノ妥
協ノ精神ヲ露国政府ニ對シテ發表セムト欲シ魚類並水産物
ノ輸入税免除ニ関スル露国ノ反對提案ヲ主義トシテ承認ス
本讓与ハ日本国草案第十條ニ連接シテ挿入セラルヘキ特別
條項ノ目的トナルヘキモノニシテ其ノ條文ハ左ノ如シ

日本国政府ハ露西亜帝国政府カ本協約ニ依リ日本国臣
民ニ對シ漁業權ヲ許シタルコトニ鑑ミ本協約第一條ニ
特定セララルル露国領水内ニ於テ漁獲シタル魚類及水産物
ニ對シ其ノ製造セラレタルト否トヲ問ハス何等ノ輸入税
ヲ課スルコトナキヲ約ス

日本国政府ハ該書キ方カ露西亜帝国政府ノ為ニ充分満足ヲ
与ヘムコトヲ望ム

漁業協約草案ノ其ノ他ノ諸点ニ関シテハ日本国政府ハ其ノ
全権委員ニ對シ最後ノ訓令ヲ与フルニ先立テ左記ノ諸点即
同草案ノ比較的重要ナル諸点ノ討議セララルルニ際シ未解決
ノ儘ニ附セラレタル諸点ヲ確定セラレムコトヲ望ム

一、第一條ノ字句ニ関シテハ日本国政府ハ「、、、、海
ニ瀕スル沿岸」ナル語ニ代フルニ「日本海、」オコーツ
ク」海並「ベーリング」海ニ於ケル露国領水ノ全部ニ於

將來ノ法律、命令及規則ヲ遵守シ

三月十三日(二月二十八日)ノ非正式会见ニ於テ日本国
全権委員ハ魚類ノ購買並製造ニ付日本国臣民ノ為ニ許与
セラレタル權利ニ関シ新ニ設定セラレタル條項ノ中ニ規
定セラレタル原則ヲ承認シ而シテ日本国臣民ニ對シ課
セラルヘキ制限ノ專恣ナラサルヘキコト並成ルヘク其ノ
制限ノ縮少セラレムコトヲ要求シタリ然ルニ露国全権委
員ハ露国政府ノ意思ハ黒龍江方面ノ如キ監視ノ容易ニ行
ハレ得ヘキ地方ニ於テハ露国臣民ト均等ニ日本国臣民ニ
對シ叙上ノ權利ヲ許与スルニ在ルコト並該制限ハ露国官
憲ノ為ニ監視ノ困難ナル地方ニノミ限ラルヘキモノナル
コトヲ回答シタリシヲ以テ日本国全権委員ハ均等声明ヲ
會議録ノ中ニ掲載セラレムコトヲ要求シタリ

日本国全権委員ハ叙上ノ会见ニ於テ露国全権委員ノ為セ
ル約束ニ從ヒ叙上ノ声明カ本談判會議録作成ノ際其ノ中
ニ掲載セララルヘキコトニ付露国全権委員ノ異議ナカルヘ
キコトヲ信スルモノナリ

五、三月十三日(二月二十八日)ノ非正式会见ニ於テ露国
全権委員ハ日本国全権委員ニ對シ沿岸航海ニ関シ日本国
漁船ニ對シテ課セラレタル條件ハ新规定ニ依レハ旧來ニ

於ケルヨリモ輕減セラレタルモノナルコトヲ説示シタリ蓋シ是旧來ノ規則ニ依レハ漁場ニ至ル一切ノ漁船ハ検査ヲ受クル為先ツ浦潮斯德若ハ「ニコラーエウスク」ニ航行スルヲ要シ又日本國ニ帰航スルニハ同一ノ手續ヲ必要トシタリシニモ拘ラス新規定ニ依レハ此等手續ハ最早必要ナラサルヲ以テナリ

日本國政府ハ本聲明ヲ領シ本聲明ノ會議録中ニ掲載セラレムコトヲ望ム

六、黒龍江海灣(リマン)ノ漁場ニ於テ日本人ノ漁夫ヲ使用スルノ件ニ関シテハ日本國全權委員ハ四月十日(三月二十八日)附ヲ以テ日本國公使ヨリ露國外務大臣ニ宛回送シタル機密覚書ヲ参照セラレムコトヲ露國全權委員ニ望ム

(二十一) 露國外務大臣「イズヴォルスキー」閣下

ノ回答覚書(千九百七年四月十三日附第六六六号露國外務省第一局)

四月九日(三月二十七日)附日本國公使ノ覚書ニ接シ露國外務大臣ハ「漁業條約」訂結ノ目的ヲ以テ開催セラレタル談判カ今ヤ將ニ其ノ終局ヲ告ケムトスルノ時機ニ到達シタルニ對シ深ク満足ノ意ヲ表スルモノナリ

ノハ一月十六日及二月二十八日ノ非正式會見ニ於テ提示シタル露國全權委員ノ提案中ニ既ニ之ヲ説示シタリ本問題ノ満足ナル解決ヲ得ムカ為ニ露國政府ハ他ノ諸点ニ関シ夥多ノ讓与而モ「ポーツマス」條約ノ範圍ヲ超越シテ尙夥多ノ讓与ヲ為シタリ

是故ニ三月十三日ニ協定セラレタル漁業協約(就中黒龍江海灣ニ於ケル日本漁夫認許ノ條件)ノ基本案ヲ確定シタル兩國全權委員ノ合意ハ露國委員ニ於テハ之ヲ全然不可分ノモノト認メサルヘカラス而シテ本意見ハ露國全權委員ノ發言シ日本國全權委員ノ承認スル所トナレルモノナリ叙上注意スヘキ諸点ニ関シ露國外務大臣ハ三月十三日(二月二十八日)ノ會見ニ於テ幸ニシテ議定スルヲ得タル妥協ニ関シ日本國公使ノ其ノ本國政府ヲシテ承諾ノ意ヲ表セシムル様極力尽瘁セラレムコトヲ希望ス

若夫一切ノ期待ニ反シ東京内閣ニシテ其ノ最後ノ訓令ヲ維持主張セラルルニ於テハ露西亞帝國政府ハ叙上協定ノ基本草案ヲ更ニ新ニ審議ニ附スルヨリ他ニ方法ヲ發見セサルナリ

(二十二) 露國全權委員ヨリ日本國全權委員ニ至ル

回答覚書(千九百七年四月十五日附第六八一号露國外務省第一局)

露國全權委員ニ移牒セラレタル四月十日(三月二十八日)附覚書ヲ以テ提案セラレタル本協約明文中心一部ノ修正問題ニ関シテハ下調委員會ノ審査ニ附スヘシ何レノ場合ニ於テモ露國外務大臣ハ之カ為ニ確定的協定成立ノ障害トナラサランコトヲ希望スルモノナリ

之ニ反シ露國外務大臣ハ黒龍江海灣ノ問題ニ関シ三月十三日(二月二十八日)ノ非正式會見ニ於テ兩國全權委員ノ決議シタル協定ヲ承認スルコトヲ日本國政府ニ於テ抗拒シタルニ依リ生シタル紛議ヲ以テ一重大事ト為スモノナリ通称「ニコラーエウスク」即黒龍江口ト同海灣トノ間ニ於ケル漁場地方ハ現ニ絶東ニ於ケル露國漁業ノ一切ノ根元地タルカ故ニ該地方ハ露西亞帝國ノ利益ノ為ニ最重要ナルモノナリトス露國全權委員ハ此ノ事實ニ関シ反覆日本國全權委員ノ注意ヲ喚起シタリ

露國政府ハ適良確實ナル妥協ノ端ヲ開カムコトヲ希望スルニモ拘ハラズ露國臣民ニ優ルノ權利ヲ日本漁業者ニ許シ又露國国民カ自國國家ノ利益ノ為ニ服従セサルヘカラサル黒龍江海灣ニ於ケル漁業取締規則ヲ日本國漁業者ノ為ニ改正スルヲ得ス

日本國ノ要求ニ応セムカ為叙上ノ意義ニ於テ為シ得ヘキモ

露國全權委員ハ去ル四月十日(三月二十八日)附日本國全權委員ノ覚書ニ對スル回答トシテ先ツ日本國全權委員カ其ノ本國政府ヨリ魚類及水産物ノ日本國ニ於ケル輸入税免除ノ件ニ関シ承認ヲ得ラレタルコトヲ日本全權委員ニ對シテ感謝ス本問題ヲ規定スヘキ條項ノ字句ニ関シテハ露國全權委員ハ本問ヲシテ最明確ナラシメムカ為メ「本協約第一條ニ特定セララルル露國領水内ニ於テ漁獲セラレタル」ナル字句ニ代フルニ「黒龍江地方諸洲ヨリ産出スル」ナル文字ヲ以テセムコトヲ提案スルノ必要ナルヲ認ム

本協約草案中ノ其ノ他ノ條項成定ニ関シ日本國政府ノ加ヘムトスル修正ニ関シテハ露國全權委員ハ之ヲ承認スルニ異議ナシ然レトモ露國全權委員ハ本協約明文ノ最終編成ヲ命セラルヘキ委員會ニ詳細ノ研究ヲ委ネラルヘキモノト思考ス

之ニ反シ露國全權委員ハ本協約ヨリ除外セラルル方面ニ於テ魚類ノ購買及製造ヲ日本國臣民ニ許スルノ件ニ関シ露國政府ノ意見ヲ茲ニ重テ明確ニセムト欲ス

露國政府ハ三月二十三日ノ非正式會見ニ於テ聲明シタルカ如ク「ニコラーエウスク」(黒龍江口及同海灣)方面ニ於テ現存スル法規ヲ此ノ種工業ニ從事スル總テノ外国人ノ為

ニ設定セムコトヲ提案ス但シ其ノ監視ノ困難ナル方面ニハ之ヲ拡張セサルノ留保ヲ以テス露西亜帝國政府ハ叙上ノ意見ヲ有スルカ故ニ日本國臣民ハ魚類ノ購置及製造ニ関シ何等專恣ノ抑制ヲ受ケサルハ明ナリ

露國全權委員ハ日本國全權委員ト全然意見ヲ同ウスルヲ以テ本協約ノ條項ニ關スル一切ノ必要ナル説明ガ同會議録中ニ引証セラルルコトニ對シテ何等ノ異議ナシ去ル四月十日(三月二十八日)附ノ覺書第六項ニ掲載セラルル問題ニ關シテハ去ル四月十三日(三月三十一日)附外務大臣ノ回答ヲ以テ之ニ応答シタリシ所ニシテ露西亜帝國政府ノ意見ハ該回答中ニ全部表白セラル

露國全權委員ハ會議ノ發端ヨリ相互ニ妥協ノ精神ヲ以テ擁護セラレ談判ノ満足ナル進行ヲ見ルニ至リタルヲ至幸トシ本會議ハ久シカラスシテ兩國ノ利益ノ為ニ最有望ナル完全ノ協定ヲ得ルニ到ル可キコトヲ深ク確信スルモノナリ

(二十三) 「グバストフ」閣下ヨリ本野閣下ニ至ル半公信(千九百七年四月十七日附)

拜啓陳者本官ハ露國企業者漁区ノ分配ヲ行フ為ニ定メラレタル期間ノ満了シタルコトヲ閣下ニ通告セントスルモノニ有之候

(二十五) 千九百七年四月四日 日聖彼得堡ニ於テ作成シタル日露漁業協約ノ原則ノ承認ヲ証スル議定書

日露兩國全權委員ハ「ポーツマス」講和條約第十一條ニ從ヒ將ニ調印セラルヘキ漁業協約ノ主要ノ諸点竝一月二十九日及三月十三日ノ全權委員非正式会見ニ於テ成立セシ協定ノ基礎ニ關シテ一致シタルニ依リ(本年二月一日附日本國全權委員ノ覺書及三月十七日附露西亜國全權委員ノ覺書參照)兩國政府ハ成ヘク短キ期間内ニ前記協約ニ調印スヘキコトヲ約ス右協約ニ依リ日本國臣民ハ河川及入江(インレット)ヲ除キ日本海「オコーツク」海及「ベリリング」海ニ瀕スル露西亜國沿岸ニ於テ臘轔獸及臘虎以外ノ一切ノ魚類及水産物ヲ捕獲、採取及製造スルノ權利ヲ許与セラルヘシ前記入江ハ覺書ニ於テ定義ヲ下シ竝之ヲ列挙スヘシ從テ兩國全權委員カ全然一致セル諸地方ニ於テ本協約ノ決定セル貸下期間以外ニ當漁季間ノ漁区競売ニ入札スルノ權利ヲ日本國臣民ニ許与スルコトハ露西亜帝國政府ノ困難トセサル所ナリ

右証拠トシテ千九百七年五月四日 日聖彼得堡ニ於テ本議

吾人ハ今日迄ノ談判ノ性質ニ鑑ミ數日間ノ延期ヲ農務省ニ要請致スヘク候就テハ季節モ極テ進ミ居ル次第ニ有之候間成ヘク速ニ貴公使ノ回答ヲ得候様致シ度候

右申進旁得貴意候草々敬具
千九百七年四月四日 日
十七日

「グバストフ」記名

本野 氏 宛

(二十四) 本野閣下ヨリ「グバストフ」閣下ニ至ル返信(千九百七年四月十九日附)

拜啓陳者帝國政府ハ現在猶懸案トシテ残レル余リ重要ナラサル問題ニ付為サルヘキ決定ニ關セス兩國政府カ既ニ其ノ大綱ヲ解決シタル漁業協約ニ調印スルコトニ決定セシ旨外務大臣ヨリ通知有之候ニ付本使ハ日本國臣民カ兩國政府ノ既ニ一致セル各方面ノ漁場ニ於テ本年ヨリ短期漁区ノ競売ニ入札スルコトヲ得ル為ニ必要ナル処置ヲ執ラレムコトヲ閣下ニ要請スルノ光榮ヲ有シ候

右申進旁得貴意候草々敬具

千九百七年四月十九日 日 在聖彼得堡日本公使館ニ於テ

本野 一郎(手署)

「グバストフ」氏宛

定書ニ通ヲ作り之ニ記名シタリ

本野 一郎(記名)
「七一、グバストフ」(記名)

第四回會議

千九百七年六月十八日 日午後三時開會

列席者

日本國 本野全權委員書記官落合氏、丸毛氏及

津田氏

露西亜國 「グバストフ」全權委員「ランゴボイ」

氏、「アレキセーエフ」氏、書記官「マ

イエンドルフ」男爵、「ウオヅネセン

スキー」氏

露國全權委員ハ開會ノ際左ノ旨ヲ述ヘタリ

十月二十五日(十二日)ノ會議ニ於テ「入江」即仏語ノ

「アンス」英語「インレット」ノ字義ヲ確定セムガ為

一ノ下調委員會ヲ設置スヘキコトノ決定アリタリ此ノ下

調委員會ハ精勵數箇月ノ後其ノ調査ノ結果ヲ復命シタル

カ尙之ニ次テ漁業協約ノ目的タル或他ノ問題ヲ研究スル

ノ命ヲ受ケタリ

委員諸氏カ是等ノ諸問題ニ対シ与ヘタル解決ハ兩國全權委員ノ承認ヲ得且兩國全權委員カ非正式ニ為シタル数度ノ会見ニ於テ争議ニ係ル重要ナル諸点ニ付概括的ノ協議ノ成立ヲ得セシメタリ

斯ノ如クシテ兩國全權委員ハ今ヤ協約及附属議定書ノ全文ヲ有スルコトナレリ

日本国全權委員ハ左ノ如ク之ニ答ヘタリ

露国全權委員閣下

十月二十五日(十二日)ノ會議ニ於テ「入江」ノ字義ヲ確定セムカ為下調委員會ヲ設置スルノ議ヲ承諾シタル際ニハ本員ハ閣下カ本員ノ提言ニ付為サレタル批評中ノ數点ニ関シ留保ヲ為シ置クノ必要アルヲ信シ閣下ニ対スル回答ハ次期開會ノ際ニ於テ之ヲ為サムト欲シタリ然ルニ其ノ後諸種ノ難問ハ或ハ兩國全權委員ノ非正式ノ会見ニ依リ或ハ後ニ至リ兩國全權委員ノ合意ヲ以テ權限ヲ擴張シタル下調委員會ニ於ケル討議ニ依リ之ヲ除去スルコトヲ得タルカ故ニ本員ハ過去ニ於ケル意見ノ差異ヲ喋喋スルハ今日全ク無益ナルヘキコト竝現在ニ於テハ漁業協約及之ニ關スル議定書ノ諸條文ヲ確定スルヲ得ルモノナルコトヲ信ス

ヲ得ヘシ此ノ貸下地区ハ魚類ノ製造用ニ供スヘキモノニシテ其ノ範圍内ニ於テハ使用労働者ノ国籍ニ付何等ノ制限ヲ設ケサルヘシ短期漁区ニ於テハ単ニ魚類ノ捕獲ニ関シテノミ外國労働者ノ使用ヲ禁止ス魚類ヲ製造スルカ為ニハ陸上ニ於テ如何ナル国籍ノ労働者ヲモ使用スルコトヲ得ヘシ

長期漁区竝短期漁区ニ於ケル前記国籍ノ制限ハ監督者、派出員又ハ手代等ノ如キ労働者ノ階級ニ屬セサル者ニ対シ其ノ適用ナキハ言フ俟タサルモノトス

三、「短期漁区」ナル文字ハ貸下期間一箇年ヲ超エサル漁区ニノミ之ヲ適用スルモノトス

四、漁業協約第一條ニ特定シタル各方面ニ於ケル漁区ニシテ同協約実施前長期ノ貸下ヲ為シタルモノハ其ノ実施後ニ於テモ亦同シク直チニ長期ノ貸下ヲ為スヘキコトヲ協定ス

五、漁業ノ為露国領水内ヲ航行スル一切ノ日本国汽船ハ露訳若ハ英訳ノ航海日誌ヲ備フヘシ漁業ノ為露国領水内ヲ航行スル日本国帆船モ亦成ルヘク前記ノ規定ニ從フヘシ

六、漁業協約第十一條ノ原則既ニ確定シタルニ付日本国全權委員ハ露西亞帝國政府カ同條ノ適用ヨリ生スルコトヲ

露国全權委員ハ日本国全權委員ノ宣言ニ対シテ感謝ノ意ヲ表シ尙此ノ際直ニ是迄数度ノ非正式会見ニ於テ雙方ノ間ニ協定シタル基礎ヲ確立シ且漁業協約及議定書ノ條文ヲ逐條確定スルコトハ最機宜ニ適スルモノナルヘシト述ヘタリ是ニ於テ「マイエンドルフ」男爵ハ露国全權委員ノ命令ニ依リ協約及議定書ノ條文ヲ朗読セリ日本国全權委員及露西亞國全權委員ハ本日ノ會議ヲ閉ツルニ先チ五ニ左記ノ宣言ヲ為セリ

一、「オコーツク」海北岸ニ関シ露西亞帝國政府ハ同沿岸ニ於テ至急ニ著手スヘキ測量調査ノ結果ヲ俟タスシテ日本国臣民ニ対シ「入江」即仏語ノ「アンヌ」英語ノ「インレット」ノ定義中ニ明ニ包含セラレサル場所ニ於テハ漁区ヲ貸下クルコトヲ約諾ス

二、黒龍江海灣(リマン)ノ漁区ニ於ケル外國労働者ノ使用禁止ニ関シ露国全權委員ハ日本国全權委員ニ対シテ左記ノ説明ヲ為セリ

長期漁区ニ於テハ漁業竝魚類ノ製造ニ付外國労働者ノ使用ヲ禁止ス但シ右漁区ノ所有者ハ自己ノ漁区ヲ距ルコト約半「ヴェルスト」又ハ一「ヴェルスト」ノ場所ニ於テ土地ノ短期貸下ヲ請願スルトキハ其ノ貸下ヲ受クルコト

ルヘキ諸制限ヲ日本国臣民ニ加フルニ当リテハ單ニ公ノ秩序ノミヲ考量スルノ方針ヲ採リ事情ノ許ス限り該制限ヲ減少セラレムコトヲ希望スル旨ヲ述ヘタリ之ニ對シ露西亞國全權委員ハ右ノ見解ニ同意ノ旨及露西亞國政府ノ意思ハ同條記載ノ工業ヲ為ス一切ノ外國民ニ對シテ「ニコラーエウスク」方面(黒龍江ノ河口及同海灣即チ「リマン」)ニ於ケル既存ノ法制ヲ施行スルニ在リ尤モ監督困難ナル地方ニハ該法制ヲ適用セサルコトアルヘキ旨ヲ答ヘタリ

七、日本国全權委員ハ露西亞國全權委員カ漁業協約第五條ノ文言ヲ確定的ニ承諾シ之ニ依リ露西亞國政府カ沿海洲(露領樺太ヲ含ム)及黒龍江洲ノ露西亞國領水内ニ於テ漁獲又ハ採取セラレ日本ニ輸出セラレヘキ魚類及水産物ハ其ノ製造セラレタルト否トヲ問ハス之ニ對シテ何等ノ名称ヲ以テスルモ税金ヲ取立テサルヲ約シタルコトヲ認メタルニ依リ日本国政府ハ沿海洲(露領樺太ヲ含ム)及黒龍江洲ノ露西亞國領水内ニ於テ漁獲又ハ採取セラレ日本國ニ輸入セラレル魚類及水産物ハ其ノ製造セラレタルト否トヲ問ハス之ニ對シテ同協約第十二條ニ記載シタル輸入税ハ固ヨリ何等ノ名称ヲ以テスルモ税金ノ取立ヲ為

ササルヘキコトヲ宣言セリ

八、漁業協約第一條ニ記載シタル例外タルヘキ或入江（「インレット」）ニ関シ將來紛議ノ原因ヲ全然除去セムカ為前記諸入江ノ精細ナル境界ヲ示セル地図ヲ本會議録ニ添附ス

是ニ於テ露西亜国全権委員ハ左ノ通り発言セリ

「ポーツマス」條約第十一條ニ基キ漁業協約ヲ締結セムカ為客年八月一日ヲ以テ開始シタル商議ノ幸ニシテ茲ニ終ラ告ケタルハ本員ノ深ク満足スル所ナリ

本員等カ不日調印セムトスル協約ハ「オコーツク」海、日本海及「ベリリング」海ニ於ケル露西亜国沿海ノ海産物漁獲ニ付全ク其ノ旧態ヲ改メ其ノ條件ヲ確定スルモノナルカ故ニ此ノ協約ハ該方面ニ於ケル経済力ノ發展ニ資スルモノアルヘシ

今回ノ商議ハ其ノ性質ノ特殊ナルカ為多大ノ努力ヲ要シタリキ然レトモ右商議ハ兩國ノ為メ何等利益ノ損傷ナク兩國ノ企業家ヲシテ海中ノ財源ヲ開拓セシムルヲ以テ終始其ノ目的ト為シタリ

漁業協約及附屬議定書ノ條文ハ今日全ク確定セラレタルヲ以テ本員ハ茲ニ日本國ノ同僚カ交渉ノ終始ヲ一貫シテ

（二十七）日露漁業協約締結會議録第五号

最終會議

千九百七年七月二十八日 午後二時露西亜国外務省ニ於テ開會

列席者

日本國 全権委員露西亜国駐劄日本國特命全權公使法学博士本野一郎閣下、書記官、落合氏及津田氏

露西亜国 全権委員外務大臣「メートル、ド、ラクール、アムベリアール」「アレキサンデル、イズヴォルスキー」閣下、全権委員外務次官「コンセイエー、ブリヴェー」「コンスタンタン、グバストフ」閣下、商工務省委員「アレキセイエフ」氏、外務省委員「コロストベツク」氏、「グルキヴィッチ」氏、「グラヴェー」氏、會議書記官「メイエンドルフ」男爵、「ウォヅネセンスキー」氏

兩締約国全権委員ハ漁業協約及附屬議定書ノ條項ヲ審査シ

表彰セラレタル其ノ公平及調和ノ精神ニ對シ喜ヒテ感謝ノ意ヲ表ス本員ハ又同時ニ本員並本員ノ同僚ノ名ヲ以テ日本帝國公使館ノ書記官諸君ニ向ヒ其ノ有效ニシテ且友愛ナル協力ニ對シテ感謝ノ意ヲ表ス

日本國全権委員ハ之ニ對シ左ノ答辭ヲ述ヘタリ

露西亜国全権委員閣下

今回ノ至難ニシテ時ニ困憊セル商議ヲ決了スルヲ得タルハ全ク閣下ト等シク本員ノ満足ヲ感スル所ニシテ商議ノ進行中閣下カ絶エス表彰セラレタル正義及調和ノ精神ニ對シ此ノ機ニ附シテ敬意ヲ表スルヲ得ルハ本員ノ幸トスル所ナリ而シテ特ニ下調委員諸君ニ向ヒ本員ハ諸君カ兩國共ニ満足スヘキ結果ヲ以テ此ノ商議ヲ終結セシムルカ為ニハ如何ナル勞苦ヲモ辞セラレサリシコトニ對シテ特ニ感謝ノ意ヲ表シ又同シク本員等ニ此ノ如ク貴重ナル協力ヲ与ヘラレタル本會議ノ書記官諸君ニ向ヒ感謝ノ意ヲ表ス

本員ハ又閣下ト同シク茲ニ條文完成シタル漁業協約ハ兩國ノ隔意ナキ友交ノ先驅タラムコトヲ取テ希望スルモノナリ

午後三時四十分閉會

其ノ良好妥當ナルヲ認メ各其ノ全権委任狀ヲ交換シ慣例ニ從ヒ協約並議定書ニ記名調印セリ

次テ各全権委員ハ前記外交文書ヲ互ニ領收セリ

午後三時三十分散會

- 本野 一郎 (記名)
- 「イズヴォルスキー」 (記名)
- 「グバストフ」 (記名)
- 落合 謙太 (記名)
- 津田 五郎 (記名)
- 「メイエンドルフ」 (記名)
- 「ウォヅネセンスキー」 (記名)

※三二五頁ノ脱文

「日本國ニ於テハ其ノ禁止ハ絶對的ナリ

本野氏ハ信スラク此ノ差異ハ法律上ノ性質ヲ有セス唯事実上ノ問題ニ過キス凡ソ不動産ノ所有權ハ日本國ヨリ之ヲ見レハ内國法制ニ之ヲ委シ露西亜國ニ於テモ亦其ノ領土内ニ於ケル土地ノ購入ヲ外國人ニ禁スルノ自由ヲ有ス故ニ此ノ如キハ如何ナル場合ニ於テモ且爭議ノ存セル條款ニ拘ラス

単ニ最惠国臣民ノ取扱ヲ主張スルニ過キサル日本国側ニ異議ヲ生スヘキモノニ非ス之ト同様ノ約款カ自余諸外国殊ニ仏蘭西国ト日本国トノ條約ニ於テ締結セラレタルモ亦同一ノ主旨ニ基ケルモノニシテ仏蘭西国ニ於テハ外国人ハ任意ニ不動産取得ノ全權ヲ有スルモ仏蘭西国政府ハ日本国トノ條約ニ於テ本文ノ條款ヲ挿入スルコトヲ躊躇セサリキ

「マレヴスキ、マレヴィッチ」氏ハ此ノ問題ノ法律的基礎ニ付其ノ疑ヲ保持シ條約ニ由リテ外国人ニ許シタル權利ノ享有ヲ任意ニ變更スルコトハ国家ノ完全ナル自由ニ屬スルモノト看做スト」

第二章 小村外務大臣時代

(改正條約締結篇)

第一節 改正稟議ト對英交渉

一八三 明治三二年八月七日 閣議案

八月十七日閣議

(花押) 實 敬

同 廿日御裁決 小村 東助 正毅 兼武

條約改正方針閣議決定ノ件

極秘

帝国ト列国トノ通商航海條約ハ大体ニ於テ来ル四十四年七月其ノ廢棄ノ通告ヲ為シ以テ一ケ年後即チ明治四十四年七月ニ至リ終了ニ歸セシメ同時ニ帝国ト列国トノ間ニ完全ナル對等條約ヲ締結セムコトヲ期スヘキハ曩ニ閣議決定セル所ナリ而シテ現行條約ノ終了ト新條約ノ實施トノ間ニ完全ナルヘク間隙ヲ生セサシメムコトヲ要シ此ノ目的ヲ達セムカ為ニハ廢棄通告ニ先チ我ヨリ進テ新條約締結ノ談判ヲ開

小村外務大臣時代 改正稟議ト對英交渉 一八三

始スルコト最機宜ニ適スルヲ以テ遅クモ来ル四十四年二月中ニ各般ノ準備ヲ完了シ同年三月ヲ期シテ右交渉ヲ開始セムトス而シテ條約改正ハ左ノ方法ニ依ルヲ適當ナリト思考ス

(一) 我ニ不利ナル條約規定ヲ有スル諸締盟国ニ向テ個別ニ談判ヲ開始シ該国ニ駐劄スル帝国大使又ハ公使ヲシテ交渉ノ任ニ當ラシムルコト

(二) 若シ現行條約終了ニ際シ未タ新條約ノ締結ヲ見ルコト能ハサルトキハ關稅其ノ他緊急ノ事項ニ限り暫定約款ヲ協定シ以テ新條約締結ニ至ル期間ノ急需ニ応スルノ方法ヲ講スルコト

(三) 現行條約中我ニ不利ナル事項ハ總テ之ヲ廢除シ又ハ少クモ之ヲ通商條約中ヨリ除去スルコト左ニ其ノ重要ナル